

---

# 虚空の惑星

天崎 剣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虚空の惑星

### 【Nコード】

N2201C

### 【作者名】

天崎 剣

### 【あらすじ】

政府ビルの地下実験室から実験体と共に逃亡した科学者、ドイツ・エマード。彼とその娘エスターに隠されていたのは、政府を揺るがす秘密だった。未来の地球、ドームに囲まれた都市群では、人間を管理するコードの是非を巡り、政府と反政府組織の抗争が激しさを増していた。自らの人生を狂わされたエマードは、宿敵リーと再会し、復讐を果たす。しかし、それは始まりに過ぎなかった。紐解かれていく過去の秘密、複雑に絡み合った人間関係。愛する女との過去、決して手に入ることのない幸せな日々。錯綜する記憶と情

報は、次第に周囲の人間を巻き込んでいく。寡黙なエマードと、不器用で真っ直ぐな青年ジュンヤは、果たしてリーの魔手からエスタ―を守りきれるのか。流血・殺人シーン有/救いのない設定が苦手な方はご遠慮下さい。【完結】

## 1・逃亡

真紅の回旋灯と警報音が夜の静寂を裂く。広い通路を慌しく駆け回る警備員たちは、皆一様に焦りの色を浮かべていた。それまで眠たげな目を擦りながら、「今日もなにごともなく一日が終わるな」と話し込んでいただけに、正直誰もが不安を隠せない。

世界最高水準のセキュリティを備えているこの巨大ビルでは、監視カメラと警備用ロボットがくまなく巡回し、不審者を撃退する役割を担っていた。しかし、今夜はそのシステムそのものにエラーが発生し、全く役に立たないのだ。電気経路も全て破壊され、非常用電源が動き出している。

何者かが管理システムに侵入し、エラーを起こさせたようだ。停電も全て人為的。電気室の配電設備に、タイマーで電源をショートさせる簡単な仕掛けがしてあった。監視カメラの記録にも全く映っていないかったところを見ると、このビルの内部の人間の仕業で、その上、警備システムにかなり詳しい人間の犯行であることがわかる。狙われたのは、地下十階にある政府の最重要機密プロジェクトの研究所。存在を知っていても、簡単に立ち入ることの出来ないエリアだ。こうなると、嫌でも生身の人間が駆けつける他ない。

闇の中に、男たちの足音だけが妙に響く。警報は止まず、警備員たちの焦りを更にかき立てる。冷や汗が手に滲む。

地下十階まで続く螺旋状の非常階段を必死に駆けていく男たちの眼光は、獣のように鋭かった。

計器のランプが闇に浮かび、電飾のように静かに研究室を照らす。おびただしく並んだ試験管に、小さな光が反射し、闇の色と混ざって不気味な色を醸し出した。水の撥ねる音が研究室一杯に広がると、光は一瞬、驚いたように色を滲ませる。

床一面に広がる、緑色に濁った生温かい液体。その蒸気が機械の起動熱と混ざっていた。人間の胎内にいるような、体液に近い臭いが立ち込め、ただそこにいるだけで気分を害しかねない。霞むほどに湿った室内の中央に、大きな水槽があった。高さ二メートル、直径一メートルほどの円柱の下部が壊され、そこから漏れた液体と飛び散ったガラス片が行き場を求めてあちらこちらへと広がっていた。中であつた何かが外へ飛び出したのか、連れ出されたのか……、水槽の下から部屋の隅へ向かつて延びた足跡を辿れば人影が。

こんなにも居心地の悪い室内だというのに、実験器具の並んだ棚の陰に、一人の男が小さな少女を小脇に抱えて息を潜めうずくまっていた。長い金髪の美しい全裸の少女は無造作に厚手の毛布で包まれ、しかし、吸水率の悪い生地が仇となつていつまでも濡れた身体が乾かず、恐怖と寒さで震えている。男はばつが悪そうに彼女を抱きしめ、

「大丈夫だ、俺が救つてやる」  
と、無精髭の生えた顔を彼女の頬に寄せた。

闇に沈んだ研究室に、無数の足音が近付いてくる。停電したビルの中はまるで複雑な迷路のようにいつもより歪んで見えたのか、保安灯だけではあまりに頼りなかつたのか、その足音はどこか迷いを含んでいた。警備員たちの焦りと不安は、先頭の一人が手にした懐中電灯のふらつく軌跡にも表れている。右に左、上に下にと光が交錯する。

地下深く、袋小路の先に作られたこの秘密裏な実験施設は、警備員を含め一部の人間しか知らない秘密の場所。そんな場所で事件が起こつたとなれば、最悪の事態として受け止めていいに違いない。

研究室の前で彼らは互いにならずきあい、大きく深呼吸、息を正して一斉に銃を構え、ドアの向こうの様子を窺った。

水の流れる音、一同、息を呑む。

懐中電灯を持った一人が合図し、ドアを勢いよく蹴り破る。

「誰かいるのか、返事をしろ！」

しかし、反応がない。

男たちは慎重に、濡れた足場を進んだ。ねっとりまとわり付く緑の液体が、彼らの足取りを更に重くする。むっとして生臭い空気を払いのけるように、左手でおのおの鼻を塞ぐ。

実験台の奥、ふと照らされた部屋の隅に微かに動く何かを見つけ、  
「誰だ、そこにいるのは！」

怒鳴り声が響き渡ると、観念したようにうずくまっていた影がのっそりと立ち上がった。小さな影がもう一つある。

「私だ……」

低い男の声に、警備員たちはぎょっとした。が、すぐに彼が誰かわかるとほっとしたように、緊張の糸を緩ませた。

「エマード博士」

この研究室の責任者、着古した白衣に口髭を蓄えた、四十過ぎの大男だ。

彼らは安堵の溜め息を漏らして互いに目を合わせると、構えている銃を降ろした。

警備隊長らしい男がゆっくり、エマードに近付こうと一歩前に出る。

「ご無事でしたか。一体ここで何が」

話しかけるも束の間、

「来るな！ 近付くな！」

エマードが大声をあげた。

空気が凍り、電磁波が押し寄せたように警備員たちの背中がびりびりと震えあがった。そして次の瞬間男たちが見たのは、自分たちに銃口を向けるエマードと、彼の腰にしがみついた裸の少女の姿だった。

エマードはその鋭く切れた目でじっと男たちを見据えた。色さえわからない真っ暗闇の中でも、彼の深い青色の瞳は鈍く光っている。

その右手に銃を構えたまま、左手で着ている白衣のポケットをまさぐった。

「ひいふうみい、……。なるほど、思った通りだ」

ポケットから顔を出したのは、カードサイズの小型リモコン。目で位置を確認することもなく、慣れた手つきで次々とボタンを押し始めた。表情が見る見る冷たくなっていく。

「案外簡単だったな。ここで事件を起こせば、警備員が全員来るだろうと思ったんだ。これでお前らに逃げ場はない」

男たちが、しまったと思ったときにはもう遅かった。蹴り破ったドアの跡に、重厚なシャッターが轟音をたてて降りてきたのだ。

「この扉だけは別電源。忘れたのか。システムに異常が起きても、絶対にここだけは守らなきゃいけないらしいからな。政府の秘密、規律、この私の存在意義。くそ食らえだ」

吐き捨てたエマードの言葉に、男たちは動揺した。それでも抵抗するように、握り締めていた拳銃をそれぞれエマードに向けて構えだす。

「一体、何故こんなことを」

警備隊長は恐怖で震える身体を必死に抑えながら、エマードに尋ねた。

「私が誰なのか、よく知っているはずだ。だが、どんな人間かまでは知らんかったらしいな」

ほくそえむエマード。

「エマード博士……。あなたは狂っている」

「狂う……。果たしてそうかな。本当に狂っているのはお前等ではないのか。……狂人に狂うの意味を訊いても答えを得ることはできませんか」

エマード右手の人差し指が、銃の引き金に触れた。それは、警備員なら誰もが目にしたことのある、彼の愛用のデザートイーグル。最高レベルの破壊力を持ったその銃口が、今まさに向けられている。政府の一科学者としては異例の命中率を誇る彼の腕前は、警備員の

中でも話題だった。彼に銃を教わった者だっている。

退路も絶たれたこの状況で、逃げる、あるいは生き延びることは、不可能に近い。

「The Endだ。死ね」

エマードの口が少し笑った。

夜が明け、騒ぎが明るみになる。

地下十階研究室の研究員の一人、ケネス・クレパスが朝出勤してくると、そのビルの中は既に騒ぎでごった返していた。システムダウンした警備システム、随所の停電もそのまま。今まで想定したことのなかった事態に、ビル全体が揺れているようにさえ思えた。

「警備員がいない」

「システムにハッキングして、故意に停電させた跡がある」

復旧作業のざわめきの中、口々から出る情報を耳に入れつつ、彼は懐中電灯を持って研究室へと駆けた。もやもやと胸に浮かんでは消える不安をかき消すように、走り、走り、長い非常階段を下りていく。足元に次第にくつきりと濡れた足跡が見えてきた。足跡は次第にはつきりとした形を持ち、繋がりが、鮮明な緑の水溜りへと姿を変えていく。血の混じったそれは、階段を下りて長い地下通路になると、更に色を濃くし、研究室の入り口まで続いていた。

独特の生臭さを感じながら、彼はおもむろに、半開きになったドアから、非常灯に照らされた薄暗い研究室を覗き込んだ。

懐中電灯で中を覗くと、部屋の中央にある水槽が破壊され、全ての液体が流れ出てしまっているのが見えた。そこにいたはずの実験体がない。視界を奪われ、大きく乗り出したケネスの右足が何かに引っかかった。

「アッ！」

思わず奇声上がる。

人だ。顔のない人の死体が転がっている。足元全体に、体の組織



らしいものが小さな塊になって飛び散り、緑と赤のまだらを作り上げていてではないか。壁、床、実験台、実験器具、柵……、ありとあらゆるものに小さな赤が飛散していた。

途端に吐き気がし、ケネスは懐中電灯を放り出して自分の胸倉を掴み、嗚咽した。何が起きたのか、すぐには理解できない。しかし、死体の身に付けていた服装からして、

「け、警備員だ。警備員が殺されてる」

もはや誰が誰であるのか、見た目では判別できない。

「だ、誰が、こんなことを」

投げ出した懐中電灯の光が何かを照らし、金色に光らせた。すくんだ足を叩き、無理やり立ち上がってそれを拾う。

「44マグナムの薬莖……。ま、まさか」

見覚えのあるそれに、ケネスは全身を震わせた。生温い床に尻を着いてへたりこみ、呆然と天井を仰ぎ見る。それは、この地下研究室の責任者、デザートイーグル所持者である、研究員ディック・エマードの犯行であることを示唆していたのだ。

後日、防犯カメラの記録から、システムダウン直前に、エマードが研究室の水槽を金属棒で破壊していたことが判明した。そして、彼の足跡と思われるものが緑の液体を靴底につけたまま、地下通路を通って地上へ向かっていたこと、薬莖が彼のものだとは断定されるべき証拠が見つかったことなどから、ビルとそれを管理する政府は、エマードを全世界に指名手配した。

## 2・地球改造計画

地下研究室での事件から数日経とうというのに、まだシステムの復旧は万全ではなく、コンピュータで管理されたビルは混沌としていた。犯人エマードによって巧妙に改変されたプログラムは、最小限の労力で最悪の事態を招いたのだ。完全復旧まではあと数日掛かる。電子管理の脆弱さに、誰もが衝撃を隠せない。

件の研究員ディック・エマードの消息を掴むため、政府は回復した監視システムのログを必死に漁ったが、残念ながら、犯行の現場、逃亡の様子以外のデータは見つからなかった。まるで、最初からエマードの姿や行動だけ写し取れないよう、細工してあったのか、或いは、本当に、煙のように消えてしまったのか。管理システムの盲点を突いた彼の行動は、前代未聞に他ならないと誰もが考える。

地球歴四九二年。

地上の全てを管理する“メイン・コンピュータ”と政府機関が入るこの巨大ビルの最上階に、男はいた。切れの長い東洋系の目鼻立ち。二十代後半に見えるが、歳の割りに落ち着いた雰囲気は綺麗な男。表情を消し、微動だにせず、彼は全面ガラス張りの窓のそばでたたずむ。

政府ビルと呼ばれるその巨大建造物を中心にして、蜘蛛の巣のように張り巡らされた道路。様々な商業施設や住居が整然と立ち並び、電気自動車が行き交う。鉄で出来たドーム状の保護壁が町全体を覆っているが、巨大すぎてその現実が目視では確認できない。コンクリートやアスファルトで覆い尽くされた世界、空に浮かぶ人工太陽の光が、やたらと眩しく高層ビル群の外壁に反射して、その空気全体を白く濺ませていた。

西暦で言うところの二十一世紀末に勃発した世界大戦は、やがて核戦争へと発展した。核汚染された粉塵が大気を覆い、地球はおよ

そ生物の住めない世界へと変貌してしまう。

核の冬が訪れ、人類は地下核シェルターへの避難を強いられた。しかし、実際その権利を有したのは、一部の裕福層のみに過ぎなかった。しかも、シェルターでの暮らしは過酷を極め、内部紛争により殺し合いが始まると、シェルターよりも更に大きな移住場所核汚染物質の影響を受けず、安全に食料や工業製品を生産し、入手し、暮らせる場所 が提供できるとして、とある科学者が提示した“地球改造計画”が、期せずして実行に移されることとなる。

何故権力者の抵抗や反対意見を無視してその計画が推し進められたのか。数百年経った今でもはつきりした答えは出ていない。しかし、その原因の一つとして挙げられるのが、当時世界各地に点在していたシェルターを一元管理していた、メイン・コンピュータの存在だろう。改造計画推進派の科学者がそこに直接アクセスし、プログラムを改変させてしまったのだ。高度なプログラミングとメイン・コンピュータのAI（人工知能）の急激な発達は、全てを拒んだ。誰も、計画を阻止することが出来なかったのだ。

このサイバーテロ行為により、地上全体を機械が覆い尽くすことになる。外気遮断、核汚染物質からの完全な隔離、人類は晴れてシェルターからの脱出を成した。

主要都市に築かれた巨大なドーム群は人類を多いに守ったが、同時に、張り巡らされた監視網と、新たに導入された住民コードシステムなどにより、厳しすぎるほどに管理された。科学政策に重点を置く地球政府は、いつしか言語を英語に統一し、宗教という宗教を廃止・拒絶。文化は廃れ、埋没していく。

更に、地球全土の統括を目指す政府は“地球計画班（Earth Project Team EPT）”と名乗り、一切合切の反政府分子根絶を宣言した。アナキスト（無政府主義）団体が出現し、政府との衝突が相次ぐようになる。EPTは軍を増強、社会情勢は徐々に不安定になっていった。

絶大な科学力と管理システム、そして軍隊で管理された世界

混沌としたそれが、今の地球の姿なのだ。

男は灰色の町並みの奥、その先にある何かを求めるように、ゆっくりと目を細めた。切れ長の目がまるで針のように更に研ぎ澄まされ、鈍く光った。高級な黒いスーツがしっくり似合う、世の女性が皆溜息を吐くであろう容姿とは裏腹に、その心中は業火の如く燃え盛っていた。

「総統」

秘書と思しき女が現れ、かの男に声がける。

「で、エマードの所在は？」

男は酷く苛々した口調で女性に振り向いた。鋭い眼差しに、秘書は一瞬ぎよつとし、「いえ、まだ」と言葉を濁す。

「転移装置を利用したかもしれません。今、履歴を辿っています。子供一人抱えて、協力者もなしに遠くへ行くことなど到底考えられませんから。まずはこのドームを虱潰しに……。並行して他ドームへの進入経路を当たります。元々、彼は監視網に掛からないのですから、そう簡単には」

焦り伝える彼女の言葉を、彼は鼻で笑った。

「まあ、いい。エマードの逃走など、この世における数知れぬ裏切り、犯罪からすれば九牛の一毛に過ぎん。しかし、私は憎らしくて仕方がない。やはり、あの男とはこうなる運命なのか。何をもって仕組まれたかのように私の手から離れてゆくのか」

独り言のように呟き、ゆっくりと執務机へと足を向けた。

男はゆったりと回転椅子に腰をかけると、肘置きに身体を任せ、艶かしく肩まで伸びた長い黒髪をかきあげる。

「しかし総統、彼はProject・Tに関する総ての資料と実験体を持って逃走中とのこと……。このままでは……。計画そのものも危ぶまれます」

年頃の秘書は彼の仕草に頬を染めながら、恐る恐る言葉を発した。  
「なに」総統はにたりと笑い、

「彼がいなくても、実験体が無くても、ある程度まで事を進めるこ

とは出来る。確保するまでの間、計画は保留することになるだろうが、時間はまだたっぷりあるではないか。何も焦ることは無い。それにこの政府、いや、世界を作った科学者は、地球を全て機械化するために“我々が神になればいい”と言ったのだ。私もその言葉通り、“神”になるまで。たとえあの男がどこへ逃亡しようとも、神の目から逃れることなど出来ないのだよ」

意味深げな言葉に、秘書の女は背筋を凍らせた。違う、我々凡人とは全く違う考えを持っておられる。このお方の手に掛ければ、天才・エマードといえども一溜まりもないのだ……。

それから七年、未だ、エマードの消息は掴めない。

政府軍が目をぎらつかせ、監視システムを駆使させても、彼の行方はわからないままだ。エマードが連れ去ったという実験体の所在もやはり、未だ不明である。

### 3・エレノア

廃ビルの屋上で味気無い夕焼けを見つめる金髪の少女に、彼らは問い掛けた。

「街を出るの……？ エレノア」

少女はゆっくり振り返り、その潤んだブルーの瞳で彼らを見た。虚ろな瞳に明日への希望は見出だせなかった。薄汚い格好は、ここがスラム街であることを強調させる。

ネオ・シャンハイドームの縁に沿うようにスラム街が出来たのは、必然なのだろう。ドームの中心から外れれば外れるほど貧しくなり、汚らしくなっていく。町も、人も、同様に荒び、暗黒街と罵られるほどに堕ちていた。

EPTの絶対権力の裏側で、危険分子と位置づけられ者たちは反政府組織を立ち上げ、徒党を組んで政府に立ち向かった。人間の動きをつぶさに観察する都市機能に歯向かい、コードシステムからの離脱を試みる。政府との決別は、少しの自由をもたらしたが、しかし、結局は政府の“アナーキスト狩り”に遭い、反政府勢力分子を親に持つ子供たちを独りにしたに過ぎなかった。

治安を乱す“孤児”や“スラム”の存在は、政府にとって早急に排除すべき“危険分子の卵”そのもの。彼らは幼くして、政府に負われることを余儀なくされ、生きていくすべを失って、彼女と出会った

エレノアは知っていた、そんな身寄りのない彼らが自分を慕ってくれていること。しかし、それは救いとなるべきではなかったことを、彼女は伝えねばならない。胸が苦しく締め付けられるのをじっと耐えながら、小さな手や無垢な目が自分に向けられるのを受け止める。誰も助けられない、誰も信じない　生きていくことすら苦痛に感じる。その恐怖が、今まさにエレノアの前にいる子供たちを取り巻いていた。

「エレノアはどうして街を出ちゃうの？ …… あたちたちが、嫌いになったの？」

廃墟ビルの屋上は、殺風景で寒々としていた。居場所の無い子供たちがエレノアを囲い、必死に懇願する。

五つくらいの子供が思いつめたようにエレノアの足にすがり、彼女なりの精一杯の力で巻きつくと、エレノアはいとおしさから、そっと背中を撫ぜた。子供のフリルのスカートは、所々赤黒く汚れ、色あせていた。子供の母の血 彼女がその死の瞬間を目撃してしまつたのを思い出し、力強く抱き締める。

「痛いよ、エレノア」

子供はそう言つて笑つた。

「ごめん……、ごめんね、私、行かなくちゃ」

「行っちゃうの？」

子供たちが次々に寄る。

「行かないで」

別れ際に付き物な在り来たりの言葉が、エレノアには鋭いナイフのように感じられた。

次第に夜の姿に変わっていく町並みを見下ろしながら、彼女は子供らを引き離す。壊れた金網の向こう側に、仲間のトラックの荷台が見える。時間だ。

「僕達も連れてつてよ、エレノアんとこに……」

「だめよ」

「どうしてなの？」

子供たちの言葉に、エレノアは思いつめたようにぎゅっと目を瞑つた。こんな悲しい別れをするくらいなら、出会わなければよかったのだという後悔の念が渦巻く。

「私はエレノアじゃない。ここにいてべき者でもない。もう、役目は終わったのよ。あなたたちにはもう、会わないわ」

「エレノア ……！」

悲痛な叫びが早かつたのか、彼女の足が離れるのが早かつたのか。

金網を飛び越え、屋上の手摺りから彼女はダイブした。Ｔシャツに風が孕み体中を突き抜ける。二階建ての古びたビルの屋上から、クツシヨン材を詰め込んだトラックの荷台に転がると、数回、身体がバウンドした。吐き気が襲うが構いなしに、トラックは彼女の存在を確認するとすぐに走り出した。

同時に、屋上から数発の銃声

「警察だ。間一髪だったな」

トラックを運転する仲間が、荷台のエレノアに話しかける。

子供を撃つ音だ。浮浪児を一斉排除する警察隊か、あるいはエレノアを追っていた部隊かあのビルを張っていたのだろう。いずれにせよ、生きていくことも叶わなかった子供たちに、  
「どうして」

と、彼女は嘆く。

廃屋が徐々に小さくなっていく。ゴミのように屋上から放り投げられる遺体の影が、彼女の脳裏にこびりつく。スラム街を抜け、住宅地へ、薄暗い街の中へ紛れていくトラックの荷台で、彼女は泣いた。

守らなければならぬ命さえも、守れない。自分という存在が、恨めしくて仕方ない。

「もう、“エレノア”は辞める……」

ぼつり、呟いた言葉は、夜風に解けて消えていった。



#### 4・記憶

歳の離れた二人の男が、将棋盤を囲う。古い盤の上に整然と並んだ五角形の駒は、使い込まれ愛用されていることをうかがわせる。時折、パチン、パチンと景気よく鳴る音は、指し手もまた、将棋に慣れ親しんでいる証拠。年上の髭の男が銀縁の眼鏡の奥を光らせて、すっと王手を指した。

「畜生、負けだ。完敗だ」

相手の若い男は、両手をぐいと頭の後ろで組み、「降参しました」と身体を屈めた。硬いコンクリの地下室、切れ掛かった白熱灯の光がチラチラと点滅する中、数十分駒とにらめっこした結果、自分の実力が明らかに下であることがわかったのだ。

アジア大陸、東シナ海に面したこのネオ・シヤンハイのドームは、アメリカ大陸のネオ・ニューヨークシティドームに続いて二番目の規模を誇る。中華の町並みは殆ど残っていないが、どことなくアジアテイストを感じるのは、そこにアジア系民族が多く存在しているからだろう。文化の淘汰されたこの世界においても、彼らの身体から滲み出るアジアの魂や思想は、決して廃れることはない。政府により禁止された旧史の文化も、ひっそりとなりを潜めながら、脈々と受け継がれ、今日まで続いている。

彼らの扱っている将棋盤もまた、そういった代物だ。本来ならば政府の政策により存在自体消え去っているはずのそれを、若い男の父親は後生大事にしていた。彼の、形見だ。

青年は、ジュンヤという。今年二十歳になったばかり、日系と中国系の混血児だ。この地下室のある二階建ての窮屈な家で、母親と目の前の男、その娘とともに、四人で生活している。

ネオ・シヤンハイの住宅街の隅、スラムと隣り合わせの治安の悪い立地ではあるが、彼らにとってはそこが案外心地いい。監視システムの強化された裕福な住宅街や集合住宅では、アナークリストと呼

ばれる彼らは安心して暮らすことが出来ないからだ。反社会運動をしていたジュンヤの父、シロウ・ウメモトの設立したES (Earth Saver) という反政府組織の根城として、この家はある。目の前にいるこの男もまた、その一員だ。

ジュンヤは汗で濡れた額と短い前髪を腕で拭った。目の前の男が涼しげな顔で胡坐をかき、指し終わった将棋の駒を一手ずつ元に戻しながら確認するのを、彼は恨めしそうに覗き込む。そのダークブルーの瞳は、どこか暗い影を落としていた。目じりのしわも、眉間のしわも深く刻まれ、黒髪と口髭の中にも白いものが混じって見える。

出会ったばかりの頃、彼はもっと若かった。いつの間にこんなに更けてしまったのか、七年前、我が家に現れた彼は、もっともっと危険で恐ろしい男だったのにと、ジュンヤは思い返した。

その日、十二歳のジュンヤは父とこの部屋で将棋を指していた。

優しい父は、自分の宝物だった将棋盤を誇らしげに見せ、よくジュンヤに指し方を教えてくれたものだ。

「将棋はなあ、こういう静かなところで指すのが一番いいんだ。精神が安定して冷静になれる、最高の精神鍛練の場だと俺は思う。それに、このパチンコ音がこの上なくいい」

そんな口癖も、今ではいい思い出だ。

思えばあの日、母が買い物で外出している隙に、事件は起こったのだ。

仕事の非番日、一緒に将棋を指そうとシロウはジュンヤを地下室に誘った。二人だけの緩い時間。親子らしい会話を紡いでいると、突如、それを遮るように何度もけたたましくインターホンが鳴った。尋常ならざる音に痺れを切らして、二人は急いで階段を駆け上がる。

反政府組織のリーダーをしていた父が、政府やその追っ手から逃れた人物を匿うことはよくあった。自宅は実質、逃亡者たちの駆け

込み所と化していた。闇の情報として、暗に知られていたのだ。彼らの訪問は、昼夜問わない。夜中叩き起こされることも決して少なくはなかった。数日間見慣れぬ大人と暮らす羽目になったことも、一度ではない。父に「宜しく頼む」とにっこり笑われると、母もジュンヤも断りきれず、彼らが暮らす場所を見つけるまでの間家族同然に過ごすのだ。

そのときもやはり、そんな気配がしていた。

「私はEPTの科学者だ。ディック・エマード……、一度は聞いたことがあるっ」

玄関から顔を覗かせた無精髭の男に、物陰で様子を見ていたジュンヤの心臓は潰れそうだった。殺気をぶんぶんと漂わせ、汗でぐっちよりと全身を濡らし、大事そうに何かを抱いている。政府から逃れてきたと言う割りに怯えた様子もなく、シロウに身の確保を懇願するでもない。今までにない異質な訪問者は、ジュンヤの自己防衛本能を刺激した。

ジュンヤの耳にはつきりした会話は届かず、その経緯は定かではないが、父は「話を聞こう」とドアを開け、彼を招き入れたのだ。た。

汚れた白衣、しわだらけのワイシャツと泥まみれのスラックス。さっきまでの気丈さが嘘のように、放たれた玄関先で男は倒れこんだ。

「頼む、こいつを……」

抱えていた毛布をかばうように転がり気を失う。

「“こいつ”って……、女の子じゃないか！」

毛布の中から長い金髪の髪の毛が見え隠れしていた。

この正体不明の男ディック・エマードが何者なのか、ジュンヤは未だ知らない。

彼が科学者であること、政府の研究施設にいたことだけが告げら

れた事実。彼の抱えてきた美しい金髪の少女も、果たして、彼の本当の娘であるのかどうかさえ疑わしい。しかし、二人の醸し出す空気や共通する深い青色の瞳は、きっと親子なのだろうと信じずにはいられないくらい似通っている。

存在していたはずの少女の母親の話も、逃げてきた本当の理由も告げぬまま、彼は七年をこの家で過ごした。徹底した秘密主義は、彼への不信任を募らせたが、彼はそれを、ESへの技術協力という形で返してくる。いつしか男は、ESにとって必要不可欠な存在になっていった。彼を信頼し、彼を慕う。自分の死んだ父がそうしたように、ジュンヤもまた、知らず知らずのうちこの不審な男に心を開いていった。

用の済んだ将棋盤を一つにまとめ、地下室の棚に保管する。くくりつけの棚の隣に、小さな写真が飾ってあるのを、ジュンヤは横目でちらと見た。

今の自分と同じくらいの背丈のアジア系の中年男性と、ほんの少し子供だった自分、そして母。その脇に少し離れて大柄の眼鏡の男と、金髪の少女。三年前、父が死ぬ少し前に庭先で撮影したものだ。嫌々ながら何とかしてフレームに収まってくれたディックに、シロウは必要なくらい大げさに感謝していた。

「写真を撮ろう」とシロウが言い出したあの頃、ネオ・シャンハイではアナーキストの掃討作戦が各地で行われ始めていた。反政府組織の構成員、幹部を狙った大規模な作戦に、彼自身危険を感じていたに違いない。

遺影代わりと笑いながら無理やり撮ったその写真を大事そうに胸に抱いたまま、彼は結局政府軍の標的となり、銃弾で蜂の巣にされ、死んだ。路地の奥、ひっそりと亡くなったシロウを探し出し、目を塞ぎたくなるような悲惨な遺体を手厚く葬ってくれたのは、ほかならぬディックだった。血は見慣れていると静かに笑った彼のあの潤んだ瞳が、目に焼きついて離れない。

父シロウに対する彼の敬意と誠実さは、ジュンヤの不信感をなぎ払った。

父の死後、もう一人の父親として自分を支えてくれたディック。口数は少なく、優しさを感じるわけじゃない。ぶっきらぼうで無遠慮な言葉も彼なりの配慮なのだろうと、少しずつわかるようになってきた。だからこそ、こうして父との思い出の将棋を指すことが出来る。将棋は、ジュンヤからディックへ向けた、信頼の証なのだ。「時間が経つので、残酷だな。いつの間にかこうやって、形見の将棋さえ普通に指せるようになった。親父が死んでから三年……、俺は成長してるんだろうか」

ジュンヤは溜め息交じりにそんなことを呟いた。「そういうのは、自分で考えることじゃない。客観的に見てどうかということ。少なくとも、お前は少しずつ、シロウに似てきているよ。そのまっすぐさは、特にな」

顔を向けるでもない、ジュンヤに直接言い聞かせようとすることもない。捨て台詞のように言い放ち、ディックは一人で階段を上がっていった。くたびれた白いワイシャツの背中が、どことなく物悲しさを醸し出していた。

## 5・エスター

ネオ・シャンハイの片隅、すぐにも傾きそうな二階建て庭付きの小さな家の前に、一台の白いトラックが停まった。荷台に敷き詰められたクリーム色のクッション材の中にうずくまっていた少女は、泣きはらした目をこすりながらゆっくりと起き上がった。

すっかり日が暮れ、辺りは夜の街に姿を変えていた。住宅地に並ぶ家々には明かりが灯り、夕飯のいい匂いが立ち込めている。パチパチと切れ掛かった街灯の明かりがトラックと少女らを照らして哀愁を深めるので、彼女はまたわっと泣いた。

「ホラ、着いたぞ」

運転手は淡々と少女を荷台から下ろし、そのこじんまりとした家の戸口へと向かわせた。

「あ、ありがとう、ハル。それじゃ」

やっと搾り出した彼女の声に安堵の溜め息を漏らし、ハルと呼ばれた運転手は自分の白髪交じりの短い頭をかきむしった。

「デイツクには、俺の方からもあとで言うておくよ。もう、こんな茶番は終わりにしようって。『エレノア』のことがどれだけ重要なのか、結局俺たちにはわからない。こんな状況で続けられるかってな」

「うん……」

少女はほんの少しだけ首を傾げ、指で涙を拭う。肩までのストリート金髪がふわりと揺れて、彼女の涙目を一瞬だけ隠した。

「政府は近頃“エレノア”を躍起になって捜しているらしい。このままじゃエスター、お前の身が危険だ。思うところがあるなら、デイツクに自分の気持ちを伝えたらどうだ。父親なんだから、遠慮することもないだろう」

周囲を警戒しながらトラックに乗り込み、ハルは軽く手を振って走り去った。

「遠慮、することもない、か」  
年季の入った茶色の玄関ドアの前に立ち、彼女は大きく深呼吸する。

何、臆することはない。この向こうには家族がいるのだと思いつつも、彼女の表情は綻びを許さなかった。家族の顔を、父親の顔を思い出せば出すほど、胸が苦しくなる。それでも、帰る場所は他にはない。

ドアノブに手をかけ、開ける。

「た、ただ今」

玄関と間続きになったリビングに、父親がいた。少女の声に、父は腰掛けていた合皮のソファから勢いよく立ち上がり、読んでいた本を投げ出した。待っていましたとばかりに少女の元に近付いてくる。一九〇センチ近い大柄な身体に銀縁の眼鏡がキラリと光るので、彼女は思わず足をすくめてしまった。

「エスター」

視界一杯に飛び込む父親の影。そのダークブルーの瞳が眼前に迫り、彼女はがごとく両目をつぶって顔をそらした。

「随分遅かったが」

低い声。その先に何があるのか、またいつものように問い詰められるのかと思うと、身体が自然に震えだした。声が出ない。

ハルが言うように、“遠慮無しに”言えるような、そんな父親ではないのだ。他人にはわからない、何か真つ黒な部分を隠し持っているような、そんな気配が漂っている。誰も知らない、誰にもわからないそんな雰囲気、父は自分の前にいるときだけ漂わせる。親子だからか、それともまったく別の理由からなのか。エスターはそんな父の姿が怖くて仕方ない。

どうしたらいいのか、しどろもどろし、行き場のない視線が室内を漂う。誰か、誰か、という彼女の思いが通じたのだろうか。父の背後から、若い男の声がした。

「ディック、今、エスターの声がしたと思ったんだけど」

同居する、ジュンヤだ。エステルより三つ上の、アジア系の青年。その柔らかい声と爽やかな顔が見えると、彼女はほっとしてへたりこんだ。

「何、今帰ってきたところだ」

普段どおりだと不自然に強調させて、ディックは背後の青年に言い放った。

「エステル、大丈夫か。どうかしたのか」

ジュンヤはそうしたディックの声に耳も貸さず、その足元で座り込むエステルの前にするりと滑り込んだ。

泣きはらした赤い目が、いつもと違うことが起こったのだと知らせている。

「何か、あったんだな」

肩を抱き、優しく問いかけるジュンヤに、エステルは思わず、

「わ、私……“エレノア”はもう、やれない……」

ジュンヤに内緒にしていたことを口にしてしまった。はっとして、口を塞いだときにはもう遅かった。ジュンヤはいぶかしげな目でエステルを覗き込んでいた。

「ちょ、ちよつと待って。“エレノア”って？ お前、何をやって「すまんが」

ジュンヤの言葉が終わるか終わらないかのうちに、ディックはぐいとエステルの腕を引っ張りあげた。軽い彼女の身体がふわっと浮いて、ディックのそばに引き寄せられた。

「席をはずさせてもらう」

まだ呼吸の整わぬエステルをぐいぐいと引っ張りながら、ディックは奥の自室へと去っていった。

古本のぎつしりと積み重なった部屋。ディックはその中に無造作に置かれた椅子に、エステルを腰掛けさせた。頭をかきむしり、何か思案しているようにブツブツと呟きながらあごを触る。深く考え



るときにディックがいつもやってしまっ、癖だ。

狭く、照明をつけても十分に明るくならない部屋で、彼は数歩、行ったり来たりした。

「ごめん、パパ。私はもう」

場を何とかしようとしてエスターはもう一度、同じ言葉を繰り返そうとした。しかし、

「いや、いい。“エレノア”はどちらにしる、これ以上やらせるつもりじゃなかった。悪くないタイミングなのかも知れん。EPTもエレノアの正体に気が付いてきた頃だし、アレもそろそろ完成する。いつそのこと、奴らを……」

会話の相手がいるのかいないのか。雲を掴むような曖昧な言葉を続けるディックを、エスターは恐る恐る目で追った。

彼女が“エレノア”と名乗って行動するようになったのは、父・ディックに指示されたからだ。金髪の少女“エレノア”の存在を、EPTに知らしめ、印象付けさせる。それが、成功の鍵なのだ。父が何かの計画を推し進めているのは知っていた。その計画を実行に移すまでの間、“エレノア”として街に繰り出し、EPTを煽るのが彼女の役目。真の狙いなど、誰も知らされない。ただ、言うとおりにすることで“EPTを潰せる”と、ディックは言った。

完全な秘密主義者だ。彼女の父、ディック・エマードという男は娘にさえ、本当のことを話そうとしない。

彼女が唯一聞き出したのは、名乗れといわれた“エレノア”という名前が自分の母の名前であるということだけ。顔も知らない母の名が、“EPTを潰す”ための鍵になっている。それは、他ならぬ父の過去と繋がりがあるのだということは想像に難くなかったが、それを問い詰めることなど出来ない。

「“エレノア”はEPT煽動の罠だ。奴らが行動を起こすまで、時間がない。数日中にここから引越そう」

ディックは突然動きを止め、エスターに向き直った。

そして、ゆっくり屈むと、椅子に掛けたままの彼女を大きな両腕

で包み込むように抱きしめた。

「すまない、エスター。辛い思いをさせたな。もう少し、もう少ししたら、本当のことを話す。それまで、待っていてくれ」

「うん、うん」

数えるほどしか抱きしめてもらえなかった彼女の気持ちをしめし量るかのよう、ディックは更にきつく彼女の肩を抱いた。

リビングに残されたジュンヤが、不満そうに食卓のサラダを摘むのを、彼の母、メイシイは不機嫌そうに眺めた。

「あら、随分お行儀が悪いんじゃないの」

台所から料理運びこみ、テーブルに並べるのに、息子の大きな身体が邪魔だった。

それでも、母はお構い無しに、どんどんと皿を並べていく。

「今日の夜は少し奮発して肉料理を作ったの。物価の高騰でなかなか手が出せなかったけど、特売日に手ごろな値段で買ったのよ。あなたもエスターも、こういうの好きでしょ。若いんだし、栄養つけないとね」

息子の機嫌の悪いのを知りながら、彼女はいつもどおりに接してくる。ジュンヤは少し、居心地が悪かった。

「なあ、知ってた？」

レタスをしゃきしゃきと口の中で刻みながら、ジュンヤは続けた。「エスターが、“エレノア”って名乗ってたこと」

「知ってたわよ？ どうして？」

「そうか。俺には、言ってくれなかったんだな」

不満そうに、ジュンヤは溜め息を吐いた。同じ屋根の下に居ながら、自分だけが疎外されていたような気分だ。

「秘密は誰にだってあるわよ。全部話せるほど、人間は単純じゃない。人によって、話せることが違うのは、当たり前よ。私だって、ジュンヤに話せないこと、ディックやエスターにも話せないこと、

たくさんあるもの。そうやって、秘密をたくさん持って、人は成長するのよ」

もっともらしい母の言葉は、共通の秘密を持っていた人間の言い訳にしか聞こえない。

「信頼、されてないのかな」

ぼつり、眩きながら、ジュンヤはまた、レタスを頬張った。

## 6・旅立つ日に

夜。ネオ・シャンハイのドームの天辺に浮いた人工太陽は、一日の役目を終えて青白くぼんやりとした光を放つ。それはあたかも朧月のように、冷たい夜の街を温かく包んでいた。

人間の体内時計を狂わすことのないように、きちんと朝昼晩、それぞれに色を変える空と太陽。それに伴って、昼には少し気温を上昇させ、夜になれば少し冷たくする。例え世界が鉄で覆われようとも、人間の身体のサイクルは変わらない。一日中、気温や照度の変化がない世界になってしまうと、体内時計との狂いが生じ、やがて人間は体調を崩す。科学的に実証されている分、EPTは神経質なほど、この時間経過と照度の変化に気を使っているようだ。

天井に映し出された青い空の色や夕焼けの色はどこか鈍っていて決して綺麗とは言いがたいが、そうした少しの気配りがあることだけでも、この世界は救われていると思ってしまう。

そう、例え、世界がEPTという名の狂科学団に支配されていたとしても。

ドームの中心部から離れること十数キロ、そこは人気のない夜の住宅地。ネオンやビルの明かりが遠くに赤黒く見えている。切れ掛かった街灯が続く少し冷えた夜道に、あまり清潔感のない匂いが漂う。スラム街、コード支配から逃れたものたち、経済的に見捨てられたものたちが住む、薄汚い場所だ。そのすぐそばにある小さな二階建ての家の前に、数台のトラックとワゴン、数十人の人垣が、  
「以上。EPT軍がこの一帯を囲っていると通報があった。各員、直ちに作戦に移れ！」

先頭に立って指示をしているのはハロルド・スカーレット、通称ハルだ。厳しい表情、黒い作業着に帽子を深々と被り、全員を睨むように見渡した。

合図とともに、黒い影が散り散りになって消えてゆく。

“エレノア”を廃墟ビルで捕り逃してから数日、EPTは本格的なES掃討作戦を開始。通常無法地帯となっているスラム街、郊外を中心に、軍隊、特殊任務隊を投入した。反政府運動を展開するアナキスト団のうち、ネオ・シャンハイで確実に勢力を広げているESは、今やEPT最大の敵となっていたのだ。

戦車と歩兵の足音が、暗く静かな街に不気味に響き渡る。それらはじりじりと押し寄せる恐怖のように、徐々に徐々にディックたちの住む郊外の家へと近付いていた。

家を離れるワゴンの一つに、ディックたちはいた。ジュンヤが運転し、メイシイとディック、そしてエスターを後部座席に乗せ、目的地へと向かう。更に郊外へ、人気も明かりもない場所へと、車は進む。街を離れるにしたがって廃屋の割合が増え、いつしかゴーストタウンへと迷い込んでいた。それでも車は走るのをやめず、更に奥へと突き進んでいく。

「この先、一つだけ明かりのついた白い建物がある。そこが入り口だ」

後部座席からディックが指示したのと同時に、遠くにつつすらと白い四角いものが見えてきた。

自宅から車で十五分、そこには十年以上前に廃墟となった町がある。

反社会組織の掃討作戦は今回が初めてではない、過去にもあった。その舞台がこの町だ。通信網もライフラインもそのときに途絶えたが、ディックはそれを逆手に取り、この場所で活動をしていた。

自家発電、水道水の確保が出来るようになると、彼はこの地下に巨大な要塞を建設する。EPTに気付かれぬ様に、地下に数キロの搬入路を掘り、数箇所の入出口から材料を分割して搬入した。大量の土砂は各地の土砂廃棄上などに分散して捨てることで不自然さをなくし、必要となる部品の殆どは、廃墟となった町からのリサイクル材。こうして秘密裏に“それ”は作られた。“造船場”と、デ

イックは呼称した。

「どの道、我々のあとを彼らは追う。EPTに見つかるのは時間の問題。迅速に行かねば意味がない」

造船場に着くと、四人は急いでその建物の中へと駆け込んだ。

こじんまりとした建物の入り口に、四角いパネルがある。触れ、暗証番号を入力、デイツクが手のひらを押し当てるとドアが開いた。「早く」

エレベーターだ。乗り込み、急いでドアを閉める。

静かに動き出した箱が数十秒後動きを止めると、ドアが開いて巨大な空間に出た。

暗闇の中に、球体のような丸いラインの一部が見えている。全体が把握できないほど大きい。黒光りした外観、四角く連なった強化ガラスの窓。

「わ、これが“船”ね」

エスターは目を白黒させて一同の最後尾を歩いた。作業用の足場が邪魔して、全体が見えないのがとても残念そうだ。腕をひさしにして必死に上を見上げるも、上部は暗闇に溶け込んでしまっている。船の輪郭に沿って丸く作られた足場の上を、ずんずん進んでいく。船の一部が大きく開け放たれたハッチが視界の先に見えてきた。そこから先に到着した数人が乗り込んでいるのが見える。

「荷物は二日前に運び込んである。各自、自室を確認して、地下のミーティングルームに集まってくれ」

デイツクに言われるがままに、三人はそれぞれの持ち場へと向かう。

真新しい船内。これから何か起こりそうな予感が、否応無しにそれぞれの胸に沸き起こった。

ドームのあちこちに点在する搬入路の出入り口、造船場の入り口から、分散して集合する。EPTに見つかったときの被害を最小限に止めるためだ。

戦力的にEPTに真つ向から立ち向かうのは無理があった。武器にしても、人数からしても、全面衝突しては敵う要素がない。EPTで科学者をしていたディック・エマード曰く、ESとして出来るのは、ネオ・ニューヨークシティにそびえる政府ビルの直接攻撃。そのために、まずはこのドームを脱しなければならぬということ。巨大な船はその移動手段。直径五〇メートルの球体型飛空艇だ。上部は操縦室、船員室などの居住スペース、下部には浮遊システム、エンジンなどが集中している。

この船を秘密裏に作るために、ES以外の反政府組織の力も借りた。資金、経済面を水面下で援助した企業も相当数に上る。ネオ・シヤンハイという街全体が、計画を後押しした。潜在的に眠る“EPT支配からの脱却”という願望が、形になりつつあった。

ハッチから階段を上って、二階の奥に食堂がある。大人数が交代で食事を取るとあって、食堂も厨房も大きめだ。メイシイはその厨房で、調理具を整理していた。

すぐにでも厨房を使えるようにしなくてはならない。食事は日に三回、決まった時間に食堂を空けるつもりだが、何しろ下ごしらえに時間がかかる。少しの間も惜しんで作業しなければ次の食事の時間まで間に合わない。時計を気にしながら、彼女は念入りに調理具を手入れた。

長旅に必要な具財を保管する大型の冷蔵庫や冷凍庫が背面にぎっしりと並び、大き目の流しと調理台、そして食器棚。狭くむさ苦しかった我が家も懐かしいが、今日からはここが自分の持ち場なのだと彼女は胸を張った。

鍋やフライパンの場所を確認し、やっと一息ついたとき、彼女はカウンター越しのテーブル席にディックの姿を見つけた。

「あら、準備はいいの？ みんな、そろそろミーティングルームに集まってる頃じゃない？」

「ああ」

ディックは生返事をしながらテーブルに肘を付き、ぼんやりと何かを眺めた。

エプロンの端をひよいとつまみ、メイシイはカウンターから出てその向かいの席に腰掛ける。後ろで結った黒い長い髪が、ゆっくりと左右に揺れた。

「やっと、この日が来たって感じかしら。本当の目的は知らないけど、これでEPTへ攻撃する足がかりが出来たってわけね。お疲れ様」

相手から反応はない。それでも彼女は話し続けた。

「まさか、あの時は思いもしなかったわ。自分が一番嫌いな人間と、ここまで一緒にいることになるなんて。あの、最低最悪な事件。あの日から私がどれだけ悩んでどれだけ苦しんできたかなんて、今更愚痴ったりはしないけど。ホント、運命って残酷なものよね」

「そうだな。俺も偶に思い返すことがある。俺はあの時、果たしてあの中にいた時、人間だったか……。この答えはまだ出ない。お前には悪いことをした。償うとか心を痛めるとか、そういう感情的なことは、困ったことに俺にはまだ出来そうにない。もし、あの時」

ディックがそこまで喋ったとき、ふいに食堂のドアが少し開いた。「俺がヤツを殺さなければ、お前の人生も少しは変わっていたのだからと思うと、確かに心苦しくはあるが……」

流れるように言ったその台詞に、突然の来訪者は大きく反応した。ボタン、と大きくドアを揺らし、前のめりに食堂になだれ込む。

ジュンヤだ。

時間が近付いて知らせに来たのか、偶々ここを通りがかったのか。どちらにしても都合の悪い相手であることに違いない。その姿を確認すると、ディックは小さく舌打ちして頭をかきむしった。

「今、何か喋ってなかった？ 殺したとか、何とか」

「確かに、喋ったが、それがどうした」

「それ、本当なのか。ディックが誰かを殺したことがあるって」



「だったらどうする」

ギロリと上目遣いに睨まれると、ジュンヤは一瞬、足をすくめた。「俺には、そういうことは教えてくれないんだな。“エレノア”のこともそうだ。秘密にしたがるその理由って、何だよ」

ジュンヤは酷く不機嫌な様子で、ディックに噛み付いた。未だ“エレノア”の件について何の説明がないことに腹を立てていたのだ。そうしたところで、この目の前の男が何かを教えてくれるはずなどないが。

メイシイは慌てて立ち上がり、眉をしかめて更に表情を硬くする。ディックとジュンヤの間に割って入る。

「ジュンヤ、そんな言い方」

息子を制止しようとするのを、ディックが止めた。腰を上げ、長い手をぐいと伸ばし、メイシイの肩を鷲づかみして後方に退ける。

「隠してるわけじゃない。話す必要がなかっただけだ。そんなに知りたいなら、幾らでも教えてやる。俺が昔、お前の祖父を殺した話をな」

座り直したた椅子がぎいと音を鳴らした。足と両腕を組むと、ジュンヤをあごで呼び寄せる。渋々彼が向かい側の席に腰掛けるのを見届けると、ディックは深呼吸し、その出来事について語り始めた。

## 7・研究所のエマード

「そもそも、俺はお前の祖父と同じ研究所に勤めていた。俺が所長、ヤツが研究員。若かった俺の下で働くのに抵抗があっただらう。大分反発された」

組んだ腕の上で、人差し指がトントンとせわしなく動いている。それでもディックはいつもの無表情だ。

ジュンヤは好奇心と不安感の入り混じった表情で、肩を張り、テーブルを挟んで斜め向かいに腰掛けたディックの話に耳を傾けていた。こうしてじつと話を聞くなんてことは今までなかった。将棋の席ですら、ディックは最低限の会話しか許さなかったからだ。

「話して、いいの？ 人が疑われるわよ。今まで信頼していたのに、つて、言われるかも知れないわよ」

ジュンヤの後ろに立つメイシイが、耐え切れず身を乗り出して止めようとす。

しかし、ディックは口髭の下で不敵に唇を緩めた。

「構わん。それで信頼度が下がればそれまでのこと。あとはジュンヤがどう考えるかだ。人を信じることと、真実を知ることが、どれほど罪なのか。こいつは知らなさ過ぎる。後悔先に立たずって言葉の意味を知るいい機会じゃないか。メイ、お前は先にミーティングルームへ。エスターが心配する。ジュンヤは俺が後で連れて行くと、ハロルドに伝えてくれ」

「わ、わかったわ。でも、出発まで時間はないんだから、それだけは忘れないで」

無言でうなづくディック。メイシイはその姿を確かめると、何度も振り返りながら後ろ髪引かれる思いで食堂のドアを閉めた。

ミーティングルームへの移動とEPT接近を知らせる船内アナウンスが広い食堂に響く中、彼らの間には重苦しい空気が漂っていた。母親がいなくなったことで少し安心したのか、ジュンヤは気張っ

ていた肩を緩めるように深呼吸し、こう切り出した。

「俺のじつちゃんを殺したって、つまり、どういうことだよ」

声は震えていた。啖呵を切った割りに、自分の度胸のなさには嫌気が差す。ジュンヤは焦りから滲み出た額の汗を手で拭った。

ディックはそんなジュンヤを無視して話し続ける。

「あれは、ネオ・ニューヨークシティの、町外れのラボだった。住居も併設されたその研究施設で、俺はメイシーに出会った。まだ年端の行かないガキだった。何人だったか、大勢の兄弟がいて、その一番上だったのはぼんやり覚えている。子供の声が絶えず響く、仲のよさそうな家庭だった。目障りなくらいに幸せそう。俺は、多分どこかで嫉妬していた。自分が手に入れられないものを持っている、あの男に。だからというわけじゃない。ヤツは、知ってはいけないことを知ってしまった。EPTという組織の根底に迫る秘密。例えば好奇心でも、それを調べたらお終い、そういうものが世の中にはある。秘密を抱えきれほどの度量も、覚悟もないくせに、ヤツは軽い気持ちでそれを探ってしまった」

「それは」どんな秘密かと、ジュンヤは言いかけてやめた。やめて正解だった。ディックはますます顔を険しくしてジュンヤを睨んだ。「秘密をここで教えるほど俺は優しくない。知ってしまったら最後、EPTはそれを知った人間をどこまでも追いかける。ましてやその秘密を知ったまま、政府から逃れようとしたらどうなるか。考える余裕がなかったのか、愚かだったのか。ヤツはよりによって、逃亡を企てた。しかも、反政府組織ESの力を借りて。あの時、ヤツはしきりに単語を繰り返していた。後から考えてようやく理解したんだが、『ES、ES』と、そう言ってたんだ。その意味を知らぬ俺は、しばらく放っておいてしまった。ところがヤツは迂闊にも夜中俺に決定的な場面を見られてしまう。シロウに会っていたんだ」

父の名が出て、ジュンヤは思わず目を見開いた。話は更に続く。

「シロウ・ウメモトはその頃、まだ無名のアナーキストだった。だが、例え無名だったとしても、政府を倒そうとする男に精通してい

たヤツを、俺は立場上見逃すわけにはいかなかった。EPT政府が家族を施設内に住まわせていたのは、裏切りを抑止するための人質が欲しかったからだ。政府の意に反する研究員の家族の命を奪うのは、当然のこと。俺はヤツの家族を一人ずつ始末した。親、妻、子供、皆殺しするはずだった。あの夜、俺は夢中で逃げ惑う研究員と家族を撃った。混乱に乗じてシロウと逃げ延びたメイシイを見逃しているなんて知らずに。施設に爆弾を投げ込み、助けようと誘導するシロウを目撃しながら、殺し損なったことをどれだけ後悔したとか。裏切り者、逃亡者、そして政府に楯突くものは全て抹殺する、それが政府の正義だ。俺にとっては、殺しも仕事だった。人を殺すのはなんでもない、当たり前のこと。犠牲だとか可哀相だとか、俺には関係ない。メイを逃した致命的なミスにもかかわらず、政府は俺を評価したし、それがもとで昇進し、政府の中枢で研究出来ることになったんだ。まさか、その後政府から逃れ、自分自身が追われる身になるなんて、その頃の俺は考えもしなかったが……」

語り終え、ふうと大きく息を付いたディックを見て、ジュンヤは両膝に置いた拳を震わせた。頬が紅潮し、ギリギリと歯をかみしめる。そして、我慢ならないとばかりにバンとテーブルをたたきつけて立ち上がった。その上に片足をかけると、ディックの胸倉を掴んで引き寄せる。

「つまり、ディックは虐殺者だったのか……。ただのEPTの犬だったってことか！」

声の限りに感情をぶつけてくるジュンヤを、ディックはくすりと笑い飛ばした。

「若いな。その強すぎる正義感シロウ譲りか。いや、違う。お前はただ単に青いだけだ。何も知らず、ぬくぬくと生きてきたことを呪え。己の隣でどんな残酷なことが行われていたとしても、お前のその暴走した正義感では誰一人助からない。それどころか、いずれ自分自身を潰すぞ」

起伏なく、いつもどおりの冷徹な台詞に、ジュンヤの心はますます

す苛立つていく。殴りつけようと高く掲げた右手の拳が、行き場を失って細かく震えた。振り下げ、テーブルを打ち付ける。その拍子に力の緩んだジュンヤの左手から、掴まれた胸倉を開放させると、ディックは逆襲するようにジュンヤの襟元を引っ張った。

「もうすぐ時間だ。話は済んだんだ。気持ちを切り替え、次に進め。それが大人になるということだ」

やり切れず強くかみ締める歯の音と、悔し涙の浮かんだ目じりを隠すように、ジュンヤは両手で顔面を覆った。

食堂から通路を通り、ミーティングルームへ向かう階段を下りていたメイシイの視界に、焦った様子で駆け上がってくるエスターの姿が飛び込んできた。螺旋階段のパイプの手摺りから身を乗り出し、声をかける。

「メイ、ジュンヤとパパを知らない？ もうすぐ時間なんだけど」  
集合を呼びかける船内アナウンスにもかかわらず、なかなか来ない二人を心配して戻ってきたようだ。階下からこちらを見上げる彼女の金髪は軽く乱れ、うつすらと額に汗がにじんでいる。メイシイは息子とディックの緊迫した場面を思い出しつつ、悟られまいとこりこり笑った。

「大丈夫よ。あと少しで来るんじゃないかしら。それより、どうなの、政府軍はどこまで迫ってるの？」

「うん、それがね」

踵を返して階段を下り始めるエスターを見て、メイシイは胸を撫で下ろした。そのまま、エスターのすぐ後ろを下りていく。

「搬入路が見つけられて、そこからこちらへ向かっているらしいの。あまり時間がないから、すぐにでも出発しなくちゃって、ハルが言っていた。だけど、最終チェックを開発者のパパがしてくれないとどうにもならないらしくて」

「その辺は、あの人も承知しているはずだから、心配は無用よ。見

つかるのも計算のうちだとか何とか言つてた気がするし。わかつていても話さなきゃいけないこともあるらしくてね」

と、そこまで言つて、メイシイは考えた。ディックはなぜ、食堂にいたのだろう。自分が切り出した昔話に付き合わせてしまったため、彼の話の聞き損ねたことを今更後悔する。一人寂しげに腰掛けにいた彼の後姿を思い出し、戻つて話を聞きなおすことも、息子をあの場から引き剥がすことも出来ない寂しさに襲われる。

「メイ、どうしたの、メイ」

急に歩調の送れたメイシイをエスターは不信そうに振り返つた。なんでもないと、彼女はそつとその背を押した。

## 8・EPT特殊任務隊

真つ暗闇の星のない空の下で、チラチラと不快に瞬くビルの明りも、郊外には届かない。人気のない廃墟、いつもならしんと静まり返っているはずのその場所に、重厚な戦車の走行音が鳴り響く。EPT兵士を乗せたトラックが数台その後を走り、更に続いて軍用ジープが一台。物々しい雰囲気、瓦礫の中を走っていく。

「こんな夜の出勤もいいわね」

ジープの後部座席右側のパメラが、長い赤毛をかきあげながら呟いた。迷彩服の胸のボタンを数個、豪快に外し、チラと窺える胸の谷間が色気を漂わせる。

「今からあの男のところに向かうのに、こっちは緊張しきりなんだ。そついう軽々しい発言はやめなにか」

助手席の中年男が振り返り、肩越しにパメラを牽制した。

半開きになった窓から夜の冷たい風が入り込み、パメラの赤髪を舞い上がらせる。彼女はうざったそうにもう一度髪をかきあげると、手元のボタンを押して惜しむように窓を閉じた。

「ケネス隊長は、あの男のことを知ってるの」

小馬鹿にした口調で彼女が言っていると、男は正面に向き直って「昔の上司さ」と答える。

「七年前に逃亡してからずっと足取りのとれなかった彼が、今になつて動き出したのには理由があるんですかね」

と、今度はパメラの隣、後部座席左の若い眼鏡の男が手製のメモを読み上げた。

理由かと、ケネスは口の中で呟いた。理由がわかれば、それこそ、七年前の地下研究室での出来事だつて、きつと深い訳があつたんだろうに。彼は無意味に動くような人間じゃなかったはずだ。これは事件以来ケネスの心の中で反芻してきた疑問。

あの地下研究室、軍からの出向でディック・エマードという男の

助手になり、実験を繰り返していた日々。苦痛だったのか。あの無口で無表情な男の中で、どんな葛藤があったというのか。誰も知らない、知らされることもない。実験が、倫理に反していたからか。そんなことくらいで簡単に心を乱す人間だったのか。

まだ若かった自分と男の姿を思い浮かべ、ため息をつく。悔しいかな、彼は再び現れたときには完全に敵だった。反政府組織などに現を抜かすとは、どこまで墜ちたのだろうか。記憶の中では、少なくとも冷酷で人間の感情など持ち合わせていない鬼のような男だったはずなのに。

郊外のひっそりした道の先に、かすかに白い光が見える。闇に浮かび上がる四角い建物の輪郭、そこが目的地に違いない。手元の端末に映し出された地図、ずいぶん昔の浄水場の跡地のようだ。次第に道がよくなり、がたがたとした音も減る。何度も行き来したように、道らしき道が現れ、その先に何かあると確信できるまでになった。

「こんな郊外で何をしようと言っただろうか。まさか、我々と戦争、とか」

眼鏡の男が嘲笑う。

「そんな浅はかな男じゃない、彼は」

ケネスはそこまで言っただけでまた台詞を飲み込んだ。戦争だなんて、ナンセンスだ。そんな価値のないことを彼が求めるだろうか。いくらなんでも、そんな無駄なことをするわけがない。そう、無駄なことだ。今更のように“エレノア”と名乗る女性が現れたことも、それによつて総統がESとエマードの焼き討ちを命じたことも。理由がわからないから無駄だと感じるだけなのか、それともわからないことに対して恐怖心を抱いてしまっただけなのか。

何が起きているのか、不安で仕方ない。それが本心だ。

車は更に進む。無線が何度も入り、あちらで乗り捨てた車を発見したのだ、地下通路の入口を発見したのだ、情報が錯綜している。相手の目的もわからずに闇雲に探さなければならぬなんて、こ



の極度に情報化された世界では珍しい。政府の管理下から逃れるためにアナーキストたちがやってきた謀反がこうしたところで行く手を阻むとは、政府自身も気がつかなかっただろう。もっと早くに手を打っておけばこうした事態にならなかったのではと思うと、ケネスは歯がゆくて仕方ない。

何より、政府寄りだと思われていた一流企業さえ、アナーキストへの協力を惜しんでいなかった実態が明るみに出たことも痛いところだ。資材置き場や隠し通路が上手い具合に町に溶け込んでいたのがその証拠。考えられぬほど無造作に都市部に紛れ込んでいた。これは、エマードの指図なのだろうか。

『 緊急、緊急、特殊任務隊、応答せよ。特殊任務隊 』  
本部からの無線だ。

「はい、こちら特殊任務隊。隊長のケネス・クレパスです、どうぞ」  
応答スイッチを入れ、助手席前のマイクに顔を近づける。

『 北、五〇五地点に不審なエネルギー反応あり。全部隊向かいます。エネルギー砲準備を、どうぞ』

「了解」

何かが始まっているのか、思いながら通信を切る。あと数キロ、すぐそこだ。

再加速、運転席の大男が歯を食いしばりながらアクセルを踏み込む。ガタンガタンと大きく揺れる車内で、足下に置かれていた砲筒をいじり始める後部座席の二人。間に合わせるよというケネスの言葉に、「誰に物言ってるの」とパメラが笑みをこぼす。

「エネルギー反応って、なんでしょう。発電施設が何か」

眼鏡の男が手を動かしながら口走るのをケネスは聞き流していた。総統直属の特殊部隊だというのに、情報ももらえずに武器の準備だけするだなんて、おかしいと思わないか。ケネスはそうやって何度も自問自答する。剃り忘れた無精髭を手の甲で幾度となくさすり、闇に連なるテールランプを睨み付けながら。

『 デイツク・エマードが動く。協力してくれるね』

出勤前、総統閣下から直々の通達。珍しい、普段は軍用無線など使うことのないあの方が、わざわざ……。それはひとえに、自分がエマーダの部下として働いていたからなのか、それともエマーダ自身と総統閣下に何らかの関わりがあるからなのか。

「ええい、考えてもわかるもんか、気にするな」

両手で顔をぐちゃぐちゃに撫で回した。無口な巨体の運転手がどうしたとばかりに隣のケネスに目をやる。

「運転に集中しろ。敵は、すぐそこなんだからな」

不意に、目の前が明るく光った。目標の建物を中心に、閃光が走る。

爆発、ケネスは瞬時に考えた。

驚いた運転手が急ブレーキを踏み、ハンドルを右に切る。車体が傾き、同じように急停止した前方のトラックと追突しそうになる。

間一髪、接触を免れたところで眼鏡の男がジープの天井窓を開け、車の上部から身を乗り出した。

「遅かったか！」

思わず叫ぶケネスの後ろで、

「いや、まだまだ」

眼鏡が珍しく歯を食いしばるように答えた。メンテナンスを終えたばかりの砲筒を天窓から引きずり上げて担ぎ上げ、その後ろから延びた配線がきちんと荷台のエネルギータンクに繋がっていることを確認する。

「オツケー、ロイ」足下からパメラの軽快な合図。

うなずき、引き金に手を当てた。大人一人分の体を横たえたような砲筒の先に、急加速的にエネルギーが充填していく。ひよろつとした眼鏡男、ロイの身体を押しつぶすほどの勢いで。ロイは必死に砲を構え、照準を閃光の発信元、四角く縁取られた白い建物に合わせる。

「本部応答、敵襲と思われる爆発あり、緊急発砲します」

後部座席の様子を確認し、無線に一方的に連絡を入れる。ケネス

の声に、無線は一瞬戸惑ったような音を聞かせたが、総統直属の任務隊の行動には口出しできないのか押し黙ってしまう。それをいいことに、

「発射許可」

ケネスの一言にロイはしっかりとうなずいた。

「発射します、五、四、三……」

ロイがカウント始めたたとたん、今度はわっと爆風が襲った。砂埃が舞い、重さのある風が津波のように向かってくるのが見えた。

車体が揺れ、目標を失う。

「続けます、二、一」

怯まず構えるその目前に、思いもよらぬ物が。ケネスは思わず目を瞑った。

「ゼロ」

風に煽られトラックの荷台から吹き飛ばされた兵士何人かの身体を、白い光の砲弾が突き抜けた。彼らは一瞬で身体の一部、もしくは全部を失い、ケネスらの乗る軍用ジープの車体に激突した。石ころや瓦礫の一部とともに何度も車を叩き、カーキ色の車体が見るみる赤に染まる。強化ガラスの窓に、白い亀裂が何本も走り、ばらばらに砕け散って車内の三人を襲った。直ぐさま頭部を腕で覆い、被害を免れるよううずくまる。

これくらいだと、ケネスは意を決して風下にある助手席のドアを開けた。エネルギー砲を飛ばした先、目標の建物がはじけ飛ぶのが目視で確認できたが、それ以上の出来事に、彼は思わず息を飲んだ。

闇の中に、仄かに光る巨大な黒い月があった。

それはまるで、この町の光を全て飲み込んでしまったかのような幾重もの光の帯を有している。その下半分は強く光り、巨体を支えるために激しくエンジンを吹いているように見えた。

「な、なんだあれは」

思わず出てきた言葉に、自分で驚いていた。

「要塞、飛空艇……、なんと呼称すべきでしょう」

照準から目を離れたロイも、肩からエネルギー砲を下ろして呆然と立ちすくんでいた。

激しく吹いていた風が凧ぎ、全ての音が停止する。その黒い月は、啞然とするケネスらを嘲笑うかのようにしばらくの間宙に浮いていたかと思うと、青白い光を帯びてはじけ飛ぶように消え去った。

眼前に眩しいほどの青が広がった。エステルは思わず目を瞑り、両手で顔を覆う。それは、彼女のこれまでの人生にはない量の光だった。体中を光が付け抜けていくような感覚さえある。透き通る青色。

ネオ・シャンハイドーム上空。ESの“船”はドーム内の造船場から出航後、転移システムを起動させてドームからの脱出を図っていた。ドーム間移動の際EPT政府が利用している手法を船全体に使用する。莫大なエネルギーと経費を必要とするため何度も使えないのが玉に瑕だが、安全にドームから脱出するには都合がよい。また、ドーム内の管理はそれなりに行き届いていても、想定外の事項に対する警戒心が薄い。本拠地ネオ・ニューヨークのドームに外部から攻撃を仕掛けるという政府の裏をかけた作戦だった。

球状の飛空艇が風船のように漂う。雲の中を進む船の上部、操縦室の窓にひつつくようにして外界を眺めるエステルに、ゆっくりと澱みのない足音が近づいてくる。

「パパ」

彼女は久方ぶりに、明るめの声で父親を呼んだ。

振り返ったエステルの金髪が跳ねるのを見て、ディックは目を細める。

「こんなところにいたのか」

出航後、軌道が落ち着くと操縦室に集まっていた面々はそれぞれの持ち場へと散ったのに、彼女はどこへ行くでもない、ずっとこの場所で眼下を眺めていたのだ。呼吸をするのも忘れるくらいに、ずっとずっと。空気抵抗で少し揺れるが、そんなのはすぐに慣れた。地上とは違うふわふわとした感覚が心地いいとさえ、エステルは思ってしまった。

「だって、空がこんなに青くて」

濁って見えていた空、閉鎖されていた空間、当然だと思っていたそれらの景色が実は偽りであったということを楽しみ感じている。初めて見るはずなのにどこか懐かしいと思ってしまうこの気持ちは何なのだろうと、思ってはみるが口に出さず、エスターはまた窓の外を眺めなおした。

頬と両手をべったりと窓につけて食い入るように見つめる姿を、ディックは鼻で笑う。

「バカだな、エスター。なんて格好なんだ。まるで、子供だ」  
「子供よ」

彼女はすかさず答えた。

「ねえ、星がこんなに大きい。本当に、この星に、私達は、いたんだよね……」

「そうだな」と、その父はぶっきらぼうに言い放ち、彼女とは逆に向いて窓にもたれかかった。

「こんな大きい星の中、あんな狭苦しいところに閉じ込められているのかと思うと、空しささえ覚える」

ドームの外壁が視界に入っていた。錆付いた巨大な卵形の鉄の上を這うように蔦や蕨状の植物が絡みつき、その中に何らかの秘密を大事に隠し持っているかのようにさえ見える。その中に町がありビルが建ち並び、ひしめき合って沢山の人間が暮らしているようとは。外界からは想像も付かない。

ドームを取り囲むようにして広がる緑の大地、更にその向こうには海が。緑と青のコントラストが眩しすぎた。まるでその光を避けるかのように窓から目を背ける父の姿に、エスターは気づかなかつた。青色に浸り、心を澄ました。いつまでもこの景色が続けばいいのにと、記憶に焼き付けるようにじっと眺め続ける。

「平和なのは今だけだ」

静寂を絶つように、ぼそりとディックが呟く。

「こんなゆったりした時間なんて、今になくなる。俺たちの行動に気づいた政府が追跡を開始するまで、時間的余裕なんてないに等し

いはずだ。態勢が整うのが先か、奴らに見つかるのが先か。それより、政府発表とは自然環境が……。やはり、思った通りなのかもしれない。実地調査の必要性が」

「そういえば」

エステーの高い声がディックの言葉を遮った。

「ジュンヤ、どうしてるか、知ってる？　なんだか様子がおかしかったけど」

どのタイミングで思い出したのか、エステーが突然話題を変える。覗き込むように背の高い父親を見上げる青い無垢な瞳に、ディックは一瞬言葉を詰まらせた。

「気にするな。あの程度で」

そこまでは口にしたが、彼はそのまま口を噤んでしまう。

「ああ見えて、ジュンヤ、パパのことものすごく尊敬してるのよ。いつだったか、大真面目に話してくれたことがあって」

そういつて少し振り返ったエステーの視界に、ジュンヤの逞しいシルエットが映った。開け放したままのドアからこちらに近づいてくる。彼女は慌てて口を塞ぐ。一瞬体温が上がり、汗が手のひらに滲んだ。たった今あなたの話を、そう思うと更に恥ずかしさが募り、彼女の顔はみるみる赤くなっていった。

何か思い詰めたような表情で現れたジュンヤにかける言葉が見つからない。エステーは焦りで思わず息を止め、ゴクリと大きく唾を飲んだ。

「あ、あのさ」

しかし、身構えた彼女の手前に来ることなく、ジュンヤはディックの前で立ち止まった。どこかしらそわそわしたジュンヤの態度は明らかにおかしかったが、そのときのエステーは全く気づかず、ただ彼の発した言葉にだけ興味を注いだのだった。

「もしかして、この近くに“ニッポン”……とか言う場所が、ある？」

恐る恐る、目を少し泳がせて彼は小さな声でそう言った。

ディックは何を感じたのかにやりと薄く笑い、「そんな単語をどこで」と眼鏡を光らせる。

「確かに、この大陸の東にそのような国があったようだな。大戦後、国土の殆どが海に沈んだと聞いた覚えもあるが。それが、どうした」「い、いや。あの……そこへって、行くことが出来るのかなと思って。ホラ、昔父さんが生きていた頃、俺は数少ない日系だって聞いたことがあったから。その……、もし……行けるのなら、と言うか」「興味本位に行けるほど、安い事業じゃない」「だ、だよな」

目も合わさず腕組みを崩さないディックの態度に、彼は意気消沈し、押し黙った。大きなジュンヤのため息が静かな操縦室の中で増幅した。

「だが」

それまでもたれていた窓から、ディックは徐に背を離す。口の中で何か呟き、

「行ってみるのは悪くない」

ジュンヤとエスターは目を丸くした。唐突に何かが浮かんだのか。ディックの巨体がゆらりと視界を塞いだ。歩を早め、操縦室を去ろうとする父に、エスターは慌てて駆け寄った。

「環境……データ……、目的は何なんだ。早急に準備を。ハロルドに行ってくる」

もはや娘は眼中になかった。文章にならない言葉とともに、古い白衣を翻して彼は進む。



昔、富士と呼ばれた山の麓。今もひっそり建つ一軒の古めかしい小屋の縁側に、その男は座っていた。古い民話を思わせるレトロな景色にそぐわぬ黒いスーツ、整った美しい顔立ち。三十手前の若い男だ。何かを思い詰めたような気難しい表情で、山の稜線を見つめている。広くどこまでも続く畑と少し時期の早いトンボの群れ、きれいに咲き誇る庭の花たちも、彼の心を満たしてはいない。一匹のトンボが縁側に座っている男の肩を掠めて飛んでいくが、目もくれない。

「来るのか、エマード。私と闘うつもりか」

ぼつり、呟く。そして静かに笑う。

「閣下、ここで本当によろしいのですか。彼らがここに向かう確証はないに等しいのでは」

庭先に、彼を見守るようにして立つ眼鏡の女。大事そうに抱えた書類をめくりながら助言するが、男は自信たっぷりに言い放った。

「来るさ。何のために昔、あんな罠を張ったと思ってるんだ。奴らは来る。そして、絶望を味わうのだ。ローザ、いざとなったら君が頼りだ。うまく……やってくれるね」

「私は……、反対です。閣下の身が穢れるようなことは」

女はやりきれなさそうに視線を斜めに落とした。高い位置から注がれる日の光が彼女の顔全体にはつきりした影を作り、更に深刻さをかき立てた。

「君だけが頼りなのだ」

立ち上がり、延びてくる男の手。歩み寄り、女の清楚な白いスーツごと抱きかかえる彼の優しいぬくもり。ローザの口からは、「おおせのままに」という言葉が自然とついて出る。男の指がそつと彼女の肩を撫で、首筋、そして頬まで伝い、耳の裏まで来て止まる。

「いい子だ」

赤子を騙すように静かに、そして妖しく、男は目を細めた。

列島の殆どは、確かに海に沈んでいた。古い地図を頼りに進んだ先、小さな小島の群れになってしまったのは、昔“日本”呼ばれていた場所。高い山を中心に浮島のように連なってはいるが、かつての領土の全ては見えない。地球温暖化で起きた海面上昇により、透き通りそうなほど青い海の中に全て飲み込まれてしまったのだらう。

ESの球状飛空艇は小さな生命反応の集中する、列島の中心に着陸した。そこはちょうど大きな山の麓。付近から何らかの微弱電波も発信されている。大戦以降核の冬が訪れ、全ての生物が死に絶えて死の大地になったと伝えられたが、現実は違っていた。美しく広がる大自然、原始世界のような無垢な姿で自分たちを出迎えてくれたのだ。その驚愕は、ドームから脱出し初めて星の姿を目の当たりにしたときから始まっていた。飛空艇の乗組員全員が違和感を覚えたこの事態には、普段は鉄仮面を決め込んでいるディックも驚きを隠せなかったようだ。自身を中心に調査隊を組み、島に降り立とうと、着陸前から準備を進めていた。

ドーム脱出の際、どんな環境でも船外活動できるようにと予め用意しておいた調査用の機器をハッチへと運ぶ。防護服、小型酸素ボンベを身につけ、計測機器やサンプリングのためのキットをエアバイクの座席下、収納部へと詰め込んでいく。まるで宇宙にでも突入しそうなその装備は、見た目で安全そうに見えても数値的にどうなのか、はっきりとした確約がとれないための予防措置。ドームや飛空艇の中で保たれている酸素濃度との差、放射能や危険物質残留の有無など、安全性に問題がないかわからなければ活動できないためだ。念には念を、数人の男たちがディックの指示で装備のチェックをする。

ハッチから搬入路へ抜けるドアが閉められ、ハッチ開放の警告ア

ナウンズが廷内に響き渡った。外気遮断のための風除エリアで、静かな起動音とともに空気中の酸素を取り込むバイクのモーターがぐるぐると回り始めた。調査に向かうのはディックとハロルド、整備士のロックとバースの四人。

「中年二人と若者二人、バランスは微妙だが、お互いカバーして早めに調査を終わらせないとな」

ハロルドの声かけで少し場が和み、緊張しきりの整備士の二人が引きつり加減で少し笑う。

「調査なんて、ムダじゃないかって思うくらい、気持ちよさそうな緑色ですけどね」

普段はあまり聞こえてこないバースの丁寧語は、ディックが目の前にいるからだろう。ハロルドやロックの前ではもつとざつくばらんな年少者も、流石に気が引けているようだ。

「バースがそう思っても、数値として示されてみないと何とも言えないぜ。放射線は特に目に見えないから。何もなさそうだ、大丈夫だろうってのが、一番怪しい。だから行くんだろうが」

先輩整備士のロックが赤い髪をメットに収めながらバースを睨み付けた。言われたら、「まあ、そうっすけどね」と顔をひん曲げて誤魔化すしかない。

「さて、準備は出来たか」

互いに目で合図し、バイクに跨ろうとしていたときだった。

封鎖していたはずの風除エリアのドアが、突如左右に開き始めた。

「おい、誰だ、勝手にドアを開けたのは」

ディックが声を荒げる。搬入路側のドアの隙間に人影が。

「今、ハッチを開ける警告アウンズが流れただろう。危険だ、早く封鎖しろ」

怒鳴り声に、最年少のバースが慌ててドアに駆け寄った。風除ドアの開閉ボタンは搬入路側と風除エリア側、それぞれの壁にあるのだ。全部開ききる前にと、重たい防具ごとバースは必死に身体を動かした。彼の手が開閉ボタンに届くか届かないのうち、今度は操縦

室からの遠隔操作でハッチが少しずつ上方方向に開き始めた。

「ちよつと待て、操縦室、ハッチを閉める……つて、聞こえないか。

「ディック、ハッチと風除ドアは連動してないのか」

ハッチから船内に吹き込む風、それは吸い込んでもよいものなのか。成分調査も終わってないのに勢いを増して流れ込んでくる。四人は防護服を着ているから良いものの、他の乗組員は、そしてそこに立っている人影はと思考が巡る。汗を滲ませ、伸ばしたハロルドの手がハッチ横に設置された緊急封鎖ボタンに触れる。

「事故防止のために、わざと連動させなかつたんだよ」

防護服のメットのの上からもしやくしゃと頭をかきむしる動き、悔しそうにハッチを睨み付けるディックの視界の外で、バースのエアバイクが突如動き出した。

「あ、ちよつと、ちよつと待ってよ」

風除ドアのボタンのそばで慌てるバースの少し高い声。知らぬ間に、黒い人影が風除ドアの隙間をすり抜けていた。

「誰だ」防具で視界の塞がったディックにはその影の正体は見抜けなかつたが、

「待て、ジュンヤ！」ロックの叫び声で誰だか承知する。

ジュンヤと思しき影はそのままバイクに跨り、締めかかったハッチの隙間を滑るようにして抜けた。一瞬の出来事に目を奪われ息を呑むうちに、ハッチが閉じていく。

ジュンヤはそのまま、森の中へと消えていった。

「あんの馬鹿野郎！」

再度閉ざされた風除エリアで四人は頭を抱えた。防護服のヘルメットを投げ捨て、ハロルドはただただ悔しそうに頭を両手でかきむしっていた。

俺がバイクから離れたばかりにとバースは嘆いたが、多分、そこにいたら誰だつてそうしていた。彼だけを責めることは出来ない。「いや、悪いのはこの俺だ。ドア連動もそうだが、あそこであんな話をしたばかりに」

ディックはむさ苦しい防護服の襟を軽く外し、メットをバイクに置いて壁により掛かり思索していた。相も変わらず難しそうな顔で偶にあごをさすり、何かを呟く。と、エアバイクのハンドル横にあるパネルを覗き込み、なにやら操作を始めた。

「何か思いついたのか」

ハロルドが尋ねると、

「ああ、互いの位置が把握できるように追跡装置を装備していたことを思い出してな」

彼はそこに浮かび上がった画面を指でタッチする。方位のみを表した単純な地図、そこに光る赤い点が四つ。うち一つが徐々に北へと動いていく。

「移動している。呼吸するには十分な酸素があると言ったことか。だが、汚染の程度が把握できなくては意味がない」

「しかしこのままジュンヤを放っておくわけにもいかないだろう。」

ディック、成分検査を早急に済ませてジュンヤを追おう」

## 11・隠された何か

調査なんて必要ない、根拠なくそう思ったのだろうか。ジュンヤの乗ったエアバイクは風を切って森の奥へと進んでいた。空気を目一杯吸い込む。身体全体に清々しさが広がっていく。まるで羽が生えたかのような軽い気分には彼は酔いしれていた。

彼の目に、ある光景が浮かんだ。それはこの島で一番大きな山。美しい錐の型の、薄絹を纏った山。ジュンヤは目の前に広がる山々と記憶の中に潜ませた景色を対照させた。そして頷き、バイクを走らせる。何かを確信したように、エンジンを吹かす。多分ここに違いない、この島のこの辺りに違いないと、言い聞かせた。行かなければならない、そんな衝動に駆られていた。

眩しいくらいの緑がジュンヤを山の上へ、上へと案内する。彼の視界にあるのは緑の間から垣間見える、記憶の中と同じあの山だけだ。かさかさと肌に当たる葉っぱ達も、車体に絡みつきそうな蔦や野草達も、今の彼にはどうでもよかった。大木の間をぐんぐんとすり抜けていく。

坂を登りきると、広大な農地に出た。見渡す限りの畑。ジュンヤは見たこともない野菜たちの群れに興奮する。

「す、すごい。まさか地球にこんな素晴らしい景色があったなんて……！」

ドームの野菜工場で生産されているものとは違う、新鮮な匂いがある。空気がいつそうおいしく感じられ、思わず生唾を飲むが、ジュンヤはそれを横目に、またバイクを走らせた。

人の気配のない畑は、何ヘクタールにもわたって続いている。農地整備用の人型ロボットらしきものたちがあちこちで作業し、水をやるスプリンクラーの音がかすかに届く。きゅうりやトマト、キャベツ……。どこにでもあるいつも食べているはずの野菜たち。大量のそれらは、ジュンヤの目にはとても奇異に映っていた。

数分進むと、目線の先に小さな小屋が見えた。

「あれだ」

ジュンヤはいっそうスピードを速め、そこへ向かった。

空气中、地中の残留放射能、異物等を精密検査する。調査員が飛空艇の外へ出てサンプリングを行い、廷内に設けられた小さな研究室で分析が完了するまで、数十分。エアバイクを奪って姿をくらましたジュンヤの様子も気になるが、動きを止めることなく北へ移動していることからして、今のところ異常はないと思われる。

実際、地球は観戦に破壊され尽くしたと 死の世界になってしまったという政府報道、衛星写真は全てまがい物だったのかも知れない。自然の回復力のすさまじさ。完全に、予想外の展開だ。

「分析の結果が出たが……、つまり、その。防護服など一切いらない状態であると、そういうことらしい」

結果を印字した紙で扇ぎながら、防護服を脱ぎ捨てたハロルドがハッチへ帰ってきた。風除ドアを半分開けて、分厚い装備のまま壁際に腰を下ろしていたディックとロック、バーズは、大きくため息をついた。

「ハル、つまりそれって、自然が元に戻ってるってことなの。それとも、最初から核戦争なんてなかったってことなの」

ロックが防護服のチャックを思い切り下ろしながら尋ねてきた。

「前者なんだろうが……、詳細はちよつと」

しどろもどろに答えるハロルドは、目でディックに助けを求めた。

「戦争は、あつた“らしい”」

すぐるような目に応えたのか、重い腰を上げ、装備を外しながらディックが話し始めた。

「このアジア地域は中東とともに激しい戦地となったと文献にはあった。所持していた核弾頭ミサイルの撃ち合いになったとか。原発が攻撃され、放射能まみれになったとか。だが、どこまで事実

なのか、我々が知ることは出来ない。旧ソ連のチェルノブイリ原発の放射能は、その付近数百キロに被害が及び事故後も放射線が観測され続けていた。石棺で事故原発を囲っても、簡単にそれは遮断されなかったという。記録は大戦直前のものでしか確認できなかったが、少なくとも事故から百年以上は人間が住める環境には戻らなかった。三次大戦から約五百年、それだけ経てば地球は回復できるのか。政府はこのことを知っているのか。何か、嫌な予感がする」

脱ぎ終えた防護服をエンジンの止まったエアバイクに乗せ、操作パネルを確認する。赤い点が停止していた。胸騒ぎがいつそう大きくなった。

「ハッチを開放しよう。確か、微弱電波を感知していたはずだ。その発信源を特定した方が良い。もしかしたら、政府も一枚噛んでいるかも知れん」

いつもの白衣を手荷物から取り出し、さっと羽織ると、ディックは目配せしてハロルドをうなずかせた。

食堂でメイシイの手伝いをしていたエスターが騒ぎを聞きつけたのは、ジュンヤがいなくなってから何十分か経過してからだった。ミーティングルームで着地直後に聞いた話では、ディックら四人が早々に調査を開始し、調査結果が出次第、アナウンスで知らせてくるはずだった。地面に直接降り立つことが出来るのを皆楽しみにしていたのに。一向にアナウンスが入らないばかりか、どうも船内が騒々しい。

「ジュンヤが、勝手にハッチから飛び出したんだ。エアバイクを奪って」

ぼやきながら食堂に入ってきたバースとロックの言葉に、エスターとメイシイは息をのんだ。



「それ、本当なの」

二人は包丁を持つ手を止め、カウンターの外へと思わず飛び出した。

防護服を脱いだばかりでシャワーもまだだったバースたちは、自分等の身体が汗臭いのを気にして少しのけぞったが、エスターは構いも無しにロツクの遅しい胸板のすぐそばまで迫った。彼女の血の気の引いた顔に、生唾を飲む。

「エンジン吹かせてこれから出発しようとしていたところを、さっさと持っただけで済んだ。こっちは防護服で動きにくかったし、視界も狭かった。言い訳になっちまうけど」

Tシャツの襟からエスターの胸の谷間が見える。目のやり場に困り、そらした視線がバースと合った。羨ましそうに睨んでいる。

年上のロツクにエスターがすがったのがよほど悔しかったのか、バースは間に割りこむようにして話に割り込んだ。

「ジュンヤってば、何の防具も着けずにいつもの格好で飛び出したんだよ。結果的に、残留放射能も毒素も見つからなかったから良いものの、もしもの時はどうするつもりだったんだろうな」

「ごめんね、迷惑かけて。どうしたのかしら、うちの息子は」

少し後ろから話を聞いていたメイシイが、ロツクたちに深々と頭を下げた。「メイが謝ることじゃ」とロツクが声をかけても、しばらく頭を上げようとしない。

「原因は大体わかってるの。私がきちんと言い聞かせていれば、こんなことにはならなかったかも知れないのに。中途半端に誤魔化そうとしたからよ。本当にごめんなさい」

そう言ってまた深々と頭を下げる。

メイシイの神妙な様子、出発前にやはり何かあったのだと、エスターは確信した。ジュンヤもそうだ、急に誰も知らないような言葉を口に出したりして。隠している。何かを隠している。おおっぴらに言えない何か、それによってジュンヤが心を乱し、勝手な行動を取ってしまったんじゃないのか。

いつも気丈に振る舞っているジュンヤの心が、ガラスのように脆いのをエスターは知っていた。シロウが亡くなったあの日も、ガタガタと肩を震わせ、部屋の隅でうずくまるのを自分が抱きしめたのだ。声を殺して泣くような人だ。私が支えてあげなくてはと、彼の方が三つも年上なのに思ってしまった。

居ても立ってももらえなかった。

気がつくと、彼女は走っていた。食堂を飛び出し、螺旋階段を下り、長い通路をハッチ方向へ。カッカと靴底が鳴る。廊下中に彼女の焦りを響かせる。急にどうしたんだとロックとバースが叫んでいる。何人かが通路で声をかけた。しかし、彼女には聞こえなかった。ただただ、ジュンヤの元へ行きたい一心。

風除ドアは全開だ。これからどこかへ出発するつもりなのだろう、エアバイクのエンジンが三台ともかかっている。

「あれ、エスター。何して」

ハロルドが、一人惚けて壁にもたれていた。微弱電波の発信源特定しようと操縦室に戻ってコンピュータと睨めっこしているディックの指示で待機中だったのだ。金髪を振り乱し血相を変えて向かってくる彼女の姿に、彼は驚いた。啞えていた煙草を胸ポケットの携帯灰皿に押し込み、おいと右手で制止の合図。しかしそれより少し先に、

「ハル、ゴメン」

彼女は一番手前のエアバイクのハンドルに手をかけた。さっと身軽にまたがり、申し訳なさそうにゆっくりと瞳を閉じるエスター。華奢な身体で無骨なバイクを抱え込むよう。ハンドルを一捻り、バイクの排気音が急激に高まり、あたりの酸素をいっそう多く取り込んだ。

風圧でよろめくハロルドは待てと声をかけるので精一杯。本能で衝突を避け、壁により掛かった。そして彼が瞬きをしている間に、彼女はバイクに乗ってハッチを潜り、やはり森の中へと姿を消してしまっただった。

## 12・遭遇

「ジュンヤだけならまだしも、エスターまで姿を消したとはどういうことだ」

それまでエアバイクのエンジン音だけが聞こえていた風除エリアに、ディックの低い声が響き渡った。静かな凄味にハロルドの血の気が引いた。心臓に悪い。銀縁眼鏡の奥で見開いた青い瞳は、その中に全てを飲み込もうとしているかのような黒いものを潜ませている。ただでさえ二メートルの巨漢、白衣の下に隠した筋肉がぴくりぴくりと音を出すのが聞こえてくる。

「す、すまん。あんまりにも突然なことだ」

ここまで言ったあとでハロルドは、怒号がくるのを確信した。

「言い訳など聞きたくもない」

やはり、思った通りの台詞だ。これでゲンコツの一つでも飛んできたらすつきりするようなものの、そこで敢えて何もしないのが彼流なのか。ディックは怒りで震えるのをぐっとこらえ、大きく一つ唾を飲み込んだ。

「幸い、エアバイクには追跡装置が付いてる。エスターも操作パネルを確認して、ジュンヤのいる北方角へ向かっているようだ。俺たちもそこへ向かう。但し、微弱電波追跡の後でだが」

「ディック、その、電波の発信源は特定できたのか」

話題が変わったのにホツとして、ハロルドは一步後ずさりした。

「まあ、大体の位置はな。ここから東方向へ二キロ程度直線で向かった先に、何かがあるようだ。行って見ないと何とも言えないが。四台あったエアバイクも今は二台きり。俺とお前、二人で行くしかないようだな」

野菜畑を抜けた先、森の少し手前に古い小屋が建っていた。ドー

ムにはない建物だ。その殆どが木で造られ、雨風に打たれて所々朽ちかけている。屋根瓦は特に印象的で、強い日差しを跳ね返し、黒光りしていた。そんなに大きな建物ではない。ネオ・シャンハイでジュンヤたちが住んでいた家より、一回り小さいくらいだ。柱に手を掛けると、建物全体がぎいと鳴った。ジュンヤは慌てて手を離す。酷いあばら家だ。築何年、そんなことを考えてしまうほど古めかしい。木の匂いをかぎながら、恐る恐る辺りを見回す。家の周りに生えた腰丈ほどの立派な垣根。内側には背の高い木が何本か散在し、その根本にひっそりと咲く小さな色とりどりの花たちは、突然の来訪者を警戒するようにじつとジュンヤに花弁を向けていた。

「確か、ここで間違いないはずだけど」

ジュンヤは右手に握りしめていた何かを覗き込み、目の前の小屋と見比べた。四角い紙切れのようなもの。きつく握りすぎて角までシワになっている。

家の裏側から表側に向かって互い違いに埋められた平べったい石は、細かい砂利の上に浮き出てるまるでジュンヤを庭へと誘導するかのようが続いていた。

「誰か住んでるのか……」

思わず口から出てしまうほど庭は手入れが行き届いている。一歩、また一歩。主の分らない庭に足を踏み入れる。

「まさか、こんな所に人なんて」

そこまで言ったとき、ジュンヤの肩に何かが触れた。とっさに手を振りほどき、半分振り返って身構える。すうーと汗が引いた。

「そんなに驚かなくてもいいじゃないか」

若い男の声。立っていたのは、自分より少し年上の青年だった。黒いスーツを着込み、長めの黒髪が風に揺れている。彼はきりりとした瞳を細くして、優しく微笑むと、ジュンヤにこう言ったのだ。

「ようこそいらっしやい。君、そのメモの通りここに来たんだね」

淡々とした台詞に、ジュンヤの心臓が大きく反応した。脈拍が上がる、顔が火照る。ジュンヤの右手は、思わず四角い紙をくしゃく

しやに潰した。無意識に右手を隠す。

「何で、メモのこと知ってるんだよ。お前……何者だ」

「何者？　　そうだね」

黒い男は少し思案し目をそらすと、やがてにつこりと笑ってジュンヤに向き直った。

「君の、お父さんの知り合いさ。ESのジュンヤ・ウメト君」

予想だにしない応えに、ジュンヤの胸は更に高ぶった。紳士的なその男の正体も知らず、ジュンヤは招き入れられるがままに、彼の後について行った。

キラキラと木々から漏れる日差しが、古めかしい小屋の縁側を照らしている。黒いスーツを着た正体不明の青年を警戒しながらも、ジュンヤは台詞の意味を知りたくて、誘導されるまま縁側の座布団に腰をかけた。男は靴を脱ぎ、そこから奥へ進んでお茶道具を運んできた。「どうぞ」と客人に緑茶を差し出す。

「あの」

その一言がジュンヤの精一杯だった。

男は彼の心を見透かしたようにまた薄く笑い、ジュンヤの少し後ろに正座すると、おどけたように話し始めた。

「ごめんごめん、名乗りもせず。僕はリー。ティン・リー。初めまして、ここにはお客なんてめつたにこないもんだから、つい面白くて勝手にこんなこと。あつかましくて申し訳ない」

出されたお茶を軽く会釈をして啜る。……うまい。ドーム大量生産品の安い茶じゃないなとすぐにわかる。

「まさか本当に来てくれるとは思わなかったよ。シロウの息子さんがさ。ところでお父さん、元氣？」

「父は、三年前に亡くなりました」

ジュンヤの一言に、リーの言葉が詰まった。気まずそうにため息をつき、

「彼と最後に出会ったのは、僕がまだ君より少し若かった頃だからね。……そうか、亡くなったのか。世話になったんだけどな」

白々しく話し続けるのを、ジュンヤは不審に思った。湯飲みをそつと縁側に置き、身体を少しひねってリーの正面を向いた。

「あなたみたいな若い人が、父と知り合いだなんておかしくないですか。第一、こんな所に家を持つてるような人と、父が関わり合っていたとは思えない。知り合いだなんて言い出すから一体どんな人間なんだろうと思つて付いてきたけど、本当は何者なの。何で俺が写真裏のメモを見てここに来たこと知つてんの。なんか、おかしいよ」

「なあに、おかしくなんてないさ。そのメモを渡したのは、僕なんだからね」

一瞬、心臓の音が止まりそうになった。

聞き直そうとしたジュンヤを無視するように、リーはふと立ち上がると、庭へ降りた。小屋の陰へと向かっていく。ジュンヤは彼を目で追つた。どこか得体の知れない寒気のようなものが感じられ、無意識に半袖から出た両の腕を擦っていた。

数分、リーは戻らなかつた。その間にジュンヤは、悶々とリーの正体を考えていた。無理矢理ポケットに隠した紙切れをもう一度取り出し、色あせた山の写真とその裏の手書きメモを何度も見直す。

山の形は紛れもなく、この小屋から撮つたものだ。風景と重ね合わせて間違ひなかつた。部屋に残してきた数枚の写真にも、この小屋が写っていた。一枚だけ、しっかりと書かれたメモ。全ての写真裏にサインが残されていたが、これにだけ手紙のようなものが添えてあつた。

『もし、君がドームを抜け出す手段を得たら、僕と島で会おう。写真に写したあの小屋で待っている。自由を勝ち取るんだ』

この下にサインのようなものがあるが、ボロボロで見えない。

写真は、シロウの形見。誰にも見せず、隠してきた宝物。将棋とともに、父が残してくれた自分の祖先“日本人”とやらに繋がっている、大事なもの。今まで誰にも話したことがない。

砂利を踏む音がした。リーが戻ってきたのだ。

ジュンヤは慌てて写真をズボンのポケットに押し込んだ。

「何だよ、連れがいるなら最初からそう言ってくれよ、ジュンヤ。もう一人分用意しなくちゃ」

…… エスターだった。リーに手を引かれて恥ずかしそうにうつむきながらこつちにやってくる。ジュンヤの中に、少し、もやもやしたものが渦巻いた。

「ごめん、ついて来ちゃった」

彼女の顔が、風に揺られた金髪の影で火照っている。それは自分に対しての申し訳なさから来るのか、それとも、年上のいい男に手を握られたからなのか。そんなこと、訊かなくても分かっている。だって、リーは自分の何倍も紳士で、カッコいい。ジュンヤは勝手に自分の中で結論付けた。

エスターは促され、リーとジュンヤの間に腰を掛けた。小さな小屋の縁側で、更に居場所がなくなったと、ジュンヤは思う。

「はは、大丈夫、彼女をとったりはしないよ」

あどけなく笑うリーが恨めしい。

更に、更に気まづくなった。

「もしかしたらと思うけど、一つ聞きたいことがある」

ジュンヤは気まづいついでの、一番訊きたかったことを 最も

恐ろしい質問を、リーにぶっかけた。

「もしかして、いや、まさかと思うけど、あなたは“政府の人間”、じゃないのか」

エスターを挟んで左側、ちらと目を向け反応を見る。

「おかしなことを言う」そしてリーはまた笑った。

「政府、政府とはちよつと違う。かといって、君達みたいなアナキストってわけでもない。そういう存在だよ、僕は」

リーの曖昧な答えに、ますます不信感が募った。

### 13・最悪の事態

ハロルド・スカーレットの脳裏にあったのは、絶えず聞かされていた昔話。この星は病んでいる、ドームの外は死の世界、灰色の大地だということ。ところが、そこにあったのは美しい自然であった。夢なのか、それともあの語り草が間違いだっただけなのか。

ディックと二人、東に向かっていった。小型の簡易レーダーで特定した電波の発信先へ。そこに、この不可解な大自然の謎があるかも知れないとディックは言う。政府の関与を予感したのか。または、全く別の原因を示唆しているのか。

太陽があまりにも眩しい。エアバイクで森の中を進んでいるからこそ気持ちいいが、この炎天下を歩けと言われたら少し考えてしまふ。年齢を理由にしたいくはないが、ドーム育ちの身体ではこの直射日光には耐えられそうにない。優しい風が頬をなぞる。小鳥の鳴き声が、木々のざわめきが、感じたことがないくらい気持ちいい。調査なんかより、ここでゆっくりバカンスを楽しみたい、そんな気さえた。

季節は夏の終わり。日差しは確かに強いが、風は冷たい。ドームの中には季節なんてなかった。ただ空しげに時間が過ぎていくだけ。カレンダーがめくれたからといって、これといって何かが変わるわけでもない。現実に戻りたくない、と思うのは仕方のないことなのかもしれない。そう思うとハロルドはふうと息をついた。

一方、隣を走るディック・エマードはハロルドとは全く違うことを考えていたらしく、表情が険しい。飛空艇を出てから、しきりに辺りを見回し、難しいことを考えながらエアバイクを運転しているように見えた。

「この島は、何かがおかしい」

バイクの静かな起動音にかき消されそうなほど小さな声でディックが呟いたのを、ハロルドは逃さなかった。



「おかしいって?」

「死の大地……、死の世界……、いろんな形容詞をつけて、俺達をドームに縛り付けていた政府。誰ひとり何百年もそれに気づかず、ずっとやつらの言いなりになってドームを出なかつた。いざ出てみれば防護服なんて要らない。ネオ・シヤンハイの環境と比べるまでもなく、非常に良い、良すぎる。もしかしたら、大戦前よりも良いかもしれない。大気自体がバランスを失って毒に犯されているとか、土には放射線が染み込んだままであと数百年は元に戻らないとか、あれはただの昔話だったんだな。人間の力が働かなければ、この星は自分の力で回復できるってことなんだろうか。そしてこの島は、その答えを強調するための場所としてわざと設定してあったように感じられてならないんだ」

所々風の音で聞き取れないが、異常な事態に彼も疑問を抱いているのは確かだろうだ。

「強引な“自然保護”目的、なんてことは」

「まさか……ないだろ、政府に限って」

ハロルドはディックの唐突な見解にハハと笑った。が、ディックは厳しい顔で答えた。

「分からないぞ。奴等がやることにはそれなりに理由があつたからな。信じたくはないが、意外に自然保護者なのかも知れん」

「冗談だろ」

「そう思うのが凡人でもんだ」

インテリ科学者は気に入りの白衣を翻して更に山道を進んだ。思わぬ問答にスピードを緩めてしまった厳つい中年男は、慌てて彼の後をつけた。

森を抜けた先、小高い丘に奇妙な建物がある。ディックとハロルドは、天文台のような外観の建物を目を丸くして見上げていた。てっぺんには数個のアンテナらしきものが、あちこちの方角を向いてつけられている。あたりはうっそうとした森なのに、そこだけきち

んと草が刈り取られ芝が張られ、別世界のようであった。

「なんとまあ、びっくりしてやつだ。電波の発信源はここで間違いなさそうだな。ディック、行ってみよう」

白壁のドーム型建築物の中へ進む。荒らされた雰囲気も、長時間放置されたような跡もない。空調まで効いている。所狭しと置かれたコンピュータ機器の冷却のため涼しくしているのだろう。明らかに誰かが使用している、今も動いている証拠だ。

二人、思い思いの場所へ散って探る。どう見ても最新式の機材だ。数百年誰も訪れていないはずの島にあるべきものじゃない。それは、機器に詳しくないハロルドにだってすぐにわかる。

「これが、何の施設なのか、解明するには時間がかかりそうだな」ハロルドは思ったよりも広い室内をぐるっと見回した。配管や配線が天井にまで張り巡らされ、計器のランプが付いたり消えたり。何台かのパソコンのモニターには、グラフが。

「「収穫量」「生産」……。なんだこれは。野菜、作ってるのか？」「農業用ロボットの配置図」なんてのもあるぞ」

仰々しい建物の割にずいぶん平和な内容だな、これならと顔をほころばせた。飛空艇で感知した微弱電波はきつと作業ロボットの管理のためのものだ。しかし、誰が一体何の目的で。

夢中でモニターを覗き込んでいたハロルドの後ろで、ディックが床にうつくまり何かを必死に調べているのが視界に入った。

「どうした、なにかあったのか」  
踵を返して足下を覗き込むと、床には。

「空間転移装置」  
「だな、間違いない」

床に描かれた直径二メートルの円の中、床下にうつすらと集積回路が透けている。

見覚えがあった。昔、ハロルドが政府で働いていた頃によく見かけたものだ。各ドーム間の荷物輸送、搬入のため施設に数個、並べて設置されていた。大きさ質量問わずどんどん運べるこのシステム

がなかったら今の暮らしはないと、当時の上司が耳が痛くなるくらい喋っていたものだ。懐かしいが、同時にそれは政府の科学技術の象徴のような忌々しいもの。自分たちもドームからの脱出にその技術を利用したとはいえ、あまりお目にかかりたいものではなかった。ディックは指で回路をなぞり、眉間にしわを寄せてハロルドを見上げた。

「埋め込み型のこの装置は俺が政府で開発したものだ。広く汎用されているような代物じゃない。一台あたりの経費、技術を考えれば、もともと大量生産なんてできっこないようなものなんだ。ところが、これはそれを模してある。しかも、改良されている」

「と、いうことは？」

「恐らく、技術を応用できる人間。普通の科学者じゃない。きっと、それなりに権力があり、改良型の図面をすぐに引けるような人物。」

もし間違いないとしたら、“あの男”か……。いや、まさか」

彼は思い出したくない何かを思い出したかのように、額を両手で押さえ込み、背を丸くした。その様子が奇っ怪で、ハロルドは思わず足を引っ込める。ディックがはつきりものを言わずに何か考え込むようなときは近づかない方が良い。仲間内でも暗黙のルールになっていた。

「さてと、他には」

白々しく余所を向いて別のものを調べようとしたハロルドの目は、ふと壁に埋め込まれた少し小さめのモニターを捉えた。パソコンや計器の間を抜け、配線を飛び越えて、彼はそのモニターのすぐそばまで行き、ぐつと覗き込む。

監視用のモニターなのだろう。様々な景色が数秒単位で切り替わり、様々な角度から島の景色を映している。森、畑、ESの飛空艇、作業ロボットに無造作に乗り捨てられたエアバイク。小さな小屋、その庭、人影。

「あれ。ここにいるの、ジュンヤとエスターじゃ」

気の抜けたようなハロルドの声に、ディックはびっくりと反応し、

顔を上げた。

二人がどこかの小屋の縁側にいて、誰かと話している様子が上から見下ろすような角度で撮影されている。一緒にいる見知らぬ若い男、ハオルドには人の良さそうな好青年に見えた。

「なんだ、あいつら。そんなところにいたのか。のんびりお茶なんか飲みやがって。まあ、危険な場所じゃなさそうだし。手始めにここに来たのは正解だったかもな、ディック。見つかったならそれでよかったじゃないか。あとは日の落ちる前に、回収に行かないと……」

「 そんな、楽観視出来るような状況じゃないだろ」

軽い気持ちで喋ったハオルドの声に被せるように、ディックはその低い声を張り上げた。立ち上がり、ハオルドのいるモニターの方へ向かってくる。

「よく考えなくても、わかることだ。誰もいないはずの島で、なぜそんなことが出来る。茶、だと？ 誰がそんなものを。この施設の関係者か」

ぐいとディックの大きな腕が、ハオルドの左肩を押しつけた。無理矢理モニターの真ん前に陣取ると、目を鋭くして画像を睨みつける。パツと画面が切り替わり、エスターとジュンヤ、それに二人に挟まれた人物の顔がアップで映し出されると、ディックは突然、目の前の机を両手で勢いよく叩き付けた。

あまりの音にハオルドは驚き、恐る恐るディックの顔を覗き込む。「さ、最悪の事態じゃないか……！」

そう口走ったディックの形相は、ハオルドの知っているどの表情よりも怒りに満ちていた。鬼のように顔中に深く濃いシワが刻まれ、目頭がびくびくと脈を打つ。肩を震わせ、血管という血管が全て浮き出、息が荒い。彼はその画像の中の何かに怒りを覚えた、そして怒りのあまり、我を忘れてかけている。

「な、何が最悪なんだ、おい！」

ハオルドの言葉は最早耳には入らない。

彼はぶつぶつ呟きながら、その場にあったパソコンデスクに向かい、プログラムをいじり始めた。こうなっては誰も止められない。

前にも同じようなことがあった。確か、シロウが死んだときだ。泣き崩れるとか、そんなもんじゃない。もつと何か、仲間にも言えない何かを胸に抱え込んでいる。多分そうだ。彼は言葉で表現できる程、出来た人間ではないらしい。何があったのか、詳しいことは誰も知らない、多分、彼以外誰も。誰にも言えない、相当辛いことがあって、その上で政府を裏切った。きつと今回のこれも、以前と同じ。“あの男”と彼が呼ぶ人物が関わって……。

と、そこまで考えると、ハロルドはハツとした。

「お、おいディック……。まさかとは思うが、か……。彼がそうなのか。あいつらがのんきにお茶してる相手が」

「そうだ、だから言っただろう。最悪の事態だった」

「だって、まだ若い。お前が言うような人物にはとても……」

ドン、という鈍い音が狭い部屋に響いた。思い切り蹴り飛ばされたデスクの脚が、ディックの脚力に耐えかねてグラんと揺れる。

「誰もいないはずのこの島で二人が出会ったのは、紛れもない“あの男”。散々俺達を、俺を苦しめた、諸悪の元凶“ティン・リー”だ！」

「な、何かの間違いじゃないのか」

「間違い？ 何を間違うって言うんだ。この十七年間、ずっと待ち望んでいた。あいつを殺すチャンスをつかっていた。善人面で端正な奴の顔が、真っ赤に染まるのを、ずっと待っていた。……逃しはしない……」

ディックはすくと立ち上がり、空間転移装置の円の中央に進んだ。青白い光が円に沿って立ち昇り、彼の体を包み込んだ。すうーっと、ディックの体が透けていくのを見て、ハロルドは慌てて光の円柱へと飛び込んだ。

## 14・対峙

小さな日本家屋に注がれる日の光が心なしか陰って来る。山頂から広がった薄い雲が、少しずつ青空を蝕み始めたのだ。風は澱み、湿っぽい空気を孕む。先ほどまでの青空は嘘のように、いつの間にか曇天へと姿を変えつつあった。

「僕はこの島の研究をしてるんだ」  
と、リーは切り出した。

傍らに腰掛けたエスターとジュンヤは、そのまま話に引き込まれていく。

「この島に辿り着いたのは偶々でね。とある天才科学者が残っていた、ワープ装置の誤作動が原因だった。何十年も、何百年も誰も訪れたことのないこの島に、この小屋やちよつとした施設みたいのが残されていた。もしかしたら生存者がいる可能性も、とも思っていたけど、“僕”がここに来たときには、誰もいなかった。この島では驚くべきことに生態系が戻りつつあり、僕はそれに深く興味を抱いた。きつと、核の冬を越えて長い間人類が関与しないことで、自力で再生したと思われる。また、この島の存在は今忘れられているが、調べていくうちに、過去にはある程度重要な国があったことも分かってきた」

「それが、“日本”か」と、ジュンヤ。

「そう、“日本”だ。ここはかつて、南北に連なる列島だった。そしてそこには、一億人以上の人間が住んでいた。が、第三次世界大戦の末、滅んでしまったか、ネオ・シャンハイに移り住んだか、どちらかだと思われる。多分、君はその末裔だろうね、ジュンヤ。明らかに君には“日本人”の血が流れている。それは“ウメモト”という、明らかに日本人じみた姓からもわかる。君のお父さんも、その点に関してものすごく興味を持ってね」

「それで、写真を送ったのか」

ジュンヤは言ってギロリとリーを睨む。

写真、の一言に状況を掴めないエスターは二人の間で目を泳がせた。

「そう。約束をしたんだ。僕はアナーキストをここへ連れてこられるような立場にない。君がもし、何らかの手段を得てドームを出ることが出来たら、この場所で落ち合おうと。何枚もの写真と、メッセージを添えてね。君の持っているのは、その一枚。だろ、ジュンヤ」

リーはジュンヤから答えが返ってくるのを待った。

ジュンヤは呆然と、リーの目を見つめていた。深い闇のような瞳の奥、何を考えているのか、一体何者なのかわからない彼の会話にどンドン引き込まれているのが自分でもよくわかる。だが、そこからどうやって抜け出したらいいのか。全て見透かされている。

記憶の糸を手繰れば手繰るほど、彼の言葉と父の言葉が一致していく。

『これは母さんにも秘密なんだけどな……』

優しい父が、いたずらっぽく笑ったのを思い出した。書斎に隠した小さな箱、その中に眠っていた色あせた写真たち。写真自体にそれほど興味はなかったが、父と自分だけの秘密というフレーズが気に入って、ジュンヤは父が亡くなったあともずっと大切にしてきた。『昔、世話になったある人からいただいた写真でな。ここが俺達のルーツ、日本なんだ。もし行けるなら、オレはこの島に行ってみたいと思ってる』

頭をかきむしり、必死に頭を整理する。非現実なほどに一致していく言葉たちは、一体何を意味するのか。ジュンヤは身震いした。ポケットの中の写真を、破り捨ててしまいたいくらい、混乱し始めていた。

沈黙が何分か続く。ジュンヤの様子がおかしいのは、エスターにもよくわかった。それは飛空艇の時に感じたそれとは違うもの。

「必然、なのか」

と、ジュンヤは観念したようにぼつり呟いた。

「父さんの残した写真と言葉に、俺がどうしてもここへ来たいと思っってしまったのも。あなたがこうして俺と出会うのも」

いつの間にか、庭全体が日陰になっていた。ぼつぼつと音を立てて雨粒が落ち始める。雨粒は庭を包み、日の光で輝いていた花の色さえより濃く際立たせる。

ドームから出て初めての雨なのに、ジュンヤにもエスターにもその感慨に浸るような余裕はなかった。触れたら弾けてしまいそうな張り詰めた空気は、彼らにはどうすることも出来ない。リーという正体不明の青年がその場を支配していたのだ。

やがて雨は激しく降りしきった。雷鳴が轟き、雲に光の筋が走る。空気全体が震え、青白く光った。視覚と聴覚を脅かす自然の変化に、ドキリと肩を震わせたのは、エスター一人。重々しい空気は雷雨さへ寄せ付けないのか。徐々に雷鳴が近づいてくる。光と音の間隔がより短く、雨もいつそう本降りになってきた。土に叩き付ける雨粒が激しく舞う。怖い、雨を運んできた冷たい風のせいだろうか。それとも、両脇の彼らが重苦しい空気を保っているからか。

閃光が走った。

庭の中心部に青い円柱が現れ、足元から徐々に何かが姿を現す。

三人は異様な光景に目を奪われた。見覚えのある着古した白衣をひるがえし、履き潰した革靴で光の柱を抜け、こちらに向かってくる。

「パパ」

エスターが立ち上がる。

ディック・エマードの姿がそこにあつた。乾いた白衣が一瞬で濡れた。もしかくしゃにかき上げたいつもの髪型が雨で崩れ眼鏡に覆い被さると、まるでいつもの彼ではない、別人に見えてしまう。エスターは心臓を突かれた。耳元で激しくなる鼓動、胸が詰まり、息



が出来ない。いつもと違う父親の様子彼女は戸惑った。

光が消えてなくなりそうになると、またそこから見覚えのある影が一つ現れた。ハロルドだ。

「久しぶりだな」

ディックはそう言って不敵に笑った。彼の体全体から、黒いものが立ち込めている。目はしっかりと縁側に腰掛けたリーを捕らえて放さない。

「『久しぶり』？ おかしなことを言う。『僕』 ははじめまして、だけど」

リーは彼の視線を受けても戸惑うことなく、にやりと笑い返した。ハロルドはハラハラして、二人の対峙を見守った。いつ、どちらから仕掛けてくるのかわからないが、明らかに敵対しているからだ。いつでもディックの暴走を止められるようにと、白衣の後方で腰を低く構えた。武器を持ってこないのを後悔する。棒きれの一つでもあれば投げるなり叩くなり出来るが、どうもこの庭、手入れがずいぶん行き届いていてそのようなものは入手できそうにない。雨で足場も悪い。足元に咲く小さな花を見つけ、こんなに綺麗なものを愛でるやつが本当に敵なのかと、疑心暗鬼も隠せない。

もし、ディックの言うように“諸悪の元凶”と称すに値するならば。一刻も早く彼とエスター、ジュンヤを引き離さねばならない。戸惑うジュンヤの顔、エスターの驚き、そこに辿り着くまであと何歩。だがハロルドは、一歩も動くことが出来なかった。ディックとリーの視線の間を縫って彼女らのそばへ向かうなど、不可能に近いのだ。

「こいつに何を吹き込まれた」

雨粒に打たれて、いつそう恐ろしく見えるディック。光を失った庭で、彼の瞳だけがぎらぎらと燃えさかっていた。

「何を吹き込まれたんだ！」

急ぎ立てるディックの声に、エスターはおののき、後退りする。

彼女の目はうるうると涙を浮かべ、現実を受け入れたくないという

気持ちからか、視点が定まっていなかった。

叩き付ける雨の音が、更に場を盛り立てる。雨粒一つ一つが、その場を凝視するかのように長くとどまっていた。

「いやだな、別に何も話してやしないよ」

リーは言ったが、もちろんディックが納得できるはずもなかった。「ジュンヤ、お前はこいつがどんな奴か知って近づいたのか？ エスター、お前は奴の顔を忘れたのか！ 何故隣にいるんだ！」

ジュンヤは言われてドキツとするが、だからと言って、特に返せる返事はない。エスターも同じく視線をうつつかせ、首を横に何度も振る。

リーは薄ら笑った。それまでとは表情を変え、元来の冷たい眼光を鋭くさせる。立ち上がり、両手を大きく広げると、ゆっくり軒下から豪雨の庭へと足を踏み出した。

「彼らには、何もわからないよ。だって本当に、たいした話なんてしてないんだから」

黒いスーツがザツと濡れた。本性を現したかのように、彼のシルエットは更に黒を帯びた。黒い革靴に泥が跳ね、それでも構い無しに歩を進める。

リーが動く。

ディックは無意識のうちに、懐から黒い何かを取り出していた。

「黙れ！ 貴様が如何に卑劣な男か、俺は知ってる。貴様の台詞などに興味はない。減らず口を叩けないように、その喉を打ち砕いてやる！」

黒光りした銃口がエスターの視界に入った。

## 15・雨の衝撃

無骨な手に、デザートイーグルが握られている。何に緊張しているのか、小刻みに震える右手を必死に左手が押さえている。

肩で息をしていた。体中の血管がうねっていた。心音の間隔が異常に短く、奥歯が噛み合わない。見開いた目。顔中を雨が伝っても雨が徐々に体温を奪っていても、どうでもよくなっていった。

怒りのまま向けた銃口の先に、自分が殺したいと思う男がいる。それだけの理由があれば十分引き金を引ける。

「やめろ、こんなところで！ 娘の前だぞ！」

後方で身構えていたハオルドが慌てて止めようと、彼の右腕にしがみつく。途端、彼は巨体を大きく捻り、ハオルドを遠くに投げ飛ばした。地面に染み込み損ねた雨水が、ドロと混ざってハオルドの体中に飛沫をかける。

「だ、大丈夫か？」 駆け寄るジュンヤ。

泥まみれのハオルドは、ジュンヤに抱き起こされながら、悔しそうに歯ぎしりした。

「君らのリーダーはこの半狂乱した中年男なのかい」

リーは鼻で笑って、わざとらしく若い二人に問いかける。聴衆に訴えるような仕草は、ディックを馬鹿にしているようにしか見えなかった。銃口を向けられていても動じる様子は一切ない。飄々とした彼の気配は、熱く煮えたぎったディックとは正反対に落ち着き払っていた。

「ねえ、君達はどうしてそんな組織ににいるの」

向けられた視線と突然の質問に、エスターは言葉を失い肩をすくませた。

少しだけ振り返ったリーの横顔は、さっきまでとはまるで別人。親しみ易さの欠片もなくなった彼に、エスターは激しい違和感を覚えていた。

「どうしてって……言われても」

ジュンヤもまた、言葉を詰まらせた。

「答えられないのに何故反政府組織にいるの。おかしいよね」

リーはニヤニヤしながら、縁側と庭先にいる二人の顔を交互に見渡した。濡れた前髪の隙間から覗いた切れ長の黒い瞳が、彼らを再び釘付けにする。

「やめろ、何を言ってる！」

叫ぶディック。銃をしかと構え、引き金に指を添える。

雨脚がまた激しくなり、彼の低い声はかき消された。暗雲がスピードを速めて庭の上空を西に流れていく。稲妻が会話を一つずつ区切るように何度も宙を裂いた。

「反政府組織“ES”。創始者のシロウは死んだって君、言ってたじゃないか。なのに、今も続いているのは何故。動かしているのはこの男なんだろ？ 本当に、そこにおいて自分のためだと思ってる？」

「……何が言いたんだ」

一方的なリーの言葉に、ジュンヤが噛みついた。唸るハロルドの身体を支えながら、上目遣いにリーを睨み付ける。

この小屋の持ち主だという男の不可思議な存在は、最初から受け容れ難かった。不必要なくらい紳士的な態度も、古めかしい小屋には似つかわしくない高級スーツも、その端正な顔立ちも、全てが嘘くさい。何かの罫かも知れないとわかっていて庭に誘導されたのだ。父と自分しか知らないはずの写真裏のメモ、父の知人にしては若すぎる男。自分の知らない父の姿があつたかも知れないという期待、彼の正体を知りたいという欲望。……結果、このようなことになろうとは。

彼は、ディックが敵対心を持つような人物なのか。敵対心と言うより、殺意と言った方が適当かも知れない。異常なのは一体どっちなのだ。ジュンヤは困惑していた。リーは本当は何者なのか。何のために自分たちにそのような言葉をかけてくるのか。何故ディックは。

「君達は自分の存在意義を考えたことはあるのかな、と違ってさ」  
また、意図のわからぬ質問。

「存在意義だよ。何故自分はそこにいるのか、何故生まれてきたのか、これから一体、どうやって生きていくべきなのかってことさ。誰にだって、生まれてくる意味がある。……だとしたら、自分はどうか。必要とされているのか。いるべき場所は？ そんなことは考えないのかい？」

「奴の問いに耳を傾けるな！ お前達を引き込もうとしているだけだ！」

雨音で、ディックの声は殆ど聞こえない。

リーはそのことを知ってか知らずか、両手で大げさに訴えかけてくる。エスターへ数歩、そしてジュンヤに数歩と庭の中を自由に歩きながら。土砂降りの立ち回りは、ジュンヤとエスターをリーの思惑の中へと少しずつ引き込んでいく。初めは不審に思っていたジュンヤも、彼の不思議な魅力に取り憑かれ、妖しげな空気に徐々に呑み込まれていくのを、止めることが出来なかった。

もしかしたら、彼の出したお茶に何かの薬品が混じっていたのかもしれない。麻薬か、何かそういった、最終的に暗示にかかりやすい状態にするものを、彼は二人に仕掛けていたのかもしれない。

「運命だったんだ、ここで僕に出会ったのは。きっと、本当の自分を知るための一つの転機だ。それとも君達は、“ES”にいれば本当の世界が見えてくるとでも思ってるの？」

……答えられない。二人とも、それに見合うだけの答えが出せなかった。

「真実を知り、“自由を勝ち取る”。これは、君のお父さんとの約束だよ、ジュンヤ。それとも、その科学者が、全てを、この世界の真実を伝えてくれるの？ 自分自身のことさえ、何故逃亡したのかさえひた隠しにして、誰にも話せずにいるその男を、君たちは信じていくの？ 君たちは彼の何を知ってる？ 本当のことを知っても、君たちはまだ、彼を信じる事が出来るの？」

リーの台詞の中の何かが、ディックの箍を外した。

彼の中の理性は、それを失い、猛獣のような雄叫びを轟かせた。気がつくのと、引き金を引いていた。顔を伝っているのが、雨なのか、それとも自分の目から溢れ出たものなのか。

銃口から発射された弾はスローモーションの如く進み、全ての時間がそこに集約されたかのように、そこにいた全ての人間の視線を奪った。ディック・エマードの言葉通りに、弾丸はリーの喉をめがけて突き進む。

ハロルドは握り拳を地面に叩きつけた。音もなく、泥の粒があたりに飛び散った。

ジュンヤはハロルドの身体を押しつけて銃声が鳴るより少し早く飛び出していたが、間に合わなかった。大きく力を込めて開いた右の手のひらは、空しく宙を掴むだけで、ディックには届かない。

生温かい鮮烈な赤が、飛沫になってエスターのいる縁側にまで飛び散った。

彼女は初めて見る父親の荒んだ姿に脅威し、襲い来る赤の恐怖に両手で顔を覆う。大切なものが音を立てて壊れていく。彼女は、言葉にならない声を上げ、泣き崩れた。

音は聞こえなかったんじゃない、音に勝る衝撃があったのだ。

ティン・リーは血まみれの喉元を必死に抑えて、そこに屈み込んだ。ゴフ、ゴフツと息をする度に傷口や口元から血が溢れ出た。激しく降る雨が、彼の血を庭全体へと伝わせていく。黒いスーツはみるみる赤黒く染まり、彼の色白の肌もまた、鮮明な赤を纏った。

銃を持った科学者の手は、わずかに震えていた。心臓が、壊れるくらいの勢いで動いている。目的は達せられた……はずなのに、達成感がなかった。それは単に、殺人という罪の上に成り立つものだ

からではない。

笑っている……。リーが笑っている。

明らかに、それが出来る状態ではないのに、ディックを嘲笑っている。

リーの体は、その痛みに耐え切れぬかのように、よろめき、地面に伏した。と同時に、青白い光に包まれて消えていった。まるで、彼がひと時の夢であったかのように。

しかし、現実である。

彼の残した血の跡が、何よりもその証拠なのだから。

窓の外は、まだ雨だった。切れ目なく降り続けるそれは、まるで自分の心を映しているようだった。

飛空艇の自室にこもると、ディック・エマードはベッドの上に寝転がり、窓を見た。狭い部屋の中にぎっしりと積み上げられた、書物やガラクタ。室内の中で唯一、広がりを見せているのが窓だった。足の踏み場もないようなこの部屋が彼の居場所。普段ならここで、コツコツ機械いじりをするか、本を読むかするところだが、今日はそうもいかない。分厚い二重ガラスに、うつすらと水滴が這う。湿っぽい空気がそこから伝って部屋全体へと流れ込んでいるような気がする。冷気はやがて全てを覆い、全てをカビらせてしまうのだ。この、心の中までも。

窓は暗く寂しい空を切り取って、彼の視界にスクリーンを作り出していた。目を瞑ると、そこに自分のやったことが、ほんの数分の出来事が、鮮明に何度も蘇って映し出される。

頬を伝う雨。不気味な笑みを浮かべるリィ。発射された弾と、娘の悲鳴。

あの後、雨が、ただただ強く、地面を打ちつけていた。

「何故なんだ！ 何故、娘の前でこんなことを！」

ハロルドはそう言って、ディックの胸倉をひしと掴んだ。が、当のディックはことを終えて、死んだような目をするだけだった。

ピチャピチャと跳ねる雨粒の音が、レクイエムのように響いていた。

「お前に、何がわかるっていうんだ」

ディックはうなだれて呟く。右手の力が抜け、銃がびちゃんど地面に落ちる。大量の雨粒が銃を呑み込んだ、赤い罪を覆い隠そうとしているかのように。



雨に流され、どんどん薄く広がっていく血液をやるせない表情で見下ろしていたジュンヤは、力なく言葉をこぼした。

「何もわからないよ……。こんな状況で、何をわかれって言っただ。勝手すぎる。リーが、一体何を言っただ。わからない、わからないよ……」

わからないよ……。わからないよ……。ジュンヤの声がこだまする。

ディックは頭を抱えて体を丸めた。何も、考えたくない。あの時はどうかしていた、そう自分に言い聞かせた。ベッドの上であれこれ考え、ぼんやりと窓を見る、の繰り返し。そうしてどのくらい時間が過ぎただろう。

急なノック音に、思考を遮られた。

「ハオルドだ。入るぞ」

許可も得ずに、ハオルドはずかずかと彼の部屋へ入り込んだ。内鍵を掛け、荷物に時々脚を引っかけながら一番奥のベッドのところまで来ると、

「最悪だな」

と鼻で笑う。いつもの威厳の欠片もない、ディックがいたからだ。気入りの白衣は積み上げられた本の上に無造作に脱ぎ捨てられていた。ワイシャツに濃い灰色のスラックス、それも雨に濡れたのが半乾きになった状態で、彼はベッドに転がっていたのだ。シャワーすら浴びていないのかと、少し怪訝な表情のハオルド。彼自身はすっかり着替え、先程の衝撃を自分なりに整理して、頭も体もさっぱりしてからここに来たのだ。当事者はまだこんな状態なんだと付け足して、彼はまた大きくため息をつく。

「今日、自分のしたことを後悔しているのか。超天才の万能科学者様が、形無しだ」

「……笑うなら笑えばいい」

いつにも増して愛想のない返事。天井を見上げたまま、ディックはハオルドの中年顔を睨んだ。

「別に、馬鹿にしに来たわけじゃない。話を、したくて」

「お前とする話なぞない」

「まあ、そう言うな」

ベッドの縁に、ドスンとハロルドが腰を掛けた。全体が揺れ、ギシギシと鳴る。

「お前は敵を作りすぎるんだよ、ディック」

「知ってる」

言つとディックは、ハロルドに背を向けるようにして転がり直す。まるでいじけた子供のよう。

ハロルドは面白くなさそうに、白髪交じりの短い髪を左手でもしやもしやとかきむしった。

「一人でも味方を作っておいたほうがいいと思う。少しでいいから、本当のことを、事実を知りたいんだ。でないと、俺もお前の敵になつてしまつかもしれない」

「味方なんて必要ない。今までだっていなかったし、そう言つてくる奴から裏切るんだ。それに、事実を言ったところで何になる。何の解決にもならん」

「……シロウは味方じゃなかったのか？ あんなに親しくしていたくせに」

「敵とか味方とか、そういうもんじゃない。あいつにだって、全部喋つてたわけじゃない」

ディックの回答は散々なものだった。ハロルドも期待はしていなかったのだが。会話にならないのをどうやって引き延ばそうかと考えあぐねているうちに、ディックが続けて話し出す。

「人に話せるほど、いい人生を送ってきたわけじゃない。誰かに助けられるほど、軽いものを背負つてやしない。だから、いいんだ。俺のことはほつといてくれ。俺のしたことに、口出しするな」

とんだ体たらくだと、ハロルドは血を頭のとっぺんまで上らせた。ほんの数時間前の威厳は、あんな事件でいとも簡単に失われるものなのかと。

「お前はまだそんなことを。よく考えてみる、お前は良くても、エスターはどうなんだ。お前みたいなどんでもない男でも、人の親だろうが。自分が娘の前で何をやったのか、よく思い出すんだ。ESに来て、ちよつとは真つ当な人間になつたんじゃないか」

ハロルドの言葉に何かを感じたのか、ディックはむっくりと起き上がり、本の山をかき分けながらおもむろに窓際へと進んだ。

ハロルドはそれをゆっくりと目で追う。

いつものように切れのある動きはない。本当に疲れきつた、そんな様子だ。彼は冷たい窓に手のひらを合わせ、こつんとガラスに額を付けた。

「他に、方法がなかった。あの男の毒牙から、どうやったらエスターを救い出せるのか。俺だって考えなかった訳じゃない。奴は悪魔だ。手を汚さぬ悪魔が俺の娘をたぶらかし連れ去ろうとしているのに、俺は平和的に解決する手段を知らない。あの方法しか、思いつかなかった」

表情を読まれぬように、気丈な振りをするディック。

雨はまだ降りしきっていた。森の緑が、濃く霞んでいるように見える。到着時に見えていた山頂は厚い雲に覆われ、その姿を見ることは出来ない。渦巻く暗雲、走る雷光。それはますます酷くなり、森を飛空挺ごと闇へと誘っているかのようにさえ思えた。

「政府にいたときに、何があつた。俺にも言えないのか。なあ、お前と“ティン・リー”の本当の関係は何だ。何を隠してる」

ハロルドの言葉が次々にのしかかる。それに、簡単に答えられるなら、どんなに楽だろう。

窓ガラスにベッドで手を拱くハロルドが映る。真剣なまなざしでこちらをうかがっている。信じてみてほしいかもしれない。根拠なく思えたとき、ディックは自分の口から思いがけない言葉を発していた。

「俺達には、俺とエスターには、あの中で生きていくために必要なものが与えられなかった」

「は？」

「この中にいれば、それを感じずに生きていけると思った。だから、ここへ来た」

「何だつて？」

「やっと語り始めたディックだったが、出る言葉が全て断片的過ぎで、わからない。」

「もっと、直接的には言ってくれないのか。悪いが、俺には到底理解が」

ハロルドは聞き返した。

ディックは、覚悟を決めたかのように振り向く。

「コードだよ」

「コード？」

「俺達二人には、“コードが無い”んだ」

いつにも増して、目の下の隈が濃く刻まれていた。疲労感が彼を包み、いつもは絶対に開かない秘密の扉の錠を緩めてしまっていた。

「“住民コードが無い”、のか。ま、まさか……」

「うそだと思うなら、探してみればいい。ここにいる連中といつしよだ。『無い』んだよ。だから追われ、抵抗する」

「お前、政府のエリート科学者じゃなかったのか……。名の知れた、天才だと聞いていたが……」

「それは間違いないことかも知れない。が、所詮俺は“コードの与えられない存在”。リーは、俺達を利用していった。俺の信じていたものは、全て奴が俺に与えていた虚像だった。俺に残ったのは、エスターだけ。抵抗して、奴をいつか殺してやろうと思った。身を潜めて、体制が整ったらおびき出し、八つ裂きにしてやりたかった。

……これが全てだ」

ハロルドは耳を疑った。それはとても、ハロルドの常識では考えられないようなことだったからだ。

「本当なのか……」

「冗談に聞こえるか？」

「本当だとしたら、お前とエステルは、人間じゃなく……」

「“実験体”だ」

ディックの一言が、空気を止めた。

ハロルドは息を呑み、聞こえた言葉の意味を受け止めようとした。俺達二人は、紛れも無く、“政府の機密プロジェクトの実験体”だ。意思を持ち、自ら行動している、感情もある。なんら人間と変わりない。ほんの少し、遺伝子の構造が変えられていて、普通の人間以上の能力を持つことがある。それだけだ。“あの男”、すなわち“ティン・リー”がいなければ存在せず、が、奴によって人生は歪められ、全てを奪われ、絶望の淵で考えたのは、“エステルを救わなければ”という、一筋の希望。……エステルは、エステルだけは、守りたかった……」

両手で頭を抱え、髪をかきむしり、ディックはよろよろと壁に寄りかかった。全てをはき出した重圧に、押しつぶされるかのように「だから、ESに来たのか。エステルを守るため、コードの無い世界に。彼女がいずれ自分にコードが無いと知っても、それが不自然でないように。お前は、本当にエステルを……」

「エステルは、リーを誘き出すためのほんのきっかけを作ってくれただけでよかった。“エレノア”の名前を出せば、リーは必ず姿を見せる。後は俺が奴を始末すれば、それで終わるはずだったんだ。それなのに、奴は……、よりによって、エステルのそばに……。それどころか、エステルを、娘を虜にしようとしていた。耐えられなかった。あのまま、リーに引き寄せられるかもしれないと思うと、あの場で奴を殺すしか、選択肢が無かった」

「ディック……」

「リーは“実験体”である俺とエステルを狙っていた。奴は多分、死んでなんかない。今もどこかで、俺達の身体を狙っている。そんな気がしてならない。あの、不気味な笑いが頭から離れない。……」

…こんな状況下で、誰を頼れと？　こんな話を聞いたところで、ハロルド、お前は本当に、俺の力になれるのか？」

全てを語り終えた彼は、いつもの“ディック・エマード”に戻っていた。

ハロルドは、どんな言葉も慰めにすらならないとすべて飲み込んでしまった。自分が思っていたよりも辛いものを、彼は背負っている。彼が何も信じず、誰も頼らず生きていた理由も、政府から脱出してわざわざ反政府組織に身を隠す理由も、今の会話で説明できた。そしてエスターも、同じく辛い運命を背負って生きている。おそらく、何も知らされぬまま。

外の雨がいつそう激しさを増した。

深い悲しみと衝撃がすべてを包んでいた。

ES要塞はそれから数日間、島から旅立つことは無かった。

## 17・飛び交う疑惑

あの出来事から丸三日が経っていた。

外は相変わらずの雨。雷も鳴り始め、この地から飛び立つには少々具合の悪い天気だ。

ジュンヤはあれから何度かディックと顔を合わせたか、まともに目を見ることができないでいた。狭い飛空艇の中ではすれ違うことが多く、はつきり言って居づらかった。食事の時間を少しずらしてみたり、人気のないところで暇を潰したりと、無駄な努力を続けた。ディックはというと、ジュンヤには何の変化もないように見えていた。いつも通りのしかめっ面、着古した白衣を羽織り、颯爽としている。通りすがりに、ジュンヤは彼を恨めしく思う。冷酷で残忍であつたと、いつか母に聞いたその意味が、彼には痛いほどわかつてしまった。同時に、明らかに不審な存在ではあつたが、初対面の自分に優しく語りかけてくれた“ティン・リー”を理由も言わずに撃ち抜いた彼に対して、例えようのない怒りを覚えた。

まだほんの二十歳の青年には、平静を装うことは難しすぎた。少しでもあの出来事を思い出すと、体が振るえ、ぎりぎり歯が鳴つた。そんな無様を仲間に見せたくはないから、不本意ながら人気のない場所か自室に引きこもることを余儀なくされてしまう。

作戦会議のためのミーティングルームで、彼は回転椅子の背にもたれかかり、ぐんと背伸びした。両足を大きめのドーナツ型の会議テーブルの上に投げ出して、そのままぎこぎこ椅子を揺らして思いにふける。ここしばらく、ジュンヤはこうして日中の時間を潰していた。いつもはこの部屋でディックや幹部の大人たちが地図を広げて作戦会議をするのだが、あの事件以降使われていない。誰も来ない。

「あんなことがあって、誰がディックとまともに話ができるんだよ

……」

事実上、ESを仕切っているのはディックだった。ハロルドだつて、他の連中だつて、ディックの言いなりだ。作戦会議をするときはいつも、ディックを優先する。敵である政府にいたんだから、相手の手の内がある程度は知っている。彼の話聞くのは正当だとわかつてはいるのだが。

『君らのリーダーはこの半狂乱した中年男なのかい』

リーの言葉がよみがえる。

事件以降、少しずつディックに対するわだかまりが膨らんできていた。本当にこの先もディックを信じていいのか。心の中で反復させても答えは出ない。

『君達はどうしてそんな組織ににいるの』

疑問に思わなかったそんなことを、改めて問われ、ハツとした。どうして、ESに。父が創始者だからなのか。ただそれだけで。

思い始めれば、切りがない。

もしかしたら、リーは政府の人間ではないのかと、あの時も今も思う。リーに上手く言いくるめられているような気がしないではなかった。しかし、ティン・リーは父が信頼を寄せていた人物であったことに違いはないようだ。しかし、父の性格、生き方からして、得体の知れない政府寄りの人間に心を許しただろうか。例え“日本”が大きな鍵となっていたとしても、それはあまりにも現実味がないう。彼は一体何者だったのか。最後までリー本人の口から聞けなかったことを激しく後悔する。

ジュンヤは自分の中で広がる疑惑に押しつぶされそうだった。リーの出現は、彼自身の信念をありとあらゆる方向に捻じ曲げようとしていた。それまで考えていたこと、守っていたものが、それだけが終着点ではないと思うようになっていた。



『その科学者が、全てを、この世界の真実を伝えてくれるの？  
自分自身のことさえ、何故逃亡したのかさえひた隠しにして、誰にも話せずにいるその男を、君たちは信じていくの？ 君たちは彼の何を知ってる？ 本当のことを知っても、君たちはまだ、彼を信じることが出来るの？』

リーの最後の言葉。ディックを追い詰めた台詞の中で、彼は何を伝えようとしていたのだろうか。

世界の真実、ひた隠し、信じる。  
。例え全てを知っていたとしても一切口を開かないディックと、こちらが警戒していても構わず親しげに話してくれたリー。対照的な二人が、もし同じことを知っていたとしたら。果たしてリーは真実を伝えてくれたのだろうか。

カチツ つと、ドアがゆっくり開いた。

ジュンヤは慌てて椅子に座りなおす。ギイギイときしむ音が少し恥ずかしい。

「ジュンヤ……いる？」

ドアの隙間から申し訳なさそうに顔を覗かせたのは、エスターだ。  
「あ、ああ。いるよ」

答えると、彼女の肩までの金髪がふわりと揺れた。ホツとした顔で会議室に入り、ドアを閉める。

エスターもやはり、いつもと違って元気がない。ぐったりと肩を落としたまま、「隣、いい？」力なく言って、ジュンヤの隣に腰掛ける。

エスターとも、あの日からほとんど会っていなかった。顔を合わせづらいのもあったが、多分彼女もジュンヤと同じように人目を避けていたに違いない。泣き腫らしたのか、彼女の目の下と鼻先は少し赤かった。

彼女は椅子に浅く座ったままうつむき、両膝を抱えた。元々静か

な性格の彼女が、何かに押しつぶされて壊れてしまいそうに見える。「この間のこと……、どう、思ってる？」

唐突にエスターは言う。おもむろに見上げた彼女の目は虚ろながらも真剣だった。誰かに話そうとしても話せないこんなことを、彼女はすんなりと喋ってしまふのかと思うと、少し恨めしい。

ジュンヤは先ほど一人で考えていたことを思い出し、後ろめたさから視線を逸らした。

「どうって。多分、一緒のことだよ」

「だよ。ジュンヤもリーが言っただこと、考えてたんでしょ。私も、彼が話したあの短い言葉達が、あんまりにも衝撃的だったから自分自身、考えさせられることが多すぎて、どうしたらいいかわからなくなってる」

彼女の言葉に、ジュンヤは少し、救われた。自分だけではなかった。

「私ね、あれからいろいろ考えたの。だって、彼の言う通りなんだから。私は何も知らない。パパは何にも話してくれない。私達二人がどうしてESにいるのかってことは、疑問に思わないようにしてた。パパに訊くのは、タブーになってた。本当は、訊きたいこと、知りたいこと、たくさんあるのに」

エスターはそこまで言うと、また物悲しげな目をして宙を見つめた。思いつめたように深く息を吸い込み、ゆっくり吐く。彼女はそうして、自分の中のもやもやを確かめるように、ジュンヤの前に身を乗り出した。

彼女の白い肌がジュンヤの視界一杯に迫る。思わずドキリと胸が高鳴り、何を期待したのか手に汗が滲んだ。

「私ね、ジュンヤに言っただことあるの」

「え？」

動揺するジュンヤ。

「ジュンヤだけじゃない、パパにだって、直接言ったことはないわ」  
エスターの意外な一言に、彼は戸惑いを隠せない。ごくり、生唾

をのむ。下心で見つめていた胸元からゆっくりと視線を上に向けてと、彼女の青い瞳がまっすぐにこちらを向いているではないか。この上なく気まずい。気持ち悟られまいと、視線をずらした。

しかし彼女は、そんな彼の様子に構わず、覚悟を決めたように手のひらをぐつと握り締めた。

「記憶がないの。私、十歳までの記憶がないの。もっと正確に言うとな、気がついたら、ウメモトの家に住んでいたの。私自身の記憶として、それまでのことが空白なのよ。いつの間にかそこにいて、それまでの間どうやって暮らしてきたのか、全く思い出せない。まるで私自身が、それまで存在していなかったみたいに。それって、ありえるの？ 小さい頃、こんなことがあったとか、前はどうかだったかとか、どんなに思い出そうとがんばっても、思い出せるのは自分の十一歳の誕生日まで。それから前のことは一切わからない。それって、普通に生きている人間として、ありえるものなの？ 忘れてしまっているとしたら、どんな辛いことが、私から記憶を奪ってしまったの？ わからない、わからないの……」

彼女の肩は、見ると少し震えていた。泣き疲れたはずの目に、また涙を浮かべている。

手を伸ばした。ジュンヤの腕に、エステーの細い肩が触れる。そして、抱き締めた。

『記憶がない』、彼女の言葉に、彼は納得していた。記憶がないとすればうなずける。あれは本当に、奇妙だった。ジュンヤはエステーと出会った日から数ヶ月間の彼女の行動を思い出していた。

「初めて出会ったとき、君は、ディックに抱えられて、裸で、毛布に包まっていたんだ」

「は、裸で？」

ジュンヤの肩に押しつけていた彼女の顔が、ぴくりと反応する。

「それだけじゃない、濡れていたんだ。浴槽に浸かっていたみたい。たしか父さんの話では、政府ビルから逃げてきて、やっこの思いで辿り着いたということだったけれど……。なんで、あの時、エ

スターが濡れていたのか、今考えても全くわからない。ドームの中じゃ雨も降らないし、濡れる要因なんてないはずなのに。転移装置を使ったとして、それまで全身ずぶ濡れになるような所に君がいたってことなのか。だとしたら、一体どういう所だったのか。その答えは、ディックでないといけない。それに」

「……それに？」

「歩き方すら、知らなかった。何も話せず、笑うこともできず、まるで、死んだようだった。十一歳の誕生日までに、やっと人並みのことができるようになったんだよ。なんでだろうって、不思議に思っただのを覚えてる。EPTの天才科学者の娘なら、高等教育を受けてるはずだろ？　なのに……、こんなこと言ったら、傷つくのはわかってるんだけど……、あの子の君はまるで、産まれてはいけなかった赤ん坊のようで」

台詞の途中で、ジュンヤは突き飛ばされた。抱きかかえてくれたいたジュンヤの胸を、エスターは両手で勢いよく押しつけていた。

回転椅子が勢い余って転がり、テーブルがギイとずれた。

ジュンヤの腕から離れた彼女は、立ち上がりフラフラと後退りする。血の気の引いた顔、明らかに言いすぎた。ジュンヤは弁解しようとして必死に言葉を探したが、結局、彼女をなだめることは出来なかった。

「どうして……そんな……。それじゃ、ここに来るまで私は何をしていたの。私、私はいったい、どうやって産まれてきたの……。なぜ、パパは答えてくれなかったの。私には、“ESに来るまでの自分”が、存在しなかったようにしか、思えない……」

エスターは自分の部屋のベッドに伏して泣き崩れていた。ジュンヤが嘘をついていないことはわかっている。それにしても、あまりに酷い現実。

ディックが何も教えてくれない理由がの、彼女にもなんとなく想像できた。

物理、機械化学者である父。部屋に詰まれた数多の本、機械関係、物理関係のそれに混じって置いてある、“生物学”“解剖学”“遺伝子工学”の本。分厚い、ほかとは異質なその本を何も知らずに手にとって、こっぴどく叱られたことがあった。「お前の読む本ではない」と。

医者でもないのに、「お前の体調は俺が管理しているから、ほかの医者には診せるな」と言われたこともあった。数ヶ月に一度は精密検査と称し、知り合いの医療施設に連れて行かれる。間借りした診療室で立会いの医師もなく、ディックが一人で何かの検査をする。検査結果は知らされない。

疑問に思うこと自体が悪で、現実を受け容れることしか必要ないのだと、自分に思い込ませていた。そうしなければ、何か壊れてしまう。だが、そんなのおかしいに決まってる。ずっと前から彼女は思っていた。だからって、まさか。

辿り着いたのは恐ろしい仮定。  
「私は、本当にパパの娘なの……？ 血の繋がった、親子なの……？」

これまで、どうやってディックが自分に接してきたのか。エスターは必死に思い出していた。明らかに他の親子とは違う関係。彼の性格からなのか、そっけなく愛情もほとんど感じられなかった。シロウやメイシイがジュンヤに接しているのとは比べ物にならないくらい、遠慮がちで、他人行儀で。

それでもディックは、エスターにだけは優しく微笑みかけることがあった。はにかんだような、静かな笑み。あれは他ならぬ、彼女の愛情表現だったのでは。そう思わなければ、自分がかわいそうだと、彼女は思い始めた。

もし、本当の娘だったとしたら。あくまでも仮定として、彼女は考え続ける。

なぜ服も着せられず、裸のまま連れて来られたのだろうか。普通に暮らしていたとすれば、そんな状態で連れ出されるのはおかしすぎる。緊迫した事態で、入浴していたところを無理に連れ出したのか。だとしたら簡単にでも着替えさせてから逃げ出すはず。そういえば、ジュンヤはこうも言っていた、『政府ビルから逃げてきた』と。では、ビルの中で暮らしていたのか。ビルの中に生活していたとしても、濡れたまま自分を連れ出すのは、あまりにも不自然ではないか。それに、たしか包まっていたのは“毛布”。入浴していたとすれば、包まれていたのは“バスタオル”のはず。なぜタオルより吸水性の低い“毛布”だったのか。“タオル”がなかったのだろうか。バスタオルのないところ、毛布は使うけど、バスタオルを必要としないところ。浴室や洗面でなく、普通の部屋。

「実験室」

エスターはぽつり、と呟いた。

「パパがいつも行くのは決まって“実験室”。大きな、緑色の水槽……。毛布の敷かれた台に横たわって、見上げたら……、そこには、悲しそうな顔をした、眼鏡の……」

知らなかったはずの記憶が、彼女の中に舞い戻った。記憶はなかったのではなく、仕舞い込んでしまっていたのだと、彼女は確信する。無機質な記憶を忘れてたくて、幼い彼女は、全てを忘れてしまっていたのだ。

涙が止まらなかった。

それは、悲しみからくるのではなく、自分自身に対する哀れみからくるもの。

「私は……あの実験室で……」  
思い出さなければよかった、と思った。胸が痛い。急激に締め付けられ、頭がずきずきする。それでも、思い出したことによってデスクへ真実を訊く足がかりが出来たのかもしれない、とも思った。彼女は苦しみに耐えるように起き上がると、涙を拭いて部屋を出た。

「ごちゃごちゃに詰まれた本が、微妙なバランスを保って狭い部屋を埋め尽くしている。その隙間を縫うように奥へ進むと、窓際にデスクがあり、つけっぱなしのパソコンがくたびれた音を立ててモニターを光らせていた。デスクの後ろに、やはり本に埋もれたベッドがある。やっと大人一人が出入りができるくらい、周りはうず高い本の山に囲われている。」

ディック・エマードは本の虫だ。彼は休暇となると、専ら読書と機械いじりにあけてくれた。種類も大きさも違うそれらは、研究のためだけに集められた本ではないようだ。興味のある本を見つければ、通りがかりの古本屋や、つぶれかかった図書館からゴソツと仕入れてくる。夜な夜な読みふけり、気がつく朝になることもしばしば。中には、役に立ちそうもないわけの解らない大戦以前の本も混じっていた。もう誰もが忘れてしまった言語の本さえ、彼は食い入るように読んでいた。

その日も、彼は見たことのないような分厚い本を抱えて、デスクに向かっていたのだが、それを妨げるものが現れ本を閉じた。無類の本好きの彼の言動をやめさせることが出来るのは、彼女だけ。愛娘のエスターが、彼の部屋を訪れたのだ。

彼女は二人分の湯気の立ったコーヒーカップをそつと、デスクに置いた。目の覚めるような芳醇な香りが充満し、ディックは大きく深呼吸した。

「もしかしたら、そろそろ来るころじゃないかと思っていた」

彼は娘にしか見せない気の緩んだ表情で、彼女を見つめた。自分と同じ深い青色をした瞳。エスターは彼とは対照的に、少し気張った様子でいるのがわかった。

「最近、本当に、エレノアに似てきたな。……性格は別だが」

苦笑して、ディックは彼女の入れたコーヒーを一口含んだ。

「パパ、私ね」と彼女は切り出したが、彼はその続きを言わせようとしなかった。

「どこまで、思い出した」

ディックはコーヒークップを置くと、自分の右隣に木製の丸椅子を持ち出して腰掛けたエスターに向き直った。彼女は動揺して、顔を強張らせた。

「……私が、記憶をなくしていたことを、パパは知ってたの？」

めをしばたたかせ、だが冷静に、ディックは彼女の質問を受け止める。いつもならばそこで会話をやめてしまおうとするのだが、その日のディックは少し様子が違っていた。眼鏡の奥、どこか哀愁の漂った彼の目は、真剣に彼女を見つめていたのだ。

「いや。予感はしていたが、憶測だった。お前は今まで一度も、あそこでのことを口にしなかった。思い出したくない忌まわしい過去だ、当然だとも思った。が、どうやらそれだけじゃないとも感じていた。ESで生きていくために、知らず知らずのうちに記憶を封じ込めてしまっていたんだらうな。この前、お前がリーの顔さえ忘れちゃってしまっていたのを見て、それは確信に変わった。あの一件が、すべてを狂わせた。俺自身も、封印していた過去をほじくり返され、かなり辛い思いをした。恐らくお前も同じ状況に陥ったんだらう。どこまで思い出したのか、話してみないか。俺も、お前に話さなければならぬことがあるんだ」

しかし、エスターはうつむき加減で、軽く唸っただけだった。

ディックは困惑の色を浮かべ、眉をひそめた。それは、今まで見せたことない、頼りない中年男の顔。

「……すまない、俺は未だ、お前にどう接してやったらいいのかわ



からない。だが、こんな俺でも、お前の“父親”として」

「ホントに？ ホントに私は、パパの子なの？」

ほんの刹那の沈黙が、二人の距離を裂いた。

## 19・何を信じたらいい

エステアの疑念と困惑の入り混じった表情が、ディックの胸をぎゅっと締め付けた。彼は失意のあまり、がくつと肩を落とす。うなだれた頭に、白髪がたくさん見えた。心なしか、ここ数日でぐっと増えたように感じる。

しばらくの沈黙の間に、机に置き去りのコーヒーは湯気を失い、立ちこめていた香りもどこかへ消え去ってしまった。少し加齢臭のする男部屋の匂い。だけでも、エステアはこの匂いが嫌いではなかった。どこか不安定なディック・エマードという存在は、父として彼女が慕うには十分すぎた。例えば彼女の出した仮定が本当だったとしても、それは揺るぎないと思いたかった。

「そうか。そういう結論を導き出したのか……。だがそれは、間違っているよ……。」

ディックは微笑し、今にも泣き出しそうな顔で彼女を見つめ返した。握りしめた拳が、彼のスラックスの上で何かに耐えている。

「間違いなく、お前は俺とエレノアの娘だ。遺伝子鑑定したついで。が、そんなことはできっこない。なぜならば、俺とお前の遺伝情報は、政府にとって、いや、政府総統にとって、のどから手が出るくらい大事な情報なんだから……。下手に鑑定でもして他人に知られたら、ここにだっていられなくなってしまう。」

「ど、どういうこと?」「どうもこうもない……。で、どうなんだ。そっちはどんなことを思い出したんだ?」

言いかけたのにずるいとエステアは思った。それでも、父が真剣に自分の話を聞いてくれるチャンスはきつと、またとない。そう確信してこの部屋に来たのだ。

言葉を呑み込んで、深呼吸。両手でコーヒークップと大事そうに握り締め、そこから立ち上る細い湯気に視線を落とし、彼女は覚悟

を決めた。

「あのね。実験室だと思っただけ……。とても暗くて、そこに、いたの。真っ暗いなかで、緑色に光っている大きな縦長の水槽があつて……。眼鏡をかけた若い男の人……。パパだと思うけど……。あと、男の人が何人か、私の周りに立っているの。私はベッドの上に寝ていて、たくさんの管が走る薄暗い天井と、大人たちの顔を見ている。思い出したのはこれだけ。これだけなんだけど……」

彼女の体が震えだすと、彼女の両手の中のコーヒーも、軽く振動し始める。

「それって、私が、じ……。実験に使われていたって、そういう、ことなんだよね」

エスターは堪らず、声を荒げた。まるで悲鳴のような声を。

「その場所にいたあの人は、パパだった？ まさか、自分の娘を実験に使つたりなんてことは……」

「使つたよ」

間髪いれず、答えが返つた。

エスターの目の前が、急に真っ暗くなる。あまりのショックに耐えかね、バランスを崩しそうになつた。

ディックは慌てて立ち上がり、彼女の体とこぼれそうなコーヒーを支えた。左手でそつと、彼女の手からカップを引き剥がし、テーブルの上に置く。そして、気の抜けた娘の体をぐつと両手で抱きしめる。じわつと、彼女にディックの温もりが伝わつた。

前にも同じように、父が自分を抱きしめてくれたことがあつたよ。うな気がした。あれは、いつのことだつたんだろう。思い出そうとしても思い出せない記憶の更に奥、もしかしたらESに来るよりもずつと昔。記憶にあつたあの困つたような優しい顔でぎゅつと抱きしめられた、そんな覚えがある。

「お前を守るためだつたら、実験台にだつてした」

ディックは更に力強く、彼女を抱きしめた。あまりの力に、彼女の細い体は悲鳴を上げそうだった。

「それが、生き延びるための条件だった。『生かしたいなら、実験台にすることだ』と、奴はそう言ったんだ。『このままここで殺すか、それとも、実験体として生かすか』どちらがいいのか、選べと」「誰が、誰がそんなこと……」

「リーだ。ティン・リー。あいつが、あの悪魔が、そう言ったんだ。俺を脅し、見せしめに、エレノアを……」

「ママを……、リーが？ う……嘘でしょ」

やっとのことでディックの腕から開放されたエステル。ありえない、と、ディックの顔を覗き込むが、彼が嘘をついている様子は微塵も感じられなかった。

「だって、リーはパパより随分年下だし、もし、その当時何かあったとして、十代の少年でしょ。彼に何ができたって言うの」「もし」

ディックは眉をひそめた。

「もし彼が本当に、ただの人間だったとしたら、ありえない話だ。

あの時までには、彼は俺より年上だったなんてな」

「意味が……、わからないわ」

「そして俺自身が、彼の研究の実験体だったってことも」

「な、何を言ってるの。パパ、冗談なんでしょ？」

目が潤む。首を左右に振り、椅子から立ち上がった。打ち明けられていくたくさんの秘密に、彼女はもう、どうしたらいいかわからなくなってしまうていた。逃げ出したい。そう思っているのだろう。だが、どうやって真実から逃げ出したらいいのかわからず、顔を歪ませる。

「嘘だと思いたいのなら、思えばいい。これから先、リーは間違いない俺とお前を狙ってくる。どんな手段を使っても、俺達の身体を手に入れようとしてくるはずだ。この前あの場所に現れたのは“警告”だ。きっと、本当の恐怖はこれから始まるんだ。……忠告

はしたぞ。それでも尚、リーの言葉に惑わされるのなら、俺はお前を守れなくなってしまう」

「そ、そんな……」

エスターは、本の山に隠れるようにして縮こまり、わっと泣き出した。

頭の中でようやく理解できたのは、彼女が“実験体”であったこと、ティン・リーが母親を殺したかもしれないということ。その他のたくさんの情報は、一時的に彼女の耳にとどまったに過ぎなかった。

泣きじゃくるエスターの背を、ディックは屈み込んできこちなく、何度も撫でた。自分がかつて、同じように、誰かから慰められていたのを思い出すかのように。

「大丈夫だ、俺が守ってやる。俺の命が続く限り、奴のいいようにはさせるものか……！」

眼前に美しい夜景が広がっていた。明かりの一つ一つが宝石のようにきらめき、漆黒の中で存在感を主張している。連なる光の列が作り出す芸術は、見るもの全てを魅了する。ビルを中心に放射線状に広がる都市の明かりが光のグラデーションを作り出し、静かなドームの夜を彩っていた。

ネオ・ニューヨークの夜景を全て見渡せる政府ビルの最上階、大きな黒い皮製の肘掛け椅子と執務机。彼の人は優雅にグラスの中で赤いワインを踊らせていた。

「ようやく、元に戻れたよ。君のおかげだ、ローザ」

執務机の右に立つ栗色の髪をした美しい女秘書は、男の屈託ない笑顔にぽつと顔を赤らめた。

「総統閣下のためですから」

「“愛する” 総統のため、だろう」

わざとらしい男の台詞も、ローザと呼ばれた秘書には愛のさえずりの一つの如く響いていた。彼の言葉一つ一つに反応しては顔をほころばせ、まるで少女のように胸躍らせる。その様子を男に悟られまいと一歩下がって書類で顔を隠す仕草は、彼に恋していることを全身で表していた。

しかし、男はそうした彼女には目もくれない。グラスの中の赤い液体を揺らし、その中に自分と彼女の映るのを面白そうに眺めている。

「エマードに撃たれた時は正直危ないと思ったが、君が転移装置を稼働させてくれたおかげで助かったよ。おかげですんなり『新しい身体』に移ることができた。君がいなかったらいつのバックアップデータを起動させていたかと思うと恐ろしい。身体に慣れるまでもう少し時間がかかりそうだが、今度のは特に調子が良さそうだ」

にやりと不敵に笑みを浮かべるその男は、ほかでもない、“テイ

ン・リー”その人だった。肩まで伸びたストレートの黒髪がさらさらと揺れ、すつと鼻筋の通った美形の男は、その容姿とは裏腹の恐ろしい言葉を並べ立てた。

「しかし、相変わらず野蛮な男だったな、ディック・エマードという男は。所詮不完全な“実験体”。あの肉体はもう駄目だ。歳をとりにすぎている。使えるとしたらあの頭脳、細胞くらい。時間というものがかれほど残酷だとは思ひもなかったよ。逃がしたりしなければ、こんな茶番劇をすることなどなかったのに」

「珍しいですね、閣下が過去を悔やむなど」

「エマードのことは、計算外が多すぎてね。私も万能ではないのだ。それよりも、興味深かったのはあの娘だ。父親に似ず美しく育っていた。あの身体はまさに、“マザー”の望むもの。すばらしい。あの血と肉を、早く手に入れなければ」

「閣下は、若い女性の方が好きなのですか」

ローザは少し寂しげにうつむいた。  
ワインをひと含みし、その味と香りに満足したリーは、執務机にグラスを置いてゆっくりと彼女に向き直った。

「勘違いしないで欲しい。あれはあくまで“マザー”への献上物だよ。“私”と“この世界”の産みの親である“マザー”への。君は彼女とは違う。私のすべてを知っている、私に一番近い女性ではないか」

リーの目線と一言に、ローザは少し紅潮していた。また恥ずかしそうに書類で口元を隠す。

「閣下のある場所でのお姿、拝見しておりましたわ。随分な演技をなさるんですね。まるで本当に“名もない二十代の研究員”のようでしたわ。あのように、ESの若造や女と親しげに」

「シツ。君が嫉妬しているのはよくわかった。が、その話はいれでお終いにしよう。お客様だよ」

リーの人差し指が、彼女の台詞を止めた。執務室の奥にある大きな扉がそつと開くのを、彼女に目で知らせる。

ローザは慌てて扉に歩み寄り、そこから現れようとしている何かに警戒した。扉の向こうには、空間転移装置があるだけだった。リーは総統以下、幹部のみが使用する特別なもの。誰かがそこから出てくるなんて、考えもしない。

すうーっと更に空けたその隙間から、泥にまみれた靴が顔をのぞかせた。ぽたぽたと雨粒が滴り落ちる。頭から足先まですぶぬれのその人物は、紺色のＴシャツにスウェットパンツという、場違いな格好をしている。きよろきよろ見回し、立ち止まる。広い無機質な四角い空間に、大きな高級な応接セット、その奥に広がる壁一面のガラス窓。手前に、やはり大きく立派な執務机がある。その人物は、そこに思いがけない人がいたのを見つけて、表情を曇らせた。

「ティン・リー……？」

呼びかけに答えるように、リーはすつくと立ち上がり、机の前へと歩み出た。

「ようこそ。やっぱり来たね、ジュンヤ・ウメモト」

“総統”の気配はもうない。彼は島での“一研究者であるティン・リー青年”へと変わっていた。にこつと微笑む彼の斜め後ろで、ローザは赤く膨れている。どうにも、リーの態度が気に食わないらしい。リーは彼女に「すまないね」と振り向いてウインクスし、それからジュンヤのそばへ進む。

「島は雨だったんだね。タオルくらい用意しておけばよかったかな。すぐに持ってくるよ。すつかり濡れているようだから、着替えも……」

「あの、ここは？」

ジュンヤは困った様子で、リーを見た。

「何を心配してるんだい。ここは僕の仕事部屋だよ。気にすることはない。シャワーを浴びたほうがいいかな。奥にシャワールームがあるからそこへ行こうか」

「いや、そうじゃなくて、あなたはあの時、てっきり死んだものだと……。それに、この窓から見える景色は、もしかして」



「もしかして？」

「もしかして、ここは、政府ビルじゃ……」

恐る恐る発したジュンヤの言葉は、少し震えていた。

一瞬、リーは凍るような目をジュンヤに向けた。直後、それが嘘だったかのように、にんまりと微笑んだ。

「だとしたら、どうなの。ここが、敵の本拠地だとして、君はそんなところに、無防備で何も考えなしに乗り込んで来たのかい？」

以前と変わらず気さくに話してくるリーだが、ジュンヤはそこに何か違うものを感じたのか、一歩二歩、後ずさりする。

「い、いや、そんなことは。ただ、俺は、真実を知りたくて」

リーに操られるかのように、ジュンヤはそう言ってしまった。

ぼたぼたと自分の身体から伝わる雨粒が、これ以上床を汚すのが、申し訳なかった。

「だったら、シャワーの後、ゆっくり話してあげるよ。君が知りたい情報を、知りたいだけね……」

## 21・必然

部屋全体を包み込むような青が、ジュンヤの心を激しく揺さぶった。

殺風景なその部屋を異空間に仕上げていたのは、その一面を占める、巨大な水槽だった。まるで水族館の中にあるような、天井まで届く壁一面の奥行きのある水槽。そこから漏れる青い光は、穏やかでかつ神秘的。小さな熱帯魚が珊瑚の間を、そしてその上を小型の魚が泳いでいく。エイや小型のサメに至るまで、ありとあらゆる魚がジュンヤの目の前を幾度となく通り過ぎる。海を知らぬ彼にとつて、それはまるで生きた宝石のようだった。時折、彼を振り返り、魚たちは無表情で泳ぎ去る。小さな幾つもの目は、異端者を警戒しているのか。

雰囲気を損なわないように飾られたほんの少しのインテリア。センスよく配置された観葉植物、照明器具。水槽の淡い青が揺らめき、白い壁を優しく照らしている。

そして、その非現実的な雰囲気を最大に演出しているのが、目の前にいる男、ティン・リーだ。細く鋭いが、落ち着き、光を放つ目。誰もが魅了されるであろう、甘いマスク。彼のストレートの髪に、水槽の青い光が反射し、シルエツトをぼやけさせる。

「どうしたの？ お気に召さなかったかな」

「リーはゆっくりと室内を見渡し、ジュンヤに向き直った。

「い、いや。こんなの、見たことなかったから」

ジュンヤは遠慮がちに答えた。

リーがジュンヤのシャワー後に用意していたのは、ブランド物の濃いグレーのスーツ。濡れていた彼の衣類は、リーの秘書によってクリーニングに出されていた。普段着慣れないだけに、ジュンヤはスーツを着ただけで微妙に居心地が悪く、自分が自分ではないようなむずがゆさを感じていた。

ゆつたりとした革製のソファ。ガラス張りのローテーブル。今までの彼の日常には登場してこなかった代物だ。彼の背後にある壁の水槽だってそうだ。明らかにリーはジュンヤとは違う次元の人間だ。もし、ここから逃れられるのなら、少しでも早く逃れたいと思う。しかしそれは許されない。ジュンヤはここからの逃れ方を知らないのだ。

エスターと話をした後、彼は自室に戻り、父の形見の写真の入った箱を手を取った。写真は本当に、ティン・リーからの贈り物だったのか。小屋に持って行ったその裏にはサインらしきものがあったが、ボロボロになって見えなかった。もしかしたら箱の中、他の写真には手がかりがあったかも知れない。箱をテーブルの上にひっくり返し、一枚一枚確かめる。父が自分に残した写真。端々が折れ、少し色あせ、更に破れかかったものもあった。ジュンヤは写真を手に取ると、まじまじと眺めた。全部の写真を並べて見たのは久しぶりだった。もらったばかりの頃は嬉しくて一日に何度も何度も眺めては想像をめぐらせ、幸せな気分浸っていたのに。

飛空艇の窓から青い地球を眺めるまで、写真のことはすっかり忘れてしまっていた。あれはどこかで見た、そうだ、写真と一緒にもらった地図のかけらに島があったとようやく思い出した。箱から一枚引っ張り出した写真を手がかりにエアバイクを走らせた。それと同じ角度に山が見えるところまで行けば、もしかしたらあの小屋があるかも知れない、写真裏の約束とやらの秘密がわかるかも知れないと。思い出なんて、案外脆いものだ。何か切っ掛けがなければ、どんなに大切でも忘れてしまう。嫌なことはずっと覚えているのに、楽しいこととなると思い出せないなんて。

真っ白いはずの写真の裏は、過去のジュンヤの手垢でどれも少し黄色っぽく変色していた。

一枚、あの小屋の縁側から見た、小さな庭の写真をみつける。破

れかけた写真の裏の左隅に、はつきりと文字が書かれている。

「『君の未来がこの島と繋がっていますように』…… 『四七六年三月 テイン・リー』……?」

スペルを読み間違えたのかと、ジュンヤは慌てて何度も読み返した。しかし、そこには確かに、「テイン・リー」の文字が見えた。ジュンヤは恐ろしさのあまり、手に持っていた写真を握りつぶした。

「これ、なんだ……。なんで、リーのサインが？ 今から二十年以上前の写真に？」

『ここで僕らが会うのは、もしかしたら、偶然なんかじゃなくて、ある意味“必然”だったのかもしれないね』

リーのささやきが耳の奥で拡張していく。

「『必然』？ 違う。彼は俺が写真を持っていることを知っていたんだ。俺が写真を覚えていて、この島に来ることを予め知っていたんだ。そして俺に何かを伝えようとした。……それは何？ 過去に、父さんとの間に何があったんだ？」

心臓の音が、体中に響いた。握っていた写真をポケットに突っ込むと、後先考えずに走り出していた。ハロルドが食堂で“妙な観測所跡があった”ことを話していたのを思い出す。そして、リーが“ワープ装置の誤作動”で島に来たことも。その場所に行けばきっと空間転移装置があるに違いない。リーがいつもこの島を訪れるときに使っていた装置が。ディックが小屋にやってきたのも、リーが撃たれた後消えたのも、同じ転移装置の青白い光だったんだから。そして。

「君は、何が知りたいの？」

現実に引き戻された。

リーがニコニコしながら、こちらの出方をうかがっている。

この青い部屋に、リーと二人つきり。自分の疑問を解決するために、ここにいるのだ、何をためらうことがあるうか。リーの側にいたあの美人秘書もいない。何の気兼ねもなく、聞くことができるはずだ。

「何を聞いても、いいのか」

ジュンヤは覚悟を決めた。

「ああ。答えられるところはきちんと答えてあげるよ。僕の知っている範囲で、だけどね」

リーは肘を両膝の上に乗せ、両手の指先を擦り付けながらにこりとジュンヤに微笑んだ。

「あの時、あなたは俺にこう言ったんだ、“政府の人間じゃない”って。なのに政府ビルにいる。俺が推測するに、あなたは」

「別に僕は“政府に雇われている人間”じゃないからね、“政府の人間じゃない”って言ったままだよ。そう、君の推測のとおり、僕はこの政府の“総統”と呼ばれる人物だ。騙すつもりはなかったんだ」

悪気のないように彼はまたにっこり笑いかけてくる。

ジュンヤの心中は複雑だった。騙すつもりはと言われると、返答に困るのだ。まるで気がつかなかった自分が悪いような妙な気がしてくる。整理の付かない考えをどう纏めたらいいのか。この気持ちになるべく悟られたくない、ジュンヤは無理矢理台詞を繋いだ。

「あなたが、ディックに撃たれたときから、俺はどうしたらよいかわからなくなった。あなたの言葉が、どうしても気になって、頭から離れなくて。それだけじゃない。あの撃たれ方は、尋常じゃなかった。死んでいてもおかしくない。なのに、あなたは生きています。俺は一体、何がなんだかわからなくなってしまった。そして、“写真”だ。どうして俺の持っている写真にあなたのサインが」

畳み掛けるように次々と質問を浴びせ、ポケットに手を伸ばす。

が、それまでの着衣がクリーニングに出されていることを思い出し、そのまま手を引っ込める。

その様子を見てリーはタイミングを計ったかのように、胸元から一枚のシワになった写真を取り出した。

「君の言っている“写真”ていうのはこれかな。大切にしてくれていたんだね」

箱庭の写真がテーブルの中央に差し出される。

「ディックは……、あなたを随分前から知っているようだった。多分、政府ビルから逃れてきた七年前よりもっと前から。エスターも、あなたと何らかの関わりがあるようだった。そして俺の父親も、あなたに過去に世話になっていられるらしい。あなたがどういう人物なのか、本当のところ、全くわからない。なぜ彼があなたに嫌悪……いや、憎しみを抱いているのか。あなたとディックがどういう関係なのか。想像すらできない。ただ……。まさかとは思うけど……。あなたは……」

「僕が？ なんだい？」

「二十年以上も前に俺の父と会い、ディックと研究をともにしていたのに老けもせず、銃で撃たれても死なないなんて……。それって」

「人間なのか？」

ジュンヤは精一杯の気力を振り絞って、リーに尋ねた。

リーは一瞬、目を丸くしたが、その後、緊張から解き放たれたかのように、腹を抱えて大声で笑い出す。

「ははは、傑作だね！ 僕が人間じゃない？ 冗談だろ」

「何をそこまで笑わなくても……」

「失礼、失礼。僕は間違いなく“人間”だよ。切り裂けば血も出る。感情だってある。……どこかの誰かさんと違ってね。この世界に君臨する僕に“老い”や“死”がないのは、僕が“マザー”に守られているからさ。あ、ここから先は企業秘密だから喋れないけ

どね」

「“どこかの誰かさん”って、ディックのことか」

リーにはぐらかされてしまった分、別の話題にメスを入れてみる。「そうだよ。あの、“ディック・エマード”って人物はね。人間じゃない。悪魔だ」

ディックの話題に変わった途端、リーの表情が変わる。笑みは冷たく、重々しい。

今まで感じたことのない、魂が凍るようなどっぴりとした闇がリーの中から湧き出ていた。

## 22・墮天使の笑み

“古い”や“死”がない、そんなものが生物学的にあり得るのか。何を隠している、何を知っている。考えれば考えるほど、ジュンヤの頭は混乱していく。

「彼が、ここを出て行きたいきさつを、君はまだ知らないようだね。エスターが彼の何なのかも」

リーはジュンヤの心を見透かすように、ぐっと、目尻に力を入れた。

「知っているかもしれないが、彼は科学者であると同時に、殺人を執拗に繰り返す“殺人鬼”なんだよ。幼い頃から人を殺す方法を叩き込まれた。世界に散らばる裏切り者たちの抹殺を謀るため、政府が秘密裏に用意した、特殊機関の出身。……つまりは、“人を殺すために生きている”と言っても過言ではない存在なんだ」

「“殺人集団の一員”……てこと？」

ジュンヤの口からその台詞が出てくるのを待って、リーは深くうなずいた。

握りしめていたジュンヤの拳が、じわっと汗で濡れた。

「彼は人を殺すために生きてきた悪魔だ。出生を隠し、世に紛れ、自分の正体を知ったものを次々と殺していく。ジュンヤ……君だつて、真実を知ったと彼に知られたらどうなることか……。想像に難くないよね。そして、その悪魔は！……科学と言う聖域に足を踏み入れた。土足で。しかも！　自分の娘まで実験台にした」

リーの言葉に、ジュンヤの記憶がフラッシュする。

『ヤツは、知ってはいけないことを知ってしまった。EPTという組織の根底に迫る秘密』

ディックが、過去のことを話していたときのことだ。

『俺はヤツの家族を一人ずつ始末した』



秘密 特殊機関の出身。殺人集団にいた彼が、自分の過去を知られたために、次々に射殺していたのだとしたら。

『俺にとっては、殺しも仕事だった。人を殺すのはなんでもない、当たり前のこと。犠牲だとか可哀相だとか、俺には関係ない』

このディックの台詞は、明らかにリーの証言と合致する。

ぞわぞわと身の毛がよだった。ジュンヤの中で、ばらばらだったパズルのピースが一つずつ組み上がっていく。今まで何気なしに聞き流していた台詞、仕草、全てがリーの言葉によって繋ぎ合わされる。

『前のことは一切わからない。それって、普通に生きている人間として、ありえるものなの？』

苦しむエスター。自分が何か恐ろしいことに巻き込まれていたことを、示唆する発言だった。

ディック・エマードという人間が本当にリーの言う通りの男だとしたら、全ての鎖が、うまく繋がる。

冷や汗がつうーっとほおを伝う。自分の中の憶測に焦りだす。

いや、まさか、そんなことはない。そう思ったかった。自分を今まで支えてきてくれた、父の友人に対して、幾らあんな無残な現場を見せ付けられたとしても、それでも寄せていた信頼の念を簡単になくすことなんか出来ない。歯を食いしばる。

「僕は危険因子から君を遠ざけたい。運命的な出会いをした君を、僕の友人だった“シロウ”の息子である君を、彼の犠牲にしたくない」

青い水槽を背景に、リーはまた、そうやってジュンヤに揺さぶりかけてくる。

「何度も聞くけど、それって本当なのか。俺の父が、反政府組織のリーダーが政府総統と仲良しだなんて、どこの誰が信じるんだ。冗談も大概にしてくれ」

「じゃあ、この写真、君はどう説明するの。見たんだろ、メッ

セージと僕のサインを。これは二十三年前、僕が彼に贈ったものなんだよ。君が持っていたんだ。捏造なんてできっこないじゃないか」「それは」

ジュンヤは言葉を詰まらせた。

「でも僕とシロウのことは、これ以上詮索しないでくれよ。男同士の秘密つてやつさ。悪いけど、いくら彼の息子だからって簡単に教えられないね」

人差し指を口元に寄せ、リーはいたずらっぽく笑う。目を細め、何か確信したように更に更にほくそ笑むと、彼はおもむろに立ち上がった。青い水槽の前、黒服が光を吸収し、ぎゅっと締まって見える。両手をいっぱい広げ、

「世界は」

突如低く声色を変え、両目を見開いた。

目をしばたかせるジュンヤを楽しそうに見下し、

「あの男を中心に回ってるわけじゃない。中心はこの僕で、君はその目の前にいる」

両手を下ろすと、ローテーブルを迂回してゆっくり歩み寄り、ジュンヤの腰掛けているソファアの手前で片膝を付く。

「エマードは君達を使って“復讐を果たしたい”だけだよ。自分でああいう人間にしてしまった、この世界に。だからわざわざ、ここから脱走し、敵であるはずのESへ逃げ込んだ。あの男が如何に卑劣か、僕は知っている。そして、君には未来がある。あんな男と一緒にいてはいけない、絶対に。利口な君なら、わかるはずだよ」ぐつと、ジュンヤの顔にリーが迫る。瞬きも許されない。重圧。

潤んだジュンヤの目と、喉を通る唾の音。

「君のすべきことは？ 誰の言葉に従うべき？」

音のない世界。リーの瞳に圧迫され、息が出来ない。

「このままESに留まって、死の商人の手助けを続ける気がいい言葉はより強烈に、ジュンヤの脳に突き刺さる。

何がしたい、何を言いたい。混乱していく。徐々に、徐々に。

「それとも」

最早それは。

「私とともに、“エスターを守る”か」

洗脳としか言いようがない。

「ちよ、調子のいいことばかり並べ立てられて俺がすぐに動くのも？ あなたの話は都合がよすぎる。俺にどうして欲しいんだ。俺はただ、写真の秘密と、あなたと父の関係を知りたい、それだけのためにここへ」

ソファの背もたれにひつつくようにして、ジュンヤはリーの目線を避けようとした。無駄な抵抗だ、わかっていても、足が思うように動かなかった。

「大切な人の息子を、悪魔から引きはがそうとするのがそんなに不自然かな。僕はそうは思わないけど。真っ直ぐな目、君は本当にシロウに似ている。あの日夢を語り合った彼と、君が同じ人物なんじゃないかと錯覚してしまうくらいに」

親しげなリーの言葉に、極端な悪意は感じない。それでもジュンヤが困惑するのは、ESという組織に対する未練なのか。それともまだディックを信じていたいのか。

生まれてからずっと、政府のやり方が如何に卑劣で如何に姑息か見てきたはずだった。父親が作ったとはいえ、反政府組織に身を置き、自由な世界を夢見て努力してきたはずだった。この極端な世界を作ったEPT政府が憎いと、そう思っていた。

何より、ジュンヤは父を殺した政府を憎んでいた。反政府組織のリーダーという存在がそんなに目障りだったのかと思われるような悲惨な死に様。本当に、本当にシロウがリーの友人だったとしたら

「だったらどうして、父さんを見殺しにしたんだ。軍の兵士に蜂の巣にされたんだぞ。それでもあなたは父の友人だと言い張るつもりなのか」

睨み付けるジュンヤをなだめるように、リーはゆっくり身を引き、

両膝と両手を床に付いた。頂垂れた頭から、サラサラと髪が流れ、その表情を覆い隠した。

「死んだのがシロウだと知ったのは、全て終わった後だ。僕が出会った頃、彼はまだESという団体の立ち上げすらしていなくて。本当に、ただの友人として付き合っていたんだ。まさか敵同士になっ  
ていたなんて、僕には知る由もない。すまない。本当にすまない。  
君と、君の母メイシイ、そしてシロウに、僕はどうやって詫びたらいいのかずっと考えていた。考えた末、写真をきっかけに再び君がここを訪れるようそつと仕組み、あの男から引きはがすことしか僕に出来ることはないという結論に至った。これは僕のがままだ。  
しかし、君のために考えた精一杯でもある」

「顔を、顔を上げてくれ。俺は決して、そんなつもりじゃ」  
態度を翻し下手に出るリーにどう接したらいいのか。ジュンヤはおどおどと彼の肩に手を伸ばした。顔を上げてと思っ  
ても、それをどう表現したらいいかわからない。

今までこれほどまで自分を気遣う他人がいたかと、彼は考えた。  
あの日以来、リーという男を不審だと思っ  
てしまっていたことさえ  
恥ずかしい。

苦心の末、立場の違う友人の息子を。

リーは、彼の中で徐々に神格化されていった。

ジュンヤの心の移り変わりを察したのか、リーはおもむろに顔を上げ、膝を払って立ち上がった。その動きに合わせ、無意識に立ち上がったジュンヤの手に、そつと何かを握らせる。

「何も、君を無理矢理巻き込もうとしてるわけじゃない。ただ、僕の気持ちは知って欲しい。これはね、小型の“空間転移装置”だ。君にあげるよ。この場所をメモリに入れておいたから、来たくな  
つたらいつでもおいで」

真つ赤なボディをした、手にすっぽり収まる二つ折りの携帯端末。折りたたまれた部分を開くと、画面に世界地図が表示された。現在地が黄色に点滅している。

「苦しいだろうから、答えは聞かない。君は一旦、戻りたまえ。お母さんも待っているんだろう?」

真っ黒な羽を生やした堕天使が、誘惑の笑みで魅了する。

「このことはエマードには内緒だよ。……本当に、殺されかねないからね」

ほんの小さな子供をあしらうかのように、リーはジュンヤの頭を撫で付けた。ジュンヤは抵抗することもなく、じっと、端末の画面を見つめている。純粹さが消え、その目には、ディック・エマードという完全悪への怒りの炎がちらちらとたぎり始めていた。

## 23・悪魔

ディック・エマードは再び机に向かっていた。

工具箱を取り出し、部屋中からガラクタ 金属片や壊れた基盤、ネジ類等々を掻き集め、ごそごそと何かを作り出した。机の上には、何かの書類の裏に走り書きされた、設計図のようなもの。それを見ながら彼は必死に何かをいじっていた。まるですべてを放り出しておもちゃに熱中する少年そのものだ。

雨も小降りになり、薄くなつた雲の隙間から少しずつ日の光が漏れ始めている。山々の緑も明るく輝き始め、鳥があちこちの木々から飛び立つのが見て取れる。

しかし、そんな窓の外の光景に一切とらわれる様子もなく、ディックはひたすら何かを作り続けていた。

先刻、エスターがようやく彼の部屋を離れた。泣き疲れてはいたが、泣いた分ストレスも解消できたようだ。すっかり元気になっていた彼女がせっかく彼を食堂へと誘ったのに、彼はそれを拒んだ。まだまだ周りの者とは距離を置きたいらしい。仕方なく、彼女は昼食にと食堂で振舞われていたサンドウィッチとコーヒーを、そつと彼の部屋に届けた。

ディックは机のガラクタの上に居心地悪そうに置いてあるサンドウィッチをほおぼり、更に作業を続ける。止めどなく流れる汗を拭おうともせず、彼は夢中に手を動かした。何かに焦るように。ほんのひと時も無駄にできない、そんな勢いで。

彼は作業をする一方で、頭の中では全く違うことを考えていた。

昔のことを、思い出さなくなかった過去の記憶を整理して、たどっていた。彼は回想の中で少しずつ少しずつ若返り、二十代の青年の頃へと戻っていた。ぼさぼさの焦げ茶の髪に混じる白髪はなく、眉間や額についたシワも、当時の彼にはなかった。脂ぎつたごつごつした身体は清潔感のあるスレンダーな体型になっていたし、

いつしかトレードマークになっていた口髭さえなかった。

地球暦四七四年。

ディック・エマードはネオ・ニューヨークシティにそびえ立つ政府ビルから南へ数キロ離れた研究施設にいた。

巨大なドームの中に築かれた都市には大小さまざまなビルが立ち並んでいたが、その中でもひととき大きくすべてを見下ろすように都市の中央部にあるのが、EPT政府ビル。その最上部はドームの天井と一体化し、名実ともに世界のすべてを支えていた。政府ビルを中心に、放射線状に伸びる道路が都市の景観を更に整然なものにしている。

ドーム中でたくさんの科学者が日々研究にいそしんでいる。政治家や公務員など、この世界ではほとんど無意味だ。すべてが科学で支配され、“科学者として如何に優れているか”ということだけが全てだった。どれだけ研究に専念し、どれだけが発見・発明・分析をしたか。そして、どれだけ政府のために尽くしたか。認められれば政府ビル内のラボへ招待される。何の苦勞もない生活をし、好きだけ研究に没頭できる。それが、この世界での科学者達の夢であり、ディック・エマードもそれを夢見る一研究者に過ぎなかった。

白亜の外壁で覆われた、小さないくつもの四角い箱をくつつけたような、こじんまりとした研究施設で彼は所長を任されていた。

ロボットに意思を持たせようと人工知能の研究をするラボ。どんな小さなロボットにも対応できるAIチップが出来れば更に世界が快適になっていくだろうと、政府の指示で研究開発に励んでいた。有能なロボット工学の科学者たちが数名、当時まだ無名だったエマードの元に集まった。他のラボでもそうしているように、エマード所長は所員の家族を同じ研究施設内に住ませた。家庭が近くにあることで、所員も心置きなく研究ができるはず、だった。

彼は当時二十四歳。背が高く、整った顔とがっちり鍛えられた身体、知的な眼鏡、サラサラの栗色の髪もクールで、道行く女性は密かに彼を噂にした。しかし、そんな外見とは裏腹に、彼は恐ろしく冷たい一面を持っていた。時折見せる凍るような視線は、研究所員たちを震え上がらせた。そして、何よりも恐ろしいのは、彼が人間らしい感情を持ち合わせていなかったということなのである。

ジャン・ウエイという中華系研究員も、エマード所長に不満を抱く所員の一人だった。初めこそ若い所長の才能と力量を尊敬したが、次第に彼の本性を知り、畏怖した。

「所長には何か秘密がある」という噂話がすべての発端だった。最初は何の根拠もないただの「噂」だったのだが、ウエイ所員はふと突拍子もないことを思いついた。

「所長のデータを漁ってみたらいいんじゃないのかな」

誰もが興味本位でうんと頷く。所員たちはその時点で、触れてはいけない事実に触れようとしていることに全く気づいていなかった。そして、恐怖は思ったよりも早くやってくることになる。

“データを漁る”、それは、一人の人間の過去の経歴を遡ること。すべてがデータ管理化されたこの世界では、“住民コード”と呼ばれるマイクロチップが個人情報管理する上での重要なキーになっていた。

“コード”は産院で生まれるとすぐに産婦人科医師によって、赤ん坊の身体に埋め込まれる。どの位置に埋め込まれるかはその医師次第で、大抵は身体の露出しにくい部分、例えば胴体や手足の付け根などに埋め込まれるのが殆どだ。人体に無害な薄いフィルム状のチップだが、埋め込んである箇所を特定しやすいように、皮膚に透けてアルファベットや数字が十桁並んで見える。

何をするにも、この“コード”が重要になってくる。学校に入るときから、医者に掛かるとき、ラボや会社を立ち上げたりするときの身分証明、事故犯罪歴等々。“コード”が人物を特定し、その人物の証明となる。個人情報“コード”ごとに管理され、それらは



すべてネオ・ニューヨーク・シティの奥底にあるという、“メイン・コンピュータ”へ蓄積される。対象人物の死後百年間保存され、自動消去する。データは政府の住民登録系の専用サーバに接続することで、必要であればいつでも本人確認の手続きを経た上で手に入れることができるのである。これにより、すべての人間という人間が政府の元で管理されているのだが。

この“住民コード”データベース上に存在するディック・エマーのデータを漁るために、所員たちは密かに政府のコンピュータをハッキングすることにした。所長のいない時間を見計らい、こっそりパソコンの配線を変え、IPがばれないように、あちこちの回線を介して、コードデータの集積部に侵入する。

「……ない」

ある夜、一人で研究所に残っていたジャン・ウェイ所員は思わず絶句した。そこにあるはずのデータがなかったのだ。

どんな検索をかけても、一つ一つ該当しそうなデータを覗いても、そこに“ディック・エマー”に該当するデータは存在しなかった。「まさか、所長は……」

当惑した彼の背後から、何者かが声をかけた。

「何を……見ている。私に隠れて、何をしている」

振り向き様に見かけた人物に、ウェイは硬直した。エマー所長が目をぎらぎら光らせてその場に立っていたのだ。

「い、いえ、別に何も」

ウェイは必死に否定したが、消そうとしたパソコンの画面が震える手でうまく消せずに残っていた。

エマーは蛍光灯の明かりを消した薄暗い研究室の奥へずんずんと押し入った。眼鏡にモニターの光が反射し、いつも以上に不気味に見える。そしてその奥にいつもより激しく怒りに震えた血走った目が、鬼のようにぎらついている。闇の中にくつきりと白衣のシルエットが浮かび上がった。彼の筋肉質な身体が更に大きく見え、ウェイは恐ろしさにただただ怯えた。

必死に立ち上がり、ウェイは一步一步後退りしたが、その室内はそれほど広くなく、あっという間に壁際に追い詰められる。

ぐんと勢いよく、ウェイの顔面の寸前まで、エマードがにじり寄ってきた。ウェイは蛇に睨まれた蛙のように身動きひとつできない。「お前たちが何しているか、私が本当に何も知らずにいたとでも思っているのか」

薄笑いを浮かべ、目を細めてエマードが言った。

「しょ……所長、私たちは別に、そんなつもりで  
必死の抵抗だった。」

「結果、私の秘密が暴かれるのであれば、経過などどうでもいい。」

お前は知ってしまったんだろう、私が……!!」

エマードはウェイの白衣の胸倉をつかみ、そのまま彼を引きずるようにその研究室を出た。有り余った力でぐいぐいとウェイを引っ張りながら、彼は研究施設に併設された所員用の住宅へ近づいていた。

何をする気なのか、ウェイは焦った。自分の社宅の前で立ち止まり開放されたとき、大きな胸騒ぎがしているのに気がついた。今まで感じたことのない、恐怖。

「口止め料だ」

彼はいつもの、クールなエマード所長に戻っていた。

「今からインターホンを押す。その後、ドアを開けて出てきた人間の命を貰う。それで今回のことは見逃してやる」

「は？ な、何を言って」

エマードの右手には銃が握られていた。彼の愛用のデザートイーグルだ。所長室で時折大事そうに磨いているのを見かけたことがある。

「秘密を知ってしまったのは私んだから、私を殺せばいいでしょう。家族には何の罪もない！」

必死に食らいつくウェイを、エマードは笑い飛ばした。ぎらりと見下す視線が、ウェイの身体を硬直させる。

「ウェイ、甘いな。お前が死ねば、お前の恐怖はここで途切れてしまっただろう。私は、私が負っているのと同等の恐怖をお前に負けたくないんだよ。果てしない闇、生きていくだけでも辛い、簡単に死んでしまうことも出来ない、そんな、真の恐怖を」

エマードの指がインターホんに触れた。

闇の中に、軽快な音が鳴り響いた。

「こんばんわ、夜分に……」

彼は静かに優しく語りかける。

「や……やめる……」

ウェイはエマードの腰にしがみつき、そこから遠ざけようと力一杯引つ張った。ウェイよりずっと若く体力のあるエマードは微動だにしない。言いようのない怒りと恐ろしさに足の先まで震え上がった。こんなことをするのは人間じゃない。彼は本当の。

玄関先の明かりが灯りドアが開く。そこにウェイの母親が立っていた。

「エマード所長、うちのジャンが何か」

深夜一時。

寝巻きのまま現れたウェイの母は、遠慮がちにエマードを見上げた。

「母親か」

後ろを振り返し、ボソツと吐き捨てるように言うと、エマードはゆっくりと銃口を彼女に向ける。

「恨むなら息子を恨むがいい。悪魔に触れた祟りだ」

その音は野獣が獲物を食い尽くすように、無残で、重く重くウェイにのしかかった。

放たれた弾丸は胸を貫き、彼女は玄関先に仰向けになってぼたりと倒れこんだ。壁のあちこちに鮮血が乱れ飛ぶ。

ウェイはとつさにエマードから離れ、倒れた母親に駆け寄った。声にならない声で呼び続けるが、彼女は答えない。抱きかかえた母親の身体を揺する度、傷口から血がなみなみと溢れ出て、ウェイの白衣は瞬く間に真っ赤に染まった。

前後不覚に叫び続ける息子の声に異変を感じ、今度は彼の父親がやはり寝巻きで駆けつける。彼はエマードの手に握られている銃に気がつき、襲い掛かって奪い取ろうとした。が、エマードは事も無げにウェイの父親を振りほどくと、数発の銃弾で彼を撃ち抜いてしまった。

……すべてが一瞬のうちに終わった。

意識を喪失したウェイは目の前の惨事にどうすることも出来ず、ぐったりとへたり込んだ。

上の階で赤ん坊や子供の泣き声がしている。それを何とか沈めようと、必死になだめているウェイの妻の声も。

「妻と子供は幸運だったな。もし、来るようだったら殺すつもりだったが」

返り血を浴びたエマードは、悪魔そのもの。

真っ黒な世界に、ほんのりと街灯と玄関の明かりで照らし出されたこの空間だけが切り取られ、真紅の衝撃で満たされる。

興味本位の行動が、これほどの大きな代償を必要としようとは。

知っていれば触れずに済んだのに。

銃声を聞きつけた警官隊がパトカーを鳴らしながら近づいてくる。赤と青のパトランプが夢ではないことを知らせるかのように。

恐怖の一夜は嵐のように去っていった。

救いの手を差し伸べてくれるはずの警官隊は、現場検証を簡単に済ませると検死のため二人の遺体を警察病院に搬送する手続きをしただけで帰ってしまってしまい、騒ぎを聞きつけた同じ施設内の研究員たちやその家族、近所の住民たちも、警察がいなくなると一緒にいなくなった。現場にはジャン・ウェイとディック・エマードだけが残され、夜明け前の薄暗い闇の中に、二つの白衣のシルエツトだけが浮かび上がっていた。

ウェイは短い人工芝を両手でむしり取るように、強く手を握り締めた。地面についた、まだがくがくと笑う両膝を感じながら、エマードを睨み付ける。

「なぜ、警察はあなたを捕まえようとしないんだ。これだけ明白なのに……！」

エマードは、薄明るくなったドームの天井とビル群を背景に、薄ら笑った。

「研究員の家族を同じ敷地に住まわせている研究所はたくさんある。何のためにそんなことをしているのか、お前は知らないのだな。家族はいわば人質。研究員が謀反を起こせば始末しても良いというのが政府の方針なんだよ」

「……ひ……人質……、謀反……？ “コードが無い”ことを知っただけで、それほどの罪になるのか。それが、私の両親を殺してもいいという理由になるのか」

「世界は、俺を捕まえることを拒んでいる。政府が作った“住民コードシステム”がすべてを支配している限り、コードの無い人間の罪は現行犯で無ければ立証できない。まさか知らなかったのか。いくら罪を犯してもコードのない人間を捕まえることなど出来やしな

い。反政府組織が暗躍する原因の一つだ。この世界では、俺は何をしたって許されるのさ」

血飛沫を浴びた白衣を剥ぎ取り小脇に抱えて、エマードは去った。街灯に照らされ、長く伸びた影が、ウェイをせせら笑っていた。

それから三年があつという間に過ぎた。

ディック・エマードの研究は完成に近づいていた。研究熱心な所員のおかげでAエッチプは大方理想の形になっていたのだ。遠目には順調な研究所。

一方で、エマードのジャン・ウェイに対する執拗な拷問は未だ続いている。ウェイは心身とも疲れ果て痩せこけ、生ける骸と化していた。逃げることなどできなかつた。最愛の妻と娘がいつエマードに殺されるのか、怯えながら生き続けるほかなかつた。ウェイが自ら命を絶つことも、その後の妻子のことを考えれば到底無理な話だ。それでも、彼はその後隠れてはエマードの正体を探るべく様々な方向から調査した。エマードは事あるごとに、ウェイの家族を次々に殺害していく。拷問、家族殺害の繰り返し。研究者ではない、もう一人のディック・エマードがそこにいた。対象はいつしかウェイに限らず、すべての研究員、その家族にまで及んでいた。

恐怖の館　暗闇に光る眼。閉ざされた感情。何もわからない恐怖。

そんな状況下で一番苦しんでいたのは、ディック・エマード本人であつたとは、誰が気が付こうか。

度重なる罪は、エマードの感覚を脆くした。何が起きても、何も感じない。人間の命が次々と自らの手で奪われていくのに、命というものの価値が、彼には感じ取れなかつた。何かもやもやしたものが胸を覆いつくし、エマードは研究どころではなくなっていた。虚しさのような、憤りのような、酷く苦しい灰色の物体が彼の心を占拠した。そして、何も、見えなくなつた。

研究員たちが、チップの最終改良について質問をぶつけても。

ウェイが、以前より外出する機会が増えている。

見知らぬ男たちが、施設の周りをうろつくようになっても。

エマードはぼんやりと、自分の“感情”について胸が痛くなるほど深く考え込むようになった。深い深い海の底に沈んだ船の中に取り残されたような、重苦しい空気がエマードを包み込んだ。

最早、ウェイの不穏な動きさえ、エマードの目には映らなかった。

真っ白な研究施設の壁に、夕暮れ時を告げるオレンジ色の人工太陽光が照りつける。一キ口四方の敷地を囲う高く白い塀まで建物の影がぐつと伸び、住居や施設の陰に潜む何者かを体良く隠している。エマードは椅子にもたれかかり、机にドンと資料の山を置いたままぼんやりと半開きの窓の隙間から外を眺めていた。塀のむこうから、住民の話し声、笑い声がかすかに聞こえる。買い物帰りの母子の楽しそうに弾む会話。優しい声。エマードは恨めしそうに耳をそばだて、目を細めた。心が次第に安らかになっていく。うとうとと、いつの間にか居眠りをしてしまっていた。

誰かが大事そうに自分を抱きしめ、『ここを出たら君は自由だ』と、ささやいた夢を見た。小さな手を引く、大きく暖かい手に、安らぎを感じていた。顔さえまともに思い出せなかったが白衣を着た痩せた男を『おとうさん』と呼んでいた。男は一緒に歩いていた幼いエマードの手を離し、一人、遠くへ遠くへ歩いてゆく。

『置いていかないで！』

小さなエマードが叫んだ。

『おとうさん、どこにいくの！ 僕はこれからどうなるの？』

男の背中がどんどん小さくなっていく。追いかけるが、追いつけない。不安、絶望。あれは……。

カチカチと時計の進む音で目が覚めると、夜の十時を回ったところだった。

「寝過ぎした……」

エマードはすっかり暗くなった所長室に取り残されていた。

彼はのっそり立ち上がり、懐中電灯を手にした。見回りの時間だった。眠い目を擦り、暗い廊下をたどる。

「あんな夢を見るなんて、最近の俺はどうかしている」



足取りが重かった。考え事をしながらやり損ねていた戸締りチェックをし、機械やパソコンの動作チェックを行う。しかし駄目だ。集中力が続かない。自分が何をしたいのか、何の目的で所長として居座っているのか、そんなことまで考え始める。わからない、何もかも。

精神を病んだエマードは、自分の身体を動かすので精一杯だった。誰かが、何かが、自分の背中を押してくればきっと楽になるのに。そう思いながら、フラフラと歩いていった。

長い廊下の奥で、懐中電灯の明かりに反応して、ふいに何かが動いた。

エマードは目を凝らして、それを見た。 人影。 誰だ。

見たことのない人物がそこに立っている。黒髪の、青年。年恰好は自分と同じくらいの、二十代の男。

「……何をしている」

彼の顔を見ようと手元の明かりを動かしながら、エマードは尋ねた。男は眩しそうに腕で顔を隠しながら、後ろへ、後ろへと足を擦った。

「侵入者？ 警報が鳴らないということは、コードのないアナキーストか」

エマードは懐中電灯を左手に持ち替え、懐から銃を取り出して身構えた。正体不明の男にじり寄り、どういう経緯でここに忍び込んだのか問い詰めるつもりで。

突然、大きな鈍い物音がした。

頭が割れるように痛い。ふらふらする。液体がつうつと頬をたどり、あごまで流れ落ちていのに気がつき拭き取ると、鉄分を含んだ血の臭いが鼻先をかすめた。

「シロウ、逃げろ！」

聞き覚えのある声。

懐中電灯がエマードの左手から床に零れ落ち、くるくると回る。その明かりが、自分を襲った犯人を一瞬、捕らえた。

「ジャン・ウェイ……貴様……ッ」

背後に、血のついた鉄パイプを持つウェイの姿が見えた。荒い息、血走った目。怒りと憎しみを込めて、もう一度ウェイはエマードに殴りかかった。

エマードは両腕で頭を抱え、痛みに耐えながら壁に寄りかかる。頭の骨が砕けそうだ、出血も激しい。意識が朦朧とする。

「シロウ！ 早く！」

シロウと呼ばれた青年は我に返り、駆け出す。苦しむエマードを横目に、ウェイも別の方向へ走り出す。

どこかで聞いたことのある“シロウ”という名前。それが誰か、必死に思い出そうと記憶を探る。

思考を遮るたくさんの足音。

フツと、研究所内のすべての電源が落ちた。

非常電源に切り替わり、煙たい匂いがあたり立ち込める。

煙にむせ、窓に寄りかかった。酸素を確保しねばと窓を開けた、その向こうに何十もの人影。塀の外めがけて走っている。

「……裏切り者めがあ……！」

ようやく、事態が呑み込めた。

ジャン・ウェイはアナキストの“シロウ”と手を組み、施設を襲撃した。他の研究員やその家族とともにこの施設から、エマードから逃れるために。

彼は転がっていた懐中電灯を持ち直すと、一階の廊下の窓から外へと飛び出した。人工芝に降り立ったエマードの足音が、大きく響く。影はその音に反応して、怯み、すくみあがる。転びながらも、必死に逃げ惑う人々。

「逃しはしない」

デイツク・エマードの裏の人格が、彼を完全に支配した。

命の重みなど、今のエマードには理解できない。自分の秘密を守るためではなく、人を殺す事が目的。冷静さを完全に失い、目の前の人間という人間を撃ち落とす。確実に息の根を止めるため、彼は

死体に駆け寄り、更に心臓を撃った。

鮮血が白衣や顔に何度も飛び散る。

薬莢が舞う。

エマードの顔はいつしか鬼のように……、恐ろしい事をすればするほど、快感に震え、目をぎらつかせ、笑い出す。自分では抑えきれない、彼の中の何かが目覚めます。それが一体、何故彼の中に巣食っているのか。見るものすべてを殺す事で、彼の心は満たされた。

「裏切り者と逃亡者は抹殺してもいいんだっただな……」

呟き、次の標的を探す。“シロウ”という彼が、走り去った方角へ。

炎があちこちで上がり、小さな爆発音が断続的に続く。パトカーと消防車、それから救急車のサイレンが近づいてくる。塀の外には野次馬の人だかりが出来始めていた。

ラボの中央研究室に、エマードはいた。共同研究のAIチップの試作品が置いてある部屋だ。工具や基盤がいつものように無造作に机の上に置かれている。ほんの数時間前まで、ここで数人の研究員が作業をしていた。今は。

「ウェイ、私のラボでとんでもない事をやらしてくれたものだな」  
床に散らばる数体の遺体、覆い尽くす白煙。パチパチと火の粉が舞い散る。凄惨な現場。

エマードはあちこちに火傷を負っていた。白衣はすすで所々黒くなり、血飛沫の跡と混じって斑を作っている。所員を撃ち殺した小銃からお気に入りのデザートイーグルに持ち替え、炎でちらちらと画面が揺れる中、怯えるウェイを見下ろしていた。目を見開き、眉間にぐつとシワを寄せ、目じりをひくひくと引きつらせている。食いしばった歯と汚れた眼鏡のレンズに炎が映し出され、オレンジ色に光った。百九十センチ近い大柄の彼は、壁際で震えながら鉄パイプを構えるウェイの前に仁王立ちして、威圧する。

「お前は八人いた私の家族を次々に殺した……」

ウェイは恐怖で奥歯をガチガチと鳴らしながら、目の前の男に必死に訴えた。

「最初は両親……、そして兄弟、子供は生まれる度に殺された。妻を殺したのはつい三日前。今では娘が一人残るだけだ。失敗や逃亡が続く度に、家族が減っていった。お前は悪魔だ。こんなに殺しを続けても、まだ止めようとしなない。殺すのは愉快的か。俺は死んでも恨んでやる。末代まで呪ってやる」

エマードは一瞬物悲しげな表情を見せた。

「“呪い”“恨み”、そんな非科学的な事は信じない。そして、お前が家族を殺された気持ちというのも、私にはわからない」

そしてうつむき、ゆっくり首を振る。

「エマード所長、あなたにだって、家族がいたはずだ。あなたを育ててきた家族が。だのに何故そんなにも非情に、躊躇なく殺しを繰り返すんだ。一体何が、あなたを悪魔に変えているんだ」

髪を振り乱して涙でぐちゃぐちゃになりながらも、ウェイは必死だった。

エマードはそんなウェイを見下ろし大きく息をつく。そしてしっかりと、銃の照準を彼の額に合わせた。

「冥土の土産に、ひとつ、お前が探しきれなかった、私の秘密を教えよ」

ウェイの震えがぴたっと止まった。

「知っているとおおり、私には“コード”がない。“コード”を持たない者”は、この世に三種類しか存在しない。そのひとつは“総統閣下”、もうひとつは“反政府組織で生まれ育った者”。お前は私とその二つ目に分類されるのではないかと思っただけではないか。アナキストの手先だと。だから、そういう組織に取り入って私の正体を探り、今回の事件を起こそうとしたのだな。だが、そこでも私に関して何も情報を得る事は出来なかった。……違うか？」

「あ、ああ。そうだ……」

ウェイはこくりと頷く。

「実はもうひとつ、“コードを持たない”非公開の存在がある。政府がひた隠しにする、一般人の知らない、政府の裏の顔。私は……いや、俺は、試験管の中で生まれた。政府の何らかの実験の、ただの副産物だ。生まれたときから、俺は人間ではなく、悪魔だったんだ」

最後の銃弾が放たれた。

銃声は大きく響き、ウェイの額目掛けて一直線に進んだ。

目の前が朦朧とした。酸素が足りず、胸が息苦しいのを感じて意識を取り戻す。

エマードがいたのは、真っ赤な炎に包まれた研究所だった。彼のいる部屋にはそれほど炎は回っていなかったが、真っ黒い煙が渦巻いていた。締め切られた窓の外に赤や青のランプが見えている。消防、救急車、それに警察。明らかに異常なこの現場を見たら、一体何が原因なのかと彼らは不審に思うだろう。自分以外は全て死んでいる。足元には壁にもたれかかったまま額を打ち抜かれた死体、ジャン・ウエイ。

何もここまでしなくてもよかったのではないか。自分を抑えきれない。どうしたらいいのか、どうするべきだったのか、わからない。秘密を、ほんの些細な秘密を守るために、自分に与えられたはずの空間を無くしてしまった。自分自身が憎い。いっそ、このまま死んでしまえるなら、そのほうがいい。

精神力を使い果たし、全身火傷で一酸化炭素中毒になりかけている。それでも彼は、まだ立っていた。クラツとめまいがし、実験机のひとつに倒れ掛かった。カタカタッと、何か丸いものが肘に当たる。彼はぼんやりしたまま、それを手に取った。

「シャーレ？」

蓋付きのシャーレに、血文字で何か書いてある。

彼は煙に侵され視界の定まらない目を擦って、必死に字を読んだ。

「YOU……LOSE……。ど、どういうことだ」

中をこじ開ける。

小さな肉片がひとつ。さらによく見る。

「な、何だこれは！」

住民コードのチップが付いた、人間の皮膚。柔らかかなきめ細かい

子供の皮膚。

全身が震えた。

子供……、ラボの研究員たちの中で小さな子供のいる家庭は少なかった。一人一人、殺した人間の顔を思い出す。

「ウェイの、娘」

たった一人だけ、思い当たる人物がいた。たしか、十三か十四の子供だ。ほかの兄弟よりちよつと年上のウェイ似の娘。目に入れても痛くないとよく話していた。面倒見のいい、芯のしっかりした子だと。

エマードはその皮膚をじつと見つめ、ふと『負け』だと書かれた血文字について考える。考えていくうちに恐ろしい仮定が浮かび上がり、彼は息を呑んだ。

ウェイの愛娘だけ、殺していないことに気がついたのだ。ウェイは彼から永遠に娘を遠ざけるために、枷となるコードを切り取った、そしてあの“シロウ”というアナーキストと共に逃亡を。

「そうか、そういうことか。確かに、俺の負けだ！ そうか、そうだったのか」

最早表情の読み取れない、砕かれたウェイの死に顔。炎に包まれぷすぷすと焼けていく死体を横目に、エマードは笑い出す。

エマードに隠れ、たった一人殺されずに残っていた自分の娘から刃物でコードを削ぎ取り、シャーレに入れて血文字を書いたウェイの姿が頭に浮かんだ。エマードが研究員たちを次々に撃ち落としていく間に、“シロウ”と共に娘が逃げていく姿も。

ディック・エマードは狂ったように笑い続けた。笑い声は外にまで響き渡っていた。

救護隊が消防隊と共に施設の内部へと向かう。放水しながらどんどん奥に進んでいく。ラボの通路にバラバラと死体があるのをひとつずつ、回収する。回収された遺体が、流れ作業のように次々に運び出されていく。それらは淡々と単純作業のように続けられ、辺りに群がる野次馬の間を損傷が激しく身元不明の死体たちを乗せた救

急車が何度も往来した。

炎は収まらず、いつまでもくすぶり続ける。施設を取り囲む特殊車両、荷台に積んだ大型のファンで煙を吸い込み、火災で発生した有毒ガスを中和させていく。閉じられたドームの中で最も恐ろしいのが大気汚染。鎮火と有害物質の拡散防止のため、ありとあらゆる方法がとられていた。

ラボの周囲を取り囲む特殊車両の中に、明らかに用途が違ふと思われる大型のトラックが一台。大掛かりな医療器具が積み込まれている。救急車ではない。その中で待機する、医者らしき人物。真新しい白衣に、少し長めの黒髪を後ろで結った、若い男。

「先生、NO CODEです。まだ生きていますが、意識がありません。どうなされますか」

無線で男に連絡が入る。

「気を失っているだけだろう。こちらへ連れて来られそうか」

「イエス。回収します」

男はフツと静かに笑う。

やがてその特殊トラックに、担架で大柄な男が運び込まれた。所々火傷を負って皮膚がただれ、黒焦げの白衣をまとっている。ヒビの入った眼鏡。そして、気を失ってもなおしっかりと右手に握られたデザートイーグル。

彼を乗せると、トラックは無言でドームの中心部に向かってゆっくりと走り出した。

担架からトラックの荷台のベッドへと移された男に、救急措置が行われる。看護師が医師のような数人のスタッフが、彼を取り囲んだ。患部を冷やし、消毒、包帯、点滴、酸素マスクを当てる。

合間に、長髪の若い男が手のひらサイズの小さな計器を取り出し、そこから発する緑色の光線で患者の体をスキャンした。計器に付いた大きめの液晶画面、人体の絵とそこに重なる“NO CODE”の赤い文字。

「間違いない、“D-13”だ。患部はどうだ。治癒速度は」



患者を診ていた看護師の一人が、

「先生のおっしゃるとおりです。治療を始めたところから、恐ろしいスピードで傷が治っていきます」

トラックに乗ってから十五分、重傷だった患者の傷は殆ど治りかけていた。

『先生、ビルに到着しています。このままここで治療を続けますか』  
運転士からの無線。

「いや、集中治療室へ。みんな、ご苦労だった」

男の合図で患者はビルの中の集中治療室へ。

スタッフが入れ替わり、患者の精密検査が行われる。

「頭部の出血の痕も、骨折の痕も、きれいになくなっていて……！  
治療能力は目に見える部位だけではないのか……。素晴らしい……！」

レントゲン写真を手に、感動を隠せない男。

「探したぞ……。この十何年か、ずっと探していた……。私の手から離れて、あんな辺境のラボにいたとはな。私の勤も、なかなかのものだ……」

エマードが目を覚めたのは、それから数日後。

寝ていたベッドは、明らかに自分には必要無さそうな最新の医療設備に埋もれていた。身体のほうはというと、手足に軽い痺れはあるものの、火傷は殆ど治っていたし、ウェイに殴られ血を流したはずの後頭部にも、別段異常はなかった。

まるであの出来事が嘘だったかのように取り戻した体力。だのにエマードの気持ちは暗く沈んでいた。

「また、生き延びてしまった……。どうすれば、俺は死ねるんだ……」

エマードはぐったりと肩を落とした。怪我は治っても、彼の精神的な部分には回復の兆しが無い。犯した罪の重さに潰される。

点滴も、酸素マスクも、今の彼には不要だった。自分に繋がれた管を抜く。ガシャガシャと医療器具が床に落ちる音。

その時だ。

「君、目を覚ましたのか！ まだ安静にしていなくてだめじゃないか！」

エマードより少し年上、二十代後半か三十代前半と思われる若い白衣の男が病室に怒鳴り込んできた。顔立ちのいいその男は、立ち上がり部屋を出ようとしていたエマードを無理やりベッドへと押し戻した。

## 27・出会うべくして

「普通の人間なら、まだまだ動けないほどの傷だったんだからな」  
男の言葉がチクリと刺さる。

「お前、医者なのか。俺の身体を、調べたのか……？」

エマードは男の表情を覗いながら、恐る恐る尋ねた。

「まあ、医者だからね。君、NCCの出身だろ。コードが無かった」  
黒髪の男はさらっと、エマードの聞きたくない言葉を口にする。  
彼はむすっと、男にしかめっ面を向けた。

「ここでは、コードの無い人間なんてそう珍しくも無いんだよ。実はかくいう私も、コードを持ってなくてね。だから、君はそんなこと全然気にしなくてもいいんだ」

「わからない。俺はなぜ、ここにいるんだ……。ここはどこなんだ……」

ラボ襲撃の事件から意識を失って混乱しているエマードに、男は静かに微笑みかける。

「ここは、政府ビルさ」

「は？」

「君は、ラボでの火災の後、ここへ運び込まれたんだ」

「どういうことだ」

「私の仕事はね、行方知れずになった、有能なNCC出身者の回収なんだ」

長い髪を後ろで結った東洋系の男はそう言っつて、彼を安心させようとする。だが、それは逆効果だった。

「NCC……。思い出したくも無い。嫌だ、俺はここを出る！」

力一杯男を突き飛ばした。よろめき尻餅をつく長髪男をよそに、エマードは病衣にスリッパ履きのままずかずかと病室の出入り口へと向かっていく。

「待て！ 出て行って、君はどうする気だ！ 行く当てはあるのか

「！」  
足が止まった。

男の言葉にぐうの音も出ない。もう、戻る場所さえ無いのだ。病室のドアノブにかけていたエマードの手が、だらりと下がった。「当てが無ければ、どうだというんだ。俺は政府ビルなんかに来れるような人間じゃない。大量殺人で捕まるのが関の山だ」

彼は肩を震わせ、拳をいっぱい握り締めた。

「ところが」

男は立ち上がった、エマードへと歩み寄る。

「政府の見解は違うようだよ。君は、自分自身がNCC出身者であることを、研究員に嗅ぎ付けられていたそうじゃないか」

「……なぜそれを」

エマードは怪訝そうに振り向いた。

「話は最後まで聞きたまえ。政府にとって、NCCは一般人には知られてはいけない、大切な施設。その存在を、自分たちNCCODEの存在を必死に隠した君の行動は、賞賛に値するそうだよ。思ってもみない男の言葉に、彼はたじろいだ。男は一体、何をどこまで知っているのか。そう思うと妙な胸騒ぎがした。

「研究所での成果もずいぶんよかつたみたいだし、NCCODEにしては前例が無いくらい優秀な頭脳の持ち主である君に、政府は専用の研究室を用意してくれたそうだよ。この、政府ビルの中にね」「な、なんだって……?」

一体、何がどうなっているのか。確かに、裏切り者と逃亡者は殺していいとは知っていた。実際にそれをやってしまったが、あれだけの騒ぎ、あれだけの殺人。常識的に考えて、大量殺人罪、流刑されても仕方ないと思っていたのだ。

男はエマードの戸惑いを無視するように、右手を差し出して握手を求めた。

「自己紹介が遅れたね。私は、ティン・リー。さっきも言ったとおり、NCC回収担当の医者だ。コードの無いもの同士、仲良くやっ

ていこうじゃないか」

あの時リーに会わなければ、人生は変わっていたんだろうか。

ディックはふと、作業をしていた手を止めた。だがすぐに、その考えは泡と消える。誰のせいでもない、生まれたときからこの身は赤く染まっていたんだと、目を閉じ自分に何度も言い聞かせていた。

いつの間にか雨は止み、穏やかな日差しが雲の合間からのぞき始めた。

ディックはあれから何日も、夜通し何かを必死に作り続けていた。ついさつき完成したそれを手に、何度も何度もその出来栄えをチェックする。気持ちがいい達成感があった。あの忌まわしいラボで作っていたA Iチップ搭載のロボットを、彼は娘のために作り直していた。材料は廃材ばかりでなかなかの安物だが、彼なりに気持ちのこもった作品に仕上がった。

ドーベルマンの形を摸した、犬型ロボット。エスターへのせめてもの償いに作ったこのロボットを、彼女は喜んでくれるだろうか。簡単な動作チェックを済まし、ディックは久しぶりにゆっくりと重い腰を上げた。

個室から出て通路を通り、奥の食堂へと急ぐ。犬型ロボをしつかり抱え気難しそうな顔で足早に歩いて行く。

エスターが食堂にいるのを確認して、ディックはそつと犬を放った。

小走りでエスターに近づいた犬は、彼女の手前で「ワン！」と吠えお座りした。目を丸くして右から左から興味深そうに覗き込むエスターの足元、尻尾を盛んに振りハアハア身体を揺する様は、まるで本物の犬のように思えた。

「これ、どうしたの？」

料理の下ごしらえをしていたメイシイも、驚いて調理場から出て

きた。

「お前にじゃない、エステルにだ」

ディックはむすつとして、メイシィに顔を突き出す。

「パパが作ったの？」

きらきらと目を輝かせ、エステルはしきりにロボットを撫で回した。

「俺には、これくらいしかしてやれないと思ってな」

金属質で無骨ないかにもディックらしい作品に、エステルは顔を綻ばせる。

「こいつはただの犬じゃない。お前に何かあったとき、俺が側にいないとき、こいつに守ってもらうんだ」

「え？」

隣に屈み込んだディックの寂しそうな表情に、エステルは顔を曇らせた。それは暗に、敵が実験体である自分たち二人を本格的に狙ってくるのだということ。聞かされた秘密を思い出して、エステルの胸は徐々に苦しくなっていく。

「名前を付けてやったらどうだ」

娘の様子に気付いてか、ディックは急にそんなことを言い出した。驚いて顔を上げるエステルの目に、疲れ切った父の顔が見えた。

いつにも増して濃い無精ひげ、目の下の隈、ボサボサの髪の毛。汗臭い、シミの付いたシャツ。父親の真意はわからなかったが、滅多に見せない優しさに目が潤む。

「うん。ありがとう」

犬はクンクンと撫で声を出し、エステルの膝に擦り寄った。遠慮がちに少しだけ距離をとるところが、何となく父に似ていた。

「じゃあ、なんにしようか。パパがDで、私とママがEだから、F。フレディでどう？」

犬の頭を撫ぜんがら彼女が何気なく言ったその台詞で、エマードは再び過去へ連れ戻される。

『せっかく生まれてきたのに……、お前までNO CODEの道を歩むことになるとは……』

地下十階の研究室、暗がりの中、実験体を沈めた大きな円柱形の水槽。緑色に光る水槽の中に浮かぶ、小さな身体。

水槽に貼られた、“E”の文字。

エマードは空ろな目で、その実験体を見つめていた。

『彼女と、名前を付ける約束だったのに。それも、叶わないなんて……。E……、ES……そんな団体があったな……、Earth Save……、ES……、Esther……エスター……』

泣き崩れる。

そして記憶の中のエマードは、さらに過去のことを思い出していき。

『D、今日から君は、ディックだ。ディック・エマードと名乗りなさい。そして、私の息子になってくれないか』

全体がぼやけて、はっきり思い出せない。が、自分がそうされたように、名前を付けようとしている自分。名付けられたことで、自分は“人間”なのだ、実感したあの日……。

「パパ、聞いてる？」

我に返る。

「あ、ああ。いいんじゃないか」

そっけない返事。

焦った。危うく、娘の前で涙が滲むところだった。

「みんなに自慢してくる。嬉しい！ 本当にありがとう！」

エスターは満面の笑みで、フレディを連れて食堂から飛び出した。書いていく彼女の後ろ姿が見えなくなったことを確かめ、ディックは気の抜けたようにふらふらと立ち上がった。大きく背伸びをし、長く長く息を吐く。

「すまん、腹が減った。何か作ってくれないか」

視線の先にメイシイがいた。彼女は「わかったわ」と微笑んではいたが、その笑顔はどことなく影を帯びていた。

ノースリーブの服、左肩をさするメイシイ。そこには、なにかでえぐられたような古い傷跡がある。



## 28・憎しみの連鎖

窓についた雨粒が日の光を浴びてきらきらと光を集め、眩しいくらの日差しを辺りに注ぎ込む。数日分の雨量で川は茶色く濁り速さを増していたが、そのおかげもあつてか緑は一層青々と茂り、残暑の山で生き生きとしている。

広大な自然に不似合いな大きな球体、ES飛空艇は天気回復を見て飛び立とうとメンテナンス中だ。周りで作業をする何人かの人影。厨房の窓から作業員に混じつて、エスターの姿が見える。

デイク・エマードは窓辺で小さな椅子に腰掛けて肘を付きながら、荷物を運んだり道具を手渡したりしている娘を目で追っていた。ロボット犬フレディがエスターの周りを嬉しそうに走り回り、整備士数人が作業の合間にその相手をする。ペットのいなかったESに、機械という無機質な存在だとしてもフレディが加わったことは、彼らの気持ちを更に向上きにさせるとてもよい機会であったことは間違いない。整備士の最年少十六歳のバースに至っては、遊んであげるつもりが逆にフレディにもてあそばれ、まだ乾かない草地の上に寝転がって全身びちよびちよに濡れてしまっている。作業をしながら様子を見ている他の整備士たちにも自然に笑いがこぼれ、それは暖かな日差しをいっぱいに受けた緑の大地の中でまばゆいほどに輝いていた。

「もうすっかり元気みたいね」

隣でそう言ったのはメイシィだった。小腹が空いたと押しかけたデイクのために、遅めの朝食を作っていた。フライパンの上で、卵がジュウジュウとおいしそうな音を立てている。

「エスターは偉いわよ。酷い場面に立ち会って、色々悩んだんでしようけど、それでもきっちり前を向いていられるんだから」

言いながらフライパンを揺らすメイシィの左肩に傷跡が見える。ノースリーブの服の陰に隠れようともせず、存在感をアピールして

いるような傷。えぐられたような跡が生々しく残っている。

「それでもきつと、心は一生癒えないんだろうな、お前のその肩の傷のように」

デイツクはチラッと、その肩の傷に視線をやった。

「癒えなくてもいいのよ」

メイシイはオムレツの形を整え、くるっとひっくり返した。

「それが、生きてきた証なんだから」

「……強いんだな」

「ええ、誰かさんのせいで、強くならなければ生き残れなかったし」「そうだったな」

メイシイは出来上がったプレートオムレツにケチャップをかけサラダを添えて皿に盛ると、パンとスープと一緒にのせたトレイをデイツクに差し出した。が、彼はトレイを膝の上に乗せたまま、少し考えにふけていた。

「ずっと引きこもって、何を考えてたの」

洗い物をしながら、メイシイが横目で尋ねる。

「お前の父親を殺した日のことを、思い出していた」

ガチャガチャと食器のあたる音と、ちやぶちやぶした水の音。

「……それで？」

寂しそうな横顔。食器を洗っていた彼女の手が少し止まる。

「あの後、俺はあの研究室の机の上にふた付きのシャーレが置いてあるのに気づいたんだ。そのふたには血文字で『YOU LOSE！』と書いてあった。切り取られたコードを見たとき、俺は気が狂いそうだった。お前の父は、自分の娘がたとえ傷つこうとも生きながらえる方法を選んだ。そこまでして守りたいものが、この世にあるのかと」

デイツクはそう言って、もう一度メイシイの肩の傷を見つめた。

メイシイはその視線に気付き、蛇口を閉めて手を拭くとゆっくりデイツクに向き直った。

「ねえ、私と再会した日のこと、覚えてる？」

彼女は少し長めの緩いウェーブがかつた前髪をそつと掻き揚げた。「覚えてるよ」

「あの時、私は本気であなたを殺してやろうと思った。あの時も、やっぱりキッチンだったわ。買い物から帰ってきたらあなたがいる。私は、肝が潰れるかと思った……」

今から七年前。地球暦四九二年の春だっただろうか。

メイシイは夕飯の買出しに、スクーターで少し遠くのスーパーまで出かけていた。

その頃のウメモト一家は、シロウが不定期にしているボディーガードや警備の仕事で多少収入はあったものの、決して贅沢な暮らしのできない環境にあった。シロウがESという名の反政府組織の代表をしていることも、生活を苦しくしている原因だったのかもしれない。政府の人間が目を光らせているところには、堂々と出て行くことが出来なかったのだから。それでも彼女らは精一杯に生きていた。例えそんな状況であったとしても不平不満を口にせず静かに生きていれば、何も恐れることなどないのだから。

スクーターのかごいっぱい詰め込んだ安物たちが、ガサガサと揺れる。その音を聞きながらお気に入りの曲を口ずさみ、メイシイはオンボロだが居心地のよい我が家に着いた。裏庭の錆っばいガレージにスクーターを駐め、布製の買い物袋をかごから引つ張り出して彼女は玄関へと向かった。今日のメニューはどうしようなどと主婦らしいことを考えながら。

いつものようにカギを開け、玄関からキッチンへと向かう。「ただいま」の声にも反応する者はない。シロウとジュンヤはまた地下にこもっているのねと、冷蔵庫の前にドサツと荷物を置いた。

「メイ、今来たのか、おかえり。ちよつと話が」

物音に感づいたのか、シロウが申し訳なさそうに現れる。彼女は冷蔵庫を開け、食材を詰め込みながら夫に耳を傾けた。

「ジユンヤと一緒に地下にいたんじゃないの？」

「まあ、さつきまではいたんだが。ちよつとした事件があつてね」  
シロウの言う“事件”とは大抵、逃げ込んでくる政府関係者、反逆者やアナーキスト、浮浪者の保護だった。捨て猫や捨て犬を見つけると決して見捨てる事が出来ない、優しい男。富も権力もないのに、そうやってみんなを守るうとする。だからこそ、慕われる。

「で、今度はどんな“わんこ”を拾ってきたの？」

メイシイは冗談交じりに言つて、冷蔵庫のドアを閉めた。

「実はな、政府のお偉いさんだった男なんだが……。あまりに気の毒だったので、うちで面倒を見ることに……」

視線をちらちら後ろに向けて、いつもよりもバツが悪そうなシロウ。彼はメイシイより一回り年上だったが、いつもわがままに付き合ってくれる彼女には頭が上がらなかつたのだ。

「もったいぶつてないでさつさと紹介しなさいよ。面倒を見るのはあなたじゃなくて、私なんだから」

メイシイの一言に触発されたかのように、隣のリビング・ダイニングからのっそりと大柄の男が現れる。

「彼が」

シロウがおそばせながら、と紹介する。

「今日からうちで面倒を見ることになった」  
百九十センチ近い白い影が、自分の中にしまいこんでいたものと重なつた。薄汚れて、脂ぎつて、……口髭も記憶の中にはなかつたが、彼はまさに、

「“デイック・エマード博士”だ。政府の科学者だつたらしい」

十五年前に自分の父を殺した男、その人だつた。

シヨツクのあまり、メイシイはよろめいて冷蔵庫に寄りかかった。弾みで冷蔵庫がグラツと揺れる。

目の前が真っ白になる。自分と、エマードだけ。

次々に殺されていった家族の笑顔、死に顔。幼かったメイシイにとってそれを目の当たりにするのは生き地獄だった。目の前で何度となく血飛沫が散る。真っ赤に染まった、負の記憶。

幸せな暮らしの中、忘れたいと思いつかないようにしていたものが、一気にメイシイを襲う。鮮明に浮かび上がってくる。何故忘れようとしていたのか。何故彼はここにいるのか。自分に一体どんな用があるのか。考える必要のないことまでぐるぐると、頭の中をものすごい勢いで駆けていく。

混乱。心音が恐ろしく高まり、自分の理性を制御できなくなる。

「ジュンヤを……奪いに来たの？ また私から、全てを奪おうとするの？」

今まで隠れていた狂気が、瞬く間に彼女を覆い尽くした。

「おい、メイ、何を言ってる？」

突然の妻の変化に戸惑うシロウ。

彼女の手は本能の赴くまま、シンク下の扉の裏から包丁をまさぐっていた。震えながらも、しっかりとエマードに刃を向ける。大きく見開いた目。高まる呼吸、荒い息。

「やめろ、何をやる気だ！」

シロウは慌てて妻の前に立ちはだかった。

彼女の目にはシロウの姿は映っていない。声も、聞こえていなかった。

かすれた叫び声のような大きな一呼吸の後、メイシイのか細い手の中に収まった包丁は、シロウをよけて真っ直ぐとエマードの腹部に突進した。

「うぐつ」

刹那、エマードは苦痛に腰をかがめ、膝を崩した。

懐に入ったメイシイの耳に、エマードの心音が鳴り響いた。生々しいほど一定間隔で鳴っていた大きな音が、少しずつ緩やかになっていく。深々と突き刺さった包丁に彼の血が伝った。生温いものが彼女の手に触れ、メイシイはようやく自分がしたことの重大さに気付かされる、押し潰される。

「あ……、ああ……！」

包丁から手を離れた。あまりの事態に手で顔を覆う。自分の手が赤く染まっているのが見える、更に興奮しがくぐくと震え出す。大声を出してしまいそうな彼女の口を、エマードの大きな手がギツと塞いだ。

「声を出すな」

その台詞に目を見張るメイシイとシロウ。

「大声を出すな。二階には子供たちがいる。こんな場面を見せ付ける気か？」

落ち着いた声にはっと我に返る。

「満足か、俺を刺して、満足か……」

低いエマードの声は、十五年前と変わらなかった。眼鏡の奥に光る鋭いダークブルーの瞳も、あの時のまま。

「……そうか、お前は、ウェイの……」

ようやくメイシイの正体に気付き、呟くエマード。フツと吐くように笑うと、床に目をやる。足元に、彼の血がポツポツと小さな円を描いていた。

「あの時、私はどうかしてた。だけど、たまにそのときと同じ気持ちになる時があるわ。　今もそう」

メイシイは眉をひそめ、作業をやめてディックを見つめていた。

彼も、全てを受け止めるように彼女から目を逸らさなかった。

厨房の開いた窓からはエスターや整備士たちの楽しそうに騒ぐ音がひっきりなしに聞こえていたが、彼らの耳には入らない。二人だけの静かな時間、二人だけの空間が作られていた。

「私の父はあなたに殺された。なのに、あなたは平然と人の親になり、娘と会話を交わすことが出来る。……どうして？ 私の父は、私が大人になる姿を見ることすら出来なかったのに」

彼女の手には、包丁が握られていた。迷いなく、切っ先はディック・エマードへと向けられている。窓辺から差し込む光がその刃に当たり、鈍く光る。

「前にも言っただけよ、『私はあの日から進んでいない』って。あなたへの憎しみは、決して消えたわけじゃないのよ」

メイシイの少し低い声、普段とは違う雰囲気にはばらく目を見張っていたディックだったが、刃の先に震えがないことを確認すると頬を緩めた。そして、何事もなかったかのように平然と食事を始める。出来立てだったはずのオムレツは、すっかり冷えてしまっていた。カチカチとフォークと皿の擦れる音が響く。

「殺意などもう無いクセに、一丁前に凶器なんか持つんじゃない」「いい大人を馬鹿にするなどとも言いたげに、ディックはパンを頬張りながらちらちらとメイシイをうかがった。

「ふうー。あなたには、何をしても無駄ね」

メイシイは力を抜いて、いや、もしかしたら最初から力など入っていないかった様子で、シンク下に包丁を片付けた。

「あなたを殺そうとしても無駄なことは、あの時、思い知らされたから。もう、あんなことはしないわ」

「……だろ？」

「それに、私は、あなたという人間がどんなに苦しんでいるか知ってしまったから。本当はこうして会話しているのも不思議なほど、私たちとは違う世界から来たということも」

スープを飲み干し、空になった皿をトレイに載せてメイシイに差し出す。

「同情しているのか」

「いえ。あなたに同情できるほど、出来た人間じゃないもの」

溜め息混じりにっこり笑って、ディックからトレイを受け取る。彼女の、突き放したような台詞が、ディックには少し心地よかった。



### 30・不死

「大丈夫。俺は死なない。お前達は何事もなかったようにこの場をやり過ごせ。包丁は俺が抜く。布を用意しろ。血を拭く布と、包帯を」

メイシイに腹部を刺されたエマードは、包丁で傷が広がらないように注意を払いながら必死に訴えた。包丁の刺さった彼の胴体から流れ出す、大量の血液。エマードの巨体が石像のように動きを止め自身に倒れ込みそうな角度でいるのを、メイシイは両手で頭を抱え見上げるしかなかった。恐る恐る視線を上げれば、粘っこい汗が男の頬から伝わり落ち、メイシイの顔にぼつりぼつりと熱い雨のように降ってくる。

あまりの光景、そして二人の関係に戸惑い立ち尽くしていたシロウだが、エマードの形相で我に返り「わ、わかった」と慌てて場を去る。

二人きりになった。

メイシイは、自分のしたことに対する恐怖で声すら出せないでいた。

彼女の口を塞いでいたエマードの手がそつと離れた。

「まさか、お前がシロウの妻とはな。皮肉だ」

痛みでぐっしょり汗をかいた男は、ふらりとキッチンの壁にもたれ掛かった。彼の白衣は、既に血で染められていた。

メイシイはいつの間にか自分が泣いていることに気が付いた。それが何から来る涙なのか彼女自身にもわからない。自分の過去に対する苦しみか、彼に対する恨みか、それとも感情に突き動かされ彼を刺してしまった自分への哀れみなのか。

「人を刺した感触はどうだ。それで、お前は過去を清算出来ると思っただのか」

ゆっくりと落ち着いて、しかし、明らかに苦痛に耐えて、エマー

ドは自分を刺した女を見つめている。荒く、辛そうな呼吸。床にたたたる血液。

メイシイは視界をうろろさせ、何とか自分を取り戻そうとする。しかし彼女の頭は、彼を刺したという衝撃に蝕まれ何も考えることが出来ない。

「もう一度言う。俺は死なない。お前は、何の罪も犯していない。」

お前が刺したのが、俺でよかった。もし自分の夫を刺していたら、お前はこの先生きていくことをやめてしまうところだった。…

…いかに、喋ると刃の先が内臓に当たる。早く抜きたい。シロウ・ウメモトはまだか……」

エマードの足元の血溜まりが、どんどん広がっていく。この状態で立っているだけでも、相当な体力が奪われているはず。

「大きめのバスタオルと、包帯を持ってきた、どうすればいい」

シロウがやっとキッチンへ到着する。彼も、恐ろしさで未だ膝を震わせている。

「タオルを貸せ。刃を抜いたときに、血が飛ばないように」

頼りないシロウからバスタオルを奪うと、エマードは包丁ご自分の身体の前方を覆う。そして、タオルの上から包丁の柄を握り、慎重に刃を抜いた。圧迫されていた血管からおびたらしい血がバスタオルへと降り注ぐ。あつという間にタオルは真っ赤に染まり、零れ落ちた血でキッチンの床全体が赤くなった。

バスタオルと彼の身体の隙間から、包丁が無造作にコトンと滑り落ちていく。

血飛沫は壁や食器棚に飛散することなく、うまくバスタオルに染み込んだようだ。床は赤いまだら模様……まさに、地獄絵図。

あまりの光景に、さっと血の気が引いた。メイシイは耐えられず、吐き気を覚える。胃液が逆流する。

「血が……足りない……、クソッ。酸素が、脳まで届かなく。包帯を。止血しなくては……。いや、その前にこの血痕を」

エマードの思考は、次第に途切れ途切れになっていた。出血多量、

しかも立っている分、体力の消耗が激しい。視界がぼんやりとしてくる。バスタオルを掴んでいた手が緩み、はらりと落ちる。

「歩けるか、リビングのソファに横になろう。これ以上立っているのはヤバイ」

気を取り戻したシロウが肩を貸し、エマードを連れてリビングへと歩いていく。靴の裏に付いた血糊が、苦しそうに後を這っていた。慎重に傷口を広げないように、シロウは腹を押さえたエマードを、そつとソファーに寝かせた。

「エマード博士、あなたの言いたいことはよくわかった。妻のしたことは、本当にすまないと思っっている。あなたとメイの間に一体何があったのか知らないが、詮索するつもりはない。今、すべきことをしなくては」

横になつて落ち着いたのか、エマードの呼吸が少しゆったりしてきた。汗も少しずつつ引いてきたようだ。目を瞑り、深呼吸している。

「今、包帯を巻いてやる。メイ、お前は床を。子供たちがやってくる前に。血の付いたバスタオルや雑巾は、後で処分しておく。汚れた服は、後で取り替えよう。サイズが合うといいんだが」

シロウは手際よくエマードの汚れたシャツのボタンをはずし、用意していた濡れタオルで傷口の血を拭きとった。腹部の少し左寄りにぱっくりと縦に開いた穴。そこから血がにじみ出てくる。リビングの棚にあった救急箱から消毒液を出し、脱脂綿に含ませる。

「この傷は……、深すぎる。大至急医者に診せるべきだ」

傷口の間から内臓が見え隠れする。目を覆いたくなるのを必死に絶え、シロウは消毒を続ける。染みるのか、エマードは時々唸り声を上げた。

「医者はいらない。傷はすぐに治る」

エマードは薄目を開け、シロウの顔をチラッと見るとすぐに目を逸らした。

「この傷が、すぐに治る傷か！ バカヤロウ！ 駄目だ、傷口から

バイキンが入ったりしたらどうするんだ。もしものことがあったら、あの子はどうやって生きていくんだ！」

「死なない、俺は死なないんだ……」

エマードはシロウから目を逸らしたまま、ぐっと身体に力を入れた。圧迫された傷口からぶわっと血液が押し出される。最後の一滴が腹部を伝い、シャツににじむ。

「……？　なんだ、これは」

シロウは脱脂綿で、ゆっくりと傷口をなぞった。おかしい。さっきより、傷口が小さくなっている。

「俺は、幻覚を見ていたのか」

八センチほどあった傷口は、そのとき、三センチになっていた。何かがおかしい。

「だから、俺は死なないんだ」

エマードが付け足す。

床を拭き終わったメイシイが、二人に駆け寄る。「大丈夫？」と屈みこむメイシイに、シロウは彼の傷を指差す。

「言ったはずだ、俺は死なない、何事もなかったようにやり過ごせと」

エマードの傷は、そう言っている間にも癒えていき、終いには傷の痕さえ見えなくなった。

その様を、二人は呆然として見ていた。

本当に、完全に治っている。

「どう、なってるんだ。あなたは一体……」

「包帯はいらなかったな。せっかく用意してくれたのに、すまん」  
エマードはそう言って、おもむろに上体を起こした。まだ少し痛むのか、お腹を擦る。血だらけの白衣とシャツを脱ぐ。科学者と言う割りにがっちりとした筋肉質の身体が露呈した。

「これでも、昔よりは劣ってきているんだ。俺の中の、細胞に仕組まれた“自己修復機能”というヤツは」

くの字に配列されたソファアーのもう一辺に座る二人。

「自己修復機能」……？ 初めて聞いた」と、シロウ。  
「再生するって、こと？」メイシイもオドオドしながら、エマードを見つめる。

「自然治癒力のもつと進んだものと思ってくればいい。怪我をしてもたちどころに治ってしまう。急所であつてもそれは変わらない。今まで何度と無く殺されかけたが、やはり無駄だった。俺は、死ぬことが出来ない身体なんだ」

エマードはソファアールから立ち上がり、ぐるっと辺りを見回した。リビングからキッチンにかけての道筋に、血の跡が残っていないか目視で確認する。

「どうやらうまくやってくれたようだな。……シャワーを借りてもいいか。あと、服も」

「なあ、教えてくれないか。あなたは一体、何者なんだ」  
シロウの問いかけに、エマードはあからさまに表情を歪めた。

「ただの、落ちぶれた科学者だ。これ以上は何も言えない。……E Sとやらには、出来る限り力を貸してやる。その代わり、詮索するのはやめてくれ」

「わかった。……条件は飲もう」  
「すまない。世の中には、知ってはいけないこともあるってことを、ちゃんと理解しているようだな。ここへ来てよかった」

そうして、ディック・エマードとエスターは、ウメモト夫妻の元で隠れ住むことになる。以後、シロウが死んでも、約束どおりメイシイはそれ以上の詮索を行わなかった。

たとえ彼が自分の親の敵で非道な人間だったとしても、それなりに理由があつてそうなつてしまったということにメイシイは感付いていた。だからこそ、シロウが死んでも彼の手助けを続けている。人を憎しみ続けるより、その人をわかつてあげたいと、彼女は思う。

それが、辛い過去を乗り越えてきた彼女の選んだ、生きる道なのだ。

昼食の時間が近づいている。整備士や操縦士たちがこぞって食堂に押しかける。悩んでいる時間など無い。いつもの生活に戻らなくては。

手際よく、支度する。

厨房の隅でディックはまだ外を眺めていた。エスターが数人の整備士と共に後片付けをしているのを、静かに見守っている。窓枠に寄りかかり、じつと彼女を見つめる視線は、どこにでもいる平凡な父親のようだった。意思疎通が少し苦手な、ただの中年男。

もし自分の父が生きていたら、きっと同じ視線で私を見つめていたかもしれないと、彼女は思う。形は違えど、やはり二人とも娘を守りたいと切に願う心だけは共通に持っていたのだから。

ディックの姿にジャンを重ねたが、決して不快にはならなかった。むしろ、この平和な光景がいつまでも続きますようにという祈念に変わっていった。

### 31・打診

食堂が賑やかになる前にディック・エマードは席を立った。誰に遠慮してか、身を隠すように遠回りして自室に戻る。

ドーナツ状に部屋が並び、緩いカーブを描く単調な廊下が続く。最下層のエンジンルームから船体を貫くように伸びた柱状の機械室。その扉の一つから見覚えのある影がスツと現れ、ディックの足を止めた。

「ちよつと話が」

人目憚るように左右を見回し、手招きして室内にディックを引き込んだのは、ハロルドだった。

分厚い扉が閉じ、普段は真つ暗な機械室に明かりがともされると、ディックはいかにも面倒そうに顔を歪ませた。

「何の用だ」

「まあまあ、そう怒りなさんな」

事件の日からじつと籠もりきりだったディックを待っていたとばかりに、ハロルドは少し興奮気味にポンポンと彼の肩を叩いた。壁に立てかけられていた作業用の背の低い脚立を二つ広げ、まず座れと促してくる。

「お前から色々聞かされて、俺も最初は参った。だけど、こんな俺でも力になることがあればとあれから思案してたんだ」

ハロルドの声は明るかった。まるで子供みたいににこにここと頬を綻ばせる彼に悪気はない。話題が話題だけに、ディックはそんな彼の態度が少し気に入らなかつた。

「思案して何とかなるものだったのか」

仕方なく脚立に座り、腕組みをしてハロルドの中年顔を睨み付ける。

「そついう怖い顔をしない。俺だって役に立つことくらい出来るさ。こつ見えて顔が広いんだ」

「顔が広い？ それ俺と何の関係がある」

「長年あちこちで働いて今はここに居るわけだが、政府で運び屋をしていたときに面白い男と出会ったのを思い出した。今でも偶に連絡を取り合ってる。そいつと会ってみる気はないか」

唐突な誘いにディックは目をしばたたかせた。

「何を言い出すかと思えば」

期待していたわけではないが、役立ちたいといった割に結局他力本願かため息が出る。くだらんと一言、立ち上がるうとするディックの白衣の端を、ハロルドはぐいと引っ張った。

「会わせたいのはきちんとした理由がある。俺が未だ政府にいた五年ちよつとくらい前のことだ。初めてE.U.ドームで出会った時、そいつ妙なことを口走ってたな。“ハッキング”がどうの“メイン・コンピュータ”がどうの。ヤツは技術屋なんだ、機械系の裏でも色々やってるようで……あのドームの体質を考えれば別に不自然なことじゃないが、政府の内部事情についても妙に詳しくかった覚えがある。確か、お前のことも少しだが知っていた。俺がESに来て、政府の科学者だった男と行動を共にしていると喋ったら、『ああ、あの人か』って。彼ならお前が知らない別の経路からの情報も持っているかも知れない。どうだ、会ってみたら何かわかるかも知れないぞ」

ハッキングと聞いてディックの眉がぴくりと動いた。無意識に身体がハロルドに向き直っていた。

「どの程度の技術力か知らんが、ハッキングで拾える情報なんてたかが知れてる。最深部まで侵入しなければ辿り着かない真実だつてごまんとある。……くだらん。そんなヤツと出会って何がわかるって言うんだ」

「頑なだな。もっと柔軟に生きろよ。せつかく人が手を差し伸べて。こうなったら意地でも会ってもらうからな。元々E.U.ドームには用がある。そのついでに会うまでなんだ、拒む理由もないだろう」



最初から決まっていたとばかりに彼は言う。

とうとうディックは大きいため息をついた。

「……好きにするがいい」

「じゃ、決まりだな。こっちから連絡はとっておく。仕入れのこともあるからな」

にたつといたずらっぽく笑うハロルドに、ディックは何も言い返せなかった。彼は彼なりに自分のためと思って行動しているらしい。そう思うと複雑で、何を言ったところで丸め込まれてしまうような気がしていた。

ようやくハロルドから解放されたディックは、機械室を出て再び無機質な廊下を進んだ。

並んだ個室の一番奥、自室に入るとドアに鍵をかけ、いつものように窓際の机に向かう。分厚い医学書を取り出しページをめくった。ドイツ語の古い記述を一文一文目で追っていく。

メンテナンスを終えた飛空艇が、ゆっくりと動き出した。

眼下に広がる大地、窓の外の景色は彼の目には入らない。美しい色たちよりも、彼の心を捉えるのは知識と文字。時間を惜しむように本を読み漁る。まるで、そうすることが彼自身を生かしているかのように。

リーの事件から十日。ようやく船は日本を離れ、ヨーロッパへと向かう。そこにはEUドームがある。小さなドームが群れを成し、それぞれが通路で繋がれている。それらの一つ一つが巨大な工場。地球上で生産されている食料、工業製品はそこから出荷されている。EUへと向かう理由は、食料生産ドームからの物資補給なのだ。

ハロルドはそこにいるというハッカーとの接触を促した。彼からEPT内部の情報を聞き出し今後に備えるというのが、ハロルドの筋書きのようだ。

その男は果たして信頼できる人間なのか、何故自分のことを知っていたのか。ディックの中に疑念が渦巻く。もしその男がいつかのジャン・ウェイのように、メイン・コンピュータから自分の情報を

探り出しているのだとしたら。考えるだけで寒気がした。自分の過去をほじくり返されたくないという想いは、昔も今も変わらない。出来ることなら、自分という存在がこのまま空気に溶けてそのまゝ跡形もなく消えてしまえばいいとすら思う。しかし、与えられた“自己修復機能”はそれを許さない。

生きていくことの苦しみ、終わることのない闇。全てが、彼の心を深く傷つける。例え身体の傷が癒えても、どうすることも出来ない。『強くならなければ生き残れなかった』というメイシイの言葉は、自分自身にも当てはまった。本当は脆い、薄いガラスで出来たような心。幾重にも巡らした、頑丈な知識の壁、経験の盾を剥がされれば……きつと、簡単に砕かれてしまう。

ハロルドが紹介したいという男と会うことは、自分自身にとってよいことなのか。心を丸裸にされ、自分自身を失うようなことが

リーを撃つたときのように ならないとは限らない。

窮屈な気持ちを紛らわせるように、ディックは本を読み漁る。少しでも思考を止めればきつと、もっと苦しくなるだろうから。

島を離れてから半日後、次第にドームがはつきりと見えてきた。

ネオ・シャンハイと同じように、しっかりと蔦で覆われたドーム群。巨大な卵をいくつも埋め込んだような異様な光景を、ディックは視界の切れるギリギリのところを感じ取っていた。

寒気がする。嫌な予感も。

決して、リーの不気味な笑いだけがそれを助長しているわけではない。自分自身の隠し続けていた過去が露呈し始めたことによつて、大切にしていた何か音が立てて崩れていくのを守れない自分自身の弱さ。それが原因の一つであることを、彼は知っている。

もしかしたら、誰にも話したことがなかった過去さえ全て暴かれてしまうのではないのか。

ドームが近づくとつれ、ディックの鼓動は早くなつていった。

### 32・動き出す闇

ジュンヤは飛空艇の自室でベッドに座り、手元の装置をじっと見つめていた。

リーがなぜ自分にこれを渡したのか。それはきつと信頼の証だと、ジュンヤは思い込んでいた。あの、ディック・エマードという恐ろしい悪魔と共に戦ってくれという無言の協定であると。

手のひらの中の赤い携帯端末。液晶画面に映る世界地図。アジア大陸を横切るように赤い点が移動している。メニューボタンから“メッセージ作成”を選択。

「一時間後……E.U.ドーム」

送信。

つい先ほど船内放送で聞いたそれを、彼はリーに知らせる。

「後戻りは、もう、出来ないな」

薄暗い室内、端末をポケットにしまふジュンヤ。大きく深呼吸する。

真っ黒なスーツに身を固め、きゅつと唇をかみ締めた。彼に今までの面影はもうない。鋭い眼光、漂う殺気。ES要塞の中で彼にだけ漂う異質な空気。

「俺は、俺の選んだ道に行く」

短い髪の毛をきゅつと立て、気合を入れた。すつくと立ち上がると、ジュンヤは意を決して部屋を飛び出した。

力強く開いたドアの向こうに、エスターがいた。いつからそこに立っていたのか、酷く驚いている。両手で口を押さえ、二、三歩下がる。

「あ、ご、ごめんなさい。こんなところで立ってた私が」

ジュンヤの個室の前、薄明るい廊下の光。ぼんやりと浮かび上がったエスターの表情は、少し前より明るくなった気がした。

「どうした」

彼はふと、彼女の足元を見た。その側に控える犬型のロボットに、ジュンヤは見覚えがない。

無機質でシャープな作り、ドーベルマン。あの男が作ったに違いない。そう思うと無意識にロボットをにらみつけていた。

ジュンヤの威嚇に反応し、フレディも臨戦態勢に入ったかのように唸り始める。機械の擦れるようなギリギリとした音が狭い廊下に響いた。

「フレディ、なんて音を出すの。やめなさい！」

エスターが牽制し、屈んで背を撫ぜるとようやく犬は大人しくなる。それでもまだフレディは、小さな唸り声を止めなかった。

「ごめんね。今までこんなことなかったのに。どうしたのかな。この犬、フレディっていうの。パパが作ってくれたのよ」

彼女は優しく犬を抱きしめ落ち着かせると、ゆっくり立ち上がってジュンヤを見上げた。

「最近、どうしたの。あれ以来、殆ど顔を見ていなかったから心配で」

彼女の瞳は、いつもと同じく透き通っている。純粹で人を疑うことを知らない、無垢な少女。この美しい人を、あの男が父親であるということをも盾にもてあそんでいることが許せなかった。

「E.U.ドームに着いたら、俺は船を下りるよ」  
ポツリと呟くジュンヤ。

そのさりげない一言に、エスターは地に落とされる。

「どういうこと、E.S.を抜けるってことなの？」

「ああ」

「そんな、どうして……。抜けて、それからどうするの」

よろめき、壁に背を預ける。少女から笑みが消えた。

「エスター、君は何にもわかつちやいない。ここにいたって、俺達は何も出来ない、何も変わらない」

足早に去ろうとするジュンヤを引きとめようと、エスターは彼の背広の端をくいと掴んだ。待ってという言葉が、なぜかすんなり出

てこない。

布端が指の間をすり抜けていく。

もしかしたら、ジュンヤはこのまま帰ってこないかもしれない。手の届かない遠くの世界へいってしまおうような気がする。小さくなっていく背、彼女の胸は嫌な予感に押しつぶされそうだった。

政府ビルの最上階、総統執務室に集う特殊任務隊のメンバーたち。豪華な応接コーナーにどっしり腰を据え、それぞれが不穏な空気を漂わせる。チームを組んではいたが、彼らは互いに心を許し合っているわけではなかった。総統の命により掻き集められた烏合の衆。それぞれが思い思いの服装で、見た目全くまとまりがない。チームリーダーのケネスが目を光らせなければ好き勝手やりたい放題、危険集団に他ならない。

「その、“ジュンヤ”という男は本当に使えるのですか」  
軍服のケネス・クレパスが低い声で、執務机でワインを味わう総統に問う。

リー総統はにやりと含み笑し、赤ワインで満たされたグラスをそつと机に置いた。

「彼の利用価値は“試験体E”を回収できた時に、初めて認められるものだ。過剰な期待はすべきではない。しかし今の時点では、確実に彼女を無理なくこの場へと引き入れるための布石にはなるだろうと判断した。私の読みが間違っていないければ、だがね」

「つまり、憶測に過ぎないというのですね」

銀縁の丸眼鏡をかけたメンバー最年少の青年、ロイ・グレイが声を上げる。シックな黒い服を無理なく着こなし、天才肌を見せつけるように眼鏡をくい人差し指で突き上げた。

「素性も知らない敵方の人間を、こちらの協力者として招き入れるのは、どうかと思いますが」

「素性？ ロイ、君はそんなくだらないものに固執するのかい。彼

はESの創始者の息子だよ。ただそれだけだ。他には何も無い」

さらっと言つてのけるリーに、それまで黙っていた最年長の老人  
スウィフトが重い口を開いた。

「敵の……中心人物の一人、ということですか。そんな男を何故  
わしには理解しかねる」

その発言に、一同が頷く。

「説明不足で申し訳ないな」

リーはぐるっと、全員に目配せした。それから口と唇の端を上  
げ、話を続ける。

「どうやら“E”は、その男に想いを寄せているようなのだ。男は  
純真で、私の思惑通りに動くタイプ。何の疑いもなくこちら側にや  
つてくるはずだ。彼の協力は、あの忌まわしきディック・エマード  
への報復と“E”の回収の足がかりとなる。　　そういうわけだか  
ら頼むよ。君らが協力してくれないと困るんでね」

両手の指を絡め微笑むリーに見つめられ、メンバー唯一の女性パ  
メラはソファアの上で顔を赤らめた。その様子を隣で見ていたエド  
モンド・ケインは不満そうに顔をしかめる。

「すぐに納得してくれとは言わない。全ては彼次第だからね。あれ  
から数日経つ。私からの贈り物、そして言葉に、彼の思考は少しずつ  
つ捻れていったはずだよ。楽しみだね。もうそろそろ、ショーが始  
まる」

総統の意味ありげな言葉に、彼らは目を見合わせた。

### 33・地下通路

もう何十年も使われていない、薄汚いトンネルの中に二つの細い光が走った。光は飛沫を上げ、奥へ奥へ進む。

ヘドロ化した下水が底に溜まったこのトンネルは、かつて点在した世界各地の地下核シェルターを繋ぐためのもの。しかし今はその姿を地上のドームの下に隠すのみ。大戦後しばらくは頻繁に人や車が往来し、食料や物資を運ぶために欠かせなかったそれも、月と火星の開発が進むにつれ不要になりいつしか封鎖される。EUドームでの食料・工業品生産が活発化し、ドーム間での物資移動が必要になっても、その通路は使われることなく廃墟と化してしまった。空間転移装置が発明され、大量輸送が簡単に行われるようになったためだ。今や移動手段さえ、電子化してしまったのだ。

忘れられた通路を走っていたのは、二台のエアバイク。光はその前照灯だ。車輪を持たず宙を滑るように走るそのバイクの一台には赤毛の美しい女、もう一台には威つい身体をした黒人の大男としかわがれた老人。三人とも、ヘルメットの中で鼻をつんざくような臭いに絶え、揃いの皮製の黒いライダースーツをまとっている。

ヘルメットからはみ出した風になびく美しい髪の毛を押しよけるように女は振り向き、少し後ろを走るもう一台のバイクに視線をやった。

「総統の命とはいえ、こんな通路を通るなんて正気じゃないわよ！

ねえ聞いている、じいさん！」

ヘルメット内臓のインカムから甲高い声が飛び出す。

「うるさいわい！ 聞こえとる！ パメラ、おぬしが言うことはもつともじゃが、これ以外移動手段がないのだから仕方なかるう。我慢せい」

キンキン声を振り払うように怒鳴り散らしたスウィフト老人は、バイクから振り落とされまいと必死で大男の腰に掴まっている。風

圧で細い腕がちぎれそうになりながら。

「出来ることならば転移装置で軽々と移動したいところじゃが、Eドームにあつた装置は勝手にプログラム変更されとつて、地球からじゃ行けないようになつとるそうじゃ。月や火星の装置は丁度メンテナンス中で稼働できんし、遠回りも無理。ヤツらわかつていてこの時期を選んだのか、偶然なのか。ともかく、今Eドームに侵入できる方法と言つたらこの古い通路だけ。それでもワシらが行かねばならんのは、このチャンス逃せば、今度“E”を捕らえるチャンスがいつになるかわからんからじゃろ」

「ええ、わかつてるわ。新参男が“E”を捕獲するには、私たちがエマードの足止めをしなくちゃいけないこともね。……武者震いがするわ。一体エマードつて、どんな素敵なおじ様なんでしょうね」

「想像するのはお前さんの勝手じゃが、あんまり期待せんほうがいい。あれはまつとうな人間じゃない。恐ろしい男じゃぞ」

「あーら、だから楽しみなんじゃない。私、あの時の興奮が忘れられないのよ。政府の目をあざむいて、飛空艇をこしらっていたあの周到さ、大胆さ。一体彼はどういう人物なのか、この目で見てみたいわ」

イヤホン越しに、パメラとスウィフトの会話を聞いていた大男エドモンド・ケインは、彼女の興奮したような声に苛立ち眉をひそめた。

数時間休み無しで走り続け、やっと通路の出口が見えてくる。

ラストスパート、ようやく辿り着いたことに歓喜し、滑り込むようにしてかつてのドーム連絡通路出入り口前にエアバイクを停めた。「やっと着いたわね」

ヘルメットを脱ぎ、ずっと我慢していた水分補給を済ますと、パメラは生き生きともう一台に乗り込んだ二人に顔を向けた。

エドとスウィフトも思い思いに水分や栄養を補給し、一息ついていた。最悪の路面状態に、既に一仕事終えたような表情をしている。



「さて、これからが本番よ」

ガシャンと銃に弾を装填する音。石造りの地下街によく響く。

「準備はいい、じいさん、エド」

燃え盛るような鮮やかな赤い髪を振り乱し、黒のライダースーツから豊満な胸をのぞかせてパメラは言った。華奢な身体に似合わぬ大きめの散弾銃。黒光りし、妖艶な女に花を添える。

「まずまずじゃがな……、出来ればその前に、この臭いを何とかしたいもんじゃ」

大男の運転するエアバイクの後部座席で、ウィフト老人がぼつそり呟く。この一言は、パメラが言うまいとしてじつと飲み込んでいた言葉だった。

「じいさん、それは言わない約束！ 好き好んで地下道通ってきたわけじゃないじゃない。私だって、臭いの我慢してるんだから。あゝ、イヤイヤ、私の美貌が台無しじゃない。鼻から臭いが取れないし！」

パメラは何度も鼻を摘み、もぎ取るような動作を繰り返す。総統の命令とはいえ、暗くじつとりとした地下道を通るのは、気が引けた。こうなることは半分予想できていたのに。彼女は悔しさから、顔中の臭いを剥ぎ取るように何度も自分の頬を叩いた。

三人からは何とも不快な臭いが漂っている。生臭い、泥のような臭い。長い間使われていなかった地下道をエアバイクで走ってきたせいだ。底に溜まった泥がエアバイクにあおられて飛び散り、全身に浴びる結果となってしまうた。おかげでこの臭い。予想だになかった事態、必要以上に動揺する。

「臭いなど、そのうち取れる。気にする必要はない」

パメラより一回り大きいエドがぶつきらぼうにそう言ったので、彼女は益々不機嫌になった。

「あなたねえ、エド。女性にとっては香りはとっても大事なのよ。何にもわからないくせに！」

フン、とそっぽを向き、パメラは懐から取り出した気に入りの香

水を、シュツシュと首筋に噴きかけた。ほんのり、薔薇の匂いがたちこめ、彼女は安心したように再びエアバイクにまたがった。キリツと身を正し、ハンドルに引っ掛けていた防塵マスクとヘルメットを装着。エアバイクにエンジンをかける。

奇妙な一団は一斉に噴煙を上げ、EUDームの内部へと侵入を始めた。

赤いスーツの女が、ソファアの上でゆったりと構えるリーにそつと珈琲を差し出す。

「酷いことをなさいますのね。今更あのような通路を通らせるなんて」

秘書の女は彼に優しく微笑んだ。

「私は使えるものは何でも使う主義だから」

「まあ」

「せっかく少しずつ、歯車が噛み合い始めたんだ。このままの勢いで“E”を手に入れたい。マザーのために、ジュンヤがどれほど動いてくれるのか期待しようじゃないか。なあ、ローザ」

彼は差し出されたカップをゆっくり持ち上げ、立ち上る湯気の香を嗅いだ。その笑みは残酷で、冷徹。秘書の女、ローズマリー・グリースは背筋が凍るような恐怖を覚えた。

彼女が“総統”であるティン・リーの秘書となってから五年が過ぎた。ローズマリーはリーの正体を知る数少ない人物。しかしそれでも、彼の心の内までは図り知ることが出来ず、悩まされる。その冷徹さがどこからくるのか、何故エマードにそこまで執着するのか、彼の闇の心臓部まで辿り着くことなど、出来そうにない。もし仮にそのようなことをしようとすれば、きつと消される。だから彼女は、秘書として知る必要のないことは知らないように探らないように、心掛けているつもりだった。

好奇心がうずくようになってしたのは、エマードがエスター……自分

の娘を“エレノア・オーリン”と称させ、町を徘徊させるようになってからだ。なぜかしらリーはその名前に執着し、目をぎらつかせてエマーダの消息を追うようになった。“エレノア・オーリン”という女性と、総統と、ディック・エマーダ。三人の間にどんな過去があり、二人をここまで醜悪な状態へといざなったのか。それさえわかれば、全体の構図が紐解くように明らかになるのではないのかということも、彼女は知っていた。

だが、彼女は口を噤む。なにしろ、このリーという男の恐ろしさというものには、限度がないのだから。まかり間違えば、秘書である自分すら標的になりえるのだと、自分に言い聞かせて。

### 34・過去を知る男

モニターで埋め尽くされた狭い室内、ぎっしり置かれた機材とそれらを繋ぐ無数の回線。コンピュータが引つ切り無しに音を紡ぐ。機械の起動熱で室温が高くないようにしつかりと冷やされた室内に、真っ黒な服を着た若い男が一人。銀髪に赤茶の瞳が妖しく光る。長四角の眼鏡にはモニターの映像が反射して、チカチカと眩しく光っている。

「やつとお出ましましただよ、マザー。君の大好きな、あの男が」  
いたずらっぽく笑う。

画面にはEUDームの側に着陸したESの飛空艇、そこから降り立ち、ドーム内へと案内される男の姿。着古した白衣に、口髭の男がアップで映し出される。

「待ってたよ……、ディック・エマード。あんたの来るのを、ずっとね」

クククつと喉で笑うと、男は座っていた椅子をギシと大きく揺らした。

ドームの一つ一つに蔦が絡まる、それはネオ・シヤンハイで見たのと同じように幻想的で神秘的な光景だった。一番北側のひととき小さなドームが、外界からの入り口。EUDームの一部の人間たちは地球が自然を取り戻しつつあるこの状況をかなり前から知っていたという証拠である。

地球全てが核で汚染され、人間が生存することすら不可能となつたとされてから約五百年。ネオ・ニューヨークシティやネオ・シヤンハイのドームでは考えることが出来なかった現実。それを彼ら、ヨーロッパ大陸にあるこのEUDームの住人が知っていたというのは、ESにとってはかなりの驚きだった。

ドームの入り口は何十年も前から常態的に使われていたらしい。

そこだけ不自然に何度も蔦が切り取られたような跡がある。開けた草原の中、不自然にせせり立つドームの前で、背格好十代と思われる少年が待ち構えていた。入り口を開け放したまま、飛空艇を呼び寄せるように両手を大きく揺らしている。

「スカーレットさんとエマードさんですね。話は聞いてます。食料も準備してますから、こちらからどうぞ」

噴煙を上げゆっくりと地上に降り立った飛空艇から、他のメンバーより一足早く降り立っていたハロルド・スカーレットとディック・エマード。少年はにこやかに彼らをドーム内部へと案内した。

絡まる蔦の残骸が足元に散らばるゲートを潜り、入り口から真っ直ぐ通路を進む。内部は明るく、蔦が入り込まぬようキツチリと鉄の壁で覆われていた。しばらく行くと、道が二手に分かれた。

案内役の少年がさつと前に出て、

「右が食料庫です。十分な量をご用意できましたと思いますよ」

と扉を開いてみせる。その案内どおりにハロルドが右へ行き、ディックも身体を右に向けようとすると、

「ああ、すみません、エマードさんはこっち。アンリさんがお待ちなので」

むりくり左通路へと連れられた。

「誰だ、アンリって」疑問符飛び交うディックに、

「そいつだよ、会わせたいのって。行って来いよ」無責任にハロルドが言い放つ。

飛空艇の中で確かに言われた、合わせたい人がいると。だがどんな人物かも聞かされず、ただ『会え』などと。無責任にも程がある。あまりいい気持ちはしない。ましてやそのアンリという人物とハロルドの関係すら聞いていないのだから。

ディックは渋々少年の後を付いて歩く。

ドームとは名ばかり、そこは要塞だ。整然と真っ直ぐに伸びる通路、左右は倉庫になっているのか、重々しい鉄の扉が続く。扉一枚

一枚にアルファベットがふられ、中に何があるのか、すぐにはわからないようになっていいる。不測の事態があった場合を想定してか、通路のあちこちに非常用防火扉が設置され、その近くには壁に埋め込まれた小型の武器庫があるらしく、取っ手と銃を模したマークが昔、政府ビルで働いていた時に聞いた話を思い出す。

「E.U.ドームは今や、“アナーキストの聖地”だ」

かつて存在したヨーロッパ連合の名前を引き継いだその場所は、政府の本拠地ネオ・ニューヨークシティのドームに近い位置に存在していたが、事実、殆ど交流などなかった。連なるドーム一つ一つに自治体が存在し、全体が小さな国家の連合体のように……、連合となって立ちあがっていた。表向き、地球上での全ての工業・農業部門を負担し、政府に従順な立場を見せていただけあって、実際裏で反政府組織と取引し、その巢窟となっていたとしても、政府はそういった状態であることを把握していながら半ば黙認するしかなかったのである。E.U.ドームは地上に点在する他かのドームとは、一線を画していたのだ。

大きく『G』と書かれた扉の前で、二人は止まった。少年はそこまで案内すると、部屋の中の人物をノックで呼び出し、そのまま立ち去ってしまう。

「どうぞ」

軽い口調で案内されるまま、ディックは“G”の扉を開けた。

薄暗い室内に、コンピュータの起動音が響き渡っている。壁一杯のモニターからの淡い光が、人物を浮かび上がらせる。

「待つてましたよ、ディック・エマード博士。お目にかかれて光栄です」

ひよろつと背の高い、黒ずくめの若い男。逆立てた銀髪を揺らし、会釈する。すっきりした顔に縁の四角い眼鏡を掛け、なめ回すようなじつとりとした視線をディックに向けていた。

「僕の名前は“アンリ”。“マザー”と一緒に、あなたの来るのを、首を長くして待つていたんですよ」

“マザー”。

その言葉は、ディックの胸を貫いた。鼓動が高鳴った。激しく、嫌な予感がする。

そういえばハロルドは言っていたんだ。そいつは政府のメイン・コンピュータへのハッキングを得意としているのだと。聞き流していた言葉の重要さに、もっと早く気付くべきだった。

握り締めた拳に、じわじわと汗が滲んでくる。額から、眼鏡の内側を伝うように幾滴もの汗が伝い落ちた。ぶるぶると虫唾が走り、喉が渴き始める。

「お前のハッキング先は、まさか、“マザー・コンピュータ”……、全ての秘密の在り処だというのか……」

わなわなと恐怖とも怒りとも似つかない、もやもやした感情が噴き出してくる。

目の前にいる、若くいけ好かない男が、更に自分の運命を揺るがす人物に他ならないことが、ディックには容易に想像できていた。

飛空挺の通路にせわしない足音がこだました。食料用倉庫の入り口が大きく開け放たれ、ハッチから次々と物資が運び込まれる。

通常、正規ルートから食料を入手するとすれば、政府の目をかいくぐることは困難。例えESを秘密裏に支援している企業がいくつもあつたとしても、不自然な需要が目につくからだ。地球上の食料生産を一手に担うEUドームから直接仕入れ出来ることで、いくつかのリスクが回避できるのはありがたい。現実的にそれを可能にしたのは、EUドーム群が政府から孤立するような立場をとつていくということ。普段は殆ど関わり合いがないながらも、こうしたときに援助してもらえらるというのは心強くもあつた。

食料庫に残つたわずかな食材で調理に当たつてくれていたメイシイも、ようやく食材が手に入るとなるとご機嫌で朝から鼻歌が止まらない。指定席の調理場で包丁を研ぎながら、あれこれメニューを思案している。あまりにも嬉しそうな彼女の姿を見て、ESの誰もが今日の献立を想像しよだれを拭わずにはいられなかつたくらいだ。ハッチから地上に伸びた長い降り口からベルトコンベアーのようにどんどん箱を運んでいく男たちの様子を、エスターは食堂の窓辺で遠目に見ていた。時折ロボット犬フレディの頭をゆっくり撫ぜながら、興味深げに覗きこむ。「女性は手伝う必要はないよ」と年上の整備士ロックが言うので、良心は痛むが彼に従つた。一つ当たり一メートル四方もある大きな段ボール箱がどんどんハッチの中に流れては消えていく。ここは力自慢の整備士たちの腕の見せ所。せつせつせつとリズムよく運ばれる箱の下で、身体の小さなバースが押し潰されそうな小さな身体でもがいているのが見えて、エスターの口元が少し緩んだ。

ドームへ向かったディックからは音沙汰が無い。ハロルドは最初の食料箱と一緒に戻ってきてあれやこれやと皆に指示を出していた



が、ディックのことをエスターが尋ねると、「ちよつと面会中なんだ」と話をはぐらかした。最後に見たジュンヤの様子がいつもと違ったのを少しでも早く相談したかった彼女は、機会を失い落胆していたのだった。

窓に張り付くようにして外を眺めるエスターに、食事の後片付けを終えたメイシイが声をかける。

「ディックはまだ来ないの。面会って、どんな人にかしらね」

「私もハルに聞いたんだけど、教えてくれなくて」

ハルというのは、ハロルドのことだ。

「なんだか嫌な予感がするわ。あの二人、何か隠してるに違いないんだから」

ツンとしてため息をつくメイシイの言葉に、エスターは便乗するようになんか切り出した。

「あの、メイおばさん。ジュンヤのことなんだけど……、最近、会って話した？」

「いいえ。あの子、すっかりこもりっ放しで。食事は届けに行くんだけど、姿を見せないのよ」

「おばさんも、見てないのね……」

大きく表情を沈ませるエスター。

メイシイは少し身体を屈ませた。

「あら、ジュンヤがどうかしたの」

「あのね、パパとハルがドームに行く少し前にちよつとだけ話をしたんだけど、なんだか酷く思いつめたような顔をしていて。いつもの彼じゃなかったような気が」

ラフな格好しかしたことなかったジュンヤが、どこから入手したのか真つ黒なスーツに身を固め、深刻な表情でいたのを思い出した。殺気立ったような、ピリピリした態度。まるで、あの島で出会ったあの男を彷彿とさせるような、明らかに染まってしまっているようなジュンヤの姿。

「島でリーに出会ってから、ジュンヤ、様子が変なの」

やるせなさが込み上げてくる。彼の気持ちを探することもかなわない自分に腹が立つ。長い間同じ屋根の下で暮らしていたというのに、彼の心境の変化に微塵も気付くことの出来なかった自分。あの衝撃的な出来事に、自分の不幸ばかり見てしまい、隣にいたジュンヤのことまで頭が回らなかったのだと言い訳をしている自分に……、エスターは腹立たしく、肩を震わせていた。

メイシイの温かい腕が、そっと細く頼り気ない彼女の身体を抱きしめた。本当の母親のように親身に接してくれるメイシイに、エスターは溢れる思いをぶちまかす。

「リーが言った言葉が頭から離れないって、ずっと言ってたのに。もっと早く気が付くべきだったんだわ」

エスターの頭の中には、リーの最期の姿が浮かんでいた。両手を広げた、神の使徒のようなあの姿。忘れようと思ってもなかなか忘れられるものではない。残像を消し去るように、メイシイの胸の中でエスターは何度も首を横に振った。

「ねえ、エスター。さっきから気に掛かっていたんだけど」

しかしリーの残像は、メイシイの一言で、消えるどころかくつきりと浮かび上がっていく。

「島にいた男の名前は、“リー”というの？」

訊かれて、エスターは顔を上げた。

「う、うん。そう。“ティン・リー”って、言ってたわ。黒髪で綺麗な顔立ちの、年上の男の人」

「その人、本当に、“ティン・リー”と名乗ったの？」

「そうよ。メイおばさん、どうかしたの？」

リーのフルネームを聞いた途端、メイシイの顔色が変わった。

「リーは、私の命の恩人よ。EPTの研究施設から逃げた瀕死の私の手当てをしてくれた、非政府医師団のメンバーだったはず」

「え、どうということ？」

「それに、リーを私に紹介したのは他でもないシロウだったのよ。それが、どうしてディックの標的に。どうということなの？」

「メ、メイおばさん、何かの勘違いじゃ。だって彼、どう見ても二十代で、おばさんよりずっと年下に見えたわよ。パパだけじゃなくて、おばさんまでそんなことを言い出すなんて。どうかしてるわ」「二十代？ まさか！ 私がお世話になったとき、彼は二十五、六だったはずよ。あれから二十年以上経っているのだから、ディックみたいに中年のおじさんになっているはずだけど。エステル、あなたの勘違いじゃないの。本当に、彼は“ティン・リー”だったの？」「嘘じゃない、ホントよ！」

言い合ううちに互いの台詞に矛盾が生じる。メイシイとエステルはしばらく沈黙し、互いの台詞の意味を考えた。

食い違っている。年齢、リーの職業。二十数年前にメイシイ出会った彼と、今の彼。ディックの『自分さえ実験に使われていた』という証言、そしてメイシイが言う『医師団で働いていた』彼。反政府組織ESのリーダーだったシロウ・ウメモトとリーの関係……。

あの事件後、ディックの部屋で聞かされた、過去の話を照らし合わせる。すると、一つだけ、全てにおいて一貫している事実がある。「ねえ、メイおばさん。変な風に思わないでね」

エステルは恐る恐る、メイシイに自分の推理を語りだした。

### 36・まるで神のような

「パパが、こんなことを言っていたの。『もし彼が本当に、ただの人間だったとしたらありえない話だ。あの時まで、彼は俺より年上だったなんてな』って。私には意味がわからなかったけど、おばさんの話を聞いてみて、思ったの。おばさんとパパの話には共通点がある。リーは確かにずっと前から存在している。パパより前に生まれて、年もとらず、いろんな顔を持って、パパやおばさんの周囲に現れてる。彼の目的はわからないけれど、これだけは確実に言える。彼はもしかしたら、老いを知らない身体なんじゃないの」

「ばかげたことを言ってしまったと一瞬エスターは後悔したが、メイシイは同意したのかごくりと生唾を飲み込んでいた。

「そうね、多分、そういうことだと思っわ。常識的に考えたらありえない話だけど、もしかしたら何らかの方法で若さを保っているのかも。ディックも、今回のことでそれを知ったのね。だけど、ほかの疑問は残ってしまうわ。リーは何者なのってこと。ディックの敵だということ、島での事件やあなたの話で理解したけど。私が知っているのは医師の姿よ。ディックはどうなの。ディックの知っているリーの姿はどんなだったの。謎が多すぎるわ。シロウが生前、どうやってリーと知り合いになっていたのかも。なんだか嫌な予感がする。全てが仕組まれているような……。たった今偶然に起きたように見せかけて、実はもっと前から少しずつ仕掛けられていた罠が、時を見計らって徐々にあきらかになっているような、そんなとてつもなく嫌な予感が。もしかしたら今この瞬間にも、その引き金が引かれようとしているのかも知れない。リーの言葉に感化されたジュンヤが心配だわ。あの子、純粹だからどこまで」

「メイシイは話の途中で何かに気付き、はっと視線を食堂の入り口に向けた。

大人しかつたロボット犬フレディも、突如として吠え始める。

ドアのない入り口に立つ、黒い影。瘴気をまとったような、殺伐とした気配。

「ジユンヤ……！」

エスターが思わず大声を上げた。

吠え続けるフレディを静めるため、彼女は慌てて犬に駆け寄る。

エスターの心に反応したのか、フレディは咆哮を唸り声に変え、ジユンヤを睨みつけた。

エスターは気が気でなかった。今までどこにいたんだろうという考えより先に、どこから話を聞いていたのかという疑問が頭を駆け巡る。

「なるほど、母さんとエスターが、そんな考えまで辿り着いていたなんてね」

背筋が凍った。冷気が徐々に忍び寄りる。二人は無意識に肩を寄せ合っていた。

「リーの正体なんて、考えたって無駄だよ。あの人は神なんだ。俺たちの考えの及びもしないところで、全てを知っていて、全てを操っている。ディックとは真逆の存在だったこと。わかる？」

じりじりと詰め寄るジユンヤ。右手に、細く長く光るものがある。エスターが見たことのない武器……、日本刀だ。一体どこで手に入れたのか。飛空艇の中には存在しなかったはずだ。びゅんびゅんと宙を切りながらにじり寄る細身の魔物。見た目にも切れ味がよいことがうかがえる。

「エスター、現実を直視するんだ。正しいのは誰？ 光の当たらないところで次々と人を殺していたあの男の言うとおりに生きる意味って何？ 闇に引き込み、自分と運命をともにさせようだなんて、父親のすることじゃない。あんな悪魔に従うくらいなら、俺はいつそのこと、あいつの敵になって全ての鎖を断ち切ってやる」

「ジユンヤ、あなた、何をしているかわかっているの！」

エスターをかばい、大の字で立ちはだかるメイシィの気持ちはジユンヤには届かない。

「わかつてるさ。母さん、どくんだ。あいつからエスターを引き離すには、今しかない。あいつがドームでいざこざに巻き込まれているうちに、俺は彼女をここから連れ出すつもりだ」

禍々しい神に支配されたジュンヤは、最早元の彼ではなかった。ギラギラと鈍い光を放ち、血に飢えた獣のように、握り締めた刀の切っ先を二人に向けた。

ディック・エマードは、E.U.ドームの一室“G”と書かれた扉の奥で出迎えた男と対峙していた。

何も知らされずハロルド・スカレットの旧友だという男に引き合わされてしまった彼は、初めて出会ったその男の青いが底なしに陰湿な態度に業を煮やしていたのだ。自分より十以上若い目の前の男が、一体どれほどの情報を握っているのか。手の内を見たい気もするが、知りたくないとも思う。いらいらが募り、小さな応接セットのソファアーに案内されたが、腰を下ろすなり貧乏ゆすりが止まらなかった。

「まあまあ、落ち着いてくださいよ」

その男、アンリは不敵な笑みでディックを見下した。

目の前に出された珈琲の香りは確かによいが、ディックの気持ちは落ち着かせるほどではない。大体、この部屋も落ち着かない要因の一つ。めちやくちやに張り巡らされた回線とモニターのひしめき合う室内。機械音と熱を誤魔化すような冷房が、必要以上に効いている。悔しいくらいに動揺している自分に、嫌気が差すほどに。

「何を知ってる。何故、ハロルドを使って俺を呼び寄せたんだ。あいつの旧友だなんて言ってたが、それは一方的にハロルドが思っただけで、実際は俺が目当てであいつに近づいたんだな。違うか？」

気持ちは静めつつ、ディックはアンリを上目遣いに睨みつけた。

ローテーブルに回転椅子を近づけ軽やかに座ると、アンリはそん

なディックの態度に目もくれず、ニコニコして彼の問いに答えた。

「ご名答。流石だね。そう、あなたがESにいることは、マザーからの情報で大体わかってたから。カマかけてみたら案の定、あなたに辿り着いたんだよね。噂に違わず面白い人物だよ、あなたは。マザーも総統も御執心になるわけだ」

棘だらけの話し方は、決して温和とは言えないディックの気に障る。

「さっきから『マザー』『マザー』と。まるで“マザー・コンピューター”に人格があるような言い草だな」

ディックはフンと鼻を鳴らす。

「あれ、知らないの。そうだよ。マザーには人格がある。美しい女性の人格だよ。それはまるでこの世界を包み込む、温かな女神のような優しく大らかで心地よい人格。まあ、あなたのように、機械はあくまでも無機質な物体だと決め込んでいる人間にとっては、到底考えられないことだと思っけどね」

アンの一言一言がディックの神経を逆撫でする。とにかく、耳障り極まらない。

「事は……世界の成り立ちまでさかのぼるんだ。先史での世界大戦により地上にある全てが核に汚染され、人間は地上で生きながらえることを拒絶された。それを救ったのは地上を機械で覆い、ドームの中で人間が暮らせるようにしようと提案した科学者たち。だからドームの地下には未だそのときの地下シェルター跡が網の目に残っていて、後の世に残った僕らは外の世界を知らない。これは誰だっで知ってること。　ただどね、歴史にはいつでも裏がある。地下シェルターの奥に眠っていたメイン・コンピューター……これは今でも現役で、データの蓄積に使われているようだけど……そいつは、一人の科学者が手を加えることで、人工知能、つまりAIを持った。AIはどんどん発達し、やがて、メイン・コンピューターは“マザー”と呼ばれる別のコンピューターシステムを作り出し、そこに全ての人格を移動させたんだ。マザーはEPT政府管理下に置かれ、

政府が人類を治めるのに力を貸した。つまりこういう流れからしても、マザーは神に他ならないと思うんだよね、僕は。全てを見守る女神様つてところだよ」

「そこまでは、俺だつて知らないわけじゃない。AIの研究をしていた時期にちょっとだけ聞いたことがある。世界最高のAIは“マザー・コンピュータ”だと。我々人類がそれを凌ぐAIを作ろうとするのは無理かも知れないが、それに準ずるものを作るのは可能ではないかと。だがそれはあくまでも、そういうプログラム。人間と同じように人格を持つ機械だなんていうのは、夢のまた夢のような話だと俺は言ってるんだ」

「あなたがAIの研究をしていたあのラボで起きた事件、偶然じゃないとしたらどうする」

アンリが突然、揺さぶりをかけた。

ディックは「何のことだ」と口にしようとして、やめた。

「あの事件、いや、その後あなたが謀反を起こすことも、あの島で再会することも、そのメンバーさえ緻密に計算されたことで、あなた方は作り上げられた舞台の上で踊らされている役者に過ぎないとしたら」

「ちょ……、ちょっと待て。何が言いたい。それは」

テーブルをドンと叩き立ち上がり、ディックはアンリの胸倉をがしと掴んだ。



### 37・侵入者

「それは？」

そんな状況でさえニヤニヤと面白がるアンリとは対極的に、ディックの身体は嫌な汗でぐっちよりと濡れている。苦しい程心臓が高鳴り、血が物凄い勢いで頭に上っていくのがわかった。血圧の急激な上昇に焦りつつ、彼はこう続けた。

「全て、リーの……、ティン・リーの仕掛けた罠だったと」

「そういうことになるよね」

言い終えて、ディックはアンリから手を離れた。

考えたくないが、認めたくないが、もし、それが本当だとしたら恐ろしいことだと、常々思っていたのだ。アンリの口に乘せられたとはいえ、それを認めてしまったことは、彼にとつてかなりの屈辱だった。それは、リーにしてやられたということに他ならないのだから。

「あなたは、ティン・リーの正体を知らないんだよ。あの人が、政府総統が、どうという人物で、何を考え、何のために動いているのか。知るべきだ。自分自身のこととともにね。いつまでも逃げていては勝てないよ。やらねばなしは嫌だろ。手を貸すって言うてんだよ、マザーと会話の出来るこの僕が。あの男の手の内、全てはわからないにしても、過去の出来事の矛盾点を辿っていけばいくらかでも謎が解けていくと思うんだよね。どう、結構役に立つと思うけど」

目の前のアンリが憎たらしい。リー程ではないが、この人を茶化したような喋り、態度。まだあの時よりはマシだとしても、それに似たようなとてもマトモじゃない心境だ。何かきつかけになるようなことがあるば今すぐにも我を失ってしまいそうな自分がいる。ディックは冷静に、自分の精神状態を分析することに努めていた。そうしなければ、懐に隠し持った銃で、堪らず頭をぶち抜いてしま

いそうだったから。

「お前は、それを知ってるっていつのか。あの男の目的、正体……」  
アンリは嫌な笑いを浮かべ、人差し指をくるくると回しながら、  
「あなたが協力するというまで、手の内は見せない。当然だろ。すぐに結論を出せとは言わないけど、早いほうがいいと思うな。政府の奴らだって、馬鹿じゃないんだから、こうしている間にも」  
「グラツと、建物全体が揺れた。」

遠くで複数の爆音。

そして、ビー、ビー、ビーという、けたたましい警報。

二人は会話をやめ、顔を見合わせた。

よからぬことが起こった合図だ。システムが一気に非常事態モードに突入したらしい。部屋一面のモニターが赤く点滅を始めている。どたばたと足跡が聞こえ、勢いよくドアが開く。

「アンリさん、大変です。地下から侵入者が！」

一人の少年が息を切らしてやってきた。驚きどよめく人々の声が、廊下に乱反射している。「地震か?」「爆発だ、地下が燃えてる!」「早くドームの外へ!」足音に混じって聞こえる声。

アンリの顔つきが変わった。今までと違う、厳しい表情。大きく息を吸い込み、深呼吸。回転椅子を弾くように払いのけ、Gの部屋から飛び出す。まだ煙はない。

「セキュリティシステムが正常に作動してるか、チェックはしてたか?」

少年の肩を掴み、問いただす。

「あ、はい。制御室で見えました。だけどアンリさん、敵は先史の地下道からやってきたらしくて、最下層のエリアX-2からの全域、システム範囲外の被害状況までは……」

「仕方ない、あの辺まで行き届かなかったのは、僕らのミス。まさか、そんなところから襲っては来ないだろうって甘い考えが招いた事態なんだから。被害をこれ以上広げないようにしないと。被害箇所近辺の防火扉は閉まってる?」

「はい、勿論」

「そしたら、サーモグラフィで敵の居場所を突き止める。奴ら、コード認識解除の技術を持つてみたいだから」

「熱探知するんですね。了解です」

少年が制御室のある方へ走っていくと、ようやくディックが重い腰を上げた。

二人の会話を遠巻きに見ていた彼だったが、事態が事態だけに口を出さずにはいられなかった。恐る恐る歩み寄り、前傾姿勢で廊下の様子を覗い始める。

「おい、侵入者ってどういうことだ。EPTか」

この一言を待っていた。アンリはいつものニヤニヤ顔に戻り、くると振り返った。非常事態に関わらず、彼のなかで何か面白いことがどンドン膨れ上がってきている。ディックがそんなアンリの不謹慎な顔に益々不快感をあらわにしているも、彼はお構いなしにパンパンと手を打ち鳴らし、終いにはこんなことを口走った。

「取引しましょうよ、ね、エマード博士」

意味がわからない。ディックの眉間にシワが一つ増える。

「今はそれどころじゃないだろ。一刻も早く情報を集め、的確に人を配置させんと。ここでのお前の立場がどんなか俺は知らんが、それなりに責任はあるんだろ」

「そりゃ勿論。ドームにあるセキュリティシステムの監督とか、コンピュータネットワークの管理は僕の仕事だからね。何かあったら連絡が入るようになってたんだ」

「だったら、わけのわからないことを口走ってないで、さっさと動け！」

アンリは彼の叱咤に臆することもなく、変わらず嬉しそうに右手の人差し指をくるくると回した。

「その前に、さっきも言ったとおり、僕と取引して欲しいんです。

タダとは言いませんよ。交換条件をやつです。この騒ぎの原因は、十中八九EPTで間違いないでしょう。あなた方の飛空艇がこの地

に降り立ったことをあっちも知っていて、わざと攻撃を仕掛けてきたんですよ。ココで足止めして、先へ進めなくする気です。EUDームが被害を受ければ、地球全体の経済に影響を及ぼすのに、それでも攻撃してきた。向こうには勝算があるに違いありません」「つまり、俺達の船のせいで被害にあつたから、何とかしろってことか」

「ええ、とどのつまり、そんなところです。今、EUDームで起こってるこの事態を收拾するのに一役買ってもらえませんか。見事解決したら、僕の知ってる全ての情報を教えるのと同時に、マザーにコンタクトさせてあげますよ。どうです、いい考えだと思いませんか。あなたほどの頭脳の持ち主なら、どんな難題だって、潜り抜けられるんですよ」

ディックのまん前まで戻ってきたアンリは、彼の顔にぐいと迫って取引を持ちかけた。

無邪気なアンリの姿に戸惑いながら、ディックはこくと頷いてしまう。この選択をしてしまったことによって、自分の娘に迫っている危険を回避できなくなってしまうとも知らずに。

ハロルド・スカーレットが騒ぎを知ったのは事件発生から数分後のことだった。

ハッチに続く荷物の長い列を追い抜いて、ドーム側から見慣れぬ若い男が走ってくる。ドームの人間だ。彼は全速力でハッチの直ぐ下まで来ると、

「ハロルド・スカーレットさん、いますか。スカーレットさん！」  
息も絶え絶えにハロルドを呼ぶ。

荷物の配送指示をしていたハロルドは、慌てて彼に駆け寄った。

「ハロルドは俺だ。どうした」

「ば、爆破。ドームが襲撃されて、アンリさんがエマード博士と共に事態收拾に当たるといっているので、報告を」

あまりの息苦しさに男は咳き込み、苦しそうに胸を掴んだ。

ハロルドはそんな彼の背を大きく撫でてやる。

「わかった、ありがとう。ディックのやつは通信機器を持たないから、いざとなったらこういう連絡手段しかないんだもんな。ご苦労だった。俺達も協力したいが、どうすればいいって言ってた？」

「もう少しで荷物が運び終わるだろうから、まず全て積み込んで、いつでも離陸できるようにしておいてくれと。いざとなったら飛空艇で飛び立てるように」

ドーム側から渡された荷物リスト、ハロルドは人差し指でトントんと残数を確認した。

「確かに、あと数個で完了だな。わかった。こちらからも指示を出しておく」

ドームに戻っていく男の背を見つめながら、ハロルドは自分の胸にもやがかった不安を感じずにはいられなかった。何が起きようとしているのか。このタイミングでの襲撃、これはどう見ても……。そこまで考えて、彼はブルブルツと肩を震わした。

生ぬるい風が吹き出して草原を駆け抜け、彼の身体を舐め回すようにまとわり付いて消えていく。じつとりと汗ばみ、急に喉が渴くふと顔を上げると、巨大な球形の要塞の陰に隠れるようにして、太陽が嫌なくらいにさんさんと輝いていた。空一面に雲が広がり始め、日の光を乱反射させる。まばゆいばかりの光で要塞が一層黒く浮かび上がり、ハロルドの心を騒がせた。

嫌な予感がした。言いようのない息苦しさも。しかし考えていても、何も始まらない。

ハロルドは考えを断ち切るように、両頬を両手のひらで勢いよく叩きつけた。

監視モニターと制御パネルに囲まれた狭い室内で、男数人真面目な顔でテーブルの上の大きな紙をにらんでいる。ドームの見取り図だ。被害状況を確認し、アンリがペンで被害区に印を付けていく。

地上の小さなドーム一つ一つにアルファベットが振られ、更にもその中の重要な箇所には個別番号、地下空間もかなりの面積があるらしく、おびただしい数の記号が散りばめられている。地下最下層部分に当たる、エリアX-2からZが、最初に被害を受けた場所。監視モニターでは、更にエリアU-5に非常ランプが点灯している。「どんだん、こっちに近づいて来てるぞ」

隣で様子を見ていたディックが、図の被害箇所を指でなぞった。

アンリは腰掛けた椅子を左右に回しながら、指先でペンを遊ばせていた。監視モニターと見取り図、ディックを交互に見つめ、

「確かに。迷わずこっちに向かっているね。どうしてだろう。まさか誰か発信機でも持っているとか。まあ、人工衛星なんかで要塞の位置が確認できれば、その付近に僕等がいることも容易に想像できるだろうからね」

落ち着いた様子で、事態を静観している。

「人工衛星は……、ないはずだ」

ディックが呟いた。

アンリは「えっ」と、思わず顔を上げる。彼の指の動きが不意に止まった。

「人工衛星を使い続けている必要がないんだ。ドームから出る事がなかったから、数百年前衛星の機能を停止させ地上に落とすとしたと聞いたことがある。衛星から映像が届けば、この星が回復に向かっていることが目に見えてしまうからな。政府は人間をドームに閉じ込めておきたかった……、故に人工衛星の存在は邪魔でしかない。別の方法でここに俺達が来ているのを突き止め、攻撃を仕掛けているんだろっ」

思いも寄らないディックの言葉に、アンリは沈黙を強いられてしまった。

「ハロルドからの連絡方法、このコンピュータの回線、それとも別に政府との連絡役が存在したのか。今はそんなことを考えている場合じゃない。敵の様子は、熱感知はどうした」

ディックの視線が、共に見取り図を見入っていた制御室担当の少年、マイクに注がれる。少年はその厳しい視線に肩をすくませ、慌てて監視モニターを確認に行く。

「す、すみません、エマードさん。ええと……、サーモグラフィはエリアOより上の層、つまり、地下シェルター跡から上の部分にしか設置してないんですが……、エリアLに、生物反応があります。三人、何かに乗ってます。この形はバイクかな。最初の爆破が確認されてから今までの時間で、これほどの距離を進んだということは、ここまでやってくるのは時間の問題かと」

びくびくしながらも、マイクは自分なりに事を分析して伝える。かつてのイタリアからフランス地方にかけて広がるドームの地下には、二千年以上前の遺跡が今も残る。消え去った文明の痕跡の上に次々に都市が築かれ、石造りの境界跡地、井戸、住居跡などが形をとどめているのだ。まるで古代の風が漂っているかのように。更にこの上層に大戦前の地下シェルター跡、そして現在のEUドーム

が築かれているらしい。

地下遺跡からシエルター跡にかけて、監視区域内の被害箇所ではスプリングラーが作動し、延焼を食い止めているはず。しかし次から次へと爆破され、正常に作動しているか確認すら危ういとも、彼は言った。

ディックはうんうんと頷きながら、なにやら思索している。

「ドームに穴を開けて崩落させるつもりなのかな」

アンリも考えあぐね、ツンツンに立てた前髪を掻き耑り、またぎこぎこと椅子を揺らす。

「時間がない。戦闘員と非戦闘員に分け、体勢を固める。非戦闘員は消火活動、戦闘員は武器庫からできる限り武器を持ち寄って、攻撃準備。指示は出さないのか」

と、ディック。

それに反論するように、アンリはぐんと勢いよく立ち上がった。

「いや、武器よりも、このドームを守る事が先決かも。相手の目標が何なのかによっては」

「どういう意味だ」

ディックがいぶかしげにアンリの顔を覗きこむ。

「“マザー”からの情報では、あなたは政府総統であるティン・リーの標的になつていているという。さっきも言ったけど、ESの飛空艇がここに来た事によって起こった騒動なら、もしかしたら今度の襲撃は、やっぱりあなた一人を引き摺り出すためじゃないのかって思ったんだ」

「つまり、何か？ 武装するのは俺だけでいいと」

眼鏡の奥に光る深い青色の瞳を向けられ、アンリはバツが悪そうに目を逸らした。正直な見解とはいえ、鬼気迫るこの男に進言するには勇気がいったのだ。

ディックは、そんなアンリの気持ちを知ってか、ポンと軽く肩を叩いて、

「いや、読みは悪くない。相手の人数、これだけの施設を全部ぶつ



壊すには少なすぎる。デザートイーグルだけは持つてきたが、弾がなくなればお終いだ。貰えるか」

思ったよりもすんなりと聞き入れたディックに、アンリはほっと胸を撫で下ろした。

「ええ、大丈夫です。もちろん援護しますよ。博士に死なれたらこつちだって困る。精鋭のみ同行で、他は消火活動に当たらせるつもりだけど、いいかな」

「仕方ない、それで行こう。このドームがなくなれば俺も困る。“マザー”とやらとお目にかかれなくなるからな」

「盾にするようで申し訳ないけど、こつちう展開だしね。 “N

CC出身”なんですよ。寧ろ戦闘には慣れてる？」

“NCC”の単語に、ディックは一瞬びくりと眉を動かすが、

「さあな、昔の事だから、どうだか」

と、話をはぐらかした。

この年でこんな修羅場を通る羽目になるとは思ってもみなかったのだ。ゴツゴツした、皺の刻まれたディックの手。守ることより壊すことを教えられ、生きてきた過去。どんなに後悔しても後戻りは出来ないことを、彼は知っていた。その手に握られるのが、いつも大切なものではなく銃であったこと。全ての災厄は自分に降りかかってくることに。

何も知らされずに苦しい道のりを歩んできた彼にとって、アンリの知っている情報は、喉から手が出るほど欲しいものだった。そのためには、再び銃を握る事もいとわない。この身が再び血色に染まっても……、自分と娘、そして亡くなった妻を貶めた男の情報を得るためなら何だってする。

ディックはバシツと、自分の両頬を勢いよく叩いた。指先が眼鏡に当たり、軽くバウンドした。

ドームのあちこちから噴煙が上がり、時折ズシンズシンとドーム全体が振動する。その度にざわめき、悲鳴が上がった。ドーム内の非戦闘員達は被害区からより遠い場所へと避難したり、ESの飛空艇へと逃れたりして、難を逃れようとしていた。荷出しを終えたハロルドはドームの若者たちと協力して人々を誘導、飛空艇にエンジンをかけて操縦室からドームの様子を見守っていた。

戦闘員らはその一方で、迫り来る敵を迎え撃つ為の準備を進める。ドーム内“G”の扉から更に少し進んだところにある少し広めの会議室、その床や会議テーブルの上には、武器庫から引っ張り出した武器や防具が所狭しと並べられてた。各々が自分に合ったものを身につけていく。迷彩柄の戦闘服を着込んだ十数人の男たちと共に、ディックも装備を固めていた。防弾チョッキを着込んで、眼鏡の上からゴーグルを装着、愛用のデザートイーグルに弾を装填する。もしものためにと渡された予備の小銃、実弾用ではなくエネルギー充電タイプの光線銃だったが、この際だと諦めて懐に入れた。最後にいつもの白衣を羽織る、EPTにいた頃から変わらないスタイルで相手を誘う。敵に自分の居場所を視覚的に伝え、無駄に犠牲者を増やさないようにするのだ。

こうしている間にも警報は鳴り響き、アナウンスは徐々に敵がこちらに向かってくることを伝えている。

「こっちは準備万端ですよ、行きますか、エマード博士」

ようやく準備の終わったディックに、赤髪の凛々しい男が話しかけてきた。キースと名乗る彼は戦闘服の群れから一步踏み出し、制御室から持ち出した見取り図を空いているテーブルの上にザッと広げた。男達はキース中心にぐるっと纏まり、最終確認する。

「アナウンスによると敵は既にも上層部に突入。この先の緊急避難路から三階下、L-8地点まで到達している。出来ればJからJ区画

くらいで足止めしたい。科学消火剤、防塵マスク、ヘルメット、ゴーグル、用意よし。各々、もしもの時は渡した無線機で制御室に連絡を取るように。敵の標的はエマード博士と考えられる。全力で護りつくせ」

通路の奥、避難路入り口に向け、銃を構えて会議室から一斉に走り出す戦闘員の最後尾をディックとキースが並んで走る。

「アンリは制御室か」

ディックはふと、キースに問いかけた。

「ええ、彼は戦闘向きじゃないのでね。全体を把握して、指令を出してもらわないといけませんから」

キースは淡々とした語り口でそう答えた。年の頃はジュンヤより幾分か上だろう。さっぱりとした印象で丁寧、かなりの好青年だ。

「実は僕、あなたと同じNCC出身なんですよ。伝説になってましたよ、あなたの名前、経歴、腕前……。こうして隣にいるのが不思議なくらいです」

そうか、この男もかと、ディックは思ったが口には出さない。

ティン・リーと再会してからというもの、昔のことを思い出さずにはいられなくなってきた。複雑な運命の糸がこんなところまで絡まってきている。どこかで仕組まれていた大きな罠にはまり、抜け出せずにいるのを嫌というほど感じるのだ。そのせいか、どうしても邪念が付きまとう。

『全て、リーの……、ティン・リーの仕掛けた罠だったと』

アンリの前で思わず自分の口から出てしまった、あの台詞。知らず知らずのうちに、脳内で繰り返している。ディックはブンブンと大きく首を振り、無心に駆けた。

薄暗い避難路を辿り、L区画に入る。

ロック解除された鋼鉄の扉を開け、突入。煙で上半分が真っ白く濁った、だだっ広い空間がそこにあった。足元にジャリと鉄のレー

ル、そしてかなり高い天井。稼働中の通気口が上部にあるらしく、煙はどんどん上に吸い上げられ、煙の割りに視界はさほど悪くない。それでも、絶えずあちこちで鮮やかな赤が燃え上がる。ケープルに引火するパチパチした音は、この場所も決して安全ではないことを知らせているようだ。火元の近くでは、ビニルや鉄の溶ける臭いでむっとする。汚れた空気に晒され、肺が苦しくなる程だ。このような状況で戦うのは死に急ぐこと、状況さえ許せばそこにいる誰もが道を引き返すのだが。

二メートル強の段差を上がる。足元から人の背丈程度までは、辛うじて向こうまで見渡せる位の視界。しかし仮に頭上から攻撃されれば回避は難しいだろう。ディックは頭上を仰ぎ見、武者震いした。『今到達したL-3地点付近に敵の反応がある。警戒を』  
無線からアンリの声。全員否応なしに緊張し、生唾を飲む。

ボンと大きな音がし、右前方で何かが崩れはじめた。  
敵だ。

男たちは揃ってディックの前に歩み出ると、装備していたエネルギーライフルを構えた。エネルギーボトルの中で、青い蛍光に色づけされた高濃度溶液が波打つ。

L-3地点は大戦前の地下鉄跡。長く伸びた線路が一段下に見え、プラットフォームと思われるこの場所には直径一メートル強の柱が等間隔に並んでいる。

柱の陰に隠れ、敵の動きを見図る戦闘員たち。ディックもキースと共に、同じ柱の後ろに身を潜める。

爆音の後の噴煙が、ゆっくり消え去り、通路の奥から人影がはつきりと見え始めた。

「やっと、お出ましみたいねえ」

甲高い女性の声が響き渡る。棘のある、艶やかな声。背後でバイクの排気音。ヘッドライトが二つこちらに向けられ、男たちは思わず目を細めた。情報通り、バイクは二台、黒いライダースーツを着込んだ人影が三つ。

「エマード博士、待ってたわよ。その顔を拝める日が来るなんて、  
光栄だわ」

声の主はゆつくりとこちら側に銃口を向けた。バイクにまたがったまま右手を左右に大きく動かし、散弾銃を撃ちまくった。肩に食い込むほどの衝撃があるはずなのに、彼女は悠々と銃を操っている。エネルギー弾の蛍光が拡散し、噴煙が辺りを支配していく。

「肉体強化、彼女、人工筋肉を埋め込んでるに違いありませんよ」

キースが話しても、ディックは彼の話聞いてか聞かずか無言でじつと敵の様子を覗うのみ。一步も動かず、息を潜めている。業を煮やしたEUの戦闘員たちは、応戦すべくエネルギーライフルで攻撃を始めた。

暗がりの中で互いのエネルギー弾が行き交った。赤く輝く女の銃弾と、ES戦闘員の青白い銃弾。次第にそれらは近づき合い、足元が脅かされていく。女の撃つ無数の弾丸は隠れていた太い柱の中心を射貫き、隠れていた戦闘員をあぶり出していく。

視界を奪われ身動きが出来ないディックらに、アンリから無線。

『ゴーグルに簡易サーモシステムを入れてある。右こめかみ部のスイッチを押してみてください』

そういうことは最初からと、ディックは台詞を飲み込んだ。眼鏡の上から無理矢理かけたゴーグルに、赤とオレンジで人型が映し出された。遠方に三つあるのが敵だ。他、柱の陰に身を隠して応戦しているのが味方。ざっと周囲を見回し布陣をチェックすると、ディックはようやくキースに口をきいた。

「奴ら、まともに戦う気はないな。ただ無意味にぶっ放ってるようにしか思えん」

確かに、銃弾の勢いに推され柱の陰から出られない。が、それだけだ。彼女は単純に足元をなぎ払うように銃撃するが、距離は縮めない。不審だと二人が頷くその隙を覗うかのように、今度は彼女の後方、現れたもう一台のバイクの後部座席から、小さな影が次々に

手榴弾を投げていく。

爆風が何度も襲う。構内に点在するキヨスクの残骸も、改札口も、錆付いた案内掲示板も、皆吹き飛んでいった。

足元が揺れ、柱に、壁に、床に、無数の亀裂が入る。

間髪入れず、攻撃は続いた。

「相当数の弾薬を持ち込んでますね。ドームを破壊するつもりなんでしょうか」

ディックの背後で、キースが不安そうに呟く。

噴煙と炎が辺りを包み始めていた。真つ暗だった空間がほのかに見渡せる。だが、それは決して喜ぶべき事態ではない。L区画に入つて銃撃戦を交え、足場の悪くなった地下空洞は、キースにとって閉鎖された地獄のようにすら思っていた。

「安心しろ、この程度じゃドームは崩れない。だが、空間を広げ、俺達を近付けなくしているのそのやり方が気になる。一体」

ディックの台詞の途中、急に敵の攻撃が止んだ。

二人は恐る恐る、柱の陰から顔を出した。

バイクが二台、十メートル程先に停車している。爆風で生じた白いもやに、エアバイクの前照灯が光の道を形作る。

「本番はこれからよ、エマード博士。じいさん、転送準備、いい？」

黒いライダースーツの女はバイクに乗ったまま、持っていた散弾銃を肩に担いで大きく揺すった。空いた左手で、ヘルメットからはみ出した見事な赤毛を掻きあげている。

「パメラ、いくぞ」

奥の、もう一つのバイクの後部座席から降りた小さな影は、小さな四角い端末を操作し、

「転送開始！」

しわがれ声で大きく叫んだ。

## 40・失敗作

二台のバイクの前方、爆撃によって広げられた空間に、細く青白い光の柱がいくつも並ぶ。ひとつ、ふたつ、みつつ……、十も、二十も。次々に柱は太く、光は強くなり、凸凹に削られたコンクリの床に光の円柱を描いていく。

「転移装置だ。奴らまさか」

ディックは目を疑った。その青白い光は、まさに空間転移装置の効果そのものなのだ。

それぞれの光柱から人間の足が、体が、徐々に姿を現していく。光の中から抜け出た兵士たちはゆらりと重たい頭を上げた。生気なく虚ろな瞳で様々な武器を構える二十数人。彼らの着込んだ黒い戦闘服の背とヘルメットの側面には“NCC”のロゴ。手足の本数に問題がある、又は明らかに人の形をしていない者もいる。爛れた皮膚、逆に体毛で全身を覆う者、尾のある者までも。だらしなく荒く息をし、肩を震わせている。

ドームの戦闘員たちも、思わず攻撃を止めた。突如現れた正体不明の人型が何者であるか理解できず、こぞつて柱や壁の陰に身を隠す。

「何てことだ。奴ら、失敗作を」

キースが吐き捨てた。

「失敗作だからこそ、こういう場所には打って付けて訳だ。ということは、そこにいるのはウォーレス・スウィフト博士、かな」

暗がりの奥まで聞こえるように、わざとらしくディックはスウィフトの名前を挙げた。低い声が構内に反射して、響き渡る。デザートイーグルを構えたまま柱の陰から這い出るディックを、慌ててキースが制止した。

「エマード博士、危ない、隠れて！」

白衣の端を握り連れ戻そうとするキースの腕を振り切って、ディ

ツクは歩を進める。

失敗作たちの陰からのっそりとしわがれた老人が歩み出た。

「久しぶりじゃの、エマード博士。 いや、D-13」

睨み合いの続く戦場に、ディック・エマードとスウィフト、距離を縮めた二人の声だけが妙に響く。

「その名前はやめてくれないか。俺はもう、あの頃の俺じゃない」  
言ってギリリと歯を鳴らす。

忘れもしない、NCC No Code Children 養成施設、まだ十代の少年だったディックがいた場所。思い出したくはないと、政府ビルを抜け出してからずっと心にしまっていた記憶。ここでもまた過去が蒸し返される。

「どういうつもりだ、スウィフト博士。こんなところまで自ら失敗作を連れて。リーの差し金か。奴はまだ生きているのか」

NCCの黒い失敗作たちがディックに的を絞り攻撃体勢に入っているが、ディックにとってそんなことはどうでもよかった。今はただ、スウィフトがどう答えるか。それだけ、それだけだ。

鼓動が知らず知らずに高鳴り、引き金にかけた指にまで汗がじつとりと染み渡っていた。解き忘れたゴーグルのサーモモードが視界を怪しくし、照準を合わせにくいのさえ気にならないほどに、ディックは緊張していたのだ。

猿顔の老人スウィフトはヘルメットの下で嘲るように笑う。ぎょろりとした目を大きく開き、唇の端を上げて彼は言った。

「生きとるよ、リー総統は今も健在じゃ。お主は罠にかかっておらんじゃよ。総統の、鮮やかな罠に」

どくんと、大きく胸が波打つ。

「いつからだ、俺はいつからその罠に」

ディックはガタガタと震える歯を必死に食いしばり、更に尋ねた。「さあもう、そこまでは。……じゃが、ここにお主が来るということも、ウメモトの息子が島で総統に出会うことも、全て決まっていたことらしい。ここでお主がわしらの足止めにかかり、小僧が“E



”の確保に成功すれば、ひとまずわしらの役目は終わり。わしはついでに、NCCの雑魚の始末とエドモンドの性能実験が出来れば満足じゃ”

「何……？」

スウィフトの言葉の意味を噛み締める。じりじりと敵前に迫り全身から噴き出す汗を感じながら、ディックはそれまでのことを頭で整理する。

自分が今こうして戦っていること、それすらリーの罠だというなら。アンリがハロルドに誘いをかけEUドームに飛空艇を引き寄せたことも、あの島でリーを撃ってしまったことも、あの場にジュンヤとエスターが居合わせたことも、全て必然で。島に妙な野菜畑があったのは、作物生産を一手に引き受けたEUドームに被害が出ても当面の食料自給に影響がないようにするため前々から用意されていたことで、それに気づかずのこのことこまでやって来てしまったのだとしたら。自分がここで罠にかかっているということは、本当の目的は別のところであって、それから遠ざけるためなのだとしたら。

全身の血が音を立てて引いていく。

「つまり、ドーム襲撃の本当の目的は、“E”、エスターなのか」

真つ暗闇に蹴落とされた。

予測を超えた最悪の展開に、彼は打ちのめされていく。

いくつもの場面が彼の脳裏を高速で走り去った。その全てを繋ぐ糸がリーの手の中に続いていたのだ。端正な顔を歪めて高笑いするリーの姿が浮かぶ。リーにもてあそばれていただけの自分、まるでチェスの台に並べられた駒と違わぬではないか。

この場から早々に立ち去らねばという思いが、ディックの指を動かした。

銃口から一つの弾丸が飛び出す、スウィフトの額目掛けて。

だが弾は刹那、ディックの前に現れた黒い巨体に遮られた。視界

の途切れた頭上から、大男が軌道上に飛び込んできたのだ。スウィフトの乗っていたバイクを運転していた大男、エドモンド・ケイン。黒い影のような男は、その身でディックの放った弾を受けた。弾は脇腹を貫き、大量の血が辺りに散らばるも、巨人はものともせずディックの懐へと飛び込んでいく。そして、腹部に強烈な一撃。

「エ、エマード博士！」

キース始めとする、EUの戦闘員の誰一人として、巨人の動きに気づかなかった。陽炎のようにばやけた気は、地下空間の異様な気配と完全に同化していたのだ。慌てて彼らは巨人に照準を合わせた。しかし下手に弾を撃てばディックも巻き添えにしてしまう。躊躇していた矢先、

「やれ！」

スウィフトの合図で、今度はNCCの軍勢がドームの戦闘員たちに迫ってきた。箍の外れた失敗作たちは、ある者はナイフ、ある者は銃で無遠慮に襲いかかってくる。

再び、銃弾が飛び交い始めた。連続する銃声、飛び散るコンクリの欠片、噴煙、炎はよりいっそう高く燃え上がる。十分な人数で向かってきたはずだったが、一人の戦闘員に対し複数体の失敗作が襲ってくる始末。恐れを知らぬ、例え銃撃を受けて身体の一部を失ってもゾンビのように何度も起き上がる、不死身の一団。人の形をしているが、人間ではない。まさしくモンスターと呼ぶに相応しい。驚異はドーム戦闘員たちの志気を否応なしに削いでいく。

「総統は決して口にしないが、わしは思うとる。D-13、お主はNCC始まって以来の失敗作じゃ。総統のために作られ生まれた生命体のクセして、どこまであの方の意志に抵抗する。もっと早く運命を受け容れておけばこんなことにはならなかったはずじゃ。NCCにいたあの時、わしがお主の正体にもっと早く気づいていればと何度後悔したことが」

腹部を抱え悶絶し地面に膝を突いたディックは、その痛みを耐えながら自分を見下ろす老人に目を向けた。激しい腹痛、内蔵に強烈

なダメージを与えたことを悟らせる。

消えゆく意識の中、消え入るような息でスウィフトに問う。

「気づいていれば、どうしたんだ」

老人は冷笑を浮かべながら彼の側まで歩み寄り、腰を屈めて耳元に囁いた。

「無論、あの方に差し出していた。当初の目的通り、お主の身体をあの方の……にするために」

## 41・誘拐

『緊急離陸準備中……総員速やかに作業を止め、離陸体勢に入れ。繰り返す、緊急離陸準備中……』

船内に数少ない女性乗組員リザ・タナーの淡々としたアナウンスが流れる。操縦室から殆ど出たことのない彼女の起伏ない声は、否応なしに個々の緊張を高めていく。

いつ離陸するのか、離陸自体が出来るのか。それとも、離陸しないうちにドームの襲撃は収まるのか。作業を終えた乗組員たちは各々の持ち場へと急いだ。

荷運びを終えた整備士ロックとバースも足早に廊下を駆け抜ける。若い二人にハロルドが出した指示は、食堂の様子確認。何故かしら内線で呼び出しても反応がない。メイシィとエスターはどうしているのか。火気を使う場所だけに安全性を考慮して早めに案内したのだが、梨の礫状態だった。食堂は緩くカーブがかった廊下の一番奥。何度も赤く点滅する警報ランプに急かされ、走る走る。

「内線にメイが出ないって、どういうことだと思う」  
息を弾ませながら、ロックは後方を走るバースに話しかけた。

「さあ。わかんないけど。あんまりいい予感はないな」

鼻水を啜り、そばかすの頬を擦るバース。その視界に、食堂の入り口が見えてくる。二人は更に足を早め、大声でメイシィとエスターの名前を呼んだ。

「ハルから内線、来ただろ」

言って身体半分食堂に入ったところで、ロックの足が急に止まる。バースは勢い余ってその背に突進、顔を埋めバウンドして尻餅をついた。間の抜けた声で顔を両手で覆い身体を起こしたとき、彼の耳に予想だになかった言葉が響いてくる。

「ジュンヤ、もう止めて！」

エスターの悲痛の叫び、同時にきらりと光る一振りの刀が目の前

を横切った。刃はロツクのつなぎ服を掠め、胸部をざっくりと切り裂いた。赤いものが飛び散り、身体がよろめく。少女の悲鳴、母親の取り乱す声、ワンワンと吠え盛る犬の声。

一瞬何が起きたのか理解できず、バースはただただ目を丸くした。窓を背に女性二人、怯えて抱き合っているのが見える。なぎ倒されたテーブルと散乱する椅子。いつもの清潔さはない。室内を荒らす黒い影には見覚えがあった。ジュンヤだ。黒いスーツに細身の刀、いつもの彼からは想像できない格好で、こちらを睨み付けている。理解しようとしても簡単に理解出来る状態じゃない。よりによってジュンヤがと思うと、バースの頭はますます混乱していく。震える膝が思い通りにならず、立ち上がれない。気がつけば冷凍室で固められたように血の気が引いていた。

「やめなさい、ジュンヤ。何がそこまであなたを追い詰めてるの！」メイシイの声にバースは我を取り戻し、傷ついて廊下の壁を背に座り込んだロツクに駆け寄った。幸い傷は深くない。本当に掠めた程度。胸に一文字に赤い切り傷があるが、出血は思ったほど酷くない。

「ロツク、しつかりして。今ハルを呼ぶから」  
屈みこみ、尻ポケットの通信機を取ろうと右手を後ろに動かす。

ふいに、銀色の刃が視界へと入り込んだ。右斜め後ろで、ジュンヤが仁王立ちしてバースの右肩の上に刃を落としていたのだ。

「邪魔するな。バース、お前も斬りたいのか」  
ギラギラと怒り狂ったジュンヤの瞳は、それまでバースが感じたことのない恐怖をもたらした。言い返せない、言葉を発することが出来ない。息が詰まる。

バースの動きが止まったのを確認して、ジュンヤは振り返った。「エスター、いい加減あんな悪魔の所から逃げ出してしまおう。このままここにいれば、また事件に巻き込まれる」

ジュンヤはあくまでも優しく、エスターに語りかけた。メイシイに肩を抱かれ、彼女は無言で首を何度も横に振る。

メイシイとエスターの前に立ちほだかるようにして吠え続けるフレディをギツと睨み付け、ギリリと歯を鳴らし、ジュンヤはバースから刀を離して彼女の元のにじり寄った。

「さあ、行こう」

ジュンヤの視界から外れた。

バースはやつと通信機を手にする。焦って操作が上手くいかず手間取りながらも、何とかハロルドの端末に回線を繋ぐ。だがこんな状況でどうやって助けを呼んだらいいのか。声を発すれば、再び自分に刃が向けられるのは必至だ。

『どうした、バース』

ハロルドの声が通信機からわずかに漏れた。何とか、食堂のこの会話を聞き取ってくれたらと、一縷の望みを賭けて回線を繋ぎ続ける。

「ディック・エマードは母さんの家族の敵だ。そして君も、彼の犠牲者だ。これ以上の理由が必要なのか。俺は君を守りたい。そのためになつたら鬼になつてなるさ。行こう、政府ビルへ……！」  
テーブルと椅子の山を乗り越えて窓際のエスターたちまで迫ったジュンヤの目は、鋭く光っていた。

大きく身体を屈ませ勢いをつけて飛びかかるフレディに、ジュンヤは刀をふり落とした。金属同士が触れ合う不快音が響き、フレディは床に叩きつけられる。立ち上がり今度は足元を狙うと、ジュンヤは足を振り回して彼を後方のバースたちの所まで蹴飛ばした。通信機を持ったまま、バースは抱え込むようにしてフレディを抱き寄せた。

エスターは顔を青くした。

「ジュンヤ、なんてことを」

前に出たメイシイを、ジュンヤは大きく左手で押しのける。

「母さんには悪いけど、俺は俺の考えた道を選ぶよ」

右手の刀を逆手に持ち替え、手早くエスターを自分の胸元に引き入れると、ジュンヤはぎゅっと彼女を抱き締めた。いつもと変わら

ないジュンヤの温もりが、エスターを包み込んでいく。

「ジュンヤ、やめようよ、こんなこと」

震える彼女のセリフにも、彼は動じない。おもむろにジャケットの左ポケットから取り出した赤い二つ折りの携帯端末を開き、中央のスイッチを押す。ジュンヤの左手の中で端末が青白い光を帯び始めた。

再び吠え始めたフレディの背を撫ぜ、静めながら、バースは通信を続ける。

「オイ、応答しろ、何が起きてる。バース、聞こえてるのか、バース」

通信機の音声が高くなる。

「聞こえてる。聞こえてるけど、ジュンヤが」

耳に機器を押し当ててヒソヒソと会話するバースの腕を、ロックが掴んだ。

「バカヤロウ、通信なんかしてる場合かよ。走れえ！」

胸の傷を押さえながら、ロックが雄叫びあげて立ち上がった。青白い光がなんなのか、ロックにはわかっていった。アレは空間転移装置の反応の色だ。早くしなくては、転移が始まってしまう。

バースも通信機片手に、足をもつれさせながら追いかけた。

そのすぐ前を、ロボット犬のフレディも吠えながら駆けていく。

エスターを助け出そうと手を伸ばすメイシィに、ジュンヤは刃を向けている。どうすればあの長い刃物からエスターを守れるのか考えている余裕などない。とにかく、無理矢理でも体当たりして手から武器を落とさなくては。思っているのに、足元のテーブルと椅子が進路を塞ぎ、間に合いそうもない。

フレディが勢い付けて飛んだ。間に合うかどうか、ジュンヤの胴体部分目掛けて突っ込んでいく。

「貸せ！」

追い詰められたロックは、回線の繋がったまま通信機をバースから奪い取り、ジュンヤ目掛けてぶん投げた。

「間に合え！」

ぐるぐると横に回転しながら、黒い通信機はジュンヤのまさに頭の位置へ。

そのときだ。

携帯端末から放たれた光が、突如強さを増してジュンヤとエスタ  
ーを包み込んだ。

フレディと通信機は二人の胴体をすり抜け、そのまま窓に激突す  
る。

転移が、始まった。

完全に青白い光で包まれた二人は、空気に溶け込むように消えて  
いく。

その様子を、三人はどうすることも出来ず、ただ見つめるしかな  
かった。



## 42・絶望の淵で

薄暗い地下空間、あちこちで燃え上がる炎。そして、何度も立ち上がる不死身の兵たち。体力も精神力も限界に近付いていた。仲間の動きを確かめながら、失敗作たちを投げ飛ばして急所を撃つ。それでも、息が続く限り奴らは向かってきた。全身がきしむ。しかし、今はそれどころではなかった。守ると約束したはずのディック・エマード博士が、キースの目の前で傷だらけになっているのだ。甘く見た訳じゃないが、戦況はかんばしくない。

No Code、コードで支配された世界の中でその所持を認められない存在、人間ではないもの。多くは人体実験のため人工子宮の中で育てられ、遺伝子サンプリング後、施設に預けられる。動物との遺伝子の掛け合いにより生物バランスを崩した者や、遺伝子異常、発達障害のため手足の本数が違うもの、人間の形さえしていない者も含まれている。彼らには基本、人権はない。人間としてではなく、実験道具や兵器として活用される。しかし彼らのうち、精神状態の正常な者は政府の従順な兵士として訓練を受け、政府に反旗を翻すアナークストたちを殲滅する任務を負う。また、頭脳レベルが異常発達した者は、研究員としてビルに迎えられている。

目の前にいるのは、その中でも“失敗作”と呼ばれる者。脳が異常に小さく精神異常をきたしているため兵士としても研究員としても将来性がない。兵器の威力実験、人体実験などで生涯を終える。恐怖を感じぬよう手術を施された、人型の兵器。身体の一部が損傷しても、彼らの攻撃は止まない。

攻撃を回避しながらディックへと歩み寄れば、遠方からパメラの散弾銃が足元を狙い撃ちしてくる。また数歩下がる、の繰り返し。

「坊やお相手は後ろでしょ」

ニヤと笑う視線の先から失敗作が数体迫り、キースは慌てて腰を屈めた。

キリがない。

相変わらず視界は悪い。そして酸素も薄くなっている。体力があとどのくらい持つのか、このままでは敵を倒すどころか博士の救出さえままならないと、そればかり頭に浮かんだ。

ディック・エマードはエドモンドの、一般成人男性の二倍はありそうな大きな右手のひらの中にいた。何度も腹部に浴びせられたポディーブローは彼の胃液を逆流させた。喘ぎ声を上げるディックの頭蓋骨を砕かんばかりに鷲掴みにし、巨木のような太い左足で更に腹部に蹴りを入れる。抵抗出来ない人形のようにディックの身体は激しく揺り動かされていた。一九〇センチ近い彼が、まるで子供のようになさえ見えてしまう。ブンという大きな揺れを最後に、エドモンドはディックをコンクリの瓦礫の中へと放り込んだ。砕けた柱から突き出た鉄筋の鋭い切り口が、攻撃を喰らったディックの腹部に更なるダメージを与える。

「リーの言うとおり、年を食いすぎているのか、まるで手応えがない」

二メートルを大きく超える黒人の大男は、ぎょろりとした白い眼球を光らせながら、次の攻撃のためのつそりとディックに歩み寄った。

「ただの、人間じゃないな。やっぱり、お前も、NCCの」  
傷を負った腹部を軽く抑えながら、ディックは立ち上がるうと必死に腰を上げた。出血はないが、内臓の一部がやられているとはつきりわかる痛みがあった。呼吸が辛く、苦しい。爆撃により室内に充満した粉塵が、症状を悪化させる。意識が朦朧としてくるのがわかる。

「エドモンドは、筋肉増強、肉体改造によりサイボーグ化した最強戦士。わしの研究の成果、すまんがここで試させてもらう」

狂気に満ちたスイフトの一言。

ディックは再び老人を狙い、銃を構える。

「無駄だ」

低い声と共に蹴り上げたエドモンドの左足が、ディックの手にヒツトした。緊張の呪縛から解き放たれたデザートイーグルは、カラカラと音を立てて数メートル先まで転げていく。彼は息を飲んだ。絶対的な身長差、体力差、そして支援を見込めない情勢。勝ち目がない。エスターを助けなければ、早くこの状況を打破しなくては。思えば思うほど思考が空回りし、追い詰められていった。

ギリリと歯を鳴らし、ディックは構内全体を見回した。失敗作に完全に押されているドームの戦闘員たち。あちこちにある残骸を慣れた足取りで駆け巡る敵に、今のところ打つ手なし。よく見ると少し離れた壁の付近で赤毛の女パメラが誰かと交信している。通信機を耳に押し当て、神妙に何かを聞きとった後で、

「E”確保、確保ですね。了解！」

自信に満ちたパメラの声。

「じいさん、エド、撤去よ！ ウメモトの坊やがうまく“E”を確保したわ」

ついさっきの会話だ。制御室でアンリと話していた、「敵が迷わずこちらに向かっていているのはなぜか」と。この広いドーム群で、居場所を突き止めるのは容易ではないだろうと。「それとも、別に政府との連絡役が存在したのか」自身の発した他愛ない台詞、それが現実だったとは。よりによってその連絡役が、ジュンヤだったとは。

完全に、リーにしてやられた。

「命の続く限り、守ってやる」

エスターに約束したばかりなのに。

あの震える肩を、抱きしめたばかりだったのに。

また、彼女に辛い思いを。

怒りが込み上げ、同時に体が軽くなる。ディックは懐からキースに渡されていた光線銃を取り出し、乱射した。エドモンドの足、体腕、首筋に数発命中、よろめき倒れたところで、体当たりする。巨

体が瓦礫に埋もれてじたばたするのを横目で見ながら、素早く零れ落ちたデザートイーグルに駆け寄り拾い上げた。デイツクの動きを察知し、ナイフを振りかざしてきた失敗作の額をマグナム弾が突き破る。血飛沫を上げながら倒れていくその上を大股で飛び越え、走った。赤い斑点が汚れた白衣に付いて、おどろおどろしさが増す。彼はその色に背を押されるように、もつと走る、走る。

無意識に、彼は叫んでいた。声にならない声だが、彼の悲しみと憤りを表しているのか。切なく、途切れそうな声。

デイツクを援護し、失敗作らがその道を阻まぬよう必死で食い止めるキースたち。

デザートイーグルから放たれた弾丸の一つはパメラの通信機を壊し、戦闘員たちの援護射撃により、彼らの放った光弾のいくつかが三人の乗っていたバイクに当たった。荷台に積まれていた爆薬に引火し、破裂、無数の爆音が鳴り響く。

スウィフトは慌てて、持っていた四角い端末のボタンを押した。離ればなれに立っていた黒いライダースーツの三人を、青白い光がそれぞれ包みこんでいく。

「逃がすか！」

キースたちは必死に彼らを撃ち続けたが、最後まで手応えはない。やがて光は消え、炎と残骸を背景に、NCCの失敗作と自分たちだけが取り残される。

火の勢いが、激しくなってきた。視界も悪い。不完全燃焼の、鼻を突く匂いが立ち込める。

失敗作らは爆発に巻き込まれ、ほぼ壊滅状態だ。火傷を負いつつ攻撃してくる数人を、銃撃で倒していく。

持ち込んでいた科学消化剤を投入しても、火は収まらない。まるでデイツクたちを嘲笑うかのように更に勢いを増した。

銃を下ろし、腰に付けていた防塵マスクを被ったキースは、戦闘員たちに告げる。

「ここはもうだめだ、敵を封じて、撤退する」

力尽き、膝を落とすディックの肩を、キースは自分の背に回した。呆けた中年男の身体は、有毒ガスの回った彼の上にならずしりとかかった。

避難路へ向かう。大きな鉄の扉を封じ、無線でアンリにロックを依頼する。

生き残った失敗作は何とかL地区に封じ込めた。だが、結局それだけだ。

戦いの犠牲はあまりにも大きい。

避難路を戻る彼らの表情は、皆一様に悲痛だった。

### 43・一筋の光

残酷なほどの静けさが、辺りを包んでいた。E.U.ドームの制御室、機械音だけが重なり合い、その毒々しいまでの静寂をより一層不快なものにしていく。

ハロルドは気まずそうに、目の前の男の震える拳を見ていた。すすだらけの白衣が無造作に脱ぎ捨てられテーブルを占拠しているが、その場にいる誰もそれを責めることが出来ない。管理モニターの警報ランプが目障りなくらい激しく点滅し続け、血飛沫のかかった白衣と彼の着衣を赤く照らす。男の額に刻まれたシワが脂汗で浮き上がり、ぎらぎらと血の気を帯びた目玉がヒビの入った眼鏡の奥で光っている。

一声掛けようものならきつと即座に殴りかかられると思ってしまうほどの気迫だった。ディック・エマードはその日の自分の行動を悔いているのだ。わかりきっているだけにこの場の空気の掴み方が難しい。

この数時間のうちに起きた全てが、回避できたかもしれない可能性を秘めていた。もしあの時と、誰もが思わざるを得ない状況。

エスターがさらわれた。ディックのいない間にジュンヤが連れ去ったのだ。全てを見通さなければならない状況なのに結局何もできなかつた自分に、ハロルドは腹が立った。ディックは行き場のない怒りに、感情のコントロールを失いかけている。必死に彼をなだめようと落ち着いてきたところ。しかし、これ以上の言葉や仕草はきつと彼を追い詰める。だからただ、何かのきっかけで事態が好転しないかと待ち続けてしまう。

ハロルド自身、誘拐の現場に到着したのは全てが終わったあとだった。

ディックとともにドームへ向かい、食料庫へと荷物を搬送する手続きをした彼は、その後爆破攻撃の報告を受け、緊急避難出来るよ

うにと飛空艇の出発準備のため操縦室へと向かっていた。操縦士に事の次第を伝え、船内アナウンスを指示、整備士のロックとバースに船内のチェックを頼んだ。ところが、食堂からバースが知らせてきたのはジュンヤの異変。慌てて駆けつけたが、ジュンヤとエスタ一の姿は既になく、メイシイは泣き崩れていた。あたり一面、刃物で傷つけられたテーブルや椅子が散らばり、まるで元の姿がわからないまでに荒らされていたのだ。

それでも、傷を受けたのはロック一人でしかもかすり傷、命に別状はないという。それは不幸中の幸いなのだとハロルドは思っているが、他のメンバーがどう思っているのか想像に難くない。

ハロルド、アンリ、キースの三人の男が、壁にもたれかかったり立ち尽くしたりしながら、ディックがいるテーブルの周りでこの無意味に静かな時間が過ぎるのを待っていた。狭い制御室の中、誰かが静寂を破るのをただただ待つこと数十分、

「彼らの目的がなんなのかはつきりしないと、これ以上僕らは協力できませんよ」

キースが口火を切った。

ディックは震わせていた拳をぎゅっと握り締め、伏していたテーブルからガバツと顔を上げた。鋭い眼差しが浴びせられると、一瞬キースはどきりとしてもたれていた壁にびたりと両肩を付けたが、姿勢を正すと改めて、

「あなたを尊敬しているのは嘘じゃない。だけどこれ以上犠牲が増えるのは困ります。今だって二十人以上が医者のお世話になってる。NCCでの噂や政府での活躍は知ってますけど、どうも今のあなたはその頃とは違うらしい。一体何があって、どうしてこんなことになっているのか。本当はあなた自身が一番ご存知なんじゃないですか」

辛辣な質問。ハロルドは焦り、二人の間に割って入った。

「ま、待て。君の言いたいことはもつともだが、彼には彼なりの事情ってもんがある。それは、俺だって詳しい事情を教えてもらえる

ならそうして欲しいが、これは個人の問題であるところが大きくて」  
「あなたには訊いてません」

顔をしかめて、キースはハロルドに強く返した。

「ESの人たちだって、このドームにやってきたのは、食料を搬入するためだけだったと思ってるらしいじゃないですか。アンリとの間でどんな話があったのかは知りません。隠れてコソコソと取引しなければならぬような人間がES全体を引つ張って、それで我々ドームの住人にまで被害が及ぶんじゃないかと話にならないと言ってるんですよ。反論があるならば、幾らでもどうぞ。言っておきますが、今日だけでどれだけの損害を被ったか。工業・農業生産を支えるEUドームの爆破は、地球全体の死活問題なんですよ」

早口でまくし立てるキースは、先ほどまでとは人が違ってしまっただかのよう。大人しくエマードについていけばきつと大丈夫だと、どこかで過信してしまった自分への慙愧の念がにじみ出ている。

「それは、デイックだって申し訳ないって思ってるからこうして」と、またもハロルド。

「あなたには訊いてない。エマード氏の口から、真実を聞きたいんです」

二人のやり取りを聞いているのかいないのか、デイックはまた、無言でうつむき始めた。何かを言おうとして時折口がもごもごと動くが、そのまま唾とともに飲み込んでしまっている。額の近くで組んだ両手のひらがじつとりと濡れ、ぬめぬめとするのを嫌うように、しきりに指先を動かした。言葉の代わりにぎりぎり奥歯を鳴らし、目を閉じる。

「ハルに『エマード博士に是非会いたい』と言ったのは僕だし、会って『取引したい』といったのも僕だ。責任は僕にある」

それまで静かに二人の問答を見守っていたアンリが、監視モニターの前からテーブルへと歩み寄り、腕組みをしながらゆっくりと話し始めた。

「肝心なことを話す前に事件が起きてしまった。僕のミスだ。博士



ばかりに責任を押し付けてはいけない。キース、君の言い分は尤もだが、そういうわけだ。これ以上は何も言うな」

アンリはそう言っつて、血気づくキースをなだめる。銀色に逆立った髪をゆっくりとかきあげ、アンリは四角い眼鏡の奥でなにやら思索した。身を包む黒い服が音もなく前進し、空気が一瞬にして冷え切った。

場の流れが少し変わったのを感じたのか、ディックもゆっくりと頭を上げ、乱れた前髪の間からじろりとアンリを垣間見た。

「勿体ぶつてないで、すぐに見せればよかったんだけどね。ディック・エマードという科学者が一体どんな人間なのか興味があつて、

好奇心に負けてしまった。しかも政府の攻撃で、見せたいファイルにアクセスするのに時間が掛かりそうなんだ。明日の朝までにはシステムを修復して、お見せできるようにしておくよ。今日はこれぐらいでやめよう。起きてしまったことにくよくよしたって仕方ないじゃないか。博士、あなたの苦しみが明日には少し、解放されるかもしれないよ。そのくらい大切なファイルを、僕は見つけたんだよ」

#### 44・記憶の片隅

一日の間にあまりにもいろんなことが起きすぎた。EUドームに到着し、内部に案内されてアンリと会い、そのまま戦闘に巻き込まれた。合間にエスターをジュンヤが連れ去る。考えてもみない展開だった。

ディックは精神的に打ちのめされていた。全ての責任を負う覚悟で直走ってきたが、全て水の泡と消えてしまったような虚しい感覚が全身を駆け巡る。誰がどんな慰めの言葉を言ったところで、それは気休めに過ぎない。よりによってシロウの息子であるジュンヤが政府側に寝返っていたとは予想も付かなかった。誰がそう言ったのかは知らないが、自分について回る天才という肩書きが邪魔でならない。生き延びるために必死だった、それだけなのに。何故どんな泥沼にはまっていたのか。

塞ぎ込み、また自室に籠もった。大丈夫かと、妻と同じ笑顔で尋ねてくる娘はもういない。何も受け付けない。窓際の机、頭を抱えて伏した。額に滲む脂汗を手の腹で拭いながら髪の毛をかきむしっている、またぐるぐる記憶の奥にしまっておいたものが這い出てくる。真っ暗い底なし沼の奥の奥、誰にも話したことのない、黒い記憶がひとつ、またひとつと溢れ出て、ディックを再び過去の世界へ誘っていった。

ラボ襲撃事件から一週間ほど過ぎた頃、二十七歳のディック・エマードは政府ビルの研究室に配属されることになる。

政府の本部ビルは研究者にとっての聖地。そこに足を踏み入れることは人生最大の喜びだと少し昔の科学者が言っていた。それほど偉大な場所だった。

彼は興奮し武者震いしていた。

NCC出身者の回収をしているというティン・リー医師曰く、NCCの存在そのものを隠すためにその秘密を知ったものを全て殺した、その行為自体は罪に問われならしい。決定的な証拠があったとしても、現行犯でない限り、コードのない彼が警察に捕まること自体ないのだが。精神を病みどうやって次の日を生き延びようか、死ぬことの許されない身体でゆらゆらと考えていた日から比べれば、何かしらの目的が与えられその場で生きること許される方がいい。少なくとも完全に回復するまでのこの数日間、ベッドの上に縛り付けられてはいたが、リーの言葉はエマードのテンションを少しだけハイにした。

ビル内の診療所から出ることを許され、リーに案内されて辿り着いた研究室エリア。各階毎に並ぶ様々研究室を、リーは事細かに解説した。それらはエマードの理解を超える範囲のものもあつたし、当然彼がそれまで携わってきたものもあつた。例のラボで続けてきたA Iチップの試作品が引き継がれた研究室も存在し、彼はそれまでの功績が無駄にはならなかつたのだと顔を綻ばせる。

「君の研究室はここだよ」

配属先、ドア横のプレートには“空間転移システム研究室”とある。

「転移システム？」

専門外だというセリフは口から出なかつた。リーはいつものように静かに笑い、黙って彼を室内に通す。

扉の向こうにあつたのは、穴の空いた大きな四角い箱だつた。何本もの太いケーブルがその箱から外へと伸び、床いっぱい広がっていた。踏み場のない足元を避けるように歩くのを、カラカラと通る声で笑う女がいる。

「あなたが話題のディック・エマードね。結構素敵な青年じゃない」箱の裏からひよっこり顔を出した金髪の女性は、軽い足取りでケーブルを乗り越え、エマードとリーの元へと近付いてきた。白衣の下から覗く薄紅色のシャツと白いタイトスカート。あどけない笑顔

は、彼の接してきた様々な異性とは少し違って見えた。

「エレノアよ。エレノア・オーリン。あなたと一緒に研究が出来るなんて光栄だわ」

世辞ついでに出された右手を握り返す。小さな細かい手は、エマードの厳つい右手の中にすっぽりと収まった。

「ありがとう、ドクター・リー。素敵な研究員を見つけてくれて。

これでこの研究も幾分かはかどるんじゃないかしら」

「礼には及ばないよ。研究が上手くいくのを祈ってるからね」

軽く手を振り立ち去るリーを、二人は手を握り合ったまま見送っていた。いつまでその手をと彼女が言いかけたとき、エマードの口から意外な言葉が漏れる。

「綺麗な人だ」

ためらいのない一言に驚き、彼女は強く握りかえされていた右手を勢いよく引き寄せた。顔を赤らめ、右手を胸元に当てながら、エレノアは背中まで伸びた長い金髪を左手でそつと掻き上げる。

「無口だって聞いてたけど。お世辞が上手いのね」

「いや、そんなことは」

「これから、未永くよろしくね。前の助手がすぐに辞めちゃって困ってたのよ。今日は他の研究員は出払ってて、私ともう一人、軍からの出向で来てるケネスしかこの研究室にはいないの。ケネス、いる？」

エレノアの声を待っていましたとばかりに、奥の扉から一人の青年が顔を出した。金髪混じりの茶系統の頭は、育ちがいいのか丁寧に撫でつけられたように整っていて、とても軍人のそれとは思えない。まだ幼さを漂わせた十代の少年だ。着慣れない白衣を無理矢理着させられたような彼は、やはりケーブルをぎこちない足取りで乗り越えながら彼らの元へと何とか辿り着いてきた。

「今丁度試作機を作ってるところなの。かなりのエネルギーを必要とするもんだから、あちこちからケーブルを引っ張ってるのよ。歩きにくいのは諦めてねって、人が来る度に言ってるんだけど、どう

もみんな慣れなくて。ケネスも最近ここに来たばかりで、まだ足元が怪しいのよね」

軍と言っても、国という概念の存在しなくなった現代においては、反政府組織の一掃以外に確固たる目的を持たぬ組織。ドームに囲まれた世界では他勢力からの侵略なども有り得ず、単純にその権威を維持させているだけに過ぎぬ。今や警察に取って代わられるまでの落ち込み方を見せる組織の送ってきた助手、まさか右も左もわからぬような未成年とは、鼻で笑ってしまう。

ほら挨拶なさいとエレノアに急かされ、ケネスはそのあどけない笑顔をエマードに向けた。

「ケネス・クレパスです。俺、あなたを尊敬してるんだ。政府のために全てを捧ぐ わかっていても、そうそう出来るもんじゃない。あなたは科学者の鑑だよ」

握手を求めるケネスに、仕方なく手を差し出した。

どこまで話が美化されているのだ。研究員と家族を蹴り殺し、反感を買って反政府組織に襲撃され、全てを焼き払ったというのに。密閉されたドームの中、最大の罪とされる火災、爆発事件。それを上手い具合に誤魔化した誰かがいる。一体何の目的でそんなことをしたのか。ケネスは熱く自分の思いをぶつけてくるが、一切エマードの耳には入らない。昨日までは、政府ビルの研究室で働けることを楽しみにしてきたのだ。しかし現実はずんでいた。純粹に喜べないのかも知れないと、エマードは思い始める。

どこかで誰かが自分の手を引いて、知らないうちに情報を修正している。誰が、何の目的で。

生かされている。今まで感じたことのない、見えないものに対する畏怖をエマードは少しずつ感じ始めていた。

#### 45・それは幸せなひとときだったに違いない

政府はエマードに、研究室どころか仮住まいまで用意した。全て無くし絶望していた彼にとつて、政府の対応は丁寧すぎた。政府がひた隠しにする忌むべきNOCODEに対してそこまでする必要があるのか。親切すぎるあの医師ティン・リーのにこやかな笑顔さえ歪んで見えた。

空間転移システム研究室のエレノア・オーリン女史はかたくなに身の上を語ろうとしないエマードに魅力を感じたのか、ことある毎に彼に絡む。「ねえ、食事でも」初日から彼女は彼を誘った。何度か断っているうちに面倒になり、とうとう彼女の誘うまま高級レストランに招待される。会話などはない。ただ一方的に彼女が話すだけで、それを彼は軽い相づちで返す。

誰かと親しくなるというのは実に居心地が悪い。語り合い微笑み合うなど、考えたくもない。

根っからのマイナス思考は簡単には変わらないものだ。第一、NCCの施設でどうやって生きてきたのか、彼女が知ったら自分を軽蔑するに違いない。『コードの無い人間なんてそう珍しくも無い』というリーのセリフを信じたとしても、自分ほど恐ろしい過去を背負ったヤツなどそうそういないはずだ。作られた死ぬことの出来ない恐ろしい身体のコドを知ったら、誰だって気味悪がる。彼女の笑顔もいずれ凍りつき、醜悪なものでも見るように顔を覆うことは目に見えている。

エレノアのペースに少しずつ巻き込まれながらも、エマードは緊張感を解すことはなかった。

「転移システムの小型化軽量化が進めば、更に少ないエネルギーで物資の移動が出来るようになるわ。今の大型転移装置じゃ一回の転送毎にかかる電力が多すぎて、物資に対するエネルギー費の割合が

極端に高すぎるじゃない。これを何とかして今の半分以下、出来るなら一〇分の一以下に抑えたいの。何度か手伝ってもらった実験でわかったと思うけど、多分回路そのものから見直さなきゃいけないんじゃないかしら」

設計図と基盤が無造作に広げられたテーブルの上、図の問題だと思われる箇所に赤丸を付けながら彼女は言った。

月と火星、各ドームへの物資移動に欠かせない空間転移装置。離れた二つの地点を時間差無しで移動できるこの装置は、長い間地下通路を通して物資輸送を行っていたそれまでの流通を一気に変えた。各ドームで生産されたものを大量に安全に即座に移動できるとあって、装置完成後すぐに政府はこの方法を取り入れた。工業製品から生鮮食品まで様々な物資がこの装置により毎日各ドーム・基地へと運ばれていく。同時に地下通路は完全閉鎖された。初号機が開発されたのが百年ほど前、それから何度か改良をえて今の形になっているものの、未だ巨大な装置と使用される莫大な電力に、政府は頭を抱えていたのだった。

研究室に集った研究員らに目配せし、エレノアは最後に視線をエマードの元へ向ける。

「どう、エマード博士。何かいい案は。博士のいたラボではかなり性能のいいAIチップを作ってたって聞いたけど、それを応用することは出来ないかしら」

「まあ、やろうと思えば出来なくもない。引き継ぎ先の研究室がそれを許せばだろうが」

「掛け合ってみるわ。許可が出たら、改良に入るわよ」

二人の距離が縮まるのは時間の問題だった。

例えエマードが拒んでも、彼女とは仕事をしなければならぬ。

一緒にいる時間が長くなればなるほど、彼女を拒み続ける理由もなくなる。NO CODEであることを彼女は了承していたし、それによって態度が変わることもない。初対面につい口から出た『綺麗

だ』のセリフが尾を引く。彼女は外見のみならず心まで純粹で美しかった。荒んでいた彼の心を彼女は静かに癒していった。

「エマード博士はエレノアとそういう関係なの」

ケネス・クレパスの安易な一言がなければ、親密な仲になっていたことすら確信できないほどに、彼は溺れていた。

相変わらずケーブルだらけの研究室にもう何週間も泊まり込んでいたある日、休憩中のエマードに飲み物を差し出しながら、ケネスは囁いた。

「みんな言ってますよ。二人、かなり親しくなってきたねって。

エレノアがあなたを見るときの目が、最近違うんだもん。あれは完全に恋する乙女の目だってね」

「乙女も何も、彼女は俺より年上だ。何より、そういう対象にはならないよ、俺は」

椅子の背にもたれかかりため息をつくエマードの隣に屈み込んだケネスは、まさかと声を出して笑った。

「博士は自分が思っているよりも男前ですよ。自分のことに無頓着だから気づかないだけで。そのストイックさが受けてるって、なんかわからないかな」

まだ十八歳のケネスは他人の色恋沙汰にはかり夢中で、助手と呼ぶにはまだまだ未熟すぎる。専門教育を受け、特殊装置開発のノウハウを学ぶために軍から出向してきたのだと聞かされたが、それにして緊張感に欠けていた。頼んでもいないのに人の世話をしたり、周りをチヨロチヨロと小動物のように駆け回る。人に取り入るのが上手く、他の研究員とも親しかった。どこでされていたかもわからない噂話を本人にしたところで一体何が楽しいのだろうと、エマードは目を伏せた。

例えば心を奪われたとしても、彼女と身体の関係を持つようなことにはならない。

自分を支配する悪魔の遺伝子が引き継がれるようなことは、あってはならない。



数年、近いような遠いような関係を引きづった。彼女と二人きりの時間がなかったわけではないし、彼女の気持ちに気づかなかつたわけでもない。ただ、自分という存在を呪うあまり、エマードは常に自分の周りにシールドを張って彼女と一定の距離を取ることを忘れなかった。

引き直した図面を基に、それまで研究室の一部屋を丸々使用していた装置やケーブルを整理して床下に埋め込み、強化アクリル板で覆う。集積回路がうつすらと透ける足下の装置の中心には、エマードがかつて開発に携わっていたA Iチップが形を変えて収まっていた。エネルギー量を目標の一〇分の一以下に抑え、それまでの大きな操作パネルを改良してノートサイズにまで縮めることに成功する。埋め込み型の装置は大量生産には向かないが、性能を考えればこれまでの転移装置に代わり政府で広く使われるようになるはずだ。

研究が完成に近付くと、それまで寄り添うように仕事をしていたエレノアの態度が少し変わったことに気づく。お互いそういう気持ちでいたのを知っていても、決して愛を語ることのなかった二人の時間は終わろうとしていた。

世話焼きのケネスが無責任に言う。

「エレノアと離ればなれになって、それでいいの」  
窓のない締め切った研究室が息苦しくなかったのは、確かに彼女がいたせいかもしれない。エマードの中で彼女の笑顔の占める割合がどんどん大きくなり、研究と共に別れが訪れることを知った彼女も同時に苦しみ始めているのだと隣で感じていた。自分がもし普通の人間であるのなら抱え込まずにすんだ気持ちをどう整理すればいいのか。いつまでも彼女のことを想い続けているわけにはいかない。

暗く沈んでいく。彼女のことを想えば想うほど。

昔からわかっていたことだ。自分には一生幸せというものは訪れない。全てどこかでコントロールされていて、動けば動くほど事態

は悪化する。

だからこそ、ハマードは彼女に自分の気持ちをさらけ出すことは  
しなかったのだ。……その日まで。

## 46・愛してる

政府に宛がわれた殺風景な部屋は、何年経っても生活感がなかった。そこで暮らしているというわけではなく、ただ寝泊まりに変えるだけの場所。

研究が終盤にさしかかると、政府ビルから数キロ離れたマンションの一室にいる時間が少しずつ増えていった。だが、それはエマードにとって特に喜ぶべきことではなかった。むしろ、心の中にぽっかりと空いた穴が徐々に広がっていくような虚無感に襲われる。気がつけばベッドの上で寝転がり、無意識に浮かぶ彼女の顔。何を考えているのかと頭を振り、目頭を押さえた。

彼は自分の中に生まれた初めての感情に苛んでいた。それは彼にとって、決して許されぬ感情だったのだ。

眠れず、明かりも消さずにベッドの上でぼうつと過ごしていたその日、夜中にもかかわらず誰かがドアをノックした。不審に思いながらもドアへ近付いたエマードを待っていたのは、女の声。

「私よ、エマード博士。エレノア」

ドアの向こうに、彼女が立っていた。

眠れなくてどうしても会いたくと言う彼女を、彼は部屋に入れる。

「眠れないのは俺も一緒だ」

疲れたように微笑むエマードの顔を見て、エレノアも小さく笑った。

殆ど使われたことのないキッチンからコーヒーの良い香りが漂うと、彼女は普段人に気を遣うことのない彼の意外な一面を見たような、驚いた顔を見せた。こんな部屋でも一応それなりに生活はしているのだと言わんばかりの態度は、研究室では見られない不器用な彼の本質そのものなのだろう。

小さなテーブルを挟み、出されたコーヒーを無言で啜っていた彼

女だったが、気がつくともエマードの顔をまじまじと見つめていた。

「いつものオーリン女史らしくない」

彼女の自宅はマンション群の別棟にあつたはずだ。わざわざ訪れるには、それ相応の理由があるに違いなかった。

「私があなただけのことをどう想っているか知っていて、でもあなたには私が入る隙はない。それって、どれくらい苦しいことかわかる？」

思いがけないセリフに、エマードは彼女からそつと視線をずらした。

「あなたのことを知りたくて、私はあなたのことをたくさん調べたわ。NCC No Code Childrenは私も知ってる。遺伝子操作、実験体、キメラ。兵器の扱いに開発、それから特殊部隊。それが何だかって言うの。あなたはあなたに過ぎない。違うの」

とても彼女と向かい合えるような気持ちではなかった。エマードは席を立ち、頭を抑えて壁にもたれかかった。彼女の口から出て欲しくなかった様々な言葉が、痛いくらい胸に突き刺さっていた。

「過去も秘密も全部ひっくりかかると、私はあなたのことを愛したいの。私はずっと、あなたの側に居続けたいの」

立ち上がってエマードに近づく彼女の気持ちは嬉しかった。だが、「だめだ。俺と一緒にいてはいけない」

彼は首を振って彼女を拒んだ。

「どうして。どうしてダメなの」

「君は本当の俺を知らない。数え切れないくらいの人間を平然と殺し、今もぬけぬけと生きているような恐ろしい男だぞ。何より、俺は俺自身をコントロールしきれない。いつまた誰かを殺してしまうかも知れない爆弾を抱えているような状況で、どうやって君を受け容れると言うんだ。君は俺とこれ以上関わらない方がいい。君とは共同研究をした、それだけの仲だ。君が知っているとおり、俺はNOCODE、つまり人間じゃない。人間の定義から外れた人型の哀れな生き物だ。君はそういう対象として俺を見るべきじゃない」

声は震えていた。彼の眼鏡の奥にうつすらと涙が浮かんでいるの

を彼女は見てしまった。

「私は、最初からあなたのことを一人の男性として見てきたわ。あなたの秘密を知っても、私の気持ちは変わらない。もしかして、私のことが、嫌い？」

「そういう質問には答えられない」「ずるい」

言って彼女は手を伸ばし、そのまま彼の胸に頭を埋めた。柔らかく優しい彼女の匂いがエマードの鼓動を早くする。細い腕が背に回され、彼女の体温がしっかりと感じられる。堪らず抱き返していた。言葉には出来なかった。本当はエレノアのことばかりを考えていたなどと。

愛されたことはない。誰かを愛したこともない。でもどこかで誰かを愛し愛されたいと思っていたのだ。

首をもたげ静かに目を閉じる彼女の唇に、彼はキスをする。互いの唇が重なり合うと、頭の中が真っ白になっていった。

彼女の全てが欲しい。

「抱いて」

甘い声に、彼は耐えられなかった。

本能の赴くまま身体を求める。冷静さを失う。

それは、彼の知らない心地いい狂いだっただけ。肌を重ね合うことでえられる興奮は何物にも代え難い。溺れていく。

自分が何者なのかさえ、既にどうでもよくなっていた。結果がどうなるかと、そのときの彼にはどうでもよかった。

ただただ、彼女と愛し求め合う。心の隙間を埋めていくように。

一度知った温もりを手放すことは出来ない。

エマードはエレノアとの関係を更に深めた。

後戻りできぬほど彼女に浸り、抱いた。

性交という行為に彼は癒しを求め、彼女もそれを受け容れる。

背徳感には常にあった。NO CODEと自分の身体の秘密を思い

出さなかったわけではない。だが、それ以上に彼女と過ごす時間が欲しかったのだ。

数ヶ月が経ち、研究の集大成とも言うべき新型の転移システムの最終チェックを行う頃、エレノアは神妙な面持ちで一人研究室に残るエマードに声をかける。

「赤ちゃんが、出来たみたい」

恥ずかしそうに顔を赤らめる彼女のはにかんだ笑顔は、やがてエマードを奈落の底へと突き落としていくことになる。

## 47・崩れゆく

当然と言われれば当然の結果だったはずだ。性交　生殖行動をしてきたのだから、彼女の子宮に自分の遺伝子を引き継いだ生命体が息吹くことだって、十分考えられた。まさか全く前提としていなかったのかと言われれば嘘になる。彼女との関係を冷静に見つめることが出来たあの夜以前は、彼女と身体の関係を持つことが危険だということをも十分認識できていた。

麻薬だ。性交は一種の麻薬。彼女との身体と繋がる快楽は、彼がそれまで必死に守ってきたものを簡単に打ち砕いてしまう。孤独だった男の心には肌と肌との繋がりはいあまりに刺激的すぎたのだ。

とはいえ、遺伝子の秘密を知らせないうちに彼女が妊娠したのは、完全な誤算だった。

彼女との夢から、エマードは一気に現実世界に引き戻されていた。体中を悪寒が走り、震える。

「嬉しくないの」

怪訝そうに顔を傾げる彼女にどういう顔をしたらいいのか、エマードはわからなかった。

「産まないでくれとお願ひしたら」

咄嗟に口から突いて出た。

エレノアの表情が変わる。

「何を言ってるの。何が不安なの」

「NO CODEの子供を産むってことがどんなリスクを孕んでいるのか、君は理解してるのか」

溢れていた機器やケーブルが整理され、だだっ広くなった研究室にエマードの声が響いた。それは二人で愛を語らうときの口調でも研究者として共に働くときの口調でもない。低くドスの効いた、胸に刺さるような口調だった。

エレノアはただならぬ雰囲気を目を丸くししばらく黙ったが、深

く深呼吸した後でゆっくり微笑んだ。

「そのことなら大丈夫よ。ちゃんと考えてあるから。ドクター・リーに相談に乗ってもらうことになってるの。彼、NO CODEに関して詳しいんでしょ。遺伝子検査でもし危険だと判断されたら、そのときに考えようと思ってる。でも、私はあなたほど心配はしてないのよ。だって、例えNO CODEだとしても、あなたは何ら普通の人間と変わりないもの」

彼女に、本当のことを言う機会を逃していた。こうなる前に時間は十分あったはずなのに。

冷静になるには何日か時間が必要だった。彼女と少しの間距離を置き、頭の中の整理をした。感情ばかりが先走り彼女を傷つけたくない。自分の遺伝子が危険であることはとうに理解しているはずだった。射精により彼女の子宮へと注がれた精子が、彼女の身体を音もなく蝕んでいく。自己嫌悪に陥り暴走しそうな身体を必死に抑えた。とにかく冷静に、冷静にならなければ。

数日間自宅マンションに籠もった後で、ようやく彼女と話をする決心が付く。彼は彼女と連絡を取り、二人で産婦人科医マールの元を訪れていた。胎児の様子と彼女の体調について詳しく検査をして欲しいこと、遺伝子検査により何らかの異常が認められた場合は速やかに中絶して欲しいことを、彼女と医師に伝える。

「あなたがNO CODEであるということは、ドクター・リーから聞いています。何、心配することはない。余程のことがない限り中絶の必要はないでしょう。ただ、NO CODEが子を作るなど前例のないこと。念のため私とドクター・リー、二人で彼女の経過観察をさせていただきますよ。データを取ったり、通常より多く検査を必要としたりするだろうが、了解してくださいませね」

中年小太りの白人医師は丸い顔でニカツと笑った。その笑みの中にNO CODEと性交した女に対する蔑みが含まれていることを、エマードは見逃さなかった。自分が軽蔑されているのには慣れてい



だが、彼女に対して同じ目を向けるこの医師に何故彼女の身体を託さねばならぬのだと、わき起こる怒りを静かに抑える。

エレノアは、最初から産むつもりでいたのだ。意志の固い彼女が自分の子供を諦めることなど到底ありえない。確実に産むために、腕がいいと評判のマイルとNO CODE担当のリーにサポートを頼んだのだろう。

中絶できるのはせいぜい妊娠二十一週前後まで。体内で子供が大きくなればなるほど母体に負担がかかる。

問題は、NO CODEの遺伝子を引き継いだ胎児の成長が果たして正常な胎児と同様かどうか。もしかしたら早熟かも知れない。或いはその逆、或いは人間の形を保つことすら出来ないことも考えられる。エマード自身、遺伝子がどう操作されて今の自分があるのか、全くわからない。驚異的な治癒能力が一体どこから来ているのか、何もわからないままでは対処のしようもない。

日に日に成長していく胎児を脳内で想像し、エマードはブルツと肩を震わせた。

「大丈夫、心配しなくてもちゃんとして生まれてくるわよ」

マイル医師の診療所からの帰路、微笑んで腕を絡ませる彼女に、エマードはかける言葉がなかった。

ドクター・リーから彼女の身体について報告があったのはそれからひと月ほど過ぎた頃。閉鎖の決まった研究室で最後の作業を行うエマードの元を、彼は予告なく訪れた。

相も変わらず小綺麗な女顔のリーは、彼女には言っていないことだと前置きしたあとで、こう切り出してくる。

「胎児の成長が思ったより少し早い。一ヶ月から二ヶ月ほど、早く成長してるみたいだ。それから、念のため彼女の血液と羊水の検査、胎児の遺伝子検査を試みたんだけど、どうも通常では表れないような数値が出ていてね。もしかしたら、あまり良くない状態なのかもしれないよ」

最近体調が優れないのだと彼女が言っていたのを思い出す。数週間前に、エレノアはエマードのマンションに荷物をまとめて越してきた。

「子供を諦めるなら、俺はその方がいいと思っている」

作業机に向かったまま背を向けて呟くエマードに、リーは驚いたような声を浴びせた。

「彼女との子供は、必要ないってこと？ それを彼女が知ったらどれだけ悲しむか」

「異常が出たら中絶して欲しいことはマール医師に伝えてある」

間髪入れぬ返答に、リーは呆れ顔でエマードを覗き込む。

「君は、人の話をどこまで真面目に聞いているのかな。成長が早いと言った。胎児は、中絶が難しい大きさにまで成長してしまっている。これ以上大きくなってからの中絶は、彼女の身体に負担がかかるんだ、わかってるだろ。まさか、愛する女性をみすみす危険に陥れるなんてことは、しないよね。母子共に助けるためにも、早急に入院させた方がいい」

あくまで親身に語りかけてくるリーが、鬱陶しかった。青い目をぎよろりと見開き、彼はわざとリーにぶつかるような角度で乱暴に振り向いた。

「ひとつ、聞く。今から墮胎するのと、産ませるのとどちらの方がリスクが高い」

よろめきうつろたえ、リーは表情を歪ませた。

構わず、エマードは大きな身体を起こし、被せるようにしてリーに詰め寄っていく。

「彼女を傷つけたくはない。子供も欲しくない。生まれたとして子供はNCC行き確定だ。だとしたら産まない方が彼女のためではないのかと、俺は思っている。異常が出て今からでも間に合うのだとしたら、中絶を」

エマードの行動は傍目にも異常だった。彼女の身体を労り、子供が出来たことを喜んでいるのかと思えば墮ろしてくれなどと。右に

左に主張がぶれている。

作業机からどンドン離れ、壁際まで自分を追い詰めたエマードを、リーは鼻で笑った。

「君は、何を怖がってる」

「怖がってなどいない」

「嘘だな」

実際、エマードの手のひらは汗でじっとり濡れていた。胎児に異常が出たと聞かされた途端、何か引っかけが取れたように自分の子供への思いが薄れていくのが感じられたのだ。異常、中絶、解放。そんな図式を描いてしまふ。それはひとえに、誰にも話していない秘密からの。

「胎児の遺伝子異常、それがなんなのか、知っているから怖いのだ。……なあ、D-13」

息を飲んだ。血の気が引いた。

頭のどこかでパリンと音がする。何かが壊れていく。

「何故、知ってる」

「何故って、僕はNO CODE担当。知っててもおかしくないだろ」

「違う、それはNCC以前の」

そこまで言って、エマードはゴクリと唾を飲み込んだ。

あのラボ襲撃の夜、煙に巻かれ意識を失った自分を助けたという医師ティン・リー。彼が『D-13』という過去の名前を知っているということは、彼の身体の秘密を知っていると言っていることであり、そして、可能性としてリーは。

「……まさか、お前は俺の遺伝子を」

足がもつれた。ふらふらと安定しない足取りで後退したエマードは、何もなくなつた床にでんと尻を付ける。

茫然自失して天井を見上げる彼を、リーはほくそ笑み見下ろしていた。

詳しい検査結果が知りたいというエマードの申し出に、リーはにんまりと笑みを返した。

「それは、君の今後の出方次第だ」

最初からどこか不自然だと感じていた、それが明るみに出ただけなのかもしれない。

ティン・リーは一体何者なのか、探ろうと思ったことなどこれまで一度もなかった。政府がNCC出身者の回収を進めているということ自体にも、違和感を感じはしたが、あり得ない話ではないと思っていたのだ。

エマード含め優秀な人材だと認められたNO CODEらは、一般の技術者や研究者と同じようにラボに配属され、そうだと知られぬまま生涯を終える。真に優秀であればコードの有り無しは関係がないのだと、どこかで聞かされた覚えがあった。何らかの目的があって人材を集めなければならぬとき、記録を辿るのに限界のあるNO CODEを専門に回収するのは何もおかしいことじゃない。

だが、リーの口から出た“D-13”という言葉はエマードの心をかき乱した。

エレノアは緊急入院。しかも、リーが管理するビル内の病院に。担当産婦人科医のメールによれば、技術的に優れている施設に入院させるのだから何も心配はいらないとのこと。リーが中心となって二十四時間態勢で彼女の看護に当たるのだというが、どうも信用が出来ない。

ティン・リーはただの医師ではないと、エマードは確信し始めていた。何とかして正体を探りたい。あのラボでやたらと過去のことを嗅ぎ回っていたジャン・ウェイの気持ちだが、今になって痛いほどわかる。彼はエマードの正体を知りたがった。データがないことで不信任を募らせた彼が、あちこち動き回るのをじっと見てきた。

まさか、それが自分の役回りになるとは。

空間転移システム研究室が閉鎖され、仕事を失ったエマードは、これ幸いとばかりにリーの素性を本格的に探り出す。政府ビルにほど近いライブラリから共用コンピュータを偽名で使用し、ビルで入手した他人のIDとパスワードを利用して政府のデータベースに侵入する。まず探ったのが、政府の登録医師リスト。医師免許を持つ全ての名簿がコードの有り無し問わずに載っているはずだが、それにもリーの名前は無い。登録されている一人一人、別名登録も有り得ると思えば風潰しに当たるが、該当無し。政府ビル内の病院、その勤務データもひとつひとつあぶり出してみるが、リーらしき者の名前はどこにもない。まるで最初から存在していないような。それは、彼が単にNO CODEである証なのか。いや、コードに係なく記載されるべきものにも彼の名は見当たらない。医師ならば当然つけるであろう電子カルテ、入院中のエレノアのカルテにも、マールの名前ばかりで、リーの名前は記載されていなかった。

何者なのか。考えれば考えるほど吐き気がした。エレノアに見舞いに行く気分にさえなれない。

一週間ライブラリに通い詰め、日ごと別のIDを使用して情報を漁ったが、全く収穫はないままだ。

やがて手詰まりした彼は、正体不明のリーが何のために自身を回収し、その子を孕んだエレノアを入院させたのか考えるようになっていった。

ディック・エマードの驚異的な回復能力は、遺伝子操作によるものだ。この事実を知っているとすれば、過去に実験に携わったもの以外ない。NCCに入所したときにはNO CODEであることしか施設には通知されなかったはずだ。エマードが何の実験により生み出されたのかなど、誰も知る由はなかった。だとすれば尚更、不自然に思えてくる。あの実験の研究室には、彼と年の近い研究員は居なかったのだから。

ジャン・ウエイの恐怖で引きつった顔が、自分と重なる。エマー

ドは出口のない闇に取り込まれてしまっていた。

理由がわからないにせよ、リーは“D-13”だと知っていてエマードを助け、意識を失っている間に遺伝子を採取した。その後何食わぬ顔で親切を装い、エレノアの実験室に彼を紹介する。エレノアはもしかしたら、利用されていたのかも知れない。妊娠を知ってリーに相談を持ちかけるとい構図も、自分にエマードを紹介したという恩から来るものなのだろう、知っていて彼はそういう行動を取ったのではなからうか。

目的は。本当の目的は何だ。堂々巡りすると、まともな思考が出来なくなるのは悪い癖だ。冷静に物事を見極めようとすればするほど焦り、何も見えなくなってしまう。

大切なエレノアがリーの元にいる。彼女がお腹の子供のことを一番に考えている状態では、とてもその場から引きはがすことは出来ない。何故連れ戻したいのか、何故中絶させたいのか、本当のことを話してしまえば全てが壊れてなくなってしまう、それが怖い。

その日、ライブラリから戻ると、エマードの自宅マンションの鍵は開いていた。エレノアが入院して以来、寝るだけの場所に戻ってしまったっていたが、施錠だけはしっかりとっているつもりだった。外側からは掌紋認証しなければ開かないはずだのにと、首を傾げドアを開けるエマードの視界に飛び込んだのは、あの男。ストレートの黒髪が不気味に揺れた。ライブラリが閉まった午後八時、真つ暗闇に浮かび上がった華奢なシルエットは、彼の心臓をぎゅっと押し潰す。「今日は何を調べてたのかな、D-13」

エマードは明かりを点けるのも忘れ、震え上がったままドアに背を押しつけた。

「毎日毎日、ありもしないデータをコソコソと。ご苦労様と言いたいね」

「何をしに来た。お前は一体何者なんだ」

にやりと白い歯を見せ、リーは室内の明かりを点けた。ラフな黒い服装が小気味悪い。

まるで自分の家にいるかのように、リーは好き勝手動き回った。エレノアが前のマンションから持ち込んだ小さな硝子テーブルとシンプルな合皮のソファ、彼女の好きな小さな植物や雑貨、二人の写真。それらを舐めるように撫で、またにやりと笑う。

「随分充実した日々を過ごしたようだ。さぞ楽しかったろう。これほど人間らしい生活をしてるNO CODEは、珍しいんだよ。やつぱり、君のことを手放したのは失敗だったんだと気づかされる」  
リーのセリフは抽象的だったが、彼の言わんとしていることは、エマードには理解できていた。

「やはりお前は、俺が何の実験で生まれたのか知ってるんだな。実験の結果俺にもたらされた、最悪なこの身体の秘密も、何もかも。

何が目的だ、あの実験は一体、何のために行われていたんだ。俺は何故」

「世界には、“コードを持たない者”が存在する。そのひとつは“反政府組織で生まれ育った者”、もうひとつは“実験体”。君は僕を“実験体”、つまりNO CODEであると勝手に決めつけた。前者ではないことが明白だからだ。だが、僕の記録はどこにも存在しない。コードによって辿ることは当然出来ないし、メイン・コンピュータの各種データベースにも、僕の存在は記録されていない。ならば僕は誰。優秀な君は、本当はそれにもう気づいてるんじゃないのか」

「どづいことだ」

「どづいこととて。いやだな。本当にわからないの」

リーは言いながら、ゆっくりとエマードに近付いてくる。ドアは彼の背にくっついたまま。逃げようと思えば逃げられる状態なのに、エマードの足は動かない。

「そもそも、君の義父ラムザ・エマード博士が、君を連れ出してしまったのが全ての始まりだった。実験体に同情するなんて、彼はあまりにも愚かだったのさ。人間と実験体の境目がわからなくなった彼は、君を逃がした。その後確保され、NCCに入所させられたと

きには、君は何者かわからなくなってしまっていた。他のNOC  
ODEらと同等に扱われてラボに配属されたとは知らず、僕は懸命  
に君を捜したんだよ」

怯えるエマードの真ん前に立ちふさがったりは、天使のような  
顔を歪めてニヤツと笑った。

「Project・Tの実験体、No・D・13。まだ、わからない  
のかい。全ての指揮をしているのは、この僕だ」



ありえない。もう何度も、この言葉がエマードの頭を巡っていた。まだ三十手前の男が、何故二十年以上も前の実験に関わっていたのか、どうしたら説明できよう。実際問題、人間が年も取らず生き続けるということは、医学的にも科学的にも不可能なはずだ。正体がわかってても、何一つ納得できることなどなかった。言いようのない不安が、否応なしに彼の胸中に渦巻いた。何よりも、そんな恐ろしい男の元に無防備なエレノアを預けてしまったのだと思うと居ても立ってもいられなかった。

彼女を救わなければ。

恐らくリーは、D-13の特殊な遺伝子を受け継いだと思われる胎児に、異常な興味を示したに違いないのだ。別の遺伝子と掛け合わされることで、どのような変化を引き起こすのかも確認したいはずだ。となれば、彼女は子供を産むまで解放されることはない。また、産んだところで解放される余地もない。彼女が妊娠してしまった時点で、彼女の運命は閉ざされてしまった。いや、妊娠以前に、エマードと引き合わされた時点で全てが終わってしまったのだ。初めて手に入れた安息の日々は、エマードの想像以上に短かった。リーが部屋を訪れた日からしばらく、彼は塞ぎ込んだ。存在を呪い、自傷行為を始める。ナイフで腕や足を何度も傷つけ、その傷口が塞ぐのを阻止しようと劇薬を塗り込んだ。組み合わせの悪い大量の薬品を飲み込んで、自ら命を絶つ方法を探ったりもした。しかし、それらは全て無駄であった。幾らか時間が経てば、彼の身体は何事もなかったかのように回復してしまう。痛みや苦しみはあっても、彼の肉体は死を拒み続けた。どうすれば心が晴れるのか、どうすれば彼女への贖罪が叶うのか、考えても考えても見つからなかった。

そうして一ヶ月ほど経った頃、ようやく精神的に持ち直したエマ

ードは、しばらくぶりに彼女と出会う。病院の一際大きな個室で彼女は、彼を待っていた。柔らかな金髪に煌めくエメラルドグリーン  
の瞳。変わらぬ優しい笑顔と、大きく膨らんだ腹部。

「あなたが姿を見せない間に、随分とお腹の赤ちゃんも大きくなっ  
たのよ」

様々な機器に囲まれたベッドの上に、彼女は横たわっていた。柔  
らかい手でエマードの右手を引き、そっと自分のお腹に置く。手の  
ひらから胎動が伝わるのを、彼に感じて欲しかったのだろう。

胎児の心音と心拍数を計る機械、母体の血圧と脈拍数を計るため  
の機器、点滴の管。エマードにわかるのはそれだけで、他にも用途  
のわからない機器が、彼女の周囲で様々な音を出していた。たくさ  
んの管やケーブル、大小様々なモニターや計測器は、己の過去の姿  
と重なる。

Project . Tと呼ばれた実験で生み出された実験体の一つ  
なのだと、彼は彼女に告げなければならなかった。それが一体何の  
ための実験で、何故自己修復機能などという不可思議な能力を身に  
つけさせられたのか、未だ自身も知らないのだということも。どの  
タイミングで話せば良かったのだろうと、どうにもならなくなつて  
から考えるのは愚かしいとわかっていた。まさか人並みに愛という  
感情に芽生え溺れていくのだと知らず、リーの罠に上手い具合にか  
かってしまった、その言い訳にしかならないことも理解していた。

今にも泣き出しそうに瞳を潤ませるエマード。何かがあると察し  
たエレノアは、重い身体をそっと起こして手を伸べた。ベッドの隣、  
丸椅子に腰掛けた彼の頬に指が触れる。

「本当のことを、言いたいと思う」

エレノアは静かに微笑み、苦しそうに語り出すエマードの顔をじ  
っと見つめていた。

彼女はどこかで、彼の秘密を予感していたのかも知れない。

実験のこと、自分の過去のこと、身体のこと、全て話し終えても  
眉一つ動かさなかった。

「前にも言ったけど、どんな秘密を持っていたとしても、私はあなたを愛し続けたいと思ってる。あなたはあなたでしかない。私はあなたとの子供が出来たことを感謝しているし、とても喜んでるわ。だからこうして、ドクター・リーから協力を」

「違う、君は何も理解しじゃない。俺は結果的に君を傷つけた。後戻りできないところまで追い詰めた。君の身体も、お腹の子供も、最後にどうなってしまうのか俺にもわからない。君は全てを信頼しすぎている」

必死な訴えが伝わらない、歯がゆさ。エマードはまた、苦しそうに頭を抑える。話したところで万事解決するようなら、話さなくても良かったのではないかという考えすら頭を過ぎった。それでも、隠し事をしたまま彼女が巻き込まれていくのを見ているのも辛い。板挟み状態から抜け出したかったのだ。

だのに彼女は彼の気持ちを知ってか知らずか、思い彼の頭を両手でぐいと持ち上げる。そしてゆっくり自分の顔に近づけ、にっこり微笑んだ。

「悲観的な考えは何も産まないわ。前を見ましよう、必ずどこかに出口はある。私もこの子も、あなたと一緒に幸せに暮らせるって、信じないでどうするの」

強い、女性だった。

彼女の身体を管理しているリーが、まさか全ての元凶だなどと、とても言うことは出来なかった。

リーは彼女の性格も考え方も全て把握した上で、エマードに引き合わせたに違いない。最初から墮胎など出来ぬ構図になっていたのだ。

また来るよと別れのキスをして病室を出ると、廊下で壁にもたれた白衣姿のリーが待っていた。

「久しぶりの面会は楽しんだかな」

冷たく笑う彼の横顔に、エマードは背筋を凍らせた。

「全部話したようだね。それで彼女がどうにかなるとでも思ったの

か、愚かしい。君はつくづく思い通りの行動をしてくれる。これから彼女が無事に子供を産んだとして、君らはどうなると思う。普通の幸せなんて、ない。わかってるんだろ。……そうだ、一ついいことを教えよう。君の子供、性別は女だ。通常妊娠より三ヶ月早く生まれてくる。安心しろ、今のところ外見には何の問題もない。見た目に魔物めいたものは出てこないっていうことだ」

リーはそう言って、意味深に含み笑いする。

「NCCでも、配属先のラボでも、人の命を無下に扱ってきたディック・エマードともあるう男が、自分の大切な女とその子供には手を下せない。皮肉だな。いつから君はそんなくだらない存在に成り下がったんだ」

エレノアとの優しい時間から引き戻されたエマードは、怒り心頭にリーの胸ぐらをぐいと掴んだ。引き寄せられたリーの細い身体が、少しだけ宙に浮く。

「どこまで、どこまで仕組んでる」

低いエマードの声が、二人だけの廊下に響いた。

「お前はどこまで知っていて、どこまで俺を苦しめようとするんだ。本当の目的は何だ。Projectを通じて、お前は研究員たちに何をさせていたんだ」

ククツと喉を鳴らし、リーはエマードの手を振り払う。靴底が床に付き、カツンと音がした。

「そんなことを、実験体だった君に教える必要はない。私はただ、ラムザ・エマードによって君を失った時間を取り戻したいだけさ。彼があんな行動をしなければ、そもそもこういうことにはならなかった。恨むなら、君の義父を恨み給え。同情によって自由を失った、あの哀れな男に」

握りしめたエマードの左手が、小刻みに震えた。殴り倒して済むなら、全ての骨を砕くまで殴り尽くしたいとさえ思っていた。

何もかも、リーの思い通りに動いている。彼が本当に全ての指揮権を持つ男なのだとしたら、それこそ、この世界は終わりだ。どう

にかして状況を打破しなければならない。彼女が子供を産むまで、  
残された時間は限られているのだから。

## 50・許されない

見えない鎖に繋がれているようだった。コードのないエマードの足取りを追うのは、容易ではないはずなのに。監視カメラだけでは説明が付かないくらい、確実に居場所と行動が相手に知れている。どうやって追っているのかと、否が応でも気になり始める。何かのセンサーか、発信器が仕込まれてしまったのか。

以前ライブラリで容易に出来たハッキングも、全てお見通しとばかりに簡単に遮断された。ビル内のリースペース、一般店舗の貸し出し用端末でも試したが、いずれも弾かれた。回線の繋ぎ方を弄り、経路を複雑化することで正体を隠そうとしても、すぐに見つかってしまう。データを漁るのは、諦めた。

彼女に直接的な危害が加えられることはないとわかっていた。それでも、リーがどう出てくるのか不安で、彼は過度にエレノアを見舞った。彼女は喜んだが、本当の目的は違う。ティン・リーの動きを確かめるためだ。毎朝端末を持ち込み電子カルテの入力をし、簡単な診察をしていなくなるのだと彼女は言った。その言葉を頼りに、診察後のリーの足取りを追う。しかしリーはいつも煙のように消え、行き先を突き止めることの出来ない日々が続いた。

こうなったら、ビルの最上階に行くしかない。もし、本当にリーが自分の考えるような存在なのだとしたら、普段は最上階にあるという彼の執務室にいるはずなのだ。

警備室に見取り図があるのは知っている。警備員の目を盗み、データをコピー、自宅に持ち帰って作戦を練った。自宅の端末でデータを開くと、警備用の見取り図には防犯カメラや防犯システムの作動位置、視界範囲まで記されていた。どの経路で侵入するのが妥当か、数週間かけて練り上げる必要がある。非常用通路と物資運搬用のエレベーター、システムの死角になっっている一部の通路。それらを線で繋ぎ、完璧に記憶しなければならぬ。天まで届く超高層ビ

ルの図面は、それだけで何百ページにもわたった。しかも、データが盗難された場合を考え、見取り図の並びは故意に上下左右向きもバラバラにしてある。一ページずつ階数を確かめ順番に並べる作業に時間を要した。改めてビルの広さと高さを痛感する。そうしてやっと全ての見取り図を並び替え、いざ経路を組み立てようとしたとき、ふと、一つの見取り図だけが取り残されているのに気がついた。エレベーターの降り口と非常階段へ続く扉、長い通路、その先にある四角い部屋の塊。どこかで見覚えがある。それがどこだったのか、エレノアの病室に通いながら、エマードは何度も自分の記憶を探った。

病室からの帰り道、いつものようにエレベーターに乗り込んだ彼は、操作パネルの中にあるBボタンをじっと見つめた。もしかしたら地下に、何かがあるのかも知れない。全ての見取り図を繋いでも地下五階部分までしか確認できなかったのだが、もしかしたらその先にも何かがあるのではないかと疑い始めたのだ。

幸い、他に誰も乗っていない。恐る恐るボタンに手を伸ばす。

“ B 5 ”

まずは見取り図で確認できた最深階へ。静かに降りていくエレベーターの中、鼓動が高鳴った。喉が渴き、思わず唾を飲み込む。

到着、扉が開き、一旦出るがまた入り直す。今度は“ B 6 ”

エラー表示。続いて“ B 7 ”、“ B 8 ”“ B 9 ” エラー。これ以上はないかも知れないと、汗の握る右手でそっと、“ B 1 0 ”と入力する。

フワッと一瞬浮き上がり、急加速して降りていく。あの見取り図は地下十階を指していたのかと思うと、身体が火照りだした。程なくして扉が開く。眼前には長い通路が続いていた。

「ここだ」

小さく呟いて、歩を進める。

薄く明かりの灯った通路には、天井部の通気口から冷たい風が吹きつけていた。じめつとしたカビっぽい、地下特有の匂いがする。

コンクリ壁を伝い歩いているうちに、エマードの胸はどんどん苦しくなっていた。知っているのだ。たった一度だけ通ったことのある場所だ。そのときはもつと通路が広がった、子供のとき、大きな手に引かれ走ったのだ。

『君は、ここにいちやいけない。出よう、D-13。こんな実験は最初から間違っていたんだ。わかっている、今まで何の抵抗も出来なかった。君の十年を無駄にした。決して許されることじゃない。私は償わなくちゃならないんだ。君を、助け出さなくちゃならない』  
痩せぎすの男の背中を必死に追う、小さなエマード。初めて履かれた靴が、窮屈で歩きにくかった。少し大きめのサイズの合わない服は、彼がエマードのために見繕ったあり合わせのものだった。

『ここから先、外の世界に出たら、君は私の息子として過ごすんだ。胸を張って、堂々としてればいい。キヨロキヨロと辺りを見回してはダメだ。顔を上げて、前を向いていればいい。君は最初から、私の息子「ディック・エマード」だったんだ』

脳内で再生されていく記憶は、エマードの感情を搾り取る。そうだ、ここはあの場所だと確信していく。目から溢れてくる液体がつつつと頬を伝い、視界がぼやけた。全てが始まったその場所が、目の前にある。

重い鉄扉には表示がない。何の施設かすぐにわからないようにしているのだ。ドアのノブに手をかけ、そっと開く。また、どくと心臓が波打った。

計器には様々な色のランプが灯っていた。起動音と水の音もする。並んだモニターと、操作パネル。手術台と診察台、そして、大きな水槽。そのどれもが、彼の記憶のまま。ぞくぞくと震えだした。もう二十年以上も前のことなのに、子供のあの日に戻ってしまったかのように、彼は怯えだす。震えた手で水槽に触れた。空の水槽には、元々色の付いた液体と自分が入っていたのだ。管を繋がれ、まるで見世物のように浮いていた。

ウワツと頭を抱え、エマードは屈み込んだ。記憶の波が一気に押



し寄せ、押し潰されていく。今まで封じていた最も忌まわしい過去の記憶が、鮮明に彼の脳裏に映し出されていた。

あまりの衝撃に、彼は無防備になっていたのだろう。その場に先客が居たことに、彼は全く気がつかなかった。

何者かがそつとエマードに近寄り、ゆっくりと隣に屈み込んでポンと肩を叩く。

「やあ、こんな所にまでやってくるなんて。君はなんて物好きなんだろうね、D-13」

リーだ。

エマードは慌て、転げた。大きな身体が金属で出来た計器に当たって、鈍い音がした。目を丸くし、口をパクパクさせるエマードを見て、リーは腹を抱えて笑っている。

「今度はなんだい。見取り図持ち出して、何をしようとしていたのまさか、ここがどんな場所かもわからず迷い込んだのかい」

彼は悔しさでギリリと歯を鳴らした。目の前の優男をギツと睨み付けるが、何の効果もない。

リーは楽しそうに立ち上がると、まるでエマードを小馬鹿にするような口調で喋りだした。

「Project・Tの研究室だよ。覚えてるだろ。君は僕を見ていた、あの中から。そのまんまじつとしてくれたら、誰も傷つかずに済んだのに。ラムザ・エマードは何故その罪深さに気づかなかったのか、僕は不思議で仕方ない。やっと、理想的なモノが完成したと思っていた、それを連れ出すなんて。とんでもないことをしてくれたもんだよ。僕は許さない。君を連れ出したラムザも、そのまま行方をくらました君も」

彼は一方的に毒づいていた。あまりに身勝手な考えに、エマードは愕然とする。小刻みに顔を左右に振って、心の中で違う違うと何度も唱えた。それしか、出来なかった。

「まあ、どう足掻こうが、最終的に僕の思い通りになればいい。今までのことは水に流そう。次の実験体がもうすぐ手に入る、Pro

jectは続けられる」

またにやりと不敵に笑って、リーはおもむろに水槽を撫で始めた。その手の当たる場所に、透明なラベルが貼ってある。“N.O.D-13” ふつつつと湧き上がる、怒りとも憎しみともわからぬものが、エマードの頭を沸騰させていく。リーという言葉、動き、どれもが彼を興奮させた。

「つ、次の実験体というのは、まさか、俺の」

その言葉を待っていましたとばかりに、リーは大きく振り返った。にんまりと上げた唇の端が、鋭く尖って見えた。

## 51・何も、残らない

全て言わなくても、わかっていた。当然すぎるくらい、エマードには何の希望も残されてはいなかったのだ。

郊外のラボ、塀の向こうから聞こえていた主婦たちの会話や子供の遊ぶ声、それらは全てどこか遠く、彼とは一切縁のない場所で起きている出来事だった。日常など、どこにもない。試験管の中、研究室の水槽、そしてNCC。ラボに配属され、政府ビルにやってきても、彼の運命は変わらなかった。結局はどこかで誰かが、彼を不幸にしていく。それがティン・リーという男なのだとわかったくらいで、そこから何の進展もない。

体中の細胞が砕けてしまいそうな、だがそれは決してあり得ない現象なのだ。どうにも出来ない身体を呪ったところで、ティン・リーを恨んだところで、今この状況が打開できるわけではない。手に入れたと思っていた幸せが音を立てて崩れていくのを、ただ傍観するしかない。

顔中、汗や涙と鼻汁で濡れ、興奮して真っ赤になっていた。リーの能面を一杯睨み付ける。怒りをどこにぶつけたらいいのか、悲しみをどうすれば払拭できるのか。混乱していく、混濁していく意識の中で自我を保とうとする。

地下研究室に来たことで、ディック・エマードの身体は次々に異常をきたした。血圧が上がリ、身体が火照った。震えも止まらない。視界が定まらず、ガクガクと歯が鳴る。幼児期から少年期、自我の形成されるべき最も重要な時期を、彼は地下で過ごしたのだ。忘れてたくても忘れられなかった恐怖が、瞬く間にエマードを過去の世界へ引きずり込んでいく。たくさんの大人たちの目、そして手。注射針、メス、聴診器、手術台と緑色の水槽。『……が足りない、数値を上げるために』から採取した……を』『それは生命維持に関わる。再生能力を向上させるなら寧ろ』『博士、13の心拍数が』

「構わん、このまま を」記憶からは、大事な言葉が抜けている。ただ、何種類もの声が頭の上で響いていた。

「君が居なくなつて、それでProjectが終わってしまったとしても思っていたのか。D-13、君はあくまでProjectの副産物でしかない。君以前にもたくさんの実験体がいた、これからも実験体を用意して続けられていく。Projectが終了するのは、その目的が達せた場合のみ。 まだ、途中段階なんだよ」

薄暗い照明を背に、リーは鋭い目をエマードに向けた。逆光ではつきりと表情は見えないが、切れ長の目と白い歯が僅かな光を反射している。清潔な白衣を着て医師の格好はしていたが、闇にたたずむ姿はまるで死の世界の番人のよう。

配管がむき出しになった冷たい実験室の天井は、エマードの懐かしい屈辱を蘇らせる。同じことが繰り返されていくのかと思うと、彼の息は次第に荒くなつていった。

「まるで、あの水槽の中にいた少年の頃に戻つたみたいじゃないか。怯えて。その」

リーの腕が不意に、床に倒れたエマードのジャケット内側に潜り込んだ。固い黒い物体がスツとリーの手の中に移動し、少しだけ腹の辺りが軽くなつたところでハツとする。

「大事な銃で僕の頭を撃ち抜いてしまえば、一瞬で解決するはずなのに。愚かしい」

男は引き金の中に指を入れ、クルクルと器用に回してみせた。数回転させた後、持ち直してデザートイーグルの銃口をエマードの額に向ける。

安全装置を外す仕草に、エマードは思わず腰を浮かせて息を飲んだ。

「君は、結局怖いだけだ。大切なものが奪われていくのも、自分自身がなくなつてしまうのも。どうにかして生き続けたい理由でもあるのかな。そうでないなら、いつそのこと、この銃で君の脳天を撃ち抜いたらどうだ。砕けてしまえばきっと、再生能力など発動せず

に終わる。一瞬で死ぬる。それをしないのは何故。やっぱり、彼女のことを愛しているからか。それとも、彼女の腹の中にいる、君の遺伝子を受け継いだ生命体に未練でも。君の行動は不可解極まりない。私の頭では到底理解できそうにない。私は君を逃したことを後悔したが、君を知れば知るほど、君は失敗作だったのだと思わざるを得ないよ」

氷のようなりーの視線、感じたことのない恐怖がエマードの身体を突き抜けていく。

「君は実験体としては成長しすぎた。有用なのは遺伝子。だが、その採取も終わった。つまり用済みだと言うことだ。なのに、何故君を殺さないのだと思う」

追い込まれた鼠のように、エマードは研究室の床に両腕を付け、肩をすくませる。視界が定まらない。顔はりーの方を向いていたが、目はキョロキョロと、逃げ場を探してさまよってしまふ。

逃れなければ、早くこの空間から逃れなければ。

焦りが、ますます鼓動を早くした。

「エレノアには無事に子供を産んでもらわなければならない。そして、Projectを完成させる。君には協力してもらおうよ。残念ながら君の頭の良さは、僕の計算外だったんだからね」

「嫌だ、と言ったら」

渴いた喉に無理矢理唾を流し込み、一言。

それが、逆鱗に触れた。

引き金が引かれ、轟音と共に激痛が走る。エマードの左肩、鎖骨から上腕筋までビリビリと電気が走ったように凄まじい振動を起こしたかと思うと、大量の血が辺り一面に噴き出した。肩を銃弾が貫通し、骨と肉が砕けて飛び散る。薄暗闇が赤いまだらに染まった。

悶絶、呻き声を上げ、のたうち回るエマードに、りーはブンと銃を投げつけた。彼にはもう、鈍い音を立て床を滑っていく銃を拾い上げるだけの体力は残っていなかった。死んでいく左腕の感覚。

「君も、エレノアも、その子供も、粉々に砕いて二度と再生できな

いようにするしかない。最悪、エレノアの腹を割いて子供を取り出し、その細胞からクローンを作り出せばいいだけのこと。君がProjectに協力するなら、そんな恐ろしい真似はしないよ。かつての君とラムザ・エマードのように、この研究室の中で二人過ごせるんだ。最も優しい選択肢だと思わないか」

視界が暗転していく。

傷を治そうとしているのか、身体が熱を帯び始めていた。息苦しい、頭がぼつととする。

意識を失えば、リーの思うままだ。何とか意識を保たなければ。だが、身体は言うことを聞かない。遠のいていく、遠のいていく。「しばらくそこで過ごすがいい。覚悟を決めるんだ。彼女の出産までYESの返事がなければ、僕は容赦なく君らを殺す。エレノアが子供を産むまでの間、君には存分に苦しんでもらうよ」

遠くで言い放つリーの声が、かろうじてエマードの耳に届いた。悲鳴を上げそうだった。精神まで壊れてしまいそうな痛みを、彼は意識の片隅で感じていた。体中の神経が敏感になり、忌々しく冷たい研究室の感触が彼の脳を針のように突き刺してくる。

左肩の骨や筋肉の断片があちこちに飛び散った床の上で大の字になり、彼はしばらく呆けた。

体中の欠陥がうねり、傷を治そうと血小板がうごめいているのが感じられるほど、彼は過敏になっていた。

ゆっくりと呼吸を整え、眼前から幻影を取り除こうとする。

通気口から僅かな空気が流れる音、そしてエマード自身の呼吸音。誰も居ないとわかっていても、冷静になろうとしても、耳の奥で常に誰かが囁いていた。その中で一際はつきりと聞こえるのが、あのティン・リーの高い声だ。嫌みったらしく“D-13”と呼ぶその声を、確かに彼は子供の頃に聞いていた。

『銃で頭を撃ち抜いてしまえば』と言われた、その通りなのだ。このまま生き続けるのが嫌いなら、いつそのこと頭をぶっ飛ばせばいいのだ。まさか脳味噌の欠片になってまで再生などするまい。再生

不能なまでに強烈な爆弾を抱え、点火すればよかったのだ。自分の身体に必要な以上の再生能力が備わっているのだと知った日から、どうやって生きていったらいいのか、それだけを考えていた。死なない、死ねない。ならば、どう自分という存在を繋いでいくのか。それが、いつの間にか“どうにかして生き続けたい理由”を持ってしまった。

エレノアだ。ティン・リーの画策通り、エマードは彼女と愛し合ってしまった。大切なものなど手に入れなければ、あっさりと死ねたのに。

どうしようもない虚無感に襲われた。このまま朽ちるなら、朽ちてしまえばいい。

しばらくの間、彼は仰向けになって、冷たい天井を見つめていた。

「そうして、あなたは地下研究室に幽閉された。エレノア・オリンが出産する直前までの数ヶ月、そこに残された僅かな食料と水で生き延び、精神までボロボロになった末に、とうとう泣きつく形でティン・リーに懇願したわけだ。『娘を実験体にするのは諦める。だから、殺さないでくれ』って」

口元に笑いを浮かべながら自分の過去のことを話されるのは、正直なところ我慢ならなかった。いつでもぶんどられるようにディックは拳を握り、目の前の男を睨む。だのに銀髪頭は、何の手応えも感じさせない変わらぬ調子で、何度も目の前を行ったり来たりした。

ドーム襲撃の翌日、アンリに呼ばれ、彼はドーム群の中央監視ドームに来ていた。他のドームが半径数十キロ単位なのに対し、監視ドームは直径五百メートルにも満たない。EUドーム群全体のデータ集約、機械管理の中枢。詰まるところ、ドームのメイン・コンピュータと呼ばれる巨大な機械の塊が、そこに鎮座していた。襲撃された最北のドームから二つほど離れた場所にあるため、直接的な被害はない。ただ、網の目のように張り巡らされた情報網の数力所が寸断されたことで、それを修復する作業に手間がかかり、丸一日、通常のアクセスが出来ない状態だったのだ。

筒状の管理機を中心にした監視棟は、監視ドームの中央に位置した。高くそびえる管理機には、メンテナンスに備え、螺旋状に階段が巻き付けてある。巻き貝のように下部がデボツと太った地上部に小さな入り口がある。奥の内部監視室に、ディックとハロルド、キースを連れ込み、監視モニターと端末に囲まれた中で、アンリは自分の知っている情報を順立てて話した。

『重要なファイルを見つけた』とディックを誘ったアンリは、大きな事件にESのメンバーまで巻き込んだ手前、本人だけにファイルを見せて終わりにすることが出来なくなってしまっていた。NCC



出身のキースには、何故こんな事になったのかと詰め寄られ、ディックを呼び込むために利用したハロルドからは、一体何を隠しているんだと首根っこを掴まれた。無理矢理ついてくる二人を振り払うことも出来ず、渋々解説に回る。何とも悲惨な個人情報だけに、他人に話して良いのかディックに確認を取ろうとしたのだが、とてもそんなことが出来る雰囲気はない。本人未承諾のまま、はつきりわかつている情報として、ディック・エマードが政府の実験体であった事実、ティン・リーという医師は政府総統であり、エレノア・オリンとディックを近づけることで子供を孕ませ、その子供を新たな実験体としてProjectを続けようとしていたことまで話し終える。

勿論ディックとて、良い気分ではない。はらわたが煮え繰り返えそうなのを我慢しながら、狭い監視室に置かれた作業用椅子で腕組みし、じつと話を聞いていた。ときに肩を震わせるのを、アンリはわかっていたのだろうか。少なくともハロルドとキースは、青ざめた顔で何も口に出さなかった。

「よくもまあ、調べたもんだな」

ククツと鼻で笑い、ディックはアンリに鋭い視線を浴びせた。椅子に仰け反って脚を組み替える仕草に、流石のアンリも畏怖して足を止める。

「ま、まあね。通常NO CODEの情報はどこにも残らない。だからあなたに関する情報を手に入れるのは難しかった。それを可能にしたのが、マザー・コンピューターとの交信ってわけ」

「ごめんなさいと言わんばかりに両手を挙げて、アンリはにやりと笑った。

「ホントは、エマード博士にだけこっそり見せたかったんだけどな。どうしてこう、余計なモノがついてくることになっちゃったんだかでも、実際ファイルに触れることが出来るのは博士だけだからね。他の二人は、単に同席することしかできない」

「同席だけか」と、赤髪のキースが久しぶりに声を上げる。

「体力に自信がありそうな二人なら、まあ、最悪の状態になっても博士を止めてくれるだろうし。そう前向きに考えることにするよ。」

じゃ、準備するよ。これを、こうして」

アンリは言つて、端末をひとつデイツクに差し出した。全面がパネルになつている超薄型端末、黒い画面に四角い枠と手の形が描かれている。膝の上に端末を置き、どうするつもりだと言わんばかりのデイツクに、アンリは淡々と説明を続けた。

「ファイルはD-13の静脈認証と虹彩認証、そして声紋認証、これを全てクリアしないと開かない仕組みになつてようなんだ。まず、端末に右手を押しつけてその静脈パターンを読み込ませ、次に虹彩。これは端末上部の小さなカメラを覗いて。最後に、何かしらキーワードみたいなのが必要らしい。しかもD-13の声じゃなきゃいけない」

「随分手がこんでるな。しかも、何故俺の生体情報が必要なんだ」

「まあまあ、説明は最後まで聞いてよ」

ぐるっと室内を囲ったモニターの画面のひとつが、不意に白く変わった。アンリはモニター下部のパネルを操作し、他の三人に少し壁際に寄るよう指示する。頭上で大きな駆動音、見上げるとそこには大きな黒い塊があつた。デイツクたちは、その物体がゆっくりと降下するのを目で追つた。椅子のようなそれは、扉のない戦闘機のコックピットを思わせる。頂上部から太いケーブルが何本も這いだし、油圧昇降機で天井部としっかり繋がっている。成人男性が一人何とか座れるぐらいの小さな空間を指さし、アンリはまた解説を始めた。

「これは普段、僕がマザーにアクセスするときを使用してる端末。逢瀬、逢い引きに引っかけた“トリスト”って呼んでる。この中に乗り込み、直接データを脳に流し込む形ですが、マザーとはアクセスすることはできない。各地のメイン・コンピューターは全て、マザー・コンピューターに繋がつてゐるのは知ってるね。マザーはそれぞれの情報を総合的に判断して思考する能力を持つAIだ。あ

ちこちでバラバラに得られた情報も、マザーはニューロンみたいに上手くくつつけてしつかりとした情報へと変えてくれる。僕がそのファイルを見つけたのは至極偶然だった。政府総統やその周辺について探っていたときに、Projectの名称やD-13、エマードという研究者について様々な情報がやたらと引つかかってくる。その中から、どうしても開けることの出来ないファイルが奥底から見つかつたんだ。マザーが大事そうに抱え、一向に僕にくれようとしなないもんだから更に調べを進めると、面白いことがわかってきた」

話しながら、アンリはトリストの内側にある起動スイッチを押す。小さなボタンで何かを入力したあとで、トリストの中にディックを入れるように促した。ひよる長のアンリに比べ体格のいいディックが座ると、トリストの中はぎゅうぎゅうで身動きさえ取れない。まあまあと愛想笑いしながら、アンリは電気系統が正常に働いているか一つずつチェックする。

「ファイルの作成者は、ラムザ・エマード。あなたの育ての親だ。恐らくファイルの内容は、あなたにとって相当重要なものだと思う。そうだ、ひとつ忠告。脳にデータがダウンロードされると、慣れるまでは現実とデータとの境が全くわからなくなってしまいうから、気をつけて。あなたが暴走したら、昨日の騒ぎどころじゃなくなるからね。 念のため」

言ってアンリは、窮屈そうに膝を畳んで背を丸くするディックの白衣から銃を抜き取って、ハロルドに渡した。

「銃は預からせてもらう。けど、体力勝負でトリストを壊されたら困るんで。こっちで見て、やばいと思ったらデータのダウンロードは強制終了させてもらうよ」

ラムザ・エマードの名を聞いただけで、ディックは動揺した。義父が自分に残した情報とは、一体何なのだろう。否応なしに胸が高鳴った。

アンリに言われたとおり、彼はトリストの中で静脈認証と虹彩認

証を済ませる。続いて、トリストのシート後部からコードで繋がれたフルフェイスヘルメットを取り出したアンリは、それを無理矢理ディスクに被せた。

「さあ、何か喋って。キーワード的なもの。思い当たらないの」

義父と離れるまでの間、彼はファイルの存在など聞いたことはなかった。突然喋ってと言われたところで、どう声を発したらいいのか。悩み、数分じっと考えた。ラムザがキーワードにしたがる言葉、しかも自分の声でなければならぬ言葉。

『私の息子になってくれないか』

ひらめきのように、ラムザの声がディスクの中に響いた。

『君は最初から、私の息子“ディスク・エマード”だったんだ』

優しく、思い詰めたような柔らかな口調。そうだ、彼は父親として接することを選んでいった。

「……お父さん」

何年ぶりになるのだろう。既に自分がそう呼ばれるようになって久しいというのに、彼はかつてラムザを呼んだときのように、ぼつりと呟いた。

入力確認の電子音を確認後、アンリはディスクから端末を回収して、操作パネル下のスリットに差し込んだ。読み込みが始まった。

すうつと照明が消え、監視室内の電力がトリストに集められる。闇の中、トリスト内に設置された操作パネルの光だけが浮きあがる。しばしの沈黙、四人はじっと、時を待った。

数十秒後、“照合完了”の文字が室内全てのモニターに、一斉に映し出された。

### 53・囚われの

目を覚ますとエスターは、抱きかかえられるようにしてジュンヤの腕の中にいた。彼の温もりを感じつつ仰ぎ見たが、表情はいつもの彼ではなかった。見上げた天井には見覚えがなく、凍てつく気配がその場全体に広がっているのを本能で感じる。

青色に支配された大きな水槽が視界の半分を占める。悠々と泳ぐ魚たちがキョロキョロと彼女を見下ろすのに驚き、思わず肩をすくめた。ドーム育ちの彼女は、これほど大量の魚を一度気に目にしたことがないのだ。小さな魚からメートルを軽く超すサメまで、ありとあらゆる魚たちが彼女を観察しているではないか。

水槽から漂ってくる冷たい風が、エスターの腕や頬を撫でていく。半袖から覗いた白くか細い腕を擦りながら、彼女はゆっくりと身体を起こした。ここはどこなのかと彼女が言葉を発する前に、ジュンヤが口を開く。

「政府ビル、ここは総統閣下のリラックスルームだよ」

総統閣下　ジュンヤから思ってもみない呼称が出たところで、エスターは更に肩を震わせた。

改めて室内を見回す。

彼女は、巨大な水槽が一面を占める、無機質な室内にいた。革製ソファの上、ジュンヤの膝を枕にして横になっていたようだ。視界に白いものが広がり目を瞬かせ、初めて気づく。いつの間にも真っ白なドレスに着替えていたのだ。意識を失っている間に何が起きたのかという不安と、誰が自分のTシャツを脱がせたのだという恥ずかしさで、彼女は思わず声を上げる。

「あら、気がついたみたいね、お嬢ちゃん」

そこにいたのは、ジュンヤとエスターだけではなかった。真っ赤に燃えさかるような髪グラマラスな女性が、向かいのソファで足を組みながら二人を見ていた。

「心配しなくてもいいのよ。あなたを着飾ったのは、私とローザ。彼は準備が出来た後で、あなたの目が覚めるまで一緒にいただけだから」

艶っぽい女、その目の輝きがどこか歪んで見えるのは、彼女の片目が義眼だからなのだが、エスターにそんなことはわからない。ただ、何者とも知れぬ女の一言に怯えていた。

女は目を細め、すつくと立ち上がって彼女の側へと近付いた。身体の線を誇張したような服装は、挑発的で好戦的な彼女の性格を、嫌なくらいに際立たせていた。

「E」が、こんなにかわいらしいお嬢ちゃんだとは知らなかったわ。あの敵つい口ヒゲ男の娘とは、とても思えない。なるほど、閣下が熱を上げるわけね」

白い手があごに触れると、エスターは益々嫌悪感をあらわにし、泣きそうな顔をする。

女は思わず高い声で笑い出した。

「うぶだわ。ウメモトの坊やもだけど、なかなか珍しい存在よね。

これから何が起きるか知らされたときの、あなたの顔が拝めないのが、残念でならないわ」

「それ以上、余計なことは言うな、パメラ」

部屋の奥から声がした。視線をずらす。

壁に反射した青い波線から浮き出るように、黒いスーツ、長い黒髪の男が現れた。少し高い声と甘いマスクには、激しく見覚えがあった。

「リー、あなた、本当に生きて」

自分が思うよりも大きい声を出してしまった。慌てて彼女は口を塞ぐ。

リーの姿を確認して数歩後退りしたパメラ、エスターの隣で立ち上がり、恭しく頭を下げるジュンヤ。

『これから先、リーは間違はなく俺とお前を狙ってくる。どんな手段を使っても、俺達の身体を手に入れようとしてくるはずだ』

ディックの言葉が、より重々しく感じられる。エステルは止めどなく流れる脂汗を拭うことも出来ず、呆然と黒い男のシルエツトを見つめた。

次第にティン・リーは、彼女の側に寄る。良くやったなとばかりに、リーがジュンヤに目配せすると、また彼はリーに深く頭を下げた。

「探していたよ、君のことを。エステル・エマード、ようこそ政府ビルへ」

島で見せたのと同じ、優しく穏やかな笑顔は、青白く反射して煌めく背景に融和していた。しかし、彼の中にはどす黒いものが隠れ潜んでいて、何か恐ろしい策略の上でディックやエステル、エレノアやジュンヤをどんどん巻き込んでいる。

秘密主義の父ディックがようやく教えてくれた、母とリーの関係つまり、リーがエレノアを殺したということ。ディック自身が政府が行っていた何らかの研究の実験体であり、エステルもまた、何かの実験に利用されてしまっていたこと。彼の情報が全て正しいならば、間違いなくリーはエステルの敵に違いない。

『探していた』、逃亡してESに逃れていた間も、リーは二人を捜し続けていて、ディックの仕掛けた“エレノア作戦”により表舞台へと引きずり出されたことは濃厚なようだ。父曰く、作戦上彼がリーを撃ち殺すところで全てが終わるはずだったが、明らかに事態は思わぬ方向へ動いている。リーは生きているし、ジュンヤは政府側に寝返った。連れ去られ、身動きの取れない状況をどう打開すればいいのか、エステルは恐怖と戦いながら、必死に考えを巡らせた。「手荒な真似をして悪かった。君を確実に招き入れるため、色々思案した結果、このようになってしまった。エステル、君をあの男から解放できたことを喜ばしく思うよ」

遠回しな物言い。

エステルはそつと腰を浮かせ、ソファからゆっくり立ち上がった。

「人がたくさん居た所じゃ、話したいことも話せないか。パメラ、悪いがジュンヤを連れてつてくれないか」

リーに言われ、パメラはジュンヤに目で合図を送る。小さく頷いたジュンヤは、そつと視線を横にずらし、「俺は、自分のしたことを後悔してないからな」捨て台詞を残して部屋から出て行った。

リーと二人きり、真つ青な水槽を背景にしてたたずんだ。

最早自分を失ってしまったジュンヤは、頼りに出来ない。守ってくれる父親も居ない。もしものときにと、与えられたロボット犬のフレディも、一緒に転移することが出来なかった。ティン・リーがどんな人物なのか、一度きりでは分析すら出来ず、与えられた情報の乏しさに愕然とする。一体、リーと二人で何を話せば良いというのか。エスターの胸は異常に高鳴っていた。

「君が、どこまでの情報を掴んでいるのか知りたい。まあ、座つて」

言われるがままソファーに座り直すと、リーは彼女の右隣に一人分隙間を空けて腰を下ろした。少し斜めに身体を向けて、彼女の膝の上にそつと手を伸ばす。

「私が政府総統だつてことは、もう知ってるね」  
彼女はこくんとうなづく。

「じゃあ、君ら親子が実験体だつたつてことは」  
今度はゆつくりと、リーの目を見てうなづく。

リーはうんうんとうなづく返しながら、エスターの目の動きをじつと観察していた。まるで子供を相手にしているような彼の仕草。そして何かを確信したように、にやりと笑う。

「あなたは、ママを殺したのだと聞いたわ」

じつと口を噤んでいたエスターだったが、リーの態度に我慢できず、とうとう口を開いた。憎しみを込めてリーを睨み付ける。

「あなたが何をしたいのか、私にはわからない。リー、何故あなたは、パパや私を執拗に追うの。一体、私たちは何の実験に利用されていたの」



「……なるほど、肝心のところは、あの男も知らなかったのだな」  
エスターの言葉に、リーは答えない。またニヤニヤと含み笑いし、彼女ではなくどこか違う場所を見つめて細かく何度も頭を上下した。相手が何を考えているのか全く想像すら出来ない事態に、普段は温和なエスターも苛々を募らせていた。二人っきりの状況も、政府ビルに連れ去られてしまったことも、ジュンヤが態度を豹変させてしまったことも、何もかもが苛々の原因だ。逃げたい、帰りたいたい、誰かに助けてもらいたい。思えば思うほど、胸がもやもやしていく。ふいにリーは、エスターの手を取って立ち上がった。ドレスとハイヒールで動きづらい彼女を、ブンと乱暴に引っ張る。状況が飲み込めず絡まる足を何とか動かして、彼女は必死にリーの後を追いかけていく。  
「こつちだ」

ズンズンと歩く、リラックスルームを飛び出し、廊下、執務室の横、機械の並んだ一室へ連れ込まれる。ドアが閉じ、狭苦しい空間にまた二人きり。

「な、なんなの」

床に円形の模様、その下に透ける回路。壁一面の計器ランプと大小様々なモニターが鈍く光る。

リーはエスターを無視して、壁面から取り出した薄型の操作パネルに向かっていた。

「ねえ、何してるの」

心臓が壊れそうなほど、激しく鼓動する。

足元がにわかに青白く光り始めた。円形に沿うようにせせり出た光の柱が、彼女を包み始めた。

見覚えがある。あの島の、民家の庭先で見た光だ。後でハロルドに聞いた、“空間転移装置”の仕様なのだ。ESの飛空要塞をドームの外へ転移したときも、確かに同じような青白い光を放っていた。

どこかへ、連れて行かれる。

すくんだ足をどつすることも出来ずに立ち尽くす彼女の側に、操作を終えたリーがゆっくりと近付いてくる。下方向から照らされたその表情は、まるで想像世界のモンスターのよう<sup>に</sup>怪しく歪んでいた。

## 54・壊れる

身体がフツと浮き上がる感覚の後、光に吸い込まれていく。目の前の景色が完全に真っ白になって、エスターは思わず、ぎゅっと目を瞑った。風が上から下へ、身体の中を突き抜けていく。言葉として残っている『地獄へ墜ちる』とは、こういうことを言うのだろうか、ふと考えていた。

空気が安定し、そつと目を開くとそこは、冷たいコンクリートで囲われた、長細い廊下だった。薄ら寒い空気と、かび臭い湿った地下独特の匂い。薄暗い廊下は、彼女に何かを思い出させようとしている。

彼女の手首を力一杯引つ張って、リーはズンズンと廊下を進んでいった。ひらひらとしたドレスの内側に、ひんやりとした空気が流れ込む。リズムを乱したヒールのカツカツとした音が、リーの靴音と共に廊下に響いていた。言いようのない不安で顔が青ざめ、二の腕に鳥肌が立つ。

「かつて、この場所は地上部分にある二十機のエレベーターの一つと、完全に繋がれていた」

リーがようやく口を開いた。言葉が反射し、重複される。

「一般人が立ち入り出来ぬようにしていたはずなんだがね、君の父親は偶然、その入り口を見つけてしまった。そこでまさか自分が作り出されたともしらず、彼はこの道を一人で辿り、その先にある一室に辿り着く。ある意味運命というヤツだったのかも知れない。引き合っただ」

廊下の先に、扉が見える。リーはスピードを上げて、エスターを引つ張っていく。

「長いこと閉鎖されたこの場所を使えるようにするには、相当の間と費用が要ったよ」

勢いよく鉄扉を開け放し、リーは彼女を乱暴に室内に引きずり込

んだ。冷たい床に放り出された彼女は、バランスを崩して床に転げる。白いドレスの裾が床に擦れ、ビリと破けた。コンクリで擦りむいた肘をかばいながら、彼女はゆっくりと立ち上がった。

恐る恐る辺りを見回す。やはり見覚えのある光景。それが夢なのか記憶なのか、すぐには判別できないが、確かに彼女はこの場所に覚えがある。

薄暗闇に光る色とりどりの計器ランプ、ピーカーやフラスコ、電子顕微鏡、遠心分離器に試験管、そして大きな空っぽの円柱形水槽。「君が居なくなつてから、私はしばし途方に暮れた。あの男、資料も全部どこかへ持ち去つた。研究が再開されるのを恐れて、自分の遺伝情報の入ったデータチップも粉々に砕いていた。研究を続けるどころか、地下を封鎖するしかない状況まで追い込まれていたのは、正直計算外だった。だが、君が“エレノア”を名乗つてネオ・シャンハイに現れたときには、胸躍つたよ。なるほど、あの男は生きていて、私を挑発に来たのだと確信した」

部屋の片隅に手術台を見つけ、彼女は息を飲んだ。おぼろげな記憶が、どんどん鮮明になつていく。

何かの研究室だった。白衣の大人たちが常に数人、小さなエスターを監視していた。彼女は、歩くことも言葉を発することも出来ないよう、特別な液体に入れられていたのだ。緑色の液体越しに彼女がいつも見ていたのは、表情を無くしてしまつた一人の男。無精ひげを生やして眼鏡をかけた、大柄な男だ。誰も居なくなつた深夜に、彼は決まつて彼女の元を訪れた。もの悲しげな瞳で、水槽にかじりつく。懺悔していたのか、パクパクと口を動かす。そのときの彼女は、言葉を理解することが出来なかつた。

「エスター・エマード、いや、No. E-01。あの時、君を奪おうと思えばすぐに奪える状況にあつた。だけどね、それじゃあ、私の腹の虫が治まらないのだ。次々に研究を台無しにしてくれる貴様らを、私は許さない。苦しみ、壊れてしまえ。何よりその方が、マザーを受け容れるには都合がいい」

右手を高く掲げ、パチンと指を鳴したリーの背後から、黒い影が二つ這い出した。

黒い鎧のような防具に身を包んだ大男たちは、恐怖に怯えたエスターの身体を、いとも簡単に持ち上げる。フェイスガードで正体を隠し、人間らしき気配さえ感じない。まるで動物か、別の生物のような異様な気配をプンプン漂わせている。ぞわつと、鳥肌が立った。逃げようと身体を揺らしても、足をじたばたさせても、状況は変わらない。彼女は抵抗できぬまま、研究室奥の手術台に運ばれていく。起き上がり、隙を見て逃げようとする彼女の細い身体を、彼らは骨が砕けそうなほど凄まじい力で押さえつけた。

「何をするの、ねえ！」

手術台に寝かされたエスターの手足が、金具で完全に固定される。パツと、手術台に明かりが灯った。

また、彼女の脳裏に幼い記憶の映像が浮かび上がってくる。

天井に張り付いたむき出しの配管、天井から垂れるケーブル、たくさん顔、目をぎらつかせてメスを握る複数の男たち、ニヤニヤと口元を緩ませたティン・リー。そしてその後方、一人だけ表情の違う男　ディック・エマード博士。

恐怖などという感情は、幼い彼女にはなかった。何一つ、理解していなかった。政府から逃れ、必死に過ごしてきた七年間、ESでの生活が、少しずつ彼女に感情や知識を与えてくれたのだ。当時理解できなかったことも、今では十分すぎるほど理解できている。ディックの言うとおり、ティン・リーは狙っているのだ、彼女と彼女の父親の遺伝情報を。その上で、更に何かを企んでいる。

“助けて”が増幅されていく。脳内を占めていく。

手足の平がじっとり濡れ、涙がどんどん溢れた。顔を左右に振るしかできない、喉が渇く、もう声を出すことも忘れてしまった。

「E-01、出口などどこにもない。誰も助けには来ない。声も届かない。転移装置で出入りするしか方法はないのだ。残念だな」

リーはまたクスクスと声を漏らして笑う。おもむろに手術台に近

寄り、「退け」と一言。黒い男たちはスツとリーの背後まで後退った。

「ローザ、聞こえているな」

リーは天井を見上げ、その場にいない誰かに話しかける。誰と問うまもなく、

『閣下、聞こえております』

頭上から女性の声。配管だらけの天井のどこかに、目視では確認できないが、スピーカーや監視カメラがあるらしい。

『先ほど、転移装置をお使いになりましたね。起動音がしたのもしかしたらと、待機しております。NO CODE二体は、NCCへ戻しますか』

「頼む。代わりに、ケネスとロイを寄越せ」

『承知しました』

青白い光が黒い二人の兵士を包み、スツと闇に飲まれるように消えていく。

直後、また強く青白い光が闇に放たれたかと思うと、今度は、白衣を着た筋肉質な中年男と、若い眼鏡の男が現れた。

恐る恐る、彼女は男たちの方に顔を向け、ゆっくり息を吐く。

「久しぶりだな、E」

口走ったのは中年の男、その顔と声を彼女は何となく知っている。短めの金髪と高い鼻は、確かに研究室で見たことがある。

「覚えてるか、エマードの助手だったケネス・クレパスだ。あの時行方不明になったお前と、まさかこんな状態で再会することになるとは思ってもみなかったよ」

ハツと顔を上げ、目を瞬かせた。ケネスの顔は、彼女の記憶の中の人物とびつたり重なっていた。

「若造の頃、軍の命令でエマード博士と働くようになってからずいぶん経つ。あの頃、俺は子供だった。時が経ち、この地下研究室に配属され、再会したときも、俺は彼の下で働いた。……尊敬していた、それは間違いない。だがな」

言つてケネスはぐつと眉間に力を込め、ずいずいと彼女の頭上まで身体を乗り出した。

「研究対象に肩入れし、研究を放り出したのは許せない。十年間も実験体としてしかお前を見てこなかったはずの彼が、急に政府から逃れようと思つた理由、それがなんなのか俺には未だ理解できない。何が気に入くわない、何が彼をそうさせた」

興奮気味のケネスは、エスターの眼前に顔を押し当てようにして、彼女に迫っていた。何を求められているのか、彼女はただただ、目を泳がせる。

「ケネス、喋りすぎだ」

そつと、リーの手がケネスの肩を叩いた。

慌てて、彼はサツと数歩下がる。

「ロイ、麻酔を」

リーがひよいとあごを動かすと、じつと黙っていた若い男はにやりと笑みを浮かべた。持っていた医療用トランクを作業台に上げて開き、注射器を一本手に取る。針の先が、小さく鋭い光を放った。

「君にドレスを着させるよう指示したのは私だ。E-01、なぜだか君にはわかるかい」

彼女は無心に首を振る。

黒い瞳が、ギロリとエスターを射貫いていた。口元にえくぼを浮かべ、リーは目を細めた。作業台の側からそつと丸椅子をたぐり寄せ、エスターの右隣に腰掛けると、アルコールを浸した脱脂綿をそつと彼女の腕に当てた。すつとアルコールが揮発し、ひんやり感が漂う。

「君は、これからマザーと一つになる。マザーへの贈り物として、私は君を着飾らせた。待ち続けたんだ、長い、長い間。美しく成長した君の身体を、マザーは気に入ってくれるはずさ」

細い注射器の針が、彼女の白い肌に触れた。音もなく潜り込んでいく。冷たい液体が血管を通り全身に流れていくのを、彼女は遠くなる意識の片隅で感じていた。

## 55・ラムザ・ノート

体中に電気が走った、という表現が的確なのかも知れない。目は開いているのに、ディックには何も見えなくなっていた。三次元的感覚が薄れ、脳が直接的に物事を感じている。夢の中にいる、幻覚、幻影、どう表現するのが適当なのか。

トリストに乗り込み、マザー・コンピューターへと侵入していく。キーボードを操作し、端末を介して侵入していくのとは違う。情報の海へ飛び込んでいくのだ。真つ暗な世界に一つ一つの情報が光り、網の目のようになって形を作っていく。ニューロンが結びつくのと同じように、あちらこちらで関連性のある事項が手を結んでいる。その中を泳ぐように突き進み、どんどん奥へ奥へ。

身体は間違いなく、E.U.ドームの監視室、トリストとアンリが呼んだ端末の中。ヘルメットを介して脳に注がれていくデータは、ディックの感覚という感覚を全て奪い取り、マザーへの侵入のみに神経を集中させていく。『慣れるまでは現実とデータとの境が全くわからなくなってしまう』とアンリが言ったのはあながち間違いじゃない。言われなければ、この感覚の気持ち悪さに大声を出していた。いや、声を出すとこの感覚すらなくなってしまう。身体を動かしているつもりでいても、それはあくまでそう感じているだけ。あの狭いトリストの中で、ディックが自由に手足を動かせるはずなどないのだ。

実際は呼吸以外の全てが、停止している状態なんだろう。夢を見ているときに似ている。触ったかと思っているものに触れた感覚がない、歩いているはずなのに歩いている感覚がない。脳が何かをシミュレートしているのだ。

真つ黒な世界、立体的に組まれた情報の網を潜っていく。走っている、足を必死に動かし、前に進んでいるとイメージすれば、身体は自然に前進した。



時折、身体がまばゆい光の塊に触れると、それらは弾けて消えながら、ディックに画像を浴びせてくる。たくさんの数字や数式であったり、細胞のようなウイルスのようなものの映像であったり、たくさんの人の顔や名前、性別や経歴などの個人情報であったり。整合性なくバラバラに散らばったそれらのまばゆい光の塊が、光の線と線で結ばれ、闇の中に果てしなく広がっていた。

感覚に慣れ、義父ラムザの残したファイルを探らなければと、ようやく彼は本来の目的を思い出す。

すると、彼が念じるのを待っていたかのように、目の前にスツと人型の何かがぼんやり見えてくる。闇の中に白くくりぬかれたような、女性のシルエツトだ。長い髪をなびかせ、少し首を傾げる姿には激しく見覚えがある。

『エレノア、なのか』

声を出したが、それは声というより心の声に近い。声帯を震わさずに出しているというのは、あまり心地のいいものではない。

『あなたにとって、エレノアに見えるのであれば、そうなのだろう』  
目の前の人型が喋り出す。いや、やはり喋るというよりは、響いてくるというのがぴったりと当てはまる。

『……違うな。エレノアじゃない、「マザー」か。アンリのヤツ、直接ファイルにアクセスさせたわけじゃないのか。どういうことだ』  
『彼にはファイルの存在を伝えはしたが、アクセス権はない。鍵を開ける手助けしかできない』

マザーには人格がある、そうアンリが言っていたのを思い出す。なるほど、自然と会話が成り立つほどに発達したAI、アンリが擬人化して呼ぶのも理解できなくはない。

『ファイルは』

『ファイルは既に開いている』

『どこに』

『開いているが、あなたをすぐ、ファイルに接触させることは出来ない。私の言う条件を全てクリアすること。出来ないならば、アク

セスを拒否する。今後のアクセスも受け付けない』

その声も、エレノアに似ていた。皮肉な演出に寒気がする。実際身体がそう感じていないにしても、感覚としてのもやもやは胸の辺りにくすぶった。

『D-13、あなたが私の姿や声をエレノアと感じるのには、あなたの脳がそうさせているだけのこと。私には形というものが無い。あなたは自分の中で印象的な人物に私の姿や声を無意識に重ねてしまっている。ここはリアルではなく、1と0の世界。データ化したあなたの意識も、知らず知らずのうちに一番活動しやすい年齢に姿を変えている。そして、あなたの意識は直接私にも響いている。声として発していると意識している部分以外の思考も、全て伝わってしまっているのだ』

『それは面倒、だな』

言われてみれば、心なしが身体が軽い。実際、本体はそこになくとしても、無意識的に作り出した身体は二十代後半か三十代前半くらいの一番力の漲っていた頃のものだ。いくら不死身の身体でも、年をとる。老化現象と自己修復機能に関連性はないのかと疑ったこともあっただけに、トリストでやってきたマザー・コンピューター内部のデータの世界で若返るのは、悪い気がしない。

『条件は、以下の通り。一つ、リアルの世界とこの場の区別がついているうちに、全てを終えなければならぬ。二つ、データはあなたの脳に直接注がれる。データの内容によって、結果廃人となる可能性もありうることを了承する。三つ、データの内容を全て理解した上で、政府総統ティン・リーの暴走を止めよ』

エレノアの声は、淡々と条件を突き出した。一つ一つ、聞き逃すまいと神経を尖らせていたディックだったが、内容にいくつか納得できない点があった。

『最後の、リーの暴走を止めよというのは、何だ。それはマザー・コンピューターですらどうにも出来ないような事態なのか』

白抜きのシルエットは、こくりとうなずいて見せた。

『彼は、私、すなわちマザー・コンピュータを使って、人間への支配を強めようとしている。私はあくまでデータであり、プログラムであり、それ以外の何者でもない。ところが、ティン・リーは私を人間の身体にダウンロードさせ、私と繋がった世界中のコンピュータを狂わせようとしている。彼の陰謀は今に始まったわけではない。詳しくは、これから見せるファイルに、ラムザ・エマードが記した』

『彼も、ここへ来たのか』

『四十年近く前、ラムザ・エマードは初めて私にアクセスした。人格化した私と接触を重ね、最後にアクセスのあった二十年前に“ラムザ・ノート”と名付けたファイルを私に託し、姿をくらました。ありとあらゆる方法で彼の行方を探ったが、見つからない。恐らくは自殺、でなければ、私の情報網の外へ逃れた』

『二十年前までは、彼は生きていたのか。何らかの方法でマザーにアクセスできるところにいた。俺は、てっきり』

てっきり、死んだものだとはばかり思っていた。声としては発しなかったが、マザーには筒抜けだ。

おぼろげに浮かぶラムザの顔、悔しいことにはつきり覚えてはいないのだ。自分を助け、犠牲になった義父の姿は、時間の経過と共にディックの記憶からどんどん色褪せていく。コンピュータのように、いつまでも記憶を保存して置けたら良かったと、何度後悔したことが。次第に年をとり、自分の中でラムザの影が薄くなっているのをどうにも出来なかった。その彼が、二十年前まで生きていたということとは、ディックと離れてから少なくとも十九年はどこかでなりを潜めていたことになる。

『ラムザ・エマードは、政府実験に関わったことから、いつしか政府の存在そのものに疑問を感じ始めた。政府解体を狙い、様々な方面から分析を進めた結果をファイルに記したのだと、私は聞いた。真実を覗き、自ら考えるがいい。付けられた道筋を辿るか否か。ファイルを閲覧する覚悟は出来たか』

自分の身体がそこにない、意識だけというのは不便だ。息苦しさも胸の高鳴りも、乾いた喉に唾を押し込むのも感じる事が出来ない。  
考えたことも全て相手に筒抜けの状態で、何を躊躇することがある。

『当然だ』

ディックは力強く、うなずいてみせた。

## 56・第一段階

暗闇に浮かぶ白抜きの内側を、彼女はそつと指した。

『ラムザ・ノートへの入り口は私の中にある』

彼女の周りを囲うようにして張り巡らされている巨大な情報網の光が、ほんの少しだけ遠慮するように照度を弱めた。

両手をいっぱい広げ、その白いシルエットは、おいでとばかりにディックを体内に招き入れようとする。もしこれが本当にエレノアだったならと、かつて愛した人とマザーを重ねたが、やはりそこにいるのは彼女ではない。Aエプログラムが作り出した、ただの幻影なのだ。

『私をくぐり抜け、一番最初に見える扉を開けよ。ただし、先に注意したとおり、内容によつてあなたが廃人となることもあり得る。』

データは精巧に立体映像として作られており、この空間よりも更に現実との区別がつきにくい上、相当量のデータを圧縮したため、流し込まれたデータにより、脳が異常をきたすことも考えられる』

再度うなづく。

平面的な人型の中は真っ白で影一つない。その先に何かがあるなどと、到底考えられない空間。彼は、細い女のシルエットの内部へと、恐る恐る手を伸ばした。トンネルを進むように、輪郭線をくぐり抜けていく。一瞬吐き気のような感覚があつたが、身体もないのにそう感じるはずがないと冷静になつた途端、スツと身体が軽くなる。黒と小さな光の世界から、辺り一面真っ白な無の世界へ。ディックは、身体と意識を慎重に前方へ進ませていった。

目の前に、彼女の言つた扉が突如として現れる。アンティーク調の木製扉、ドアノブの上に電球の形をした妙な鍵穴がある。変わった趣味だ、今時、掌紋認証や虹彩認証装置を付けたものが主流だというのに、旧時代のまま鍵を回して開けるなんて。だが、もしこれがラムザの残したファイルとやらの入り口なのだとしたら、納

得できる。ディックの記憶では、ラムザはかなりの凝り性だった。

確か、大戦前の美術品を好んで集めていた。実際目の前の扉は、おぼろげだが、記憶の中で見覚えがある。彼の趣向を考えればこの扉がファイルの入り口そのものなのだろう。鍵穴はフェイク、ロック解除はトリストに乗る前に済ませてきたはずだ。「ファイルは既に開いている」とマザーも言っていた。恐らく、そういうことだ。

不安を抱きつつ、ノブを回す。やたらと現実味のある感触を久しぶりに感じ、ミシツときしむような音がリアル感を増長させる。白い空間にぼつかりと浮いていた扉が、ゆっくりと開いていく。四角いファイルの入り口から色が漏れると、ディックは思わず息を飲んだ。

カチコチと正確に時を刻む柱時計、古めかしい棚にはあでやかなドレスで着飾った小さな少女の人形が数体並べてある。美しい絵皿の飾られた硝子製の食器棚の隣に、壁面を彩る大小様々な絵画。床に敷かれた精密な絨毯の模様や、やたらと細工の凝った背もたれのある椅子には既視感があった。木製の丸テーブル、その奥に並んだ書棚には色褪せた本の背表紙が並んでいるのも、彼の記憶のまま。

『よく来たね、ディック』

空間に溶け込むようにして一人の中年男性がたたずんでいた。優しい眼差しで見つめられ、思わず背筋にブルツと震えが走る。痩せぎすの体型、薄茶の頭に丸眼鏡、少し痩けた頬。確かに老けてはいるが、渋みのある声は、長年耳に残っていたそれと違わない。

『父さん』

忘れかけていたラムザの外見が目の前にくつきりとした形で表れると、ディックの意識は一気に少年時代まで戻ってしまう。黒い空間でマザーと話していたときには、青年の姿であったのが、ラムザの姿を見つけた途端、身長は縮まり細く小さくなった。十歳の少年に、姿までも変えてしまっていたのだ。

室内はまさに、ラムザと数年間過ごした場所そのものだった。「息子になつてくれないか」と手を引かれ、長い地下通路を通り研究

室を抜け出した日から先、実子でないと政府にばれてNCCへ収容されるまでの僅かな間暮らしていたラムザ・エマードの隠れ家。懐かしいと素直に彼は思った。その思いが、彼の身体を小さな少年時代へと戻してしまう。

無意識に彼はラムザの懐に飛び込んだ。その、大好きだった男へ飛びつこうと、すり抜けた。データとはいえ扉を開くことが出来たというのに、この空間に立っていることが出来るというのに、ラムザの身体だけではどうしても掴むことが出来ない。

『お前がここに辿り着いたということは、私の考える第一段階をクリアしていることになる』

その言葉を聞いた途端、ディックの身体は、中年男性まで急速に老けた。

『もし、お前が私の考える第一段階に到達していなかったとすれば、お前はこのファイルにアクセスすることもままならなかったはずだ。お前がAIチップ作成に携わっていたのは知っている。それによりマザーに興味を示すことが一つ、マザーへのアクセス方法を知る少年と接触できていることが一つ』

ラムザはディックに向き直り、淡々と話し始めていた。視線はディックを追うが、こちらの呼吸を呼んで話をしている状態ではないのがわかる。まるで、マザーと会話しているときと変わらない。

『プログラムを、再生している状態なのか』思わず呟いたディックに、

『そう、私の動きや声はあらかじめプログラミングしてあるもの。お前の声や意識に対応するデータを再生しているだけだ。予想される数万パターンの会話に応じた、最も適切な回答を抽出する方法は、マザーの会話システムと類似している』

つまり、この受け答え自体が会話ではない。そう捉えられる言い方だ。

アンリとマザーの言葉が、ますます信憑性を帯びてきていた。現実との区別がつきにくいというような問題ではない。ラムザの言葉

がデータの再生だとわかっていたとしても、それを脳が理解するに時間がかかってしまう上、そう感じさせないほど精巧に組み立てられているプログラムが、生身の人間同士の自然な会話だと思わせてしまうのだ。物語に陶酔し現実との境がわからなくなってしまうようなレベルではなく、幻覚を現実だと錯覚してしまう精神疾患レベル。実際は二十年前に用意されたデータにアクセスしているというのに、恐ろしいほど不自然さがない。

ラムザは何故通常のテキストデータ形式ではなく、このような危険な方法でファイルを残したのか。試されているとしか思えない。ディックは目の前の義父をじつとにらみ、次に出てくる言葉を待った。

『なるほど、なぜ私がこの形式でファイルを残したのか、知りたいのか』

マザーのときと同じく、ラムザもディックの思考を読み取る。データ化された意識の中で自分の形を作り上げ、声に出しているつもりになっているだけだということを、今更ながら思い出した。

『私はお前が信頼の置ける人物に育っているかどうか、確認する術を持たなかった』

そう言って、ラムザは椅子に腰掛けた。ギイト、またリアルに木のきしむ音がする。

『お前と過ごした時間はあまりに短く、NCCへ收容されて以降はお前と会うこともなかった。お前が私の思うような人間らしい人間になれているかどうか、与えられた少しの条件やヒントから、ここまで辿り着くのを待つしか、私に出来ることはない。今、データが再生されているということは、お前はどうかして、ここへ辿り着くことが出来たということ。それが強引な方法であれば、きつとファイルは開かなかつた。なぜなら、私の開発したマザー・コンピュータハッキングシステムの操作方法を知っているのは、EUDームにいるたったひとりの少年だけだからだ』

『アンリか』



『そう、あの少年だけがアクセス方法を知っている。マザーにはデータを渡す際、彼にファイルの存在を知らせるのは、お前がここへ来ることが確実となったときだけにしよう伝えるつもりだ。また、実際そうなっているはずだ。アンリと接触するには、お前は反政府組織に所属している必要がある。ここ、EUDームは言わずと知れた反政府勢力の聖地、つまり、お前が政府側の人間で居る限り、ここに辿り着くことは不可能なのだ』

## 57・第二段階

あのアンリが鍵の一つだったのかと、思わずディックは笑みをこぼした。あの妙な性格、駆け引き好きなところは、もしかしてこの人の影響なのだろうか。何よりも、まるで自分の行動が全て読まれているような　気のせいだったにしても、ラムザは全てをあらかじめ見透かしていたかのようだ。アンリに、リーが全てを仕組んでいたと知らされた衝撃よりは、幾分か驚きは少なかった。

二十年前、少なくとも彼が失踪するまで、ラムザはE.U.D.O.M.にいたことだけははっきりした。トリストも、元々はラムザのものらしい。政府ビル出身の科学者は反政府組織でも重宝される。技術援助さえしつかりすれば、彼らは確実に科学者を守ってくれる。生活に直結するような最先端の知識や技術を、喉から手が出るほど欲しているからだ。ディック自身もそうやってE.S.に身を隠していた。そう考えれば、無意識的に義父と同じ道を辿っているような気がして、滑稽に思えてくる。

『ディック、最初に言っておく』

襟を正し、スツと背筋を伸ばしたラムザは、一段と気難しい顔でディックを見据えた。

『私がお前にファイルを残したのは、恐らくお前以外に、あの男の暴走を止めることが出来る人物がいなかったからだ。リーの秘密を知ってしまった私と、彼が一番力を入れていた研究の実験体だったお前。否応なく、リーの興味は私たちに向けられる。お前には幸い、NCで鍛えられた体力と秀でた頭脳がある。だからこそ、お前に止めてもらいたい。そのためには、まず彼が一体何者なのかを知る必要がある。そして、彼が何をしたいのかということも知らなければならぬ。そうすれば自ずと、私がなぜこの形式でファイルを遺さねばならなかったのかも見えてくるはずだ。今から、大量のデータをお前の脳に送る。それを受け止めることが第二段階となる』

静かに口角を上げるラムザ。両手のひらを胸の前でそつと合わせ、本を開くように、ゆっくりと左右に開いた。

それが、ファイルを開くという意味の動きだったのか、先ほどマザー・コンピューターへ侵入を開始したときとは比べものにならない情報が、一気に身体の上から下まで突き抜けていく。イメージ化されていた身体がほどけ、衝撃波を一気に受け止め歪んだ鉄の板のように、ボコボコと凹んでいった。意識が分散し、ディック・エマードという自我さえ保てないほど、大量の電子の粒と混ざり合う。目に見えていた懐かしいアンティークな室内さえ無の空間に溶けた。ラムザの姿、時計、人形、絵画、色も音も、何もかも感じなくなってしまうた。

白い空間に一人の男のシルエツトがぼうつと浮かび上がる。黒髪  
の東洋顔、黒いスラックスと白衣　ティン・リーだ。次第に背景  
に色がつく。ラインが走り、輪郭を縁取り、立体画像へ。あの、地  
下研究室だ。他に数名の研究員、男女混合の虚ろな集団。

「Dタイプ十二体目まで死亡。これは由々しき事態だな。どう責任  
をとる、ラムザ・エマード」

リーは凍るような視線を浴びせてくる。

目線の人物は、大きく息を飲み込んで、渴いた口から懸命にセリ  
フをひねり出していた。

「再生能力を完全に取り込むのは、そう簡単ではありませんよ、閣  
下。私は尽力してきたつもりですが、ご期待に添えず残念です」

「次の改良点は」

「組織の培養方法がいけなかったのかも知れませんが、溶液の配合を  
変え、細胞にかかる負担を減らします。それから、今まで与えてき  
た電気信号のパターンを変えてみます。　から　に移行、その上で  
細胞が活性化しない場合はまた別の方法を」

端正な顔に光るリーの目は、冷たく鋭い。

圧倒され、男は一步後ずさった。震えた声で、氣力を絞り出すようにやっと言葉を紡ぐ。

「D-13には完全な自己修復機能を持たせませう。間違いないく」  
ほの暗い研究室の中、慌てふためく男を、リーはせせら笑った。  
「ラムザ、研究の意図は理解しているな。私の身体はもう限界なのだ。遺伝子の劣化が始まっている。No.D-13は、あらゆる意味で失敗を許されない実験体になる。それによって、お前自身の行く末も変わることを、肝に銘じるがいい」

また、画像がほどけた。

次いで現れたのは、ウォレス・スウィフト。E.U.ドームの爆破事件の際現れた老人だ。まだ毛は黒く、顔のシワも浅い。白衣姿のスウィフトは、いけ好かない猿顔を向け、にたつと氣味悪く笑った。  
「研究対象に随分肩入れしておるようだな、エマード博士」  
研究室まで続く地下通路で、スウィフトは男の肩を叩き、引きとめた。

振り向いた男は頬を伝う汗を袖口で拭い、「そんなことは」と目をそらす。

「D-13がどれほど大切な存在か、わかっていてあのようなことをするのか。総統閣下の身体をCタイプからDタイプに移行するためには、早急に研究を進めねばならん。クローン体のストックもそろそろ切れる。毎度あのように記憶データを移し替えるのでは、負担が大きすぎる。わかっておるな。何のための自己修復機能、なんのための不死の研究。マザーの代弁者たる総統の存在が危ぶまれれば、この世界そのものが崩壊の危機を迎えてしまうことも」

「わかって、います」

男は大きくため息をついた。

「ヒトクローンがなぜ遺伝子の劣化を起こすのか、なぜ人は老い死んでゆくのか。それがわからなければ、恐らく研究は完成しない。」

私は、研究そのものに疑問を感じ始めています。私には、マザーの存在意義も、その代弁者である閣下の存在意義も、理解できなくなってしまう。もう、限界なのです」

「ならば、死ぬしかない。政府の秘密、総統の秘密を凝縮させた研究室の中心にしながら、お主はなぜそんな血迷いごとを。これまでDタイプ開発のリーダーとして腕を振るってきたのは、なんだつたのだ。地に墜ちるのか」

視線を反らしつつむく男に、スウィフトはたたみかけるように言葉を浴びせてくる。

「私の倫理観は、間違っていると、そうおっしゃるのですか、スウィフト博士」

「倫理など、綺麗事に過ぎん」

猿顔が、背景ごと、ぐにやっと歪んだ。

様々な色や音がほどけては混じり、ほどけては混じり。

それは、データとして蓄積されたラムザの記憶なのだと、ドイツは頭のどこかで感じていた。浮いては消え流れていく映像と、知識。一つ一つを理解することなど不可能だ。走馬燈、などと人は言うらしい。ぐるぐると様々な出来事が頭を巡っていく。疑似体験に過ぎぬというのに、それらはドイツの記憶の一部となり、経験の一部となる。ラムザの記憶は、更にドイツの中へと流れ込み続けた。

コールドスリープカプセルの並んだ場所に、男はいた。銀色のカバーに強化アクリルの窓があてがわれ、そこから中をうかがい知ることができる。巨大な冷蔵庫のようなその場所には青白いダウンライトしかない。防寒用ジャケットに、凍結防止の手袋、呼吸が凍結しないように特殊なマスクを被り、耳当てとゴーグルをつけた状態

で、ひとつずつカプセルの中を覗き込む。狭い空間に、魂の抜けた人間の身体が、霜のつかないように特殊加工された白い衣類を身にまとって横たわっていた。

カプセルの横に付けられたプレートには、『TYPE-C』の文字。一つ、二つ、心の中で数えながらカプセルの間を歩いて行く。

『エマード博士、チェック完了しました。そちらは』  
耳当ての下に付けたイヤホンから男の声が漏れた。

「計数完了、計器異常なし。そちらに戻る」  
マスク下のインカムで別の誰かに返答すると、男はのしのしと出口へ向かっていった。

重い金属製の扉をこじ開け、通常温度圏へと戻る。身につけていた防具を一つずつ外し、壁面の収納棚に片付けた。作業着に戻ったところで、誰かが彼を呼んだ。

「あと、どれくらい持ちますか」

同じような作業着を着こんだ別の男の、主語のないセリフ。

彼は振り返り、壁に肘をついて、斜めに寄りかかった。

「さあ。あと七体だが、一体当たりの使用可能年数は、五年から十年。閣下自身、時間がないと焦る気持ちも、わからなくはない」

「Projectが完成したとしても、成長年数はやはり必要ですよ。すると少なくともこれから二十年はかかる計算になります」  
「だからこそ、急いではいるんだ。Dタイプの遺伝子結合が上手くいかない。あちこちくっつけすぎて、奇形になってしまふ。この間処分したD-09を見たか」

「え、ええ。まあ、見ましたけど」

「あれは人間の姿ですらなかった。再生機能、そう思って結合させたトカゲの遺伝子が悪かったのか。鱗が全身に現れ、目ん玉が黄色に光ってた。NCCでもあんなクズはいらんと送り返されてきたよ。で、処分。上手くはいかないな」

「そうですよねと愛想笑いの後、相手の男はふと、こんな事を言い出した。」

「『Dタイプは完全な人間に』と閣下はおっしゃってましたが、エマード博士はそもそもどういう定義なのだと思います」

相手は他意なく話題を振ったのだろう。ちよつとふざけたように半笑いして、返答を待っている。

「完全というのが生死に対してなのだとしたら、やはり死なない人間が完全だということなのだろう。だが、そうしなければならぬ理由があまりにも弱い気がして、私はずっと先に進めずにいるんだ」  
男はそう言つて、深く長くため息をついた。

トリストでディックがマザー・コンピュータにアクセスしてから二時間が経つ。アンリは小さなテーブルと折りたたみの椅子を持ち出し、狭い監視室の中で一人、ティータイムを始めていた。アクセス中、普段は立ち入り禁止にしている場所だが、今回ばかりはそうも行かなかった。様子を見守ると言って聞かないハロルドとキースが暇をもてあまし、難しそうな顔でアンリやトリスト内のディックを睨み付け続けているのは、あまり気持ちのいいものではなかったのだ。とにかく何とか場を和ませようと、水分持ち込みたくないのを我慢して、お気に入りのティーセットを運び入れた。紅茶の甘い香りが漂うと、「工場直送は美味いでしょ」と会話もそれなりに弾むはずだった。ところがこの二人、今はそういう気分ではないらしく、せつかくの紅茶にも一緒に運び入れたクッキーにも手を付けない。おっさん相手にティータイムというのは面白いはずがないとわかっていたはずなのに、アンリは何とかして場を持たせようと、余計な行動をとってしまったのだった。

困ったことに、アンリの予想よりも、ファイルアクセスに時間がかかっている。せいぜい三十分から一時間だろうと踏んでいたが、実際はその倍以上。アンリの問いに対し、マザーはその重要ファイルの容量を明示しなかった。一体どれだけの容量で、どういう内容なのか。アクセス方法としてD-13の生体情報が必要だということと意外、彼女は知らせない。それは彼女の意志なのか、ファイル作成者の意志なのか。世界一のAI、マザー・コンピュータに踊らされている。それは間違いない。

幼い頃、ドームにいた科学者にトリストの存在とその操作方法を教えられてから、彼は巨大なおもちゃを与えられたことに感激し、実に様々なファイルへと侵入していった。それがなんなのか、理解しなかった少年時代。マザーへのアクセスは日常的な冒険だった。



少しずつ事態を飲み込み、それが世界の中でいかに重要な存在であるか知ってからは、興味のある事柄に対しどこまでも深く調べるようになった。マザーへと繋がった各ドームのメイン・コンピュータのデータベースにまで入り込み、情報を抜き取っては反政府組織に売りさばいたり、彼らの手助けとして使ったりするようになる。偶々その中で政府総統について興味を持ち、ディック・エマードの存在を知った。

今トリストに乗り込んでいる男が、自分にトリストを与えた科学者の義理の息子なのだということを、アンリは未だ知らずにいる。ラムザはE.U.ドームの中で全く違う名前を語り、二十年前忽然と姿を消した。アンリにトリストを託してから数週間後のことだ。

「あとどれくらいかかる」

痺れを切らしたキースが、喉の渇きを潤そうと仕方なく冷え切ったティーカップに手を伸ばした。

「さあ、それがわかれば。普通はこんなに時間はかからないんだけど」

キースの動きを見て、ハロルドもゆっくりテーブルに歩み寄り、別のティーカップを持ち上げる。

「あれは、寝てるのか、起きてるのか。どういう状態なんだ」

狭いトリストの内部に腰をかけたまま、ディックは気を失ったように動かなくなっていた。呼吸はしているようだが、こちらの会話や様子には全く反応がない。

「意識はマザーの中に溶け込んでる。夢の中にいるような感覚だよ。五感は働いているはずだけど、意識がそこにないから、ただ単に眠っているように見えるんだ」

「じゃあ、寝てるのか」

「いや、起きてる。脳はちゃんと働いてるよ」

アンリが説明しても理解できなかったのが、ハロルドはもしかもしゃっと短い髪の毛をかきむしった。

「とにかく、こんな身動きの取れない状態のときに敵が来なくて良

かったと考えるべきか。昨日もしトリストに乗り込んでたとしたらと思うと、ゾツとするな」

それまで無言だったキースも、ハロルドのセリフに苦笑いしていた。

「ところでアンリ。重要なファイルって、一体何なんだ。ファイルを遺したディックの父親っていうのは、一体何者なんだ。その辺まで調べてるんだろ」

「まあ、調べてるよ」

顔の左半分を歪め、アンリは難しそうな顔をして首を傾げた。ふうーっと長いため息の後、気に入りの黒い上着の内ポケットから、メモを一枚取り出す。

「ラムザ・エマード、地球歴四一二年六月十二日生まれ。出身ネオ・ニューヨークシティ。平凡な研究者の一人息子。製薬会社にて遺伝子治療について研究し、論文を発表したことがきっかけで政府ビルに招待される。ヒトクローン研究室に所属後は、配属先不明。ここまでが、住民コードデータベースの情報。加えて、政府ビルの独立データベースの中に、彼がD-13なる実験体と共に逃亡した記録があった。このD-13ってのが、言わずと知れたディック・エマード博士のことで、彼自身が政府の実験体だったことはさっきも語ったとおり。その後二人でどこかへ隠れ住んでいたようだけど、そのあたりから一切記録がない」

「記録がない、死んだってことか」と、ハロルド。

「いや、それがね、そうとも言い切れないんだ。政府を脱走した科学者の中には、コードによって居場所が知れるのを恐れて、貼り付けてある部位を切り落したりえぐったりする人がいた一方で、効率的に逃れることを研究した人もいたらしい。小さい頃のことだから曖昧なんだけど、確か“コード・キャンセラー”とか言ったかな、コードのスキヤンを免れるために、微弱な相殺電波を流し続ける腕輪状の端末があるんだ。このドーム群にいた何人かの科学者が、身につけてたのを見たことがある。ディック・エマード博士の場合は、

元々NO CODEだから関係なかったわけだけど。ただ、キャンセラーを持ってたからと言って、寿命が変わる訳じゃない。四一二年生まれってことは、今年で八十七ってことだろ。生きているかどうか、微妙な年頃だよな」

延命治療やアンチエイジング手術で長命で若々しい老人がいる一方、健康状態が安定せず早死にしまう中年も多い。長いドーム生活が人間の身体を少しずつ変化させ、一部退化させているのだという研究結果もある。人工太陽光の弊害なのか、バイオ作物の摂取過多が原因なのか。肉体労働量が著しく減ったことも原因かも知れないし、基礎代謝に必要なエネルギーをドームという環境下では摂取しきれないからかも知れない。学会では今も、因果関係について議論が続いているほどだ。八十まで生きることが出来たら大往生というこのご時世、ラムザがもし生きていればというのがほぼ絶望に近いことを、ハロルドもキースもすぐに納得した。

「ラムザ・エマード博士がどんな経歴を持った人物なのか、ざっとわかったところで、ファイルの中身が何なのかまでは、推測できないな。ディックがあの中でのどんなデータを閲覧しているのか、結局は見守ることしかないってことか」

残念そうに間延びした声を出して、ハロルドは大きく背伸びした。あとどれくらいかかるのだろうと、腕時計とトリストを交互に見ていた彼は、ふと、ディックの様子がおかしいのに気がつく。それまでだらんと力なく垂れていた腕に力が入り、手を握りしめている。フルフェイスのヘルメット下にも、だらだらと不自然に汗を流し始めていた。見間違いかと目を凝らし、耳を澄ます。監視室自体が囲まれた機械の起動音でうるさく、よく聞き取れなかったが、何となく唸り声のようなものが混じっている。

「何か、おかしいぞ」というハロルドの一声に、くつろいでいたアンリもキースも慌てて立ち上がり、トリストに走り寄った。ディックを囲むように三人、それぞれの角度からトリストの内側を覗き込む。

「さつき言つてたる、現実との境がどうの、暴れたらどうの。……これは、その予兆か」

ハロルドが言つても、アンリは即答しなかった。唇を噛みしめ、トリスト内部の様子を確かめる。どこに異常箇所があるのか、パネル表示は通常と変わらないか、ぐるっと見回すが、特に問題はない首を傾げ、アンリはそつとディックの手首を掴み、脈をとつた。脈拍が上昇しているのを確認し、「いや、わからない」と首を振る。

「確かに言つたけど、ちよつと違う。僕は、マザーに入り込んだ直後に起きるかも知れない発作のことを言つたままで、二時間も経過してからこんなになるつてことは、恐らく、データの内容に問題が」

セリフが寸断された。

ディックが一段と強く唸り始めたのだ。身体を屈ませ、胸をかきむしる。焦り、背中を擦ろうとするハロルドやキースの腕を、凄まじい力で払いのける。うなり声は叫びに変わり、ついに狭いトリストの中で立ち上がるうと。

アンリはただ、腰を抜かし床に転げた。あんぐりと口を開け、目を白黒させている。

「なんてことだ！」ハロルドは言つて、ギリリと歯を鳴らす。

ディックはトリストの天井部に背中を押し当て、無理矢理立ち上がっていた。ネジが外れてはじけ飛び、背もたれが剥がれ、シートの後部からヘルメットに繋がれていたコードがむき出しになる。巨体が天井部を壊して突き破り、細かい部品があちこちに乱れ飛んだ。滴り落ちたディックの汗が丸裸になった回路に触れると、バチバチと電流が走った。それでもなお、ヘルメットに繋がれたコードを介し、データは注ぎ込まれ続けているのか。時折かがみ、時折頭を抱えて叫び、とうとうトリストから滑り落ち、床に倒れ込んだ。

「い、異常だ。こんなの」

地に響くような恐ろしい叫び声を上げ、のたうち回る暴れるディックの姿は、まるでNCC実験棟で見た失敗作のなれの果てのよう

だと、キースは不謹慎にも姿を重ねてしまう。目の前の男の頭の中で、一体何が起きているのか想像すらつかない。ヘルメットを外した形相を思い描き、ブルツと背筋を振るわす。どうすることも出来ない彼は、壁に背中を押しつけて、ただただ呆然と事態を見守るしかなかった。

## 59・第三段階へ

意識がマザーに溶け、五感と完全に切り離されたはずなのに、デイククの頭には割れるような激痛が襲っていた。ラムザの警告通りに、凄まじい容量のデータが散弾銃のように撃ち込まれ、その全てを受け止めねばならないことに耐えきれなくなってきている。データの流れには波があり、ほんの少しだけ勢いの緩んだところでフツと気を抜くと、全身汗だけで叫びうずくまっている自分の身体へと意識が戻りそうになる。抜け殻になった身体が、処理限度を超えたデータを懸命に受け容れようとする脳を拒絶しているようだ。装着されたデータ転送用ヘルメットを両手で鷲づかみにし、脱ぎ捨てようとコードを引っ張る感触がはつきりと感じられる。

『デイクク、まだ終わってない。逃げるのか』

ラムザの声が全身に伝わり、意識をマザーに戻す。手足の感覚がなくなり、再び意識だけの世界へ連れ戻された。

「私は、何者なのだと思う」

リーの声が響く。また、若い日のラムザの記憶だ。

そこは総統の執務室か、大きなデスクにゆったりとした椅子、リ―が片肘をついてこちらを見ている。

「おっしやる意味がよく……」

「嘘だな」

東洋系の女顔はにやっと、いやらしく笑った。

「論文は読んだ。遺伝子レベルから寿命を考える、細胞の寿命と再生……だったかな。中でヒトクローンについても語っていた。クローン牛や豚、羊と同じように生み出された人間のクローンは、やはり生殖能力に欠ける。となれば、例えクローンを利用して細胞の長命化を図ったとしても、それを普通の人間に適用するのは難しいの

ではないか。そういう内容だった。私が君を呼んだのは、君の研究に興味があったからだ。私の求めるものに近いものを研究している君自身にも」

「どういうことです」

「ここまで言えば、いや、賢明な君は、もしかしたら最初から感づいていたかも知れない。私のこの身体は、クローン体なのだ。オリジナルはとうの昔に朽ちた。今は、研究の成果として生み出された身体に、記憶データをダウンロードさせているに過ぎない。私は私として生きながらえることが出来るようになったが、残念ながら、この身体は脆すぎる。替わりが欲しい。わかるな」

ストレートの黒髪をサツとかき上げ、ティン・リーは目を細くした。

次に浮かんだのは、ネオ・ニューヨークシティの政府ビルにほど近い巨大なライブラリの画像。目線の人物は、データディスクの並んだ棚を一つずつ、目視で検索している。ラベルを指で辿り、気になるタイトルがあれば取り出して携帯端末で読み込ませ、ロード後「違う」と呟き元に戻す、の繰り返し。不毛な作業を立ちっぱなしで進めている。時に「検索端末、空いてますよ」と司書が話しかけても「いや、結構」とぶっきらぼうな返事。取り憑かれたかのようにデータを漁りまくる。

「政府が作られた、そもそもの目的は何だ。それに結びつくような出来事は」

誰にも聞こえないように、ラムザは声を発していた。焦りと不安めいた息づかいが伝わってくる。

求めているものが、そこにあるとは限らない。全て綺麗に消し去られたかも知れない。彼はそれでも、データを漁り続けた。そうして、数日後、一枚の画像データを見つけ出す。データの作成日に間違いがなければ、それは、先史の。

ディックの身体が、また悲鳴を上げ始めた。叫び声が一段と強まり、両腕でヘルメットを被ったままの頭をもぎ取るうとしている。

目の前の出来事に動転したキースは、慌ててヘルメットの安全具を外そうと、ディックに手を伸ばした。

「やめろ！ 今そんなことをしたら、博士の中で意識が壊れる。マザーに浸っている状態でダウンロードを中止させるんなら、端末で元からデータの供給を止めないと」

アンリの手が、キースの視界を塞いだ。チツと舌打ちし、キースはアンリを鋭く睨み付ける。

「だったら早く、こんなことやめた方がいい。いくらNO CODE Eだからって、あまりに容赦しなさ過ぎだ」

ハロルドは慌てて二人の間に割って入り、力尽くで二人を引きはがした。

「お前らは今、そんなことをしてる場合じゃないだろ。本当に重要なのは、ディックの意志だ。途中でやめたら、後でもっと噛みつかれる。アンリの忠告を聞いて了解した上でアクセスしてるなら、最後までやらせるのが筋つてもんだろ。キース、お前は何か勘違いしてる。俺たちは別に、ディックをNO CODEだからと区別してるわけじゃない。やりたいようにさせてやれ。身体が限界を超えても、本人が諦めたくないなら続けなきゃダメだ」

「そんな、勝手な」

また、ディックの叫び声が強くなった。

三人の顔が一気に青ざめる。

「アンリ、どうなんだ、あとどれくらいで終わるのか確認できないのか」

ハロルドの声に我を取り戻したアンリは、破壊を免れたトリスト内部の操作パネルをいじり始めた。座席と天井部分は破壊されているが、幸い前面に故障はない。

「待って、モード……残りタイム……、いや、やっぱりわからない。



マザーはこのファイルに関して、僕の問いに答えようとしなかった。ただ、博士の体力的なことも考えて、あと十分、この様子が続くようなら強制終了させよう。それで異議は」

ありまくりだというセリフを、ハロルドはゴクンと飲み込んだ。苦しむディックや頭を抱えるキース、トリストと監視用端末を交互に見ながらブツブツと難しい用語を呟き続けるアンリの姿を見ていれば、自分の考えだけを押し通すことも出来ない。

「十分、だな」

大きくうなずき、ハロルドはディックのそばにかがみ込んだ。

「負けるな、信じてるからな」

しかし彼の声は、ディックには届きそうもない。

ラムザによって流し込まれた大量のデータは、やっとその出力を終えた。ビリビリと余波が残った手足、頭、身体。まだ意識はマザーの中だというのに、リアルに戻ったかのような錯覚がある。バラバラに散っていたディック・エマードという意識の塊が寄り集まって、元の人間の姿を形作っていく。

意識が戻っても、衝撃の余韻が残る。ぼうつとしてはつきりしない頭、フラフラとして息苦しい身体。その空間に居続けるので精一杯だ。

「戻ったか。何が起こっているのか、理解できたか」

太いラムザの声が、ディックを完全に引き戻した。

「リーが何者なのか、俺が何の目的で作られたか、おぼろげだが理解できた」

ぼんやりとした真っ白な空間に少しずつアンティークな室内が戻ってくる。ラムザの姿も、ディックの目にはつきりと見えるようになっていた。

「つまり、劣化したクローンである今のCタイプの身体を捨て、再生機能を備えた完全な人間を目指して作られたDタイプ、つまり俺

の身体に、リーは意識を移そうとしていたということか。俺は、ヤツの新たな器として生まれたと。……滑稽だ、滑稽すぎる』

リーの異常な執着の理由がようやくわかる。個人的な嫉妬などではない、ただ単に、彼は自分の所有物が逃げ出したことに腹を立てていたのだ。あくまでも彼にとつて、D-13は物に過ぎなかった。それは、重い過去を引きずりながら必死に生きていたディックにとつて虚しすぎる事実だった。

『問題はこの先、全てを理解した上で臨む第三段階にある。リアルの世界へ戻り、お前は様々なことに立ち向かわねばならないのだ』ラムザは相変わらず自然体で椅子に腰掛け、じつとこちらを見つめている。

『データである私は、お前がいつこのファイルにアクセスしているのかわからない。私を知るお前の最後の姿は、NCCへ連行された十歳の少年。あれから約二十年、お前が何をしてきたかは、マザーにアクセスしながら身近に感じてきたつもりだ。政府ビルに戻ってきたお前が、これからどのような人生を送るのか、私にはわからない。だが、一つ言えるのは、事件の後採取したお前の遺伝子を使ってあの男が何かをしでかそうとしていることだ。なぜ戻ってきたお前の身体を、あの男がすぐに利用しなかったのか、考える必要がある。それに、一緒に働いているエレノア・オーリンの存在も気になる。残念だが、私は結末を知らないまま、人生を終えるだろう。人間には寿命があるのだ。お前にはもう、出会うことはない。このファイルは閲覧後自動的に消去される。私の願いは伝わったと信じている。お前が私の思うとおりの人物となって、このファイルにアクセスし、あの恐ろしい男を倒す糸口を見つけ出すことを、切に……祈る』

瘦けた頬に小さなえくぼを浮かべ、ラムザは目を細めた。緩やかに足元が崩れ始め、懐かしい部屋の家具や装飾品が下に下に吸い込まれていく。ラムザの身体そのものも、液体に沈殿していく異物のように崩れて溶け、見えなくなっていく。

『父さん!』

思わず叫んでいた。

会話などではない、ただプログラムが呼応しているだけだというのはわかっていて。それでもディックは、過去に自分をほんの少しの間だが抱きしめてくれていた男と、もっと一緒にいたいと思ってしまうていた。割り切れない。現実との境がわからなくなる、それでもいいと思った。手を伸ばせば届くのではないか、崩れていく画像はフェイクじゃないのか。ディックの意識はまた、十の少年に戻り、ラムザの元へと懸命に走っていた。崩れゆく画像を足場に、前へ前へ。何とかラムザと最後に手を。

ラムザは静かに笑っていた。

その画像も静かに崩れ、やがて、消えた。

## 60・立ち向かえ

身体がギシギシする。全身の力という力が、全て抜ききってしまった。冷たい床の上に転げた身体に、少しずつ感覚が戻ってくる。右手を開き、閉じ、神経が通っているのを確認しているうちに、全身が痛み始めた。うつすらと目を開けると、壊れた機械や投げ出されたコード、ケーブル、ショートした臭い。トリストの後ろ半分がめちやくちやに砕かれている。咄嗟に、自分がやったのだと理解し、ディックはギリリと歯を鳴らした。のっそりと立ち上がり見回すと、被害状況が彼の視界に入ってくる。いくら暴走したからって、これはない。やり過ぎだといわざるを得ない。足元に転がったヘルメットの残骸、トリスト後部から繋がったケーブルはあちこち千切れていた。背中にビシビシと痛みを感じるのは、力尽くでトリストを破壊し脱出しようとしたからなのだ、現場を見て納得する。

「目、覚ましたか」

ぐったり疲れ切った様子で、ハロルドが壁により掛かっていた。

よく見れば、壁面を囲っていたモニターにはエラーメッセージが並んでいる。政府の攻撃を免れた場所に致命的なダメージを、しかも内側から与えてしまったことに、流石のディックも深く反省する。右手でゴシゴシと、額の脂ぎった汗を拭った。ひん曲った眼鏡はレンズが欠け、役に立たない。両手で外し、目視で壊れたのを確認すると、がっかりしたようにため息をつき、あちこち破れかけた白衣のポケットに突っ込んだ。

「アンリは」

「ああ、すぐに戻ってくる。修理にどれくらいかかるかも含めて、仲間に話さなきゃとかなんとか」

「キースは」

「あいつは精神的ショックが大きくて。軽々しく過去を聞いてしまったことや、お前を侮辱したことについて詫びなければとか言っ

て、頭を冷やしに行ったようだ。まあ、若いからな」

ただ若いからというわけでもないだろうと、ディックは思ったが口に出さなかった。キースもNO CODE、つまり欠陥品なのだ。見た目普通の人間と何ら変わらなくても、身体はどこかに異常部があったり、精神的に普通じゃないヤツもいる。表面に出なくても、今回の出来事が何かしらの深いダメージを与えたに違いないのだ。

よろよると覚束ない足取りで、ディックはハロルドの隣に歩み寄った。傾れるようにして壁に全身を委ねる。

「お前の義父が遺したとかいうファイルはどんなだった。収穫はあったか」

ずり落ち、座り込むディックを見下ろしながら、ハロルドはとりあえずとばかりに聞いてくる。

「まあ、この状態を見ればわかる通り。あり過ぎだ」

「そりゃ、よかった」

「あの男が、ティン・リーが死なない理由もはっきりした。俺が何のために生み出されたのかも。そして、エスターに何が起ころうとしているのかもな」

機械クズの飛び散った監視室を見渡しながら、ディックは悟ったようにそう話した。どこか吹っ切れたような口調に、ハロルドは胸を撫で下ろす。一時はどうなるかと思っていた トリストでの暴れ方は異常ではなかったし、もしかしたら戻ってきてても精神異常をきたして、まともには話さえ出来ないのではないかと思っていたのだ。単なる危惧に終わっただけでも、救われる。

「で、エスターは無事なのか」

「恐らく、今のところは」

「今のところ？」

「ああ、今のところ、だな。リーのヤツ、エスターにマザー・コンピュータそのものをダウンロードさせようとしているらしい。そのためには、何らかの処置が必要なはずだ。今はその準備中なのかも知れない。マザーの人格はまだあの場に残っていたし、彼女は止

めてくれと言った。リーの暴走を止めてくれと」

「ダウンロード……、そんなことが可能なのか。じゃあ、エスターはどうなる」

一瞬、ディックは息を止めた。そしてゆっくりと息を吐き、

「今回俺が体験したラムザ・ノートのダウンロードとは、恐らく規模が違う。もしマザーがダウンロードされるようなことになれば、それこそ完全に、エスターの人格は失われるだろうな」

遠くを見つめる彼の目は、どこか物悲しげだ。終いには両手で頭を抱え、そのまま小さく丸まってしまった。泣くわけでも、嘆くわけでもない。両手の甲の血管がピリピリと波打ち、無念さ虚無感を伝えてくる。こんな状況でなぜ怒り狂わないのか、ハロルドには理解できなかった。ネガティブさに拍車がかかったわけではない、救いの要素があるわけでもないのに。ラムザの遺したファイルにどれほどの情報と価値があったということなのか。それとも、諦めに変わってしまったのか。

「今から何とかして、エスターを取り戻す方法を考えるしかないだろ。いつそのこと、思い切って政府ビルに突っ込むってのはどうだ」

おいしよと声を出してしゃがんだハロルドのセリフに、ディックは吹いた。思いがけず笑い声を聞いてホッとする反面、真面目に聞いたんだがとハロルドは複雑そうに肩をすくめた。

「この状況じゃ、政府ビルはおろか、ネオ・ニューヨークシティにも入れない。まずはトリストの復旧が先決だな。マザー・コンピュータからの情報がないと下手に動けないんだ。優先的に復旧させよう」

「エスターが最優先じゃないのか」

あまりの冷静っぷりに、思わず本音が出る。しかし、ハロルドの真剣な声を聞いても、ディックの答えは変わらなかつた。

「まずはトリストだ。何度も言うが、闇雲に攻めても意味がない。エスターがどうなっていようと、俺たちは手をこまねくしかない。

第一、ここから最短でビルに辿り着く方法を探るにも、情報が足り

なさすぎる」

じつと黙ってディックが言うのを聞いていたハロルドだったが、次第にその体たらくぶりに嫌気がさした。必死にもがきもがき生きてきたという割に、目の前の男は、真実とやらを垣間見てすっかり役立たずになっちゃってしまっていた。単に彼が技術や知識を持っていたからではなく、人を引っ張っていくような魅力を感じていたハロルドにとって、それは耐え難い状況、我慢の、限界だった。

咄嗟に手が、ディックの胸ぐらを掴んでいた。体勢を崩し、寄りかかっていた壁からずり落ちた男に馬乗りになり、両手でぐいと身体を手前に引き寄せて頭突きを一発、

「ふざけるな。何のために俺たちが必死になってるのか、お前は本当にわかってるのか」

頭にじんじんと痛みが響いたが、ハロルドにとってそんなことは最早どうでもよかった。

「俺たちは、ただ単にお前のワガママに付き合ってきたわけじゃない。勿論、この世界を何とかしたいとも思ってる。でも同時に、お前とエスターのことも気にかけてるんだ。正直、お前らの過去は俺たちにとって空想世界の出来事みたいで現実味がない。実験体？政府総統の罠？ そんなのは正直、どうだっていいんだ。今、助けを求めている、苦しんでる娘のために何が出来るか真剣に考える。前を向け、振り向くな。真実を知ることが大事だが、それ以上に、それを利用して前に進むことを、立ち向かうことを考える」

ためていた鬱憤を一気に吐き出した。これでもかというくらい思い切って、ハロルドは大声を出していた。

普段激しい物言いをしないハロルドが、まさかこんな行動に出るとは。ディックは始めきよんとしていたが、話を聞いているうちに何を思ったか口元を歪めだした。次第に目を細め、やがて腹を抱えて笑い出す。狭い内部監視室にやたらと声が響き、何重にもなつて返ってくる、ハロルドはどんだんのぼせあがり、両手でディックを突き飛ばした。それでもディックは延々と笑い続けている。

「とうとう、イカレちまったか、バカヤロウ」

まだ、笑いはおさまらない。

「ヒィヒィと肩で息し、床に転げる大男に、ハロルドは目も当てられないと立ち上がって頭を抱えた。

「やっぱり、脳味噌がやられたんだな。アンリの野郎、とんでもないことを」

「いや、大丈夫、正常だ、正常」

笑い転げてすっきりしたのか、涙腺に浮かんだ涙を指で拭いて、ディックはよっころしよと身体を起こした。「いやあ、笑った笑った」などと、本当に彼が声を出して笑うのなど、ハロルドは見たこととはなかったが、改めて言われるとますます腹が立つものだ。

「前向きに、立ち向かう？ 偶にはいいことを言うもんだ。さて、頭の方には十分情報が供給されたが、肝心の身体の方は栄養不足だ。頭に全然血が回らない。腹ごしらえでもして、落ち着いてから作戦を練ろうじゃないか。腹が減ってはなんとやら、昔の人は良いことを言う」

にやりと、口角を上げるディックには、何か勝算があるのか。一抹の不安を抱えたまま、彼らは荒れ果てた監視室を後にする。



## 61・誰かを救うなど、君には出来ない

『自分のしたことを後悔してないからな』　などと言っておきながら、ジュンヤは自分の行動に納得できていなかった。リーの言葉に操られるようにして、エスターをビルに連れてきたというのに、達成感もない。古い日本の武器だと渡された日本刀を振り回し、自分の母親と仲間を脅したことも、刃を突き立ててエスターを誘拐まがいに連れだしたのも、全てはあの恐ろしい科学者からエスターを救うためだと信じていたのに。

ビルに来てわかったのは、ティン・リーが思ったよりもずっと恐ろしい人物だということ。護衛も付けずどんどん走っていくタイプに思っていたが、そんなことはない。彼の側にはいつも特殊任務隊の誰かか、もしくは秘書のローズマリーがいて、彼を守っている。彼の行動は全て計算されていて、全てに理由がある。恐らく自分を政府側に引き寄せたのにもすっかりとした意味があるに違いないと、ジュンヤは思うようになっていた。

それにしても、リーは不可解な男だ。シロウの友人などと近付いておきながら、エスターを連れてきた途端、それまでの繋がりが切れたようにジュンヤとの会話をやめた。まるでエスターさえ手元に来ればそれでよかったのよう、いや、もしかしたらそれが目的で自分に近付いたのではないかと思ってしまう。疑り深くなっていたジュンヤは、とにかく何に対しても簡単に信用しようだとか、鵜呑みにしようだなんてことが出来なくなっていたのだ。

赤髪の美女パメラに手を引かれてリラックスルームを後にし、しばらく、ここでくつろいで」と案内された個室。ルームサービスでビル内のレストランから運ばれたランチの匂いが、空腹のジュンヤのお腹を刺激した。まともに睡眠も食事もとっていなかったと思うと、それが何時間ぶりの食事かわからないくらい勢いで、ガツガツ胃に流し込み始める。魚のグリルや香味野菜のサラダに、ピシ

ソワーズ、カルボナーラ、驚くほどすると胃に落ちる。流石政府ビル、味は格別に良かった。心は決してすつきりしていないにもかかわらず、人間の身体ってヤツは正直だ。腹が減って十分に血液が循環していなかった身体に、旨味が染みだ。最後にガブガブと水を流し込む。満腹だが、やはり満足感がない。

エスターはどうしているのか、そればかりが頭を巡っていた。無理矢理部屋を追い出され、彼女と別れたままだ。彼女は政府側について自分のことをどう思っているのだろうか。嫌らしい、裏切り者はたまた自分の敵とでも。それでも、あの選択肢しかなかったと、ジュンヤは自分に言い聞かせた。そうしなければ、押し潰されそうだった。

政府ビルの潜り込み、黒いスーツまで着こんでEPTの人間になりきったつもりが、現実には居場所がない、発言権もない。エスターをリーに引き渡すという目的を達した途端、抜け殻になってしまった。ESにいたら、いや、そんなことを考えてはいけない。あんな立ち去り方をして、どの頭を下げて戻ればいいのか。

空になったランチ皿をぼうつと見つめ、しばらく呆けていた。今後、どうしたらいいのか、ジュンヤには何も思い浮かばなかった。

「俺は一体、何がしたいんだ」

ぼそつと呟く。誰も聞いてはくれない、空しさ。

窓のない室内はとても窮屈で、退屈だ。フラフラと立ち上がり、あちこち物色する。ここは、研究者たちの短期滞在用として使われている部屋らしい。ビルの中にはたくさんの研究室があり、数え切れないくらいの科学者たちが日夜研究に励んでいると、リーの秘書ローズマリーに聞いた。研究が長期にわたったり、都度帰宅することが困難な場合に備えて、こうした部屋がいくつも備えてあるようだ。室内に備えられた携帯端末で見る、各階の見取り図、研究室エリアの階を挟むようにして、上下に一時滞在室の並んだ階がサンドイッチ状に存在しているのがわかる。

政府ビルはとにかく巨大で、ジュンヤの暮らしてきたネオ・シャ  
ンハイヤ、ディックが先導して作り上げられた飛空要塞などは比  
べものにならない。ビルそのものがドームを支え、支配しているの  
だ。

とんでもないところに来てしまったと、島の施設にあつた転移装  
置から飛んできたときに思ったが、それは今も変わらない。場違い  
だ、何も知らない自分がビルの中にいること自体。ジュンヤの心は  
枯れていく。そもそも、冷静に考え直してみても、リーがシロウと  
友人だったことが未だ理解できないのだ。憤り、苛々が募った。考  
えれば考えるほど、頭痛が酷くなる。

ルームサービスの女性が食器を引き取り、また数時間が流れた。  
気がつくとは彼はベッドの上で寝息を立て、夢を見ていた。幼い日、  
初めてエスターと出会い、彼女に惚れ、彼女が必死に生きようとし  
ている姿を目の当たりにし、自分という存在の小ささに気づいたこ  
と、無口な大男が絶えず少女の側で静かにたたずんでいたこと。『  
記憶がないの』エスターの涙、『お前の祖父を殺した』残忍なディ  
ックのセリフ、『ある意味必然だったのかも』につこりと笑いかけ  
るリーが、続けて言う『あの、ディック・エマードって人物はね。振  
人間じゃない。悪魔だ』ぐるぐると数週間の出来事が頭を巡る。振  
り回した刀が宙を斬り、ロックの胸をかすめた。あの不快な口ボツ  
ト犬もなぎ倒した。だのに、どんなに刀を振り回しても、ディック・  
エマードだけは切り裂くことが出来ない。なぜ死なない、なぜずつ  
と立ちはだかり続ける。どんどん大きく迫ってくるディックのシル  
エット。いつも懐に忍ばせている、あの黒光りしたデザートイーグ  
ルの銃口が、ジュンヤに向けられていた。頭を吹き飛ばされる、そ  
う思うと一気に喉が渴いた。死にたくない、嫌だ、逃げたい、逃げ  
たい逃げたい。

「あら、随分うなされてたみたいじゃないの」  
女の声に、目が覚めた。真っ赤な髪の女が真上からジュンヤを覗  
き込んでいた。大きな胸の谷間が視界に迫り、彼は思わず目を背け

る。

「ホント、ウブね。可愛い。その無垢なところも、可愛いお顔も、素敵よ坊や」

パメラは色っぽく笑い、ベッドの角に腰掛けて、よしよしと子供をあやすようにジュンヤの頭を撫ぜた。

馬鹿にしているとしか思えない。ジュンヤはカツとなつて、彼女の手を払いのけ、ベッドから跳ね起きる。

「あら、つれないのね。せっかく遊んであげようと思ったのに」

わざわざ胸の谷間を強調し、猫のように身体をくねらせる女に、ジュンヤは思わず身震いした。とてもじゃないが今はそういう気分じゃないし、何より新鮮味のなくなった年増女に興味もない。あからさまに嫌がつてみせると、彼女はそれがまた気に入ったのか、鼻を鳴らしてニヤツと口角を上げた。

どのくらい寝てしまつていたのだろうかと思うほど、ジュンヤは寝汗をびっしょりかいていた。羽織りっぱなしだったジャケットをベツドの上に脱ぎ捨て、ふうと大きく息をつく。

「エスターは、彼女はどこだ」

額の汗を腕でぐつと拭い、パメラを睨み付けた。

「そんなに気になるの、坊や」

組んだ腕の上から胸をぐいと持ち上げて、パメラはジュンヤにかにも柔らかかそうな胸の膨らみを誇張する。

呆れたようにため息をつき、ジュンヤはもう一度尋ねた。

「エスターに会いたい。彼女はどこだ」

「仕方のない子ね。どうしてもあのお嬢ちゃんに会いたいの」

「どうしてもだ」

いやあねえと大げさに両肩を上げ、さも残念そうに両手を開いてそっぽを向く彼女の仕草は、ジュンヤを逆撫でした。一步踏み出し、パメラにぐいと顔面を近づけて、

「どこにいるんだ、言えよ」

訊いたところで、この広いビルから探し出せかどうかも知れない

のに、ジュンヤは彼女に押し迫った。

一瞬表情を固めたパメラ。左右バランスの悪い目をクルクルと動かし、不思議そうに彼を見つめる。ジュンヤの真剣な眼差しを受け止めていたはずが、口元を歪め、吹き出し、終いには腹を抱えて笑い出した。

「何がおかしいんだ」

「いやあね、何も知らないの。彼女とはもう、会えないのよ」

「会えない？ まさか」

「坊や、あなたは何を信じてたの。自分がどれだけ期待されてると思っていたの。馬鹿ね。閣下はあなたを利用して、Eをここに呼び寄せた、たったそれだけのこと。Eさえ手に入れば、あなたの存在などどうでもいいのよ。でも、ESに戻ることも出来ないものね。可哀想に。ここで朽ちましようか、それとも本格的に私たちの仲間にでもなる？」

ジュンヤは思わず声を上げた。

「何を、言ってる」

「ホント、可愛いお馬鹿さん。あなたは人を疑うことをもつと知った方がいいわ。正義感の塊みたいな顔してたけど、実際その正義とやらは誰かを救うことが出来るのかしら。もうちょっと賢く生きなきゃ、ダメよ」

以前、ディックにも言われた、『暴走した正義感では誰一人助からない』パメラもまさに同じ事を。ジュンヤの顔は一気に火照った。耳まで真っ赤にし、ギリリと歯を鳴らす。目の前の人物が男なら殴りかかっているところだが、ぐつと我慢する。

じゃあねと手で合図して、くるっと回れ右した彼女の肩を、ジュンヤはぐいと掴んで引き戻した。

「まだ答えを聞いてない。彼女はどこだ」

艶っぽい女はフェロモンをまき散らすようにウインクし、「秘密」と一言。

「今更彼女を見つけたところで、あなたにはどうすることも出来ない

くなっているはずよ。それどころか、絶望を味わうかも。気づくのが遅すぎたのね。結局あなたには、誰も助けることなんて出来ない。彼女がどんなに救いを求めても、あなたは気づくことができなかったじゃない。当たり前よね、一番彼女が助けて欲しいときに、あなたは閣下に騙されていたんだから」

ジュンヤの身体から、音を立てて血の気が引いていく。立ちくろみがした、魂が抜けてしまいそうだった。

パメラはそんなジュンヤを見下すように、また甲高い笑い声を上げた。

## 62・まだ、間に合う

「まるで物語の主人公になったみたいがいい気分だったでしょう。彼女を救うだなんて、閣下もいいシナリオを作ってくださったもんだわ。あなたがどんな性格をしているのか、計画の成功率を測る意味合いも兼ねて島へ赴いたそうよ。予想以上に純粹で、一途で、こんなに可愛いなんて罪ね」

パメラはあくまで綺麗な顔のまま、たっぷりの皮肉をジュンヤに浴びせた。ティン・リーに近い人物だという彼女の態度は、とても許容できるものではなかった。激しい屈辱感、次第に彼の中の喪失感を怒りに変えた。何も知らずに踊らされていた自分に対する怒り、何食わぬ顔で演技していたリーに対する怒り、そして、目の前にいる女が自分を子供扱いすることに對する怒り。

抑えていた右手が、ぐいと振り上げられた。そのまま、彼女の顔面へ　ピタリと動きが止まる。

彼女の構えた小型エネルギー銃が、ジュンヤを狙っていた。どこに隠し持っていた、全くわからなかった。真つ赤な髪の毛が踊り、スリットの入った白いスカートがフワツと舞った。

「可愛いから見逃してあげようと思ったけど、やっぱり閣下の仰る通りにするしかないみたいね」

黒光りした銃口の下、グリップ部エネルギーボトルの中で真つ赤な液体が揺れる。相手の武器を見て、ジュンヤは自分がすっかり丸腰なのを思い出した。勝ち目など、ないに等しい。目線を反らすと今度は、パメラのはだけた胸元から、これでもかというくらい大胆な胸の谷間がくつきり見えた。ぺろんと誘うように舌なめずりし、目を細める。

「閣下はこう仰ったわ。『E回収後、ジュンヤは殺せ』あなたの出番は終わったのよ」

真ん前に突きつけられた銃口から、逃れる術などない。ジュンヤ

は思わずゴクリと唾を飲み込んだ。最初から、捨て駒だった。真実がわかればわかるほど、なぜか頭は冴えていく。ここまでスタボロにされて、もうジュンヤには失う物などなくなっていた。

「終わり、かな。果たして」

銃口まで三十センチ。それでも彼はにやつと笑って見せた。

パメラはジュンヤの態度をフンと鼻で笑い、カチツと安全具を外した。

「丸腰のあなたに、何が出来て」

「さあ、それは、やってみなきゃわかんないよ」

腰を、落とした。パメラの視界から一瞬、消えたかと思うと、白い大きな物が彼女に被さる。ベッドシートが彼女の視界を塞いだ。思わぬ重みで手元が狂い、エネルギー小銃がカラカラと床にこぼれ落ちるのを、すかさず奪い取った。

必死になつて体制を立て直し、シートをはぎ取った頃には完全に形勢逆転、今度はジュンヤがパメラに銃口を向けた。

「ほら、やってみなきゃ、だろ」

一か八かの賭けで、ジュンヤの心臓はバクバクと壊れそうなほど大きく動いていた。肩で息をするのを、彼女はまたフンと笑う。

「銃を奪い取ったくらいで、何を粋がつてるの。相手がどんなだかも知らず、武器さえあれば勝てると思うなんて、可哀想に」

セリフが終わるか終わらないかのうちに、彼女は半身を捻り、大きく足を蹴り回した。左からのハイキック、脇腹を直撃し、ベッドに叩き付けられる。相手はハイヒールにスカートで動きにくいはずなのに、隙を突かれた。体勢を立て直して攻撃を、思っただち上がろうとした瞬間、今度は右肘が胸板に打ち付けられる。弾力のあるベッドの、マットレスが、ベゴンと凹んだ。気道を狭められ、息が止まる。一撃一撃が、重い。女の動きじゃない。

こぼれ落ちそうな銃を必死に握りしめ、転げたベッドの上、両手で構えがむしゃらに数発撃った。壁や家具、テーブルに椅子、かすめはしたがパメラには当たらない。素早い動きでかわされてしまう。



体勢を変え、ベッドから距離をとった。足元が悪く、パメラの攻撃をかわしにくいからだ。室内を右へ左へ、障害物を乗り越えなぎ倒し、パメラを撃った。その度に彼女は、枕を撃ち落とさせて中の人工羽毛を飛散させたり、シーツや掛け布団を翻したりして、視界を覆う。まるで幼子のようにくるくると踊りながら室内を自在に逃げ回るパメラに、苛々が募った。こうなったら、撃ちまくって何とか当てるしかない。

「あはっ、ホント可愛いわね。いつになったら当ててくれるのかしら」

攻撃していたつもりが、ジュンヤは部屋の隅に次第に追い詰められて、逃げ場を失っていた。

パメラは片手でひよいと椅子を持ち上げ、ジュンヤの足元に叩き付ける。合金パイプ製の脚がぐにゃつと曲がり、フローリングに傷がついた。

「女だてらになんて、思ってるんでしょう。可愛い子。残念ながら私は、か弱くないの。強化筋肉つてご存じ？ 人工筋肉の中でも特に筋力に特化したものよ。私の中にそれが埋め込まれていると言ったら、どう？ 申し訳ないけど、普通の攻撃じゃ、この身体はびくともしないわよ」

身体は女だが、中身は違う。ジュンヤは咄嗟にそんなことを考えた。性別の問題じゃないかも知れない。明らかに見た目にそぐわぬ力、肉体改造してあるのか。特殊任務隊に所属しているのだと言っていた、だとすれば肉体を弄っていても何らおかしくはないと思わなかった自分に非がある。

彼女はにやりと笑みを浮かべ、片手でテーブルを持ち上げた。決して軽くはないやはり合金パイプ製の脚に厚いガラス板、明らかに危険な代物を、ジュンヤ目掛けて放り投げる。咄嗟にガラス天板を数発狙い撃ち、ガラスの割れる高い音が一つしたかと思うと、それらはあつという間にパメラの全身に降り注いだ。被害の及ばぬベツト上に土足で待避する。また足場の悪い最悪の状態に逆戻りだ。

「往生際の悪い坊ちゃんね」

彼女の白い肌は所々赤く傷ついていた。顔をかばった両腕に、ガラス片がいくつも刺さっている。

「あーあ、酷おい。女性に対して最低ね。どう責任をとってくれるつもり」

「誰が、女だ」

虫酸が走った。恐ろしさのあまり照準の定まらない銃口をパメラの心臓に向けた。

「あら、失礼ね」

冷たく笑い、パメラは血だらけの両腕から腕を交差させ、ガラス片をぐいと引き抜いた。滴る鮮血、傷はそう浅くない。大きめのガラス片を一つ、握りしめた右手のひらに血が滲んでいる。

「死ね！」

横に一閃、ガラス片の先がジュンヤの胸元をかすめた。赤い物がぱつと視界を埋め尽くす。その一瞬、パメラの懐に隙が出来たのを、ジュンヤは逃さなかった。胸目掛けて一、二、三、四、五発。エネルギー弾が彼女の身体を突き抜け、壁面を血色に変えていく。ジュンヤ自身にもパラパラと血の雨が注いだ。

「そんな攻撃で、倒せると思って」

パメラはまだ、動いている。振り上げたガラス片を一気にジュンヤの胸元目掛け　振り下ろす。ベッドに転がり身体を捻ってかわすが、背中を切られた。じわつと痛みが伝い、ジュンヤは苦しそうに顔を歪める。

赤い髪を振り乱し、鬼の形相で執拗に刃を向ける彼女に、最早色気などなくなっていた。肩で息を始めたところを見ると、明らかに五発の銃弾は彼女の体力を奪っているようだ。動きも格段に鈍くなっている。もう少しだ、もう少し。ジュンヤは自分に何度も言い聞かせた。

ふと目にするエネルギーボトルの残量、撃つてあと数発。早く決着を付けなければ、焦り始めたとき、突然照明がちらつき、アナウ

ンスが響いた。

「1208号室、異常を察知、警備員が駆けつけます。繰り返す、1208号室、異常を察知……」

派手に動いて室内を荒らしたのが裏目に出た。

「このまま食べてしまおうかしら。ベッドの上で殺すつても悪くないわね」

この期に及んで、パメラは余裕の笑みを。彼女は馬乗りになり、左手でジュンヤの右手首を押さえ、無理矢理銃を落とそうと捻り上げてくる。腕が、千切れる、筋肉が、悲鳴を上げる。右手のガラス片が、仰向けになったジュンヤの腹部に突き刺さった。ぐりぐりと内蔵を掻き回すように刃を動かされると、彼は断末魔の叫び声を上げてのたうち回った。

「そろそろ観念なさい、坊や。あなたにはもう、何の希望も残されてないんだから」

パメラは一段と力を入れて、ガラス片を何度も突き立てた。気が遠くなつていく、大量の血が奪われていく。叫び声を上げる力も失われ、ついに呻き声を上げるだけになってしまった。

もう、お終いだ。ジュンヤ自身もそう考えていた。このまま尽きてしまえば、苦しみから解放されるのだと。

薄れていく意識の中で、エスターが泣く。

背中を丸めて声を殺す彼女を、ぎゅっと抱きしめたことを思い出す。

「まだ、終わりじゃ、ない」

振り絞って出した声、口から溢れる鮮血をベッドに吐き捨てた。

空いていた左手をパメラの右腕に伸ばし、抑えられていた右手首を軸にして、叫び声と共に半身を起こす。身体を揺らし、全体重を載せた頭突きを一発。体力を失ってきていた彼女はベッドから真っ逆さまに転げ落ちていく。ガラス片を落として、頭を抱え苦しむパ

メラに、ジュンヤはベッドの上から銃口を向けた。身体がダメなら頭に。数発の銃声が、室内に響いた。

エネルギー残量、ゼロ。

使用済みの小銃を床に投げ捨て、血だらけのお腹をかばうようにしてドアを開けた。まだ、誰もいない。警備員が来る前に、とにかく逃げるんだ。

ジュンヤの赤い靴跡が、廊下に続いていた。

### 63・休息

中央監視ドームから東に通路を抜けると、様々な料理店の連なる風情ある町並みに出た。二十世紀をモチーフにした建物たちは、ドーム群の中でも異色を放っている。人工太陽の下、それがドームの中だとはとても思えぬほど自然に朽ちた煉瓦や土壁、どの店もひさしをぐいと伸ばしてテーブルを出し、道行く人が自然と席に腰掛けてウエイトレスに注文を出す姿や、昼間っからビール片手にワイワイと騒ぎ立てる中年男性の姿がごく当たり前に見受けられた。二階建てから三階建ての背の低い凸凹雑居ビルに、色とりどりの英字看板。人なつっこい呼び込みの店員がすがすがしいほどの笑顔で対応しているのに、メニューよりも店員の品定めをする男ら。広場では、大道芸人が芸を披露し歓声を浴び、大喝采が巻き起こっているのが見えた。人工物だろうが植え込みや花壇はきちんと整備されていたし、規模は小さいが噴水まである。とにかく、手が込んでいる。

トリストをぶっ壊しポロポロになった身なりを整えた後、ハロルドに引つ張られ、まずこの辺りで飯でもとやってきたはいいが、ネオ・シャンハイやネオ・ニューヨークシティにはなかった営みに、ディックは正直戸惑った。ネオ・シャンハイあたりはどうも治安が悪く、確かにこぢんまりとした屋台街のような物はあったが、常にEPTの警官隊が巡回し、丸腰で足を踏み入れるのが危険な状態だった。ネオ・ニューヨークシティに至っては、まず屋外で飯を振る舞う文化そのものがなく、デリバリーか、どこかのレストランやカフェ、バーで腹を満たすかだった。要するに、EPT政府の監視の目が皆無に等しいというのはこういうことだ。自由に、開放的に、飯さえ食える。

よくよく考えれば、時間や使命に追われ、彼はまともに飯なんぞ味わったことがなかった。ただ胃の中に放り込み、腹が膨れればいい、その程度にしか思っていないからだ。ESに来てからだって

メイシイに作ってもらいながら「美味しい」の一言もないくらい食い物に執着心がなかったが、これだけ様々な食べ物匂いの匂いが一度に嗅覚を刺激すると、流石の彼だっただけで出来る限り味のいいものにあいつきたいと思ってしまう。すっかり腹も減った、身体もふらふらだ。ともなれば、身体が一番欲している物を口にすべきだ。

「運び屋の時かなり通ったんだ。それでも、どの店で食うかまだ迷うよ」

ハロルドが言うのもうなずける。

まあ座れと、彼はディックを適当な丸テーブルに着かせると、自分もよいしょと向かいの椅子に腰掛けた。

「お姉さん、注文注文」

眼鏡を失い焦点の合わないディックが、メニューボードを前後にずらして必死に目を凝らしている隙に、ハロルドが地中海ピザとチキン、ドリンクを勝手に注文する。

「地中海って言うけど、海で漁なんかしてるのか」

第一この時代に海なんてあり得ないと、飯を選び損ねたディックが悔しそうに突っかった。

「でもホラ、『地中海』って入ってた方が美味しそうじゃない。実際ちゃんと海老や貝はのせてますよ。ドーム養殖だけどね」

ウエイトレスはにこっと笑って見せる。

「……呆れた。どうも俺には合わんな」

ウエイトレスが注文のメモを厨房に持って行くのを見送りながら、ディックは大きいため息をついた。とにかく、人の往来が多い。その上やたら陽気にガヤガヤと。他人の目が気になって仕方ない。とても飯を食う雰囲気じゃない。

「まあ、そういう所だと思って諦めるんだな。偶には開放的な気分になるのも悪くないと俺は思うけど」

苦笑いして、ハロルドはキョロキョロと辺りを見回した。何年ぶりかなと言っていた、以前と変わったところがないか、何か面白い面白そうなのはないかと、懐かしい物を見る優しい目で探っている。

そもそもハロルドがESにきた経緯など、ディックは詳しく知らない。以前はE.U.D.M.のどこかに住んでいて、そのときは結婚して子供もいたなどと小耳に挟んだこともあったが、ディックが自分のことを語りたがらなかったように、ハロルドにだって人に言えないことがあるに違いないと敢えて訊くこともなかったのだ。

「ところでさっきの続き。トリストが完全に修理されるまでには数週間かかるらしいが、接続が可能になるには、そんな時間かからなかって言ってたよな。アンリにはそっちをしてもらうとして、俺たちは」

「おい、こんなところでやめろ」人通りが多すぎる、ディックが小声で注意するも、

「他人の話に興味のあるヤツあいねえよ」隣のテーブルまで数メートルしか離れていない、通行人も少なくないのにハロルドは続けた。「お前が見てきたファイルに何か敵を倒すための手があるのだとしたら、そっちも同時進行でやらないと。タイムリミットはダウンロード開始までってことなんだろ」

重要な語句は伏せて話せということか。確かに、辺りをこっそりと見回しても、他人に興味を持つような人種は見当たらない。それぞれがそれぞれ、好きなように騒ぎ、食い、歌っている。眼鏡がなくてもそれくらいはよくわかった。彼なりに気を遣ってか、ハロルドはテーブルに肘をつき、いつもよりトーンを落としている。それならばと、ディックも話に乗った。

「実際のどのくらいの時間が必要なのは、接続してみてもいいが、まず、いくつかのグループに分かれて行動すべきなのは確かだ。一つはここ、もう一つは敵の所に、あともう一つ、できればあの島に戻って冷凍庫を探りたい」

「冷凍庫？」

「詳しくは後で。敵の動きを探る一番いい方法があればと思ったんだが、接続を待つまでの間に出来そうなこと、何か思いつくか」

そうだなあと、ハロルドが首を捻っていたところにドリンクが届

いた。さっきのウエイトレスがにこやかに、ジンジャーエールのグラスを二つ、テーブルにそっと置く。

「難しい話、してるの？ ピザとチキン焼き上がりまでもう少し待っててね」

どうもと手を動かし、ハロルドは早速渴いた喉に液体を流し込んだ。ぐびぐびと一気に半分以上飲み進めるのをぼかんと見ていたデイクも、やはり喉の渇きに耐えかねて、自分のグラスを手を取った。ひんやりとした感触は、疲れた身体に丁度いい。一口、二口、炭酸が渴いた喉の中を踊りながら通り抜ける。疲れていた身体の隅々までビリビリが伝い、上手い具合にシャツと目が覚めた。

「ジンジャーエールも悪くないな」

また二、三口含み、胃に流し込んだ後で、デイクはふうと長く息を吐き、グラスをそっとテーブルに置く。

「転移装置には弱点がある。あらかじめ登録された座標にしか飛べないってことだ。お前も知ってたの通り、通常は装置間移動。動かせる物質の量も限られている。だが、現状を考えれば、装置を使う以外に有効な手立てもない。あっちの座標を知る必要があるんだ。そうすれば、ピンポイントに飛んで攻め入ることが出来るんだが」

「つまり誰かが先行して潜り込み、エスターの場所を特定しろってことか」

「まあ、そういうことだ。ハロルド、お前運び屋やってただけあって、経路に関しては少しは詳しいだろ」

「ビルの内部に関してはそっちの方が詳しいだろ」

「俺は、ビルしかわからない」

「……そうだなあ」

ポリポリと白髪交じりの短い髪をかきむしり、さてどうしたことかとまた首を捻る。デイクに期待されているというのは悪い気分じゃないが、ハロルドにとってそれはあまり嬉しいプレッシャーではなかった。

「EUDームからターミナルを通さず直接搬入してるのがひとつ、



あつたはずだ。朝晩二回、食料と実験材料を運んでる。俺は担当じゃなかったから、実際行ったことはないけどな。それに一緒に乗っかっていくというのは」

「政府側に監視員は」

「ああ、何人かいる。監視員の他に口ボを使って荷運びするらしい。内容物のチエックもそいつらが行うから、ちよつとでも手違いがあると大変なんだと。で、搬入路の入り口にはコード読み取り機設置、そこをすり抜けれることができれば、何とかなるんだろうけどな」つまり、登録されたコードの人間しか受け付けない仕様というわけだ。コードのないESの人間が侵入するのはまず不可能、そういうことらしい。

「ところでディック、座標を知ってるって、どういう方法を考えてる。何か端末を持たせて発信させる方法か」

「まあ、そんなところだ」

「それは人間じゃなくても、出来る仕事だよな。ロボットとか」「フレディか」

ディックの目が鋭く光った。

ハロルドも大きくうなづく。

「あの犬、何のために作ったんだよ」

言つとディックはハロルドから少しだけ目をそらした。また、長いため息を一つ。

「俺は、恐らく殺されるんじゃないかと思っている」

「は？ 死なない身体のくせにか」

「頭を吹き飛ばせば死ぬさ」

人差し指と親指を立て、ディックは自分の頭に銃を当てる仕草をする。口元は歪ませていたが、眉間のシワと頬を伝う汗が、本気さを覗かせた。

「あの男が本気で俺たちを狙ってるのは間違いない。そう確証したとき、俺は何かしてエスターを守りたいと思った。いざとなったら俺の代わりにも思ったが、実際は思ったほど役に立たないもんだ。

所詮、廃材から作った子供だましのおもちや、誰かのために何かしようと思ったところで、それがそのときの需要と同じ方を向いていなければ、意味がない。俺はただ、自分のエゴで昔なじみのロボットを作った、それだけだったということだ」

自嘲気味のディックの話聞きながら、ハロルドは唖った。果たしてそうかなと前置きし、

「奴らがお前を本気で殺そうと思ってるなら、いつでも殺せたんじゃないのか。俺はまだお前を利用しようと思ってるからこそ、殺せないんだと思うぜ」

「仮にそうだったとしても、すっかり年をとった実験体のどこに魅力がある。俺が逆の立場なら、用済みはすぐに始末するがな」

まだ言うかと、ハロルドは呆れ顔でため息をついた。

## 64・残された時間

少しずつ香ばしい匂いが近付いて、顔を上げるとウエイトレスが出来たての料理を運んできたところだった。小さなバスケットに入った骨付きのフライドチキンと、もう一つは海老や貝、トマトとパブリカの色が鮮やかな大きなピザ。焼きたてのチーズがふつつつと音を立て、美味しそうに焦げている。

「おじさんたち、初顔だから増量サービス。気に入ったらまた来てね。お代は何で支払う？ 電子マネー、それともクレジット、キャッシュ？」

「キャッシュで。釣りはとっというて」  
「ありがとう。どうぞごゆっくり」

ハロルドが慣れた手つきでさつとチップ込みの札を数枚手渡した。エプロンのポケットにスツと札をねじ込むと、その金額に満足したウエイトレスはにこやかに去っていく。

さて食うかと、ピザの切れ目に沿ってゆっくり切り離れた。チーズが面白いようにとろけて落ちる。

「やっぱり人工チーズじゃないな。本場もんだ」

にやつき嬉しそうにピザを頬張るハロルドの向かいで、ディックは無言でチキンをむさぼり食っていた。食べるためにこぼれ落ちる肉汁が、更に食欲を誘う。

「なあ、お前は結局、何者なんだ。ファイルを覗いて結論は出たんだろ」

飯を食うときの質問じゃない。だが、一連の会話でそんな疑問がハロルドに湧いてしまったのだ。

チキンの骨をバスケットに戻し、また別のチキンへと手を伸ばしながら、ディックはぶっきらぼうにこう答える。

「生まれながらの、悪魔だよ」

「そんな美味そうにチキンを食う悪魔がいるか」

もぐもぐとだらしなく頬一杯に肉を詰め込んで口ひげを上下に動かすディックの姿に、ハロルドは思わず頬を緩めた。

彼に秘められた様々な秘密と触れる度に、ハロルドはディック・エマードという男が如何に人間臭く、感情深いか嫌と言うほど知らされてきた。不器用で無愛想で、どうしようもなく冷酷な面を備えながら、常に屈辱感や罪悪感に耐え、必死に生きている。唯一愛した女との娘の命を守りたい、なんて人間的なヤツだと、目を細める誰かに打ち明けるにはとても大きすぎた秘密を、彼は一人で抱えてきた。その結果、信頼を失い、誤解を生む。彼にとって、他人からの評価などたいした弊害ではなかったのかも知れない。それより、リーという男の策略によってすべてがねじまげられていくのに耐えきれなかったのだらう。誰かに助けを求める術を持っていれば、もしかしたら防げたかも知れない、エスターのことも、ジュンヤのことも。

義父ラムザのファイルを覗き、何かを感じ取り、悟ったような素振りをする彼の姿は、端から見て痛々しい。今まさに最大の危機を迎えているというのに、のんきに肉を丸かじりしている場合じゃないはずだ。

くつちやくつちやとピザを口に詰め込んでいたハロルドの、尻ポケットがブルツと震えた。携帯端末に着信があったのだ。食いかけのピザ片手に端末を取り出して、画面を確認する。アンリからだ。

「回線が繋がった。マザーが、お前に話があるって」

ディックの目の色が変わる。こうしちやいられないとばかりに、残っていたピザの切れ端を味わう暇なくガツガツ口に放り込んで、炭酸の抜けかけたジンジャーエールでぐいぐいと喉に流し込む。ハロルドもつられたようにスピードを速め、必死に食べ進めた。ペロっとすっかり食べ終えた後、ディックは口ひげにくつついたとろとろのチーズやトマトの汁をハンカチで豪快に拭き取った。

「戻るぞ」

「え、ちよっ、待てよ」

疲れたときこそゆっくり食事を　そんなハロルドの思惑は、あ  
っけなく一蹴された。

中央監視ドームに戻るとすぐに、アンリが手招きした。ディック  
とハロルドは内部監視室にあるトリストの元へ急ぐ。

辛うじて繋がったというのが正当だったかも知れない。まだ端末  
自体はボロボロのまま、まともに動いているのは、高い天井から  
ぶら下がった継ぎ接ぎだらけの太いケーブルと、そこに繋がったア  
クセスするための端子付きヘルメット、トリスト前面から切り離さ  
れた操作パネルくらいだったのだから。

床一面に散らばったままの機械の欠片を避けながら、やっとアン  
リの側に辿り着く。

「俺じゃダメだって。彼女は博士と話がしたいらしい」

ツンツン頭を左右に揺らしながら、アンリはヘルメットをディッ  
クに突きつけた。大急ぎで作業したのだろう、袖を肘までまくり、  
似合わぬ汗をぐっしよいかいて、肩に掛けたタオルで何度も顔を拭  
っている。その場にいる数人の技師たちも、アンリと同じように目  
の下に隈が出来ていた。

「今度は大丈夫なんだろうな」

ハロルドが念を押すと、

「さつきはファイルデータを受け容れたからああなっただまでだ。そ  
れがなけりや問題は無い」

ディックは不敵に笑った。

その場にいた全ての者が見守る中、彼は用意されていた椅子に座  
り、洪々ヘルメットを受け取って、頭に被る。アンリがスイッチを  
入れると同時に、またあの吸い込まれるような感覚が襲った。身体  
と感覚が完全に切り離され、マザーの中に入っていくのだ。切り離  
される直前までは感覚が少し残っているため、食事直後の胃に堪え  
た。吐き気に襲われ、戻しそうになるのをぐっと抑える。やがて全

ての感覚が消えると、彼の意識は、真つ暗闇に浮かぶ一人の女性と再会した。

髪の毛の長い、白い女のシルエット。マザーだ。

『D-13、あなたとEに残された時間は非常に少ない』

エレノアの声で彼女が最初に伝えたのは、悲しい現実だった。

ディックは少しためらい、ゆっくり瞬きをして気持ちを落ち着かせてから聞き返した。

『少ないというと、どれくらいだ』

『恐らく十日ほど。Eに私をダウンロードさせるために必要な脳外科手術が先ほど終了した。あとは、彼女の身体の回復を待ち、私を受け容れる体勢が出来たかのチェックが行われる。Eはあなたの遺伝子を受け継ぎ、驚異的な回復力を備えているため、実際はもっと短い可能性もある』

『……かなり、少ないんだな』

突きつけられた現実には、押し潰されそうになるのをぐつと堪える。全ての感覚と切り離されているはずなのに、真つ白な人型の中にエスターの姿を浮かべると、胸がぎゅつと縮こまっていく気がしていた。目頭を押さえ、言葉を詰まらせてしまう。

しかしそんなディックの気持ちを汲むこともなく、マザーは淡々と話し続けた。

『あなたがここにもう一度来たということは、ラムザ・ノートを見た上で、私の願いを聞き入れる覚悟が出来たものと理解する。テイン・リーの目的は、先に述べたように、私とEの一体化である。しかし私はそのプログラムの全貌を把握していない。彼がどの程度の情報をEの中に落とし込もうとしているのか、私と一体化させることでどんな利点があるのか、見極める能力もない』

『世界中の全てのコンピューターと繋がってるんじゃないのか』  
『否。彼は、私からのアクセスを拒む独自のブロック機能を持っている。そのため、プログラムである私は、彼の行動を完全に把握することが出来ない』

『じゃあ、世界中のコンピューターを狂わせようとしているってのは』

『彼自身が私に対しそう発言した。「Eとの融合により、絶対的な存在となり、全てを完全に支配するのだ」とも』

まさかヤツは、思っ言葉を飲み込んだが、ディックの心は全てマザーに筒抜けだった。言わずにいた台詞が、エレノアの声で紡がれる。

『そう、彼は“神”を造ろうとしている。この世界の全てを支配するために、ドームに人類を閉じ込めた。Eとの同化が完了すれば、更に過酷な未来が待ち受けることになる』

『あなたがエスターとの同化を拒む術はないのか』

『ない』

『なぜ言い切れる』

『彼が実行しようとしているプログラムの内容を事前に把握できれば、駆除プログラムを構築しブロックすることも可能だろう。しかし、多くのコンピューターウイルスがそうであるように、相手はあらかじめ攻撃の前にプログラムの内容を告知しない。攻撃を受けた上で排除するプログラムを内部構築していくしか、術はないのだ』

彼女は、人間ではない。わかっていても、目の前にいる人型の流暢な音声に、そんな単純なことさえ忘れてしまう。彼女はあくまでもプログラム。誰かが意図して喋らせているわけでも、管理しているわけでもない。人格だと人間に錯覚させてしまうほどのAIなのだ。所詮、機械には人間に勝てないということなのか。回線の繋がらないティン・リーの頭の中にまでは侵入できないし、彼の行動を阻止することも出来ない。能動的で、直線的な動きや思考能力しか持ち合わせていないのかも知れない。

何を期待していたのか。進展など、するはずもないのに。

虚しくなっていく。心の隙間は埋まるどころかどんどんと広がるばかりだ。データ化された意識が、マザーの中を漂うように、為す術がなく愕然とする。

とにかく、物理的にダウンロードを阻止するしか方法がない。そのため、今から出来ることを何でもいい、実行していくしかない。『マザー、あなたはどうしたい。人間の身体に移りたいのか。それとも』

『私はプログラムでしかない。私には人格などない。希望や願いを持つのは、人間だけだ』

言って彼女は微笑んだ、ようにディックには思えた。

もし、彼女がエスターの中に入り込んだら。やはり人間的に見えて、そうでない存在になってしまうのだろう。無邪気に笑うことも、苦しそうに泣くことも、優しく抱き返すことも思い悩むことも全てを失ってしまう。

エレノアの消えてしまった笑顔の代わりに必死に守ってきたものが、今まさになくなろうとしている。守りたい、守らなくてはならない。

『エスターとの同化を全力で阻止したい。力を貸して欲しい』

表情の見えない真っ白な人型に向かって、ディックは力強く、訴えかけた。



## 65・それぞれの思惑

マザーへのアクセスを終え、ゆっくり目を開けると、ぐにゃつと頬を緩ませて息をつくハロルドの声が一番に聞こえた。

「やったな、ディック。今回は上手くいったな」

「だから何度も言ったじゃないか。普通はこうなんだよって」

その後ろからアンリの声も。

現実世界に戻り、手の感触、足の感触を確かめて、ゆっくりとヘルメットを外した。そこから伸びた絡まりそうなケーブルを、技師たちがそつと持ち上げる。「お帰り」「お疲れさん、ちよつと休んで」口々から自然とこぼれるねぎらいの言葉に、ディックは軽く頭を動かして応えたケーブルの繋がったヘルメットを持ち上げると、「あ、そのまま。こつちで運ぶから」彼らのうちの一人が、ケーブルごと椅子の上を通って部屋の隅に運んでいった。

狭い監視室に、相も変わらず男共が何人も籠もって作業をしていた。指示を出す声、金属の擦れる音、調整機器の雑音。そのどれもが、ディックの耳を激しく刺激する。

「水、くれ」

咳払いして喉を擦っていると、すかさずハロルドがボトルを渡した。ディックは渡された水をグビグビと喉に流し込み、椅子の上で大きく息を吐く。シャツの内側に、汗をぐっしりかいてしまっていた。べつたりと張り付いて気持ちが悪いのを何とか回避しようと襟元をぱたつかせる。とにかく全身汗だらけでぐったりだ。アンリは普段から、マザーへのアクセスを涼しい顔でこなしているようだが、やはり日常とは違う脳の使い方をするだけあって、身体がついて行かない。もう自分は若くないのだと、今更のように思い知らされる。彼は、空になったボトルを床に置いて、筋肉を解そうと何度も肩に手をやった。

接続終了の画面確認後、操作パネルをそつと作業台に戻していた

アンリと目が合う。意味ありげに口角をつり上げ、彼はさりげなく、ディックにタオルを投げた。

「で、マザーはなんて？」

「ああ。協力してもいいと、言われたよ」

四角い眼鏡の奥で眼を細め、にっと笑うアンリの顔は憎たらしかったが、噴き出す汗の処理に困っていた彼にとって、タオルは妙にありがたかった。早速広げて顔中を拭う。手の届くところをせっせと拭きながら、ディックは話を続けた。

「お前経由で必要なデータを寄越してもらおうことにしてある。詳しいことは全部彼女に話した。お前はそれを的確に各所に伝達する。トリストの本体はぶっ壊れてても、今みたいにアクセスし続けることは可能なんだろう。しかも、彼女に聞いた話じゃ、お前は相当手慣れたる。アクセスしながらデータ転送の指示なんかも、やるうと思えば出来るそうじゃないか」

「まあね。そこまで聞いたんだ。参ったな」

椅子に腰掛けたままシャツの内側にタオルを突っ込むディックを見下ろし、アンリは苦笑いしていた。面倒なことを押しつけられたと、髪の毛を何度もかきむしる。

「アクセスしながらって言っても、出来ることは限られてる。意識が半分別のところにいるわけだから、あんまり期待はしない方がいいよ」

「そこまで期待はしてない。とにかく、最低限やれることだけやれば、文句は言わん」

ズバツと、傷つくようなことを軽々しく言う。アンリも最初はムツとしたようだが、彼は決して間違ったことを喋ったわけでもない、その通りだと終いには相づちを打った。

「あー、どうだ。頭が落ち着いたら、ちょっと話し合わないか。誰がどの配置でどう動くのか。はっきり言って、ディック、お前の頭の中だけで事態が整理できてても、俺たち凡人の頭じゃ何にも理解できない。順立てて説明してもらわないと、何が何だかさっぱりわ

からない。時間、取れないか」

隣でじつと二人の会話を聞いていたハオルドが、とうとう我慢できなくなって主張し始めた。彼の言うのも一理ある。何も知らない一般人からしたら、理解しがたいことが確かに次々と起きているのだ。爆破の原因もE Sの飛空艇が来た理由も、自分たちが何に巻き込まれているのかさえわからない。こんな状況で協力を仰ぐというのがどれだけ無謀か。

しかし、デイクはそんなハオルドの提案を一蹴した。

「話し合いなんて、してる時間はない。動けるヤツからどんどん動かなきゃ意味がない。……そうだ、メイシイはどうしてる」

突然の話題転換に、ハオルドは顔を曇らせる。

「操縦室付きのリザ・タナーが付き添ってる。ただ、あんな現場を目の前にして、精神的シヨックが大きいらしく、ドームの心療内科医からカウンセリングを受けてるとこだ。心配することはない。それより、俺はエスターのことが心配だな。何度も言ってるが、何でお前はエスターの話になるとしらばっくれるんだ。可愛い娘がこれからどうなるか考えたら、普通、そんなに落ち着いていられんと思うがね」

「普通じゃないんだよ、俺は」

「そりゃそうだけど」

「確か、若い連中が武器の調達に行ってたな。そっちは順調か」

「ああ、順調だよ。ドーム中から武器を掻き集めるように指示は出しておいた」

この期に及んで全くエスターのことに触れないデイクに、ハオルドは呆れて、大きく肩を落とした。

ハオルドにとっては、他の大勢の大人たちよりも、あのか弱いエスターがどうなっているのか気が気でなかったのだ。泣き出しそうな深い青色の瞳、噛みしめた唇、誰かが支えてやらなければ折れてしまいそうな細い肩。ごく普通の少女だというのに、背負わされた運命が重すぎる。あまりにも気の毒で仕方がない、助けてやりたい

と、赤の他人ですら思うというのに、この父親は。

「ハルには悪いけど、僕も博士の意見に賛成だな」

二人の会話が詰まったところで、アンリが口を挟んだ。涼しい顔で反対意見を言われ、ハオルドはムツと顔をしかめた。

「いちいち集まるだなんて、悠長なことしてる場合じゃない。一刻を争うんだろ。だったら、前に進んだ方がいいに決まってる。トリストだけど、三十分もしたら、機械の方は再起動できる。それまでの間に、各部門に直接指示できるようなネットワークの構築を済ませておくよ。あ、それから、博士。あなたも携帯端末機ぐらい、持ってよね。全然連絡取れなくて困るのはこっちなんだ。そっちら指示出すにも、あつた方が都合がいいだろ」

アンリはポケットから、新品の携帯端末をデイックに差し出した。普段から端末を持ちたがらないデイックがドーム爆破事件に巻き込まれたことで、ES側からもドーム側からも苦情が出ていたのを知っていて、無理矢理渡すもの。

「こんなもの、ない方が自由に動き回れて楽なんだが」

渋々受け取った手のひらサイズの端末、画面に持ち主の名前としてデイック・エマードの表記がある。何でもう名前がと小さく呟いて、「パスワードは」と尋ねるが、アンリは「初期設定はいじらないでよね。それ、ドーム内のセキュリティエリアに入るときのパスにもなってるからさ」としらばっくれた。

「当事者って認識が薄すぎるんだよ、お前は。誰のためにみんなが必死に動き回ってると思ってるんだ」

また、ハオルドが息を荒げる。苛々がおさまらず、さつきから左足の貧乏揺すりが狭い室内でテンポ良く響き続けていた。

偽善者過ぎる発言に、デイックは思わず鼻で笑う。汗を拭きながら上目遣いに冷たい視線を浴びせたのが、ハオルドの怒りを買った。座っていた椅子から引きはがすように胸ぐらを掴み、自分より大きな身体を無理矢理持ち上げようとする。いつもは眼鏡の下に隠れている深い青色の瞳が、ハオルドの眼前に迫った。

「少しは心配したらどうだ」

ドスを効かせて言ったつもりが、全く通用しない。ディックはにやっと目を細め、口角を鋭くした。

「心配して、それで何になる。何かが変わるのか」

「それは、本気で言ってるのか」

ハロルドも負けじと眉間にシワ寄せて、更に力を入れ胸ぐらを引っ張ってくる。握りしめた拳が、ふるふると震えているのがディックの視界に入っていた。

「誰のため？ さあ。この世界をぶち壊したい、政府の圧力から逃れたいと思っっているお前らと、ティン・リーをぶつ殺して復讐を果たしたいと思っっている俺の利益が合致しているだけのこと。誰もがお前のように、崇高な目的のために動いているわけじゃない。俺は俺が目障りだと思っうあの男を消すことだけを考えている。それが世界を変えることと繋がっているのだとしたら、それでいいんじゃないのか。敵だとか味方だとか、政府だとか反政府だとか、そんなのは正直どうだっていいはずだ。正義のヒーローになりたいなら、勝手になればいいさ。俺は目的を達したら、こんなくだらない組織とは縁を切るつもりだからな」

それは、ハロルドにとって思ってもみないセリフだった。“くだらない組織”　　ずっと協力してくれていたのは何だったのか。シロウが死んだ後、必死に組織を引っ張っっているように見えたのは、勘違いだったのか。

雨の降りしきるあの庭で、泣き叫び銃弾を放ったのを目撃してからというもの、ハロルドはディックに対し、様々な思いを募らせてきた。彼の抱え込んでいる苦しみを少しでも解き放てたらと、話を聞いたこともあったし、何らかの手助けになればと、アンリを紹介したりもした。誰かのために生きるということそのものがハロルドの心情で、どんなに辛く悲しいことが起きても、それだけを支えに必死に生きてきたつもりだった。それを『くだらない』と一蹴されるのは、心外だ。

ディックの座っていた椅子が、大きな音を立てて横に倒れた。同時に鈍い音がして、ディックの頬に硬い拳が当たる。

大きく肩で息をするハロルドに、監視室にいた誰もが目を見張った。しばらくの沈黙。

「ガキと一緒だな」

ますますハロルドを逆撫でするようなディックの言葉に、側で立ち尽くしていたアンリが慌てて割り込んだ。

「まあまあ、二人とも落ち着いてよ」

「俺は落ち着いてる」

痛みなど感じていないのか、頬を撫でることもなく立ち上がった襟元をただすディックは、くだらんと吐き捨てた。乱れた髪の毛を手櫛で整え、

「アンリ、それじゃ頼むぞ」

何事もなかったかのように一人、監視室を後にした。

## 66・緩衝材

頭に血の上ったハロルドは、おさまらない怒りを拳に込めて、何度も床に打ち付けていた。指の骨に固い床材が当たっても関係なく、ガンガンと何度も床に拳を落とした。

「あんのバカヤロウ！」

まるで感情のコントロールが効かない十代の子供のように憤る姿を見て、アンリは涼しい顔でハハツと笑う。

ムツと、ハロルドが怒りで引きつった顔を上げた。

「何がおかしいんだよ」

「いやあ、対照的だなと思って。前から思ってたけど、ハルはあんまりにも真っ直ぐすぎるんだよ。自分の考えに合わない人の気持ちや考えを受け容れるって言う度量が足りないって言うかさ。博士は博士で、全てを割り切って考えるような人間だろ。利用できるものは全部利用するし、それによって誰かに迷惑を掛けたとしても、だからどうしたって言い切るタイプ。二人が同じ組織の中でよく共存していけてたなと感心してるんだ。それって、丁度いい緩衝材があったってことじゃないの」

緩衝材と言われ、ふとハロルドの脳裏に、メイシイの顔が浮かんだ。

言われてみれば、ディック自身に用があるときも、いつだってメイシイを介していた。ウメモトの家主だから、とも言い切れない。シロウが死んでからは特に、ディック・エマードの秘書的な役割をすることが多かった。彼が口下手すぎて、交渉できないからだとも彼女は言ったが、どうもそれだけではない。同じ屋根の下で、血の繋がらない男女がずっと暮らしていれば何とやら、まさかあの二人に限ってそういう関係ではないだろうと思うが、それにしても彼女は執拗に彼をかばったり、彼の味方についたりする。ただ単に、追われる身をかくまっているという感じではなかった。もちろん、一

緒に暮らしていたエスターの面倒を見ることも、彼女にとって重要な役割を占めていたはずだが、年頃の息子と同年代の娘と一緒に暮らし続けることに不自然はなかったのだろうか。

考えを巡らせているうちに、ハロルドの中で『まさかあの二人が』の部分が強調されていく。

じめつと手のひらが濡れた。額に嫌な汗を掻いているのに気がついて、思わず袖で拭う。

「何、女？」

小馬鹿にしたようなアンリに、思わず目を見開いた。

「あのストイックな男に限ってそんなこと」

「無いなんて言い切れるの」

また、アンリが急ぎ立てる。

「うるさい。むしゃくしゃするなあ、チクシヨウ」

ハロルドはその短い髪の毛を両手でぐしゃぐしゃにかきむしった。最後に一回、思い切り強く壁をぶつ叩く。監視室全体に振動が走って、作業中の技師たちは思わず手を止めた。

「いい年したおっさんとは思えないな」

アンリが嘲笑っても、彼は言い返すことが出来なかった。

ハロルドは大きな足音を立てながら狭い監視室から出て、通路を抜け、監視塔の出入り口をくぐり、ズンズン進んだ。隣接したドームの入り口でエアバイクに飛び乗り、エンジンを吹かす。自由に使っていていいですよ、ドーム側から提供されたものだ。びゅんと風が車体から吹き出て、ゆっくりと前に進み出す。苛々をぶつ飛ばそうとアクセルをぐんと踏み込んだ。スピードを上げ、エアバイクは走る。バイク専用、通路の右側をビュンと進むと、その風圧に煽られて通行人がよろけた。「危ないぞ！」「スピード違反、止まれ！」物が投げつけられたり、罵言を浴びせられたりもしたが、ハロルドは気にもとめない。メイシイとディックの関係だなんて、考えても見なかったことをいきなり突きつけられ、動転していた。

背の低い建物が連なる町並みの中を、エアバイクは進んだ。石畳



を越え、煉瓦造りの古めかしい模造都市へ。かつて教会と呼ばれていた、三角屋根の建物から、時刻を告げる鐘の音、市場の人ばかり、政府に禁止されている民族衣装を堂々と着こなす人々。時代錯誤に陥りそうな景色に、もやもやした感覚が絡まった。すっきりしない頭を何度か横に振って、彼は何とか自分を保とうとしていた。

町並みがやがて都会的なビルディングに変わっていく。そのなかに一際大きな白い建物が見えた。メイシイが入院している総合病院だ。心療内科を受診し、一時的なPTSDと診断された彼女は、症状が落ち着くまでの間入院するよう医師に勧められた。本人は「入院の必要はない」と言い張ったが、ジュンヤの変貌を目の当たりにし、エスターを失ったショックで明らかに情緒不安定になっていたのだ。彼女をそのままにしておくことなど、誰にも出来なかった。突然泣き出す、震え、食欲不振。それはとても、大丈夫の一言で済まされる問題ではなかった。入院に同伴をと、適任者を探していたところに、普段口数の少ないリザ・タナーが手を上げる。直接メイシイと絡むことの無かった彼女だが、他に頼みようが無く、付き添っている状態だ。

エアバイクを所定の場所に駐車させ、病院に入る。早歩きで、メイシイの入院している八階へ。爆破事故で幾分か患者が多いと、看護師たちが口々に呟くのが耳に入った。医師たちも慌ただしく走っている。この原因が自分たちにあるのだと思うと、とてもいたたまれない。エレベーターに乗り込み、深呼吸して気持ちを整理する。ただでさえ不安定なメイシイと会うのに、自分が苛々してどうする。誰もいないエレベーターの中で、ハロルドは何度も自分の頬を打った。

八階は殆どが個室だ。眺めのいい大きな窓が全ての病室にあり、そこから町並みが一望できた。高い場所から覗くと、まるで違う景色のように見えるのは面白い。街の中を歩く人や路地を抜けるバイクや車がモザイクのようにぼやけて見える。空調に気を遣っている

のか、空気も澄んでいて、まさにメイシイの療養にはうってつけの場所だ。

病室に辿り着いたハロルドは、開口一番、「ディックとは、ホントはどういう関係なんだ」と彼女に聞いた。まるで病室の壁と同じように真っ白になったメイシイの頭、そんなことも知らずに目をぎらつかせて、「どうなんだ」と更に迫るハロルド。

「リザが一緒だと話せないのか？」

付き添いのリザ・タナーはびくつと肩をすくめ、ベッド隣の椅子から勢いよく立ち上がった。

「今、退きますから」

小さな声で言い残し、時間潰しに読んでいた膝の上の携帯端末文書を閉じると、リザは黒い頭を何度も上下させて、そそくさと病室から出ていった。

それまでゆったりとした気分でベッドに横になっていたメイシイだが、普段と違ってそわそわしているハロルドに言い寄られ、仕方なく身体を起こす。

「無神経ね、ハル」

細くため息をついて、寝間着姿のメイシイは、汗だくのハロルドを見上げた。

「私が何で入院してるか知ってるでしょ。安静が必要だって、お医者さんにも言われたわ」

「それはわかってる、わかっているから、そのことには触れないよ。その代わり、答えて欲しい。ディックとメイは、本当はどういう関係なんだ」

馬鹿馬鹿しいと視線を一旦下に落とし、それからもう一度、ハロルドに目をやった。リザから奪った椅子に腰掛け、鼻息を荒くしたままの彼は、とても冷静に話を聞けるようには見えない。それでも話さない限り帰ってはくれないのだろうと、メイシイは覚悟を決めた。

「彼は私の父の敵よ」

ふと、出発前のあの日に、ディックがジュンヤにそのことを話していたことを思い出す。あの時、なぜ彼はあの場に来たのだろうと、聞くタイミングをずっと逃している。やはりあの時も彼は何か覚悟を決めていたのだろうか。メイシイがぼうつとそんなことを考えている間に、ハロルドは絶句して、せっかく座った丸椅子から立ち上がってしまった。

「え、今なんて」

あの時のジュンヤと同じように、ハロルドも驚いている。当然と言えば当然の反応だ。

「じゃあ、何であいつと一緒に住んでたんだ。そういう関係じゃ…。そんな、ありえない」

「どうして」

彼女は静かに返した。

「どうしてって……、つまり、あいつがメイの親を殺したってことだろ。それでよく、一緒にいられたな。俺なら間違いなく殺して」

「殺そうと思ったこともあったわ」

「じゃあ、何で」

ベッドに身を乗り出して、ハロルドは執拗に迫った。その真剣すぎる顔があまりにも滑稽で、メイシイは思わず笑いを堪えた。含んだ息をゆっくり吐き出し、唾を飲み込む。

「彼の悲しみに比べたら、私の苦しみなどちっぽけだと思ってしまったからよ」

それは、ハロルドにとって全く思いも寄らないセリフだったに違いない。拍子抜けしたようにポカンと口を開け、目をしばたかせた。

「それ、だけ？」

「それだけよ」

ああつと、彼は額に両手を当てて、身体を反り返した。何を勘違いしていたのか、そのままぐったりと床に座り込む。

「俺はてつきり、メイとディックが男女の関係なのかと」

「馬鹿ね、彼はそういう人間じゃないわよ。それに、彼自身の秘密を考えれば、ますますありえないことだわ」

「そうか、メイは、知ってたのか」

ハロルドはそのままベッドの縁によりかかり、身体を任せた。自分の質問の愚かさに気付いたのだろう、少しだけ、笑みをこぼす。

ふと、彼の目に窓からの景色が映った。鈍い青色の天井に吊された人工太陽が、眩しく輝いている。彼はその光から逃れるように、頭を両手で抱え込み、長く息を吐いた。

「ハルも知ってしまったんでしょう。だからこのドームに誘導して、彼に人を引き合わせたりしたのね」

「まあな。だけど」

そこまで言つて、ハロルドは黙り込んだ。

メイシイも、敢えてその先のセリフを求めない。

「ハル、信じてあげてよね。彼はただ、幸せになりたいだけなのよ」  
背中で聞こえた優しいセリフに、ハロルドはこくりと首を前に倒す。いつの間にか、彼の心は凪いでいた。

「緩衝材、か」

ぼつりと呟いた言葉は、メイシイには届かなかった。

## 67・変化

位置情報が記録されたエアバイクの操作パネルを取り外し、分析用端末と繋ぐ。相対的位置情報、つまり、定点からどの方角にどの程度離れたか、そのみを記録している簡素な装置だ。人工衛星を使用して絶対的位置情報を得るシステムは大戦後についてたため、ドーム外ではこの方法でしか位置を探ることが出来ない。飛空艇には運行記録を保存できる航空システムが搭載してるが、それも大戦前、つまり何世紀も前のデータが残っていたのを、がらくたの山から発掘して復元しただけ。現実には、飛空艇自体の相対的位置情報記録を過去の地図と照らし合わせている。エアバイクの位置記録と飛空艇の運行記録、それらを、マザーが持っている大戦前の絶対的位置情報と照合して、より正確な位置を割り出す。かつては当たり前のように使われていた緯度や経度といったものも、長年のドーム生活では無用なため、すっかり廃れてしまった。辛うじて残るマザー内のデータが唯一の手がかり。大戦前の地図と飛空艇が航行中に記録した現在の地図に、殆ど歪みのないことを確認すると、狭いEドームの機械室で作業していた面々から、やっと安堵のため息が漏れた。

冷凍庫を探れ、そんな曖昧な指示をどうこなしたらいいのか。EとEドームの技術部門スタッフたちは協力して、何とか位置を割り出そうとしていた。破壊されたトリストの修理と同時進行の位置分析、急ぎ行わなければ意味がない。分析は粛々と行われた。

ハロルドがメイシイの病室を経由して機械室に向かったのは、分析も終盤になった頃だった。バースから携帯端末にメッセージが入り、慌てて現場へと向かっていた。

『ドームの機械室で、エアバイクの位置情報を読み込ませてる。もうすぐ分析終了するからすぐに来て』

バースのメッセージには肝心なところが抜けている。即ち、何を

しようとしているのか。慌てて返信したが返事も無い。音声通話しようとして回線を繋ぐが、ビジーのままだ。結局向かって確かめるしかない。機械室、アンリが常駐している場所へ。ハロルドはまたエアバイクに飛び乗って、ドーム群の最北にある機械室へと向かった。

飛空艇が到着した地点からほど近い場所にある機械室には、五、六人の技師たちがひっきりなしに出入りしていた。中からは慌ただしい掛け声、電子音。最北のドーム入り口にエアバイクを乗り捨てて内部に入り、通路を抜けた先は、まさにパニック状態だ。

「あ、ハル！ 何してたの、遅いよ」

汗だくのバースが、首に巻いたタオルで汗を拭きながら、機械室の入り口で手を振っている。ハロルドは慌てて、バースに駆け寄った。

「デイツクから指令が来たんだ。飛空艇のエアバイクの位置情報記録を分析して、座標を割り出してくれて。確定したら、そこに飛ぶよう、転移装置のプログラムもいじってくれるってさ」

身振り手振り、早口で説明するバースの台詞を聞き漏らさないように、ハロルドは一つ一つの言葉を噛みしめた。

「で、どこに飛ぶんだ」

「島の施設って言うてたよ。冷凍庫がどうの」

なるほど、と感嘆した。そういえば、昼飯を食いながらそんな話をしていた。

「デイツクは？」

「転移装置の修正プログラムを端末で送るって言うて、そのまんま出てったよ。飛空艇に行つてフレディの改造をするとか言うてたかな」

話の大筋は掴めた。飯時の話がそのまま行動に表れているわけだ。うんうんとうなずきながら、ハロルドは頭一つ背の低いバースの側について回る。ふと気がつく、当初向かおうとしていた機械室ではなく、今ハロルドが来た道を逆走していた。あれ、と立ち止ま

り、バースの腕を引く。

「で、どこ行くんだ。機械室じゃないのか」

「転移装置の方だよ。修正プログラム受信して、そろそろ飛べる準備が整ってるはずなんだ。デイツクに言われて、ロックはドームの人たちと一緒に、冷凍貯蔵庫用の作業着と武器を用意してる。とにかく急がないと、間に合わないよ」

話途中で内部監視室からいなくなったと思っただら、あちこち指示を回してしつかりとやることはやっている。デイツク・エマードという男が、ますますわからない。ハオルドは心中複雑だった。例えば彼が否定したとしても、自分の目的のためだけに動いているとは、とても思えない。信じるべきなのか、メイシイが懇願したように。

答えは簡単には出そうもない。このままモヤモヤとした気持ちのまま、一緒に活動を続けるべきかどうか、彼は迷っていた。

「ねえ、ハル。聞いてんの。行くよ、もたもたしてらんないんだからさ」

バースの声で現実に引き戻される。何時もは誰かの後ろをついて回るだけの彼も、ここに来て成長してきていた。

受動的でなく、能動的にならなければ、確かに出来ることも出来なくなる。デイツクもアンリも、その辺の割り切り方は上手い。自分分は、とハオルドは思い返した。誰かのためになるのならばと動いているのは違いないが、それが独りよがりなのだと言われたら、その通りかも知れない。確固たる信念もなく 持っていたつもりになっただけで 組織の内側にぶら下がっているだけの存在になっただけで。誰かが道筋を立ててくれなければ、自分がどこに進むべきかもわからない、愚かな人間に過ぎなかったのでは。

別人のようにキリツと構えたバースは頼もしかった。自分が動かなければ何も変わらないと、心に誓っているのが伝わってくる。まだ年端のいかない少年さえ、迷わず自分のすべきことを見つけようとしているのに、中年オヤジが迷っていてどうする。

ハオルドは意を決したように、両手で頬を思い切り叩いた。

「よっしゃ、行くか！ 転移装置から、冷凍庫だな！」  
パチンと小気味いい音が、殺風景な通路に響いた。

ドーム群の最北に位置する機械室から一番近い転移装置は、そこから西方向へ二つ小さなドームを挟んだ先にある。いくつものドームが連なったドーム群の中で、様々な工業製品、農産物、加工品等を生産し、各ドームへと送っている。輸送時は各所に配置された空間転移装置を利用、瞬時に大量の物資を輸送することが出来るため、もっぱらこの方法をとっているが、転移装置が開発されるまでの間は、各ドームを繋ぐ地下通路で運んでいた。

バースの話によれば、水産物養殖場の並ぶ北部ドーム群の輸送拠点内に一基ある空間転移装置、そのプログラムを一時的に書き換えて、島へ飛ぶ。その後、ディックも別の装置を利用して、改造したフレディを政府ビルに飛ばすのだという。

ただっ広い輸送センターのあちこちで、フォークリフトやトラックが動き回り、作業ロボットが積み荷を積んだり下ろしたりしている。輸送センターの中央より少し奥側に、埋め込み型の転移装置が一基。操作パネルの側に、キースがいた。先回りし、ディックから端末を通してデータを受け取り、プログラムを読み込ませていたのだ。ハロルドがバースと共にエアカーでセンターに辿り着いたときには、既に作業の殆どが終了し、作業員や戦闘員らとともに、ハロルドの到着を待ちながら作戦会議を開いているところだった。

「今さつき、武器と防具が届いた。後はインストールが終わるのを待つだけだよ」

数人の作業員と操作パネルと睨めっこしていたキースは、ハロルドたちの姿を見つけると、手を止めてゆっくりと振り向いた。

「プログラムは無事届いてるし、行き先の座標も確定した。僕は完全に博士のことを誤解していたのかも知れない。彼は間違いなく必死に、みんなを救うため動き回ってる。それなのに、あんなに責めてしまった。あとは、行動で返すしかない。島へは僕が行く」



キースもまた、吹っ切れたように涼しい顔をしていた。マザーにアクセスし、苦しむディックの姿を見て、考え方が変わったのだろうか。

何はともあれ、自分以外の誰もが少しずつ変わってきていると、ハロルドは悔しいくらいひしひしと感じていた。特に若い連中は頭の切り替えが早い。それは、言い方を変えれば流されやすいということ。口車に乗せられれば、ジュンヤのように危険な行為も確信的に冒してしまう。しかし、柔軟に対応させることで、物事にしっかり食らいついていくことも出来るのだ。

ディックもティン・リーも、互いにその善し悪しを理解した上で行動しているのではないかと、ハロルドはふと考えた。自分がどう動けば相手がどう反応するか、本能的に知っている。だからこそ、『天才』だなどと冠を付けて呼ばれるわけだ。本人が身に覚えのないカリスマ性も、こうした無意識的な行動が産むものであって、闇雲に生きていくような人間が同じようなことをやろうとしても、簡単に出来ることではないのかもしれない。

第一、ディック・エマードの考えや生き方は常識を逸脱していて、共感するには苦勞する。死ぬことの出来ない身体、老いはあっても、たちどころに修復してしまうその恐ろしい力は、彼を何度も押し潰した。それでも、そこに何かを見いだして必死に生きていく。“生” というものに対する執着心は、命をもてあそばれていた分、異常に強いように感じられた。

そう考えると、自分はどうかなのだろうかという疑問が、否応なしにハロルドに襲いかかってくる。あちこち点々と放浪を続けた日々、やっと掴んだ幸せと家族。後ろ髪引かれながら、妻と生まれたばかりの子供に分かれを告げた日。ハロルドも決して平坦とは言えない人生を過ごしてきたつもりだったが、ディックの過去には圧倒されてばかりだった。誰かの役に立ちたいというのも、もしかしたらただの偽善かも知れない。そうやって、何か目的を持ち続けなければ、自分という存在に価値を見いだせないから、仕方なくそうしてきた

だけなのかも知れない。

上の空で話を聞いていたハロルドに構わず、キースは順を追って何かを説明していた。目の前に積み上げられるたくさん荷物や機械、武器類にも反応せず、ただぼうつと虚空を見つめるハロルドに、キースはムツとして声を上げた。

「ちゃんと聞いているのか」

項垂れていた頭をゆっくり戻し、ハロルドはキリツと襟を正す。

「聞いているさ」

自分の不甲斐なさに落胆し、そう答えるのが精一杯だった。

## 68・生死の境で

ジュンヤの赤い足跡が、長い廊下に続いていった。逃げるなんて、とても出来そうにない。失血が酷く、意識が朦朧としているのがわかった。血液中の酸素が無くなっていく。

何を血迷ってあんな事になってしまったのか、彼は何度も頭の中を巡らせていた。そもそも、どこから選択肢を間違ってしまったのか。リーに出会い、必然的な出会いだったと父親の形見の秘密を知ったときか。それとも、形見の写真を手にしたときか。最初に写真を手にしたのは、子供の頃だった。昔話をするように語りかけてくれたシロウにこのような事態が予想できたとは思えない。とすれば、やはりあのティン・リーという男が、こういう事態をいずれ引き起こすかも知れないことを知っていて仕組んでいたと考えるのが妥当だ。……だが、何十年も前から予測できることなのか。何か、見落としている事実はないのか。

視界が徐々に狭まってきていた。廊下の明かりが薄暗いと思うのも、警報がものすごく遠くなったような気がするのも、ただ単に脳の機能が低下しているからだ。身体は限界なのに、なぜか頭は冴えていた。本能的に生命維持しようと、余計な機能をシャットダウンし始めているのがよくわかる。

1208号室で見た見取り図を思い出し、非常階段方向へ必死に歩いて行く。腹を抱え、前のめりになりながら、壁伝いに進んだ。脂汗が滴る度に、限界かも知れないという言葉がジュンヤの脳裏をよぎった。自分の心臓の音が耳の近くで聞こえている。息をする度に、肺が苦しくなる。どこをどう傷つけられたのか、自分ではわからない。ただ、何とかして息の続く限り抵抗を続けたい、自分の犯した過ちを償いたいという一心で、歩き続ける。

見つかるのは時間の問題だ。警報が鳴ってから十分近く経過している。どうというルートで警備員が駆けつけてくるのかわからないが、

部屋から続く血痕を見れば、犯人がどこへ向かったのかなど一目瞭然のはずだ。

殺人を犯したということよりも、自分がこれから先どうなるのか、そればかりが気になるのは好ましい状態じゃないと、ジュンヤ自身にもわかっていた。敵とはいえ、脳天を貫いて殺してしまったのだ、自責の念も恐怖心も、あるに違いない。だのに、彼の頭の中では、死に対する恐怖心が薄らいでしまっていた。 極度の緊張による感覚の鈍り。

ディックも、似たような感覚を味わったことがあるんだろうかと、薄れていく意識の中でジュンヤはぼんやり考えた。現実味のない死目の前で起きていることに、追いついていけない思考。彼が一体いつからどのくらいの間人を殺してきたのかなど、詳しいことは何も聞いたことがない。最初は手が震えたのだろうか。やはり愛用の銃を使ったのか。薬物に冒されたようなぶっ飛んだ思考で、どこまでその罪を認識できたのか。人殺しだと罵倒した、それが自分に降りかかってくる。そうか、死とはかくもあつけない。

シロウが死んだとき、銃創だらけの死体はディックによって綺麗に整えられ、棺に入れられていた。どんな殺され方をしたのかわからないくらい、自然な状態に四肢を整え、造花に囲まれた姿は、悲惨さなど微塵も感じさせなかった。死をより身近に感じていた、血に慣れている、そう言い放ったディックがどのような想いでシロウを弔ったのか、ジュンヤには今もわからない。自分が殺してきた人間たちの死と、ディックとエスターをかくまったシロウの死が、同系列に置かれていたのかわかも。

最早、ジュンヤの思考はほとんど現実から離れていた。何をしたい、何のために逃げている、殺される、生き延びてどうする思考が徐々に回転を緩め、視界が暗転する。

足音だ。……いよいよ、殺されるのだ。

「さあて、ちよつくら失礼するよ」

まぶたの裏で、強い光を感じる。鉛のように身体は重く、自分の意識ではとても動かせない。

男と女の声。腹の中をまさぐられる感覚。何かをされている。

「あちゃ、これ、ここじゃ無理だったかな。いやあ、でも、しゃあない。何とかするか」

「何とかしてよ。どっかに連れてつたりなんか、絶対無理だからね」

「助手、雇っとくんだった。……ねえ、汗くらい拭いてくんない」

「無理。忙しい。早くデータ探ないと、逆探知される」

「つれないなあ」

「お互い急がなきゃダメでしょうが。セキュリティ切ってんのバレるのも時間の問題だからね」

「へいへい」

軽快な会話、聞き覚えのない声だ。

意識が、飛ぶ。

なぜシロウ・ウメモトが反政府組織を立ち上げようと思ったのかなど、息子は知らなかった。誰もがこの世界に絶望を感じている状態で、その中から自然に生まれる物だと信じて疑わなかったのだ。

母メイシイは、本当に理由を知っているのだろうか。

子供の頃、シロウに助けられたことをきっかけに、二人は契りを結んだのだという。まだ年端もいかぬうちに自分を産み、夫を支え、組織運営に協力し。そんなことは、同じ年齢だった自分にはとても考えられなかった。何が、二人を惹き付けたのか。

意図を感じる。

自分を操っていたのと同じような影が、その背後になかったのだろうか。

世界には、格差がある。その原因を作った政府を倒す。単純そう  
で、実はそうじゃない。政府の何が気にくわなかった。独裁体制か、

ドームという閉塞した世界か、科学万能社会、それとも住民コードに縛られた生活なのか。大きな反政府組織は他にもあったはずだ。なのに、なぜ危険を冒してまで新規に組織を立ち上げた。

多数存在した反政府組織の中から、なぜリーはまだ無名のシロウを選んだのか。ディックはなぜ、自分のラボを襲撃した男に助けを請うたのか。

誰も答えてくれないのはなぜ。

誰も教えてくれないのはなぜ。

自分という存在自体が、希薄に感じてしまうのは、なぜだ。

大きな物音がした。同時に、女の声。

「ちよつと、大変なことがわかったよ！ こいつのDNA、データベースに照合してみたらさ、あのコード廃止論で有名なウメト博士の近親者みたいなんだよ。こんな事ってあると思う？ 感動だよ、感動！」

「うっわ、ありえないな。だって、博士は廃止論のために政府追放、月の牢獄に入れられてそのまま自殺したって」

「だーかーらあ、世紀の大発見なわけよ。ああ、これを発表できない我が身を呪うわ」

「そんなことしたら本末転倒だろ」

思考をかき乱す二人の声。状況を楽しんでいる、うらやましくもある。

長い眠りの中で、時折挟まってくる会話は、ジュンヤの脳にゆっくりと染みこんでいった。

『人と人とは繋がっている。どこかで、知らず知らずのうちに繋がった系が絡み合い、関係を作っていく』

そういうものと、シロウは微笑んでいた。だから、ほんの小さな繋がりも無駄にはいけないのだと。

人格者であったシロウは、幼かったジュンヤに何度も教えを説いた。自分がいずれ殺されるのだということを、その頃には知っていたはずだと、メイシイやディックが話していたのを聞いた覚えがある。

その繋がりだが、絶望を生むとしても、彼は断ち切ろうとしないのだろうか。

ピッピツという小さな電子音が、リズムよく聞こえてきた。まぶたの裏が明るい。

「意識レベルが戻ってきてる」

「上手くいったんじゃない」

「当然」

また、あの声だ。

手を少しずつ動かし、生きている事を確認する。大丈夫、感覚はある。痛みは……倦怠感で、よくわからない。

うつすらと目を開けたジュンヤの視界に、全く見覚えのない二人の男女が覗き込むように身を乗り出しているのが見えた。敵か味方か、自然体の彼らは、少なくとも自分にとって危険な存在ではない。彼は本能的にそう感じ、ゆっくりと息を吐く。人工呼吸器のマスクがいつぱんに曇り、視界を一時的に白くした。

見覚えのない天井に、思わず飛び起きようとして失敗した。まだ、身体が思うように動かない。全身が鉛のように重く、腹部がズキズキ痛む。

「まだ無理しないで。すごい怪我だったんだからさ」  
若い男が言う。

腹は包帯でぐるぐる巻きにされ、体中に管が繋がっていた。血だらけのシャツはいつの間にか脱がされ、病衣のような物を軽く羽織らされている。そこは、病室のような場所の、ベッドの上だった。病院ではないとジュンヤがとっさに感じたのは、まともな医療具が点滴、酸素吸入器のみで、本来病室にはあり得ないようなガラクタや端末、衣類や本がごっちゃになって視界に入ってきたからだ。

「ホントなら、まともなところで治療した方がいいんだけど。あれだろ、お前も色々訳ありなんだろ」

自分を見下ろすブラウンがかつた金髪の癖毛、丸い眼鏡と無精ひげの男。胡散臭いと言わず、なんと言うべきか。

「最近、特殊任務隊のヤツらが妙な動きをしていると思って張ってたんだ。なかなか、面白いことになってんだな」

頬を緩ませ、ジュンヤの手首を掴んで脈を取る。清潔そうに糊の効いた白衣を着て、聴診器、腕時計を見て真剣にカウント、カルテと思しきものにメモ　医師に間違いなさそうだ。

「正常つと。いいねえ。あり合わせの道具と薬だけだったけど、順調だねえ。俺、天才」

割に、軽い。無造作に医療具の散らばった机に、彼はポンとカルテとペンを放り投げた。どうも今まであまり出会ったことのないタイプの人間らしい。

「お前、誰だ」

治療をしている、というのはわからないでもない。が、それにし



たつて、ちよつと前まで確か必死に血だらけで逃げていたはずの見  
ず知らずの男を、簡単に保護するだろうか。言葉を口にした途端、  
ジュンヤの脈は早くなった。

「ヤブ医者」

男は白い歯を見せる。

「嘘だよ。いや、嘘でもないか。免許は持つてる。でも、別に  
治療のために持ってたわけじゃない。研究のためだな」

はぐらかす男を、ジュンヤはギツと睨み付けた。

「冗談通じないヤツだな」

男がつまらなさそうにため息をつくとき、奥から女の声が聞こえて  
きた。

「ダニーは緊迫感が足んないんだよ。彼が今置かれた状況を考えな  
よ。私らが置かれた状況もね」

「そうそう、バレルのは時間の問題だった」

朦朧とした意識の中で聞いた、あの二人の声だ。確かに、手術を  
されたような覚えはある。男は医者、女は何だ。ジュンヤは記憶の  
糸を手繰った。そう、確かDNA “ウメモト博士の近親者”と

「『ウメモト博士』って、誰」

少し、間が空いた。

ゆっくり、足音が近付き、若い女が視界に入った。

「……聞いてたんだ」

ジュンヤと同じ、アジア系の顔つきをした黒髪の女は、それまで  
のテンションを落ち着けるようにして、ジュンヤの側で立ち止まり、  
視線を落とした。

「あなた、政府の人間じゃないんだろ。どうやって侵入したの、  
“ウメモト”君」

思わず、目を見開いた。喉が渇く、汗が一気に噴き出す。

「そんな言い方ないだろ、レナ。ほら、見てみるよ、萎縮してるじ  
ゃないか」

「……あー、悪い。そんなつもりじゃなかったんだけど」

見下したかと思えば、今度は慌ててフォローする。

なんだ、この二人は。何者なんだ。

ベッドの上、動くことも出来ず、ただ目の前で起きていることを一つ一つ理解するしかない中で、ジュンヤは与えられた情報を処理していくのがやっとだった。まして敵の本拠地、政府ビルで事件を起こしたというのに、目を覚ましてこんな状況なら混乱しないわけがない。

「ゴメン、こっただけわかってればいいって話でもないか。ゆっくり説明するよ」

男は手で合図して、自分の隣に女を呼び寄せた。ベッドの脇にある丸椅子に二人並んで腰掛け、「さてと」襟を正し、気を落ち着かせるようにして長いため息をついた。

ジュンヤは首をゆっくりと右に動かして、彼らの顔を初めてまじまじと見た。柔らかい顔つきをしている。特殊任務隊のヤツらとは明らかに違う。

「俺はダニー、で、こっちがレナ。ここは俺たちの研究室。表向き、ここではDNAの採取とその分析をしてる。あちこちの研究室や研究所から実験体や病原体の細胞が送られてきて、それを俺がまずDNA分析機にかける。そこから取り出したデータを、レナが政府のデータベースと照らし合わせて、結果を依頼主に提供してるんだ。

でも、それはあくまで表向きの話。実際に研究してるのは“コード廃止論とその問題点”あ、これ、内緒ね。見つかったらホントにヤバいから」

「補足するとね、この政府ビル内にはコード所有者とNO COD Eが入り交じってる、その問題点の追求が課題なんだ。市民にはコードを一元的に付与させているのに、なんで政府機関にNO CODEが交じっているのか。そもそも、コードは何のためにあるのか。それを知るために、あちこち違法にデータベース探りまくってるってわけ」

「で、何で俺を助けた」

「そこなんだけど」

レナはにやつと嬉しそうに笑って、話を続ける。

「実は、さつきダニーも言ってたように、特殊任務隊の動きを追ってたんだ。ヤツらは政府総統の直轄だから、その動きを追ってけば、政府の真意がわかるんじゃないかと。そしたら、噂で任務隊のメンバーが一人増えたような話を聞いてね。外部の人間だ、とか。興味湧いて、小型偵察ロボ巡回させてたんだよね。やっと見つけたと思ったら傷だらけ、その上、パメラが死んだとか言うじゃない。これは面白いことになったな、こいつは何者なんだろうって。いやあ、苦労したわよ。見つからないように浮遊担架引つ張ってさ。周辺のセキュリティは切らなきゃならないし、重傷ですぐに手術が必要みたいだし。ウチらが見つけなかったら、多分あんた相当やばかったよ。その後警備員が駆けつけて、血の跡が途切れてるってえらい騒ぎになってたみたいだしさ」

「だからって、勝手に人の遺伝子解析するってのは」

「それに関しては、ゴメン。研究の一環っていうか。正体を探ろうって思ったらすぐにデータベースと照合するのは、もう、研究者としてのサガと言いますか。……でも、おかげであんたの正体わかったしね。“コード廃止論者ウメモト博士”の近親者、恐らくは孫、かな。息子は確か、反政府組織のリーダーだったはずだから、覚えはあるよね」

「いや、初めて聞いた」

ジュンヤはそつと、枕の上で視線を天井に戻した。

また、知らないことが一つ判明した。どこかで取り残されてしまったような疎外感が、また胸の中にくすぶり始めた。父方の祖父が政府の人間、母方の祖父はディックに殺された。……訳がわからない。一体過去に何があったのか、順立てて説明してくれる人など、誰もいやしない。

「親父が、自分の家族のことを話した事なんて、一度もなかった。俺が生まれた頃には、その何とか論について語る人間なんか、周り

には一人もいなかったよ」

目を閉じて、ゆっくり息を吐き出した。

祖父に当たる人物がもし、本当に“コード廃止論者”なのだとして、その発覚を恐れ、シロウが何も語ろうとしなかったというのは想像に難くない。メイシイも、あの時たまたま耳にするまでは、父親をデイックに殺されたことなど話してはくれなかった。時間の問題というヤツなのか、それとも信頼されていなかったのか。後者だったとしたら、どう受け止めればいい。そうやって、ジュンヤはまた、自分の中で答えをどんどん悪い方向へと持って行ってしまっ

「でさ、そのウメモト博士のことも、私らは研究してるわけよ」

レナはジュンヤの憂いに関係なく、また話を進めた。

「彼はね、論文を直に政府総統に渡したらいいんだ。普通、そういうのはきちんと文書受付されて、政府のメイン・コンピューターにデータ登録されるはずなんだけど、それがどこにも見当たらない。形跡のない論文が原因で、ウメモト博士は流刑された。妻と幼い息子を残して、ね。私らとしては、そんな数奇な運命を辿ったウメモト博士の血縁者が目の前にいるだけで大興奮なんだよ。しかも、特殊任務隊絡みで政府に乗り込んでくるなんて！ ねえ、どうやって政府ビルにやってきたの。理由は、方法は」

彼女の目は輝いていた。無邪気な子供のように、自分の好奇心に忠実なのだ。自分より恐らくは十以上離れているだろう、この二人怪我の手当、祖父の存在、コード廃止論。知らないことを丁寧に教えてくれる彼らを、信用してみようかと、ジュンヤは思い始める。リーのように、何かを求めなくてもない。自分を助けたところで、リスクばかりで全く利点のなさそうなの男女はどこまで情報を握っているのだろうか。

「話してもいいけど、俺のこと、動けるようになるまでもう少しだけ、かくまってくれるかな」

申し訳なさそうに呟くジュンヤに、ダニーとレナは「喜んで」と満面の笑みを浮かべた。

医療員が散らばった机の引き出しから、ダニーは一本の注射器を取り出した。ビニルをビリビリと破ってそれを取り出し、針を上に向ける。

「かくまってやるのはいいとして、居場所がバレたとき、君が動けないのは困るからな。注射、打つとくよ。治癒促進剤。大丈夫、正規ルートじゃないけど、真つ当な物だから。政府お墨付きの製薬会社で作ってるヤツ。横流ししてもらってんだ」

アルコールを染みこませた脱脂綿で、ジュンヤの右上腕部を拭き取り、一刺し。

「これで大丈夫。少ししたら身体が楽になってくるはずだ」

ベッドの上に横たわったまま、ジュンヤは大きく瞬き、深呼吸した。頭上の照明は、眩しすぎない程度に明るく、室内を照らしている。

「今、何時。俺、あれからどれくらい気を失ってたの」

そうだなあと、ダニーは使用済みの注射器を医療用と書かれたゴミ箱に捨て、白衣の袖をまくって、腕時計をじっと眺めた。

「あれから、十時間は経ってる。今は夜中の二時だ。何、心配することはないって。政府のヤツらも夜中は動かない。俺たち研究者は昼夜関係無しだけだな。名前、ちゃんと聞いてなかったよな」

ジュンヤの顔からゆっくりと人工呼吸器を外し、腕に刺していた点滴をそつと抜く。絆創膏で止血し、腹部の包帯に緩みがないかを確認しながら、ダニーは優しそうな大きな目をジュンヤに向ける。

「……ジュンヤ。ジュンヤ・ウメモト。その、ウメモト博士の孫かどうかは自信がないけど、恐らくそうなんだろうなっていうのは、流石に話の筋から大体推測できるよ。こんな俺でもね」

「推測できる、じゃなくて、間違いないから。データがそう言うてる」

横からレナが口を出した。

「それにしてもさ、ホントにどうしてあんたがここに？ 普通に考えたら簡単に侵入できるわけじゃないよね。確かウメモトの息子の方はネオ・シャンハイにいたはずだけど」

スツと立ち上がり、ごちゃごちゃに物が詰め込まれた棚の中から、レナは無造作にガムの容器を取り出した。眠気覚ましのミントガムを口に入れ、むしゃむしゃと噛みながら、彼女は定位置、端末が置かれたデスク前の椅子に、でんと腰を下ろす。端末のディスプレイには、ジュンヤのDNA解析結果画面が映し出されていた。

「ジュンヤ、か。変な名前。ウメモト博士もキョウイチロウとかいう、独特な名前だったな。日系人の名前は理解できないや。…まあ、それはさておき。ね、教えてよ」

視界から外れた彼女の、ジュンヤのことを考えてか興味本位でか、嫌味無く訊いてくる声に、ジュンヤはため息混じりでゆっくりと応えた。

「俺は、廃止論とやらで政府をどうこうするためにここに来たんじゃないよ。結果的にそういう立場になるわけだけど、元はと言

えば、俺は単に、騙されたんだ」

「騙された。誰に」

「ティン・リーだよ」

ダニーとレナの顔色が変わった。

「リー？ 聞いたことない名前だな。何者なの」

「政府の……まさか、知らないのか」

首を傾げあう二人の様子から推測するに、リーは自らの正体を公表していない。自分が自由に動き回るためなのか、正体を知られて狙撃されるのを恐れてなのか。その後、どう話すべきか少し考え、ジュンヤは話題を切り替えた。

「今、ビルの外でどういことが起こっているか、情報網は」

「メディアはもちろんだけど、メイン・コンピューターにアクセスして、各ドームの裏情報を個人的に引っ張ってきたりはするよ」

「じゃあレナ、ここ数週間、どこで何が起こったか、大体掴めてる？」

「まあね」

キーボードをカチカチと叩き、レナは画面の端に別ウインドウを立ち上げた。

「ネオ・シャンハイでの反政府組織の暴動、それから、昨日のE.Uドームでの爆破事件。特に爆破事件はあちこちで話題になってる。なんてったって、生活に直結してくるからね。爆破自体、誰が行ったのか不明。あそこは反政府組織の巣窟だから、政府側の攻撃つても考えられるけど、それは今までだつてそうだったわけだし、なぜ今なのかという点においては、生産拠点であるE.Uドームを攻撃する理由に欠けるんだよね。……ジュンヤはまさか、事情、知ってるの」

ギイと椅子を鳴らす音。二人の身体が、自然にベッドの上のジュンヤに向けられる。しんと狭い室内が静まりかえり、端末の起動音と、点滴の落ちる音が響いた。ゴクリと、ダニーが唾を飲み込む音がして、レナのガムを噛む音が止まった。

ジュンヤは、思い立ったようにこれまでのことを話し始めた。

「ドームを襲撃したのは、特殊任務隊だ。標的は、一人の科学者とその娘。俺は、その本当の目的を知らないまま、事件に巻き込まれたんだ。爆破の混乱に乗じて、彼女を連れてくるように指示された。それが彼女を救うのだと、信じ切っていたんだ。だけど、結果は……」

「ねえ、その科学者って、ディック・エマード博士？」

またレナが口を挟む。

「ウメモト博士の息子はネオ・シャンハイで反政府組織を立ち上げた。指名手配中のエマード博士が、その組織にいたらしいことが最近明らかになって、それで暴動が起きたんでしょ」

正確には暴動ではないがと、ジュンヤが口出しするまもなく、

「で、その後何らかの手段を使ってE.Uドームへ渡り、そこでも事

件が起きた。……そういうことだよな」

レナは興奮気味で、またフラフラとベッドの側まで歩いてきた。何度も嬉しそうにうなずき、両拳を上下に振って、にやにやと顔を綻ばせる。

「繋がった、繋がった。いい感じ、いい感じ」

「何がだよ」

「ダニー、あんた、理解度が足りないね。いい、繋がってんだよ。全ての事件が繋がってる。ね、ジュンヤ、あんたと一緒にいたエマード博士、何者だか知ってるよね」

唐突に質問を振られ、ジュンヤは目をパチクリさせる。そんなの知っているわけない。秘密主義のあの男が、自分の正体について口をついたのは、後にも先にも一度しかない。出発前の飛空艇の食堂で、たまたま立ち聞きしてしまったあの時だけだ。

寝たまま口をもごもごさせるジュンヤに、レナは嬉々として両腕を広げて見せた。

「彼は“NO CODEの星”と密かに呼ばれていた人物だよ。NC出身ながら、機密プロジェクトに参加、その頭脳は政府内でも群を抜いてたつて聞いたこと、あるでしょ。結局は政府を裏切る形でいなくなってしまったけど、今でも結構尊敬してる人がいるくらい、偉大な人物なんだから。その彼が起こしたことなら納得も出来るな。そうだよ、だから政府は攻撃を仕掛けたんだ。エマード博士がEUDームに行ったから。繋がった、繋がった」

声が大きいぞとダニーが注意するくらい、レナのテンションは上がっていた。しきりに手を上下させて、まるでアルコールが入ったように、酷く興奮しているのがわかった。

それにしても、意外だ。ジュンヤはレナとは裏腹に呆然と立っていた。尊敬、偉大、そんな言葉がディックに対して向けられていたなど、思いもしない。寡黙で冷酷で、得体の知れないだけの男だったはずだ。政府では天才と呼ばれていたらしい、そうシロウに聞いたことはあるが、それだけだ。



「俺は、彼のことを、残忍な悪魔だと、殺人鬼だと」

ゆっくり身体を起こした。重かったからだだが、注射の効き目が出てきたのか、少し軽かった。

「誰が、エマード博士が？」

眉をひそめるダニーに、ジュンヤは強くうなずく。

「それは誤解だよ。彼はそういう人間じゃない。少なくとも、理由無く誰かを殺すなんてありえない。NCC、NO CODE CHILDREN養成施設では、特殊部隊にいたそうだから、一部で噂があるだけで。まあ、何件かNCC以降にも事件を起こしていたらしいけど、そんなことで人を計るのはどうかと思うよ。第一、ジュンヤ、君は長い間に一緒に暮らしていたわけじゃない。それでも彼が悪魔だと言い切れるの」

「それは」

また、ジュンヤは口を濁す。

「彼は不運なだけだよ。詳しいことは知らないけど、政府総統に目を付けられる理由があったらいいんだ。もしかしたら、その理由の一つに、コード廃止論があったかもしれないって、……これは憶測だけだね」

「ちよつと、いいかな。さつきから廃止論、NO CODEって。もしかして、ディックにはコードがないってこと？ 政府の間だったんだろ。なのにコードがないって、どういう」

「ジュンヤ、これは一般市民には内緒のことなんだ」

顔の前に人差し指を立て、反対の手でポンとジュンヤの肩を叩いて、ダニーは声のトーンを少し低くした。誰もいないなど、廊下の気配を覗いた後で、ジュンヤだけに聞こえるよう、耳元でそつと囁いた。

「政府組織の中には、コードを持たない人間が紛れ込んでる。彼らは、君みたいに反政府的な立場からコードを持たないんじゃない。コードを持ってない存在なんだ。エマード博士もその一人ってことだよ。そういう子供たちが戦闘員として訓練されていた組織に属して、

頭角を現し、科学者として研究に参加することになった。だから、相当辛い思いもしたし、相当苦しんできたはずなんだ。俺たちも、たまたま廃止論を研究していく中で見つけた事実んだけど、エマード博士の義父は、コード廃止論を唱えたウメモト博士の弟子に当たるとるらしい。博士自身がそのことを知っていたかどうかはわからないけど、政府を抜け出して君の父親の所に逃げ込んだのも、そういう理由があったのかも知れないよ」

唐突過ぎる。ジュンヤは丸くした目をしばたかせた。

反政府組織の人間でなかった彼が、コードを持たない、いや、ダニーの言葉を借りるなら『コードを持ってない』存在で、祖父キヨウイチロウの弟子に育てられた。その伝手でESと父シロウの存在を知り、ネオ・シャンハイへやって来た。確かに、辻褄は合う。びっくりするくらいぴたっと当てはまる。それは、リーが話した写真の話の比じゃない。

ジュンヤは思い出したかのように、ズボンのポケットをまさぐった。中から折れてシワシワになった一枚の写真を取り出し、ベッドの上に広げて見せる。

「これ、どう思う」

次々に情報を与えてくれる彼らを信用し、彼は今まで第三者に見せたことのないそれを、二人につきだした。

随分レトロな物をと、ダニーが受け取る。島の山と箱庭の写真だ。所々、色がかすれて黄ばんでいる。

「印画紙なんて久々に見たよ。よく保存してあったな」

今時、こんなモノを持つてるのはよっぽど骨董趣味なヤツか専門家ぐらいだよと、ダニーは付け加えた。実際、ネオ・シャンハイの地下室に飾っていた写真だって、どうせ撮るならと、シロウが無理矢理、ドームで一番の老舗業者にお願いしたのだった。

「こんなに自然が映ってるなんて、大戦前？ だとしたら、逆に保存状態がよすぎる」

「裏、見て」

ジュンヤに言われたとおりをめくると、文字が。

「何か書いてある。『もし、君がドームを抜け出す手段を得たら、僕と島で会おう。写真に写したあの小屋で待っている。自由を勝ち取るんだ』なにこれ」

レナが覗き込んで棒読みし、首を傾げた。

「これだけじゃ、何を言いたいかわからないよ」

「待ってレナ、こつちには日付、『君の未来がこの島と繋がってますように 四七六年三月 ティン・リー』……ジュンヤが言っていたりって、こいつのこと?」

こくりと、ジュンヤは神妙な面持ちで、深くうなずいた。

「日付は今から二十三年前。俺が生まれるより三年も前のことだ。リーは死んだ親父の親友だと言って、突如俺の前に現れた。そして、ディック・エマードがいかに危険な人物なのか、自分が親友の息子をどれだけ救いたいと思っているかを切々と説いて、俺はすっかり、彼に言いぐるめられてしまった。ディックは彼を信じるなど言っただ。俺は、どうにかしていた」

「どうにかって?」

レナが合いの手を入れる。

「二人は元々知り合いだったらしく、互いにそれらしいことを口走っていた。よくよく考えてみれば、そんなのおかしいんだ。リーはどう見積もったって、三十手前、俺より少し年上くらいだ。政府にいた七年前に、ディックと確執を持つような関係になれたかどうか。それに、親父と写真をやりとりしたという二十三年前に至っては、どう考えても幼児だろ。それで親友? ありえない。彼は自分に『老い』も『死』もないと言ってはぐらかした。そんなこと、科学的に有り得るのか?」

ジュンヤは真剣そのものだった。必死に自分の考えを整理しようとしているのが、傍目にも見て取れた。しかし、事情の知らないダニーたちにとって、ジュンヤの話は簡単に理解できるようなものはなかった。

「聞くまでもなく、老いや死は誰にでもあるだろ。その、リーって男の言ってることは、どれだけ信用できるんだ」

当然の疑問に、ジュンヤはまた表情を曇らせる。

「冷静に考えれば、おかしいって判断できたはずだ。でも、俺はリ

ーを信用してしまった。……目の前で、喉元撃ち抜かれ殺された男が、数日後に何食わぬ顔で目の前に現れたとしたら、どう。老いることも死ぬこともない、あれこそが神なんだと、思わせるに十分な説得力はあつたけどな」

つうと汗が頬を伝い、ジュンヤは病衣の袖でぐつと拭った。全身から染み出た脂汗で、全身が知らず知らず、不快なほどに湿っている。

不安になっていた。自分を助けてくれたとはいえ、誰にも話したことのない事実をどんどん話して、それでもし、この二人が敵だったら。今にもリーや特殊任務隊のヤツらが、『とうとう本音が出たな』と扉を開けるかも知れない。体力の回復していない自分は、逃げる事が出来ない。また何か、恐ろしいことに巻き込まれるかも知れない。恐怖心が、ジュンヤの胸の中で膨らんでいく。

ダニーとレナは、しばらく難しそうな顔でジュンヤの話を聞いていたが、そのまま黙りこくってしまった。何を考えているのか、じつと写真を見つめたり、頬や首筋を触ったり髪をかきむしったり。

ジュンヤは二人の動向をじつと見つめ、彼らの心中を探る。敵じゃない、味方だと、何度も心の中で唱えながら。

「老いにくい身体に関しては、いくつか方法があるのは知っている」

沈黙を破ったのは、ダニーだ。

「自分の遺伝子を他生物の細胞に移植培養して、損傷を受けた箇所と同じ部品を形成し、移植する。皮膚がただれば皮膚を、指が無くなれば指を作る。遺伝子レベルで本人のとはほぼ同等のモノが作れるわけだから、拒絶反応は少ない。ただ、この方法だとまるっきりのオーダーメイドになるから、傷害によって欠損した場合くらいにしか使われない。遺伝子レベルで老化しにくい身体を作る方法もある。老化の元となる活性酸素を作りにくい遺伝子構造へと変化させることで、寿命は延びる。寿命を平均の七十五歳から一気に百歳程度まで引き上げることも難しくはないらしい。だけど、結局老化ス

ピードが緩やかになるだけで、細胞の老化以外、例えば持病があったり、極度の体力消耗があったりするような場合には、あまり効果がない。同様に、移植や美容整形で外見的に老化を遅らせる方法をとっている人も多いが、これはこれで根本的な解決にはなっていない。ジュンヤが言うように、本当にリーという男が目の前で殺され、生き返ったように見えたのだとしたら、最初からその事件はなかったのに、あったように記憶を書き換えられたと考えるのはどうだろう

「それはない」

「どうして」

「当事者の他に、目撃者がいる。俺と、あと二人。記憶を書き換えるのだとして、どうやって？ 遠隔操作で簡単に、人の記憶って変えられるもんなの」

今度はダニーが黙りこくった。

「ねえ、ちよつといいかな」

男二人が無言になったところで、レナがスツと手を上げる。

「私、考えたんだけど。遺伝子いじったり、身体いじったりして肉体に負担かけるよりも簡単に、長生きする方法。ネットハッカーで、偶にやるヤツがいるんだけど、意識を電子化させて、データベースに直接侵入するヤツ、応用できないかな」

「何それ」

「……聞いたこと、ないかな、ないよね。ダニーは分野が違うもんね。そもそも、電子の世界って一とゼロの集合体じゃない。人間の脳も、ニューロンが電気信号を発することで意識を形成してる。つまり、その電気信号を、一とゼロに変換して電子の世界に送り込むわけよ。私たちが普段モニタやディスプレイを通して得ている情報を、感覚として脳に直接取り入れる。精神に異常をきたす場合があるから、推奨はされないけど、実際そういうやり方でメイン・コンピュターに侵入してる人がいるのは知ってるよ。同じ方法で、記憶や感覚をデータ化させてサーバーに保存し、別の身体にダウンロード

ード出来るとしたらどう。その身体がもし、その人のクローン体であつたとしたら、生き返つたように見えるんじゃない？」

ペらペらと流暢に語るレナの言葉の一つ一つが、ジュンヤを刺激した。アイディアはとても奇抜で、現実味がないはずなのに、なぜかしつくりくる。それまで曇っていた顔が、少しずつ晴れていく。

「……それだよ」

「ね、でしょ」

「だな、それだ」

狭い室内で、三人、互いにうなずきあつた。

「でもジュンヤ、そいつはクローン体なんて持ち得るような、たいそうな人物なわけ？」

「とんでもない仮定に納得したあとで、レナは唐突に訊いてきた。

ジュンヤはもう、悩みはしなかった。これまで一人悶々と悩み続けてきた全てがさっぱりと解決していくのに貢献した二人を、疑おうとは微塵も思わなくなっていた。

「ティン・リーの正体は、政府総統。この世界を支配している男を、俺は敵に回してる。それでも、やっぱり二人は俺に協力してくれるのか」

## 72・地下施設の秘密

目的地は島の高台にあった施設、恐らくあれは天文台、空を観測していたに違いない妙な建物だった。ラムザの残したファイルによると、その地下にある冷凍庫とやらが重要な鍵を握るらしい。攻め崩すにはまずそこだと、ディックは言い放った。

特定した施設の座標を確認し、地下冷凍庫内部に侵入する準備を急ぐ。一度島に行ったことのあるハオルドを含め、キースを中心に五人、ディックが急ぎプログラム変更した物資転送用の転移装置を使って現地に飛ぶのだ。全身白の冷凍貯蔵庫用作業着で着ぶくれ、身動きが取りづらいのを一番嫌がったのは、年長者のハオルドだった。

「何が待ち受けてるかもわからず飛ぶ上に、この装備じゃ身が持たないな」

苦笑する彼に、キースはあくまで厳しい言葉で臨んだ。

「今は体裁気にしてるような状況じゃないはずでしょ。とにかく急ぎ飛んで、片を付ける。ただ、気がかりなのは目的、何を壊しに行くのかだ。博士からの事前情報は期待できないのかな」

「あー、それは無理だ。あいつの考えてることなんて、誰にもわかりやしない。わかる必要もない。……まだ味方の内は、黙って指示に従っておくのが身のためらしい」

視線を落とすハオルドを尻目に、キースは先頭を切って、床に埋め込まれた転移装置の円形へと足を進めた。既にその中央部には、武器の入ったバッグが人数分積まれている。

「時間がない、飛ぶぞ」

フェイスガードをして、キースはスツと右手を挙げた。同時にカウントが始まり、装置から離れるように警告する音声、輸送センサー各所に響き渡った。



島は、あいにくの嵐だった。暦は九月、丁度旧日本列島付近は台風シーズンを迎えていたのだ。

横殴りの風が、到着したばかりのハオルドたちに容赦なく叩き付けてくる。着ぶくれした身体は、簡単に煽られた。丘の上に作られた白壁の施設まであと五十メートルほどという地点ではあったが、自然の猛威を知らない彼らにとっては、とても耐えられるようなものではなかった。幸いにも風のみ、どんよりと曇って今にも雨粒の落ちそうな空は、彼らが施設の入り口まで辿り着くのを待ってから、勢いよく降り出してきた。窓から覗き込むようにして外を覗い、その荒々しさに、キースは目を丸くした。

「何度かE.U.ドームの外側に出たことはあるけど、こんなに激しいのは初めてだ。一体何が起きてるんだ」

「まあ、雨に打たれなかつただけでも良かったと思おう。ずぶ濡れになったあとに冷凍室に入ったら、カチンコチンだからな」

ハオルドにとって、その施設に入るのは二度目のこと。ふと、ドイツとここを訪れたあの日のことを思い出していた。

相変わらず、無人の施設に不自然に空調が効いている。今もこの施設が動いている証拠だ。太陽光発電機のメーター、以前は気にも止めなかつたが、施設に入っつてすぐ、壁の裏側に見つけた。通路を進み奥の機械室には確か、多くの端末とモニターがあった。転移装置はあの部屋だ。

「どこかに、地下へ通じる穴があるはずだ」

荷物を置いて、ハオルドは、施設内くまなく探すよう指示を出した。

キースが引き連れてきた三人は、元々ドームの戦闘員らしく、体力自慢ばかりだ。ウツドは体格がよく肉弾戦向き、アレックスは武器の扱いに慣れていて、ベンは見た目細く頼りなさ気だが持久力があり銃撃戦が得意だという。おかげで、いちいち動いては息の上がるハオルドとは裏腹に、他の四人は重装備だろうがさくさく動く。

それぞれ初対面だが頼もしい。キースは特に、いつになく張り切っていた。もちろん、今まで来たことすらないところにワープしたこともその一因だろうが、やはり、自分が何かの役に立つのだという気持ち、そしてディックへの尊敬の念が強まったことも、関係があるのだろう。

壁、床タイルの一つ一つを丹念に調べていく。どこかに不自然な切れ込みがないか。スイッチはないか。念入りに念入りに。

「あつた！」

調べ初めて十五分前後経ったところで、ベンが手を上げた。他の四人が慌てて駆け寄ると、廊下にあつた配電盤が壁ごとぐるっと半回転し、大人一人がようやく通れるような縦長の穴がぼっかりと空いていた。まるで推理小説張りだなど皆で苦笑いしたところで、キースが再び指揮を執った。荷物から懐中電灯を取り出し、穴を照らす。階段が更に地下へと続いている。

「行くぞ」

階段の幅は約一メートル。装備さえなければ簡単に通れそうな幅だが、加えて銃器の入った荷物もあり、降りるのがやっとだ。照明もなく、足元も危うい。ゆっくり慎重に、五人は地下を目指した。

しばらくして空気の流れが変わり、ようやく地下室の入り口へと到達する。部屋の内部に足を踏み込むと、自動で照明が付き、視界が急に明るくなった。

辺りを見回す。

コンクリートで覆われた室内に、配管、気圧調整用バルブ、室温管理用パネル、監視モニターとメンテナンス用の機材。それから、くくり付けの棚には、自分たちが今身に着けているのと形が似た冷凍貯蔵庫用作業着、防寒用ジャケット、フルフェイスヘルメットに酸素マスクとボンベまである。

「誰かがここで、何か作業をしている証拠だ」

特殊な形をした冷凍貯蔵雇用のマスクがふたつ、棚に並んでいた。キースがその一つを手に取り、ふと、製造ナンバーを見る。

「随分新しい。495-03-RS3AT5785……。四九五年三月製造、 たった四年前だ」

「待って、こつちも。だいぶ新しいぞ」

それぞれが機材や防寒具の製造年を確認し、呆然とした。

「これってつまり、今もここを利用して人間がいるってことだよな」

キースに言われるまでもなく、この施設は現役だのだと、ハロルドは知っていた。前回だって、なぜか人がつい最近まで作業していたような形跡があったし、機器類だって普通に動いていた。野菜の監視がどうの、アレはフェイクだったのかも知れない。本当はここ、地下の施設を隠すための。

作業着類の置かれた棚のすぐ側に、扉が一つ、半開きになっている。更にその奥、頑丈そうな扉が。

五人は揃って生唾を飲んだ。

「情報、結局何もなかったな。こんな状態で行って来いだなんて、ディックのヤツあんまりだぜ」

口から出たセリフとは裏腹に、ハロルドの心には微塵の余裕もない。その場に立って、震えを抑えるのがやっとだった。

おのおの、荷袋から武器を取り出し構える。凍傷にならないよう再度装備を見直し、キース先頭に奥の扉へと進んでいく。金属製の扉の前で一度立ち止まり、仕掛けがないか確認。銀色に鈍く光った扉の周囲は、向こうからの冷気が伝ったのか、ひんやりしていた。

冷凍庫にあるのは大事なものだと言う割に、電子錠は解除されている。扉横のパネルにOPENの文字、誰かが操作して開けた証拠だ。

「まさかと思うけど、中身、無くなってないよな」

ウッドが震えた声で言う。

「いや、畏かも知れない。ここに俺たちが来るのを知っていて、誰かがわざと開けておいた可能性も」

「それはないだろ。第一そんな情報、どこから」

アレックスとベンも、互いに自分の考えを言い合っが、答えなどでない。全てはこの扉の先にあるのだ。

「待て、難なく開きそうだ」

不審に思いながらも、キースは円形のハンドルを両手で慎重に時計回りに動かしていく。ギギ、ギギと金属の触れ合う音が地下に響いた後、ガゴンと気持ちのいい音が一度。扉がゆっくりと開いた。

冷気が地下室に一気に流れ込む。身体に絡みつくよう床を這い、足元を震えさせ、地下全体を冷やしていく。すっかり防寒着に身を包んでいても、自然に身体が震えた。薄暗い冷凍室内に目が慣れてくると、ぼんやりと青白い光が、大量に並んだ銀色の大きな何かを照らしているのがわかった。それが何か、先頭にいたキースが確認しようかと手を伸ばしたそのとき、ハロルドの携帯端末がメッセーヂの到着を告げる。

慌てて引き返し、ハロルドは作業着のポケットに突っ込んでいた端末の画面を確認した。送信者はディックだ。

「……冷凍庫に眠るTYPE-Cを全滅させる？ どういう意味だ」  
ハロルドがメッセーヂの内容を読み上げているその間に、キースは見てしまっていた。奇声を上げ、立ちくらみ、それをウッドとアレックスが慌てて支えている。銃がバラバラと小脇からこぼれ落ち、その一つは冷え固まった床をコロコロと気持ちよく回転しながら、その銀色に当たって止まった。

「ハロルド、見る！ 人だ、人が眠ってる！」

ベンのひっくり返ったような声に急かされ、彼は慌てて冷凍室内に戻った。

冷凍室で人が眠ってというベンのセリフから、ハロルドは氷の墓を連想していた。どこかで聞いたことがあったのだ。過去に病気で寿命で死んだ人間が、未来の技術革新を夢見て、冷凍されたまま生き返るのを待っていると、それは、実に馬鹿げた昔話だった。地球歴に入っても、人間が生き返るなどということはあり得ない。死は全ての終わりを意味するものであって、それを受け容れられない

など理解不能だ。そういえば、宇宙旅行を夢見ていた時代、何万年も先に宇宙船を飛ばそうとして、ワープに耐えうるため宇宙飛行士をコールドスリープさせようとしていたという話も聞いた覚えがある。宇宙に行くどころか、第三次世界大戦が勃発して核に冒され、本当はどうだったのかなど、誰も知る由がないが、人類はドームに閉じ込められた。火星や月の開発は何か進んだものの、核汚染されたとされる地球から宇宙船を使って外宇宙へ飛び立つというのは、ほぼ不可能だったのだ。

「人が、眠ってる？ TYPE-C？ 何を言って」

ぶつくと眩きながら、ハロルドは恐る恐る、冷凍室内に整然と並んだ大きな銀色の筒の一つを覗き込んだ。霜で覆われた強化アクリル部分をそつと手袋で撫ぜると、よりはっきりとその中が見えた。確かに、人間だ。鼻筋の通った綺麗な顔立ちをしている、黒髪の東洋人の男。やけに見覚えがある。

また、ベンが奇声を上げる。

「同じだ、同じ顔が」

「何だって」

足をもつれさせひっくり返るベンを横目に、ハロルドはその隣にあった筒の中を同じようにして覗き込む。そこには、

「同じ、だ」

両脇に、同じ顔をした人間が眠っている。

冷凍室内に並んだカプセル状の銀筒、空のものとそうでないもの、中は全て同じ。

「TYPE-C、これが」

恐ろしさのあまり、喉が渴いた。冷気を吸い込まぬよう被ったフルフェイスヘルメットの下、嫌な汗を掻いているのが自分にもわかった。

ディックの言葉通り、よく見れば筒の上部に“TYPE-C”の文字が刻まれている。何がCなのか、困惑するハロルドの背後で、第三者が物音を立てた。

「何をしている」

しわがれた声に、全員の目が冷凍室の入り口を向く。黒い小さな影と、大きな影。

キースには見覚えがあった。あの、地下空間で戦った老人と巨人だった。

咄嗟にハオルドはエネルギー銃を構えた。見たこともないほどの巨体に、ハオルドはすっかり圧倒されてしまっていた。銃を構えるのが精一杯で、銃弾を放つまでに至る自信など毛頭無い。

緊張感が当たりを支配し、怯えがスツと消える。腰を抜かしていたキースも、ガタガタと震える足を踏みしめて黒い二つの影を睨み付ける。他の三人も、それぞれに体勢を直して、銃口を半開きの冷凍室入り口に向けていた。

「……D-13の差し金か。こんな事になっているとわかれば、わざわざビルから遠隔操作して鍵を開けておくこともなかったのじゃない」

老人だ、思うと少し力が抜けた。つまり、大きい方はともかくとして、小さい方は確実に戦闘要員じゃないというわけだ。

銃を持つ腕の力を弱めたハオルドに、キースが横から忠告する。「油断するな。ヤツらは、政府の特殊任務隊。小さい方はスウィフト博士、NCCにも所属していた科学者。もう一人はその実験体、エドだったかな。地下爆破事件の際、死んだのだとばかり思ってたが」

キースが一步前に出た。銃口は相変わらず二人に向けたままだ。「名前を知っているということは、あの時地下にいた人間の一人か。」

D-13、ディック・エマード博士はどうした」

「ここにはいない。俺たちにもわからない」

「わからないとは滑稽じゃ。味方にも手の内を見せないという意味か。すると、ここに何かがあるか知って来たわけではなさそうじゃの」  
スウィフトのしわがれ声が、冷凍室に響く。当たりをぐるっと見回し、まだ何も起きていないことを確認すると、悠々と開け放たれた冷凍室の扉から内部へと足を踏み入れた。

彼の問いにまともに答えようなど、キースは全く思っていないかつ

た。あの地下空間でディックをいたぶっていた無言の巨人が、いつ自分たちに牙をむくかわからないこの事態、更に敵に情報を提供するようなことだけは避けたかったのだ。彼は全身からしみ出る汗でサウナ状になった防寒着の下、自我を保つだけで精一杯の緊張感に押し潰されそうになりながら、じつと間合いをはかった。

次第に目が慣れ、相手の姿がくつきりと見えてくる。全身、冷凍貯蔵雇用の防護服、胴体部分が防弾ベストのように補強されているところから見ても、作業着と言うよりは防具という方がしっくりする。最初から戦闘モードだと視覚から訴えられれば、いくら予期していたとはいえ戦闘向きとはとても言い切れない自分たちの装備に不安が募る。銃で撃つたとしても、相手に通用するかどうかもわからない。

どうするか、ハロルドとキースが考えあぐねている際に、背後で誰かが動いていることに気づいた。ベンとウッドだ。まるで地を這うように、等間隔に並んだ銀筒の合間を縫って前方へ進んでいる。時間を稼がなければ。無意識的に、二人は互いに顔を見合わせうなずき合った。

「まさかとは思うが、ここにあるのはリーのクローン体、か」  
それは一つの仮定だったのだ。同じ顔をした東洋人、コールドスリープ、保存、ひた隠し、それから連想できるものは少ない。

「こんなところで何かが起きるとは、思いもせんかったがの。半月前、一体を搬出して以降、危機感がなかったわけではない。じやが、敵に場所を突き止められるとは。近頃、E.U.ドームから頻繁にマザーへのアクセスがあるらしいとは聞いておった。恐らくマザーから情報を得たんじゃろうな。あのAI、一体何を考えておるのか」

恐る恐る声に出したハロルドに、スウィフトは驚き声を裏返らせた。

「ということは、ディックの言ったとおり、リーは死んでない。身体を変えて今も生き続けている。……そうか、だから撃たれても笑



って」

とんでもない考えだが、辻褃は合った。ハロルドはわざと大きな声で、大きさに身振り手振りする。老人と巨人の注意を少しでもこちらに向けておきたい。ベンとウッドが攻撃を仕掛けるまでは。

「ん、もしやお前は一度島へ来たことがある人間か。閣下が銃殺される現場を目撃したと。ヤツめ、面白い面子を寄越したもんじゃ」  
クククツとスウィフトは不敵に笑った。ヘルメットの下、表情は全く読み取れない。

向けられた銃口にもものともせず、またじわりじわりと歩を進めるスウィフトの動きに焦る。引き金に当てた指を動かそうとして、キースは初めて異変に気がついた。撃てない、のだ。

「エネルギー銃などここでは役に立たんよ。マイナス一〇〇度を超える超低温じゃぞ。高濃度エネルギー溶液の凝固点はマイナス八十五度。ここではボトルが凍結して、撃つことさえままならんはずじゃ。そんなことも知らず、愚かなもんじゃの。エドモンド、これ以上外気を入れられては困る。ドアを」

小さな身体を捻って、スウィフトが突然、巨人に指示を出す。

「まずい、キースが慌てて叫んだ。

「や、やめる。閉めるな！」

「外気を取り込めば、室内の温度が急速に上昇する。そうすれば、せっかく保存していたTYPE-Cに悪影響を与えてしまうではないか。こんな事で全てを失ってしまうわけにはいかんのじゃよ。エド、早くせい」

スウィフトに促され、大男はぐるっと向きを変えた。その動きはどこかぎこちなく、力ない。冷凍室のドアを閉めようと、エドモンドはぐつと手を伸ばした。

ふと、キースの視界に、ようやく入り口の両側にそれぞれ迫ったウッドとベンの姿が。

「今だ、行け！」

キースの声を皮切りに、ウッドは身を屈めたまま助走をつけ、大

男に横から体当たりした。左半身にダメージを受けた巨体がぐらりと揺れ、大きくドアの正面からずれる。完全に入り口のドアがフリーズになった。

「ベン、走れ、発電機をぶち壊せ！」

「わかってるよ！」

ベンが開け放たれたドアの向こう側へするりと抜けた。ぐっと親指を立てて走り去る彼に、キースはガッツポーズで応える。

あとは、特殊任務隊の二人をどうにかすれば、目的が達せるはずだ。

体当たりされた巨人は、よろめき、壁により掛かって、必死に足を踏ん張っていた。ウッドはその様子に、いささかの違和感を覚える。彼の一撃は、さほど重くはなかったのだ。

「怪我、してるのか。おかしいぞ、こいつ」

その言葉に、キースはハツとして、大声をあげた。

「回復してない、怪我は完全に治ってないんだ」

彼の脳裏には、真つ暗な地下空間で炎に照らされた大きなシルエツトが鮮明に映し出されていたのだ。ボロボロになりながら必死に立ち回り、わずかな隙について銃撃したディックと、全身穴だらけの大きな影。

「あれは一日や二日で治るような怪我じゃなかった。何か特別な手術でも施したのかと思ったが、違う。俺たちがここに向かったのを知って、回復する前に無理矢理連れて来たんだ。こんな超重大な秘密抱えた施設に、普通の兵隊なんか連れて来れないもんな。どうなんだ、スウィフト博士」

その一言が、一気に志気を高めた。

ハロルドも、気持ちが高揚してくるのがわかっていった。形勢は間違いない優位。老人と怪我を負った大男しか寄越すことの出来ないということとは、それほど相手も追い詰められているという証拠だ。しかも、この状態で相手をねじ伏せてしまえば、確実に任務を遂行することが出来る。

「何をやっておるのじゃ、エド！ な、なんたる。こつなつたら、ローザに……いや、そうすればTYPE-Cが」

怖じ気づき、防寒着のポケットから取り出した携帯端末を覗き込んでブツブツと呟くスウィフトを、ハロルドが思いきりぶん殴った。ヘルメットが取れ、白髪頭があらわになる。手の中からすり落ちた端末を踏んづけると、老人は驚くほど高い声を上げて倒れ込んだ。

突然、音が途切れる。

ローザは監視モニターから消えた赤い点の跡を、虚しそうに指さした。どうしようもないと首を横に振りながら、そっとヘッドホンを外して、操作パネルの上に置く。

「閣下、TYPE-Cはどうなさいますか。あと五体、あったのですよ。成長促進剤を使ったとしても、保存している細胞から成人体を作り出すには十年近くかかります。TYPE-C自体はまだ危害を受けていないようですから、死守した方が宜しいのでは」

彼女はぐるっと椅子の背もたれの向きを変えて、隣でじっと地下冷凍保管室の監視モニターを注視し続けていたリーに顔を向けた。無表情のまま彼は静止していたが、その心中は怒りに満ちているようにも思える。

Eの手術に気を取られ、冷凍保管室での異常に気づくのが遅れたのは、正直痛手だった。リーとローザ、そして特殊任務隊と一部の科学者しか知らない施設だ。Eの術後の経過を見守るケネスとロイは動くことが出来ず、パメラは何者か　恐らくジュンヤに、銃殺された。敵が侵入したと気づき、慌ててスウィフトとエドモンドを送ったが、彼らはEUDーム地下の戦闘で怪我を負っている。エドモンドはやつと立ち上がれる程度で、そんなこと、戦闘になればすぐに敵にバレてしまうだろう。ドーム襲撃時のようにたくさんの失敗作を送り込むことも出来ない。出来るだけ、あの場所での戦闘は避けたかったのだ。大切な大切なクローン体が眠っていたのだから執務室の隣、転移装置と各種モニター、操作パネルの並ぶ監視室二人だけの無言の空気は、ローザの息をどんどん苦しくしていた。「もう遅い。これ以上、TYPE-Cにこだわり続けるのは無意味だ」

リーは、肩まで伸びた黒髪を右手でぐっとかきあげる。凜々しい



い巨体がのっそりと動きだした。天井にくっついてしまっているのかと思われるほどの大きな身体は、それだけで十分な凶器だ。

まずは、自分をはじめ飛び出したウッドへ。大きく振りかぶり、岩のような大きな右拳を振り下ろす。遅い。スローモーションかと錯覚してしまいそうなほど、緩やかに拳が動いた。

「喰らうか！」

ウッドがすかさず懐に入る。スツと腰を落とし、足を半回転させて足払い。当たったが、完全に足元をすくうことは出来ない。それでも、巨体はぐらりと揺れた。

隙が出来る。

今度はキースが、役立たずと知ったエネルギー銃の銃身を、エドモンドの脳天に目一杯叩き付けた。エネルギーボトルが粉々に砕け散り、蛍光色の溶液がシャーベット状になってあちらこちらに飛散していく。降りかかる溶液から逃れようと咄嗟に両手をかざし、視界が奪われた巨体に、遠方から銃撃。

じっと、なりを潜めていたアレックスが持っていたのは、実弾銃だった。セミオートライフルが火花を散らし、巨人を狙う。ウッドとハロルドがサツと身を屈めて後退するのを見計らい、アレックスは少しずつ少しずつ、エドモンドへの距離を縮めていった。

「エネルギーボトルは凍結するが、実弾には影響ないんでね。もしものために準備して正解だった。今のうちに、筒をぶっ壊せ！早く！」

フルフェイスヘルメットの下でニヤツと笑い、アレックスは何度もエドモンドの身体を撃った。頑丈な防弾加工の防護服は幾度となく弾を弾き返し、その度に巨人は雄叫びを上げて、通常の人間の倍以上もある大きな拳で手当たり次第に殴りだした。カプセルの側面や上部を手持ちの武器で叩き壊そうとするキースやハロルド、ウッドを狙って 勢い余り、銀カプセルの強化アクリル部分に拳を打ち付ける。ガゴツと何かが外れる音がして、スウィフトは仰向けになっただま、悲痛の叫びを上げた。

「エド、やめ……。ど、どこを、狙つ……。中身を、中身の入っているカプセルを壊……。な」

気管支を通ったマイナス一〇〇度の空気が粘膜を渴かし、徐々に身体を冷たくする。スウィフトは生気を失いかけていた。動くこともままならず、かすれた声で何度もわめくが、巨人には届かない。

「力尽くでぶち壊せ！」

キースの声に、ハロルドとウッドは、足で、銃身で、壊れたカプセルのフタで、思い切り中身の入ったカプセルを様々な方向からぶつ叩いた。プシューッと空気の漏れる音、カバーの開いたカプセル内部に、アレックスが銃弾を浴びせていく。二十前後並んだカプセルの殆どには実際中身がなかった。ざつと見渡したが、実際破壊する必要があるのは数個に過ぎない。それぞれ位置は幾らか離れているが、破壊しようと思えばすぐに破壊できそうだ。

「なんと……。してくれるのだ、閣下の、閣下の中から……」

泣きそうな老人のそれは、セリフの途中でそれは悲鳴に替わり、そのまま途切れた。

主を失い、コントロールを失った巨人には、もう目標など見えていなかった。ズダンズダンと大きな足音をたて、ブンブンと両手を振り子のように振って、壊れたおもちゃのようにじたばたとあえいでいる。やがて、度重なる銃撃に耐えかねて防護服に穴が空くと、巨体からわっさわっさと血が噴き出し、銀筒の上に大量の血を降り注いでいった。そろそろ、死ぬのかも知れない。巨人の様子を傍目で見ていたキースは、ドーム地下で見た失敗作の姿を重ねていた。命が続く限り、破壊行動を続ける。彼らより、この巨人は知性があつたように思えたのだが。もしか、こうした事態を想定して、老人は巨人に感覚を麻痺させる薬を打ってしまったのか。緊急事態なのだろう。せつかくの実験体をこの科学者は、一体どういう位置づけで側に置いていたのだろうと思うと、空しさが募った。

飛び散った高濃度エネルギー溶液に火花が引火し、周囲を赤く照らしだすと、静かに燃え始めた炎は、空気中の酸素を取り込んで小

さな爆発を繰り返した。爆風で壊された銀のカプセルからカバーが剥がれ、TYPE-Cの身体が寒気と炎に直接晒される。ヘルメット越しで彼らにはハッキリとは感じ取れなかったが、肉の焼けるような臭いが一気に室内に充満していった。

「火が回ってきた。外へ、外へ逃げるんだ」

冷凍室から飛び出し、地下室を抜けて細い階段を駆け上がる。真っ暗だった通路に、地下からの赤い炎が照ってほの明るいのがせめてもの救い、分厚い防具で足下も見えにくい中、四人は必死になつて地上を目指した。

先に発電機をぶつ壊そうと飛び出したベンのことを思い出し、キースは階段の途中で「まずったなあ」とつぶやく。「何が」と、ハロルドが訊くと、

「いや、ここから帰るのに、転移装置のプログラム変更をしろつてエマード博士にメッセージもらつたの、すっかり忘れてた。もうぶつ壊してたとしたら、こつちからは帰られなくなる。ドームから迎えに来てもらうか、あるいは」

「照明が消えてる訳じゃない。冷凍室だつて、温度は上がってきてたが、冷気はおさまつてなかった。発電機の位置がわからなかったのか？ あれは入り口のものか？」

ヘルメットを脱ぎ捨て、両手を無理矢理振つて急ぐハロルドの息は、すっかり上がっていた。限界だと思えばすぐに足を止めてしまふいそうなほど、疲れ切った。時に自分の年齢を呪い、体力不足を呪った。こんな所でくたばりたくない、何度も唱え、若いキースたちに必死について回る。重い足を一步一步押し上げ、一団最後尾のハロルドがようやく地上へとたどり着いた、その時。

遠くで何かが爆発するような音、耳を澄まして場所を確認した。十一時方向、ベンのうめき声。

何があった、四人顔を見合わせ、恐る恐る歩を進めた。

何者かの気配、ベンではなく、もっと無機質な何かの音。

「く、来るな」



またしてもベンの声。背後で、ギシギシとギアの動くような音が複数聞こえてきた。

## 75・思わぬ敵

壁の向こうに、何かがいる。ピンと張り詰めた空気の中、キースら四人は武器を構え直してゆっくりとベンの声がした方向へ進んだ。冷凍室でエネルギー銃を失ったキースとハオルドは、アレックスに渡され予備のエネルギー小銃を構える。射程距離が短く心許ないが、それでもないよりはマシ、階段を上って汗だくになった防護服の襟を緩めながら、じわりじわりと歩を進めていく。

ギシ、ギギギ、ガリ、ガリと、また機械音。ガシヤン、ガシヤンという大きくゆるりとした足音は、間違いなくそれが移動していることを彼らに知らせてくる。焦りが募った。ベンの声がした部屋の先、一番奥の機械室に転移装置があるのだ。このままでは転移装置でドームに戻るところか、そこに辿り着くこともできない。どっと押し寄せた不安で、全身脂汗にまみれた。

覚悟を決めたように、キースがまず、通路の壁に背を擦るようにして前進、開け放たれたドアぎりぎりに身を寄せて、そっと室内の様子を覗いた。ヘルメット越しにキースの目に飛び込んできたのは、まるで予想だにできなかった大きないくつもの影だった。床に散らばる、恐らくベンのものと思われる真っ赤な血、肉片。目を見開き、息を荒くして固まったキースに、何も知らないハオルドは「どうした」と声を掛ける。

「ベンは、もう、駄目だ」

振り向いてゆっくりと首を振るキースの背後で、鈍い銀色の巨体がぬっと廊下に首を出した。それに、彼は気がつかなかった。

「キース、後ろ！」

ウツドの叫びに慌てて振り向いたとき、それはキースの真上で大きく避けた口をパツクリと開けていたのだ。

腰を抜かし、床に尻餅付いてぐるぐると転がる、入り口から数歩後退りして態勢を整えたところで、キースは銃を構え直した。が、

瞬間的に彼は、とてもこんなものでは対処できないと悟る。

天井ギリギリに迫ったその銀色の化け物は、二足歩行のトカゲに似ていた。言うなれば恐竜、肉食恐竜の頭蓋骨を長く前後に伸ばし、大きくなった口を奥までパツクリと開いて、今にもキースの頭を砕こうと狙っているのだ。歯の代わりに鋭く磨かれた鋼が均等に並べられ、ベンの防護服や血肉をあちこちに引っかけている。

さっきまで声を上げていたはずのベンの気配が完全になくなってしまっていた。戦意を失うには十分すぎるくらい、その事実は四人を打ちのめした。

「恐竜型のロボ……こんな、こんなもの見たことない」

NCCでは人体実験はよく見てきた。生物兵器の開発に力を入れていたことは、キース自身も知っていた。自ら体感したこともあった。しかし、そこにはこんな無機質で巨大な化け物は存在しなかった。

「見たことなくても、目の前にいるんだ。どう突破する」  
アレックスが言って、何とか他の三人を奮い立たせようとしている、その隙に、もう一体、別の恐竜型ロボットが新たに廊下へと顔を出した。

一体じゃないのか、思うとどつと汗が出て、思わずハロルドは腕で額の汗を拭った。

このまま、狭い廊下で戦うのは不利だ。

「走れ、玄関ホールへ！」

ハロルドの声に後押しされて、キースたちは廊下を逆走し、逃げ場の確保できる玄関へと急ぐ。

襲われたら一巻の終わりだ。さっきまであんなもの、影も形もなかったのにとぼやくハロルドに、

「恐らく、転移装置から飛ばされてきたんだ。スウィフト博士の通信機と交信出来なくなったのを確認して　これは、厳しいな」

余裕で応えてみせるキースだが、心臓はバクバクと波打っていた。こういうとき、エマード博士ならどうする。こういうピンチの時。

無意識にエマードにすぎる。それでどうにかなるなんて、保証はどこにもないのに。

センサーが付いているのか、遠隔操作か。鉄の化け物はまるで小気味よくジャンプをするかのように油圧式のスペアリング脚を伸縮させ、スピードを上げて追ってくる。重い頭部から転げぬよう右に左に重心を移動させ、時に口をがばつと開き、長い尻尾部分をブンブンと上下左右に振りながら。

とにかく早い。どう考えても、人間の足で逃げ切るのは難しいに決まってる。

思い立ったように、アレックスは肩掛け荷袋の中から小さな拳大の黒いボールを取り出して、思い切り後方目掛けぶん投げた。コロコロと転がり、ロボの足元付近で暴発。

「な、なにやってんだ、アレックス！」

爆風で前に吹き飛ばされそうになりながら、ハロルドは思わず叫んだ。

「足止めだよ、足止め」

「だからって、転移装置ぶっ壊すようなことになれば、帰られなくなるぞ」

「大丈夫、そこまで被害は及ばないよう、計算して投げたんだから」  
血の気が盛んなのは構わないが、逃げ道を封じられたら埒があかない。どこまで計算しての動きだと、ハロルドは渋々セリフを飲み込んだ。

それでも、若干足止めにはなつたようで、恐竜ロボはほんの少しだが動きを止めた。いまのうちにと玄関ホールへ向かう四人。勝算など、全くない状態で敵と相對することになる。

「どうする。このまま戦うか？」と、ハロルド。

「いや、手持ちの武器じゃ、どうにもならない。電気系統が完全にやられる前に、何とかして転移装置に滑り込まないと。エマード博士から携帯端末に送られてきた修正プログラムを読み込ませて、行き先をドームに変更させる手間だつてある。あんな化け物何体も相

手にしながら出来るかどうか。自信は全くないね」

息苦しいとばかりにヘルメットを床に叩き付け、キースは防寒具の上半身部分を脱いで腰に巻き付けた。アレックスとウッドも、今しかないと防具を脱ぎ捨て、小回りがきくようにと身軽になった。

「まだ手榴弾はいくつかある。エネルギー小銃と俺のライフルだけじゃ、心許ないな。ウッドは何持ってる」

「アレックスほど準備はないけど、まあ、予備のエネルギーボトルはあと一つ。出力を最大にすれば、もう少し威力は増すと思うけど、撃てる回数は減る。それでもいいならやってみるけど、異論は」

全員、息があがっていた。精神的にも限界に近い。

だが、ここで諦めていたら。目的を達していたからといって、力を抜けば、確実に殺される。ベンのように。選択肢は少ない。いつそのこと、やれるだけやってみるしか、このされた道はないのだ。「……ないね。じゃあ、出力最大。恐らく合計でいいとこ十発。ロボの弱点を見つけ、狙い撃つ。施設の破壊は免れない。もし、完全に電気系統がやられた場合は、助かってからどうにかして帰る方法を考える、でいいよな」

ウッドの提案に首を横に振る者などいなかった。互いに、どう動けばいいのか、追い詰められた頭をフルに回転させる。

ギシーっと、油圧式スペアリング脚の伸縮音。

外は生憎の雨、日も傾いてきた。薄暗くなつた施設の玄関ホール奥、通路の先から不気味な音と共に見えてきたのは、赤く光る複数の目が、ギョロリと四人を睨み付けている。

「来るぞ」

キースは自らを奮い立たせるように低く呟いた。

ほんの少し、他の部屋よりも大きいだけの殺風景な玄関ホール、ガラス戸を背に、当たっても効果があるかどうかもわからないエネルギー小銃を構えて敵の出方を見る。

勝ち目がない戦いかと、ハロルドも奥歯を鳴らした。今までの人生、これほどまで追い詰められた事なんて無かったのだ。ギリギリ

のところまで生きてきたと自負していたが、そんな物は只のまやかしに過ぎなかった。今の、この瞬間に比べれば。逃げ出したい、逃げ出してしまえるのなら。外は嵐だ。風の他に、雨も叩き付けてきている。あの小屋で雨に打たれたときよりも、幾分か雨脚が強い。雷も鳴り始め、ゴロゴロと不気味な音を出し始めていた。

「……なあ、キース。俺、外、出ようと思うんだが」

ハロルドはふいに呟いた。

「何だって」

「修正プログラムを読み込ませるため、一人は必ず転移装置に向かわなくちゃならない。お前のもってる端末に、ディックはプログラムを送ったんだろ。なら、お前は隙を見て転移装置へ急げ。俺とウツド、アレックスの三人で、あの化け物共を外に連れ出し、時間を稼ぐ。プログラムを読み込ませ終わったところで、俺たちも転移装置に向かって合流、装置を作動させる。これでどうだ」

不敵な笑みを浮かべるハロルドの横顔に、キースは顔を引きつらせた。

「追い詰められて、とうとう頭もおかしくなったんじゃないの」

「まあな。この状態で、まともでいるって方が難しい」

それは、キースが初めて見る、真剣なハロルドだった。

## 76・生き残れ

「さつき、敵が何体だったか確認したか」

「いや。少なくとも三体以上だというのは確かだ」

「あの部屋の規模とロボットの大きさからして、それが妥当だろうな。ってことは、一人一体ずつ気を引けば、キース、おまえは楽々装置に向かえるわけだ」

気丈に振る舞うハロルドだったが、薄明かりの中額に滲む汗の量は尋常ではなかった。何度も銃を構え直してみたり、袖で汗を拭ってみたりと、終始落ち着かない。これで大丈夫なのかと、キースはハロルドに声かけようとしたが、この緊張感を解いてしまうのではないという恐れから、言葉を飲み込む。

「ウッド、アレックス、三方向に散るぞ。いいな」

ドスを効かせた声に、二人は深くうなずいた。

三体だけだなんて保証、実際はどこにもない。転移装置から次々に送り出されている可能性だってある。なのに、冷静な判断を失っていたハロルドは、勝手に三体だけだと決めつけていた。それはとても危険なことだと、わかっていながらキースには、言葉を返す余裕すらない。

闇の中から赤い眼がどんどん近付いてくる。耳を澄まして足音を確認、なるほど、三体だ。ギシーギシーとリズムよく近づく一体と、ギシシギシシとギアをゆっくり噛み合わせるように歩く一体、もう一つは油圧式スペアリングの伸縮音を強調させたような音を発している。

「熱感知で動いているとしたら、四人がこの場所からそれぞれに散るのは危険だ。キースは一度屋外に出て、しっかり引き離れた後で、施設内に戻った方がいい。でなきゃ、完璧狙い撃ちされる」

忠告したのはウッドだった。

「言われなくても、そのつもりだったけどね」

ニツとキースは笑って見せた。笑うと言つより、無理矢理口角を上げたという表現が妥当だと感じるくらい、不自然に表情を引きつけていた。

「行くぞ！」

ハロルドの掛け声を合図に、四人一斉にガラスのドアを開け放し、一気に外へ飛び出した。ゴウとつんざくような風が屋内に流れ込み、風圧で吹き飛ばされそうになるも、腰を落として踏ん張った。風の中に突っ込むようにして玄関口を抜けると、正面からの風は更に強さを増し、叩き付ける雨であつという間に全身ずぶ濡れとなる。音が、よく聞こえない。散弾銃を撃ちまくったかのような轟音と、すぐ近くで鳴り響く雷は、ぬかるんだ地面の中、少しでも距離を稼ごうと丘を駆け下りるハロルドたちを嘲笑っているかのようだ。

パリンと高い音がして、エントランスホールのガラスが破られたと悟る。すっかり日の落ちた今、丘の下から施設の出入り口はつきり見えない。大きな金属質の胴体が稲光に照らされ、ギリリと光った。十分距離は取ったと思いたい、あの俊足、あつという間に追いつかれるのは目に見えている。

ハロルドと同じく、正面から右方向へと逃れたキースは、金属の化け物らがどうでるのかに、全神経を集中させていた。背後には鬱蒼とした森、前方にはロボット三体、味方は軽装備で、武器も少ない。この状況でどうやったら転移装置まで戻れるのか。

センサーでハロルドたちの位置を確認し、銀色の化け物は右へ左へと大きく巨体を揺らした。真つ暗闇に赤い眼が点滅し、止まる。三体がそれぞれ目標を捉え、思惑通り三方向へと突き進んできた。ぎっしぎっし、地面が揺れ動く。ぬかるんだ傾斜地、足場が悪いにもかかわらず、それらはスピードを緩めない。

爆音、アレックスの手榴弾だ。中央部で待ち構えていた彼の放つたそれは、近付いてきた一体の足元に直撃した。ぐちよつと不快な音がして、巨体が前傾姿勢のまま倒れる。しかし、ダメージを与えただけではない。足場を爆風が削り取つたに過ぎず、ロボはまた、



ギギと金属の擦れる音を響かせ、体勢を立て直した。

更にその奥で、ウッドも別ロボットの頸部を狙っていた。出力を大きくしたエネルギー弾が風に流され数発命中したが、やはり手応えは感じられなかった。カツンカツンと小気味いい音を立てただけで、傷一つ点けることが出来ないのだ。

「ふ……不死身か」

戦闘慣れしている二人が手こずっているのを見せつけられ、ハロルドは震え上がった。しかし、怯んではばかりはいられない。なんとかしても、キースを転移装置に向かわせなければならぬ。前方から向かってくるロボ、そしてウッドとアレックスを交互に見ていた彼は、何かを悟ったように、追い風を背にして全速力で右方向へと駆け出した。

「ハル、どうした！」

キースの言葉を無視して走り去るハロルドに吸い寄せられるように、二人に向かっていた恐竜ロボットの軌道が変わる。熱感知と同時に、それらは、より早く動く物を追っているのだ。つまり、今のうちに逃げると、そう言いたいらしい。どんどん離れていくロボットの注意が向かないように、キースはそろりそろりと、向かい風の中、背後の森に沿うようにして建物へと向かっていった。

上手くいった。自分の行動を悟ってくれたと確信したハロルドは、もつれる足を必死に前に進め、アレックスの後方を通り抜ける。

丁度アレックスとウッドの真ん中辺りで足を止めると、真ん前に自分を追ってきたロボットが迫っていた。

容赦なく叩き付ける雨の勢いは更に増す。とてもじゃないが、まともに戦えるほどの技量も武器も防具もない。手持ちの武器で死にものぐるいで戦うアレックスたちには悪いが、ハロルドにはただ逃げるしか道は残されていないかった。問題はどうかやって逃げるか。孤立して喰われるよりもマシかと、二人の側まで来たのはいいものの、このままでは三人とも餌食にされる。

無い頭をフル回転させ、導き出した結果、ハロルドは武器も構え

ぬまま、ウツドの方へ思い切り駆け寄った。

エネルギー小銃を構え発砲していたウツドが彼に気がついたときにはもう遅かった。風の勢いに任せて寸前まで迫ったハロルドが、自分に覆い被さらんばかり突撃してくるのを避けることなど、咄嗟には出来そうにない。思わず姿勢を崩し、ぐちゃぐちゃになった丘の斜面に尻餅をつきそうになったところで前方を見ると、自分が戦っていたロボに、もう一つのロボが激突し、バチバチと火花を上げていた。崩れる、自分も、前方の巨体たちも。思った途端にそれが現実となり、ばしゃつと泥水を全身に被った。

「悪いな、ウツド」

いつの間に身体の上をまたいでいたハロルドが、ひっくり返ったウツドに言い捨てる。

銃撃してもびくともしなかったロボットがひしゃげているのを目視で確認すると、ウツドは、なるほど、悪い作戦じゃないかとハロルドにうなずき返した。単純に、攻撃すれば勝てる相手ではないのだから、ロボ同士を衝突させればいいと、ハロルドは考えたらしい。追い風に乗って走ることでも生まれる運動エネルギーと、丘を下る位置エネルギーが合わさり、通常攻撃より効率的にダメージを与えることが出来たわけだ。

歪んだ分厚い装甲の継ぎ目から、大量の雨が内部に浸透し、シートを起こしたのか、ウツドと戦っていた一体は完全に機能停止している。精密機器は水に弱い。それは昔から変わっていない。同じような方法であと二体、やつつければ何とかなるかもしれない。僅かな望みしかないと知っていても、自然と士気が上がる。

足を損傷したらしく、ハロルドを追っていたロボのギア音が微妙に変わった。

今ならいけるかもしれないと、ウツドはエネルギーボトルを交換し、足の継ぎ目に向かって数発撃ち込んだ。まだ、体勢は変わらない。

アレックスは、大丈夫なのか。ハロルドはブンと大きさに身体を

よじり、後方で戦っている彼の様子を確認しようとして　愕然とした。

火を、嘔いている。

恐竜ががばつと開けた口から火を吐き出し、武器をしまい込んだ荷袋もろともアレックスを燃え上がらせていたのだ。手榴弾がいくつあると言っていた。それが完全にあだとなった。

一目見ただけで、助からないと判断出来るほどの炎に包まれるアレックスを、ハロルドとウッドはただ見つめるしかない。そして同時にその光景は、いつ自分たちに振りかかるとも知れないものなのだと確信すると、ぞわぞわと恐怖心が体中を支配し始めた。目の前の一体がいつ火を噴くかも知れない、足を多少損傷したところであの頭がぶつ飛んだわけじゃない、今もセンサーでこちらの動きを捉えているのだと、思えば思うほど足が震えた。

「このまま、帰れなくてもいいなんて、思ってないよな」

銃撃の合間に、ウッドが話しかける。

「ぎこちなくうなずき返すハロルド。」

「二体の頭部、センサーを狙ってみる。無意味かも知れない。だが、俺も火だるまにはなりたくないんだ」

構えた小銃で一発、二発、三発、恐竜型ロボットの頭部、目の辺りにエネルギー弾を撃ち込む。命中率の高いウッドの攻撃に、ロボットらは一瞬、動きを止めた。

「今だ！」

腰を落として、ウッドは一気に丘を駆け上った。ハロルドも、重く濡れた足を前に前に、丘を登っていく。

後方で、ギシギシとロボットが動き出した音、ほんの少し追い風になっているとはいえ、相変わらず叩き付けてくる雨粒の音も、真っ白くなつたハロルドとウッドの頭にはガンガン響いた。時折聞こえるゴツと鈍い音は、アレックスを焼き殺した炎を噴く音だ。センサーの位置は間違いなかったのか、本当に足止めは出来ていたのか。後ろを振り向けば全てがわかると知っただけでも、そのロスが命

取りだとわかっているから、決して二人は振り向かなかつた。歯を食いしばり、唸り、恐怖からか後悔からか流れ出た涙を拭くことも適わず雨に打たれ風に吹かれ、必死に丘の上の施設を目指した。

## 77・焼失

ガラス戸が砕かれ、一瞬にして廃墟同然になりはてた天文台まで、あと少し。心なしか雨は勢いを弱めたように思えるが、ぬかるんだ足元は更に悪くなるばかりで状況が好転してきているとはとても言い難かった。

「ハロルド、もっと、もっと早く！」  
ウツドが急ぐ。

わかっている、そんな単純な言葉さえ口から出すのを惜しむくらい、彼は追い詰められていた。

背後から熱気共に近付いてくる銀色に光る二つの巨体が、唸り声を上げながら重い足を引きずるように進む二人を追い立てる。早く、いち早く建物に逃げ込まなければ。先に向かったキースが、きつと巧くやって待っているはずなのだ。

油圧式スペアリングの鈍い音が迫る中、何とか建物の中に滑り込んだ。濡れた靴底が床を滑り、体勢を崩して転げる、立ち上がる、そしてまた前に進む。

来る、来る、急がなければ、焼かれてしまう、アレックスのように。

地下から上がってくる煙の臭いが少しずつ館内に立ちこめつつあった。同時に炎の熱気も階段室を通って廊下を伝い、間違いなく建物全体を熱し始めている。時間がない。このままでは施設もろとも転移装置が燃え尽きてしまう。

奥へ続く通路を必死に駆けた。壁を伝うように、一步一步、踏みしめるようにして走っていく。装備など、最早どうでもいい。最終的に転移装置に滑り込み助かるなら、少しでも身体を軽くして、早く走れた方がいい。二人とも無意識にそう感じたのか、走りながら上着を脱ぎ捨て、銃を捨て、空になった両手を必死に前に振った。

狭い通路の先に、転移装置がある。その前に必ず、ベンが殺され

た一室の横を通ることになる。

廊下に落ちる血液の赤は、何度も擦られたように荒く伸びていた。部屋に近付けば近付くほど濃くなる赤から目を反らし、奥の部屋を指した。

背後からガシャンガシャンと、明らかにロボットたちがまた建物の中に舞い戻ったような音が聞こえ、二人は顔を青くする。プシューと、体勢を立て直すような音、そしてまた、動作を開始する音。時間がない。このままでは戻るどころか、生き残ることだって難しい。互いに顔を見合わせ、無言でうなずき合った。とにかく今は、前に進むしかない。

転移装置のある奥の部屋まで、あと数メートル。今度は別の音が前方から響いてきた。まさかあれ以上敵が残ってはいまいと、危険な断定を無意識にしていたハロルドは、胸を潰されるような圧迫感を感じて、思わず足を止めた。

「どうした、何してる、急いで！」

ウッドが慌てて数歩戻り、彼の腕をむんずと掴む。

「待て、敵が、敵が転移装置の側にもいる」

「何だって」

後方から迫る軽快な金属音でかき消されそうな、ギギギという鈍い音、耳を澄ませば確かに前方から聞こえてくる。

「キースが修正プログラムをインストールさせてるはずだろ」

「そこに、敵が転送されてきたのだとしたら」

「考えたくはなかったが、あり得ないことはない」

「だからって、立ち止まってちゃ、ヤツらに殺されるだけだ」

言い放ち、ウッドは歩を速めてハロルドを押しつけ、転移装置のある一室へと足を踏み入れた。そして、そのまま動けなくなつた。

ウッドの様子がおかしい。その背中に違和感を持ったハロルドは、そろりと足を前に出し、ゆっくりと彼の前に出る。開け放たれたままのドアの向こうから見たのは、火を吐く銀色の恐竜型ロボット

だ。

敵は三体だけでは無かったのだ。しかし、今更キースを一人で戻したことを後悔したところで、どうにもならない。

「キース、キースはどこだ」

思わず叫ぶハロルドの声に、返事はない。

「キースは……あそこだ」

ガチガチと大きく震える指先を伸ばすウツドの視線の先、人型のようなものが横たわっている。

一足、遅かった。

視界は赤く染まっていた。炎の赤と、血の赤。

まるで血の海になりはてた埋め込み型の転移装置、焼け焦げたモニターや監視装置、くすぶる炎。恐れていた事態が既に起こっていたのだ。

ハロルドたちは思わず息を止めた。

辛うじてあのロボットたちから逃れただけだ。キースの左半身が、完全になくなってしまっている。喰い千切られたのか、砕かれたのか。散らばる肉片や骨、肉塊、踏みつぶされた銃。だがまだ生きていた。小さな呻き声、必死に伸ばす指先、視線を辿れば転移装置の操作パネルがインストール中と表示している。表情が見えない。それはもう、人間の顔をしていないのだ。

どう返事したらいいのか、果たして応えたところで聞こえるのか、見えるのか。

気が、おかしくなる。

ゴウと炎が眼前に迫り、慌てて腰を落とした。キースの身体を喰い千切った猛獣が、今度は自分たちを狙っている。

足のすくむハロルドに、ウツドは何度も呼びかけた。だが、ハロルドの耳には、もうどんな音も届かなくなっていた。

「床が光ってる……転移装置が再起動したんだ。飛び込むぞ、ハロルド！ 聞いているのか！」

隆々とした筋肉で、ウツドは無理矢理、ハロルドの疲労した身体

を引き寄せる。床下に埋め込まれた転移装置の円内までハロルドを引き摺り、パネル上に映し出された数字と共にカウントを始める。

「五……四……三……」放心状態のハロルドは、宙を見つめたまま、びくりとも動かなかった。ギリリと奥歯を噛むウツドの気も知らず、装置の稼働に安堵したのだからんと手首を下げたキースの息が細く、なつていくのも知らず、室内にいた一体と、外から追いかけてきた二体のロボットが、それぞれ炎を噴いて暴れ狂うのも知らぬまま青白い光が、二人を包んだ。

島の天文台にある転移装置の稼働を知らせるサインが、ローズマリーの目に映る。総統執務室横の監視室にて、騒ぎが静まるのを待っていた彼女は、苦虫を噛み潰したように監視モニターを睨み付けた。天文台からの画像は完全に届かなくなり、送られてくる最低限の情報だけが監視モニター上でスクロールしていく。静かに回る機械のファンが、空気の張り詰めた室内で唯一音を鳴らしていた。

ローズマリーは虚し気に深く息を吐き、右隣に座ったティン・リにゆっくりと身体を向けた。

「閣下、残念ながら、敵は一部逃亡を図った様子。装置の座標はここではなく、もっと東を指しています。恐らくはE.U.ドームへ戻るよう、プログラムを改編させたのかと」

「まあ、そうであろうな」

彼女の隣に回転椅子を持ち込み、悠々と足を組んで事態を傍観していた黒スーツの彼は、ため息の交じったような、力の抜けた声で応えた。

「施設爆破は」

「そちらはご心配なく。S-204型は当初目的通り、敵を追い詰めた直後に自爆装置を作動させた模様です。敵の転移が幾分早かったのは明らかな誤算ですが」

「そこにエマードがいなかったのであれば、それで十分だ。ヤツを



始末するのはこの私、機械の自爆などに巻き込まれて粉々になったなど、私は認めない」

リーは言い放ち、ニヤツと口角を上げる。その横顔に女は顔を赤らめ、照れ隠しをするように長い金髪をかき上げた。

「それで閣下、どうなさるおつもりですか。TYPE-Cは焼失、この先、閣下にもしものことがあったとき、私にはどうすることも出来なくなってしまう。この、最後のお身体も、どれだけ保つのでしょうか。保存された身体の中で最も頑丈なものをあつらえたつもりですが、如何せん、度重なる複製でTYPE-Cの耐久度は急速に低下しています。以前は三十年以上使用出来たと記録にありますが、昨今では五年、二年と、徐々に更改の頻度が増してしましました。そんなことはないと言出来ないのが残念でならないのですが、恐らくは一年と待たないうちに、身体は急速に老いていくのではないかと」

ギシーと椅子の背を鳴らし、リーは意味ありげにまた、ため息をついた。左手でぐいと髪をかき上げ、

「そうかもしれないね」それは悲しいようにも、投げやりにも聞こえた。

「ではローザ、私から一つ問う」

女の両肩を抱き、自分の側に引き寄せて向き合う。彼女の赤らんだ顔が眼前に迫るも、リーは表情を変えぬまま、じっと彼女の目を見つめ続けた。

「私が、私たる所以は何か。私はこの身体を以て私たるのか。それとも、私という意識が私を成すのか。君ならばどう答える」

まるで作り物のような端正な顔、男の物とは思えないきめ細やかな肌、ほんの少し高いが、よく通る声。ローズマリーにとって、それはティン・リーを好く確かな理由の一つだった。

しかしながら、彼女は同時に、リーが常に身体を交換し続けなければ生きられないことも知っていた。秘書という立場になってからというもの、何度となく繰り返してきた行為、例え科学が発達し、

アンチエイジング出来るようになったところで、TYPE-C細胞の衰えを止める術はないのだ。彼女自身、外見年齢よりも長く生きる選択をした一人ではあったが、リーという存在と運命を共にし続ける中で、果たして生きていくとは何か、命とは何なのかを考えなかったわけではない。

冗談にしろ何にしろ、彼が自分の存在を否定しかねないこのような疑問を持つに至ったというのは、彼女にとってあまり好ましいことではなかった。その疑問をずっと心に秘めていたのだとしても、彼の口から突いて出たのは、恐らく、いや間違いなく、ディック・エマードの存在が確実に大きくなっていく証拠。二人の関係を考えれば不自然ではないのだが、だからといって軽視出来るはずもなく、何と応えるべきか。いっそのこと、聞かなかったことにしたい。思っても、リーの視線は射るように彼女を捕らえて放さなかった。

「君は私のこの姿しか知らないが、以前は全く違う姿形をしていたし、その前もまた、別の姿を借りていた。本当の自分がどんなだったかなど、最早忘れてしまった。君は私の身体の交換を身近で見続けた唯一の人間だ。君にはわかるはずだ。私とは何か、私の私たる所以は」

「それは……」

言葉に詰まり、視線をずらしても、リーはそれを追うようにして彼女の顔を覗き込んだ。

「私は、閣下がどのようなお姿になったとしても、お慕い申し上げるつもりです」

誤魔化しのつもりで咄嗟に出た一言、後悔するまもなく、リーは顔を綻ばせた。

肩に付いた両手にぐっと力が入ったかと思えば、次の瞬間ストレートの黒髪がわっとローズマリーの眼前に迫る。頬にキス。

「流石ローザ。君は、私の心は何でもお見通しなのだな」

そうして彼は、彼女の口を優しく唇で塞いだ。

輸送センターの転移装置が青白い光を放ち始め、転送中の警報が室内に響く。慌ただしく動いていた面々は装置中央を注視した。転送元はunknownとあるが、島の施設からだということを知っている。ディック・エマードの指示通り島へ向かったハロルドらが戻ってきたのだ。

荷運びをしていたフォークリフトが後退り、作業用ロボットが荷物を持ったまま装置から離れた。埋め込み型転移装置の同心円状に皆距離をとる。

「転送終了まで、五、四、三……」

次第に強くなる光を背に、監視モニターを見つめカウントを始めるバースだったが、固唾を呑んで見守っていた周囲が大きな声を上げるのに驚き、途中で声を止めた。ざわめき、ある者は悲鳴を上げ、ある者は嗚咽する。人垣で、彼の居るところから肝心のものが全く見えない。背の低いバースは苛立ちながら、群衆の中をかき分け、騒ぎの中心まで進んでいく。「他の三人は」「何があつた」耳に入る言葉は、バースの中で嫌な予感をかきたてる。まさか誰かが犠牲に、思いながらも首を振り、更に進んだ。

「俺たちにはあれ以上、どうすることも出来なかつた」

暗く沈んだハロルドの声が、やっと彼の耳にも届いた。

「すまない……」

数十人が取り囲んだ装置の中央に、座り込んだ二人と、その前で立ち尽くす一人の影。ハロルドと、もう一人はE.U.ドーム戦闘員のウッド。二人が頭を垂れていたのは、他ならぬディック・エマードだ。

戻ってきた二人の上半身は裸、濡れて冷えきつた身体は青白く、紫になった唇を奮わせている。雨と泥で汚れた作業ズボンには所々に赤いものが混じって見えた。血だ。ほんの一時間ちよつと前に五

人で向かったはずなのに、戻ってきたのはたったの二人。途中で三人　キースとアレックスとベンが果てたのだと、納得せざるを得ないような彼らの落胆振りが、バースの胸に刺さった。

「TYPE-Cは」

見下ろすディックの冷たい声。

「それは大丈夫。ヤツら、施設もろとも俺たちを消そうと、化け物を送り込んできた。今頃、あそこは消し飛んでる」

ガタイのいいウッドさえ、すっかり生気を失っていたが、ハロルドよりも幾分か気力があるように見えた。

「そうか」

それだけ言うと、ディックは何度かうなずき、踵を返して群衆を割くように立ち去っていった。

犠牲を払って任務を遂行した二人に対して、それだけ、たったそれだけなのかと、バースは思ったが口には出さない。彼が誰かを気遣うとか、誰かの身になって考えると、そういうことはまずあり得ないとわかっていいるからだ。単に口下手なのか、それとも、元々そういう感情を持ち得ていないのか、バースには判断出来ない。彼という人間を知るにはまだ若すぎるのだと、必死に自分を納得させていた。

そんなことよりもまず、今は戻ってきた二人のケアをすることが先決。さっとハロルドの前に進み出て、バースは彼の肩に、自分の上着を脱いでサツと掛けた。ぐったりと力の抜けたハロルドは、まるで別人のように老けきっていた。救護班が駆け寄り、タオルと毛布、それからソフトドリンクを差し出しても、自分から受け取ることは出来ないくらい尽き果てている。ほらすっかりしてと、タオルと毛布で身体をくるみ、口元までストローを持っていつてやる。悪いねえと薄ら笑って、ハロルドはやっと一口二口、飲み物を含んだ。「ねえ、ハル。向こうで、何があったの」

恐る恐る尋ねるバースに、自力でタオルを身体に巻き付けながら答えたのはウッドの方だった。

「任務は正直、何とかなつたんだ。冷凍庫がどうのつてヤツね。問題はその後。敵は転移装置からロボットの化け物を送って寄越した。それに、喰われた。俺たちの行動は、敵に全部見張られてるんだ」「見張られてる?」

「そう。俺たちが島へ行った直後に現れた敵は、俺たちを予定外だと思っていたようだったが、そいつらを冷凍庫に寄越したヤツらは全部わかってるようだ。つまり、親玉だと思うんだが　そいつは、俺たちの行動も全部知っていて、もしかしたら冷凍庫の中身を狙われていることも知っていて、わざと手下を寄越したりロボを送って足止めしたりしたんじゃないかと。これは俺の憶測だけだな」

整わぬ息を無理矢理整わせるようにして、ウツドはまだ幼さの残るバースに、真剣に語ってきた。ハロルドほどではないにしても、やはり全身から疲労感が滲み出ていたし、上着を脱いで露わになつた隆々とした筋肉も、張りを失い、固くなっているように思えた。

救護班の女性が、ぐったりと頂垂れたハロルドに点滴を打ち始めている。限界が来たのか、視点が合わずフラフラとしているのが傍目にもわかった。呼びかけているが、反応も鈍い。担架が運ばれ、その上に寝かされると、ハロルドは安心した様子で目を瞑った。

「バース、デックスに伝えてくれないか」  
ぐったりと両手を垂れ、苦しそうな息の合間に、ハロルドは呟いた。

「ヤツは、リーはやっぱり生きてるんだ……」

「何言つてんだよ、そういう大事なことは自分で言わなきゃ。少し寝れば回復するから。な、ハル。デックスがさつき、フレディをビルに転送させたんだ。事態はちゃんと進展してる。エスターだってジュンヤだって、いずれ戻って来られるよ」

返事はなかった。

担架がゆっくりと床から離れた。

中央監視ドームの中心部、監視棟の螺旋階段の根本を潜り、トリストのある内部監視室へと入っていく。マザーと接続されたままのトリストはまだ修理中のような。むき出しのままの配線は、少しずつ纏まってきてはいたが、それでもまだあちこちに部品を広げて何人かが作業をしている。そんな中、骨組みだけになったトリストに乗り込んだ半トランス状態のアリを、ディックは目視で確認する。アリもまた、ディックが再び訪れたことを確認して、ずっと右手を挙げた。

「マザーに接続しながら作業が出来るってのはホントだったんだな」フルフェイスヘルメットに隠れて全く表情は見えないが、アリは調子よく笑っているのか、小気味いい声を出した。

「褒めてるんだ、ありがと。で、フレディとかいう犬ロボットは？ うまく転送出来た？」

「まあな」

骨組みに少しだけ補強した程度のトリスト本体の中に無理矢理収まったアリは、間違いなくマザーとの交信状態にあった。彼の目にはマザーが映っていて、彼女と共に三次元のディックを眼前に捕らえているような感覚なのだろう。

まだ補強が万全でない骨組みに右手をかけてディックは中を覗く。マザー・コンピュータに侵入していることを示す数値や、アリの精神状態をチェックするメーターが、丁度いいところで増減していた。

「マザーに聞きたいことがある。頼めるか」

「いいよ。どうぞ」

まだ監視室内には作業員がいて、板金を直すバチバチとした音が鳴り響いていた。接続状況を常に監視する必要があるため、スタッフの少年がモニターを注視している。指示を飛ばす声も盛んで、とても静かだとは言いい切れない状況。いくらアリが、マザーに入り慣れていると言っても、身体に負担がかからないわけではなさそうだ。

ディックは思いながらも、躊躇することなく彼に話しかけた。

「フレディの動きを、詳しく確認したい。先にマザーに頼んだビルの見取り図をくれ。それから、政府ビルの内部で、フレディを匿うか、誘導してエスターの所まで行ってくれのような協力者がいるなら、そのリストアップを頼みたい」

「犬ロボを直接突入させるわけじゃないの」

「それは無理だ。いくらなんでも、ロボットが単体でビル内部をうろろろしていたら、不審に思われ回収されるのがオチだ。協力者が要る」

「協力者ねえ」

渋々と、彼は正面を見直して、マザーとの交信に戻った。

アンリの眼前でも、マザーはやはり女性のシルエットだった。しかし、それはエレノアではなく、別の女性。アンリの母親の姿に似ていた。脳内で再生される声も、エレノアではなく彼の母のものであったし、アンリ自身、マザーと交信するときは、自分の母親に会いに行くのだという感覚をずっと持ち続けている。幼くして母親と別れた彼は、トリストの存在をある科学者に教わったとき、それは母親と会える装置なのだと思います。目の前に現れる女性、母親ではなくマザー・コンピューターなのだと知っても、母と会う感覚だけを求めて、何度も何度もトリストに乗り込んだ。例えそれが危険な行為なのだとしても、一瞬の安らぎと意識が電子化されていく快感には変えられず、中毒者のように通い詰めた結果、現実世界と電子の海、その両方に意識を置く方法を見出したのである。

「協力者リスト……とは言わないまでも、政府ビルにしながら、反政府的な立場をとっている人間のリストなら何とか。この中から適度な人物を更にリストアップ。……簡単には発見出来ないか。マザーも苦労してる」

沈黙が何分か続く。

「あ、出た。“DNA分析室”。ここの研究員の一人が、ネオ・

ニューヨークシティのメイン・コンピューターに頻繁に不正アクセスしてる。その目的の大半が“コード廃止論”に関する……これは、キョウイチロウ・ウメモトとかいう人が書いた論文らしい。反政府的だと、学会を追放された人間が書いた論文だって」

「それだけで、協力者になれるかどうか判断するのは難しいな」

「まあ、そうなんだけど」

また無言。

アンリはそうやって、何度も現実世界と仮想世界を行ったり来たりして、会話を繋いだ。

「一番最近……、キョウイチロウ・ウメモトのDNAデータが照合のため呼び出されてる。ウメモト、どこかで聞いたことがあるような」

「ジュンヤだな」

黙っていたディックが、ぴくりと反応してぐっとしゃがみ込んだ。視線をトリストに乗り込んだアンリと同じくして、自慢の口ひげを右手で擦った。

「恐らく、何かの弾みで、ジュンヤとそいつらが接触したんだ。…

…とすると、ジュンヤはある程度、事実を知ったかも知れないな」

「と言つと」

「人の話を全く聞かないガキが、ようやく俺たちの行動の真意に気づいたのさ。悪い展開ではないな」

ディックはそう言つて、頬を緩めた。



## 79・限界を超える

ディックの表情を横目で見ながら、アンリは目の前に提示されたリスト、まるで宙に浮いた透明なパネルに投写されたかのような文字列を、そつと指で撫ぜた。数十人分のリストの中にある“DNA分析室”の文字に触れると、なんとも人の良さそうな二人の男女の顔が映し出される。丸眼鏡の三十代の男と、同じ世代の黒髪の女。

「ダニー・レイブンとレナ・ニコラか。なるほど……“コード廃止論”だなんて、いかにもエマード博士、あなたと関連性のありそう  
な」

フルフェイスヘルメットの下で、アンリはにやつく。何か楽しそうにコクコクとうなずき、トリストの骨組みに寄りかかするディックの方に顔を向けた。

「関連あるも何も、コード廃止論のキョウイチロウ・ウメモトは、俺の養父ラムザ・エマードの恩師だ。詳しくは知らんが、マザー内部で見たラムザ・ノートによれば、彼は相当なカタブツで、学会に提出した反政府的な論文を取り下げようとはしなかったらしい。結果、總統の怒りを買って、流刑されたんだ。ラムザもその意思を継いだのかProjectの全責任を負う立場にありながら、自分の信念を絶対に曲げなかった。コードの有無が果たして人間か否の境界線になるのかどうか。結局、結論の出ないまま、ウメモト博士同様、流刑されることになった。二人とも、生きているのか、死んでしまったのか、マザーにすらわからないらしい。だのに今になって絡んでくるとは。……面白い」

「へえ。運命のいたずらってヤツ？　で、博士はその辺り全部把握してたわけ？」

「何がだ」

軽快なアンリの声に、ディックは嫌悪感を感じて眉をしかめた。しまったと、アンリは肩をすくませて、ぶるぶると首を横に振る。

言い方が悪かったと形式的に謝った上で再度、

「つまり、自分の育ての親が、アナーキストの頭の父親を支持したことを知っていて、ESに逃げ込んだかどうかだよ。いつか訊こう訊こうと思ってたんだ。追われる身になったからって、いくらなんでも反政府組織に逃げ込むなんて不自然すぎるだろ。散在する反政府組織の中で、ESを選んだ本当の理由は？」

覆い被さる様な格好でアンリを見ていたディックは、彼の言葉に少し驚いたのか、僅かに目を見開いた。それからトリストの骨組みにかけていた腕をだらんと下げると、よっこらせと似合わぬ声を出して、中に腰かけたアンリと同じ目の高さまでかがんだ。

「『ウメモト』の名前に聞き覚えがなかったと言ったら、間違いなく嘘になる。俺は確かにその名を知っていた。まさかその場に、俺が過去に殺した研究員の娘がいるとは知らなかったが、ESの代表がウメモト博士の息子だということ、ラムザがウメモト博士絡みと思われる何らかの密約を守るために俺を逃がしたことは知っていた。だがそれだけ、それだけだ」

ふうんと、小刻みにうなづくアンリには、一体何が見えているのか。意味ありげに口角を上げ、鼻歌を始める。

いけすかない、しかし、自分とどこか似たところのあるアンリを、ディックは突き放そうとは思わなかった。

「それより、リストに上がった研究員たちは、人間的に大丈夫なんだろうな」

「エマード博士の口からそんな言葉が出るとは予想外だったな。心配ないよ。最近の彼らの動きを見てるんだけど、かなり期待している……やっぱ、娘に関係してくるとなると勝手が違うんだ」

「黙れ」

「怖いねえ」

また口が滑った。アンリはヘルメットの下でディックに見えないようにペロンと舌を出す。が、言われたディックはさほど気にしない様子で、じっと何かを考えながらトリストの電気系統を見つめて

いるのだった。

振り返ってみれば、アンリは直接、彼の娘に会ったことがない。寡黙で冷徹なこの男を熱くさせる原因であろう、彼の死んだ妻がどんな女性だったのかも、マザー内部のデータベースで垣間見たくらいだ。まるで故意に削り取られたかの様な、不自然に空いた彼女のデータがひどく印象的で、以来、事実上の夫であるディック・エマードとその周辺を探るようになったのだ。自分とは全く関係ない一人の男に惹かれたきっかけは、そんな些細なことだったはずなのに、気が付けば危険省みず協力している。いつもなら下らないと一蹴してしまうはずが、アンリ自身、見えない糸に引っ張られるように事件に深入りしているのではないか。心地いい、薬に浸ったような、マザーにアクセスするような、不思議な感覚。それが、きつとこの男の隠れた魅力であって、周囲が無意識的に力を貸してしまう要因なのだ。……恐らく本人には自覚などないのだから。

「とりあえず、ビルの見取り図を先に寄越せ。一旦仮眠を取ってからフレディの位置を確認する。地下実験室に動きはないな」

話題が戻った。

アンリの口から思わず、ふうつとため息が出る。

「ないない。エスターはしばらく安静にしてるって」

「マザーがそう言ったのか」

「ああ」

念を押し、横目で睨み付けて確認するディックの迫力に圧倒され、アンリはびくつと身体を揺らした。いい加減、現実と仮想の合間にいるのも限界になってきている分、反応が大袈裟になってしまう。一方、ほぼ不眠不休で動き回っていたディックの体力もそろそろ限界だった。誰にもそう見えただけで、今すぐ倒れてしまえそうなほどに。充血した目、疲労ですっかり硬くなった表情筋、ボサボサの頭に油ぎった皮膚。身体のおちこちが悲鳴を上げていても、今は休めない今は休めないと繰り返し脳ミソに叩き込んだ。

マザーへのアクセス、事態収拾の画策、フレディの改造、これを

一日でこなした。彼に残された時間は少ない。リーがエスターの身体にマザーの意識データをダウンロードするまで恐らくあと数日、何としてもそれだけは阻止しなくてはならない。

EUドームとネオ・ニューヨークシティ、時差を考えれば、既に向こうでは夜が明けて日常活動が始まった頃だ。休んでいる暇がない。ほんの僅かな休息すら惜しいほどに、事態は逼迫していた。

「俺が戻るまで、協力者候補へのアプローチを頼む。マザー経由でも何でもいい」

「わかってるよ」

親指を立てて了解の意思を伝えると、ディックは満足気に頬を緩めて立ち上がった。

アンリの案内で、ディックは監視ドームの医務室へと赴く。常駐の看護師らは、疲弊しきったディックを見るなり顔を青くした。とてもまともな人間には見えない。鬼のような形相に、溢れんばかりの気迫、圧倒され、息を飲んで立ち尽くした。「ベッドを貸してくれ」とだけ告げると、彼はスイッチが切れたように倒れ込んだのだった。

小一時間眠りこけているうちに、ディックの耳に様々な声が聞こえてきた。何者だと揶揄する声、爆破事件についてのあらぬ噂、今世界中で何が起きているのか、何が起きようとしているのか。真実を知る者があまりに少なすぎる。憶測ばかりが一人歩きするのは、決していいことではない。だが、すべてをさらけ出せるほど単純な問題でもない。奇異の目で見られるのは慣れていない。慣れていないはずなのに、心がもやもやするのはなぜなのか。身体を横にしているも、ディックの頭は一向に休もうとはしなかった。

ダニーとレナの研究室は、実に忙しなかった。

時間感覚を無視するように、次々に依頼のメールやロボット便があちこちの研究室から届き、彼らはその度に仮眠から覚めてこそこそ動く。ソファで寝起きし、自分たちには休息など無いとぼやきながらも、彼らはその仕事に誇りを持っている。壁一面にべたべたと貼り付けられた無数のメモには、依頼の納期が書いてあった。早いものから順に貼っているつもりのようなだが、まるで統率は取れていない。彼らの頭の中は、部屋同様ぐちゃぐちゃで、だが、それをどうこうしようなどという気持ちは微塵もないらしい。

白いのは土台の壁だけで、あとはとにかく生活感、ずぼらさが目立つ室内。決して清潔だなんて言い切れないこの医者風情の男と、頭のネジが一本どころか何本も吹き飛んだような女、彼らの余裕の原因は一体何なのだろうとさえ、ジュンヤは思い始めていた。

あれから全く眠れずに、ジュンヤはじっと、彼らの寝息と自分に繋がった点滴の音を交互に聞いている。時々あちこちがズキズキと痛んだ。「身体が必死に自分を治そうとしている音だよ」とダニーは笑うが、冗談じゃない。治癒促進剤とやらが効き過ぎて、身体中必要以上に熱を帯びている。医者だなんて口ばかりだと、ジュンヤは思っていた。しかし、彼ら以外に頼る物がない以上、どうすることが出来ない現実がある。

話してはいけないと思っていたことを全部話してしまった手前、簡単に場を離れることはできなくなった。もし仮に、彼らが上辺だけでジュンヤと話をしている、実は政府総統の手の者だったとしたら、完全に分が悪い。なんてったって、こっちは怪我人、武器も無し。パメラとやり合ったときよりもずっと、状況が悪化しているのだ。ひっきりなしに出入りするのが辛いロボットくらいなのがいいことで、もし生身の人間なら、即、拘束されてるはずだ。ロボット

にしたって、搭載されたカメラやセンサーで部外者だとバレたら不味いに決まってる。なのに、ダニーは「絶対大丈夫だから」と根拠なく鼻歌を始める。

「この研究室を二人だけで」とジュンヤが尋ねると、

「前はもつといたんだけど。あまりに劣悪な環境でしょ。忙しすぎて狂っちゃって、結局二人しか残らなかったんだ」と、レナは言った。

確かに、こんなデータと機械の山の中で、まともにいるって方がおかしい。二人のテンションが高いのは睡眠不足も関係してるんじゃないかと、どうでもいいことを考えてしまう。けれど彼らは、穏やかさを保っている。

例えば本当に彼らを信頼するとして、この先どうやってエスターを助けに行ったらいいのか。「詳しくは朝になってから」と、話をはぐらかしてみたものの、具体策を提示できなければ、彼らだってどう手助けしたらいいのかわからないはずだ。

壁に掛けられた時計の針が、カチカチと音を立てながら進んでいく。午前二時だと言われてから、もう四時間が経過してしまった。そろそろ周囲が活動を始める時間だ。そうになると、自分がベッドで寝ているところを他者に目撃される確率はますます高くなる。平静を保ってられるような状況にない。身体中に嫌な汗が染み出してく。だが、体力が回復するまでは下手に動かない方がいい、せめて彼らが本格的に動き出すまではと、ジュンヤは一人無意識に追い詰められながら、目の前の男女を警戒し続けた。

カチツと、何かの音が鳴った。

それから立て続けに、室内のあちこちから音、音、音。六時半、起床時間なのか、タイマーで目覚ましが一斉に鳴り響いた。

ソファからむくつと起き上がり、一つ一つ目覚ましを止めていくダニーと、デスクに伏したまま腕の届く範囲をガンガンと叩きまくるレナ。やっと全ての音が止まった頃に、「起こした、ゴメンね」と軽い口調で謝られても、ジュンヤからはため息しか出てこなかつ

た。

「うるさくして悪かったね。七時半頃、食事が運ばれてくる。今日は三人分頼んであるから安心して。大丈夫、ロボが弁当運んでくるだけだよ」

寝ぼけ眼を擦りながら、ダニーがベッドを見下ろしている。脂ぎった肌に、くつきりをついた目の下の隈、明らかに寝不足だと見て取れる。

「点滴で、随分良くなったと思うけど、どう」

頭をもしやくしゃとかきむしり、ジュンヤの右手首で脈を取り始めるダニーを見上げた。

「まあ、それなりに」

「熱、少し出たかな。着替えを用意しておくよ。これから先、日中帯は、俺たちだけではどうにも出来なくなることも考えられるから、いつでも身動き出来るよう、管は外そうか。でも、無理は禁物だ。あくまで怪我人だからね」

「わかってる」

「促進剤効果があったとしても、通常の回復スピードを二倍程度に出来るだけ。個人差もあるから、確実じゃない。身体にも負担が掛かるし、本当は避けたいんだけどね。大丈夫だとは思っけど、万が一、万が一を考慮して、速めに回復した方がいい」

絶対大丈夫と言っておきながら、焦りも感じる。ここでずっと隠れ続けるのは無理なのかも知れないと、ジュンヤは唾を飲み込んだ。手早く処置をし、聴診器をあて、触診、それから追加で一発、回復促進剤の注射を打つ。カルテにペンで走り書きし、「よし、オツケー」とダニー。やっと普段のニヤけ顔に戻った。

「レナ、そっちはどう。上層部に動きは」

ダニーが声を掛けると、顔を洗ってサッパリしたレナが、ブラシで髪の毛をとかしながらフラフラと端末の起動ボタンを押す。

「ちよいと待ってね。立ち上がり時間に時間かかるんだ」

ジュンヤの目を全くする様子もなく、彼女は突然、着替えを始め

た。無頓着、いや、恐らく二人はそういう関係なのだろう。次いで、彼女はフンフンと何かの歌を歌い化粧をする。デスク周りは彼女の部屋と化していて、よく見渡せば、女性用の小物や雑貨、化粧品に脱ぎ捨てた洋服まで無造作に置いてある。目のやり場に困り、反対の壁へと視線をそらしても、気配というものは感じられるもの、何となく気まずい。本当に、こんな場所でこんなことさえしていなければ彼女も普通の女性なんだ。成り行きとは言え、二人の日常に割って入ってしまった。協力してくれると言っても、やっぱり長居するわけにはいかない。

「あ」

レナがふいに変な声を出した。

「どうした」

ダニーが反応してサツと側に寄る。

「見覚えのないヤツから、ダイレクトメッセージ。…… m a t h e  
r? 何これ」

レナの手が止まっていた。画面上に呼び出されたウィンドウ、メッセージ欄を見つめたまま静止している。

二人の様子がおかしいのに気がつき、ジュンヤもよいしょと重たい身体を起こした。ベッドから半日ぶりに立ち上がり、足を引きずりながらレナのデスクへ。

「マザーって言ったら、マザー・コンピューターしか思い浮かばない。他に何かある?」

「さあ、レナがそう言うんだったら、そうなんじゃない」

件名、『DNA分析室へ、協力依頼』。メッセージのみ、他に添付されたファイルはない。だが、妙に嫌な予感がした。

「気持ち悪いな、なんだろ。見てみたら?」

「いいけど。いくら公表してるアドレスとはいえ、こういうのはちよつと。普通は研究室番号と依頼人名が添えられてくるはずなんだけどな」

メッセージを開く。



「何々、』先日、あなた方が保護したジュンヤ・ウメモトと連絡が取りたい。コード廃止論について、あなた方が熱心に研究をしているのは知っている。悪いようにはしない。これは、ディック・エマード博士からの依頼だ。至急連絡を』……え、これって」

読み上げたレナも、ダニーも、ジュンヤも、互いに顔を見合わせた。思いも寄らぬ内容、全て見透かされている。

「レナ、どっかにジュンヤのこと書き込んだりしたか」

「し、してないよ、失礼だな。そういうダニーだって、弁当注文、安易に数量変えたでしょ」

「そんなの、来客や臨時の助手が来たら、しよっちゅうやってたる」

「そんなことより、差し出しは。どこから発信されてるか、特定できないの」

ジュンヤが慌てて割って入る。

我に返って、レナが発信元を探り出した。

「待っててよ……、どのドームから送ってきたのか、どの端末から送ってきたのか、大体わかれば」

それまでゆるゆるとしていた研究室内の空気が、ピンと張り詰めた。

レナもすっかり仕事人の顔になっている。

「こつこつのはね、いたずらかどうか、きちんと判断しないと、後々大変なことになるんだから」

高速でキーボードを叩き、画面を操作する。数分、作業をしたところ、

「EUDームだ」レナが呟いた。

「爆破事件があったところだ。エマード博士もそこにいる。信憑性は高いな」

「だとしても、ダニー、簡単に信じちゃいけないよ。廃止論についても知っていると書いてある。これって、ウチらの動きを全部見ていることですよ。そんなこと」

ありえない、そうレナの口が動くか動かないのとき、突如画面が

切り替わった。どこかの施設、長く伸びた管と、監視モニターだらけの室内が映し出されたのだ。当然、レナにもダニーにも、見覚えがない。ジュンヤにも、それがなんなのか、全く見当が付かなかった。

「な、誰、勝手に」

ポカンと口を開け、事態を飲み込めぬレナ。

「お前が何かしたんじゃないのか」

「違う、誰かが端末に侵入してきてる。操作されてる。乗っ取られた」

両手を挙げ、操作してないことをアピールする彼女に、ダニーも驚きを隠せない。そんな簡単に、政府ビル内にある端末をハッキングできるもんかと、常々話していた。まさか、それが現実になるうとは。

画面上、フルフェイスのヘルメットを被った黒服の何者かが見切れ、それから白衣の人物が現れた。中央に用意された椅子に腰掛けた白衣の男は、何度か位置を確認するようにキョロキョロと周りを見回したあと、黒服の人物の合図で襟を正す。

「……博士、うん、その位置で」

「映ってるのか。本当に大丈夫なんだろうな」

「大丈夫大丈夫。博士の名前入れて、協力してくれってメッセージ入れたから、安心してよ」

「信用できんな」

「そう言わずに」

音が漏れ出した。若い男と、中年男の会話だ。

「デイツクだ。何してんだ、一体、何が」

身を乗り出し、痛む腹を擦りながらジュンヤが声を上げた。そこに映っていたのは、紛れもない、デイツク・エマードその人だったのだ。

## 81・画面の向こう側

「あれが、エマード博士？ ホントに？」

興奮気味にダニーが言う。

レナも頬を紅潮させて、息を弾ませている。

「本物、本物なんだね」

「まあ、本物は、本物なんだけど」

画面に映るディック・エマードは、いつもより心なしか小さく見えた。

島での事件以来、ジュンヤはずっとディックを避けていた。見たことのない、おぞましい本性に畏怖し、憎悪を抱いた。完全に敵だと認識してしまったのだ。そのまま、彼はリーの案内で政府ビルへとやって来てしまった。

しばらくぶりに見るディックは、やつれていた。目の下の隈もいつもより濃い。口ひげ以外、普段はずつきりと剃っているはずなのに、画面の中の彼は身だしなみどころではないらしい。眼鏡もかけ忘れてる。誰の目から見ても明らかに、彼は疲れきっていた。そうさせたのは自分に違いない、大事な愛娘を、騙されたとはいえ誘拐してしまったのだ。ジュンヤの胸は痛んだ。それは、パメラにつけられた傷が原因ではないというのも、よくわかっていた。

手のひらが、汗で滲んだ。少しずつ、無意識のうちに脈拍が上がってくるのが彼自身にもわかる。じつとりと濡れていく背中、脇の下、首筋、そして額。ダニーとレナには気づかれたくない、彼の姿をただただで動揺しているなど、恥ずかしいにも程がある。そうやって一人、もやもやと思いを巡らせるジュンヤには全く気づかぬ様子で、ダニーたちはまじまじと、画面の中のディックを目で追い続けている。上半身にカメラがズームし、よりいっそう彼の表情を詳細に捉えると、レナはキャットと可愛げな声を上げた。まるで有名人扱いだ。そんな二人の様子が、いっそうジュンヤの心を掻き立てて

いく。

『こつちの声は聞こえてるはずだよ。でも、向こう側の声は……どうかな。マイクでも差してれば音を拾ってくれると思うんだけど』  
若い男が言うのに慌てて、レナが手元にあったピンマイクを端末に差し込んだ。

「差したよ、マイク。聞こえる？」

『ああ、聞こえる聞こえる。もしかして君が、レナ・ニコラ？』

「イエス、あなたは？」

『アンリだ。よろしく。悪いけど、君らの個人情報色々調べさせてもらったよ。エマード博士からの依頼でね。……カメラはある？』

「画像欲しいんだ。いいかい」

「ええ、いいわ。アンリ」

彼女は慌てることなく椅子に座り直し、しゃんと背筋を伸ばした。その上で、いつもはデスクに投げっぱなしの小型カメラを端末に繋ぐ。正常にカメラを認識、作動したことを知らせるチャイムが鳴ると、ダニーはレナのすぐ後ろに屈む。ジュンヤは二人から少し距離を置いて、じつと様子を窺っていた。

画面の中、正面を向いたエマードが視線を斜めに落としたまま、腕組みをしているのが見える。

「やっぱ、存在感あるな、エマード博士は」

ぶるぶるっと、背筋を奮わせてダニーが言う。

コクンと、レナはうなずき、嬉しそうに笑みを浮かべる。

それにしても、この見たこともない若い男は何者なのか。自分より親しげに、対等にディックと話している。記憶をたどったが、ジュンヤに覚えはない。恐らくはEU ドームで特殊任務隊の連中が起こした爆破事件、あのときに手を貸した人間なんだろう。自分がない間に何があったのか、考えるとモヤモヤする。

『あまり時間がない、手短かに説明するよ』

ジュンヤの心中など無視するように、アンリが淡々と話し始めた。  
『EUドームのある場所から、僕と博士は君らの端末にアクセスを

している。無論、真つ当な方法じゃない。媒介してくれているのはマザー・コンピューター、さつきも言ったけど、エマード博士からの依頼で協力してくれそうな人を探していたところ、マザーが君らをピックアップした。君らの経歴、研究についてや、性格まで、マザーは分析している。廃止論を研究するなら尚の更、僕らに協力してくれるだろうとこっちは踏んでるんだ。ところでさつき、ウメモト博士のDNAデータを漁ってただろ。ってことは、そっちに彼の孫が行ってるはずだ。この読み、合ってる？」

たたみかけるようなアソリの言葉に、三人は圧倒された。レナとダニーは互いに目を見合わせ、息を飲む。ジュンヤは胸を貫かれたような痛みを感じ、数歩後退った。彼は一体何者なのか、いよいよ恐ろしくなってくる。

「……一つ、訊いてもいい？」

沈黙が何分か続いたあと、意を決したようにレナが切り出した。

極度の緊張で声は上ずっていた。

「もしかしてあなたが、噂の“意識を電子化してデータベースに入できる”タイプの人間なわけね」

『当たり前。よく知ってるね』

「私もよくハッキングするからさ。にしたって、とても普通じゃない。よつぼどイカれてる」

『それは褒め言葉とっておくよ』

画面からはいなくなった若い男の、いかにも状況を楽しんでいるような場違いな台詞。

「ところで、どうしてそこまで詳細な情報が？ 第一、マザー・コンピューターに一般人がアクセスするなんて不可能じゃないの」

『それは企業秘密。まあ、通常の方法でネオ・ニューヨークシティのメイン・コンピューターにアクセスしても、得られる情報は少ないからね。侵入できるところまで侵入しないと、本当に欲しい情報は手に入らない。僕なら、マザー経由でどんな情報だって入手することが出来る。と言っても、肝心の總統付近の情報は入手不能なん

「ただど」

「そこまでにしろ」

流暢に話し続けるアンリを静止したのは、ディック・エマードだった。やっと和んできたはずの空気が、またピンと張り詰めた。

「アンリ、お前はもう休め。意識を半々に置いたまま、これ以上作業を続けてみる。廃人になる」

「いやあ、興奮しすぎた。ゴメンゴメン。博士に譲るよ」

「当然だ。ところで、ジュンヤ、いるんだろ」

画面の向こうでなにやらやりとりが行われ、ガサゴソと背後で物音がしたあと、若い男の気配が完全に消える。ディック・エマードだけが画面の中に残されると、ジュンヤは渋々、カメラの視界に入っていた。

「……いるよ」

「すまんが、その二人、席を外してくれないか。二人で少し、話をしたい」

ダニーとレナを端末から離し、一人、レナの指定席に腰掛けるジュンヤの顔は強張っていた。目も合わせたくない、話したくない、だのに、二人で話がしたいだなんてどうかしている。

思えば、旅立ちの日に祖父とのことを聞いたあとも、彼は何事もなかったように振る舞っていたし、あの雨の日にリーを撃ち抜いてからも、普段通りに、いや、普段以上に動き回っていたようだ。自分自身があまりに軟弱なのか、神経質なのか、それとも彼が恐ろしく冷徹なのか。ジュンヤは悩んだ。悩み続けて結論は出ず、リーに心を奪われてしまった。その結果がこれだ。

ディックを目の前にして、ジュンヤはますます自分の愚かさが身に染み、どう接したらいいのか目を泳がせてしまう。

「俺が、怒っているとも思っているのか」

だが、聞こえてきたのは思いもよらぬ台詞だった。

「え？」

『お前を、俺が怒っているとしても。俺がお前を責め立てると思っ  
ていたのか』

画面の中のディックは、どこか寂しそうに眉をひん曲げている。  
ジュンヤはまた、どうしたらいいかわからずに、デスクの上、端  
未付近に転がるレナの私物に視線を移し、彼女の使った化粧水の瓶  
やアクセサリー、ハンカチが無造作にあるのを興味無しに見つめて  
いた。返す言葉がない。だって本当に、そう思っていたのだから。

『俺には、お前を責める資格など無い。お前が悪意でエスター  
を連れ去ったわけじゃないのはわかってる。だから、俺は何も言わ  
ない。お前はただ真っ直ぐに、自分の愛する者を救いたいと思っただ  
けなはずだ。それが結果、敵の思うままになってしまっただけのこと。  
……俺にだって経験がある。お前のように、俺もかつて正義  
のようなものを持っていたんだ。抵抗し、足掻き、唯一愛した女を  
必死に守ろうとして、結果、見殺しにした。取り返しが付くはずも  
ない。だが、まだエスターは無事らしい。希望はある。なのに、何  
故お前を責める必要がある』

ディックの声は、あくまで落ち着いていた。それはかつて、自分  
の父親に感じたのと同じような、どこかしっかりとっていて、だけ  
れども温かさを含んだものだった。

『エスターは待つてるはずだ。こんなところで立ち止まってる場合  
じゃない。わかってるな』

太い、強い声だ。ぐったりとした外見からはとても想像が付かな  
いくらい、力強い。

膝の上でジュンヤはぎゅっと拳を握った。ふがない。小さすぎ  
る。そして、自分は、愚かだ……。

ディックの目には、小さな画面の向こうですっかり頂垂れたジュンヤが映っていた。傷だらけで、包帯を巻かれ、病衣を羽織ったまま肩を落としている。血色はいいが、生気が殆どない。余程辛い目に遭ったのだろう。DNA分析室のダニーとレナが助けに来てくれなければ、確実にビルの中で殺されていたはずだ。“E”の確保がリーの目的であり、ジュンヤはただ利用されたに過ぎないのだから。

話したいことは幾らでもあった。問い詰めてしまえば簡単に喋り出すだろう、ジュンヤなら。だが、そうして一方的な圧力をかけたところで、事態が進展するとはとても思えなかった。努めて冷静にいようと、ディックは心に誓っていた。本当ならば、怒り狂ってもおかしくない状態なのだ。平静を保たなければ、また自我を失う。そうなった場合、誰がエスターを救い出すのか、ぐつと奥歯を噛みしめ、感情を表にしないようにする。

「確かに、俺はお前に何一つ喋ったことはなかった」

ジュンヤはまだ、顔を上げない。

「だから、お前に誤解されていることも知っている。俺は否定もしなかった。他人にどう思われようが、俺は俺の思ったことをするまで。理解など、必要無いと今も思っている。だが、それがお前を傷つけ、リーの口車に乗る結果となってしまったのは想定外だった。お前の気が済むなら、俺は自分の秘密を全部ぶちまけてしまおうかと思っている。……どうだ」

返事を待つが、ジュンヤはやはり無言のままだった。一切目を合わそうとしない。

「どこまで遡れば気が済む。俺が、生まれたところ……いや、造られたところからか」

腕を組んだまま、ディックはふうと、大きくため息をついた。ギイと椅子を鳴らし、前傾姿勢になって画面を覗き込む。カメラの直



ぐ下に置かれたモニターの中で、ジュンヤはやつと顔を上げた。

ようやく、と、ディックがしたり顔をしたところで、トリストの修復作業をしていた作業員たちも、彼を気遣い、そつと持ち場を離れた。作業用機械と金属クズの散らばる狭い室内、骨組みに少しだけ肉の付いたような修復中のトリストと、天井から太いコードで繋がったマザーアクセス用のフルフェイスヘルメットが、目の前にぼつんとある。画面の向こう側がどうなっているのか、ジュンヤだけが見えている状態で、他の二人が別室に移動してくれているとすれば、カメラを介して本当に二人きり。これで心置きなく、話が出る。

『「造られた」ってのは、“コードがない”ことと関係があるのか』  
ようやく口を開いたジュンヤの声は、強張っていた。額に汗が滲んでいるのも見える。

「どこまで聞いたのか、どれだけ情報を得ているのかは知らないが、その通り、関係がある。俺は政府の機密プロジェクト内で造られた“実験体”だ。見た目は人間かも知れない、が、組み込まれた遺伝情報はそれだけではないらしい。一体誰をベースに造られたのか……どの生物の何の遺伝子を使ったのか。俺は自分の身体のこと、今でも全くわからないんだ」

『それってつまり、どういう』

「俺は、生物学的にも恐らく人間じゃない。キメラの部類だ」

『キメラ……化け物だってそう言いたいのか』

「そう」

ジュンヤの反応を確かめつつ、言葉を選びながら慎重に語る。驚き、震え上がって青ざめた表情が、ディックの心をえぐった。ぎゅつと唇を噛み締め、鼻でゆっくり息を吐く。次の台詞は、また彼を傷つけるはずだ。

「もしかしたら、知っているのかも知れないが、エスターも俺と同じ、“実験体”だ。政府総統ティン・リーの“新しい器”となるべく造られたな」

そこまで言って、ディックはまた、ジュンヤの表情を確かめる。

接続が悪いのか、時折画面が揺れ、像を乱した。それでも、ジュンヤの複雑そうな泣き出しそうな顔はよく見えた。

『エスターが実験体として利用されてたつてことは、リーから聞いていた。ただ彼は、自分の“器”だとか、そんなことは一言も』

「ヤツがどうやって命を繋いでいるか、知っているか」

『憶測、だけど。次々に身体を乗り換えているんじゃないかと』

思わず、眉が動いた。ジュンヤの口から、よもやそんな言葉が出ようとは思ってもみなかった。なるほど、アンの言うように分析室の人間がジュンヤに色々仕込んだかも知れないという読みは間違っていないようだ。いけ好かない男だが、頭が良いのは間違いないらしい。

ニヤツと含み笑いし、ディックは腕を組んだまま、ぐつと身体を起こした。

「ヤツは自分のクローン体に、意識を電子化させ移している。知る限りじゃ、俺は四タイプ目。今のヤツの身体、TYPE-CからDへ移行しようとして、俺の義父に阻まれた。遺伝子の劣化が進んでいる、最早限界らしい。新しい身体が欲しくて、俺を作り出したのだと聞いた。これがどういふことか、お前にわかるか。もしかしたら俺は、義父の謀反さえなければ、“政府総統として”この世界に君臨していたかもしれないってことだ」

一人だけの監視室、声があちこちに反射し、大きくなってディックの耳に戻ってくる。

自らの発した言葉に、震えた。彼が、そのことを言葉にしたのは初めてのことだった。頭でわかつてはいたが、断定してしまうのが怖くて仕方がなかった。おこがましいとも思っていた。敵とはいえ、世界の全てを握る男になつていたかも知れないと思えば、それなりの優越感を覚えてしまうのではないかと、怖くて仕方がなかった。同時に、そういう存在なのだと結論づけてしまうことが、ディック・エマードという男の全てを砕いてしまっただったのだ。

「エスターも同じだと言うなら……じゃあ、エスターは、リーに身体を乗っ取られてしまっつてののか」

「いや、違う」

「だけどヤツらは、はっきり言った。“E”が目的だったって」

「当初は、そうだったらしいがな。リーの中で何かが変わったのか、Eが思いもかけず女性であったことが原因だったのか定かではないが、ヤツはエスターをマザーと同化させようとしているようだ。生きた“神”を造り、世界を完全に支配するために」

「……ば、馬鹿げてる……」

「その、馬鹿げたことに、いろんな人間が巻き込まれてる。殺された人間も、人生を狂わされた人間も、大勢いる。言ってしまうえばこの世界にいる誰もが犠牲者ということになる。世界をドームが覆ってしまったこと、人間を閉じ込めたこと、情報を遮断したこと、コードで管理したこと、どれもがヤツの欲望に繋がっているんだ。ジユンヤ、お前はこの状況をどう思う。どうすべきだと思う」

「俺は」

また、ジユンヤは目を反らした。

たくさん情報を一度に与えすぎたのかも知れない。ディックは一瞬そう思ったが、いや、そんなことはない、こいつならば理解できるはずだと、じっと画面の向こうのジユンヤを見据える。

反抗し、ぶつかり合いながらも、どこかで信用したいのは、彼がシロウの息子だからなのか。それとも、義父の敬愛したウメモト博士の孫だからなのか。

そんな余計なことを考えながら、言葉の詰まったジユンヤから次の台詞が出てくるのをじっと待った。なかなか言葉が出てこないのか、何度も唾を飲み込むような仕草をして、時折目を瞑ってみたり、長く息を吐いたりしている。

「何も難しいことを訊いてるんじゃない。お前は、そこにいて何をしようとしているんだと訊いてるんだ。敵の本拠地のと真ん中、協力者も見つかったんだろ。次は、次はどうする気だ。まさか無鉄砲

に何も考えず、そんなところにいるわけじゃあるまいな」

痺れを切らしたディックに、ジュンヤが慌てて返してくる。

『考えてなんかいない。　考えてるわけない。わかってて訊いてんだろ』

「やっぱりな」

『エスターが連れて行かれた。“今更彼女を見つけたところで、どうすることも出来なくなっているはず”だと言われた。リーが彼女に一体何をしようとしているのか、俺にはサツパリわからなかったし、この中で動き回るにも、ダニーやレナが協力してくれるとはいえ、あまりに情報や武器が少なすぎるんだ。た……助けて、欲しい。正直、ディックみたいに上手く立ち回る自信は全然無いんだ。でも、俺にしかできないことがあるなら、いくらでもやる。彼女を、エスターを助けることが出来るなら』

「　いいだろう」

目を細めたディックは、待つてましたとばかりににたりと笑い、あごの無精ひげを右手で撫ぜた。上目遣いにジュンヤを睨む様は、どこかいたずら好きの少年のようなあどけなさを含んでいるようにも見える。

「犬型のロボットをそっちに送った。回収を分析室の二人に依頼したい。あとはお前の持っている、小型転移装置のデータをこっちに寄越せ。レナとかいう女、彼女なら何とかしてくれるはずだ。一気に事を進めすぎてヤツらに見つかるとやっかいだ。指示は追って出す。　この回線の使用も、これくらいが限界らしい。ロボの梱包された荷物の輸送ナンバーだけ伝える。メモはいいか」

『あ、ちよ、ちよっと待つて』

「時間がない。ナンバーC16975K-52581……」

### 83・情報の欠片

ディックに言われた数字を手元に散らばったメモ紙の一つに書き留め、ふと顔を上げると、もう回線は途切れていた。レナがずっと見ていたいつもの画面、なにやらたくさんさんの数字やグラフが並んだそれに戻っている。

一体何だったのか、理解できないうちに彼との会話は終了した。

混乱した頭の中が整理できずに、ジュンヤは呆け、ぼんやりとどこかを見つめ続けた。ティン・リーの正体、彼が何かを企み、エスターを手に入れようとしていることは知っていた。だが、唐突にその答えを突きつけられ、理解に窮した。新しい身体、マザー、E、キメラ。これら全てが一つに繋がってジュンヤを更に混乱させていく。

どつと疲れが出て、殺していた息が解放されたかのように腹の中から吹き出してきた。途端に体中が痛み、メモ紙を掴んだまま、ジュンヤはドサツと床の上にずり落ちた。

「ジュンヤ、どうした」

様子がおかしいのに気がついて、隣の資料室からダニーが駆けつける。レナも続いてジュンヤに駆け寄り、咄嗟に首筋に手を当てた。

「熱、熱が出る。あんた、また必要以上に薬打ったんじゃないの」

「失敬だな、レナ。俺はちゃんと用量を守ってだな」

大量に噴き出た汗を病衣の裾で拭い、ダニーは大丈夫かとジュンヤに呼びかける。力なくうなづく彼の心音は、普段より幾分か速い興奮している、同時に促進剤が効いて炎症箇所から熱が出たのだ。

本来ならば、もう少し休ませたいところだがと、ダニーは壁掛け時計の針を見て、チツと舌打ちした。

「ともかく、こんなところで寝込まれたんじゃ困るな。せめて身なりぐらいはしっかりしておかないと、これからの時間帯、色々やばくなってくる。着替え、着替えは用意したよな」

「ロッカーから出してあるよ。あんたの、貸して良いんでしょ」

「それでいいよ」

力の抜けたジュンヤに肩を貸し、背中に背負って立ち上がったダニーだったが、基礎体力は殆どないらしい。何度もよるめきながらあちこち置きっぱなしの本を乗り越え、部屋の隅に置かれたベッドまでジュンヤを担いだ。限界以上の仕事をするように大きく掛け声を出し、強引に彼の身体をベッドの中央に置く。

「あんたが着替えさせなさいよ」

「わかってるよ」

つつけんどんな態度で見下すレナに、ダニーは顔をしかめた。

もうじき宅配ロボが朝食用の弁当箱を三つ運んでくる。単にロボツトだけが運んでくることも多いが、稀に警備員が見回りがてらやってくる。特殊任務隊のパメラが殺され、その犯人が捕まっていなため、恐らく警備員が同伴して一部屋ずつ人数や研究員の身分証を確認してくるはずだ。流石に部屋の奥まで入ってくるようなことはないが、扉を開けてすぐに不審な怪我人がいたとすれば、通報は免れない。そうになったら、協力するどころか匿うことも出来なくなってしまう。

「おい、しっかりとしてくれよ。いくら匿ってやるって言っても、俺たちにも限界があるんだからな」

ベッドの上、激しい痛みに耐えながら、ジュンヤはそれまでぎゅっと瞑っていた目を開けた。心配そうに見つめるダニーと、カタカタ端末のキーボードを打ち始めるレナ。二人にディックからの伝言を伝えねばならなかった。大丈夫だとんどかうなずいたところで、ダニーもうなずきかえし、ベッドの上に半身乗り上げてジュンヤの上半身をぐいと起こした。ジュンヤはされるまま、病衣を脱いでシャツに袖を通す。バレないように揃いの白衣を着せられ、拳げ句にダニーのコレクションから一つ、伊達眼鏡を掛けさせられた。これで変装させたつもりかとも思ったが、何もせずにいるよりは幾分かマシだ。

「少し、脈も落ち着いてきたな。……で、博士は何て」

「これ、この数字で荷物の引き取りは可能なのか」

握りしめ、くしゃくしゃになっていた紙を広げ、数字を見せる。鉛筆で走り書きされた数字は汗で少し霞んでいたが、読み取れないほどではなかった。

「見せて。検索してみる」

そう言ってレナはデスクに向かったまま、手を差し出してきた。ベッドからのつそりと降りて紙を渡すと、彼女は開いていた検索画面に数字を打ち込んだ。

「あ……、桁が足りない。通信、途中で途切れたんだ。残念」

「だめ、かな。こつちに送つたらしいんだけど」

「いんや、そんなことないよ。この上の方の数字は共通していてね、どこからいつ発送されたのか、わかるんだ。エマード博士がEUDームから送つたつてことは確定してるから、あとは下何桁か、不明な荷物の行き先を全部確かめればいい。英数字含んだ七桁、五桁、三桁の組み合わせになつてるけど、下三桁部分が抜けてる。時間帯を考えてみるね。恐らくドームからジュンヤがこつちに向かった後なんだろうから、今からええと、三十六時間以内と考えていいんだよね」

「ああ」

「三十六時間以内の荷物の受け渡し状況を確認……EUDームからの直接搬入は一箇所のみ、その中で数字は連続してる。受け取り未済の荷物番号はそのうち五十六。サイズ情報あるよ。どのくらいの大きさが知ってる？ 小型、中型、大型……」

「犬の口ポ……アレは、中型、多分重い」

「となると、合致する荷物は十三に絞られる。それぞれ引き取り用のチケットを端末から出力して持つてくことになつてるから、この番号のもの、全て偽造すりゃ引き取れるんじゃないかな」

サラッと偽造などと、とんでもないことを口にする。何とかしてくれるはずだとディックは言った、まさにその通りになっている。

ディックの補佐をしているあのアンリという男の情報網、簡単に情

報は漏れるはずないと信じている分析室の二人には悪いが、確かなものようだ。

デスクに手を付いて、ジュンヤは、レナが慣れた手つきで端末を操作するのを感じたように目を丸くしながら見ていた。接続されたプリンターから数枚の紙が出てくるのをスツと取り出し、はさみで器用に真っ直ぐ切っていく。バーコードが印字された短冊形の紙を手に取り、「ほら出来た」とレナが自慢げに手渡してきた。

「巧いもんだな。慣れすぎてる」

「まあね。色々悪いことしてるから」

その内容については追求しない方が良さそうだなと苦笑いし、振り向くと、ダニーがピリピリした表情でジュンヤたちを睨み付けていた。時計が七時半を回り、弁当が届いてもおかしくない時間になっていたのだ。

ノック音、ドア横にスライドする。紺の警備服を着た大柄な男と、四角い箱のようなロボットがぬつと現れ、ジュンヤはぎよつと肩をすくませた。大げさな動きにレナが耳元で、「自然体で」と囁く始末。「わかってるよ」口では言ったが、ジュンヤの胸は激しく鼓動していた。

「DNA分析室、今日は三つ？ 記録によるとここしばらくは二つだけだったはずだが」

低い男の声に萎縮し、ジュンヤは無意識にレナの端末を隠すような形で背を向ける。

慌ててダニーがサツとドアの前まで進み出て、警備員らの視界を塞いだ。三人分の弁当を受け取り、はあとわざとらしく大きくため息をついて、

「昨日から急な仕事が入って、助手を一人追加したんだ。ウチの分析室はよく、臨時で助手を雇うんだよ。一週間程度遡ってみたらわかるけど、ほら、この日は五人分、この日は七人分。この人員は依頼されたデータの量に比例するから、他の研究室とはちよいと違うんだよね。これでもビル内のほぼ全てのDNAデータ分析、一箇



所で請け負ってんだからさ。わかつたらさっさと出てね。壁にべたべた貼つてあるだろ。これから急ぎで仕上げなきゃならない仕事が入ってるんだ。締切は今日の昼。二三〇八研究室のケインズ博士は神経質で有名なんだよ、締切破つたらどうなるか」

「あれ、嘘だかんね」レナが囁く。

「締切は昨日の昼。ああやってホラ吹くの巧いんだ、ダニーは」

ああなるほどと小さくうなずいて、ちらりとダニーの方を見る。

警備員がいぶかしげにこちらを覗いているのを、ダニーがわざとらしい身振り手振りで室内に入れまいとしているようだ。露骨すぎやしないかとハラハラするが、ここで妙な動きをしたらすぐに確保されてしまう。自然体で、自然体でいなければと思うと、逆にジュンヤの身体は硬くなってしまう。

「そのままこつち向いてなよ。すぐいなくなるからさ」

改めてレナに言われ、ジュンヤは小さくうなずいて見せた。

「君の身分証は」

「何だよ、疑り深いな。ここの主だよ」

首からぶら下げた身分証をダニーがぐいと突き出すと、警備員は手元資料と照らし合わせた。何かをメモしている。

「凶悪犯がビル内をうろついているかも知れない。不審な人物を見かけたらすぐに警備室に連絡を。　ああ、不審なデータ分析依頼についても連絡を怠らないように」

「あいよ、ご苦労さん」

ダニーに見送られ、警備員とロボットが出て行くと、研究室内は久方ぶりにしんと静まりかえった。

自分のデスクに散らばった筆記具を肘で払いのけ、弁当を三つ重ねておくと、ダニーはふらふらつとジュンヤの寝ていた角のベッドへと倒れ込んだ。タオルケットに顔を埋め、

「……し、死ぬかと思った」

本音が出た。

「まあ、それなりに評価できるんじゃない。ジュンヤの身分証まで

は用意してなかったから、全員分チェックされてたら、死んでたね」と、レナ。

とりあえずの危険回避に、三人は各々、深く息を吐いた。

## 84・信じるということ

ローテーブルに散らばった書類を空いた箱に移して場所を確保すると、ようやく遅めの朝食が始まる。あまり清潔感はないが、この研究室内で食事が取れそうなのはそこだけだった。ソファや事務用の椅子に各々掛けて警備員の運んできた弁当箱を開けると、卵サンドに野菜ジュース、少しだが生野菜のサラダにナゲットも入っていた。

「思ったよりまとまな食事なんだな」おしぼりで手を拭きながらジュンヤが言うと、

「身体が資本だからね。ビルの外で食べるよりも健康的だと思うよ。私はこういうのより、ガッツリ肉系の方が好きなんだけどさ」と、レナ。

確かに、腹はある程度満たされるかも知れないが、量も味も、どこか物足りない。それでも、ジュンヤの傷ついた身体を癒すには十分だ。野菜を頬張ると、心なしか、さっきまで渦巻いていた混乱も少しだけ収まったような気がしてくる。

「荷物を受け取りに行くのは、ダニーがいいと思うよ。あそこにジュンヤが行くのは、危険過ぎるでしょ」

「最初からそのつもり。荷物には何か表示がしてあるのかな。こう、目印みたいな」

「さあ、そこまでは」

モグモグと口に詰め込みながら、三人思い思いに喋る。島での事件以来、ずっと自室に引き籠もっていたジュンヤにとって、誰かと一緒にとる食事は久しぶりだった。ネオ・シャンハイにいたときだって、飛空艇にいたときだって、いつもエスターや仲間と一緒にいた。あの、正体不明のひげ男だって、飯時は“普通の中年男”だった。なのに、どこかで歯車が狂ってしまった。リーの言いなりになり、ESでの居場所を完全に失ったのだ。気付けば孤立し、あんな

ことを。後悔してもどうにもならないことを、またジュンヤはねちねちと頭に巡らせていた。

「十三の荷物って言っても、実際該当するのはたったひとつなわけでしょ。普通箱には中身のわかるような表示がしてあるはずだから、その中から消去法で当たっていくしかないよ。まさか露骨に“from Emerald”なんて書いてるわけないしさ」

「……あ、でも、よく自分の持ち物には“D”ってサインを残してた。アルファベットのDを丸で囲った、単純なものだけど」

「じゃあ、それを探すしかないか」

ボトルのジューズをぐびぐびと飲み干し、ぷはっと思いきりのいい音を出して、ダニーは空になった弁当箱もろとも要分別と走り書きされたゴミ箱に突っ込んだ。ソファから立ち上がり、ぐいっつと背伸びする。未だ完全に脳味噌は起きていないのか、生あくびも一つ。

「そんじゃ、ちよっくら行ってくるよ。レナ、引換券くれ」

「あいよ」

ダニーはレナから受け取った十三枚のバーコード用紙を、白衣の右ポケットに無造作に突っ込んだ。行ってくるわと後ろ手に合図して研究室を出る。相変わらず、掴み所の無い彼だが、状況を楽しみながらもしつかりと協力してくれるのはジュンヤにとってありがたいことだった。

「行ったねえ。幸い、今日は締切ないから、ある程度は自由に動けるよ。荷物が来たら来たでやることあるんだろうし、博士からまた連絡あるとも限らない。私たちはここで待機ね」

最後のナゲットを口に啜えながら、レナは手早くジュンヤの食い終えた弁当の空を片付ける。よいこらしよと、またいつもの指定席端末の前に腰を据えると、彼女はギイと椅子を鳴らして深く息をついた。時計の針は午前八時を回ったばかりだ。

「さあて、ねえ。もっと詳しく状況を知りたいけど、回線が分断されるんじゃないでしょうもないな。マザー経由でアクセスしてくれる

のはよくわかったけど、それじゃこつちから連絡取りようがない。アンリって人、またアクセスしてくんないかな。 ジュンヤ、博士は他に何か言ってた？」

暇を持て余しているわけではないのだろう、壁に貼られたメモには締切の日時が多い。数日後、数週間後、時間単位で依頼元と併せて書いてある。それでも付き合ってくれるのは、ある程度状況を把握してくれているからなのだろうか。それとも、あくまで研究対象のウメモト博士の孫だからなのか。

掛けていたソファから立ち上がり、ズボンの後ろポケットに入りっぱなしだった赤い端末を取り出してレナの側まで来ると、ジュンヤはそれを彼女の前にぐいと突き出した。

「これ。データを寄越せって言われたんだ。それだけで何をしたいか、わかるかな」

「何これ」

「“携帯型の空間転移装置”、らしい。端末を開くと 画面に現地点が表示される。通信機も兼ねてる。リーが寄越したこの機械を使つて、俺はビルに来たんだ」

「なるほどねえ。見して」

女性の小さな手の中にもすっぽりと入る赤い端末を受け取ったレナは、側面や背面、ボタンの形式や液晶画面の表示まで、食い入るように見つめていた。爪を引っかけ、背面カバーをこじ開けて、製造番号を確認、ふふんと笑う。

「あー、これ、通信用端末を改造してあるんだ。Eドーム内で大量生産されてるものに手を加えて、転移機能を組み込んでるみたいだね。転移装置自体、小型化が難しいはずだけど、これでホントに飛んだわけ？」

「ああ、飛んだ。確か特殊任務隊のヤツらもこれを使用してるはずだ。地点登録した一箇所には飛べないのが難だけど、あるのとないのじゃ全然違う」

「だよ。通常転移する場合は、あの大がかりな転移装置まで移動

しなくちゃならない。装置間転送だつてかなりのエネルギー必要とするわけだし、地点指定転送だつて出来ないことはないけど、複雑なプログラム変更が必要だから、どのドームでも実際利用してないのが実状だもんね。それを考えれば、例え一箇所にしかな飛べないにしても、いわゆる瞬間移動つてのが簡単に出来るんだもん。こりゃ便利だわ」

精密ドライバーを机上の道具箱から取り出し、ネジを緩めて保護カバーを外す。基盤が露わになると、彼女はますます興奮して頬を緩めた。

ジュンヤも一緒になつて内側を覗き込むが、機械に疎い彼にとつて、目の前にあるそれがどのくらい素晴らしいかなど、さっぱりわからない。小さな部品一つ一つ、レナが丁寧に解説してくれるのだが、とても頭には入らなかった。

「市場には出回らないし、ビルの中でもこんなもの見たことない。恐らく、本当に上部の人間だけが持つてる装置だね。エマード博士は確か、今主流の埋め込み型転移装置の開発に関わつてたはずだから、ジュンヤの持つてる小型転移装置の図面を見せれば、同じもの作れると思うよ。基本は埋め込み型と一緒にだ。データを寄越せつて、そういうことじゃないかな。……じゃあ、このレナ様が図面に起こしてあげようじゃないの」

それからのレナは、実に頼もしかった。

散らかしていたデスクから必要なもの以外を余所に移し、白い紙を敷いて丁寧に端末を分解していく。部品の箇所と説明を細かな字で、一心不乱にギッシリと書き込む。レナによれば、細かい部品の殆どは家電製品などの回路にも使われているため、入手するのは簡単なんだとか。レアな部品に関しても、E.U.ドーム内で製造されているため、ビルの中で同等なものを製作するよりはるかに入手しやすいらしい。

「ここではまず不可能だけど、E.U.ドームでなら手に入るもの、案外多いんだ。あそこは“アナーキストの聖地”、エマード博士のた

めなら誰だって、無償で物資を提供してくれると思うよ。」

「ディックのためなら、無償で？」

「そう、無償で。そのくらい、彼は偉大なの。わかってる？」

わかるわけない。いきなり秘密とやらを一方的に突きつけられ、“自分が思っている彼と本質とは違う”んだと理解できるようにはなってきたが、それでも、ジュンヤはまだどこかでディックを信じ切れていなかった。

誰かを信じなければいけない状況なのに、どうしても簡単に信じることが出来ない。そんな自分の心の弱さを知っていて、ジュンヤは、誰かを疑うのを止めるのが出来ないでいた。同居していたディックに何一つ話してもらえなかったこと、エスターがエレノアとして動き回っていたのを教えてくれなかったこと、母メイシイが自分の過去やディックとの関係をずっと隠していたこと、たくさんのことが絡み合って、ジュンヤの心をかき乱した。

だから尚更、何も知らない癖にディックを信用するだの尊敬するだの豪語するレナとダニーが不可解で、同時に羨ましくもあった。

「……ところでさ、どうしてレナはディックのこと、そんなに信じられるんだ。いくら研究対象の縁者とはいえ、見ず知らずの人間、なんたる」

思っていたことがとうとう、口を突いて出た。自分の台詞にびっくりして息を飲むジュンヤに、レナは首を傾げた。彼女はしばらく、ジュンヤの言葉を噛みしめるようにして宙を見つめていたが、やがてゆっくりと長い黒髪を揺らし、身体ごとジュンヤに向き直った。

「ねえ、逆に、訊いてもいい？」

「な、何を」

「長い間一緒に過ごしていたのに、あなたが博士を信じきれない理由」

唐突な質問にどきまぎし、心音が大きく耳元で響く。

一番、訊かれたくないことだ。

無意識にレナから目を反らした。ダニーのデスク、診察道具やら

医学書やらがまとまりなく置かれているのをぼやつと見てみると、レナが椅子から立ち上がり、無理矢理視界に割り込んでくる。

「ジュンヤ、あんた、私たちのことも信用してないんでしょ」

レナの真つ直ぐな瞳が、ジュンヤの心に突き刺さった。

言葉に詰まり、息を飲む彼を見つめ、レナは虚しそうに顔をしかめていた。

「……人を、信じるのが、怖いんだ。だからそうやって、疑ってかかる。疑って疑って、幾重にも防壁を張ることで、裏切られたときのための保険にしようとしてる。そうやって生きていくのって、辛くない？」

うつむくジュンヤの横顔を離すまいとして、レナはぐつと彼の両肩を掴んだ。細く弱々しい指が、ジュンヤの肩に食い込んでいく。

「私たちがあんたを見つけたことや、成り行きでとんでもない事実を知らされたことに関しては、正直“縁”だと思ってる。あんたを匿うことを快く了承したのも、別に何かしらこちらに得があるからじゃない。でもさ、人間ってのは面白いもんで、損得関係無しに力になりたいとか、信じたいとか思ってしまうわけよ。ビルに来たばかりの頃、とある研究室に配属されて、エマード博士の功績を知った。彼の人柄が滲み出るような、丁寧でしっかりした仕事に、私は心打たれた。彼は信頼に足る人物だよ。私がそう感じた。理由なんて、そんなもんで十分なんじゃないの。ジュンヤはそういうの、博士には感じなかったの？」

反らした目は、元には戻らなかった。弱い力で握られた肩は、震えていた。僅かな沈黙が重荷になって、ジュンヤにのしかかってくる。

「無条件で信頼するには、ディックの存在は、あまりに重すぎたんだよ」

渴ききつた喉から弱音が出た。

情けなさで隠れてしまいたいのをレナに悟られまいと、ジュンヤは歯を食いしばった。



「その、重たい壁を打ち破るには、今しか機会、ないんじゃない。ね？　私は、自分のことを“信じる”だとか、“ついて来い”だとか言って信頼させる人間の方が、信用できないと思ってる。彼はそういう人間じゃないんですよ。何迷ってんのよ。本当に信頼すべき人間は誰か、判断できない歳じゃないでしょうに」

「……簡単に言うんだな、レナは」  
ふうつと大きくため息をついた。

目を上げると、レナもまた、寂しそうな顔をしてジュンヤを見つけている。何を言わんとしているのか、ただ深い深い悲しみがそこにあるように思えてならない。

「ここにいる人間みんなが“政府の犬”だ、なんて思ってるない？」  
「え？」

「“犬”なんかじゃない。私もダニーも、大切な人を、生活を、全て失ってる。ここしか居場所がないから、ここにいただけ。……この苦しみから解放されるなら、協力だって惜しまない。目には見えないけど、このビルの中、そういうヤツはごまんといるはずだよ」

彼女はそう言って、静かに笑った。潤んだ瞳には、一点の曇りもなかった。

## 85・これから先

夕刻を向かえたE.Uドーム群は、また慌ただしく動き始めていた。島の地下施設から帰還したハロルドとウッドがそれぞれ病院に運ばれると、北部転移装置は通常稼働に戻った。一時的に書き換えられていたプログラムも全て元通り、物資の輸送が再開される。爆撃を受けたとはいえ、実際被害があったのは地下部分がほとんどで、農水産加工品、加工工場に極端な被害が出なかったのは、不幸中の幸いだった。しかし、機械系統がうけた損傷は激しく、技師らの話によれば、完全回復まで数日を要する事実は変わらないらしい。そのため、地上の各ドームへの配送物品の量は通常時の半分以下、市民の経済活動に多少なりとも影響が及んできている。

政府上層部はこうしたことも全て念頭に置いた上で、ドームを襲撃している。それが最もやかいだと、ディックは感じていた。あの隔離された島にあらかじめ農場を作り、E.Uドームを襲撃しても当面の食糧を確保出来るようにしていたあたり、最初からE.Uを攻撃対象としていたとしか思えない。当然、“アナーキストの聖地”などとあだ名された地をあのティン・リーが好ましく思っているはずなど無い。“いずれ攻撃対象になるかも知れない”と、住民たちも常々思っていたらしいから、公然の秘密となっていたのだろう。反政府を堂々と口外していた住民たちも、今回の事件には衝撃を隠せないようで、ディックがすれ違うE.Uドームの人間、誰もが、“事件によって間違いなく、政府軍、あるいは政府総統から敵対視されているのが確実になった”“ドーム群の存続自体が危ぶまれている”と噂する。

しかし、一方で疑問も残る。リーは果たして地下冷凍施設を破壊されることを想定していただろうか。TYPE-Cのストックは尽きた。今の身体を失えば、待っているのは存在の消失のみ。巨大な権力を握っていた“政府総統”の地位に、何度も身体を入れ替えな

がら執着していた男が、そんな簡単に消えてしまふはずなど無いのだ。何かしら、緊急の場合に備えて対策を練っているのは間違いない。もしかしたら自分を“TYPE-D”として再利用しているのではと思うと、ディック・エマードはブルツと背を震わせた。ジュンヤに言った、『もしかしたら俺は、“政府総統として”この世界に君臨していたかもしれないってことだ』あの台詞が現実味を帯びてきた。……が、肉体はもう限界を向かえようとしている。『君は実験体としては成長しすぎた』十七年も前にティン・リーに言われていたのだ。例え不死身でも、老いには勝つことが出来ない、いずれ死ぬ。しかも、人生の折り返しをとくに過ぎたような肉体を今更リーが欲するとは思わない。

何か、他に勝算があるに違いない。反政府組織の勢力拡大など、リーにとってはたいした問題では無いのかも知れない。

寧ろ、その奥にある強大なプロジェクト 恐らくは、自分たち親子が巻き込まれたProject-Tと呼ばれるそれに関連する何か、その成功の先を、ティン・リーは見つめているのだ。

中央監視ドームの内部監視室、トリストの修復を進める技師たちに混じって作業するディックは、マザーから提供され、ドア二枚分ほどの大きめの電子ペーパーに出力された政府ビルの見取り図を床に広げていた。彼が初めてそれを所得したときと同じように、順番をバラバラにされた図を並べ変えていく。狭い監視室の床はただでさえトリストの部品や作業道具、コードで一杯だというのに、そんなことは一切構い無し、ディックは床にへばり付くようにして、自分の思うまま無言で作業を続けていった。

必要のない箇所を取り除き、最上部、ジュンヤの匿われている研究室エリア、それから地上三階から地下五階まで、それから忌々しい地下十階を残す。ジュンヤのいるDNA分析室は、ビルの中腹に位置し、エスターが捉えられていると思われる地下実験室の丁度真上にあつた。

「大体の位置は確認出来たが、やはりこれだけで突入するのは難しい

な。直接地下実験室に飛ぶには、やはり、正確な位置情報が必要だ」  
ボソツと呟いたディックの側に、短い仮眠から戻ったアンリがか  
がみ込んだ。電子ペーパー上の見取り図を眺めながら、ふうんと一  
声。

「フレディは無事に回収されたんだろ」

「恐らくはな。さつき、バスから連絡があつた。該当する荷物は  
DNA分析室の男に渡つたらしい。その後どうなったのか、無事に  
研究室に運ばれたのかは未確認だ」

「回収されたんなら、あとは荷解きしてもらえれば、何とかなるん  
だよな」

「アンリやマザーの推測したような人物だったとしたら、そうする  
だろうな」

ディックの言葉はまるで、相手を全く信じていないかのようだ。

不信感があるのはうなずける。機械的にはじき出されただけの協  
力者、状況から推測しているだけで、どんな人間か、あんな短い通  
信だけでは判断しきれない。信じるしかないから信じている、それ  
だけだと言われても、誰も反論できない状態なのだ。

「で、その見取り図データをどうするの。まさかと思うけど、これ  
からビルに突入しようなんて考えてないよね」

黙々と作業するディックの顔を覗き込むようにして、アンリは尋  
ねた。視界を邪魔され、蠅を払うようにしてアンリの頭を遮ると、  
ディックはフンと鼻で笑う。

「突入しようとしていたら、どうなんだ」

「時期尚早だ。武器も整つてない。どうやったら相手の不意を突け  
るのかだとか、どういう経路で攻めていけば被害を最小にとどめな  
から政府総統を倒せるかだとか、そういうのは考えないの」

アンリにしてはまともな意見だ。

確かに、今の丸腰状態で現地に飛ぶのは無謀すぎる。そんなこと  
は、ディックにも十分わかっていた。

「フレディを起動させたら、俺の携帯端末にメッセージが飛ぶよう

になっている。それからフレディを介して、ジュンヤの持っている  
小型端末のデータをこっちに寄越す方法を向こうに教える。俺の読  
みが正しければ、レナという女が端末の図面、もしくはプログラム  
を解析しているはずだ。俺はそのデータを貰う。それから、フレデ  
ィ共々地下へ向かわせるつもりだ。勿論、それ相応の装備をして、  
だが」

位置を指し示しながら、アンリに説明する。アンリは未だいぶか  
しげに眉をしかめるばかりで、納得はしていない様子。

「不満か」

ぐつと身体を起こし、ディックは左後ろで頭をかきむしるアンリ  
に向き直った。

「いや、あちこち引っ掛かって。“ジュンヤの持つてる端末”って  
のは」

「転移装置の小型版のようなものらしい。目撃したバースとロツク  
の話では、手のひらサイズほどの赤い二つ折り端末だったと。青白  
い光に包まれ、エスターと共に消えたという証言から推測して、空  
間転移装置の反応だ。憶測だが、転移装置の仕組みを凝縮させ、機  
能を絞ることで小型化させたんだろう。俺の作っていた埋め込み型  
転移装置は、現役だが二十年も前の代物だ。今の技術なら小型化、  
携帯化も可能はずだ。そいつを、何とかして作れないかと思っ  
てな。一から開発したんじゃ、とても時間が足りない。データを貰え  
れば、似たような物が短期間で作れるからな。あと、気になる  
ところは」

「“フレディ共々地下へ”、地下の実験施設にあなたの娘がいるの  
は、間違いないんだね。確証は」

「一〇〇%、間違いない」

「あとは、そうだな、わざわざ小型の転移装置にこだわるって  
ことは、まさか自分一人で突入しようだなんて、思っ  
てない、よね？」

恐る恐る尋ねたアンリに、ディックはなかなか答えようとしなか

った。数分の沈黙が流れた後、「何故そんなことを」ディックはしばらくくれる。ギョロリと睨み付けられ、ハッと息を飲むが、こんなことで蹴躓いてはだめだと、アンリはもう一度、ディックに尋ねた。

「博士、あなたは絶対、一人で何とかしようとしてる。違う?」

引きつったアンリの表情を、ディックはしばらくまじまじと見つめていた。彼の考えていることがサツパリとわからないアンリにとって、目を合わせるといふ単純な動作さえ苦痛になる。気がつくとも視線は別の所に移ってしまっていて、まるでそんな質問をしてしまったアンリ自身が、愚か者のように思えてしまうのだった。

気迫、存在感、行動力、どれをとっても、ディック・エマードという男は常人じゃない。人間とは別の次元で動いているような彼に、尊敬と共に畏怖を感じる。彼はE.U.ドームにはいないタイプの人間だ。必要なこと以外は殆ど口に出さないのに、自然と信頼感を寄せ、追従してしまう。

たくさんの小規模ドームが群れを成しているE.U.ドームでは、各区画の責任者がリーダー的な役割を果たしてはいたが、絶対的な存在というものがなかった。時差にして六時間離れているネオ・ニューヨークシティの政府総統でさえ、カリスマにはなり得なかったのだ。恐怖感を植え付けられた一般市民の士気を高めるためには、それに打ち勝つ強靱な精神力を持つリーダーが必要だが、それに相当するような人物は誰一人見当たらない。ハロルドをそのかしディックに近付いてきたアンリ自身、トリストを操るほど精神力は強いが、群衆を引く張るほどのカリスマ性があるわけでもない。キースのような無鉄砲な人間も、そこそこにはいるが、突出しているわけでもない。各区画の責任者たちにしたって、事態収拾に尽力していると言っても、あくまでも事務処理的に収拾させているに過ぎない。散在するドーム群の全てを掌握するほどの力を持つ人間は、存在しないのだ。

今は、誰かがぐいぐい引く張っていかなければならない時期のは

ずだ。“我こそは”という人間がない、そこに、守備の弱さを感じざるを得ない。

もしかしたら、この暗い過去を背負いながら黙々と生きている目の前の男がそれに値する人間なのかも知れないと思うと、アンリの肩は震えた。だからこそ、一人でビルに突っ込むような無謀なことは、絶対にして欲しくなかったのだ。

政府ビルのあるネオ・ニューヨークシティとE.Uドームの時差はを考える。こちらが夕刻でも、向こうはまだ朝だ。恐らく政府側では、これからの時間、動きが活発になるはずだ。島の地下冷凍施設に赴いた特殊任務隊の二人、ウォーレス・スウィフトとエドモンド・ケインが戻らず、半ば自爆するような形で施設に恐竜型のロボを投入したことも、政府側の焦りが見える。マザーが言うには、ビル内ではやはり特殊任務隊員のパメラという女が惨殺され、その犯人を捜すのに警備員たちや軍が躍起になっているらしいとのこと。

全てが一本戦で繋がっていく。事態は着実に動いている。

マザー・コンピュータ経由で侵入したことを敵に知られる前に自動的に回線が遮断してしまい、しばらくジュンヤたちとは連絡が取れなくなっていたが、あれからだいぶ時間が流れた。接続開始可能時間も迫っている。

「俺一人で突入することに問題がある？ おかしな話だ。今は別に本格的に突入しようとしてるんじゃない。相手の信頼を取り付けるために、そしてヤツらがまともな人間かどうか判断するために、一度飛んでみるだけだ。文句は無かるう」

やっと口を開いたディックから、吐き捨てるような台詞。

「そのまま突っ込んで、總統と対峙するわけじゃ、……ないのか」  
アンリの言葉に、ディックはプツと小さく吹き出した。

「俺がそれほど愚かだと？ 互いに理解し合わなければ先に進めない。だから行くだけだ。心配なら一緒に飛ぶか？」

ディックはアンリを小馬鹿にするように、また鼻を鳴らした。

監視するつもりなど毛頭無いが、巻き込まれた手前、知ることが

出来るなら全部知りたいという欲求も確かにある。そしてなによりも、ハロルドやキースが倒れた今、ディックの暴走を止めることのできる数少ない人物の一人になってしまったことも、アンリを突き動かす。

「行くよ。敵の本拠地とやら、僕だって多少興味はある」

アンリは嫌な汗をかいていた。じつとりと濡れた額を袖で拭いながら、脈拍が早まるのを感じる。

この先、何が起ころうとしているのか。心中にあるのは、不安以外の何ものでもなかった。



“自分だけが不幸だなんて思っではいけない”

ジュンヤにだって、そんなことはわかってた。自分だけの世界に閉じこもって行動したことが全てマイナス働くことも、自分を見る他人の目がどんどん変わっていくのも、全て内向きに動いていた結果だ。何とかそれを打破しなければならぬ、変わらなければならぬと心に決め、パメラを倒し、ダニーやレナに自分のことを話したはずだったのに。

レナの寂しそうな視線は、ジュンヤの心をぎゅっと締め付ける。彼女の表情に、ジュンヤは恐ろしく違和感を覚えた。

「私たちが協力するのは、決して単純な理由じゃないんだ」

だが、レナはその先を口にしようとしないう。まるで殻に閉じこもったように、言葉を飲み込んでしまう。その様子がかつての自分とまるきり重なって、ジュンヤの心臓をバクバクと激しく動かした。「この世界は複雑に出来てる。自分自身の疑問や不安もあって、私は深いとこまで色々探った。だけど、掴んだ事実はどれも嘘くさい。私も含め、全部が全部、作り物に見える。ジュンヤはそういうこと、ないの？ 自分の存在価値、これからどうしたらいいか、考えたことはあるの」

どこかで聞いた台詞だった。

ジュンヤはそっと目を瞑って、記憶を探った。

『存在意義だよ』

『何故自分はそこにいるのか、何故生まれてきたのか、これから一体、どうやって生きていくべきなのかってことさ。誰にだって、生まれてくる意味がある。……だとしたら、自分はどうか。必要とされているのか。いるべき場所は？』  
そんなことは考えないのか

い？』

リーのヤツだ。彼もそう言っつて、ジュンヤやエスターの心を揺さぶつてきた。彼の正体を知り、呪縛が解けたと思っつていたが、実際はそうでないのかも知れない。まだ、あの男のカリスマ的部分に、心を動かされそうになる。

「政府総統の存在つてのは、ビルの中にいる人間、このネオ・ニューヨークシティに住んでる人間にとつて、一体何なんだ」  
ジュンヤは前触れもなく、急に話題を変えた。

レナが目を丸くし、ポカンと口を開けるのも構い無し、彼は一方的に話しかける。

「反政府組織内では、彼は完全に“悪”だった。何故全てを支配しようとするのか、何故自由を許そうとしないのか。そればかりで、結局彼が何者なのか理解している人間なんてどこにも居なかつたはずだ。じゃあ、このネオ・ニューヨークシティではどうなんだ。世界を支えるこのビルの中で、彼は一体どんな存在なの。……あの男にそそのかされ、俺は大切なものを失いかけてる。彼を守ろうとする人間、彼の意思を尊重する人間、そういうのには虫酸が走るけど、そうなるにはそれなりの理由つてのがあはずだ。“政府総統”つていうのは、そんなに“絶対視すべき存在”なのか？」

二人だけの研究室、誰もいないことも災いしたのか、ジュンヤの声は無意識に高まつていた。未だ幼さの残る声が研究室中にわつと広がると、レナは慌て、彼の口を自分の手のひらで無理矢理塞いだ。「シッ。……心配がする。誰かが近付いてくる。この話題はもうやめよう。いいね」

頭に血が上つて、ジュンヤは冷静さに欠いていた。午前十時を回り、ビル全体が活気付いてきている。耳を澄ますと、確かに足音がたくさん聞こえてくる。壁一枚挟んだ隣の研究室からも、ごにごによごによと話し声が漏れ伝わつてくるし、何かの装置の動くような音、電子音なども、微かにだが、混じつていてる。誰がいつ、依頼や荷物

搬入と称して、研究室に入ってくるかわからない状態だった。白衣を着せられ、伊達眼鏡までさせられて、周囲に溶け込むよう配慮してくれた二人の行為をすっかり無下にするとところだったのだ。

「興奮しすぎ。いい、冷静に、冷静にだよ」

声を潜め忠告するレナに、ありがとうと一言、ジュンヤは額に滲んだ汗を、手のひらでぬぐい取った。

「例え反政府的な立場にいたとしても、それを誰かに聞かれちゃダメ。信頼の置ける人物だと思ってた人が裏切るのは、ここでは常だ。いい、あんたはあくまで、研究室に助手として入ってきた雇われ人。この研究室内では何を言っても構わないけど、一步外に出たら全員敵だ。わかってるね」

耳元で忠告され、ジュンヤは何度もうなずいた。そうだ、ここは政府ビル、敵の本拠地のご真ん中。誰もがレナやダニーのような理解ある人間でないことを再認識すべきだった。

ジュンヤは息を整え、襟を正した。何故か、ディックのイメージが脳裏に浮かぶ。自分も彼と同じ白衣を着せられていることを、皮肉に感じる。一体彼は、どんな気持ちで政府ビルの中にいたのか。“実験体”だと言っていた。“人間じゃない”“新しい器”、自分というものの正体を知りながら、娘さえ実験体にされながらも、彼は必死に生きていたに違いない。自分のように、迷い、流されているのとは違う。確固たる信念を持っていなければ、こんなとんでもない環境で、まともな思考でいられるはずなどないのだ。

何度気力を奮い立たせようとしても、どこかでつまずいてしまう。そんな自分を、ジュンヤはまた愚かしく感じていた。今は迷っている余裕など無いはずなのに。レナの声は、そうして何度も挫けそうになるジュンヤの背を、前へ向かうよう、必死に押しているように思えた。かくまってもらっているうえに、肩身が狭い。どういう顔をして彼女らに接したらいいのかと思うと、まともに顔を見ることがすら出来なかった。

ドアの向こうでピツと電子音が鳴る。

顔を上げると、入り口のドアが心地いい音を立ててスライドした。ダニーだ。おいしよと声を出しながら、彼は大きな荷物が積まれた台車を、室内に押し込める。

「おま……たせ、しま、した」

大きさに呼吸を乱して汗を拭くと、レナが、

「あれね、反重力台車だから、重さなんて感じてないんだよ。演技、演技」

立ち上がって、ジュンヤに囁いた。

現実に戻され、彼はレナの後にくっつくようにして、ダニーの元に向かう。

部屋の中央に台車を動かすと、ダニーは反重力装置のスイッチを切った。シユンと空気の抜けるような音がして、台車はゆっくり床に降りた。茶色の段ボール箱には黒色でデカデカと“DOG-TYPE ROBOT”の走り書き、“D”のサインはない。あからさますぎてすぐに見つけられたとダニーは笑った。

「ご苦労さん。荷物、なんとかあったみたいね」

「ああ。ちよつと危うかったけど、何とか。ネルに詰め寄られた。無理矢理かわしたけど、後で何か起きたらそのときはゴメン」

「そのときは、ね」

「まあ、ネルなら大丈夫なんじゃないの。話によると、彼もこつち側の人間らしいし」

「へえ。初耳だな」

“こつち側”とは恐らく、“反政府的な考えを持った人間”という意味に違いない。さっきのレナの台詞、『信頼の置ける人物だと思ってた人が裏切るのは常』そこから考えても、単純に信じ切ってしまうことにはやはり危うさがあるのだろう。互いに探り合いながら

こんな状態では、とてもじゃないが、大声で反政府を口にするのは無理だ。ある種、ダニーとレナ、同じ考えを持つ二人が同じ研究室に配属された、それだけでも希有なことなのかも知れない。

床に散らばった本やゴミを片付け、三人、箱の周りに集まった。

大きさ一メートル四方、飛空艇の中で見たドーベルマン型のロボが入るには、ぴったりの大きさだ。テープをはぎ取り、中を開く。白いスチロールの弾衝材に包まれた黒い犬の身体、それは、エスターが“フレディ”と呼んでいた、あの犬に違いなかった。

「これ、既製品じゃないよね。誰かが一から組み立ててる。このロボ見てよ、恐らく廃材の寄せ集めだよ。……このこと、この、色と質感が違う」

流石機械に詳しいレナは、覗き込むなりその犬の細部まで舐めるように観察しだした。この研究室内ではデータ解析を担当しているらしいが、本当は機械関係に強いのだろう。さっきだって、小型端末の図面とやらを面白がって引いていた。間違いなく変わり者だ。「それ、ディックが作ったらしいよ」

「へえ、流石！ そうか、そういえば、エマード博士、元はロボットの工学関係だったっけ」

レナはよく知ってるな、思いはしたが、ジュンヤは口に出さなかった。二人は自分より、ディックや彼の周辺事情をよく知っている。敵だらけのビル内で、これだけの知識と行動力を持った彼らに協力して貰えるのは心強いと思う。だがジュンヤの本心は、長年一緒に暮らしてきた割に何も知らない自分へ恥で満たされていた。今頃になって本人の口からあんなことを言われたとしても、心のくすぶりは簡単に消えるようなものではないのだ。

箱の中には、フレディの本体と共に、充電用のアダプタと、二つに折りたたまれた白い紙が入っていた。フレディの上に無造作に置かれていた紙切れを、ダニーが手にとる。なにやら殴り書きしてあるようだ。

「『背中の方を開け、スイッチを入れる。起動後、キーワードを入力すれば、連絡を取り合うことが可能になる』……この走り書きも、エマード博士の？」

「ああ。でも、かなり乱れてる」

「キーワード入力って……もし、無関係の人間に荷物を引き取られ

てしまうようなことがあっても大丈夫なように、わざと設定して  
るんだよな。ジュンヤは何か知ってる？」

「いや、俺は何も」

「まず、箱から出して、スイッチでも何でも入れればいいじゃない  
の。それから考えようよ」

小さな紙ひとつに顔をしかめる男らに我慢できなくなったのか、  
レナはその弱い腕で、よいしょと大型ロボットを箱から取り出そ  
うと手を伸ばした。首と胴体の真ん中に手を当てて引きずり出そ  
うとするが、女手ではどうしようもない。見かねてダニーとジュンヤ  
が、申し合わせたかのように同じタイミングで、ロボットを箱から  
引きずり出した。ずっしりと重いのは、中に機械がたくさん詰まっ  
ているのが原因か、それとも、最新の軽量化部品が手に入らず、取  
り急ぎ手元のものだけでこしらえたからなのか。小さな子ども一人  
分よりも、はるかに重く感じられた。

声を掛け合い、慎重に床にフレディの本体を下ろす。続いて犬の  
関節部を動かして“伏せ”の格好にさせたあとで、ダニーはメモにあ  
るように、背中にあるくぼみに爪を引っかけてフタをこじ開けた。

中から現れた小さな丸い赤ボタンが、どうやら起動スイッチらしい。  
「じゃ、押すよ」

フレディを困うようにして屈んだジュンヤとレナに確認してから、  
ダニーは恐る恐る、スイッチを押した。ピピッと微かな電子音の後、  
中のコンピュータが起動するような音と振動、ボタン下部の液晶  
画面がチカッと明かりをともし、文字列を表示させていく。五セン  
チ角の液晶の中を下から上に、軽やかに文字が流れ、十何秒かして  
ようやく動きをやめると、最後に一つの文章だけが画面の上部に残  
っていた。“My best treasure is……” 続き  
を入力して下さいとばかりに最後の点が点滅している。

「宝物？ My っつてのは、誰をさしてるんだ」

首を傾げるダニーの横で、ジュンヤはハッと息を飲んだ。その質  
問は、間違いなく荷物の受け取り主が、ジュンヤと一緒にいる味方

なのかどうか判断するためのものだと、気付いたのだ。

「キーワード“Esther”、ディックの娘の名だ。多分、間違いない」

突然、はつきりと告げたジュンヤに、ダニーもレナも目をしばたかさせた。

迷っている場合などない。ダニーは言われたとおり、画面の半分から下に現れたパレットをタッチして、文字を入力していく。

最後の“R”を入力後、“Enter”キーを押下すると、“OK”の表示。

「当たった」

ホツとしたのも束の間、今度は数字と記号の羅列。

「え、何これ。レナ、わかるか」

ダニーからレナに交替し、文字の解析に当たる。

「あのさ、ダニー、あんた動転しすぎ。数字とアルファベットの配列からして、これ、通信端末のアドレスじゃない。ジュンヤ、さつき返した端末に、これ、入力してみて」

言われるがまま、ジュンヤはポケットから取り出した赤い二つ折り端末を開き、文字を入力し始めた。数字とアルファベット、記号を順に打ち、“Enter”。数十秒の沈黙の後、チャリンとチャイムが鳴った。

「つ、繋がった」

興奮気味に息を弾ませるジュンヤ、その手の中の端末画面を食い入るように覗き込む二人。

相手は間違いなくディック・エマードなのか、不安で千切れそうになる胸を、ジュンヤは無意識にかきむしっていた。

「……ディック、ディックなんだな。聞こえる？」

恐る恐る端末の向こうに話しかけてみる。

耳を傾け、必死に音を拾おうとする三人の真ん中で、

「……遅い、待ち呆けたぞ」

ディックの低い声が響いた。

## 87・これから世界が壊れていくとして

「待ち呆けた、だって？ そりゃ、どうも」

ぎこちない挨拶、ジュンヤは何かに怯えるように、手のひらに乗せた端末に恐る恐る話しかけた。スピーカーから聞こえてくるフンという鼻息に、彼は思わず顔を引きつらせていた。

『少ないヒント頼りにここまで出来たのは、ひとえにその二人の力あってだろう。運が良いな、ジュンヤ』

嫌みつたらしいディックの声は、ジュンヤの神経を逆撫でする。

が、こんな事にいちいち反応しては、ダニーやレナにも迷惑が掛かってしまう。ぐっと怒りを飲み込んで、ぎゅっと端末を握りしめた。

「で、今後、どうしたらいい？ 約束通り荷物は回収したし、端末のデータをそっちに渡せるようにレナに用意してもらってる。データの受け渡し方法は？」

三人突っ立って、端末から聞こえてくる音に耳を澄ませる。ボリユームは最大だが、雑音が入り、少し聞き取りにくい。

『データは今どんな状態だ』

「とりあえず、紙に鉛筆で書き殴ってる。読み取りやすいように打ち直すことも可能だけど」と、レナ。

『いや、その必要は無い。書き取った紙をスキャナで読み取って画像データを圧縮して転送して貰えればそれで構わない。細かいところはこちらで解析する。ジュンヤの端末から、データを添付して送ってくれ』

「ラジャー」

レナはデータ送付後、恐らくディックが小型端末を再現させてこちらへ飛んでくるに違いないと、ニヤニヤ口元を緩ませていた。そうすれば、何かしら面白いことが起きるのではないかと、不謹慎にも考えている。彼女はそれを口には出さなかったが、顔にはデカデ



力と書いてあった。ダニーもジュンヤも、そんな彼女の無邪気さに苦笑いする。ただ、ジュンヤはその中に、また別のものを含ませていたのだが、そんなことは、あとの二人にはわかりようがなかった。『引き続き、頼みたいことがある。政府ビルの監視システムを一斉にダウンさせたい。三日後、俺が提示する時間に停止させることは可能か』

「それは、ちょっと難しいんじゃないかな」

今度はダニーが口を挟んだ。

「簡単に言うけど、そんな大それたことをしたら、こっちにだってそれ相応のリスクが降りかかってくる。この研究室内から遠隔操作してつてのは、間違いなく無理だ。レナ一人で出来るわけがない。となれば、協力者が他に必要になるし、警備室に侵入することも考えなきゃなくなる。下手したら、このドームのメイン・コンピュータをいじらなきゃいけないかも知れない。それに、もし仮に三日以内にシステムダウンの方法を見つけたとしても、その三十分後に俺らが連行されるのは、目に見えてるだろ。そんな危険を冒すようなら、これ以上の協力を拒む権利だって、こっちにはあるはずだぜ」

流石に防御に出た。そうだそうだとレナもうなずいている。

あごまで生えた無精ひげを撫ぜ、ゴキゴキと肩を鳴らして、ダニーは参ったなと小さく呟いた。

事態は分析室の二人が感じているよりずっと急加速的に進んでいる。これを理解してもらうにはそれなりに時間が必要だが、未明に事情を説明し始めて今まで、ほんの何時間だけではとても語りきれないのだ。恐らく、ディックはエスターを助け出すためにあちこちに指示を出しまくっている。そして、何とかしてビルまで飛び、彼女が隔離されているだろう場所に突撃するつもりだ。ジュンヤにだってそんなことは簡単に想像できていた。だが、それだけではないようにも感じる。

「なあ、ディック。……もしかして、時間が、ないのか。エスター

に何かとんでもないことが起きてる、そういうことなんだな」

まさかと思いながら、ジュンヤは慎重に言葉を繋いだ。“今更彼女を見つけたところで、どうすることも出来なくなっているはずだと、パメラも言っていた。“エスターをマザーと同化させようとしているようだ”と、ディック自身、確かに話していた。そのため何らかの処置が、このビルのどこかで行われている。そう思うとやりきれないむかむかとした気持ちでジュンヤの胸の奥底から湧き上がってくるように感じられた。

恐らくディックはビルのどこで何が起きているのか、全て知っている。その上で、どう動けば良いか緻密に計算しているのだろう。

冷静にならなければ怒りで気が狂いそうな状況で、これだけしつかりと物事を前に進めることが出来る、それはある意味才能に違いない。自分はそういうことは出来そうにもないと、ジュンヤは渴いた喉に唾を押し流した。敵の本拠地にいながらどうやって動いたら良いのかわからず、ディックの指示を待っているだけの状態なのに、自分が動かなければ誰も動けないような状態で、相手に的確に指示を出すなんて到底無理だ。好きにはなれないが、尊敬しないわけにはいかない。これが、ディック・エマードなんだと、ジュンヤは思い知らされていた。

『……マザーは十日だと言った。だが、実際はもつと短いはずだ。半分、そう見越している。いいか、よく聞け。恐らく一週間以内に、この世界は“崩壊”する』

ディックの、低い声が室内に響いた。

重々しい言葉にもかかわらず、研究室の三人は口を開けたまま言葉に詰まり、間の抜けたような顔で固まってしまう。

「ほう、かい？ 崩壊する？ この世界が？ まさか」

ダニーは左の頬を引きつらせ、ジュンヤの手の中の端末に、ぐいと迫った。何の根拠があつてそんなことを、そう言葉を繋ぎたかつたのだが、あまりの衝撃に、その後の台詞が口から出てこないようだ。

『ヤツが、世界中を巻き込んで、何か恐ろしいことをしようとしているのは、火を見るより明らかだ。その結果、何が起きるのか俺にだって想像できない。今、政府のヤツらが大人しいのは、その準備に取りかかっているため。でなきゃ、ジュンヤが無事でいられるわけがない。特殊任務隊を投入しなきゃならないような事態だ。彼らが犠牲になっても、成し遂げなければならぬ“何か”がある。……つまり、ヤツらにも余裕がない。追い詰められている。これは、チャンスなんだ。三日後、ネオ・ニューヨークシティに総攻撃をかける。それまでに、避難できる人間は可能な限り避難させておいてくれ。先手を打って、ドームを崩壊させる。これは脅しじゃない。中から、外から、様々な方法で攻撃をするつもりだ。混乱承知で、このことを出来るだけ多くの人間に拡散させて欲しい。犠牲は少ない方がいい。確か、ダニーと言ったな、その医師免許所持者』

「あ、ああ」

突如名前を呼ばれ、ビクツとダニーが反応する。

『お前の伝手でいい。緊急時に協力して貰える医者なるべく多く探しておけ。できる限り多くの薬とベッドも。いいな』

「わ、わかった」

『そして、ジュンヤ。お前はダニーと協力して、これから俺が送るデータを頼りに、何とかして地下実験室への道を辿れ』

「地下実験室？」

『そこに、エスターが捉えられている。但し、指示を出すまで絶対に、地下実験室に立ち入ってはならない。勝手に入ったとしても、命の保証はしない。俺が送ったロボット犬、フレディを実験室の近くまで連れて行くだけでいいんだ。何も、人間がそこまで侵入する必要は無い。フレディに内蔵された位置情報記録装置に実験室の座標を記録させて欲しい。なに、簡単な仕事だ。敵に見つからぬよう上手く誘導して、正確な座標を得る、ただそれだけだ。三日後、それを頼りに、直接現地へ飛ぶ。わかったか』

わかったも何も、イエスしか言えない立場、ジュンヤはどもりながら「ああ」と返事し、うなずくしかない。

他の二人も、顔色を変えじつとて耳を澄ませ、ディックの指示を噛みしめていた。

「とんでもないことに巻き込まれたな」

回線が途切れた後、ダニーはぐしゃぐしゃ髪の毛をかきむしりながら呟いた。頭が混乱しているのか、足元に散らばった資料や本を避けながら何度もグルグルと室内を歩き回っている。

「総攻撃をかける？ 馬鹿な。三日後って言ったらあつという間だ。いくらエマード博士の指示だとしても、こんなことに本当に協力する意味があるのかどうか、俺たち自身、きちんと考えて行動しなくちゃいけない状況にあるんじゃないのか」

「そりゃ、そうだとは思うけどさ」

定位置の椅子に座りながら、レナも首をかしげた。

「博士が一体何を考えているのか、全部知りたいと思ってても、恐らくそれを伝えるには難しい状態なんですよ。傍受される危険性があるのをわかっていて、攻撃だなんてことを口走るんだもん、本気だと受け取っていいと思うよ。……ジュンヤは、博士が急ぐ本当の理由を知ってそうだけど」

身体を横にして、どうなのと言わんばかり視線を向けてくるレナを避けるようにして、ソファアにかけたジュンヤは、目線を反らしゆっくりため息をついた。二人の視線が痛い。早く何か喋らなければと、焦りからまた喉が渴く。

「こんなことを話しても、信じないと思うけど」

念を押した上で、話してみようか。急転していく事態に、ジュンヤはこれ以上置いていかれる訳にはいかなかった。じっくり理解してもらおうだなんて、悠長な考えは捨てなければならぬ。

ジュンヤは息を整え、おもむろに顔を上げた。ひとつひとつ、言

葉を考えながら話していくしかないのだ。

「……政府総統ティン・リーは、マザー・コンピュータを、エスター、つまりディックの娘の身体と同化させて、操るうとしているらしい。『生きた“神”を造り、世界を完全に支配しようとしている』、ディックは俺にそう言った。どこまで信じれば良いのか、俺にはわからない。でも、それが本当だとしたら、世界はとんでもないことになるんじゃないか、とは思う」

「とは思うって、なにそれ」

「だって、漠然とした恐怖しか感じない、残念なことに。実感が湧かない。俺には、この世界がどうなるかなんていう、スケールの馬鹿デカいことは、理解できないんだよ。それより、エスターが、…彼女がどうなってしまうのか。あいつの人格は、心はどこへ行ってしまうのか。そればかりが気がかりでならないんだ。ただ、彼女を助けたい。パメラは『もう間に合わない』と、ディックも『時間が無い』と言ってる。もう、いつ事が起きてもおかしくない状態なんだと思うんだ。ディックの言った三日ってのは、本当に最低最悪の事態を見越しての日数なんだと思うよ」

ぎゅつと唇を噛みしめ、涙を浮かべるジュンヤを見て、レナはふうんと鼻から抜けるような声を出す。ギイと椅子を鳴らして黒髪を揺らし、背もたれに寄りかかった。

「そっか、ジュンヤはその娘が好きなのね。父親は好きじゃないけど、彼女のことは、いてもたってもいられないくらい好き、と。そういうわけ」

レナの唐突な言葉に、ジュンヤは顔を赤くする。頭天边から蒸気を噴き出す勢いで立ち上がり、恥ずかしそうに口をパクパク、何か言おうとしているらしいが言葉に出ず、必死に身振り手振りで訴えてくる。

「何今更のように言ってるんだよ。最初からそんなこと、わかりきってるだろうが」

「今更だけど、きちんと本人に確認してるんじゃないの。好きだから」

ら助けたい、そういうことなんでしょ。ならそうと、早く言えばいいじゃないの」

ああーっと声を上げて、ジュンヤは両手で顔を覆った。恥ずかしいどころの話じゃない。どこか穴があるなら何とやら、隠れる場所も何もないのにどうすればいいのか、立ったりしゃがんだり、とにかくその場から逃れようと思っっているのだろう、声にならないような声を出してわめいている。

ようやく落ち着いて深呼吸できるようになるまで、ダニーとレナに大笑いされたが、もうここまできると吹っ切るしかない。

「好きだから助けたいで、何か悪いのかよ」

逆ギレ加減で睨み付けるも、もう笑いしか起きなかった。

「悪いなんて言っていないよ。でも、安心した。“重大な使命背負って来た”みたいに思ってたけどさ、案外単純な動機で動いてんじゃない。親近感湧くよ」

そう言ってレナは、床に屈んで丸くなったジュンヤの背をポンと叩いてやった。

少しだけ、二人との距離が縮んだような気がして、ジュンヤは何故かこぼれる笑いをこらえきれなかった。

薄暗い研究室、モニターに表示されるグラフの波を見つめる男。

青白い光に照らされ、その艶めかしい顔に出来た影は、いつそう彼の妖しさを際立たせる。肩まで伸びた黒髪を一つに束ね、白衣に身を包んだ姿は、まるきり一人の若い科学者にしか見えないが、彼こそ、この世界の全てを握る男“ティン・リー”に他ならない。データを蓄積させたコンピューターと計器がぐるっと辺りを囲む中、リーはレポートとモニターを睨むように見つめていた。

入り口から垣間見える実験室奥の巨大水槽には、一人の少女が生まれたままの姿で漂っている。たくさんのコードが身体中に繋がれ、マリオネットのように頂垂れている。治癒促進剤と酸素を含んだ特殊溶液は、優しく少女を包んでいた。金髪はざわめくように溶液の中で揺れ、水槽の底から吹き出る酸素のあぶくは、幻想的に彼女を撫ぜた。マザー・コンピューターとの同化を成すため脳外科手術を施され、体内に潜めたナノマシンを活性化させるため水槽に沈められた少女は、悪い夢でも見ているのか、時折水中でもがいた。その都度脳波に異常が出て、鎮静剤が投与される。手術から二日ほどはこうした不安定な状態が続いたが、今日になってようやく容態が安定してきたのだった。

水槽の側でずっと監視していたロイ・グレイは、数値に極端な変化がないことを確認して、実験室から研究室側へおもむるに足を踏み入れる。特徴的な銀縁の丸眼鏡を光らせ金髪をかき上げながら、「閣下、“E”の最新データはご覧になりましたか」とリーに声をかけると、

「ああ、今見てるよ」彼は深々と椅子に腰掛けたまま口角を上げた。「手術から三日、想定していたより急速に回復してる。これは父親の“D-13”に勝るとも劣らない結果だ。素晴らしい。問題は、今後データをダウンロードしていく中で、どういった副作用が

現れるかということ。私のように、真つさらな脳に全てを書き込むわけではない。“E”として生きていた十七年がどう関わっているのか、そこだけが気がかりだ。シミュレーションではどういう結果に？」

「九九%情報は上書きされると出ましたが、残りの1%、……実際は1%にも満たない値でしたが、外部から深層心理に影響を及ぼす何らかの事象が発生した場合は、ダウンロード後に人格崩壊を起す恐れもあると。時間までに、この値をゼロに持っていくことが出来れば、全てが上手くいくのではないかと考えます」

「1%？ “何らかの事例”とは、つまり何だと？」

「例えば、“E”の意志決定に重要な鍵となっている人物からの助言であるとか、その人物の発言、行動、ですかね。あのジュンヤという男、閣下は野放しにされているようですが、彼こそ“鍵”になり得るのでは」

言われてリーは、「ジュンヤねえ」と細く長く息をつく。肘掛けに身体を委ねて脚を組み替えると、彼はゆっくりとロイに視線を向けた。

「パメラには始末しろと言ったんだ。結果、返り討ちに遭った。一筋縄でいく男じゃなかったわけだ。流石はシロウ・ウメモトの息子、キョウイチロウの孫と言うべきか。なに、イレギュラー要素があるのも、悪くない。勿論、不要なものは排除するに越したことはないが」

「閣下の、そういう所が甘いんです。そうやって七年前エマード博士を放置したことが、今日までの苦しみに繋がっている。ジュンヤを放置しておくのは危険です。分析結果として1%でも不確定要素があるならば、排除すべきです」

「排除すべき、か」

リーはまた少しだけ口角を上げ、目を細める。

「排除するのは確かに難しいことじゃない。武力行使すればすぐにも捕まえられる、殺せる。……が、ロイ、そんな単純な問題では



ない。エマードが隠れたのはビルの外、ジュンヤはビルの中にいる。この入り組んだビルの中でたった一匹の鼠を駆除するのは難しい。尻尾を出したらそのときに息の根を止めればいいじゃないか。彼は確実に“E”を奪い返しに来るはずなんだから。恐れているのか、あの、小僧を」

愚かしいなと見下され、ロイは眉間にしわを寄せた。確かに、頼りの無い男に見えた。ES創始者の息子、言われて納得するほど育ちが良さそうな優男だ。ロイが直接話をしたことなど無かったが、自分と同世代だとはとても思えぬほど、無知で、非力な男。Eが想いを寄せている、それだけでも馬鹿げていると感じた。愛だの恋だの言えるくらい生温い場所で生きてきたに違いない。そんな人間を、総統であるティン・リー本人がビルに招き入れたのだ。無性に腹立たしかった。しかも、その非力な男がパメラを亡き者にした。リーに忠誠を誓っていたスウィフトもエドも、死んだ。全てがああジュンヤという男の仕業とは言わないが、リーが彼を招き入れたことによつて、全てが狂い始めている。そう思えばこそ、ロイはジュンヤという存在に耐えきれなかったのだ。

リーの挑発に乗らぬよう、ロイはギツと奥歯を噛みしめた。

「私は、排除すべきだと訴えます。しかし、閣下には閣下の考えが  
おありなのでしょう。私には、それ以上何も。……ところで、妙な  
噂を耳にしました」

「噂？」

「“この世界は、もうじき崩壊するのだ”と。ソースは明らかではありません。同時多発的に、全世界でこの噂が流れているようです。このビルの中でも、何人かがそう話しているのを耳にしました。これは、どういう事態なのだと考えます？」

「その件に関してはローザに調査依頼済みだが、出所なんて、調査する前から知れてる。エマードに違いない。あの男、どういつつもりでそんな下らない噂を流しているのか。まさか、救いたいだなんて無駄なことを考えているわけではあるまい。……世界は、本当に崩

壊してしまつたというのに」

「えっ、今何と」

「ロイ、君はEの経過観察に戻り給え。また何かあれば報告を」

「はい……」

一步、二歩と後ろに下がり、一礼してその場を去る。ロイの心臓は高鳴っていた。確かに聞こえたのだ。『世界は、本当に崩壊してしまつ』と。

どうということなのか、マザーとEを同化させることで、この世界の規律を正すのではなかったのか。“崩壊”、まるで全く違う方向に進もうとしている。総統ティン・リーの目には何が見えているのか。味方にも手の内は見せない。本当のことを知っているのは、恐らくリーと秘書のローザだけだと、ロイは悟る。ケネスだって、理想の世界へ導くために尽力しているはずだ。それがまさか、世界を壊すためだなんて知つたらどう思うのか。

何が正しくて、何が悪いのか。

科学で全てが豊かになるなら、それが、このビルで行われている実験の目的ではなかったのか。

リーは語った。マザー・コンピューターとEが同化すれば、“神”が現れると。それは、失われた宗教のように、全てを導く光となるのだと。

何かが間違っている。そもそも“神”とは何か。その絶対的存在の向こうに何かがあるのか。

ロイの頭は混濁していった。暗く沈んだ研究室の中、計器の明かりが闇の色と混ざって押し寄せてくる。水槽に浮かんだ少女の死んだような目が、じっとロイを見下ろしていた。物言うわけでもない、意識も無い状態で、それでもこちらを見つめている。哀れんでいるのか、いや、彼女の感情など、既に消えてしまっているはずなのに。まるで憐れな繰り人形だとも思っているのか。彼は少女に、思わず自分の姿を重ねるのだった。

白衣のポケットから、小型転移装置の赤い二つ折り端末を取り出して開き、スイッチを押す。ロイの身体は青白い光に包まれ、ヒュンと言う音と共にその場から消えた。薄暗い地下研究施設から一転して、画面は真っ白で清潔な明るい空間へと切り替わる。飛んだ先は政府ビル最上階の総統執務室。事務処理をしていたローズマリー・グリースが長細い眼鏡のレンズを光らせ、顔を上げたところだった。

「あら、ロイ。お帰りなさい。昼までには未だ時間があるわよ」

冗談言うなとばかりに無視し、前を通り過ぎようとするロイに、彼女は小さくため息をつく。彼の表情から察するに、何かしら皮肉でも言われたのだろう。しかも、言い返すことの絶対に出来ない相手に。

冷静なロイが殺気立っていることはすぐにわかった。普段はキツチリ整えているはずの頭が、そのときに限ってやたらと乱れていたのだ。垂れ目垂れ眉が、眉間のシワを挟んで真一文字になっていた。まさかとは思うけど、彼女は出かけていた台詞をぐつと飲み込む。余計なことは喋らない、それが総統ティン・リーとの約束だったからだ。

概ね、何があったのかは想像できる。Eの調整も最終段階に入っているはず、彼は恐らく、その先にあるものを垣間見てしまったのだ。

「これからどちらに？ 今、外に出るのはお勧めしないわ。ビルの中、……そうね、このフロアから下には行くべきではないと忠告しておこうかしら」

彼女の台詞に足を止め、

「ローザ、君は全部知ってるのか」

ロイはかなり急いだ様子で、振り返った。

「知っているとしたら」

作業の手を止め、椅子ごとロイに向き直ったローザは、栗色のおやかな髪を揺らして怪しく微笑む。何を考えているか知られぬよう、表情を隠すためだ。

彼女のそんな仕草にますます激怒したのか、彼はズンズンと大きく足音を立ててローザの真ん前まで歩み出、バンと勢いよく机に手を付いた。

「君が調査していると閣下は仰っていた、“世界は滅ぶ”あの噂、本当のところはどうなんだ。滅んで、しまっのか。閣下が、滅ぼそうとしているのか」

似合わぬ、いきり立って額に血管が浮き出て見えるではないか。無粋なことを考え、ロイにそこまで言わしめるほど追い詰めたりという男の恐ろしさに、ローザは震えた。

この数日、確かにあちこちで噂が立っていた。オンラインでもオフラインでも、節操無しに飛び交う“世界は、もうじき崩壊する”という言葉。発信源など、調査したところではたかが知れていると、リーも言っていた。確かにその通りだ。E.U.ドームのメイン・コンピュータの履歴に、最初の発信と思われる記録があった。その後、凄まじいスピードで噂は広がる。この政府ビルの中にも、噂を広める者が多数いるようだ。

外から、内から、このような噂が流れること自体、想定したことはなかった。人間の心理を突いて、恐怖心を煽っている。ディック・エマードという人間が何を思ってそうしたのか、ローザにはわかりようがなかった。

報告によると、各地で暴動が起きつつあるらしい。逃げ場のないドームからどう脱出すべきか、果たしてドーム外は生き延びることの出来る環境なのか等々、混乱は静まる気配を見せない。メディアは一斉にこの噂を取り上げ、真相究明と謳っては政府ビルの広報に押しかけて詰め寄っている。あまりひっきりなしに問い合わせが来るので、外部との連絡回線を遮断してしまったほどだ。

ローザは目を細め、きゅっと口角を上げた。

「あなたがそう、考えた理由は？ 何故この世界の全てを支配する閣下が、世界を滅ぼすなどと」

ロイは自分を落ち着かせるようにして、大きくゆっくりと息を吐く。そして、ずっと心にわだかまっていたものをこれでもかとローザに突きつけてきた。

「Eとマザーを同化させたその先、閣下はどうなさるおつもりなのか、いくら考えても僕にはわからなかった。考えるべきではない、この世界が更に良くなるためだと自分に信じ込ませていた。世界の秩序が保たれているのは、ある程度の規制が成されているからだというのを知っている。住民コードによって全てを把握することで、安易なる謀反を阻止できている現実も。……だが、それにも限界がある。コードからの支配を逃れるように台頭した反政府勢力は、更に勢力を増してきている。エマード博士然り、政府の方針に反する科学者らは、世界中で刃を向け始めた。確かに、おかしな話だ。ビルの外では必須とされているコードも、このビルの中では軽視されている。“コードの有り無しと能力は関係ない”なんていう綺麗事は、一見まともそうなだけで、本質を隠そうとしているだけじゃないのか。今行っている研究にしたってそうだ。Eという有機体と、マザーとの同化に何の意味がある。何故神を造り上げようとする必要があるんだ。考えれば考えるほど、僕には閣下の意図がわからない。それに、閣下自身の口から“世界は、本当に崩壊してしまう”という言葉が出たのを、僕は聞いてしまった。もし、閣下が“破壊神”を造ろうとしているのなら、僕はこれ以上協力をすることは出来ない」

「それは、本気で言っているの」

「本気でないなら、こんなこと、口走ったりしないさ」

血走った目で吐き散らすようにロイは言った。特殊任務隊の一人として冷静に物事を分析し、研究に心血を注いだ彼とは思えない発言だった。

唇をきゅっと噛みしめ、じっとロイの話を聞いていたローザだっ

だが、「残念だけど」細く長くため息をつき、

「これ以上、あなたを生かしておくことは出来ないわ。そうでしょう、ケネス」

ロイの、顔色が変わった。

ローザの後ろ、執務室横の監視室からケネス・クレパスの姿が見えていたのだ。まるで見下すようにギロリと向けられた眼光に、ロイは凍り付いた。

「お前には失望した」

それは、ロイが想像していたのとは全く違う結末を示唆していた。血の気が引き、まさかこんなはずではと、数歩後退る。

「協力することが出来ないなら、死んでもらうしかない。……その考えに達するまで、お前はあまりに知りすぎた」

ケネスは言いながら、スツと右手を挙げた。黒い銃口が、ロイを狙う。

「ま、待って、ケネス。あなただっけわかってるはずだ。閣下が、政府総統がこの世界を滅ぼすだなんて、そんなこと、あつてはならないってことを。僕はただ、正直に自分の考えを述べたまでじゃないか。この世界が滅ぶなんて、僕は考えたくない。そんなことのために、僕は尽力してきたわけじゃない。ケネスだって、そうじゃないのか。なあ！」

表情を硬くしたまま、ケネスは一步、また一步と前に出た。ローザの後ろを通り、デスクを迂回して、ロイの真ん前まで、銃口を一時たりとも反らすことなく近付いてきた。

「世界平和など、くだらぬことのために閣下にお仕えしているわけじゃない。全ては閣下の意志であり、私はその意志に基づいて動くただの兵に過ぎない。自分の価値感を持った時点で、お前は閣下にひざまづく権利すらないのだ」

「ならば、ならばあなたは、世界が滅んでいくと知っていても、忠誠を誓い続けるというのか。自らの命が、大切なものが全てなくなってしまうとしても」

全身から溢れ出る汗に、必要以上の荒い息、噛み合わない奥歯。見開いたロイの目は、じっと銃口を見つめている。

「閣下がお前の言う“破壊神”を造り上げようとしていると知ったのは、随分前のことだ。世界を支えていくために身体を入れ替えながら生きながらえてきた自分自身の存在というものに、閣下が酷く心を痛めていることも、俺は知っている。世界のあり方を、一から考え直さねばならない時期に来ていたのだ。コードにしてもそう。この、ドームという枠組みにしても。全てを組み直すには、まず、全てを破壊しなければならぬ。Eとマザーとの同化は、その一歩。全てを破壊し尽くした後、再構築するための礎なのだ」

「ば、馬鹿な。あなたは狂っている、あなたたちは、狂ってしまったている」

「狂う？ 結構なことだ。例え狂っていたとしても、俺は構わない。お前は、見たくないのか、全て無くなってしまった先にあるだろう新たな世界を」

ケネスの台詞には、微塵の迷いも感じられなかった。確信犯彼の中では全てが正当化されてしまっている。ケネスもローザも、リーも、最初から“まとも”ではなかったのだ。

逃げなければ、何とかして逃げ出し、この事実を誰かに伝えなければならぬ。

世界は本当に滅びるのだ。

とうの昔に大切なものは全て失ってしまったはずだと、ロイは思い返す。孤児のロイを育ててくれた政府機関、共に研究を続けたパメラやスウィフト、エドのことも、今は思い出し過ぎない。ビルの外で支えてくれた大切な人がいなかったわけではない。

自分を形成させてくれた全てのものに、詫びねばならないのだ。恐ろしい実験に手を貸していたこと、この世界を滅ぼすために動いていたことを。

ロイは叫んだ。

護身用に持ち歩いていた銃を、咄嗟に腰から引き抜いた。構え、

一発、火花が散り、そのまま、仰向けに倒れる。  
「遅い」

ケネスの銃弾が、ロイの額を貫いていた。  
視界が暗転していく。

冷たい目で見下ろすケネスとローザの顔が、ロイのまぶたの裏に、  
深く刻まれた。



『ロイは処分しました。よろしかったですね』  
通信機から聞こえるのは、ケネスの声だ。淡々と事実を報告してくるが、少し震えているのがわかる。

赤い端末を手にとって口元に近づけ、「ああ、構わん」と一言、回線を切る。リーは内心、やはりなと思っていた。あの様子だ、ロイは噛みついたに違いない。必要以上のことを口走ったか、逆撫でしたのか。

一人残った地下室、暗闇に照らし出された水槽に浮かぶ少女をじっと見つめる。椅子に深々と腰掛け、組んだ足を放り出して目を細めた。端末をポケットにしまうと、開いた右手で髪をかき上げる。長い黒髪を梳いて、毛先に目をやった。

この身体が無くなればもう後がないと思えば、恐怖も覚える。それは嘘ではない。マザーとの同化が済み、Eが再起動したところで自分という存在がなくなってしまうえば、研究の全てが無駄になってしまう。だが……最早、後戻りできないところまで来ていた。今更のように、全てを悔やんでもどうにもならない、それは理解しているのだ。

ロイの忠告にも一理あるのだ。“排除すべき”“甘い”、そこまで断定的に発言するには、それなりに覚悟が要ったはずだ。当然の報いがその先にあることも知っていただろう。しかし、遅すぎたのだ。全てが。

リーはゆっくりと重い腰を上げた。

薄暗い実験室で光に包まれた水槽へ、一步一步近付いていく。

TYPE-Cの新しい身体には馴染んだが、今の身体は軋みが激しい。少しずつ劣化しているのがはつきりわかる。老化ではない、劣化。音を立てて崩れていくような感覚がある。秘書のローザにも言われていたことだ、“度重なる複製でTYPE-Cの耐久度は急

速に低下している”と。

『そんなことはないと言断出来ないので残念でならないのですが、恐らくは一年と待たないうちに、身体は急速に老いていくのではないかと』

ローザの声がティン・リーの頭の中に響いた。

今後どうしようなど、当然、考えているわけがない。安全だと確信しきっていた冷凍施設を失ったこと、Dタイプの研究が頓挫したこと、Eの研究目的を大幅に変更したこと、全てが予定外だ。いつそ、予定外ならば。

リーはそつと、冷たい水槽に両手を当てた。未だ感覚として伝わってくる温度を噛みしめる。死んだように半目を開けたままのEの顔を覗き込むようにして、額を寄せた。

「やはり、君の父親が来るまで待つしか無いのか」

誰にも聞かれないように、リーはそつと、呟いた。

通信を切り、パタンと端末を二つにたたんで、ぎゅっと握り返す。

ケネスは複雑な思いでじつと手のひらを見つめていた。

「で、閣下は何と」

後ろでローザの声。

「構わないと言っている。所詮、私たちは駒に過ぎないのだ、必要無ければ消される、それだけのことだとわかつてはいるんだがな」

カーキ色の上着の内ポケットに端末をしまい、ケネスは執務室の長いソファにでんと腰を下ろした。色の薄くなった金髪頭をかきむしり、煮え切らないような表情で唸る。

ここ数日、リーが地下に籠もるようになっていたことを、彼は懸念していた。どんな心境の変化があったのか、どれだけ追い詰められているのか、計り知ることは出来ない。ウォーレス・スウィフトとエドモンド・ケインが島にある地下冷凍施設に向かってから先、予想外の出来事が続いている。Eを手に入れることが出来た、それ

までは順調に見えたのだが。まさか、TYPE-Cのストックを全て失ってしまう事態に陥るとは、流石のリーも思っていなかったはずだ。

問題は、今後、どうしていくかということ。恐らくはそれについて様々な考えを巡らしているものと思われるが、直接彼の口から説明などあるはずもなく、無意味に時が過ぎていくだけになっている。その点に関しては、ローザも気がかりでいるらしく、NCCへ候補となりそうな実験体があるかどうか問い合わせしているのを耳にした。有機体にこだわり続ける必要が無いのだとしたら、それもありかもしれない、ボディの交換が容易なアンドロイドヘータを移行することも考えねばならぬだろうと、彼女も言っていた。

ただ、あくまでもそれは周囲がそう思っているというだけのこと。政府総統であるティン・リーという男の意志ではない。

彼が何のために完全なる肉体や永遠の命の選択をしたのか、その真の理由など、誰も知らないのだ。

そもそも、この世界が出来上がった理由も、核戦争があったという過去も、本当のことなのかどうなのか、確かめようがない。時間は不可逆なもの、過去の産物の真偽を見極める意外に、過去の正当性を立証する手立てはない。全てが嘘かも知れない、そんなことはわかっている。だが、だからといってそれが直ちに政府やティン・リーという男の存在を否定する理由にならないのもまた、事実だ。

足元に転がるロイの死体に目をやった。ローザの指示で飛んできた二人の警備員が驚いた様子で担架に死体を乗せ、そつと身体に白い布をかけている。まだ垂れ落ちる鮮血が痛々しい。今殺されたのが何者かわかっていたとしても、彼らに発言権など無い。殺されるということは即ち、謀反を働いたということだと、理解しているのだ。床に広がる血痕を掃除ロボが化学洗剤で丁寧に除去し、そのまま警備員らと共に階下へ消える。まるで何事もなかったかのように静けさを取り戻した執務室では、ローザが相変わらずに事務机に向かって仕事をこなしていた。

人が死のうが、自分の主が窮地に追い込まれようが、彼女は平静だ。リーと運命を共にすると覚悟を決めている、いつだかそう話していたのを聞いた。だからといって、これだけ冷静にいられるのは気味が悪いものだ。

「……エマード博士が突入してくるのは目に見えてる。わかっていて閣下は同化を見合わせているんだらうか」

沈黙に耐えきれず、ケネスは呟いた。

「そういうことでは無いと思うけど、D-13の身体に未練があるのはよく知ってるわ」

声の調子を変えずに、ローザは答えた。作業をやめることなく、言葉を続ける。

「閣下は私に、“私が、私たる所以は何か”とお尋ねになった。恐らくは、今の身体が消失した場合のデータの移行先を考えてのこと。私は、例え閣下がD-13にエマード博士の中に入り込んでしまふ結果となったとしても、お慕い続けると。もちろん、生理的に許せるはずなど無いのだけれど。新しい身体を作り上げるまでの間、あの男になってしまふことも、選択肢の中に入れておく必要があるということよ」

恐ろしいことを平然と言う。女というのは怖い生き物だと、ケネスは身を震わせた。ソファの背もたれから垣間見える彼女の凜とした横顔には、ある意味尊敬の念を抱かねばなるまい。いくら忠誠を誓ったとしても、そこまで断言できるかどうか、自分には自信がないと思ってしまうのだから。

「とは言っても、私はD-13を次の身体に充てるのには反対だわ。何としても、それだけは阻止しなければと思っている。いつそのこと、無機体でも構わない。あのひげ面が閣下になってしまふなど、耐えられるわけがないじゃない。今、各所に連絡を取って、耐久性に優れたアンドロイドを準備するよう指示を出したわ。いざというとき、閣下の意識データを移すのは私。いくら閣下がD-13を選んだとしても、阻止する際はあるはずよ」

「……女には敵わないな、全く」

「何か言ってる？」

「いや。賢明な判断だと」

ローザに背を向けたままでケネスは言った。目を合わせた途端に、自分がロイと同じになるのではないかと、一瞬恐怖を覚えたのだ。

「まずはバックアップを作成しないと……。以前のデータは今の身体に戻る直前のものだから……。あまりに古いわね。最近、色々ありすぎたのだから、こまめにデータをとっておくべきだったわ。閣下は了承してくださいさるかしら。声、聞いたのでしょうか。どんな様子だった、ケネス」

「どんな様子も何も」一言、“構わん”だけで、何をどうしろというのか。

「お前の話ならば、聞き入れてくださるのでは。私ではダメだ、とだけ」

「そう、わかったわ」

本当に淡々と、凹凸なく喋る女だ。

ケネスの言葉に安心したように、ローザはすつくと立ち上がり、執務室後方の監視室へ足を向けた。地下実験室にいる総統を呼び寄せるのだらう。バックアップデータをとり、今後の動きについて進言を、そんなところか。

「問題は、エマード博士を誰が制止するかだ。そこがすっぱり抜けている。俺がどうにかするしか、なさそうだな」

ぐしゃぐしゃつと、また髪をかきむしって、ケネスは重々しく長いため息をついた。

## 91・最後の逢瀬

世界中で、騒ぎが広がっている。アンリはマザーとのアクセスで、それを痛感していた。

各ドームのメイン・コンピューターにも侵入し、今、それぞれのドームで何が置いているのかを確認する。“世界は崩壊する”噂に戦々恐々とし、どこに逃げるべきか真剣に考える人もあれば、噂は噂に過ぎぬと、平然に過ごす人もいる。今の段階では確かに噂に過ぎない。だが、ESとEUドームの連合がネオ・ニューヨークシティを攻撃し始めれば現実味を帯びるに違いない。

ドームには逃げ場がない。大戦時に作られた地下核シェルターが未だに残っているドームがどれほどあるのか、不明だ。それでも、ネオ・ニューヨークシティでは、難を逃れようと転移装置を利用して他ドームへ渡ろうとしている人間が、政府ビルへ殺到している。混沌としてきている。この状態を政府がいつまでも正視しているはずもなく、軍隊の投入、強制逮捕に踏み切る始末、これが異常で無いと、誰も言わないだろう。

ただ、不可解なのは、こうした状況に陥っても、政府のトップに全く動きがないことだ。総統始め、特殊任務隊のヤツらも、全く動きが配がない。それがとにかく不気味でたまらないのだ。

そして何よりも、  
『マザー、僕を情報に縛り付けているうちに、博士を逃がしたね。どういうつもり』

アンリは目の前にいる、白い女性の人型に目をやった。

真っ黒い宇宙のような空間に浮かぶ優しい女性は、アンリの記憶の彼方にいる母親と同じ声をしていた。

『私が逃がしたわけではない、彼が隙を突いただけ。残念ながら、私には彼を束縛する権利はない』

『そうやって誤魔化すんだもんね、ホント、困ったな……』

針金のように突っ立った頭をギシギシと掻きむしった。感覚など無いが、それでもしないと落ち着かないのだ。

『博士は一人でビルに飛んだんだな。一人で行くなつてあれほど…攻撃指示や作戦展開はこっちに丸投げか。まあ、こっちにだつてそれなりの体勢はあるにしても…無責任だ。あんまりだよ。最後の最後まで一緒に戦つてくれると思いたかつただけだな』

『それはあなたの身勝手というもの。彼にはそもそも“責任”などというものが無い。あなたたちが思っているほど、彼は誰かのために動いているわけではない』

『知ってるよ……彼の娘のため、なんだろ。救い出せる保証なんてどこにもないってのに』

そこまで言つて、アンリは言葉を飲み込んだ。

そう、保証なんてない。この世界が滅びない保証なんてない。本当にディックの言つたように、“一週間以内に、この世界が崩壊する”のだとして、その先どうなつてしまうのか、誰一人想像も出来ていないはずだ。ドームを破壊して、その先どうなる。昔はそうだったように、自然と共存していく？ そんなこと、あのディック・エマードという男が、真剣に考えているはずなんて。

『そう、彼はあくまで、目先のことだけを考えている。彼にとつての目的は娘の救出とリーの存在の抹消のみ。そこから先を彼に期待するのは間違いだと、忠告する』

頭の中で考えたことは、言葉として発するまでもなく、マザーに筒抜けだ。

アンリは両手を腰に当てて、ゆっくり息を吐く仕草をした。

『オツケー、マザー。あなたの言いたいことはよくわかった。とにかく、博士が行つちやつたんじゃない。どうしようもない。小型転移装置のデータを彼が入手した時点で、もう少し真剣に考えておくべきだった。……で、地下実験室とやらの様子は？ 彼の娘は未だ無事なの？』

『今のところ、変化はない。ただ、ティン・リーの周辺では一段と

データのプロテクトが強固になった。私が動向を探るのも難しい。政府上部で慌ただしく各機関との連絡を取り合っていることからしても、何かしらの対策をしているのは間違いないようだが、弾かれてしまい、それ以上の情報を得ることは出来なかった。ティン・リーがどのタイミングで私の意識データをEに取り込もうとするのか、それすら不明なのだ』

彼女の声は淡々としていて、常に起伏がない。それでも、長い間やりとりをしているうちに、アンリはそれでも、彼女のどこかしら感情らしいものを垣間見ることがある。時に涙声に思えたり、時に嬉しそうに聞こえたり、それが、あくまで錯覚なのだとしても、一人の女性と語り合っている風を感じてきたのだ。

マザーの姿は、記憶の中にいる一番印象深い人物になって心に投写されるのだという。ディック・エマードは、マザーの姿や声を、彼の最愛の女エレノアだと感じていたらしい。アンリは、恐らく自分の母親だと何かの理由で自分を置き去りにした女性なのだと感じていた。“マザーがEと同化する”それは即ち、別れを意味している。彼の感じてきたマザーという存在が、消えてなくなってしまうのだ。

世界が終わるかも知れないという恐怖よりも、マザーともう会えなくなってしまうかも知れないという不安がアンリを襲っていた。

『……もし、同化してしまったら、マザーはどうなるの。僕は、トリストに乗り込んで、あなたとは会えなくなってしまうの』  
ぼつり、言葉がこぼれた。

『私の存在は、この情報の海から抹消され、Eという有機体の意識と混ざり合うことになると考えられる。しかし、それは“死”ではない。私の意識データが完全に消去されるわけではないのだ。何故ティン・リーという男が、私という存在にこだわり続けるのか、そこを突き止める必要がある。私を取り込んだところで有機体に何の利点があるのか、私の意識を何らかのプログラムによって都合良く改変させようとしているのか、今のところ、わかることは何一つな



い……。アンリ、お前は私の何を案じているのだ。私は私であり、私以外の何者でもない。私はあくまでプログラムされたデータに過ぎぬのだ。理解しているはずだ。何を、悲しむことがあるのだ。目の前に迫っているのは決して、私の“死”ではないというのに」

「 だとしても、僕は、あなたと離れてしまうことに耐えられない。どうかかしてこの空間に留まることは出来ないの」

『アンリ、もう一度言う。私はあくまでデータに過ぎない。お前は私に何を見ている。D-13にも話したが、私は私を攻撃するものに対して防御する術を持たない。私は人間ではない。私はお前と違い、別れを悲しむという感情を持ち合わせてはいないのだ』

『そんなことは、そんなことは理解してる。してるんだ……。ただ……』

会えないのが辛い、苦しい、この気持ちはどう伝えればいい。相手は、自分のことを単なるAIだと断言しているというのに。

それ以上、マザーとアクセスし続けることが、出来なかった。

アンリは自分から意識を戻し、接続を遮断した。修復したてのトリストの中、丸く屈めた身体に、徐々に感覚が戻っていく。

「アンリさん、お帰りなさい。思ったより早かったですね」

スタッフの一人が声をかけるも、アンリはコードの繋がったヘルメットを外そうとはしなかった。

「“死”ではない……。わかってる、わかってるけど」

マザーという存在は、トリストに乗り込んで初めて感じるもの出来るものだ。温かい、母親の中に包まれるようなあの感覚は、もう無くなってしまっただろう。

あくまでも、彼女はAIに過ぎない。人間ではない、死などない。あくまで、姿を変える可能性が高いということ、プログラムを改変され、全く違う存在になってしまう可能性が高いということ、それだけなのだ。

『現実とデータとの境が全くわからなくなってしまう』と、いつだったかディックに忠告していた、それは自分にも当てはまった。間違いない、アンリはマザーを人間だと錯覚してしまっていた。そして、愛しんでいたのだ。

永遠とも思われた彼女の存在が、急に小さく脆く見えてくる。

突きつけられた現実を受け止められず、アンリはしばらく、膝を抱えたまま肩を震わせていた。

涙が完全に乾いてからヘルメットを外そう、思っていたのに、なかなかそれは止まらなかった。マザーのことを考えれば考えるほど、アンリの心は枯れていった。

だが、周囲は彼の心が癒えるまで待つてはくれない。こう沈んでいる間にも幾度となく緊急連絡のブザーが鳴り、その度に内部監視室のスタッフが「もう少しだけ待ってください、連絡しますから」と頭を下げる。同じ所から何度も問い合わせがあるらしく、「すみません、もう少し、もう少し待っていただけではないですか」と声が聞こえてきて、アンリはようやく重い腰を上げた。

天井から伸びたコードが繋がるヘルメットを脱いでそつと白いトリスト機体前面に置き、狭い機内からゆっくりと身体を屈めて這い出す。

「いいよ、僕が出る」

疲れ切って別人のようになってしまった声と表情に、スタッフの男は一瞬言葉を失って、数歩後退った。

「こちらアンリ、待たせたね」

壁面備え付けの通信端末の画面に見えたのは、ハロルド・スカールトだった。冷凍施設攻撃後体調を崩していたのだが復活したらしく、血色がいい。彼の背後で、何人かが忙しなく動いているのが見える。いかにも“急いでますよ”を押しつけているような構図、アンリは更にげんがりした。

『なんだその、恋人に振られたような顔は』

言われて思わずカチンと来た。確かに、泣き腫らした目、いつもはきつちりセットしている銀髪がヘルメットのせいで萎びているのも、そう思わせてしまう原因だろう。が、あまりにも凶星で、アンリは舌打ちし視線をずらした。

「うるさいな。そっちこそ、デリカシーないだろ。マザーとの

時間を妨げるなんて」

『ははん、お相手はマザーか。どんなあしらわれ方をしたんだ、A  
Iに』

こんなヤツのために、マザーとの余韻に浸っていた時間を奪われたと思うと無性に腹が立つ。しかも、ハロルドは悔しいくらい痛いところを突いてくる。伊達に人生経験積んでませんよと言わんばかりか。今はそんな冗談すら言っている場合じゃないというのに。アンリはまた、舌打ちで返す。

「そんなのはどうでもいいだろ。それより、ネオ・ニューヨークシティ上空はどう。どこかに侵入できそうな箇所は」

ネオ・ニューヨークシティの外から攻撃を仕掛けるため、ESの飛空挺は上空を旋回していた。エアバイクや武器弾薬をEUドームで補充し、戦闘員も増強済みだ。政府ビルの上階にあるという総統執務室を襲撃するのが目的だが、実際その場に総統ティン・リー本人がいる保証はない。ディックの証言によれば、執務室に併設して何らかの重要施設が有り、世界の全てを監視しているのだとか。まずは一通りの機器を破壊し、機能を停止させなければならぬ。

また、内部からも攻撃できるよう、直接搬入用転移装置からも戦闘員を送る計画だ。

問題は、この動きを政府の幹部がどこまで察知しているかということ。他ドームへの人口流出が数日前から始まっていることからしても、間違いなく“世界が崩壊する噂”は広まっている。当然、総統の耳にも届いているはず。相手が相手だ、わかっていながら、何の対策も練らないわけがない。地下冷凍施設襲撃の時のように思わぬ敵をぶつけてくる可能性はかなり高い。

こんな状況の中で敵の本拠地を直接攻撃する方の身にもなってみると、ハロルドは心の中で思っていた。アンリはあくまで現地には赴かない、情報要員なのだ。

『簡単に言ってくれるな。EUドームと一緒に。まるで張り巡らされた植物のツルに守られてる、異常な光景だ。中心部に政府ビルが

あるはずだから、とにかく天辺を目指すつもりでいる。降下して植物をなぎ払い、その上で侵入できそうな場所を探そうと思うが、無理なら爆破する。まあ、手持ちの弾薬で何とか出来るなら、だけどな。ところでディックは？ その辺にいるんだろ』

「ハル、残念ながら、博士は政府ビルの中だ。……全く、あのおっさん、何を考えているんだか。自由すぎて手におえないよ」

『なんだって……！ いつ、いつ飛んだんだ』

「さあね。僕がマザーと交信しているウチに、サッと消えたらしいよ」

やらかしたかと、ハロルドは画面の中、片手で頭を覆っている。誰だって同じ反応をするよなと苦笑しながら、

「何、博士に聞きたいことでもあったの」

アンリはわざとらしく丁寧にハロルドに言い返した。

『いや……可能なら、相手がどういう動きをしているのか、わかる範囲でデータを送ってもらいたかったんだが……仕方ない。アンリ、マザーに同様の内容を調査依頼してもらっていいか。俺たちだって手探り状況で突っ込みたくはないんだ』

「残念だけど、無理だね」

『どうして。マザーなら、総統周辺以外のデータ収集は即座に出来るんだろ』

「そついう問題じゃない」

察しろ、アンリは思ったが、それで通じる相手ではなさそうだ。

「マザーとの通信は、もう出来ない。同化されるのは時間の問題だしね。頼れない、僕らで出来る限りのことをするしかない、わからないのか」

画面を睨み付けた。それがどんな顔だったのか、アンリ自身見ることはできない。ただ、それまで我が儘発言を繰り返していたハロルドが、思わず息を飲み全てを悟ったように、

『……わ、悪かった。任務に戻る。GOサインだけは頼む。足並みは揃えたいんだ』

言って回線を切った。

「まさかエマード博士が、一人でこつちに乗りに込んでくるとは思わなかったな」

DNA分析室に、いつもの白衣から戦闘用の防弾チョッキに着替えたディックがいた。小型転移装置で運べるだけのものと一緒に転送してきた彼は、突入準備のために余念が無い。踏み場もなかった床は綺麗に片付けられ、ディックが持ち込んだ武器や防具が並ぶ。ジュンヤにも防護服を与え、着替えを促していた。

ダニーとレナは本物のディックに興奮しきりで、気を落ち着かせることを最優先にしようと、それこそディック本人に諭される始末。だが、今まで尊敬し続けてきた人物がその場にいることに対し免疫のない彼らが張り切るのは、ある意味仕方の無いことだ。

「俺は最初から、そうくると思ってたよ。大体、ディックがまともに誰かと連携して作戦だなんて、似合わなさすぎる」

言いたい放題のジュンヤに分析室の二人はハラハラするが、ディックはまるで気にしない様子、

「連携？俺と連携できるような人間があの場合にいても」

やはり、周囲を何かの道具としか思っていない、仲間だなんて認識は、この場にいる三人にだって感じてはいないと思われる発言をしてくる。それが彼らしさであるのだが。

すっかり着替え、エネルギー銃と替えのボトル、いつものデザイナートイグルをホルダーに仕込む。普段は嫌がって使わない暗視スコープを珍しく装着し、小型端末と繋いだ。インカムをセットし、音声チェック。これで、いつでも互いに連絡を取り合える。

「こつちからは最低限の情報しか送らない。恐らく、そこまで余裕はないだろう。で、ダニー、避難指示・救護体制は」

言われてダニーは、背筋をただした。かけていたソファからサツと立ち上がり、どんと胸を撃つ。

「それは任せて。念のため、ビルから一キロほど離れた施設を救護所として利用できるよう、医師仲間をお願いしてある。地下核シエルトターの跡地がうまく残ったから、ビルの半径二キロまでに避難指示は出しておいた。ただ、確実な情報でないだけに、疑心暗鬼で動かない人間の方が多いようだけどね」

「だろうな」

ダニーの話をどれだけ聞いているのか、機器チェックをしながらディックは何度かうなずいた。

「ジュンヤ、経路の確認は。フレディに記憶させたか」  
「何とかね」

装備を確かめながら、ジュンヤもうなずく。

正直、それが一番大変な任務だった。エレベーターから通じていたという経路は既に使用不能、非常階段を辿ったが、そこも封鎖されていた。地下へ辿るには、転移装置を使うしか方法がないことがはっきりとわかり、結局、レナに協力してもらってプログラムをいじり、少しずつ座標を動かしながら進入路を探る方法に切り替えた。監視カメラの目を盗みながら、何度となくフレディを飛ばし、やっと地下実験室を探り当てる。

「飛ばうと思えばいつでも飛ばえるよ」

ディックと揃いの暗視スコープを装着したジュンヤは、頼もしく笑って見せた。

「よし。レナ、監視システムはダウンさせられるか」

「はいよー、任せて。ただ、ダウン後は、敵に見つかる前に私たちも避難しなきゃならないけどねえ、ダニー」

いつもの席からレナが手を振る。ダニーは困ったなと苦笑いし、ポリポリと頭を掻いていた。避難と簡単に言うが、“事”が始まればまともに逃げられる確率は低くなる。レナは出来る限り博士に情報を送り続けたいらしく、そうなる、いくつか機器を持ち出さねばならない。武器だって持ち歩く必要がある。扱い慣れてもないのに、だ。

本当にどうにかなるのか、この場で後ろ向きな考えをしているのは自分だけかも知れないと、ダニーは額から伝う汗を袖で拭いた。「ところで、ESの攻撃はいつから？ その辺、うまく指示してきただろ」

と、ジュンヤ。既に身なりは整え終わったようだ。

「今は、俺の手を離れた。あとはアンリが何とかするはずだ」

「何とかって……、具体的なことは、何も、そういうことなのか。いくら何でも」

「ヤツらだって、ある程度想定していたはずだ。俺が完全な協力者にはなり得ないってことを。準備でき次第、地下へ突入する。」

時間が無い」

ディックはギリリと歯を鳴らし、言い放った。



その男は、自分以外の誰をも信用しようとはしていないように見えた。もしかしたら、自分自身さえ信じられてはいないのかも知れないと思うほど、疑心に満ちている。彼が何故そういう人間になっ  
てしまったのか、ジュンヤはまばらに受け取った情報を整理してみ  
るが、とても納得のいく説明は出来そうにない。そしてその、誰の  
ことも信用できない人間が、愚かしいと見下す自分を連れて敵地へ  
向かっている。何を考えている、ただの足手まといに過ぎないんじ  
やないのか。彼はもやもやさせた心を抱えたまま、男の後ろを必死  
に追った。

フレディの記憶した座標にポイントを合わせ、小型転移装置で地  
下に飛ぶ。エスターが捕らえられているはずの場所だ。

辿り着いた地下通路、湿った空気を吸い込みすぎたジュンヤは、  
あまりのカビつばさに思わず鼻を塞いだ。天井の低い、細く長い通  
路、通気口から降りてくる冷たい空気が背中を伝い、不気味さを増  
長させる。こんなところにエスターがいるのかと思うとあまりに不  
憫だ。ここが何のために作られた場所なのか、まだディックの口か  
ら何も聞かされていない。敵のアジトとしては十分すぎるくらい  
の風格はあるなど、本当は心に余裕なんて微塵もないはずなのに、考  
えてしまう。

「ジュンヤ、油断するな。銃を構えろ」

言われてハツとし、装備していた小型のエネルギー銃を両手で構  
えた。実戦経験の殆どないジュンヤにとって、銃はやけに重かった。  
『ドーム上空、攻撃開始。転移装置より戦闘員転送開始。博士、そ  
うちは』

アンリの声が耳元で聞こえ、

「地下到達。何か問題があれば連絡を」  
ディックは低い声で淡々と答えた。

端末と繋いだインカムが状況を知らせてくれるのはありがたいが、今はそんなことよりも目の前に何が待ち構えているのか気がかりでならない。ジュンヤは額の汗を袖で拭い、大きく深呼吸する。今のところ、この閉鎖された空間にはディックとジュンヤの二人しか存在しないようだ。

湿った薄暗い通路には、二人の足音と呼吸音だけが響いていた。銃を構えたまま、慎重に進んでゆくディックの後ろに隠れるようにジュンヤは腰を低くする。

ふと、背後が青白く光った。

視界の端で光を感じて振り向いたと同時に、銃声が響く。バタツと何かが倒れる音がしたかと思うと、足元に何かが倒れた。

「反応が遅い」

敵だ。転移装置で送り込まれてきただろう黒服の戦闘員が、血を流して倒れている。

全身にかいた汗が身体から熱を奪い、ジュンヤを急激に冷やした。一体何が起きたのか理解できぬうちに、また周囲が青白く光り始める。

暗視スコープ越しに、人の形が見えてきたと思うと、また銃声、一体一体、撃ち抜かれていく。ディックの反応の早さにジュンヤは目を見はった。銃の腕がいいとは聞いていたが、実際目にするのは初めてだったのだ。ただの科学者じゃないらしいとは思っていたが、どんな死線をくぐり抜けてきたのか。この男の敵でなくて本当に良かったと胸を撫で下ろすと同時に、つい先日まで甚だしい勘違いをしていた自分を恥じた。

まるでジュンヤの順番などないように、目の前の敵を確実に倒していくディック。死体の山をまたぐようにして通路の先を急ぐ。

「ひとつ、聞いてもいいか」

こんな状況なのに、ジュンヤはいても立ってもいられず、前方でエネルギー銃を撃ちまくるディックに声をかけた。

「ホントはあんた、“何者”なんだ」

敵は、床に浮かんだ無数の青白い光の輪から次々に這い出てくる。ジュンヤも微力ながらと何発か銃弾を放った。まともな敵に当たることはない。地面に辺り火花を散らす程度で、素人腕前なのは火を見るよりも明らか、それでも悔しさから、何度も引き金を引いた。

一方でディックは、ジュンヤの撃ち損ねた敵を、確実に倒していく。額のだ真ん中を狙い、一発で仕留める。これが、ただの科学者に出来る所業だなんて誰が思おうか。

「言ったはずだ、“生物学的に恐らく人間じゃない、カメラの部類だ”と。それ以上でもそれ以下でもない。“政府総統の新たな器”にさえなることが出来なかった、出来損ないの失敗作だ」

「誰も、“失敗作”だなんて思ってたやしないだろ。俺にはホントのことは殆ど見えないけど、これだけ超人的な力を持つていながら、一科学者として生きるだなんて、俺には理解が」

「理解だなんて、してもらおうと思ったことは一度もないがな」  
また一発、放った銃弾が敵の額を貫いていく。仰向けに倒れた戦闘員の胸元、黒地に白いロゴで“NCC”とあるそれを、ディックはしばらく見つめ、短くため息をついた。

「俺は、このクズ共と同じように戦闘訓練された、実験体の一つに過ぎなかった。“器”であることがバレないように、他のNCC ode Childrenと一緒に人を殺すための訓練を受けていた。人格などそこでは必要無い、より多くの人間を、政府に反する人間らをぶち殺すためだけに生きることが許された。コードを持たない実験体のなれの果てなんて、こんなもんだ。優秀であれば人格を認められ、施設を出られる。支配から逃れて、まっとうな人生を送りたいと思つて、血を吐くような努力もした。その先に、何があるのかなんて、当時は考える余裕すらなかった」

「ごろんと、死体を蹴り上げて、ディックはまた先へ進む。  
前方数力所が青白く光り、その一つ一つから黒服の戦闘員がせせり出る。」

「自分の不幸と……この死なない身体を何度呪ったか、お前には到

底理解できまい。同情や理解など、無意味だ。現状が変わらなければ、そんなもの、何の役にも立たん」

「理解できないなら、どうして、どうして俺を連れてきたんだよ」  
ジュンヤの声をかき消すように、銃声が鳴り響いた。壊れた人形のように後方にはじけ飛び、倒れていく敵の戦闘員。ディックの表情は冷たく乾いたままだ。

ようやく全ての光が消え、前方に重厚な鉄の扉が見えてくると、急にディックの動きが鈍くなる。

それまでの軽快な動きが嘘のように固まり、よく見ると大量の汗どうしたのと、聞くまでもない。悲痛な表情を見ているだけで、ジュンヤの胸は締め付けられていく。今まで見たこともないような、極度の緊張と恐怖に冒されたディックに、彼はかける言葉は見つからなかった。

ゆっくりと、渴いた喉に唾を流し込む。

敵が、あの男が中にいるのだと、ディックは無言で伝えてくる。

雨の中、島でリーと対峙した、あの時とは勝手が違う。湧き起くる憎しみを堪えるようではなく、心の底からの恐怖に耐えているようだ。

ほんの数ヶ月前、自分の敵だと言って撃ち殺した相手が、扉の向こうにいる。ディックの気持ちなど、ジュンヤにはわかりようもない。

ただ、何も知らなかったあの時に比べ、少しずつだが情報は得た。あのティン・リーという男が、世界の全てを握っているということ。ディックやエスターを実験体として使っていたこと。ディックはリーの“新しい器”として生まれたということ。エスターが無理矢理マザー・コンピューターと同化させられそうになっているということ。現実味のないそれらは、ジュンヤには他人事のように思えた。しかし、自分の祖父に当たる人間がどうやら政府総統と関わりがあり、“コード廃止論”を唱えて追放されたことや、それに関連しているのか、父親が反政府組織を立ち上げたことは、どう考えても逃れ

よのない運命にさえ感じてきていた。

ディックが自分を信頼してないにしても、この場に同行させたのは、もしかしたらそういうことも関係しているのかも知れない。

例え、足手まといになるとしても、ほんの少しでもいい、エスタ―を救い出す手助けがしたい。ジュンヤのそうした気持ちなど、ディックには理解できないのだろうか。

ギイと音を立てて、鉄扉が開いた。

薄暗い室内から、鬱蒼とするような湿った空気が流れ出て、独特の薬品の臭いが立ちこめる。生もののような、動物の体液のような不快な臭いだ。鼻を塞いで臭いを防ごうとするが、口から空気を吸い込むと同時に鼻の穴を駆け巡り、ジュンヤは思わずむせた。とても、まともな人間のいられる場所じゃない。

暗視スコープを通して部屋の全体像を把握しようと、彼は周囲に目を配った。室内を埋め尽くすような計器や実験具が整然と並び、様々な機械が小さな音を出して不気味な音楽を奏でている。実験室のようだ。どうやらこの場に、エスターが捕らえられているというディックの言葉は間違いではないらしい。

奥に、ほのかな明かりが見えた。大きな円柱形の水槽に、蛍光色の液体が揺らいでいる。中で、何かがびくと動いた。魚にしては大きすぎる。ジュンヤは目を凝らして、それがなんなのか判別しようとする。

「何もかも、変わらないだろう、D-13」

全身に稲妻が走り、ディックとジュンヤは無意識に銃を構えていた。

気配など無かったはずなのに、一人の男がニヤニヤと薄ら笑いを浮かべてたたずんでいる。

リーだ。

相も変わらぬ美しい顔で、なるほど一科学者、一研究者という風か、肩までの髪を一つに結わえ、白衣を羽織っている。

「案ずるな、まだ同化は済んでない。目の前で、娘が変わり果てる

様子を見て欲しいと思ってね」

悪魔のような一言に、ジュンヤは身体を震わせた。リーは尋常じゃないとわかっていたはずなのに、あまりの恐怖で全身から血の気が引いていく。

ギラツとリーの目が光り、その視線が実験室奥の水槽に向けられる。

「君がどれだけ絶望するのか、私は楽しみで仕方が無いんだ」

揺らめく液体の中、小さな泡にかこまれて浮いていたのは、たくさんさんのコードに繋がれた、一人の少女だった。

## 94・大きな歯車

闇に沈む地下実験室の中、ティン・リーは円柱型の水槽に寄り添うようにして二人の前に立ち塞がった。

ガタガタと音を立てる奥歯、震えの止まらない右腕を左手でガツチリと押さえ、銃口をリーに向けたままのディックだが、このままの状況では発砲は出来そうにない。少しでも手元が狂えば、大事な娘まで傷つけてしまうからだ。

卑怯だぞ、そんな単純な言葉さえ、ジュンヤの口からは出てこなかった。最早全ての言葉という言葉を失ってしまったかのように、彼は顔を青くしてただ呆然とその場に立ち尽くすだけだ。

水槽の中にいたのは、紛れもない、エスターだった。だが、とても普段の彼女からは想像できぬほど、死んだような表情をしている。魂の抜け殻とも言うべきか。繋がれたコードに引つ張られるようにしてただ浮いている、頂垂れた頭、生気なく半開きになったままの目。液体の中で揺らめく金髪は、コードと絡んで悲鳴を上げていた。捕らえられているという言葉から、勝手に手足をロープか何かで縛られているか、それとも鎖に繋がれてしまっているか、そんな姿を想像していたジュンヤにとって、水槽に浮かんだ彼女の姿はとても受け容れ難いものだった。

「懐かしいだろう、D-13。ほんの七年前まで、お前が自分の娘にしていたことを思い出しているのではないか。いや、それとも、自分があの中に浮かんでいたことを思い出しているのか」

「相変わらず、卑劣な男だな、ティン・リー。もう、同化の準備は出来ているんだろう。なぜ、俺を待つ必要がある」

一歩後ろで二人の様子を覗うジュンヤには、ディックの表情は見えない。だが、心なしか、ディックの声は震えているように思えた。「言っただけだ、“目の前で、娘が変わり果てる様子を見て欲しい”と。私の“新しい器”として生まれながら、私を裏切り、私の計

画を全て無駄にしたお前を、簡単に許せるとでも思っているのか。絶望を越える絶望を味わってもらわなくては、私の気は済まない」

リーは愛おしいとばかりに、水槽の中のエスターを撫でる仕草をしてみせる。彼女は反応しない、ずっと、項垂れたまま。

所詮道具に過ぎないのだろう、彼にとつて彼女はあくまでも“実験体E”なのだ。とつてつけたように大事に扱っているように見せたところで、腹の底でどう考えているかなど、言われなくてもわかっていた。我慢ならない。ディックもジュンヤも、ギリリと歯を鳴らして、リーをギツと睨み付けた。

「お前はそうやって、俺をいつまでも縛り付ける。その意味は何だ。そろそろ、教えてくれない頃だろう、リー。永遠の命を持つて生き続けようとする意味は。エスターをマザーと同化させ、“神”とやらを造り上げようとする、その意味は」

荒く肩で息をしながら、ディックは訊こう訊こうと蓄えてきた疑問をリーにぶつける。

彼はなかなか答えようとしない。しばらくじっと冷たい目をしてディックを見つめ、また薄ら笑いを浮かべている。

「何がおかしい」

「ああ、おかしいとも。たかが“器”だと思っていたお前が、あの男のせいで意志を持ち、抗う力を携えて現れたのだから。……：そつだ、全てが狂ったのは、キョウイチロウ・ウメモトが“コード廃止論”を唱え始めたあの時から。私は自身の存在を維持するため、何度となく身体を乗り換え続けていた。全ての人間を支配することで、私は謀反するものを全て葬り続けてきたはずだった。キョウイチロウを追放したあと、その意志を継いだラムザ・エマードに研究を妨害されたのも、予想外の出来事だった。大切な“器”の完成品を隠されたことで、私は正気を失った。血眼になってお前を探した日々、忘れはしない。お前を見つげるために、非政府医師団などに潜り込んだこともあった。私を敵とは知らず、人を探しているという言葉に親身に耳を傾けていたシロウ・ウメモトの愚かしい顔も、



懐かしい思い出だ。全ては仕組まれていたというのに、くだらぬ友情やら愛情やらに現を抜かす人間という存在そのものが、そうしたくだらないものに感化されていったお前という存在が、私はおかしくてたまらないのだよ」

両手を広げ、大げさに話す仕草は、島で見たそれと同じだった。

リーの言動は、ディックとジュンヤの血圧を急激に上昇させた。

「くだらぬ友情や愛情”だって……？ お前には、誰かを愛する気持ちつてもんがないのかよ」

苦し紛れのジュンヤの言葉に、リーはまた鼻を鳴らす。

「愛”という幻惑に囚われ、こんな危険な場所に飛び込んでくるとは、本当に愚かしいな、ジュンヤ。君がキョウイチロウやシロウの血を引いてるってのは、ある程度納得できる。あの二人も相当変わっていたからな。誰かのために” 未来のために” そんな戯言は聞き飽きた。運命に逆らうことも出来ぬ癖に、何を語ろうというのか。世界は、私の思うままだ。例え予想外の出来事があるとしても、大きな歯車は確実に回り続け、私の望む結末に導いてくれる。……気付かないか、エマード、いや、D-13。遠回りにはなったが、お前はやはり、私に操られ続けているのだ」

「……何が言いたい」

「自分の力で手に入れたと思ったものが、自分の意志で選んだと思っていたことが、全て仕組まれていたとしたら」

「わからないな。単刀直入には言えないのか」

「エレノア・オーリン”は、刺客だ。君と愛し合い、君の子どもを身ごもり、産ませるためだけに私が送り込んだ。彼女との愛を育んだつもりだろうが、そんなものは最初から存在しない。計算どおり遺伝的に引き合っただけに過ぎないのだ。彼女が最終的にお前に対してどんな感情を抱いていたのか、今となってはわかりようもない。だが、君は私の意図するまま彼女のことを愛し、彼女と寝た。全ては“実験体E”の作成のため。“結果として今がある”んじゃない、“最初から結末は用意されていた”というわけだ」

エレノアの話が出た途端、ディックの様子が変わった。

エネルギー銃を腰のホルダーに戻し、より破壊力の大きい愛用のデザートイーグルに持ち替えて、構え直していた。

筋肉が怒りで震え、全身から覇気が滲み出る。本気で撃ち殺す気だ、後方でその様子を見ていたジュンヤは焦った。今こんな状況で暴走を止められるのか。もし銃弾を放ってしまったとして、狙いがズレた場合、彼女を助け出せるのか。

ジュンヤは息を飲んだ。と、突然、何者かに両腕を掴まれる。「な、何だ、放せ！」

黒い鎧のような防具に身を包んだ大男が一人、ジュンヤを背中から締め上げていた。フルフェイスのヘルメットで、それが人間なのかロボットなのかわかどうかも判別できない。凄まじい力だ。

ディックはジュンヤに構わず、まだリーに銃口を向けたままだ。振り向きもしない。助けるつもりは毛頭ないと、そういうことなのか。

ジュンヤは羽交い締めになれ、そのまま実験室の入り口まで引き戻された。

「すまないね、ジュンヤ。君は少々邪魔な存在なんだ。離れたところでゆっくり見学してたまえ」

言葉遣いは丁寧だが、棘がある。これからショー……つまり、マザーとの同化が始まるというのか。

リーは不敵に笑い、ディックを挑発するようにして水槽の前でまた大きく手を広げた。シルエットが逆光で浮かび上がり、彼の表情を隠していく。

「撃つなら撃つがいいさ、D-13。ずっと躊躇してるんだろう。私を撃てば水槽に当たる。そうすれば、彼女を救い出せるかも知れないが、同時に傷つける可能性だってあると。残念だが、この水槽は昔と違って防弾ガラスを使用している。君の自慢の銃でも傷一つ付けられやしない。行為そのものが無駄だということだ。ローザ、聞こえているか」

『はい、閣下』

天井部のスピーカーから響いたのは艶めかしい女の声だ。

ジュンヤは思わず、声の方に顔を向けた。ディックはやはり、微動だにしない。

「そっちの被害状況は」

『敵は未だここまで到達していません』

「では同化を開始する。      あちらの方も頼む。いいね」

『仰せのままに』

簡単なやりとりだけで会話をやめ、リーはゆっくりと振り向いた。手が出せない。

リーには未だ幾つか訊きたいことがあった。高笑いして自分を蔑む男が憎くて仕方なくても、殺すのは未だ早いと、引き金に指を充てるのをためらっていた。

せめて水槽を壊してエスターを助け出せればと頭の隅で思っていたが、それすら出来そうにない。

「ふ……ざけるな……、何が同化だ、何が“神”だ……。違う、実験体なんかじゃない、そいつは……例え仕組まれていたとしても、俺の、俺の一番大切な」

無駄だとわかっていても、ディックは撃ちまくった。

地下実験室全体が地震のように揺れる中、防弾だといわれているにもかかわらず、必死にガラスの水槽に衝撃を与え続けた。銃弾が弾け、地面にのめり込んだり計器の針を飛ばしたりするのも構わず、弾が切れるまで撃ち込む。マガジンを取り替え、また連射。リーの言うとおり、傷などつく心配すら無い。

七年前は、金属の棒で無理矢理水槽を破壊した。また同じ事が起きないようにと、リーがより頑丈な水槽を用意したのはわからないでもない。だが      諦めたら、終わりなのだ。

そうしている間に、水槽の液体は徐々に地中に吸い込まれていく。狭い円柱水槽の中にうずくまるようにして取り残されたエスターの身体は、空気に触れて少しずつ熱を奪われていた。見計らったよう

に暖かい空気が上部から吹き付けられ、水滴が綺麗に蒸発して彼女の身体に熱が戻ると、今度は身体を無理矢理覚醒させようというのか、天井から伸びたコードを介して、電気が流し込まれる。彼女の身体がびくんびくんと大きく仰け反る度に、ディックはどうにも出来なくなつた怒りで、水槽を何度も叩いた。小さな振動が内側に伝つて、エステーの身体を僅かに揺らした。

感情を解き放つたように、ディックは泣き散らす。だが、叫び声も、泣き声も、不気味にうごめく機械音でかき消されてしまう。

ディックの悲痛な姿は、見るに堪えなかった。エステーを救うだなんて元々出来つこなかったのかもしれないと、ジュンヤは思い始めていた。敵が悪すぎた。レナやダニーには“この世界を支配している男を敵に回してる”などと大見得を切つておいて、いざそのときになったら捕らえられて何も出来やしない。非力すぎる。あのディックですら、どうにも出来ずに足掻いている。

だが、諦めたくはない、やっとここまで辿り着いたのだから。諦めたら、全てが終わってしまう。

ジュンヤは自分を羽交い締めに行っている男の手を振りほどこうと必死に身体を捻つた。抜け出して、大声で笑うあの男に一撃喰らわせてやりたかった。

「無駄な抵抗だな、二人とも。実に愚かしいよ。絶対的な権力の前では、抵抗は無意味なのだ。ひれ伏し、崇める。お前たちのような愚かな人間共を導くにはやはり、具現化された“神”が必要なようだ。新たな“神”の誕生を、心して見るがいい」

ティン・リーは薄ら笑い、右手を高く掲げてパチンと指を鳴らした。

薄暗い実験室の床に丸い光の輪が現れ、青白い光の柱がせせり立つ。足元から実体化していく人影は数体、そのなかにケネス・クレパスの姿があった。

「ここまで堕ちてしまうとは……、失望しましたよ、エマード博士」  
転移装置の青白い光の柱が、スツと床に吸い込まれ消えていく。  
ケネスはおもむろにエマードの側まで歩み寄った。水槽を抱きかかえるように泣き腫らすディックの胸ぐらをぐいと掴み、そのまま壁際の計器まで、ドンと音が出るまで彼の巨体を押しつけると、ケネスは無理矢理、ディックの暗視スコープとインカムををはずり取った。

情けない中年親父の顔が露わになって決まりが悪いのか、ディックは歯を食いしばり、目線をずらしている。

「NO CODEにも感情があるということか。確かにEは実験体とはいえ、あなたの娘には違いはない。かといって、こんなに取り乱すなんて……、幻滅した。あなたはもつと賢い人間だと信じていたのに。あくまで研究は研究、実験は実験なのだと仰っていたではありませんか」

カーキ色の上着と厳しい目つきの軍人顔が、ディックの眼前に迫った。

彼が誰であるのか、すぐにわかった。ケネス・クレパス エレノア・オーリンと初めて出会った空間転移システム研究室に、軍からの出向で来ていた男だ。その後、Project・Tに参加し、この地下研究室で“TYPE-E”の研究に携わった。エレノアに心を寄せていったディックのことをより近い場所で見っていた人物、そして、Eの研究に対し苦悶するディックのことを見続けた人物でもあるのだ。出会ったばかりの頃は“いいとこの坊ちゃんだ”と馬鹿にしていたが、そんな面影は全くない。すっかり“総統閣下”の色に染められた、“完全なる僕”の顔だ。人が変わってしまった。忠実な男だとは思っていたが、ケネスをここまで追い詰めたものがなんなのか、ディックにはわかりようがない。

「何故、ここにいる」

開いた瞳孔は、ケネスの冷たい目線を捉えていた。最も出会いたくなかった人物の一人が目の前に現れたことで、ディックの鼓動は否応なしに高まった。

「ケネス、買い被りは良くない。彼の心は非常に不完全で不安定なのだ。それに、“人間”じゃない」

取り乱したディックから少し距離を置いていたリーは、ケネスの登場により落ち着いたのを見計らって、また水槽の側へと近付いてくる。長い前髪をかき上げながら、彼はディックを見下し、せせら笑った。

「しかし、例え不完全な精神状態であったとしても、その肉体の完成度は間違いなく高い。頭脳も申し分ない。不本意だが、その身体使わせてもらう。そもそも、そのためにお前は生まれたのだからな。複製を重ねたTYPE-Cは、老化の進んだTYPE-Dと比べても、長くは持たないのだ」

「長く、持たないから、何だというんだ」

「噛み砕かずとも、何を言いたいのか、お前にはわかっているはずだ、D-13」

ドクン、と、大きく空気が波打つような音がした。

ケネスの肩越しに、円柱水槽の中でエスターがすつくと立ち上がっているのが見える。彼女はゆっくりと顔をあげ、目を開いた。しかし、青い瞳はどこか遠くを見つめているのか、ディックの顔を一切見ようとしない。

意識がない、ただ反射的に立ち上がっただけなのか。まるでマネキンのような彼女の姿に、ディックは一瞬言葉を失った。

また、地下室全体が大きく揺れる。エスターを囲う水槽をなしていた防弾ガラスが少しずつ少しずつ地下に吸い込まれていく。

「エスター、目を覚ませ、何をしている。ケネス、放せ、この手をどける！」

ディックもジュンヤも、必死にエスターに呼びかけ続けたが、ど

うにもならない。そこに見えない壁があるかのように、何も届かないのだ。

助け出したい、手を伸ばしたいと思うのに、ケネスの腕は更に強く、ディックの胸元を締め付けた。体力には自信がある、いつもなら簡単にふりほどけるはずが、びくともしない。自分より背の低い、明らかに弱い人間であった彼にしては、真つ当じゃない力だ。押し当てられた背中の計器ランプがバチンバチンと音を立てて割れた。防弾チョッキ越しにボコボコした感触が伝わる。

「何の手術を受けた。薬か……」

「強化筋肉を埋め込んだくらいですよ。閣下をお守りするため、当然のことをしているまで。あなたのように途中で投げ出したり、逃げ出したりはしたくないのでね」

水槽が完全に床に沈み、その縁から一歩、エスターが踏み出した。背中のコードは、天井と繋がれたままだ。

彼女はゆっくりと天井を仰ぎ、両手を広げる。一糸纏わぬ彼女の背に、更に太い複数の管が差し込まれた。管を通って、何かが入り込んでいく。身体に液体が染みこむ度に、意識のない彼女は、快楽を得たように頬を緩めた。

「金属分子を含んだ特殊溶液は、Eの身体を巡るナノマシンと反応し、彼女自身を一つの機械に造り変える。そうすることで、マザーの意志で様々なコンピュータや機器と融合しやすくなるんだ。人間の脳では、容量が足りないことも予想されるからね。ほら、少しずつ、変化が出始めた。私の設計した“神”の姿になりつつある……！」

ティン・リーは歓喜していた。ケネスに捕まり身動きの出来ないディック、そして黒い鎧の男に羽交い締めになされたジュンヤの目の前で同化が行われていくことに。

やがて彼女の皮膚を銀色のプロテクターが覆い始めた。注入された金属分子から彼女自身が生成したものなのか、彼女の身体を包むように面積を広げていく。背中には羽が　彼女に繋がれていたコ

ードたちが絡まり、羽の形を成していく。

人類がそれまで為し得なかった未知の技術が、目の前で展開されていた。マザーというAIが、この世界を包み込んでいったように、エスターの身体をカスタマイズしていく様子が見て取れる。研究者としてAIチップ開発に取り組んだディックにとって、それは一つの感動だった。世界最高のAI“マザー・コンピューター”、トリストを介して出会ったあの女性人格が一つのプログラムとして稼働する様子を、目の前で見る事が出来る……、間違いなく、心は震えた。揺れ動いていた。

一人の研究者としての自分、父親としての自分、そして、同じように命をもてあそばれ続けてきた実験体としての自分。

「エマード博士、口元が緩んでおられますよ。本当はあなたもご覧になりたいのでしょうか、“神”を。今なら間に合います。今までの謀反も、閣下はきつと水に流してください。さあ、我々と共に、新たな世界を築こうではありませんか」

狂気めいたケネスの言葉に、惑わされそうになる。

違う、ディックは心の中で呟いた。

「新しい世界など……築かれてたまるか」

落とさぬよう必死に掴み続けていたデザートイーグルの銃口を、ディックはケネスの脇腹にぐつと当てた。

「なにをなさるおつもりです」

「……お前と、リーをぶつ殺して、俺も死ぬ」

「身体を固定された状態で、うまく引き金が引けるとでも。それに、我々を殺したとしても、未来は変わらない。マザーと同化し始めたEを止める手立てなど、ないに等しいのだから」

「だったら、エスターもろとも、吹っ飛ばすしかない。頭を吹っ飛ばせば、再生機能は働かない。俺も、エスターも、死んで終わり。

最高の結末だとは思わないか」

「まさか、あなたが娘を犠牲に出来るはずなど無い。これまで何のために生きていたのです。復讐のためだけなら、あんな辛い思いを



する必要は無かったはずだ。追い詰められ、血迷っているとしたか思えない」

「血迷いもするさ。俺は、“不完全”なんだ。それに、“人間じゃない”。思考回路が狂ってるヤツに、何を言っても無駄だと、まだわからんのか」

口角を上げた、引き金を引いた、銃声が響き渡り、同時にケネスの腕がディックの胸元から大きく離れた。ケネスの左脇腹から大量の血肉が飛び散り、辺りを赤く染めていく。脇腹が完全に破裂している。肉と骨がむき出しになって、ケネスは身体を屈めた。苦痛に耐えながら「抜かった」と一言、床に倒れ込む。

解放されたディックは、続けてリーに銃口を向けた。ケネスが倒されたことで、顔を歪めているようにも見えたが、気のせいかも知れない。いつもの表情のわからない能面顔で、じっとディックの様子を覗っている。

「撃てばいいじゃないか」  
エスターの前に立ちふさがるようにして、リーはディックを挑発する。

「撃たないということは、まだ何か言い足りないことがあるのかな。君は 何を考えている」

「お前の、正体を知りたい。俺の知る限り、お前のオリジナルは、今と違う姿形をしていたらしい。お前が三代目、俺がその次になる予定だった。つまり、その前に最低二回は姿を変えてる。その名前だって、多分その個体のものだ。俺の姿になれば、お前は俺の名前を語るんだろう。なあ、リー。お前、本当は何者なんだ。ラムザの記憶に寄れば、お前の存在は先史から続いているらしいな。マザーにこだわり続ける理由もそこにあるのか。どうなんだ」

先史からと聞いて、リーは腹を抱えて笑い出した。  
耳障りのする高い声に、思わず力が入るが、ディックはじっと堪え、銃口を向け続けた。

「ラムザが君に何を残していたのか知らないが、そうか、あの

男、そこまで掴んでいたのか。確かに、オリジナルの私は、大戦前の人間。マザー・コンピュータの基礎となるAIを開発した研究者だった。思い描いた世界がどのように発展していくのか、非常に興味があった。見届けるため、どうすればこの短い命を繋いでいくことが出来るのか。考えた末に意識の電子化を思いつく。……あとは、君らの知るとおり。それが何だというのだ。私は私以外の何者でも無い。この世界を作り出した、この世界を支配する絶対的な存在。より支配を強めるために、今はマザーとEの同化が必要だ。いくら君にだって、邪魔はされたくないな」

リーの表情が変わった。何かに合図を送ったのを目視で確認したときには、既に遅かった。

ケネスと一緒に送られてきていた大柄の男たちが、気配も無いまま、ディックの腕を両脇から抱えていた。ジュンヤを羽交い締めに行っているのと同じ黒い鎧の戦闘員二人は、百九十センチを優に超えるディックの身体を、いとも簡単に持ち上げる。足をばたつかせても、肩をくねらせても、逃げられない。肉体強化されたNO CO DEなのか、フルフェイスのヘルメットの下から、骸骨のような顔が透けて見えた。

「油断したな、ディック・エマード。……この名を呼ぶのも今が最後だと思つと、嬉しさが込み上げてくる。マザーとEの同化はもうすぐ終わる。次は、君の番だ」

鎧の男たちは、ケネスよりも更に強い力で締め上げてくる。

腕の筋肉が千切れそうだ。

手から銃がこぼれた。カツンカツンと乾いた音がして、円を描きながらデザートイーグルは転がっていった。

黒い二人の戦闘員に引き摺られ、ディックは研究室の奥にある実験台まで無理矢理運ばれていった。持ち上げられ、台の上に大の字で結わえ付けられて目を開くと、配管が所狭しと走る天井や丸い複数の照明が視界に飛び込んできた。

見覚えがある。

そこは、自らがエスターの身体にメスを入れた、忌々しい場所だ。両手両足首にかけられた鎖の枷は、鉄製でとても外せそうにない。それだって　自分が、娘の手足にかけたものに違いなかった。そして、十歳の小さな自分がされていた　、大きな水槽の中、理解できぬままなされるまま身体をいじくられるあの感覚が、感情を失った大人たちの冷たい無数の目が、好奇心に冒された表情で自分を覗き込んでいるあの光景が　、ディックの中で鮮明に蘇ってくる。心の奥底に閉じ込められていた卑しい感情が、涙の固まりが、滝のように溢れ出て、全身を覆い尽くしてしまう。

正気を保とうとするので精一杯、このまま飲み込まれてしまえば、リーの思っ壺だ。

「ティン・リー、よく考えてみる。俺の身体を乗っ取ったところで何のメリットがある。十代のガキの身体ならまだしも……、五十路手前のくたびれた男の身体だぞ。いくら自己修復機能が備わっているといっても、老化は防ぎようがない。いずれ寿命だつて来るだろう……生身の身体にこだわり続けるにしても、節操つてもんがあるんじゃないのか」

「面白いことを言うね。どうにかして逃れようつてわけか。そんな状態になつても」

ケタケタと子どものように笑うリーの声が、地下に響き渡った。

ネジの外れた玩具のような、ウィルスの入り込んだプログラムのような。

悦に入つたリーは、悠々とディックを覗き込む。見開いたつり目が、獣のようにギリリと光っている。

「もちろん、私は君のことが許せない。切り刻んでしまおうと思つたことも一度や二度ではない。が、そうしなかつたのは、やはり君の身体が惜しいからだ。TYPE-Dの作成には特に苦労した十年、二十年……どれほどの時間と金を費やしたのか。ラムザ・エマードが妙な考えを巡らさなければ、キョウイチロウ・ウメモトが彼をそのかすような論文を書かなければと、思いもした。危険因子が出てくるのは時間の問題だつたのかも知れない。ある一定の割合で出現する……働きバチの中の働かない八チ、経済貧困者、精神異常、肉体欠損、危険思想……、全部排除するのは不可能だと、高をくくっていた部分もある。起きてしまったことをどうにかして白紙にしようなどとは思わない。最善を尽くす。私は今、私の考える中で最大限に必要なだと思うからこそ、お前の身体を欲しているのだ」

リーの高笑いに、背筋が凍る。

確かに、言葉や感情をラムザ・エマードに教わらなければ、彼が『私の息子になってくれないか』と手を差し伸べなければ、今頃自分は“政府総統”として生きていたに違いない。そこに自分、D-13と呼ばれる個体の意識はそのまま継続されていたのか、それともティン・リーの意識に書き換えられてしまつていたのかどうか。具体的なことはわからないが、少なくともこうして苦しむことはなかったのかも知れない。

だが、現実が違う。

地下から抜け出し、ラムザの息子として暮らし、引き離されNCに收容され、ゴミのように扱われ続けたくなくて必死に這い上がってきた。例え仕組まれていたとしても、一人の女性を愛し、子どもを授かった。生まれてきた娘が実験体として扱われても、いつか自分がそうだったように機会を見計らつて逃げだそうと心に決め、実行に移した。復讐のため大勢の人間を巻き込み、罵倒され、憎ま

れたこともある。信念を貫き続けたのは、諸悪の根源を潰すためだったはずだ。ティン・リーをぶつ殺し、せめてエスターだけには幸せになつてもらいたいと。

『マザーと同化し始めたEを止める手立てなど、ないに等しい』

ケネスの言葉どおりだとしても、簡単に諦めるわけにはいかない。鎖に繋がれた手を動かし、ぐいと内側に引つ張つた。手首に鉄が食い込み、鬱血する。歯を食いしばり、もっと内側へ内側へと動かそうとするディックの腕を、黒い鎧の男が押さえつけた。

「無駄な抵抗だと言つてるのが、君にはわからないのか」

実験台に軽く腰を寄せ、リーはディックの腰からスツとエネルギー銃を抜く。面白半分の手の中で銃をクルクルと回し、そのまま、銃口をディックの頭へ押し当てる。撃つわけがない、わかっついてても身体が反応して汗を噴き出させた。荒く息をし、「チクシヨウ」と吐き捨てる。文字通り、今の状態では手も足も出ない。

せめて、ジュンヤがまともに動ければ。そう思つてディックは頭を上げ、入り口の付近で足止めされているジュンヤの様子を見ようと目を細めた。男に羽交い締めになれ、身動きの取れなかつたはずだ。

室内は薄暗い。遠く離れた研究室のドアは、ディックの位置からだと同様に暗く見えない。物音もしない。

「ジュンヤ、どこだ。どこに行つた」

キョロキョロと眼球を動かし、気配を探る。一体、どこへ。

怖じ気づいたか、殺されたのか。思つていた矢先、銃声が鳴つた。何か倒れる音、誰かの荒い息。

闇の中で人影が動いた。

「……お待……た、せ。やっと、倒した。手が、震えてる」

ジュンヤだ。いつの間に大男の手をすり抜け、振りほどき、倒していたのか。その場にいる誰もが、ジュンヤの動きに気がつかないほど、ディックとリーのやりとりに夢中になつていた、隙を突いたようだ。

肩で息をしながら、一步一步踏みしめるようにして前へ進むジュンヤの身体には、真っ赤な返り血が降りかかっていた。額からあごに向かってダラダラと流れ落ちる汗を、ジュンヤは袖口で無理矢理拭う。

「本当に愚かだな、……君らは。もうちょっと遊んでいようかとも思ったが、仕方あるまい」

リーは顔を歪めた。

ディックの頭から銃を放し、ひよいと実験台から飛び降りて、鎧の男たちに目で合図する。

片足を負傷したのか、引き摺りながら必死に前へ進もうとジュンヤが辿り着く前にと、何か大きなものを動かしているのが気配でわかる。

「おい、何を、何をするんだ。やめろ！」

頭を、固定された。トリストにあつたような長いコードのついた端子付きヘルメットが、ディックの頭に力尽くで被せられた。首を振った衝撃で外れないように、金具で固定されてしまったのだ。

身動きが取れない、声を出すことしか出来ない。

「ディックを放せ！ 今すぐ、こんなくだらないことはやめるんだ！」

覚束ない手で銃を握りしめ、照準をリーに併せたジュンヤが、必死に威嚇している。銃弾が数発、ティン・リーの身体を掠め、その先にある機械に当たって火花を散らす。更に数発、今度はリーに当たるように狙いを定めて発砲するも、震えた手では思ったように狙いが定まらなかった。

そんなジュンヤを見下すように鼻で笑うと、リーは実験台側の壁にあるパネルに手をかざした。リーの掌紋に反応して壁が真っ二つに割れ、両サイドに引き込まれていく。地面がまた、小刻みに揺れて、ジュンヤは思わずよろけ、近くの壁により掛かった。

突如現れた空間に、丸いシルエツトがある。最初は薄暗く、はっきり見えなかったが、徐々に照明が灯り、その全体像が見えてくる。

“大きな卵型の機械”だ。上部を切り取った卵のような曲線状のフォルム、機器に繋がれたたくさんの管が、地面を這っている。白でまとめられた秘密の部屋の中央に鎮座する卵は、まるで神聖な儀式のために用意されたもののように、ジュンヤには見えた。それがなんなのか、はつきりわからなくとも、大体想像がつく。

ジュンヤは銃を構え直して、自動車ほどの大きさの卵へ乗り込もうとするリーに何度も発砲した。エネルギー弾は本体に当たり、何度も弾けたが、そんなことはお構いなしに何発も撃ち続けた。今は、自分しか動くことは出来ない。今動かなければ、今自分がやらなければ、意味がない。

やがてその一発が、卵によじ登ろうとステップに足をかけたリーの腹部に命中する。続いて腕に、そしてまた腹部に。

しかしリーは、血だらけのまま動き続ける。執念なのか、薄ら笑いすら浮かべて、機械の中に身体を滑り込ませていく。

「何てヤツだ……！ 間に、合わない」

ジュンヤは発砲をやめ、黒い男にへし折られた左足をかばいながら、跳ねるようにして卵の方へ走った。片足だけでは上手く進めない、と、何かに足を引っかけ、思い切り前のめりに倒れた。引つけた何かを確認しようと、ジュンヤは身体を起こしながら、足元を確認する。

「うわぁっ」

思わず声を上げた。

カーキ色の上着、ディックの知り合いらしい、撃たれた男が、顔を上げていた。ジュンヤの右足首をぐいと掴んだケネスは、そのままゆっくりと身体を起こす。

「良いタイミングで目を覚まさせてくれた。感謝するぞ」

大量の血を流し、左腹部の欠けた男は、ギラツと目を光らせた。

『装着確認。データ移行開始します』

ローズマリー・グリースの透き通った声が、天井から降りてくる。研究室内上部に取り付けられた赤いランプが点滅し、警報が鳴り始めた。

何が起きているのか全く確認出来ないディックは、半ば覚悟を決め、ぎゅっと両目を固く瞑った。歯を食いしばり、その瞬間を待つ、どれほど辛いことが。

感情が崩壊していく、心がバラバラになる。

何を恐れているのか。自分が自分でなくなってしまうことが、それとも、大切なものが奪われていくのに何も出来なくなってしまうことなのか。差し伸べた手を掴んでくれた、ラムザのような人間が周囲にいないこと、誰かに守ってもらおうということに恥ずかしみを覚えてしまったこと、どうせ何もなくなってしまえば、早い段階で全てを失っていた方が傷つかずに済んだかも知れない、一瞬の幸せさえなければ、どこまでも闇の中に沈んでいられたというのに。

脈絡のない言葉や考え、場面が、グルグルとディックの頭を巡っていく。息苦しい、身体から血の気が引いていく。何も、考えたくはない。

ギューインと、隣の部屋からモーターの回る音が聞こえ、とうとう最後が来たと悟る。

『意識データ移行準備完了。これから媒体を転送します。ケネス、生きてる？ 頼むわね』

“媒体”を、“転送”……何か、様子が違っている。

ケネスは、生きていたのか。致命傷を負わせたつもりだったが、確かに急所は外してしまった。そんな状態で、一体何をしようとしているのだろうか。

ディックの視界の隅が、青白く光った。



何かがまた、送り込まれてきた。金属の塊のようなそれは、ガシヤツと乾いた音を立てる。

「いやあ、女というものは……、実に、恐ろしい」

転送されてきた何かに目を向け、ボソツとケネスが呟くのが聞こえた。心なしか、息が荒い。

「何が起きてる。ケネス、聞いているのか」

「俺が死んでいたら、どうするつもりだったんだ、ローザ。その黒い“犬”共に指令を出して事を進めようとしてもしていたか。……生憎だが、その犬共は、閣下の言葉以外には反応しないように出来ている。結局は自分たちの手でやらなければならなかった。本当に、悪運の強い女だな」

ケネスは、姿の見えない誰かに話しかけるばかりだ。聞こえてくるのかどうか、ディックの問いには、全く答えようとしなない。足取りも、覚束ない。

彼は、撃たれた腹部をかばいながら、ジュンヤより幾分かマシな程度の足取りで、ゆっくりと実験台の側へと歩み寄った。腹の左半分がすっかり欠け、大量の血が彼の下半身を濡らしていた。足跡をなぞるようにおびただしい鮮血が床に続き、水槽の生温い臭いと混ざって、ディックの鼻をついた。痛みには堪え、苦痛で顔を歪ませたケネスは、

「D-13へのデータ移行は、中止、します」

とだけ言って、おもむろに頭の装置を外し始めた。

思いも寄らぬ言葉だった。

「ケネス、どういうつもりだ」

突然のことに、ディックの頭は真っ白になる。

「どうもこうも……、替わりのものが到着、しましたんでね。……我々は、阻止、したいんです。いくら、……とはいえ、あなたを、閣下と呼ぶなど、と……でも、耐えられるものではない。……には、申し訳ない、が、この状況で主導権を握れるのは、我々、メンテナンスを……人間だと、そういうことです」

ケネスは息苦しそうに肩で息をしながら懸命に言葉を繋ぎ、小気味よくニヤツと笑ってみせる。本来ならば立っていることさえ辛くないはずだ。

ヘルメットがはぎ取られ、視界が明るくなったディックの目には、青白い顔で大量の汗をかくケネスの顔がはつきりと映っていた。

「勘違い、しないでいただきたい。あなたを、助け……じゃない。残念ながら、私の尊敬していた人物は、とうの昔にいなくなっ……。オーリン女史や、……と一緒に……、私の中では、良い思い出でした」

彼はそのままコードを引き摺って、ディックの足元にいる何かに装置を取り付け始めた。

手足が固定されたまま身動きの取れないディックは、首を起こして何とかその様子を見ようとしたが、角度的に殆ど視界に入らない。

「おい、ジュンヤ。ケネスは何をしようとしてる、教える」

「お、教えるってたって」

言葉を詰まらせるジュンヤ、どうやら目の前の出来事に対応できず、腰を抜かしているようだ。実験台の足元からジュンヤの頭が少し見えるが、まるで動くこうとしていない。何が彼をそうしてしまったのか。薄暗い実験室、頭上の必要以上に明るい照明、固定された身体、そのどれもが、ディックを妨害している。

『S-206型への装着確認。データ移行開始』

再び女の声が聞こえた。

同時に、激しい電流がコードを伝って、何かに注ぎ込まれていく。バチバチと弾けるような音に触発され、やっとジュンヤがむくりと立ち上がった。本能的にそこから去らねばとも思ったのか、ぎこちなく実験台の縁を辿ってディックの側まで寄った彼は、汗だくになって肩で息をしていた。

「い、今、外す。外すから」

大きな影に怯えるようにして、ジュンヤは必死にディックの枷を外そうとする。留め金を触る手がガタガタと震えていて、単純な作

業だのに上手くいかない。

「落ち着け、落ち着くんた」

「わかってるよ」

言われれば言われるほど、ジュンヤは焦った。手のひらは汗でじっとり濡れていて、あと少しのところスルツと指が滑ってしまう。「クソツ」と吐きながらも両手の枷を外し、今度は足。

やっと上半身を解放されたディックは「よし」と声を出して、ぐんと半身を起こした。

電圧の凄まじさからか、当たりの計器が軒並み狂い、火花を散らし始めている。照明が全て消え、銀色に光るその物体だけが光を発していた。人間の数倍あるつかというそのシルエットは、獣のようにも、屍のようにも見えた。モンスター、それ以外になんと呼称できようか。

腰を抜かしたジュンヤの気持ちが変わらないでもない。ケネスと声の女は、どうやらD-13ではなく、この物体にリーを……。

「外れた！」

ジュンヤが歓喜の声を上げた。

ディックは急いで実験台から飛び降りる。

二人、サツと身を引いてなるべく壁際へ、そこでやっと、今起きている全てを見渡す。

卵型の機械に身を滑り込ませていたリーは、既に息絶えているのか、この騒ぎでも目を瞑ったまま、ぴくりとも動いていない。ディックから外されたヘルメットは、ケネスの手によつて化け物のような物体の大きな頭部の天辺に結わえ付けられていた。不格好にセツトされた装置から大量のデータが不格好なロボットへと注ぎ込まれていく。火花が散り、あちこちで火の手が上がり始めていた。整然と並んでいた棚の薬品やサンプルが砕け、床にこぼれ落ち、反応して引火性の高いガスを発生させる。小さな火が、少しずつ大きくなっていくのが随所で確認できた。

全て終わったとばかりに、ケネスはほくそ笑みながら意識を失い、

大の字で倒れている。

エスターは、マザーと同化していた彼女は。ディックとジュンヤは、慌てて彼女を探した。実験室の隅から隅まで、必死に眼光を走らせる。

「消えた」

かけつばなしの暗視スコープのスイッチをオンにして、彼女の姿を探していたジュンヤが、ぽつりと呟いた。

「まさか。貸せ」

ジュンヤからスコープを奪い、ディックは自分の目でそれを確かめる。

大きな口ボ、倒れるケネス、息絶えるリー、その他には、何も。

ディックは、スコープを覗いたまま動かなくなる。ごくりと、ジュンヤにもわかるくらい大きく唾を飲み込んで、震えているのが伝わってきた。

フツと全ての光と音が消える。

『データ移行完了。意識レベル正常。AI及び動作に異常なし。…閣下、新しいお身体は如何ですか』

暗闇に響く女の声に反応して、赤い二つの目玉がキラツと光った。油圧式スペアリングのギンギシという音が狭い室内でこだまし、ギギギツと金属の軋む音がする。プシューツと空気の漏れる音、そしてまた、軋む音。

「ローザ、謀ツタナ」

それだけ言うと、ロボットは銀色の触手を伸ばし、ケネスの懐から赤い端末を引っ張り出した。ヒュルツと音を出して触手を締め、体内に端末を取り込んだ口ボは、そのまま青白い光に包まれスツと姿を消す。

「最上階だ」

ディックは言って、自分の端末を手に取った。

## 98・愛憎の果て

世界の全てを見渡せる政府ビル最上階の執務室は、ローズマリィ・グリーズにとつて掛け替えのない場所だった。眼下に広がるビル群も、味気ない灰色の空も、そこからは輝いて見えていた。

彼と一緒にならば、政府総統ティン・リーと一緒にならば、どんな苦しみにも耐えられると信じていた。唇を合わせ肌を重ね、永遠の愛と忠誠を誓い、美が衰えぬように身体を変えた。彼女は悦に浸っていただけなのかも知れない。彼がどんな人物なのか、何を考えているかなど、本当のところは殆どわからなかった。彼は、心をさらけ出すとはしない。その秘密主義がまた、彼女の心を惹き付け続けた。彼女は愛に溺れ、自分を見失っていたのだ。

一度足を踏み入れてしまえば、抜け出すことなど出来るはずもない。秘書に抜擢されたその日から、彼女の運命は決まっていた。リーの手となり足となり、血となり肉となる。それまでの彼の秘書がそうだったように、ローザもまた、彼に尽くした。

唯一それまでと違ったのは、彼女が秘書になつてからというもの、TYPE-Cの劣化が激しくなり、肉体の交換頻度が上がったことだ。新しい身体、朽ちていく身体、二つを交互に見つめ、彼の心の闇を垣間見る。どうにかして彼の存在を繋ぎたいと、出来る限りの努力はしたが、度重なるコピーと長い冷凍状態は、決して良い結果を生み出さなかった。

D-13の存在を知らされたのは、数年前、ネオ・シャンハイドームで反政府組織ESが活発に動き始めた頃。逃亡し消息を絶っていたD-13が、ES内にいるらしいとの情報を掴んだのが最初だった。その頃はまるでTYPE-Dとしてのデミック・エマードに興味のなかったリーが、この数ヶ月のうち、いや、ここ数日のうちに急激にD-13への執着を募らせていったのは、島の冷凍施設の襲撃事件が起きてからだ。TYPE-Cのストックを失い、永

遠の命に途切れを感じた彼は、とうとう見境なくなってしまったのだ。

「私が、私たる所以は何か。私はこの身体を以て私たるのか。それとも、私という意識が私を成すのか。君ならばどう答える」

彼の問いに、まともに答えることなど出来なかった自分。

「私はD-13を次の身体に充てるのには反対だわ。何としても、それだけは阻止しなければと思っている。いつそのこと、無機体でも構わない」

本心を、リーに打ち明けることなど出来るはずがない。打ち明けたところで、彼の考えが変わると思えない。それならば力尽くでと、思った結果が、目の前にある。

「ローザ、貴様、何故私ヲコンナモノノ中ニ。ケネスト一緒ニ、何ヲ企ンデイタ」

S-206型は、地下冷凍施設に送り込んだS-204型の後継機だ。S-204型が肉食獣を模した形状になっていたのに比べ、S-206型は一回り小型化している。架空の“恐竜人間”をベースに、204型の前傾姿勢を改良、直立姿勢を可能にし、破壊力と防御力の高さを売りにしている。小回りも効き、何よりも開発中のロボットのの中で、一番実用的。ティン・リーの記憶データを全て移すには、相応の容量がある記憶装置も必要であり、単純なヒューマロイドではとても収まりそうになかったのだ。関係機関全てから情報を得、具体的な候補を絞った上での、彼女なりの最善の選択だった。

しかし、それをティン・リーが簡単に受け容れるはずはない。それもまた、予想できていたことだ。

「企みなど……私はただ、あなたがあの男になってしまっよりも、よりよい方法をおもったままですわ。新しい身体が出来上がるまでの、一時的な繋ぎ、仮の身体だと思ってください。これまでの研究とは違い、CからEまでの細胞サンプルが確保できるのです。短時間でTYPE-Fを仕上げることも可能では。そのためなら、尽

力は惜しみません。閣下、お許しを」

監視室の奥まで追い詰められた彼女は、無理を承知でリーに懇願した。

リーはS-206の大きな尻尾をブンと震わせ、バシンと床を叩いた。

「許ス……理解デキナイ。才前ノ行為ハ、私ヘノ裏切り以外ノ何モノデモ無い」

美しかった声も、容姿も、何もかも変わってしまったリーに、愛情など感じる事が出来るのか。自らが選択した方法とはいえ、彼女の心は揺らいでいた。

穏やかさを失った彼の黒い部分が、鉄の塊の中でむき出しになっている、それが恐ろしくてたまらない。人間という器に収まっていなければ、これほどまでに凶悪な性格だったのか。これまでは、脳内物質の分泌が、ある程度彼の凶暴さを隠していただけなのかも知れない。本性は 支配的で傲慢で、融通の利かない、悪魔のような男なのだ。

肉食獣らしく、前方向に付けられた赤い目は、ギラリと光って彼女を更に追い詰めた。アゴまで裂けた口には、S-204型と同じ尖った円錐の歯が並び、彼女の血肉を狙っている。

ガシャンガシャンと不気味な音を立て、リーは重い身体を前に前に進めてきた。

「私ヲ……慕イ続ケルノデハナカッタノカ。才前モ所詮、私ノ、TYPE-Cノ身体ダケヲ見テイタト、ソウイウコトダナ。心ノ底カラ愛スルナド、戯言ニ過ギン……。ナラバ何故、誓エルハズノナイ愛ヲ語ッタノダ。ローザ……私ハ本当ニ、才前ヲ愛シテイタツイウノニ」

巨体が、監視室の壁を、装置を、ことごとく壊していく。ミシミシと床が軋む。巨体の頭部が擦れ、バリバリと音を立てて天井が崩れていく。装置のエラーと故障を知らせる警報があちこちで鳴り響いている。

“世界を再構築するための崩壊”だと、彼は言っていた。Eとマザーの同化も、それを観察し続けるための新しい身体への移行も、再生という大義名分の元で行われてきたと信じていた。ティン・リーの新しい身体を作り続けるいわゆる“Project・T”にしたって、transmigration、転生や輪廻といった、失われた概念が元になっていると、誇らしげに語っていたではないか。リーの銀色の手が、ローザの身体を鷲づかみにした。力加減がない、彼女のか細い身体は大きな手の中で、握りつぶされていく。栗色の髪が乱れ、赤い唇から悲鳴が漏れた。

「閣下、お止めになつて！ 私は、私はあなたのことを。……でも、あの男と同化することは、別問題、違うのですか、閣下！」

「永遠ノ愛ナド、コノ世ニハナイ……。姿形ヲ判断スルコトシカデキヌ、愚力ナ生キ物メ……。果テルガイイ」

断末魔の叫びを上げて、彼女の身体はグシャツと生々しい音を立てた。金属に成り果てたりーの腕から、血が、肉が、潰れた果実のようにこぼれ落ちていく。床一面壁一面、瞬く間に赤く染まり、血の臭いが充満した。

ティン・リーは自分の手の中で潰された女の顔を、しばらくじつと見つめていた。優しく撫ぜた髪は振り乱れ、口づけを交わした唇からは、白い歯が覗き、鮮血が零れ出ている。眼鏡の奥、潤んだ瞳は、恐怖色に染まり、大きく見開いたまま動きを止めた。彼の目にはそれが、どう映っていたのか。愛おしいと思っていた女の身体が砕けていくのを、どんな気持ちで見つめていたのか。

彼は、おもむろに彼女の頭部を、大きく開いた自分の口に押し込んだ。鋭い歯で何度も何度も、噛み砕いていく。骨も、肉も、脳髓も、何もかもが粉々になって混ざり合った。喰い散らかしたカスが、銀色の身体のあちらこちらにこぼれ落ちた。味覚など、感覚など、無いはずなのに、反射的にそうしたいとも思っていたのか、そうすることで無くしてしまったものを補完しようとしていたのか。指の隙間からこぼれ落ちた彼女の手足も、彼は拾い上げてやはり口に



頬張った。

彼女の血が、可動部に染みこんでいく。基盤が、回路が、赤い液体で満たされていく。

「人間ノ身体ヲ失ウトハ、コウイウコト、ナノカ」

電子音で構成された声が、集音器を通して“頭”に入ってくる。動く度にギシギシと音を立てる腕も、歩く度にギイギイ鳴る加圧スぺアリングの足も、絶えず胴体部から発するモーター音も、何もかもが、許せない。

腹の底から、彼は叫び声を上げた。

有り余る力で、そこそこにある機械を、手当たり次第にぶち壊していく。火花が散り、噴煙が上がる。

目の前にある全てが疎ましい。何もかも、無くなってしまうえば良いのだ。

ふいに、ドタドタという複数の足音が聞こえてくる。人間だ。数は二十から三十。足並みを揃え、こちらに向かってくる。

ピタツと、戦闘の一人が足を止めた。ゴム靴の擦れる音、どうやら味方ではないらしい。

「なんだこれは……、政府総統はどこだ」

聞き覚えのある男の声に、リーは重い身体をぐいと回して振り向いた。

開け放たれた執務室の入り口にいたのは、島でエマードを必死に止めていた男。一丁前に防具を着こんで、銃など構えているではないか。

「来タナ、愚力者ドモメ」

血で染まった口をがばつと開け、赤い目を光らせる。ブンブんと尾を床に叩き付け、リーは軋むような声で彼らを歓迎した。

「私ガ政府総統ティン・リー、ダ。ワザワザ命ヲ捨テニ来ルトハ……、憐レナ」

## 99・銀の魔獣と白い天使

それまで何度連絡しても返事のなかったディックから、ハロルドの通信端末に連絡が入ったのは、政府ビル突入後だった。

ハロルドたちES飛行艇の乗組員は、EUの戦闘員らと共にネオ・ニューヨークシティ上空から突撃すべく、準備を進めていた。ドームの外側に張り付いた蔦を払い、その下にある藍色のパネルをはぎ取って爆薬を仕掛け、穴が開いたところからロープを伝って下に降りる。鉄筋の張り巡らされた天井に難儀し、何とか穴を開けた。事前に入手していた地図どおり、ドームの天辺は政府ビルの最上階と直接繋がっているようだ。内部に侵入する直前にアンリと再度通信、直接搬入用転移装置からも戦闘員を送り込んだ事を確認する。

厚さ一メートル強の分厚いドームの壁は二重構造になっており、それがどこまでも広がっている。“世界を全て包み込んでしまう”という大戦直後の発想には、感服させられる。これだけの資材をどこから調達してきたのか、それを支えた技術、重機は 全てが謎のままだ。

この巨大事業を推し進めたAI、マザー・コンピューターがエスターの中に押し込まれようとしている。総統ティン・リーの企てを阻止するために、ディックは単身政府ビルに乗り込んだらしいが、その後プツリと連絡が途絶えていた。元々、誰かと連携するような男じゃなかったが、この緊急事態、どんな細かな情報でもやりとりし合いたいの人間というもの。ところがあの男ときたら、行ったら行きっぱなし、せっかくアンリに教えてもらった端末番号も、果たして合っているのかどうか確認も取れやしない。

本当なら事前に敵の情報を入手するはずだったが、アンリはアンリで、何があったのか、マザーとの通信をあっさり切ってしまった。頼みの綱は己らの力だけ。命がけの作戦にしては、心許ない。

幸い、突入メンバーの中には、地下冷凍施設襲撃時の生き残り、

ウツドもいる。人数も、武器も申し分ない。あの時よりは幾分かマシだと、ハロルドは無理矢理自分を奮い立たせていた。

「こっちは無事に政府ビル内部に辿り着いた。そっちは」

『マザーとの同化は、阻止できなかった。エスターは、地下から消えた。どこにいるのか……目撃したら連絡をくれ』

地下からの電波で、声は聞こえにくい。

それより何より、とんでもないことになっているらしく、ディックの声は平静さを失っていた。

「消えたって、どういことだ」

『同化の途中、背中に羽みたいなものを生やしていた。あれが、飾りでないとしたら、どこかの上空にいるかもしれない。わからん』

「わからんと言われてもな。とにかく、見かけたら連絡する」

『それから、リーのヤツが小型端末でそっちに向かったようだ。俺とジュンヤも早急にそっちに向かう。凶暴化している、気をつけろ』

たったそれだけの会話で、一方的に回線を切られた。

結局、一番大切なことは伝えてこない。それがディック・エマードという男だと、嫌になるくらいわかっていたはずなのに、ハロルドはまた、同じところではめられてしまうことになる。

爆破後、辿り着いた排気口からドリルで天井に穴を開け、廊下に降りて総統の執務室を探す。通路の両側にはたくさん扉がある。どれがどの部屋なのか、一つずつドアを蹴破り、確認していく。

大量に待ち受けているだろうと警戒していた政府軍の姿はない。世界中にばらまかれた“世界崩壊”の噂でパニックになった市民の制圧にかりだされているという事前情報はあながち間違いではないらしい。ビルの警備は手薄だ。しかし、いくら監視システムをダウンさせられたからと言って、もぬけの殻のようなこの状態は不自然だ。敵襲の前触れ、なのだろうか。

最上階ともなると、一般人の立ち入りは殆どないだろう。いかにも“総統閣下のプライベートスペース”だと思わせる、小綺麗な

部屋がいくつもあつた。しかし、そのどれもに人の気配がない。

ふと、魔獣の叫び声と女の悲鳴が、一同の耳に飛び込んできた。

緊張感が一気に高まる。

重装備の男たちが先頭に立って廊下を突き進み、音の発信源と思われる部屋の扉を勢いよく開け放つ。

己の嫌な予感をもつと疑うべきだったと、ハロルドは激しく後悔した。“リーのヤツ”が、とだけ、ディックは言ったのだ。まさかあのプライドの高端正な男が、こんな化け物に変化していようなどと、誰が思おうか。まるで 冷凍施設の悪夢を思い出させてくれるような銀色のモンスターが、彼らを迎えたのだった。

「あれが、政府総統？ 人間じゃなく？」

「若い男だつていう情報は嘘だったのか」

「こんな化け物と戦うなんて、聞いてないぞ」

口々に後ろで仲間が言うのもうなずける。

「俺だつて、聞いてない」

ハロルドは、自分を落ち着かせるようにゆっくり息を吐いて、ギリりと奥歯を鳴らした。

ガシנגガシン、ギイギイと、油圧式スペアリングの足で床を踏みしめる度に、建物全体が揺れた。歩いたところだけ床が沈み、ひびが入っている。あの時の恐竜型ロボもかなりの重量だった。大人一人くらいなら平気で持ち上げ、砕いてしまった。政府総統だということのロボットも、あの時のロボに似ている。二足歩行だが、足にも手にもなりそうな前足、以前のロボほど前傾姿勢ではないが、尻尾でバランスをとっている。その尻尾も、以前のとは違って、蛇のように自在に動くようだ。

銀色の巨体は奥の部屋から入り口をぶち壊して、執務室へ足を踏み入れた。すぐ側にあつた秘書の机は、彼の尾一振りですっぴんに割れ、整然と置かれていた書類や端末がバラバラと床に散らばつた。「やっかいだな」

相手の身長は三メートル近い。ベンヤキースを喰い千切つたのと

同じ鋭い歯が、パツクリと開けた口から覗いている。あの時を彷彿とさせる、赤い血肉を引っかけて。

敵の足跡が、赤い。足跡だけじゃない、奥の部屋は血まみれで、女物だと思われる衣類の切れ端や肌色の肉塊が所々に飛び散っている。ティン・リーと名乗るこのロボット自身も……身体のうちここに鮮血がこびりつき、銀色のボディが所々赤を帯びている。生臭いのは、内臓物や体液と思われる液体が付着しているからなのか。

“凶暴化している”のは間違いない。だが、もっと詳しい情報を寄越してもらいたかったと、ハロルドはいよいよディックを恨んでしまう。

頭に、あの日のベンとキースの顔が過ぎった。肉の固まりとなり、最後の言葉をかけることも出来なかったベン、頭部と腹部を喰い干切られ、表情のわからなくなってしまったキースの震える手……。

頭を震った。こんなところで立ち止まってはいられない。あの日の悔しさを、今、ぶつけなければ。

「よし！ 行くぞ！ 尾を狙え、重心を崩すんだ」

ハロルドは自分に言い聞かせるように、大声で指示を出し始めた。

炎上した地下室からは、徐々に酸素が失われていった。データ移行時の大量な電流が原因で地下の電気設備がショートし、送風機すら回っていない。煙と炎で視界の半分以上が遮られ、逃げ道などないという事実を突きつけてくる。

燃えたぎる炎を頼りに端末を操作し、ハロルドに連絡を入れたディックは、ここに留まるのは危険だとジュンヤに呟いた。

「何とかして、俺たちも最上階へ向かおう。ジュンヤ、お前の端末には最上階の位置情報が記録してあるだろう。それで飛ぶか」

「いや、いきなり現場に行ったところで、俺たちに何が出来た。お互い、体力を消耗してる。死に急ぐだけだ。情報、ないのかな。あんな派手な格好でいれば、エスターの姿は簡単に目につくはずだ。

どこか、情報の集まるような場所があれば」

「……レナか」

今は、どこかに待避しているはずだ。連絡を取り合うことも出来るように、お互いの端末番号を交換しておいた。

医師免許を持ったダニーも近くににいるに違いない。足の折れたジユンヤの応急手当てだけでも出来れば、かなり助かる。

通信端末を開き、レナのアドレスを選択、回線を繋ぐ。

いい加減、酸素が足りなくなってきた。頭がぼうつとし、ともに思考回路が働かないのはそのせいだ。

いつだったか、そう、確か昔、所長をしていたラボを襲撃されたあの時も、炎の中にいた。あの時は酸素不足で気を失い、ティン・リーの手下に収容されたのだ。それから、急激に何かが変わっていった。思えば、リーはあの頃、“君は実験体としては成長しすぎた”と言っていた。利用価値がない、ただの副産物に過ぎないとも。

その不用な実験体に執着し、身体を奪いたいと思ったのは何故なのか。やはり、島にあった地下冷凍施設の襲撃が原因だったのか。本人は、“例え予想外の出来事があるとしても、大きな歯車は確実に回り続け、私の望む結末に導いてくれる”などと豪語していたが、単に追い詰められていただけではなかったのか。

“生”に対する固執。ディックにも覚えがあった。

いつそのこと簡単に死ぬるならと身体を呪いながらも、生き続けなければならぬと自分を奮い立たせたのは、守りたい物があったからだ。それが例え、リーによって意図的に与えられた物だったとしても、自分の意志でそれに辿り着いたのだから、後悔などしない、するわけがない。

回線が繋がるまでの間に、ディックはぐるぐるとどうしようもないことばかり考えていた。何かを考え続けなければ、意識が飛んでしまいそうなほど、空気が澱んでいるのだ。

ジユンヤの顔色が悪い。早急にここから脱出しなければ、一酸化炭素中毒になってしまうかもしれない。

「……レナ、聞こえるか。俺だ」

通信状態に切り替わったのを確認して、ディックが端末の向こうへ話しかけた。

『遅い！ 博士、遅いよ！ こっちからも何回か必死に連絡してたんだけど、全然繋がらないんだもん、焦ったじゃない』

「取り込み時間が長かったんだ。それより、今どこにいる。座標を教える。そっちへ飛ぶ」

『早急に飛んで！ 今、大変なことになってる。多分、博士が言いかけた“世界の崩壊”って、こういうことだったんじゃないのってことが、まさに起きてるんだよ』

レナの声が、異常に興奮している。普段から落ち着きなどないのだが、それにしてもまくし立てるような話っぷり。

「勿体ぶってないで、さっさと話せ」

耳に当てた端末を握る手に、僅かに汗をかき始めていた。

『天使、天使だよ！ いや、墮天使かも知れない。翼の生えた人間が、街を壊し始めてる』

エスターに違いない。

耳をつんざくほど大きく、心臓が鳴った。

半ば追い出されるようにしてDNA分析室を出たダニーとレナは、医師仲間の待つ救護所へ急いだ。監視システムをダウンさせたとしても、足がつけば終わる。想定では三十分程度で逆探知が完了し、軍の兵士が押し寄せる。いつまでも研究室に留まっているわけにはいかなかった。

通信用の携帯端末と最低限の荷物をバッグに詰め込んで、ドイツに託されたロボット犬フレディ共に、エアバイクで通路を走り抜ける。「ビルからの脱出に使い」小型転移装置と共に、EUDームからドイツクが運んできた物だった。

「なんだかんだ言つて、優しいよね」顔をほころばせたレナ、

「迷惑料にしては、気が利き過ぎてる」ダニーは頬をひきつらせた。政府ビルの中は、酷く混乱していた。“世界崩壊の噂”を信じてなのか、雰囲気にも飲まれてしまっただけなのか、大勢の人間が、他のドームへ移ろうと空間転移装置の使用許可を求めて、下の階へとなだれ込んでいた。ビルの中腹にある分析室から脱出するのにエレベーターすら使えない中、エアバイクは実に重宝した。運転するダニーの背中に丸まったフレディ、その後ろにレナが乗って、人通りがない搬入路を進む。それぞれのフロアの連絡口に近付くと、パニックに陥った研究員たちの叫び声が入った。つい数時間前までは崩壊の噂など信じてはいなかったのだから、システムダウン、反政府組織らの攻撃を知らせる爆破音と続けば不安も出てくる。状況を飲み込めず、何が本当なのかと騒ぐ声、とにかくこのビルから逃げなければと前後がわからなくなるほどわめく者もいた。

混乱が起きるのも、想定していたはずだった。だからこそ、事が起きる前にわざと噂を流したのだ。

「本当に崩壊が始まるとしたら、こんなもんじゃ済まされないうらうな」



エアバイクを走らせながらダニーが呟くのを聞いたレナは、なるべく他人に聞かれないうちに、彼の耳元でそつと囁いた。

「そりゃそうだよ。今のところ血は流れてない。なのに、こんなに混乱している。エマード博士が何を想定しているのかなんて知らないけど、覚悟はしておいた方が良いんだと思うよ」

非常用階段を延々と滑り下りた。それでも、人の波は次第に大きくなって彼らの行く手を阻んだ。地上に近づくにつれ、普段研究員が出入りすることのないような裏通路まで人だかりが出来、大きなエアバイクでは隙間を抜けることが出来なくなる。

「外へ抜けるか」ダニーが言うと、

「それしかないよね」レナも仕方なしにうなずいた。

一旦引き返し、助走をつけて窓ガラスを突き破り、外へと飛び出す。車体ごと宙に投げ出される。眼下にはビルに押し寄せる人垣、が、眺めている余裕などない。振り落とされまいよう、必死に掴まりあつて、車体が安定するのを待つ。一瞬、ビルの下から吹き付ける風に煽られてバランスを崩しそうになったが、ダニーがぐつとハンドルを起こすと、次第に平衡感覚を持ち直していった。

天まで伸びる細長いビルを支えるために添えられた太い支柱のひとつを、銀色のエアバイクは撫ぜるように滑り降りていった。速度が増し、Gがかかる。風圧が、二人と一体を引きはがそうとする。

「もう少し!」

着の身着のまま逃げてきたダニーの白衣がバタバタと風に煽られて、レナの視界を塞いだ。頭を丸くして彼の背中にうづくまるようにしていたレナが思わず顔を上げると、白衣の端が当たって、眼鏡がぶわつと吹き飛ばされた。命の次に大事な眼鏡、思ったけれども、風で逆立った彼女の黒髪の方こうに消えて見えなくなってしまった。諦めるしかない、彼女はまた、ぎゅつと彼の背に顔を伏せた。

ブレーキを数回に分け、ゆっくりかける。車体は徐々にスピードを落とした。地面が近くなり、コントロールできる速度まで落ち着いたところで、ダニーは本来の目的地へ向かうため、ぐつとハンド

ルを右に捻った。

小さなビルの上から上へ飛び移り、更に低い建物の上を滑って、道路へ。

事前に入手していた情報の通り、政府ビルへと向かう車の列がどこまでも続く。ドーム中からたくさん人間が押し寄せてきているというのを、情報としては知っていた彼らだが、実際それを目の前になると、あまりの凄まじさに足がすくんだ。政府軍の殆どは、暴徒と化しつつある一般人らの制圧、制止にかりだされ、本来の機能を失っているようだ。あちこちで暴動が起きているのだろう、人だかりに混じって、政府軍の戦車や機動車が道を塞いでいる。

ダニーらは、そうした人の流れに逆らうようにして、救護所へと急いだ。

三階建ての空きビル、地下室付きでライフラインも万全、もしものときになるべく大人数を収容できるようにと考えて選んだ場所だった。応援を頼んだ医師らは初め怪訝な表情を見せたが、万が一も有り得ると協力を約束してくれた。世界中に流れた噂でドーム内がパニックになり始めると、まだ何も起こっていないというのに慌てふためき騒ぎに巻き込まれた怪我人らが各地の病院に駆け込むようになり、いよいよ“救護所”の必要性を認識したようだ。早い段階で開設された救護所には、既に数十人が運ばれていて、医師の診察や治療を待っている。

灰色のくたびれた外観は、まるで清潔感を感じない。数台の車が周りに停まっているだけで、看板も案内もない。ただ、不自然に清潔そうな服を着た男や、マスクをつけた女性らが頻繁に出入りしているだけだ。

スピードを落としたエアバイクが、スウツと空きビルの前に止まる。吸い込んでいた空気が車体から抜け、ようやく地面に足がついた。

「着いた。一時はどうなることかと思っただけど、案外どうにでもなるもんだな」

「ハンドルから手を離し、ガチガチになった方を擦りながらダニーが言う。」

「ホント、死ななくて良かったわ。ね、フレディ」

レナの懷で丸くなっていたフレディも、折りたたんでいた足や頭を又ツと出して、ドーベルマンの形に戻っていた。

二人と一体、救護所の中へ入ろうとしたところで、最初の爆音が鳴る。大きいのが政府ビルの近くで一発、その後、立て続けに数発あちこちで爆炎が上がった。ドーム内が突然オレンジ色に染まり、爆発によって巻き上げられた煙と瓦礫が、わっと広がっていく。何が起きたのか　それこそ、いわゆる“崩壊”であるのか。街中がざわめき立つ。

「ね、爆発してるの、エネルギーステーションじゃないの」

ボソツと呟いたレナの言葉に、呆然と立ち尽くしていたダニーは我に返った。

街には高濃度エネルギー溶液を蓄えた貯蔵タンクが数カ所ある。リサイクル燃料を圧縮させて精製される溶液は引火性が高いため、エネルギーステーション付近では火気厳禁、火災や爆破など通常ではあり得ない。まして、密閉されたドーム内での爆発は連鎖する。引火した溶液が散り、飛び火していく。

嫌な予感がした。エマード博士と初めてコンタクトした以来の、胸の中がざわめき立つような感覚が、ダニーを襲っていた。

と、今度は爆破したのと逆の方向でズズと地鳴り、振り向くと数十階建てのビルが真つ二つに折れて崩れ落ちようとしている。身体を捻って、街全体を見渡せば、同じ現象が随所で見受けられた。一律に平面で切り落とされたように、高層ビルがひとつ、またひとつと崩れ落ちて行くではないか。

政府ビルから一キロ離れたこの救護所も、危ない。高層ビルの建ち並ぶ界限、目立たぬようにと思って選んだ廃ビルがあたとなってしまつ。

「地下だ、地下に逃げ込むしか」

それだって安全とは言いがたいが、今はそれしか出来そうにない。ダニーとレナはうなずき合って、急いで救護所の中へと駆け込んだ。

医師と患者が入り乱れてざわめきたち、窓から身体を出して外の様子を確認する者、泣き叫ぶ者、怒り狂い暴れ出す者、とにかく建物の中は散々な状況だ。一階の入り口からすぐの場所にある事務室のドアを開けると、今度は別のトラブルで頭を抱える者もいる。医師の他に、技術者と思われる作業着の男が数人、ノート型端末機の画面を覗き込み、なにやら騒いでいる。「さつきから、回線がおかしいんだ」との言葉に、レナは慌てて作業員の間を割って入り、画面を確認した。

「な、なにこれ……」

真っ黒な画面に、白い字が現れ、延々とスクロールしている。

「爆発直前から、こんな感じ。一体、何がただか」

その文字は、意味を成していた。淡々とした、起伏のない文章。単語毎に改行、センタリングされた文字列は、こう語っている。

「終わった」 「警告する」 「愚かなる人間共」 「全ては再生される」 「何もかもが作りかえられる」 「歴史は終わった」 …… エンドレスで、流れてるわけ？」

「ここの端末だけじゃない。あっちこっちで……、まるで少しずつ浸食してるみたいなんだ」

「レナ、携帯端末は大丈夫か」と、ダニー。

あつと声を上げ、レナは慌てて懐から端末を取り出し、画面を確認する。

「大丈夫みたい。博士に連絡してみるね」

作業員らが見守る中で、ディックの端末に応答を求めるが、返事はない。恐らく立て込んでいるのだ、わかつてはいたが、レナは心細さから泣き出しそうになるのをぐっと堪え、奥歯を噛んだ。

間違はなく、「崩壊」とやらは始まっている。姿無き何者かが、ネオ・ニューヨークシティを破壊していく。

短時間で起こった様々なことを少しずつでも整理していかなければ、混乱してまともな判断など出来そうにない。

焦り、汗ばむ男らの中で、レナはただ呆然として、手の中の端末をじっと見つめるしかなかった。この先、どうすれば……。

「外！ 外見て！」

集中力が途切れる。事務室に飛び込んできた看護師の声に、中にいた面々は端末機から目を離し、一斉に窓際に駆け寄った。窓を開け放ち、「上！」の声に、揃って仰ぎ見る。

白い物が、上空を過ぎったように見えた。

逃走中眼鏡を失ったレナには、それ以上、それがなんなのかはつきりわからない。

だが、ダニーはじめ、そこにいた作業員らにも、医師らにも、何かが見えていたらしい。

「レナ、外に出るぞ。今のが何なのか、突き止めなきゃ」

汗ばんだダニーの手が、レナの腕を掴んだ。引つ張られるようにして事務室を飛び出し、再び屋外へ。フレディも後を追いかけてくる。

「ね、何、何が見えてたの」急かすレナ。

「いいから乗って」ダニーはエアバイクにまたがって、エンジンをかけた。

ほんの十分弱の間に、火の勢いは増していた。広範囲にわたりビルが倒壊している。飛び散ったエネルギー溶液から引火したのだから、火災箇所も急激に増えた。水道管が破れ、水柱が立つ箇所もあるが、火の勢いは衰えることはない。街全体が瓦礫の山になってしまった。エアバイクはそれらを飛び越え、走る、走る。さっきまで人だかりでゴった返していた通りも、ビルの残骸で完全に押し潰されてしまったっている。悲鳴、叫びが時折耳に入って、それがダニーとレナを更に追い詰めていく。

エアバイクは更にスピードを上げた。

心なしか、さっき辿ったばかりの道に戻っている。

「どこ行くの」

「さあ、あの白いのに聞いてくれ」

ダニーが右手を挙げた。その先に、白い物が見える。羽を広げた鳥のような、それにしてもは大きすぎるような。

「天使だ。本で読んだことがある。“神の使い”だったっけかな。あくまでも想像上の存在だったらしいが、誰かがそれを具現化させた」

「“神の使い”ってことは、人類の味方、じゃないの」「インヤ。そうとも限らないさ。その“神”が、何者かによる」

巨大な政府ビルが眼前に迫ると、天使は徐々に飛行速度を弱めた。軽く旋回して、崩壊を免れたビルの屋上へすうっと降り立つと、広げていた翼をゆっくり閉じて羽を休めはじめた。

天使との距離が縮まり、目の悪いレナにも少しずつだがその姿が見えてくる。羽をたたくでしまえば、それほど大きくはない。自分と同じか、少し大きいくらい。白い鎧を身に纏った、と表現するのが妥当だろうか。白銀の防具で全身を固め、白銀の兜を被っている。顔はマスクで覆われ、表情は見えない。中にいるのが人間であるのか、アンドロイドであるのかさえ、判断できない。

近くまで来ると、ダニーは天使が降り立ったところから少しだけ離れた小さなビルの屋上にエアバイクを停めた。

改めて、レナはディックに連絡を取ってみる。

「だめだ、通じない」

小さな端末を握りしめ、レナは背を丸めて屋上に座り込んだ。どう表現したら良いのかわからない絶望感。この事態を収束してくれるのは、ディック・エマード博士しかいないと、思っているのに。

冷たいビル風が、打ちひしがれるレナの身体に吹き付けた。

地上にいるよりも、ビルの屋上からは被害がはつきりわかる。人工太陽の光は落ち、街を覆い尽くす勢いで広がっていく炎が、赤々とドーム全体を照らしている。巻き起こった噴煙で空気は澱んでいる。情報網の混乱で逃げ惑う人々、絶えない悲鳴。

政府ビルから放射線状に広がっていた美しい町並みが、跡形もなく崩れていく。

“何もかもが作りかえられる” “歴史は終わった”、黒い画面の中の文字列と、現実の光景が錯綜する。

『恐らく一週間以内に、この世界は“崩壊”する』  
たった三日前のディックの言葉だ。こんな現実、認めたくはない、だが、逃げることも出来ないのだ。

羽を休めていた天使は、しばらく沈黙を続けていたが、何かに反応するようにスツと右手を挙げた。細く白い指の先が光ったかと思うと、青白い光の柱が街のあちこちに現れる。

何をしている、慌ててダニーは屋上の柵から身を乗り出し、光の柱の一つを見下ろした。彼らのいるビルの真下、半径一メートルほどの円内から、何かが湧いてくる。ウヨウヨと、虫のように這いだしてくる。黒い服を着せられた、人間のような、そうでないような不気味な一団が次々に顔を出す。それらは、皆一様に何かしらの武器を持っている。銃器、鈍器、鋭器、振り回し、撃ち乱し、生き残った人間らを次々に攻撃している。

「何あれ、人間じゃ、ない」  
恐る恐る覗き込んでいたレナが、また身体を震わした。

「崩、壊、……“崩壊”だなんて、そんな生温い言葉で表現できるような状態じゃないだろ」

果たして、彼らの頼るディック・エマード自身、ここまでの光景を予想していたのかどうか。

レナは再度、端末を手に取った。何とかして、事態を知らせなければ。

「ああつ、何でもこう、大事なときに繋がらないの」

「博士は博士なりに戦ってるんだ。焦るなよ」

「ダニーが慰めても、焦燥感は拭えない。」

「街は、ドームはどうなるんだ」

思わずぼつりとダニーが漏らした。レナの手前、気丈に振る舞っ

てはいたが、心臓のバクバクは収まりそうにない。さつきから嫌な汗を全身にかいて、手の裏、足の裏までべっとりしている。

逃げろだなんて言われても、最初から逃げ場などなかった。閉鎖空間の中で、より被害の少ないところに隠れるしか方法がない。この事態を引き起こしていると思われる政府総統、彼は何故こんなことを。本気で人類を滅ぼそうとしているとしか、考えられない。

泣き叫びたいのをぐっと我慢した。今までの生活が、研究が、築き上げた物が次々に失われていくのを、眺めるしかない自分の無力さを恨んだ。

そうやってうなだれるダニーの白衣を、急にフレディが口で引っ張ってきた。どうしたんだとかがんで声をかけると、犬らしくワンワンと鳴く。上を見ると、合図をしているように思えて、ダニーはふと、顔を上げた。

目を疑う。

上空から、何かが崩れ落ちてくる。

人工太陽を失ったはずのドームの天井に、小さな光があった。光の点は徐々に広がり、面になり、眩しいほどの大量の光を注いでくる。

「崩れてる」

呆然と立ち尽くす中、レナの携帯端末が着信を知らせた。待ちに待った、ディックからだった。



一通り今起きていることを喋った後で回線を切り、レナはフレデイの背中をこじ開けた。座標を確かめ、ディックの端末に情報を送信する。

「頼むよ、博士。ホント、お願いだから早く飛んできて」

祈るような気持ちで足元に置いた携帯端末に手を合わせた。

「けど、博士が飛んできたところで、何が出来ると思う。天使まで距離を縮めたのは良いけど、近寄れる感じじゃないし、アレが何者なのか全然わからない。俺たちと違って、丸腰じゃないにしても、あんなのに対抗するような強力な武器は持ち歩いてなかったじゃないか」

「そうだけどさあ……」

ダニーに気持ちを削がれ、レナはため息をつく。

そんなことは言われなくてもわかってる。いくら“N O C O D Eの星”と呼ばれた人物だとしても、彼に特殊な能力などあるようには見えないからだ。

「だからと言って、他に頼れる人もいないし。事情を一番知ってるのはエマード博士でしょ」

「あのなあ、簡単に言うけど、相手は化け物だぜ。生身の人間が勝てる相手じゃない」

「そんなの、やってみなくちゃわからないじゃないの」

「やらなくたって、結果なんて明白だろ」

言い争いをしているその側で、周囲が青白く光った。

「何が明白だって」

低く渋い声、ガタイの良い身体、 ディックだ。ジュンヤも一

緒のようだ。ディックに肩を支えられて、辛そうにしている。

「博士！」

二人は声を揃え、ディックらの側に駆け寄った。

フレディも嬉しそうに尾を振りながら、ディックに駆け寄っている。  
「すまないな。まさかこんな事になっているとは……。てっきりお前らがいるのは救護所だと思っていたんだが、あっちはどうなったんだ」

じゃれつくフレディの頭や背を何故ながら、ディックは周囲を見渡した。屋上からは火の手があちこちに見えた。切り倒されたかのようなビル群、つんざくような悲鳴、光を失った人工太陽。ドームの天井からハロルドたちが侵入したのは知っているが、この崩れ具合、恐らく彼らの仕業ではない。リーのヤツが便乗して穴を広げているのだ。惨状は想像以上だったらしく、顔をしかめている。

「なるべく被害に遭いにくくて、政府ビルからもそう遠くない場所を選んだつもりだったんだけど……、あそこはもうダメだ。恐らく崩れたビルの下敷きになってる。見通しが甘かったんだ」

ダニーはそう言つて、肩を落とした。

正直、“見通しが甘い”で済まされるレベルではない。ティン・リーが全てを破壊するつもりだということは予想できていたが、ここまで何の躊躇もなく全てを破壊してしまうとはディック自身想像だにしていなかった。

マザー・コンピューターは世界中のコンピューターと繋がっているらしい。回路の隅々までマザーの指令が行き渡り、それが創造へと働いた結果、今の世界が出来た。破壊へと働けば、機械共は暴走して世界を崩していく。

マザーは言った、『政府総統ティン・リーの暴走を止めよ』しかし、約束は果たせそうにない。

これだけ破壊の限りを尽くされた後で、リーを止めるなど、出来るのか。しかも、今彼は人の姿していない。破壊力の高いロボに意識データを移してしまった。

加えて、破壊の天使に姿を変えてしまったエスターを止める方法も、見つかりそうにない。エスターとマザーの同化レベルも気にな

るが、問題は助けたとして真つ当に人間として生きていける状態にまで戻せるかということ。変化の途中経過を見た限りでは、体内に金属を取り込んでいた。“金属分子を含んだ特殊溶液は、Eの身体を巡るナノマシンと反応し、彼女自身を一つの機械に造り変える”と、リーはほざいた。“E”の研究中、確かにそんな話をしたのを覚えてる。“機械と人間の融合した生命体を作ることによって、より完全な存在が作れないか”と。実現レベルまで研究が進んでいたということに、ディックは驚異した。そして、時間の流れがどれほど残酷で、技術進歩がどれだけ早いのかということも、いやというほど思い知らされる。

「……いや、俺にも、もつと先を見通せる力があれば良かった。もつと強制力のある避難指示が出来れば、この人間は助かったかも知れない。それより、ダニー、まずはジュンヤの怪我を見てくれなしか。足が折れてるようだ。救護所に飛ぶもんだとばかり思ってたんだが、ここで何とか出来るなら、してほしい」

うんうんと数回うなずいて、ディックに肩を預けたジュンヤの左足を触診した。すねの辺り、不自然に折れ曲がっている。骨折箇所から熱を出し、苦しいのだろう、大量の汗が出ているようだ。

「酷いな……とりあえず応急措置だけは出来る。でも、出来るだけ早く病院に行つた方がいい。と言っても、この状況じゃ病院なんて機能してないだろうけど」

乗ってきたエアバイクの座席を開け、包帯と添え木代わりになりそうな工具を取り出した。ディックと二人で屋上にジュンヤを寝かせ、手早く足を固定する。

「痛み止めぐらいしかない。飲んどく？」  
「貰う、ありがとう」

政府ビルの地下で何があったのかわからないが、血だらけで、すすの臭いがこびりつき、軽いやけども見える。早く処置をしてやらないと、痕が残る。医師の気持ちになりながらも、今ここで助けたとして、生き残れるのかどうかという葛藤も、ダニーの中で渦巻

いていた。

「エマード博士、さっき言ってた“天使”そこだよ、見える？」

屋上の柵から身を乗り出すようにして、レナは数百メートル先の背の高いビルの屋上を指さした。殆どのビルはなぎ倒されているのに、そのビルだけ不自然に残っている。屋上に白い影が見え、ディックは目を細めた。

「確かに、白いのがいるな」

トリストに乗り込んで暴れたときに眼鏡を壊して以来、そのままにしていたディックからは、レナの言う白い人影はぼやけてしか見えなかった。元々あまり目は良くないのに、勢い余って眼鏡をぶっ壊してしまったのを激しく後悔した。思えばレナも、確か眼鏡を掛けていたはずだ。やはりどこかでなくしたのだろう、目を細めて必死にそれを見ようとしている。

「アレの正体、知ってるの」

「ああ、知ってる」

レナの隣で、ディックはそう呟いた。物悲しげな声に、レナは思わず顔を上げて彼の表情を確かめた。

赤々とした炎に照らされていたが、その目は暗く沈んでいた。キリッとしていた眉が三角屋根のように曲がって、今にも泣き出しそうに目尻を震わせていた。

「あれは、俺の娘だ。……可愛いそうに」

頬を涙が伝い落ちていく。握りしめた拳は震え、革手袋がぎゅぎゅっと音を立てた。

鬼のようなディックの意外な一面に、レナの胸はぎゅっと締め付けられる。

「同化は終わってしまった。あいつの中身はもう、俺の娘ではなくなっているのかも知れない。マザーにしたって、本人は否定していたが、こんな風になってしまふことを望んではいなかったはずだ。何が“神”だ、“完全なる支配”、そんなものクソ喰らえだ。そんなくだらないことのために、どれだけ命をもてあそぶつもりなん

だ

下から吹き上げられたビル風が、ディックの頬を乾かした。風に逆立った髪の毛は、彼の怒りを表しているようにも見えた。

「レナ、悪いが俺の代わりに、EUドームのアンリと連絡を取ってくれ。端末は渡しておく」

思い立ったように、ディックは懐から取り出した赤い端末を、ぽいとレナに投げて寄越した。

放り投げられたそれを、レナは慌てて両手でキャッチし、目を丸くする。

ディックはそれ以上何も言わずに、ジュンヤの手当をするダニーの側まで歩み寄った。

「エアバイクは返して貰う。悪いが、自力で避難してくれ。でなければ、俺かジュンヤの端末に適当な座標を入れて、どこか安全なところへ飛べ」

「飛べって……、ディック、何をするつもりだ」

熱に冒されたジュンヤが、上半身をぐいっと起こしてディックに叫んだ。

「何を……？ 愚問だ。エスターを助けに行く。そして、リーをぶっ倒す」

ジュンヤの防具からそつとエネルギー小銃と替えのボトルを抜き、自分のホルダーに入れ直すと、ディックはニヤツと不敵に笑って見せた。爽やかさの欠片もない、いかにもとんでもないことをやらかしそうな、気色悪い笑い方だ。引きつった口角と滲んだ汗、笑い方を知らない鋭い目が、ジュンヤの心に突き刺さった。

助けるだなんて、出来るはずがない。誰もが思った。

自信たっぷりなように見せかけて、その実、彼の手がガタガタと震えているのを、三人ともしつかり見ていたのだ。

「無茶だ。死に急ぐだけじゃないか。冷静になれよ。残酷冷徹な工マード博士はどこに行ったんだよ」

泣き叫ぶようなジュンヤの声を振りほどくように、ディックは彼

に背を向けた。

「フレディ、行くぞ。お前のご主人を助けに行く」

似合わない防弾ベスト、頼りない背中。犬ロボット一体、エアバイク、それから威力の望めないエネルギー小銃含め銃数丁。巨大な敵と立ち向かうには、あまりに頼りない装備だ。

炎が、彼らのいる屋上付近まで達している。

バラバラと崩れ落ちてくるドームの天井材がいつ頭上に降り注ぐかもわからない中、ディックは銀色のエアバイクにまたがった。

フレディが後部座席に飛び乗るのを確認して、エンジンをかける。

「俺は死なないんだ。忘れたのか」

振り向いて一言、苦しそうな声が、いつまでも尾を引いた。

「……で、博士一人残してのこのこ飛んできたわけだ」

小型転移装置でEUDームに飛んだ三人に向けられたのは、アンリの容赦ない一言だった。ディックの端末に残されていた内部監視室の座標、頼れるのはそこしかない、深い考え無しに飛んだと言われれば、確かにぐうの音も出ない。

内部監視室では、トリストの修繕作業が終わり、数人のスタッフは床一面に伸びていた配線を手際よく片付けていた。アンリも機械やモニターのメンテナンス作業をしながら、ネオ・ニューヨークシティや政府の動きを探っていたようだ。精密ドライバー片手に機械に張り付いていたアンリは、見覚えのある青白い光に手を止め、現れた三つの人影にうなだれてしまう。想定していたのと別の方向に事態が進んでいたことを悟ったのだ。

「残してきたってわけじゃないけど」

ダニーに肩を抱えられたジュンヤは、申し訳なさそうに目線を落とすとした。

あり合わせの道具と包帯で固定された足が痛々しく、立っているのがやっとなのだ。アンリにもわかる。だが、つつい、本音が口から出た。

「画面を通して頼りないと思ってたけど、本当に頼れないな。ジュンヤ、君って男は、博士のことをなんだと思って」

ジュンヤは、ますます申し訳なさそうに身を屈めた。

風体からして三十手前のアンリは、ディックと対等に話していたところを見ると、かなりの頭の切れる人物らしい。しかし、チャラチャラとした外見からそれが想像できるかと言えば、かなり難しい。逆立たせた銀髪も、細長の四角い眼鏡も、黒でまとめた服装も、技術者からはかけ離れた印象だ。“アンリと連絡を取ってくれ”ディックの言葉を信じるならば、彼がこの先の道しるべとなるようなの

だが、会って早々に“頼りない”と言われたジュンヤは、複雑な心境だった。

「俺だって、何とか出来るなら何とかしたかった。……だけど、事態是最悪の方向に動いてしまった。エスターは完全にマザーと同化し、リーも化け物に姿を変えた。負傷した俺を“戦力にならない”と判断したから、ディックは避難するよう仕向けたんだろ。……もちろん、こんな終わり方、納得できるわけない。無理してでも現地に戻りたいと、今でも思ってる」

痛めた足を引き摺りながら、ジュンヤは悔しそうに拳を握った。  
「そんな足で何が出来る。それこそ、博士の足手まといになるだけじゃないのか。希望だけ言ったところで、実現できないなら、言わない方が未だ利口つてもんだ。それより、現状を整理しよう。」

突然ネオ・ニューヨークシティのメイン・コンピューターとの接続が途切れたんだ。こっちからのアクセスにはまるで応じない。ハロルドとの連絡もつかないし、一体どうなってるのか、ここからじゃ殆どわからないんだ」

アンリは言いながら、部屋の隅にあるミーティング用テーブルにジュンヤを案内した。「あんたたちも」の言葉に、ダニーとレナは顔を見合わせ、恐る恐る付いていく。

「しかし、すごいところだね……。何なの、ここは」

レナは室内をぐるっと見回し、ため息を漏らした。床から天井までびっしりと積み重なったモニターや端末、その中央に鎮座する流線型の美しい機械と、天井から垂れ下がった太いコード、まるで一つの芸術作品を見ているかのように、彼女は頬を綻ばせた。近視の彼女は詳細を捉えることはなかったが、それでも、金属の重なりや耳に響く機械音に胸が高鳴った。誘導するアンリの意志に逆らって、あっちへフラフラ、こっちへフラフラ、目を細めて手を伸ばし、触ってはニヤニヤを繰り返す。今の状況を把握しているのかと思われ、ほど目を輝かせる彼女に「機械好きは良いが、時と場合を考えるとダニーが忠告するも、まるで聞き入れる様子がない。」



ちよろちよると動きまわるレナを余所に、ドア一枚分ほどのスペースに小さな四角いテーブル、四つの椅子、中央にノート大の電子ペーパーを広げると、アンリは三人にその場に着席するように求めた。ダニーに支えられるようにしてジュンヤがまず腰を下ろし、その隣にダニー、レナが座る。皆が集まったのを確認し、「まず見て」アンリは自分のペースでぐいぐいと話を進めていった。

「地下実験室とやらは……火災炎上中、で、ハロルドがドーム上空から総統執務室に向かったはずだけど、こっちは順調、総統も地下から最上階へ移動した、と。で、ビルから一キロの救護所は、周囲のビルもろとも倒壊……。それから、何だっけ」

「エネルギーステーションが爆発した。このこと、このこと、……ここかな。この辺もだったような。それから、白い天使が来て、政府ビルの方向に」

「他には」

「どこから召喚された化け物みたいなのが、相当数現れてるよ。ダニー、どの辺だっけ」

「確か、この周辺だったよな」

電子ペーパー上に映し出されたネオ・ニューヨークシティの地図に、アンリが指でメモをしていく。証言を元に走り書きの字がそのまま転写されるのを、三人はうなずきながら眺めていた。

「こっを書き込んでみると、結構広範囲だな」

「生きてるのを褒めて欲しいくらいだよ」

冗談交じりに言うダニーだが、地図を見て内心焦っていた。被害はネオ・ニューヨークシティのほぼ全域にわたっている。特に政府ビルを中心とした繁華街の被害が著しい。作戦に協力してくれた医師らも、働きかけに応じて避難している一般市民らも、この様子では生き残っているのかどうか。最悪の事態が予想される。最早、後悔してもどうにもならないというのに、慚愧の念が渦巻いてしまう。

目に見えない部分で更に被害が拡大している恐れもある。ダニーらが把握しているのは、あくまでも屋外から見えた範囲での被害だ。

年寄りや子どもが多い郊外の住宅地で何が起きているのか、建物内部で何が起きているのかは不明のままだ。

ふいに、レナが何かに気付き、あつと声を上げた。

「ねえ、このドーム、回線はおかしくないの」

「回線？」

「あつちでは、ネットワークに繋がったコンピューターが、少しずつイカレ始めてた。画面が真っ黒になって、変な字がずらりと流れてるだけになってさ。幸い、携帯端末は無事だったけど、……もしかして、マザーの浸透には時差がある？ てことは、このコンピューターがまともなうちに、何か対策、取れたりする？」

「対策という」と

電子ペーパーから目線を離し、レナの目を見つめるアンリ。その視線が異様に冷たく、彼女は思わず息を飲んだ。

「た、対策っていうか、対抗策っていうか。まあ、なんて言うの、マザーの暴走を止める方法だよ。機械化した総統のことは目の当たりにしていないから何とも言えないけど、マザーに関しては何かが出来らんじやないかと思っただけよ。確かマザーは、政府総統のせいで無理矢理あの娘と同化させられて、破壊プログラムみたいなものを起動させているわけでしょ。マザーは元々AI、人工頭脳といえど、所詮組まれたプログラムによって動いているに過ぎないわけよね。恐らく、コンピューターウイルスみたいな感じのもので、データを改変させられてる状態だと思うんだ。あの娘との同化自体を取り消すことは出来ないにしても、その破壊プログラムを打ち消すような物が作れば、破壊行為をやめてくれる……ってのは、あまりにポジティブすぎる、かな……って、アレ？ どうしたのみんな、そんな目を丸くしちゃって」

調子に乗って、とりあえず言いたいことを全部言った後で周囲を見回すと、時間が止まってしまったかのように、男共は目をしばたかせていた。口を半分開けてアホ面になった彼らに、どう話しかけたら良いのか迷うくらい、何かに驚いているではないか。

不味いことを言ってしまったんだろうか。

レナは両手で口を押さえ、ごめんなさいごめんなさいと目をキョロキョロさせながら心の中で何度も呟いた。

「そういうのをさ、なんでもっと早く思い浮かばないんだよ」

悔しそうな声を出して、アンリは両手で頭を抱えた。

思っていたのと全く違う反応に、今度はレナがぼかんとしてしま  
う。

「同化される前に、ワクチン的な予防策が打てないかっていう考え  
までには、辿り着いてたんだ。でも、同化されたらまず無理だろう  
と……、そつから先、僕は何も考えちゃいなかった。彼女のことを  
本当に考えるなら、同化が始まった後も諦めない、それが男だろ……  
。何て、何て愚かなんだ」

頭を振り、己の無力さのため息をつくアンリを覗き込むようにし  
て、ジュンヤは恐る恐る尋ねてみた。

「彼女……って、まさか、お前もエスターのこと」

「バカヤロウ、彼女って言ったら、マザーのことに決まってるだろ。  
あのクソオヤジの娘なぞ興味があるか、僕はマザー一筋なんだ。君  
みたいな物好きと一緒にされちゃ困る」

アンリは赤面しながらも、必死に否定してくる。マザーの話にな  
った途端、冷静さを失ったのに驚いて、ジュンヤは座っていた椅子  
からずり落ちそうになっていた。

「え、まさか二次元……うそだろ」

ダニーもレナも、豹変に絶句し、顔を引きつらせる。

そういう人間もいるらしいと噂には聞いていたが、目の前のク  
ールな男がそれだとは。

「し、失礼だな、君らは。彼女には固定した形という概念がない。  
僕は少なくとも、彼女と出会うときは三次元、いや、四次元の感覚  
で触れ合っていた。彼女がどれほど世界を愛し、世界を憂いている  
のか、君らには到底わからないだろう。僕だけが彼女の理解者で、  
パートナーだったんだ。なのに、あの男は奪った……。しかも、よ

りによって、ヒゲ男の娘と同化させるなんて、ホント、理解に苦しむ」

まともそうなふりをして、とんだ変態男だ。思ったが、三人とも口には出来なかった。ちらと周囲を見れば、メンテナンス要員のスタッフも、苦笑いを浮かべてアンリを見ている。本人は至極真面目で、余計なことはいえないような雰囲気、とりあえずこのまま流そうかと、ジュンヤたちは目で合図した。

この辺りで空気を変えなければと、咳払いを一つ、姿勢を正してレナが無理矢理話題を戻した。

「で、ものは相談なんだけど、ここには幸い機材がたくさんありそうだし、それなりに人員も確保できそうじゃない。試行錯誤することにはなるし、マザーがこのドーム内に浸透するまでっていう時間との闘いでもあるけど、やってみる価値は、あると思わない？」

「思うとか思わないじゃない、価値はある」

さつきからの勢いそのままに、アンリが返事する。

電子ペーパーに別画面を呼び出して、彼は有効と思われる方法をささっと図で描き始めた。

「マザーのいるネオ・ニューヨークシティでは回線異常が発生しているが、こっちには今のところ被害はない。普段は、EUドームのメイン・コンピューターとネオ・ニューヨークシティのメイン・コンピューターを繋いでいる回線を利用してアクセスしてるわけだけど、さつきこの回線を利用しようとしたら、弾かれてしまった。正常なシステムからの侵入をブロックする機能が働いている印象だったんだよ。まず一方で、EUドームのメイン・コンピューターを守る必要がある。もう一方で、破壊プログラムを阻止するソフトを作る。問題は、出来上がったソフトを如何にしてマザーに読み込ませるかかってことになるけど」

「それなら、口から投与するしかないと思うぜ」

門外漢がしゃしゃり出るべきじゃないとしばらく沈黙していたダニーが、急に口を開いた。

テーブルに肘をついたまま無精ひげを撫ぜ、

「天使の口、見えてた。顔の上半分はマスクみたいなので隠れてたけど、あそこが唯一、投与できる箇所だと思う」

頭の良いように見せたいのか、普段は伊達眼鏡を掛けているダニー、実は視力が良い。コンタクトレンズか眼鏡がなければ何も出来ないレナと違い、あの状況下でしっかりと観察していたようだ。

「ベースは生身の人間なんだろうから、チップやディスク型のものじゃダメだ。飲み込ますようにするしか方法はないな」

「……液体状のものか、錠剤のようなものか」と、ジュンヤ。

「飲み込ますつたつて、誰がどうやってあの天使に近付くのよ。ほぼ不可能に等しいんじゃないの」

レナも、長い黒髪をくしゃくしゃと掻いて悩んでいる。

マザーと同化したあの身体にどのような機能が備わっているのか、はつきりとはわからない。ただ、飛行能力があるのは目にした。その上攻撃力が高ければ、上手く近づけたところでそれ以上何も出来ないまま撤退することになるのは目に見えていた。

「俺が、行くしかないな」

額に汗を滲ませ、痛みに耐えているのか青ざめた顔で電子ペーパーを見つめていたジュンヤは、意を決したようにそう呟いた。

「行くしかないつて。そんな身体じゃ無理だ」

応急手当をと思いつながら話に引き込まれていたダニーが慌てて制止する。

「他に、誰が出来るつていうんだよ。躊躇ってる場合じゃないだろ。

……ダニー、治癒促進剤とかいうヤツを打ってくれ。アンリたちの準備が出来るまでの間に、何としても動けるようになってやる。そして俺が……、エスターを救うんだ」

爆音が政府ビルの最上階に響いた。砲撃を一発、化け物の足目掛けて撃つが、少し重心が傾いたように見えただけで、傷を負わずとは出来なかった。“尾を狙え”というハロルドの指示どおり、戦闘員たちは数回にわたり下半身を集中攻撃したが、その度に床のタイルがめくれるだけ。コンクリの床には穴が開き、足場の悪くなったその場所にまたのっしのっしとリーの巨体に乗る。すると、最上階の執務室全体が軋むように揺れ、攻撃に集中することが出来なくなるのだ。

悪循環だ、誰もが思った。それでも、対処のしようが無い。

どうやら、かなり強固な装甲で覆われているらしい。目の前の銀色の魔獣はまるで壊れることなく、痛みを感じぬ身体を前面に押し出してブンブンと太い尻尾を振り回した。至近距離まで迫れば、尾になぎ払われる。しかし、遠ければ遠いでエネルギー銃を撃ちまくっても、全くダメージを与えることが出来ない。威力のある手榴弾や砲撃すら全く効かず、味方の負傷と武器の浪費を重ねるだけでは、とても勝ち目はないのだが、少しでも効果があればと、攻撃を繰り返していた。

木目調の美しい総統の執務机も、今はただの木くずだ。革張りのソファからはスプリングが飛び出し、原型無いほど踏みつぶされている。銀の巨体が動く度に頭部の擦れた天井が崩れ、陥没しひびの入った床、夜景の臨める一面のガラス窓は枠を残して砕け散ってしまった。人間の姿をしていたときはさぞかし大切に使っただろうこの一室も、機械の魔物と成り果てた今は執着心が薄れたのだろうか。大きな手で床に散らばる家具の残骸を手には放り投げてみたり、硬い拳で壁を突き破ったりと、主とは思えない行動を繰り返している。

細長く後ろに伸びた頭部、頭上から背、そして尾の先まで続くノ

コギリ刃のような突起は、体当たりで彼を止めようとした戦闘員らの防護服に引つ掛かり、肉までえぐる。重心を崩すどころか、簡単に踏みつぶされ、当初の半分にまで戦力が減ってしまった。勝つ負けるの問題ではなく、果たして生き残れるのかという所にまで、ハロルドたちは追い込まれていた。

「ハル、まさかとは思いつけど、あの時みたいに火を噴いたりはいよいよな」

耳元で囁いたのは、地下冷凍室で一緒だったウツドだ。

「それは、俺も危惧しているところだけど、何とも」

逃げるだけで精一杯のハロルドは、握りしめたエネルギー銃をまともに撃てずにいる。一丁前に防具を着けて武器を構えて、仰々しい格好をしているだけで、自分は戦力にはならない可能性の方が高いと、思い知らされていたのだ。

あの時のように火でも噴かれようものなら、全滅もあり得る。テイン・リーと名乗るこの化け物を止めるどころか解放しかねない。それだけはありませんようと祈っている最中に、目の前が赤く染まった。

「火だ！」

恐れていたことが現実になっていた。

銀の化け物は、体内の高濃度エネルギー溶液を炎に変え、口から噴射し始めた。火炎が右から左、左から右へと向きを変えて吹き付けられると、床一面に散らばった残骸に引火し、激しく燃え始めた。重傷を負った数人が炎の犠牲になり、悶えながら焼かれていくのを助けに行くことも出来ない。まだ動ける仲間だけ引つ張って安全なところへと逃げるのが精一杯だ。

こうなってしまうと、近付くなんてのは到底無理、なるべく距離を取るしかない。

リーは歓喜のあまり、ギアの軋むような音を立て、ケタケタと笑っている。

「焼き尽シテヤル」

野獣のような雄叫びを上げ、ますます勢いよく火を噴くリーに、戦闘員たちはおののいて後退った。

執務室入り口まで追いやられ、歯を食いしばっていると、今度は青白い光が執務室のあちこちで立ち上る。転移装置の光だ。黒い服を着た人型の生き物が、次々に光の柱から顔を出す。人間とは言い切れない、あくまでも人型の何か。NCCのロゴが胸元に見え、ハロルドは彼らがディックと同じように遺伝子操作された生物なのだと悟る。狭い空間に十数体、相手にしつつリーを攻撃するなど、果たして出来るのかどうか。

思い思いに武器を振るって、NCCの出来損ない共が襲いかかってきた。ハロルドも流石に身の危険を感じ、エネルギー銃をぶっ放す。銃弾が当たろうが、背中から火炎で焼かれようがお構いなしに、黒い兵士は攻撃してきた。痛みも苦しみも、彼らにはないのだろう。生きている死体、そう思ってしまうほど、生気なく何度も立ち上がってくる。

キリが無い。

早く何とかしなければと焦る気持ちを抑え、ハロルドは必死に銃を撃ち続けた。

ティン・リーの化け物が暴れたせいで、天井の照明はほぼ壊されてしまった。炎の色と、辛うじて明かりの付いた数個の照明を頼りに戦う。いつの間にか空の色がなくなり、ドームの中は真っ暗になっていった。夜景のように煌めいて見えるのは、街が燃えているからだ。ゆらゆらとオレンジや赤の色が地上を照らし出している。炎と一緒に煙が何本も筋になって浮かび上がった。更に上空からも、天井が崩れ、固まりになって地上に降り注ぎ始めた。壊れた場所から光が差し、それが少しずつ少しずつ、広がっている。

“世界は崩壊する”というディックが流した噂を、ハロルドは当初、やり過ぎだと反対した。世界中が混乱してしまう、余計なことは言うべきではないと。しかし、現実には世界は崩れ始めている。この現象がネオ・ニューヨークシティだけで起きているのか、その他の



ドームでも起きているのか、それとも今後世界中がこうなってしまうのかは、わからない。ただ言えるのは、ディックには最初から何かが見えていたということだ。トリストの中でマザーに何を聞かされていたのか、全てはそこにかかっている。今はエスターと同化して消えてしまったようだが、それ以前、電子の海に居た彼女は、どのような女性人格で、何を訴えようとしていたのか。

今更、そんなことを考えても仕方が無い。

全てがなくなってしまう後、あれこれ考えたところで、元には戻らないのだ。

背中には壁が迫っていた。ハロルドたちの居る執務室の入り口付近まで、リーの吐く炎が押し迫る。このまま廊下まで戻るか、それともぐるっと部屋の周囲を伝って後ろに回り、攻撃を続けるか。右手に見える別室は、作動したスプリングラーで既に水浸し、そちらに追い込まれば足元をすくわれてしまう。そっちに行くぐらいなら、足元覚束なくても、何とかこの場でリーの動きを止めたいものだ。

撃ちまくった銃弾が功を奏したのか、炎にやられたのか、NCCの兵士は次々に倒れていった。だが、目の前の危険が全て取り払われたわけではない。一番の大物がまだ残っている。ティン・リーの化け物は、勢い衰えることなく炎を吐き続けた。時折金属の擦れるような気味の悪い声で叫んだり、悦に浸って気色の悪い電子音で笑ったり、その中身は本当に、島でハロルドが見た“ティン・リー”なのか。

パンと、何かが弾けるような音がして、そこに居た面々は揃って視線を外へ向けた。残っていた窓枠とガラスの欠片が全てはじけ飛び、外の景色を遮る物がなくなっている。冷たい風がわっと吹いて残骸を吹き飛ばし、ハロルドらは慌てて顔を両腕で覆った。感じたことがないくらい強い風が一気に上から吹き付けてくる。何が起きているのか、ハロルドは恐る恐る、腕の間から様子をうかがった。やたらと眩しい。まるで、ドームの外へ出てしまったかのように

に。

「上を見る！」

誰かが叫んだ。

反射的に顔を上げ、上を見ると、青い、空が。

「て、天井が吹き飛んでる」

苦勞して穴を開け、やっと侵入したあの分厚い天井を、正体不明の力は一瞬で吹き飛ばしてしまっていた。総統執務室の真上を中心に、半径数十メートルの天井が消えてしまったのだ。

ドーム内と外の気圧差が原因で、風がグルグルと渦を巻いた。空気が薄まって炎が心なしか勢いを弱めていく。

ギギギ、ガガガ、と、バランスを崩しかけたリーが耳障りな音を立てて重心を戻し、炎を吐くのをやめてぐるんと振り向くと、そこに白く大きな影があった。

「マザー、来タノカ。世界ヲ崩シ、造リ変エルタメニ」

リーは両手を大きく広げ、咆哮した。ドーム中に響き渡るほどの大きな声は、風に混じって更に膨らんだ。振動でまた、足元が揺れる。

立っているだけで精一杯のハロルドたちは、壁により掛かり、互いに身を支えあった。

猛獸を一瞬で黙らせた白い影は、大きな羽を広げた美しい天使だった。

天から降り注ぐ光に照らされ、彼女の白銀の身体は闇に映えた。大きく広げられた翼がゆつくりと羽ばたき、巻き起こした風が小さな破片を舞い上がらせる。

“背中に羽みたいなものを生やしていた”というディックの証言どおり、鳥のように大きな羽が彼女の背にある。全身を覆う鎧は、頭から足先まで、彼女のボディラインそのままにピッタリと皮膚に張り付き、無機質さを演出していた。唯一鼻と口の部分にだけ見える肌色が、彼女が人間だったことを示している。

目の部分を覆ったマスクで、表情が見えない。“マザーと同化した”、それがどういうことを意味しているのか理解できないハロルドは、恐る恐る、声をかけた。

「エスター、エスターなのか。お前、そこで一体何を」  
返事はない。

彼女はゆつくりと天井が消えた執務室の角に降り立ち、そのまま数歩進んで、冷たいマスクをハロルドに向けた。

重々しい空気が流れ、そこに居る誰もが、リーさえも、動きを止める。

「エスターというのは、この肉体的なことか」

紛れもないエスターの声だ。だが、やはり中身は違う。話し方も、発音、滑舌、どれも記憶の中の彼女の物ではない。

“同化した”というより、“乗っ取られた”ような感じた。二つの人格が丁度良く混ざり合うようなイメージがあったが、そうじゃない。完全にエスターの部分が消え、恐らくマザーであろう人格が前面に出ている。

ハロルドでさえ違和感を覚えた。

政府ビルの地下実験室で同化の様子を目の当たりにしていたディックやジュンヤは、このことをどこまで知っていたのか。肝心なこ

とは何一つ、そう、ディックは何も言わなかった。本当は気が気でないはずなのに。

「何モカモ、私ノ設計通りダ。美シイ白イ天使ヨ、世界ヲ全テ壊シテシマエ」

天使に向けてリーは耳障りな声で話かけたが、彼女は反応しない。ただじっと、ハロルドの目を見つめたままだ。

次の言葉を待っているのか、そう思ったハロルドは、恐る恐る台詞を繋いだ。

「そうだ、その身体の持ち主、エスター・エマードに呼びかけてる。何が起きているのか、俺にはサツパリわからないが……、エスター、お前は自分がどうなってるのか、何をしているのか理解してるのか。ディックもジュンヤも、メイも、仲間みんなが、お前のことを心配してる」

伝わっているのかどうか。彼女は相変わらず無表情のまま、また一歩一歩、近付いてくる。残骸を乗り越え、死体を踏み越え、炎の間を潜り、徐々に、徐々に。

圧倒的な存在感に飲み込まれそうになる。機械に成り果てたりーがガラクタに見えてしまうほど、彼女は神々しかった。狂った男が設計したとは思えないほどに、美しいのだ。

「この身体から“E”の意識は消えた。今は私がこの身体を支配している。私は、破壊と創造を司る。不用なモノは消去する」

天使の白い手がスツと天に掲げられたかと思うと、バチバチと空気が震え始めた。静電気、電流、目に見えないエネルギーが彼女の指先に集まり、激しくフラッシュする。

「ふ、伏せる！」

誰かが叫び声を上げた。

ハロルドたちは慌てて身体を縮める。しかし、そんなことで防げるはずなど無かった。

天使の右手に集約されたエネルギーが一気に放出される。地を揺らすような激しく強い音が鳴り響き、ビル全体がギツギツシと激

しく横に振動した。足場が崩れ、下の階まで落ちていく者、はじき飛ばされる者もいる。悲鳴や叫びがあちこちで聞こえたが、ハロルドは壁に張り付いたまま身動きが取れない。風圧が凄まじい、少しでも動こうものなら、自分も同じ状況に陥りかねないのだ。

爆音が轟いた後も、連鎖するようにドームの天井は剥がれ落ち続けた。卵の殻がむけていくように、少しずつ少しずつ、世界を光が包んでいく。しかし、それは同時に、ドームの中に瓦礫を降らせ、ありとあらゆるものを押し潰していることを示している。

どれぐらいの期間をかけて造り上げたか知らない世界を、マザー・コンピューター主導で造り上げてきた世界を、ティン・リーの作った破壊プログラムはいとも簡単に崩していった。それを彼女がどんな気持ちで見つめているのか、ハロルドにはわからない。彼女はただ、冷たいマスクの下で笑うこともなく、口を噤んでいるだけ。もしエスターの心が微塵でも残っていれば、こんなことを許せるはずなど無いのだろうが。

「破壊プログラムハ、世界中二広ガツテイク。全テノドームガ、コト同ジヨウニ崩レテイク。コノ星ノ文明ガ滅ビタ後デ、私ハ神トナリ、新タナ世界ヲ構築スルノダ」

ガハハと下品な笑い声、ティン・リーはブルンと尾を震わせ、壊れた床に何度も叩き付けた。その度にまた足元が崩れる。バランスが崩れ、最上階の床は平衡感覚を失ってしまっていた。段差が出来、陥没し、階下が見える箇所も。

リーを止めるどころの話じゃない、エスターの身体を乗っ取ったマザーまで敵になってしまった。対人間を想定して準備してきた武器は、役に立ちそうにない。  
どうする。

生き残った数人、顔を見合わせて打開策を探るが、何も浮かばない。このまま吹き飛ばされるか焼かれるか、死ぬ方法を選べと言われているような錯覚に陥る。

ハロルドを凝視していたマザーは、ゆっくりと手を下ろしてリー

に向き直った。数回、羽をばたつかせた後で、

「誰が神になると」

抑揚のない声で彼に尋ねた。

リーはまた、ケタケタと軋むような声で笑う。

「マザー、私ト共ニ、世界ヲ再構築スルノダ。愚力ナ人間共ニ、我々ノ存在ヲ知ラシメロ」

「お前が我が主であると」

「ソウダ」

「……認識しない。お前は主ではない。主の生体反応は、この星から消えた」

「ド、ドウイウコトダ」

リーの赤い目が数度、瞬きのように点滅した。動揺しているのか、足をふらつかせ、数歩後退りする。

「私の主は、政府総統を名乗っていた若い男だった。彼の生体反応は、私とEの同化完了と同時に、その前後に消えた。今は地下で果てているはずだ。お前のようなロボットが私の主を名乗ったとして、私は何をもってお前を主だと認識すれば良いのだ」

一歩、一歩、マザーはリーを追い詰めていく。大きく広げた羽に威嚇され、リーは更に後ろへと逃げた。三メートル近い巨体が建物縁に近付くと、重心がずれて、またビルがしなった。

「私はお前の指図など受けぬ。私は私の意志で、世界を再構築する」  
マザーの指先が、リーの身体に向けられる。指先に蓄えられたエネルギーがどんどん膨れ上がっていく。

ビルの縁に追い詰められたリーは、両手を高く掲げ、拳を握りしめた。猛々しく機械音を轟かせ、ぐっと腰を落とす。雄叫びと共に体内の高濃度エネルギー溶液を沸騰させ、全身に巡らせた。

空気が激しく振動した。一階、また一階と、下の階が押し潰され、徐々に視線が低くなる。その度にハロルドたちは突き上げられ、突き落とされ、それでも必死にビルの外へ振り落とされぬよう踏ん張り続けた。全身を打撲し、意識を保っているのがやっとの状態、ま

た仲間の人数が減った。生き残っているのは後何人なのか、数える気力すらない。

増幅されたエネルギーがマザーの指先から放たれ、リーの巨体を襲う。リーも勢いを増した火炎を吐き、それに対抗する。二つの力が、激しくぶつかり合った。

最上階の執務室は既に跡形無く崩れ、リーの銀の身体は、階下へ階下へと押しやられていた。

大きな翼を広げて、マザーはビルから飛び立った。リーの口から炎が噴射されなくなったのを確認し、攻撃の手を止める。

「地面までの距離を考えれば、落下による損傷に、その身体は耐えられまい。お前はもう、お終いだ」

S-206型の大きな身体を支えていたビルの外壁が、音を立てて崩れだした。覚束ない足、何かに掴まろうとリーは必死にもがくが、鉄骨さえも彼の体重を支えきれずに崩れてしまう。

「ジョ……冗談じゃない。コンナ所デ死ンデタマルカ……！ マザー、私ガ、才前ヲ造ツタノダゾ。私ガ居ナケレバ、才前ハ存在シナカッタ。私ハ、コノ世界ヲ造ツタ“神”ダ。私ハ死ナヌ、イツマデモ生き続ケル……！」

宙に、放り出された。

銀色の魔物は大の字のまま、急降下していく。

「リー……！」

誰かが、ビルの窓から身を乗り出して名を呼んだ。

鈍い銀色のエアバイク、犬のロボットと一緒に見える。

「俺に断りもなく、死ぬつもりか！」

聞き覚えのある渋い声、憎きディック・エマードが声を枯らして叫んでいる。

死ぬつもりなど、あるわけがない。

この先も、ずっと存在し続ける。

例え、身体が朽ちても、だ。

リーの身体は、数回、背の低いビルの壁に激突しながら、真つ逆さまに落ちていった。

金属製の玩具が壊れるような乾いた音。手足が千切れ、エネルギー溶液がひしゃげた胴体から飛び散ると、どこからともなく引火して、それらは大きな炎に包まれた。

「バカヤロウ、俺の手でぶっ倒すはずだったのに……。こんな終わり方があるか」

小さく碎け、炎に消えていくティン・リーを、ディックは複雑な思いで見つめていた。



## 105・何が正しくて、何が間違っているのか

ジュンヤとダニー、レナに別れを告げ、ロボット犬フレディと一緒にエアバイクに乗り込んだディックは、政府ビルの最上階目掛けて突き進んでいた。炎に包まれていく街を尻目に、とにかく上へ上へ向かうことだけを考えた。

ドームの中の人間は、殆ど死んでしまったかも知れないと思うほどに、炎の勢いは凄まじい。脱出など、密閉された空間の中で簡単にできるはずがないとわかっていながら、避難指示をしたことを後悔する。しかし、何も知らされずにたくさん人間が死んでいくのを見過ごせるほど、卑劣な人間にはなりたくなかった。

政府が殺せと言えば簡単に人を殺したこともある。半ば脅されるようにして人体実験をしたことも、娘を道具のように扱ったこともある。だが、心の中にはいつもラムザの言葉があった。

『君は最初から、私の息子「ディック・エマード」だったんだ』

ただの実験体としてなされるがまま身体を預けていた自分に、ラムザは言葉や最低限の教養を与えてくれた。彼の行方は、結局、マザーにだってわからなかった。煙のように姿をくらしってしまった彼は、最早生きてはいないだろう。“D-13”ではなく、“ディック・エマード”として生きていくと誓った限りは、自らの意志で道を切り開く。無駄だとわかっていても、簡単に諦めることだけはしたくなかった。自己修復機能が備わっていたとしても、老化を食い止めることが出来なかったように、死なない身体だからといって軽装備で突っ込むのが無駄だというのはよくわかっている。それでも、目の前で起きている何かに対し、何の手も打つことが出来ず、手をこまねいているだけの存在にはなりたくなかった。

残酷、冷徹、何度も言われた。血の通わない悪魔だとも。それでも、特に否定することはしなかった。

生きていくことに精一杯だったのだ。“一人の人間”として生き

ていくことに。

ティン・リーの器になって、政府総統として力を振るっていたら、どんなに楽だったか。権力をかざし、気に入らないものを排除する、それが出来るなら、苦しまずに済んだかも知れない。心の中にいつもあるわだかまりさえ感じずに済んだ、そうに違いない。

しかし、それは同時に、“一人の人間として生きていくこと”への放棄に他ならないのではないか。苦しみ、悶えながらも大切なものを守っていききたい。エレノアを失ってから先は、そればかり考えていた。

瓦礫の上を、エアバイクは車体を上下させながら進んでいく。道が途絶え、ディックは考えた末に、政府ビルの中を駆け上るしかないという結論に達した。

「フレディ、落とされるなよ」

エンジンを加速させ、エアバイクは傾きかけた政府ビルの中へと入っていく。

窓ガラスを突き破り中へ入ると、パニックを起こした研究員らと政府軍が衝突し、大きな騒ぎになっていた。銃声は何発も続き、悲鳴が響き渡る。死体があちらこちらに散らばり、鮮血が至る所に飛び散っている。何に怯えているのか、どうしたいのか、混乱しすぎてわからなくなっているのか、意味不明の言葉を叫ぶ人間もいる。

この混乱は、自分が引き起こしてしまったものかも知れないと思うと、胸が痛む。もし、自分が噂を流さなかったとしても、結果は同じだったかも知れない。やはりドームの人間共は慌てふためき、狂ってしまったのか。だが、目の前で起こっている騒ぎの発端は自分、世界を混乱させていったのは、ティン・リーの迷惑通り器に収まるうとしなかったのが原因だと思つと、心臓に針が何本も刺さっていくような激しい痛みが襲う。

何が正しくて、何が間違っているのか。

自分だけの尺度で考えて、判断して、その結果がこの地獄のような光景なのだとしたら、どうだろうか。

キヨウイチロウやラムザは糾弾されたと聞いた。この世界での価値感、自分の価値感とは大きくズレているのかもしれない。『エマード博士……、あなたは狂っている』いつぞやに言われた台詞、『本当に狂っているのはお前らではないのか』言い返したが、本当は誰が狂っていて、誰が正常なのかなんて、わかりようがない。最終的にそれを判断するのは自分たちではないからだ。全てが終わった後で、次の時代が来て、今とは全く違う価値観が世界を支配したときに判断が下される。

今は、正当性を考えている場合じゃない。自分にとって何が大切なのか、それだけを考えなければ、前に進めない。血だらけの廊下、階段を、上の上に駆けていく。激しい爆音、振動、既に何かが始まっている。

先に執務室へ突入したハロルドたちは無事なのか、リーはどうなつたのか。

翼を広げたエスターが飛び立ち、政府ビルの最上階に向かって消えていくのを遠目に見た。エスター、いや、マザーは、リーの言いなりになって動いているだけなのか。リーの所に行つて何をしようとしているのか。

背中でフレディが激しく吠え、肩までしがみついてきた。うるさいぞ、思いながらフレディが吠えている方向に目をやる、何か、何か勢いよく落ちてくる音。エアバイクを止め、近くの窓から身を乗り出した。

銀の大きな恐竜だ。ティン・リーの意識を宿したあの化け物。

上空には天使の白い羽が見える。やはり、何かがあつたのだ。

再度エンジンをかけ、上を目指す。辿り着くまで、何分かかるのか、ぶち切れそうなのこの頭を、意識を、しっかりつなぎ止めたままエスターの元に着かなければ意味が無い。

いつも、肝心なところでぶち切れて、自分を見失ってしまうのだ。怒りをコントロールできない、自分の感情を。『“不完全”なんだ』『人間じゃない』ケネスに言い放った台詞そのままに、自分という

ものの脆さを突きつけられる瞬間。苦しい、胸が締め付けられている。考える必要の無いことまで、どんどん頭の中にわき出してくる心が、壊れそうなほどに。

上階に進むにつれ、建物の損傷が大きくなっていった。今が何階なのか、はつきりわからないが、人影がなくなり、何かの焼け焦げる臭いがしてきたことで、現場が近いと知らされる。

「もうすぐだ、フレディ」

自分自身に言い聞かせるようにして、背中 of 犬に声をかけた。

覚悟を、決めなければならぬ。すっかり人の変わってしまった娘に会いに行くのだ。トリストで出会った、エレノアの姿形をしていたマザーが、今はエスターの姿をしている。頭では、理解している。受け容れなければならぬ現実だと言うことも。

押し潰され、まともに通れる高さのない階もいくつかあった。デイクは無理矢理体当たりで通り抜けた。エアバイクの前面がひしゃげようが、あちこち怪我して血が流れようが、お構いなし。

空気の流れが変わってきた。冷たい風が降りてくる。明るい日差しも差し込んできている。

急に、視界が開けた。

「デイク……、遅い」

最上階に辿り着いた彼に、いち早く気がついたのはハロルドだった。

しかし、どこに居るのか。一面の瓦礫、どこからどこまでが何の部屋だったのか。天井すら吹っ飛んで、青空が見えている。

エアバイクから降り、デイクは呆然と立ち尽くした。想像を超える壊れ方、“新たな世界を築くため”とはいえ、尋常ではない。見渡す限り、死体の山、残骸、瓦礫。頭を抱えた。どんな兵器を使えばこんな風になるのか。あのリーの化け物の仕業だけではないと直感する。まさか、ハロルドたちにだってこんなこと、出来るはずがない。

辛うじて残った壁の陰から、ハロルドがゆっくりと這いだした。

血だらけで、やっと上半身を支えているだけの状態だ。

ディックは駆け寄り、身を屈ませてハロルドに尋ねた。

「何が起こったんだ」

「マザーが……、天使が、リーを」

ハロルドは虫の息だ。他に、数人苦しそうに唸っているのが聞こえるが、動けそうな人間は一人もいない。

腕に覚えのある人間を中心に連れてきているはずなのに、ほぼ全滅とは。

立ち上がり、再度辺りを見回した。

下の階で上を見上げたとき、確か、白い羽が見えていた。エスターが居るはずだ。

「エスター、返事をしろ。どこだ、どこに行った」

三六〇度、ぐるっと見回しても、彼女の姿はない。もう一度、

「エスター、俺だ、聞こえないのか」

すると上空から、バツバツと羽の音が。

空からの光が遮られ、目の前がフツと暗くなった。上を見上げる、白い、大きなものが空から舞い降りてくる。

ゆつくりと、それは瓦礫の上に降り立った。

「エスターというのは、この肉体のことか」

娘の、声が聞こえた。

しかし、そこに居たのは、いつもの寂しそうな笑顔を浮かべた、エレノアの生き写しではない。

白銀の鎧に覆われ、白い鉄の翼を生やした、表情のない天使だった。

ドームの天井に大きく開いた穴から、風がどんどん入り込んでいた。緑の匂いの混じった風、力強く、容赦ない。

差し込む光の量も次第に多くなり、まぶしさで目を細める時間が多くなる。

天使の白銀の身体は、光をよく反射した。それがまた、神々しさを倍增させる。あの男が考えたにしては、確かに美しい。女性の身体を意識した滑らかな曲線、優しさと力強さを併せ持った天使なのだと言われれば、確かにそう見える。

だが、目の前に居るのが心を失ってしまったエスターなのだと思えば勝手が違う。愛を求めることをしらず、差し伸べられた手をどう握りかえしたら良いのか、戸惑いながらも自分のペースで前に進もうとする、健気な彼女の面影はない。エレノアと同じ声で、同じ顔で、時折悲しそうに微笑んでいた、それがたまらなく愛おしかったのに。何故もっと抱きしめてやらなかったのか。自分の娘に“愛しているよ”と、そんな単純な言葉さえかけてやることが出来なかった。気恥ずかしかつたわけではなく、自分自身、どう愛情を表現したら良いのかわからなかっただけだ。

シロウの家に辿り着き、メイシイと再会したとき、実は内心ホツとしていた。彼女は家族の愛を知っていた。状況さえ飲み込んで貰えれば、もしかしたらエスターと一緒に育ててくれるかも知れないと、無責任にも思ってしまった。ラムザのように一人でエスターを育てていく自信はなかった。人間として不完全な自分が、一人の人間を育てていくなんてことは、とても考えられなかったからだ。メイシイや、シロウ、ジュンヤ、周囲の協力がなかったら、エスターはあんなに素直な人間には育たなかったかも知れない。感謝していた、言い切れないほどの感謝を。

反政府組織に身を置き、リーへの復讐を胸に抱きつつ過ごしてきた

たこの七年間、やっとそれが報われるときが来たとしても、本当は躊躇するべきだったのかも知れない。エスターが、世界の中で一番大切にしていた存在が、こんな事になるくらいなら、復讐なんてくだらないことは止めれば良かったのだ。そうすれば、彼女はマザーと同化せずに済んだ。名も無いNO CODEとして、日の当たらないところに潜んでいれば全て丸く収まっていたものを。

マイナス思考がぐるぐる巡って、言いようのない悲しみがディックを襲った。

知らず知らずのうちに、涙が頬を伝っている。泣いている場合じゃない。早く、早くエスターを助けてやらなければならぬというのに。

「D-13、お前の思考が見えない。やはり、肉体を持ってしまおうというの是不便だ」

マザーがエスターの声で言う。

「何故涙を流す。お前の娘の身体は生きている。それだけでは不満だということか」

トリストを介して会った、マザーの口調そのままだ。あの時はエレンアの声をしていた。死んだ人間の姿や声を借りるなど、不謹慎だと思っていた。だが、あの時の方が未だマシだと、今は思う。

マザーはそつと羽を広げ、すうっと宙に浮いて、ディックの真ん前までやってきた。

眼前に表情のない仮面が迫り、装甲で覆われた分一回り大きくなった身体でディックを見上げてくる。

「お願いだ、お前の口で、声で、その名を呼ばないでくれ……。頼む……」

エスターには、自分が過去に番号で呼ばれていたことを話したことなんて無かった。「D-13」だなんて無機質な呼び方をするのは、エスターじゃない、マザーだ。

食いしばった歯がガタガタと鳴った、握った拳が、肩が、ブルブルと震えていた。悲しみというのか、悔しさというのか、喪失感、

哀れみ、何と表現したら良いのか。エレノアを失ったときと同じ、いや、それ以上の衝撃がディックの中に湧き上がってきた。

細長い政府ビルは鉛筆のように削られ、風が強く吹く度に足場が大きく揺れる。重心がずれて傾いた最上階の床の上、生き残った数人は壁や瓦礫に掴まりながら、何とか留まっている状態だ。

それはどこか、自分の心を映し出しているようだと、ディックは思う。上へ上へとビルを駆け上がっていく度に、心の中がわびしくなっていくたそれに似ている。ほんの少し大きな力がかかるだけでビルはポツキリと折れてしまふに違いない。その下で、また誰かが瓦礫に潰され犠牲になる。折れそうだ、エスターにこれ以上のことがあれば、それだけで、ディックの心は折れ、我を失ってしまう。

「D-13、私は世界を造り直さねばならない。お前が私の邪魔をするならば、お前のことも排除しなければならぬ。それが我が主の望みであり、私の使命。主、ティン・リーは同化と共に私に破壊プログラムを仕掛けた。私の触れる物、私の見える物が次々に壊れていく。私は私の中で発動した破壊プログラムを止めることが出来ないでいる。D-13、お前にはまだ、世界を救う意志はあるのかあるならば、私を止める。どうにかして、全てを終わらせるのだ」  
淡々と、マザーはディックに語りかけた。

何を期待している、何故自分にすぎらうとする。データの海の中で、『希望や願いを持つのは、人間だけだ』と彼女は言った。エスターの身体に入り込み、すっかり人間になったつもりでいるのか。人間になってエスターの声で、自分に何をさせようというのか。

「どうしろと、俺にどうしろというんだ。マザー、今の俺には何の力もない。勿論、俺だってエスターを救いたいと思っている。だが、どうやって、どうやって救えばいい。止めるったって方法なんてあるわけが」

「方法ならある」

「どんな」

「お前の銃で私を撃ち抜け」



「何を言ってる……！」

マザーの冷たい手が、ディックの腕を掴む。肉に食い込むほどの力で握り、無理矢理、右手を腰のホルダーまで持つてくると、もう一方の手で銃を握らせた。残り数発しかないデザートイーグル、今は触りたくないものの一つ。

「お前の自慢の銃らしいな。“E”の記憶がそう言っている。いつも部屋で磨いていたと。お前が何のためにこの古い銃を大切にしているのか、彼女にはわからなかったようだ。しかし、私は知っている。ラムザだ。彼が、『自分の身は自分で守らなければならぬ』と言つて、お前に与えたものだ。装甲が邪魔ならすぐに外す。心臓を狙えば良いのか。人間は心臓が止まれば死ぬのだから。それともこの身体の再生能力は、それすらも許さないのか」

マスクの下で、何を考えているのか、彼女はやはり平坦に恐ろしいことを言う。見覚えのある唇から、また、マザーしか知り得ない言葉が出てくる。同時に、エスターしか知らないことも。

「記憶が、読み取れるのか。エスターの記憶が、お前の中に流れ込んでいるのか」

「話題を反らすな。私はどうすればこの身体の機能が停止するのか訊いているのだ。この身体が生命活動を停止しなければ、私の身体から発信される破壊プログラムを止めることは出来ない。世界が全て壊れてしまう前に、お前は決断をしなければならぬ。ティン・リーが消えた今、世界を滅ぼそうとしているのは私だけ。わからないのか」

マザーは力尽くで、銃口を自分に向けさせた。心臓の位置までぐっと銃を持ち上げ、左胸の装甲を解くと、エスターのまだ大人になりきれしていない肌が露わになった。柔らかな白い肌に、冷たい銃口が当たる。マザーの左手が、デザートイーグルの安全装置を解除した。引き金に指を突っ込まれ、このまま撃てとばかりに身体を前に押し出してくる。

「出来ない、出来るわけがない。マザー、やめるんだ、エスターを

傷つけないでくれ、頼む、お願いだ！」

「お前の願いなど、聞き入れている場合ではない。私がまだ自分の意志で動けるうちに、全てを終わらせる。破壊プログラムは、私の意識に徐々に侵入してきている。お前をD-13だと認識しているうちに私を止めなければ、恐らく私はまた、さっきのように暴走する。次は、街が破壊される程度のことでは済まされない。エスターも願っていたのだ。破壊の天使と成り果てるくらいなら死を選ぶとお前はその意志さえ無視し、この身体を守ろうとするのか」

マザーの手に、一段と力が入った。

振りほどかなければ。何が何でもマザーを止めなければ。

傾いた床の上で必死に踏ん張った。両腕を出来る限り外側に開いて、エスターの身体から銃を離そうとする。力が拮抗して、狙いがぶれる。このまま力一杯引つ張れば、何とかなるかも知れない。

手のひらの汗で銃が零れそうになっていた。食いしぼり、懸命に銃を引き上げた。だがまた、ぐっと銃を引き寄せられる。何度も、同じ動きを繰り返した。

「いい加減、諦めたらどうだ、D-13。お前は、何を恐れている」  
力が入っているにもかかわらず、調子の変わらないエスターの声。  
「恐れているわけじゃない、俺はただ、自分の娘を守りたい……だけだ」

マザーの指が、引き金に触れる。

発砲、同時に　黒い影が二人の腕にぶち当たり、銃をはじき飛ばしていた。

銃弾がエスターの左肩をえぐり、翼を掠める。赤い血飛沫が白銀の身体に降り注いだ。エスターの甲高い叫び声が、辺りに響き渡る。  
「……その、犬か。私の邪魔をしたのは」

身体をくねらせ、息を荒げ、マザーはギリリと歯を鳴らした。

腰を落とし、エアバイクの側でじつと様子を覗っていたフレディが、二人に飛びかかったのだ。

「肉体など持たねば、痛みも苦しみも無かったものを」

止めどなく、血が流れ落ちる。肩から腕、胸、そして床を、ぼとりぼとりと赤に染めていく。

ディックは言葉を失い、その場に立ち尽くした。急所を外したとはいえ、娘を傷つけてしまった。『俺が救ってやる』、そんな単純な約束すら守れそうにない。嫌悪感が押し寄せた。血の気が引いていく。意気揚々やって来たたくせして、何をやっていく。これでは、本末転倒ではないのか。

目の前の現実を、受け容れたくはなかった。だが、彼は目を反らすことが出来なかった。目を反らしてしまえば、また大切なものを見落としてしまう。どうしたらいい、どうすれば血が止まる。止血しなければ。早く、早く。思うのに、足が動かない。

「D-13、何故、何故撃たなかった……。始まってしまっ、私の中で何かがつごめき始めた。止められないぞ。もう、誰にも」ドクンと、天使の身体が波打った。

血にまみれた身体を広げ、彼女は空を仰ぎ見る。

引き寄せられるように天へと昇っていく彼女からは、既に意識が消えているように思えた。

## 107・助けに行く

『こちらアンリ、聞こえるか』

「聞こえます、どうぞ」

『今からジュンヤをそっちに飛ばす。座標、教えて』

「了解、座標データを送ります」

アンリとリザ・タナーの会話に、操縦室の隅で仮眠を取っていたロックとバースは、ハッと飛び起きた。

E.U.ドームからネオ・ニューヨークシティ上空に飛び、ハッチからハロルドたちを降ろした後、飛空艇は近くの平地ですっと待機状態だった。操縦士二人とリザ、そして、整備士が数人、そのなかにロックとバースの姿がある。故障時に備え、整備道具片手に乗り込んだわけだが、戦闘に参加することもなく、ただ事態を見守るしかない彼らは、アンリやハロルドからの連絡をずっと待っていた。

待ちに待った一報は、事件解決の知らせではなく、ジュンヤの転送についてだった。

「まだ終わってないのか」

ロックが漏らした。

戦闘開始から、既に数時間が経過している。朝早くに突入劇があり、今はもう昼を回った。いい加減何か進展がないとヤバイ時間だ。操縦室の床に青白い円が現れ、そこから光の柱が立ちのぼった。もうすっかり見慣れた、転移反応だ。

若い黒髪の男の姿が浮かび上がると、ロックとバースは思わずアツと声を上げた。

「ジュンヤ、お前、怪我してるんじゃないのか」

二人がジュンヤを最後に見たのは、飛空艇の食堂だ。なぎ倒された椅子やテーブルの向こうで、細長い刃物を振り回し、エスターを奪って消えたのだった。その後、仲間からジュンヤが何故そのような行動を取ったのかを聞かされ、同情もした。政府総統に騙され、

操られていたらしい。自分の犯した罪に気付き、政府ビルで上部の人間を倒したことや、ビルの地下に隔離されたエスターを救うために尽力していることも、よく知っている。

ハオルドたちがドームの天井を突き破って政府ビルの最上階に侵入した頃、ジュンヤはディックと共に地下へ向かったと聞いていた。その後何が起こっていたのか、痛々しい左足を引き摺って現れた彼に、二人は顔を青くする。

操縦室全体がざわめき、何があったと皆が口々に言う。

防弾ベストに膝までまくったカーゴパンツ、小脇には松葉杖、背には大きめの銃、そして小さなボトルの覗く布鞆が見える。

「怪我人が何しに来たんだ」

ズンズンと前に進み出ながら、赤髪を逆立てたロックは、ジュンヤを怒鳴りつけた。

「お前、足が折れてるのか。なら、こんな場所に来るべきじゃないだろ。物を届けるだけの役目なら、別のヤツにだって出来たはずだし、物だけ送り届けりゃいい話じゃないか。アンリってヤツは何を考えてお前なんかを超越したんだよ」

「気を遣わせて悪いな、ロック。こればかりは、俺がやらないとダメなんだ」

ジュンヤの顔は青ざめていた。血の気がない、変な汗を身体中にびっしりかいている。松葉杖について、ヒョコヒョコときこちなく動く彼は、誰が見ても痛々しい。

「治療促進剤を打ってある。大丈夫、死にはしないさ。そんなことより、改良したエアバイク、残ってるんだろ。貸してくれ」

「貸してくれって、ジュンヤお前、どこに行くつもりだ」

「決まってるだろ、エスターを助けに行く」

促進剤を打てば、確かに治療速度は高まる。しかし、身体全体に熱を帯び、意識が朦朧としてしまう副作用がある、諸刃の剣だ。重篤患者や前線の兵士以外には滅多に使用しない代物、値段も高く、ネオ・シャンハイでは殆ど流通していなかった。そんなものを打つ

てまでエスターを助けに行くという、何が彼をそこまで奮い立たせるのか。

彼の瞳は、普段と変わらず真っ直ぐだ。誰が止めようが、意志を曲げるつもりはないらしい。

「その足でエアバイクを操縦するのは無理だ。しかも、そんな荷物まで担いで。ジュンヤ、自分の身体と体力を考えてもみる。いくら勇んでも、そんなんじゃないだろうが」

「それでも、俺が行かなきゃならない。時間が無い」

「『時間が無い』だけじゃ、何の説明にもなっていない。何が起きて、何をしに行くつもりだと訊いてるんだよ」

ジュンヤもロックも譲らなかつた。二人とも、にらみ合つて息を荒げている。

二人のやりとりをじつと見ていたバースだったが、とうとう我慢できず、間に割つて入ってきた。まあまあ落ち着いてと双方をなだめつつ、

「操縦だけなら、俺がやってもいいよ。ジュンヤを後部座席に乗せてけば、問題ないんだろ」

「も、問題ないわけないだろ！」

ロックがまた怒鳴つた。今度はバースに向けて。

「どいつもこいつも、頭が悪すぎる。戦地に向かうんだぞ、怪我人やド素人が軽装で行けるような場所じゃないんだ。ここからはドームの中で何が起きてるかはわからないけど、さっきから、変な音が地面を伝つて響いてきてる。爆破したような音、変な煙がドームに開けた穴から湧いて出てるんだよ。……って、聞いているのか！」

バースはロックの話を無視して、操縦室から外へ足を向けていた。ジュンヤもヒョコヒョコ足を引き摺つて付いていく。

止めなければ、思ったロックは早足で二人に追いつき、バースの前に立ちふさがつた。

「行くなつて言ってるんだ」

「じゃ、訊くけど、誰がジュンヤを連れて行くの。操縦士のみんな

はここに留まる必要があるだろ。優秀な整備士だつて必要だ。……俺なら、多分、ここから離れても問題ない。整備士としても半人前以下、スキルもない。エアバイクの操縦くらいなら、俺にだって出来る。エスターを助けに行くなら尚更……、行きたいんだよ。大丈夫、死に行くわけじゃない。エスターを助けて戻ってくるためだ。ジュンヤ、通信端末持つてるんだろ。なら、全てが終わつたら連絡も入れられる」

いつになく、バースは真剣だ。整備士の中で一番若く、何をすることも頼りない、身寄りも無く、シロウに拾われた恩を何とかして返したいと常々言うだけの少年が、今は大人顔負けの眼差しでロックを見ている。これ以上、止めるのは無駄だと、ロックは仕方なく道を空けた。

ありがとと、この期に及んで礼を言い、バースはジュンヤと連れだつて操縦室の外へと歩いて行く。

「死ぬなよ」

ロックにはそれしか言えなかった。

廊下を抜け、車庫に向かう。ハッチのすぐ側にある車庫には、E-Uドームで改造したエアバイクが数台並んでいた。どれも、突入時に必要かも知れないと用意されていたものだ。実際は使われず、鍵の付いたまま停めてある。

シャッターを開け、バースは手前の一台のエンジンをかけた。燃料は満タン、動作も正常だ。

通常地上数十センチから数メートルの高さまでしか浮き上がらないエアバイクを、滞空時間が長くなるよう改良し、短時間だが空を飛べるように両サイドに羽をつけてある。長期の空中戦には向かないにしても、飛べるだけマシだ。

移動中、ジュンヤはバースにエスターのことを話していた。何故今急がねばならないのか。マザー・コンピューターと同化した彼女が、今は天使の姿になって破壊行動を開始してしまったこと、彼女

を止めるために開発したソフトを読み込ませなければならぬこと。ソフトと言っても、通常、コンピュータに読み込ませるチップ方式では意味が無い。そこで、錠剤・カプセル・液体にそれぞれ破壊プログラム停止ソフトを搭載したナノマシンを混ぜ、どうにかして彼女の口から体内にそれらを取り込ませるしかないという結論に達した。

「アンリが言うには、停止ソフトがマザーの中で正常に起動するのは、確認のしようが無かったらしい。やらないよりはやった方がマシだ、その程度の高いリスクを負って忘れないで欲しいって。俺には専門的なことは殆どわからないんだが、どうやら、何種類かまぜこぜにしてあって、どれかが効けば破壊行動が止まるかも知れない程度なんだとか。彼女の身体は今、分厚い装甲で覆われていて、俺たちが見たところでは、口以外に投入できそうな箇所が見当たらなかった。どうにかこうにか近付いて彼女の口からソフトを投与するんだ」

ジュンヤが持っていた布靴の中身は、その三つの媒体らしい。どれかの投与を失敗しても、次、また次があるようにと、アンリが用意していたものだ。上手く身体に取り込めたとして、彼女の身体どの部分でソフトが吸収され作動するかもわからない。念には念を、短い準備時間に考え出された方法なのだ。

後部座席にジュンヤを乗せ、ヘルメットを被るよう言うと、バーヌは風除扉とハッチを順番に開けた。

まず、ドームの壁面を駆け上がらなければならない。それだけでかなりのエネルギーを使ってしまう。ジュンヤを振り落とさないように、慎重に運転することも必要になる。

「行くよ」

エアバイクにまたがり、ヘルメットを被ると、バーヌはぎゅつとハンドルを握った。浮遊装置が空気を大きく吸い込んで車体を上昇させていく。マフラーからエネルギー溶液の白い排気がブワツと出たかと思うと、バイクは急加速して飛空艇の中から飛び出していっ



た。

## 108・希望が一片もなくなつたつて

ドームの壁面は蔦で覆われていた。E.Uドームを目にしたとき、緑と茶のコントラストに目を奪われたことを、ジュンヤは思い出し、ていた。ティン・リーと初めて出会ったあの島でも、緑の多さに驚いた。ドームの中にはなかった青々とした色、日の光を浴びて自由に伸びた枝葉は、囲われた空間の中で生かされていた自分たちとは対照的に思えた。雨や風、雷さえも、木々はものともしなかつた。自然から隔離されて生きていた人間とは違う、芯からの力強さがそこにはあつた。

遠景からは、ドームさえ、自然の作り出したオブジェの一つに見えた。このドームだつて、造られた頃は全く別の色をしていたに違いない。蔦の奥に見える深い藍色のパネル、これが恐らく大きな球面になつてポツンと大地の上にあつたのではないかと考えられる。数百年を経て、それらは樹木に覆われていった。自然は全てを飲み込む。全てを温かく包んでいく。マザー・コンピューターが世界を機械で包んでいったのとは対照的に、柔らかくしなやかな力で。

狭い世界の中で、虚勢を張つて生きていた自分、心をさらけ出すことを恐れて、何事にも慎重になりすぎていた自分が馬鹿らしく見えてくる。

『最後の最後まで諦めるなよ、ジュンヤ。あのエマード博士だつて、娘を救い出そうと必死になつてる。希望が一片もなくなつたつて、やっぱり諦めちゃダメだ。どこかに希望が転がってるかも知れないと信じて、無駄に踏ん張るのが人間なんだよ』

アンリが別れ際に言つていた。

希望、そんな目に見えないあやふやなものを見つけ出さなくちゃならないのかと、普段の自分なら後ろ向きに考えていたに違いない。しかし、今のジュンヤはそうは思わない。誰が無駄だと言おうが、誰が止めようが、絶対に諦めたくなかつた。

大きな卵を半分地に埋めたようなドームの壁を、バーズの運転するエアバイクはどんどん駆け上がっていった。急な斜面をぐんぐんと登っていくうちに、ドームの天井部分に亀裂が入り、煙が立ちのぼっているのが見えてくる。火の気配と、鼻をつくガスの匂いも感じられた。爆発音が複数回起こり、その度にドームの壁が激しくしなる。衝撃に押されて壁面から離れないよう、バーズは慎重にエアバイクを運転した。

風が冷たい。少しずつ季節は進んでいるらしく、島を訪れたときははつきりとした緑色が主流だった景色の中に、今は黄色や赤が目立つ。地平線の向こうには色づいた山々が見えていたが、ジュンヤとバーズに、景色を楽しむような余裕は微塵もなかった。

ドンとまた一発、激しく何か爆発する音。

バーズは目一杯アクセルを踏み込んだ。しかし、急上昇するには馬力が足りない。

焦る気持ちをぐっと抑え、何とか上空を目指す。

ジュンヤ曰く、ドームの真ん中に開いた穴はどんどん広がっていて、そこからなら簡単に中へと入ることができるのだとか。ドームの中心に政府ビルがあり、その周辺にエスターがいるとも言った。

丸いはずのドームの壁は、天辺に向かうにつれ、所々内側に窪んできていた。亀裂が走った先を見ると、確かに壁が崩れ、大きく開いた口が見えてくる。

「そこから下へ落ちていけ。バランス、崩すなよ」

全く頼りにならないジュンヤの助言、バーズは湿った手で力一杯ハンドルを握り、アクセルの踏み込みを調整しながら宙へダイブした。

一定期間なら滞空できるなんてことを耳にしたが、その詳しい操作方法を聞いていたわけじゃない。エアバイクはふらりふらりと左右に揺れる。振り落とされぬよう、バーズの腰に掴まるジュンヤ、重すぎて手元が狂いそうになる。

重力に耐えきれず、エアバイクは落下していった。車体の前方を

下にして、どんどん地面に向かって落ちていく。

「踏ん……張れ……！」

背の低いバースにとつて、暴れるエアバイクを抑えるのは至難の業だ。車体があちこち飛んでいかないように、ハンドルを握り続けた。

耳をつんざくような激しい音が轟き、顔を上げる。何かが光を帯びて浮いているのが見える。

「見えた、アレだ！」

ジュンヤの声に目を凝らすと、確かに視線の先に人型の何かが。

大きな白い翼を持った、白銀の天使 エスターだ。

「あ、アレに近付こうつての？ 無茶言うなよ」

「お前が自分で行くつて言ったたろうが」

口では冗談交じりに喋ったが、本当に辿り着けるのかどうか。

ドームの中はまるで火の海だった。崩れ落ちるビル、燃えるものがなくなるまで燃やし尽くそうというのか、炎が何もかも飲み込んでいく。火柱があちこちに立ち、既に人の姿など、どこにも見えなかった。

上空にいる天使と自分たち、他に動いているものは見えない。

炎の中で一つだけ、巨大なビルが折れずに立っている。天まで届きそうなそれが政府ビル。しかし、それさえも、あちらこちらが崩れ、原形をとどめてはいなかった。

落ちたら死ぬ、一巻の終わりだ。肝に銘じて、前に進む。下から熱い風が上がってくる。そして上からは冷たい風が。二つの風がぶつかり合い、激しく渦巻いている。このなかで飛び続けるのは無茶だと思うが、まともに着地できそうな場所もない。

「ビルの屋上を辿りながら行くしかない。一旦、損傷の少なそうなビルの上に降りて、もう一度上昇するんだ」

言うだけなら簡単だ、思いながらバースは、ジュンヤの指示に従って、すぐ側の細長いビルの屋上へエアバイクを走らせた。火の手はすぐ側まで迫っていた。停車後、息を整え、再加速、再浮上。同

じ方法で徐々に高いビルに乗り移り、政府ビルを目指して走っていく。

「ディックが政府ビルの最上階にいるはずだ。合流、出来るならしたいけど、通信機、持ってないんだよな」

「そんなこと、言ってられないよ。とりあえず行くだけ行こう。向こうからこっちに気がつくかも知れないし」

「……だな、行くか！」

足場に出来るビルが残り少なくなり、とうとう傾きかけた政府ビルの建物だけが目の前に迫る。これを上るより仕方が無い。しかし、中を潜って行くには時間が足りなさすぎる。

「外壁を垂直に上るってアリだと思う？」と、バース。

「今更何言ってるんだよ。アリの決まってるだろうが」ジユンヤが後押しする。

これまでのようにバースの腰に腕を回している状態では、垂直に進めない。ジユンヤは身を乗り出して、右ハンドルの外側を握った。左にぶら下げた布鞆を死守するため、左手は離すことが出来ないらしい。片手で全体重を支え、引き摺られるように垂直に運ばれていく。

地面から吹き付ける熱い風が、ビルの外壁に沿って上へ上へと車体を押し上げる。エアバイクは加速しながら、最上階に向けて突き進んでいった。

こうしている間にも、天使は身体に蓄えたエネルギーを時折プラズマのように放出する。攻撃が終わったかと思うとまた充電、ドーム中のエネルギーを吸い取っていく。ドームの天井は既に三分の一近く崩れ落ちた。このドームをぶっ壊して、それで満足するとはとても思えない。次、またその次と、一つずつ破壊していくのは目に見えている。

最上階に近付くにつれ、どんどん先細るビル、何があつたのか、潰れてしまった階も目にした。一部がゴツソリ削り取られている場所も。

満タンだった燃料は半分以下にまで減った。あと少しで最上階、とにかく上に進まねば。

日差しが徐々に強くなる。風も少しずつ冷たくなっていく。外の空気だ。

グンと車体が宙に放り投げられ、浮き上がった。垂直の壁が途切れた。最上階に到達したのだ。

天井を失い、足場もガタガタ、死体に火の手、残骸の散るその場所は、ジュンヤの記憶とは大きく違っていた。何にも無い。ティン・リーやその美人秘書、それから特殊任務隊の五人が自分を見定めるようにしていた執務室が、跡形もなくなっている。そこが執務室だったと、床のタイルや壁の一部が知らせているが、原形をとどめてある場所は殆どなくなってしまっていた。

バースはゆっくり着地すると、ヘルメットを脱いでエアバイクのエンジンを切った。シユンと空気の抜けるような音がして、車体がポコポコした足場に触れる。

「ここが、総統のいた場所だったのか」

バースが言うのも無理はない。この世の終わりのような光景が目の前に広がっていれば、誰だってそう思うはずだ。

ジュンヤにしたって、ドームから離れたときよりも更に被害が拡大していることに胸を痛めていた。何をどうやったら、ここまで街を破壊できるのか。エスターの、いや、白い天使の力に啞然とする。「なあ、ジュンヤ、デイツクは？」

辺りを見回すが、人影らしい人影がない。どうやら本当に、動いているのはジュンヤとバースの二人だけらしい。

つい数時間前に送り出したEUDームとESの戦闘員たちは、見覚えのある者無い者、皆息絶えている。壁のすぐ側で倒れているのは、ハロルドだ。彼も、動く気配がない。やはり死んでしまったのか。デイツクは……、居ないようだ。

「ま、まさかとは思うけど、し、死んだとか……ないよね」

恐る恐る、バースが言う。

エアバイクから降りて、不安定な床に立ち、改めてぐるっと周囲を見渡す。人影なんて、どこにも。

「誰が、死んだって？」

真後ろに、大きな影があった。あちこち服は破れボロボロで焼け焦げているけれど、安心感のあるガツチリとした体つき、深い青色の瞳とトレードマークの口ひげが、光を背にして二人を見下ろしている。

「デイツク、無事だったのか」

緊張の糸がほぐれたように、ふっと肩の荷が下りた。ジュンヤは久しぶりに明るい声を出して、その男を見上げた。

身体中すすだらけのディックの目は、心なしか赤かった。まぶたが厚ぼつたく腫れ、涙の跡が頬に残る。“泣いていたのか”などと訊くのは野暮だ。彼だつて父親なのだ。娘の変わり果てた姿を目の前に、正気で居られるはずはない。

それでも、彼は気丈に顔を上げていた。まだやれることがあると、希望を抱いているような表情で。

「命を捨てに来たのか」

「まさか。エスターを救いに来たんだよ」

ニヒルな笑いは、普段のままだ。ジュンヤは安心して、ゆっくりと息を吐いた。

政府ビルが倒れずに残っているのは、ある意味奇跡に等しい。ビルの地上部分はすっかり焼かれ、崩れ落ちている。二階が一階を押し潰し、三階が二階を押し潰しの繰り返し、バランスが少しずつ崩れて傾きかけているが、まだ倒れる気配は無い。ドームの上空でエネルギーを放射し続けるマザーに向かうには、ここから飛び立つしかないようだ。

「アンリとレナで、取り急ぎ、破壊プログラムを打ち消すものを作ってくれたんだ。効果の程は期待しないでくれって言われたけど、これをどうにかしてエスターに飲み込ませようと思ってる」

腰にくくりつけた布鞆から、液体の入ったボトルと、錠剤・カプセルの入った小さな銀ケースを取り出して、ディックに見せる。

「飲み込ませるってことは、口から？ 無茶だな」

「口以外に、あの身体に隙がない。一応、液体を打ち込めるよう、エネルギー銃を改良したヤツも持たせられたけど、エスターの身体に浸透させなきゃ意味が無いってさ。どっちにしろ、至近距離まで近付かないと、話が先に進まない。改造エアバイクで彼女に近付いて……ってのは、どうかかと」



「で、操縦させるためにバースを連れてきたというわけか。お前の折れた足では上手く操縦できそうにないからな」

「違う、俺が勝手に名乗り出たんだ。ジュンヤに頼まれたわけじゃないよ」

バースは反論したが、ディックは彼と目を合わせようとはしなかった。

「まあ、いい。お前らのやりたいことは大体わかった。ただ、現実的だとは思えない。空中戦で全ての決着をつけようとするのは無理だ。せめて地に足が付くところで動いた方がいい。 さつき、瓦礫の中を散策して、使えそうな武器や破損を免れたエネルギーボルトを回収した。これを使って、マザーをここに誘い込み、取り押さえたと後飲み込ませる、でどうだ」

「そんな簡単に、誘い込めるのか」

「……それこそ、やってみなきゃわからないが」

空に舞い上がり、手の届かなくなった天使を、ディックはギツと睨み付けた。

「ジュンヤ、携帯端末は持ってるな」

「あ、ああ」

「全部終わったら、それを使って、ここから脱出する。絶対になくすなよ」

「わかってる」

ジュンヤ一人を崩れかけた政府ビルの最上階に残し、バースの運転する改造エアバイクは、後部座席にディックを乗せて走り出した。天辺まで昇った太陽の光がドームの天井に開いた穴から容赦無しに降り注ぎ、まぶしさに目を細める。いくら滞空時間が長くなるよう改良したとはいえ、エアバイクで高度を保ちながら進むのは難しい。落下しないよう、目一杯アクセルを踏み込んだ。

「……で、どうすんの。誘い込むたって、話を聞いてくれるような状態じゃないみたいだし」

ディックに言われるまま、宙に浮かんだ天使目指して運転していたバーズは、まともな答えが返ってこないだろうことを覚悟の上で、後部座席のディックに尋ねた。さつきから、手持ちの武器を調整するような音や、マガジンを装填しているような音が聞こえている。それだけで、嫌な予感がぶんぶんする。バーズが『危険だからヘルメットを』と言っても、ディックはそれすら拒否した。『俺の顔は見えていた方がいい。その方が、効率が良い』。囿になる気なんだろうが、含みを感じる。とんでもないことを考えていなければ良いのだが。

「いいから、至近距離まで近づけ」

白銀の天使は、目に見えない何かを身体に取り込むよう、大きく手足を広げていた。風の流れが変わり、彼女に空気が吸い込まれたかと思うと、フツと流れが止まり、エネルギーを放出する。彼女に近づくタイミングは、放出直後。その僅かな時間だけ、彼女の身体に隙が出来るのだ。

「タイミング、見逃すなよ」

背後からのプレッシャーに負けぬよう、バーズは歯を食いしばった。

「わかってるよ！」

放出された電流にぶつかからぬよう、間を縫いながら進む。右へ左へ車体がぶれると、「ちゃんと運転しろ」と怒号が飛ぶ。

下から吹き付ける熱風で、汗が滝のように流れ出た。ハンドルを握る手が濡れ、滑りそうになる。

天使の顔が、徐々に見えてきた。彼女がエスターであるとは、とても思えない。遙か昔の物語に出てきそうな、白銀の鎧に身を包んだ天使だ。大きな翼も、鎧も、空から降り注ぐ光に照らされて、神々しく光っている。

背中でディックが、座席を両足で挟み込んだまま急に立ち上がった。ドンと、軽い振動がして車体が左右に揺れた。

「な、何してんだよ」

慌てて振り向いて啞然とする。ディックは、天使目掛けてエネルギー銃を撃っていたのだ。

銃弾が天使の羽をかすめると、彼女はバースらの存在に気付き、ぐつと身体をこちらに向けてきた。

「何してるって。見たまんまだ」

続けて数発撃ち込む。彼女の左翼に当たり、バチツと火花が散る。「アレって、エスターなんだろ。何で撃つんだよ！ 気でも狂ったのか！」

「ハンドルを左に大きく切って、Uターンしろ。そのまま政府ビルまでマザーを誘導する」

「ちょ……」

「急げ！」

天使が動き始めた。スピードを上げてこちらに向かってくる。

ディックは攻撃の手を止めない。終いには懐からエネルギーボトルを取り出して、接近してくる天使目掛けて放り投げた。今度は本体に当たり、小さな爆発が起きる。装甲を破って肉を傷つけ、血が流れ出たが、躊躇する様子もない。次から次へ、攻撃を繰り返す。持っている武器を全部消化する勢いだ。

天使との距離が縮まる。このままでは、追いつかれてしまう。あと少し、少してジュンヤの待つ政府ビルの最上階に辿り着くのに。

瓦礫の中で、ジュンヤは痛む足で懸命に立っていた。エネルギー銃に例の液体を充填し、いつでも撃てるよう構えている。

「頼むぞ、ジュンヤ！」

ディックはバースの上に覆い被さってハンドルを奪うと、車体を右に傾けてジュンヤの視界を広げた。そのままズザツと瓦礫に突っ込み、エアバイクを急停止させる。

傷ついた天使がジュンヤの真ん前に迫った。

「『エスターの身体に浸透させなきゃ意味が無い』……つまり、こういうことか」

腹の真ん中に出来た傷口に照準を合わせ、数発。命中し、天使は

動きを止める。しかし、油断は出来ない。続けて更に数発撃ち込む。瓦礫に転げ、悶え始めた天使の姿に、心が痛んだ。それでも、完全に液体が浸透し、破壊プログラムが停止するまで、攻撃の手を緩めるわけにはいかなかった。

エネルギーボトルの爆発で傷ついた彼女の腹部からは、血が止めどなく溢れ出ていた。ベースは間違いなくエスターだ。

痛みを堪え、上げる悲鳴も、唸り声も、エスターそのものなのに、何故こんなことをしなければならぬのか。大好きだと、守ってあげたいと、初めて出会った時からずっと思っていたのに、だ。

「ためらうな、撃ちまくれ！」

エアバイクを乗り捨てたディックが、よろよると立ち上がった。ボサボサになった髪を揺らし、瓦礫を乗り越えてマザーの元へと歩いて行く。

ビル風がぶつくと吹き、身体から熱を奪った。

ジュンヤもディックも、エアバイクを運転していたバースも、体力の限界をとうに超えていた。

おもむろに、天使の背後に回ろうとするディックを、ジュンヤとバースが止める。しかし、彼は言う。

「死なない、俺は死なない。こいつも、俺の血を引いてるんだから、死にはしない。早いとこ終わらせて、さっさと帰るんだ。早くしなきゃ、このビルも崩れ落ちる。迷うな！」

ボトルの残量が、目に見えて少なくなった。それでも、最後の一発まで、撃ち続ける。

マザーの息が、荒い。マスクの下で、苦しそくに顔を歪めている。背後からディックが、翼ごと胴体を抱え込むと、彼女は身をよじって激しく抵抗した。

「は……なせ、D-13」

「ようやっと、正気に戻ったか、マザー」

いつの間にか、彼女の腹の傷が塞がっている。自己修復機能が確実に受け継がれていた証拠だ。

問題は、破壊プログラム停止ソフトが、彼女の中でまともに起動したかどうか。

「腹や胸を撃ち抜いたくらいじゃ、死なないんだよ……、その身体は。残念だったな」

肩で息をしながら、ディックは更に強く、マザーの身体を抱きしめる。

「エスターは、まだ、その身体の中で生きてるんだろ。破壊行動なんかやめて、さっさとエスターの意識を戻してくれ。落ち着いたら俺が、お前を電子の海の中に帰してやる」

“ エスターの記憶がまだ残っている ” とマザーが示唆していたのを、ディックはずっと気にかけていた。脳内データを消去して書き換えただけではなく、共有化している状態なのかもしれない。彼女の脳の中で二つの意識が混ざり合っている可能性も、ないとは言いつけない。不安定で、時折意識を無くす、それが破壊行動に出ているのだとしたら、破壊プログラム停止が何らかの糸口となって、エスターとマザーの意識を切り離すことができるかもしれないなどと、自分に都合の良いように解釈してしまう。

あの身体は、元には戻ることはないだろう。機械化した肉体は、遺伝子構造そのものを変えてしまったはずだ。外見的なものはどうにかなるかも知れないが、きっと真つさらな人間には戻れない。

マザーは、ディックが娘の身体を取り戻したがっていることを知っていて、あの時、わざと“ 撃ち抜け ” と言ったのだ。恐らくは“ 何もかもが元通りになることなどあり得ない、だから、希望のあるうちに全てを終わらせる ” という意味だったのだろう。

それは、彼女なりの優しさだったのか。AIに過ぎないマザーに、そもそも優しさなどという概念があるのかどうか。

ディックには、まだエスターがああの中ですべて眠っているような気がしてならなかった。根拠はと聞かれても、恐らく答えられない。トリストで出会ったときのマザーと比べ、違和感があつた、その程度のことだ。

“ 私の中で何かがうごめき始めた ” という彼女の台詞から推測するに、ティン・リーの流し込んだ破壊プログラムには、波がある。エスターとの同化後、極めて早い段階からエスターの意識は消え、マザーの意識が身体を動かしていたのだろう。生身の肉体になれない彼女の意識が途切れたときに破壊行動が起き、正気に戻ればそれを止める。この繰り返しなのではないだろうか。

マザーの言うように、すぐに止めるべきだった、撃つべきだった、そんなことはわかっていて。だが、娘を自ら傷つけることは、あの時点では出来なかった。“心臓”を撃てば死ぬ身体じゃない、殺す気なら、撃つのは“脳天”。トリストの中と違い、思考を読まれなかったのは幸いだった。頭だけ無事なら、“自己修復機能”で何とかなるかも知れない。その考えに辿り着くまで、どうしても葛藤が必要だった。

彼女は苦しそうに悶えていた。エスターの声で唸っていた。

『次は、街が破壊される程度のことでは済まされない』

目に見えないところで、更なる被害が拡大している恐れがある。ためらっている場合では、なくなってしまうていたのだ。

「E”を復元できると、未だ思っているのか。甘いな、D-13。

……私は、この意識を保つことさえ、容易ではない状態なのだぞ」マザーは言いながら、背中の中を羽を広げようと、必死にもがいてく。ディックは大きな両腕で、彼女の身体を掴んで離さない。腕がピリピリと痙攣し始めた。不安定な足元が崩れかけ、バランスを失いそうになっていた。それでも、ぐっと力を入れ、彼女を後ろから抱え込んだ。

銃声が止まる。とうとう、液体が底を突いたのだ。

「錠剤とカプセルも、いまのうちに突っ込んでしまえ」

「い、言われなくても」

左足を引き摺りながら、瓦礫を越えていく。

治癒促進剤の副作用と、燃えていく街から発生するガスで、ジュンヤの意識は朦朧としてきていた。一刻も早く、彼女の口に投与しなければ。

布靴から銀ケースを取り出し、中身を左の手のひらに取り出した。手の中から零れないよう、慎重に運ぶ。じつとりとかいた汗で、何粒ずつかのそれが溶けてしまわないか。そもそも、彼女が口を開けてくれるかどうか。

天使の真ん前に来ると、ジュンヤの緊張感は更に増した。

時間が無いとわかっていながら、彼女の変わり果てた姿を、しっかりと目に焼き付けようとしている。攻撃によって剥がされた装甲の下は、やはりエスターの白い肌。小さな身体をピッタリと包み込んだ鎧を全部引っぺがしてしまえば、簡単に彼女に戻るのではないかと、錯覚してしまう。顔半分覆ったマスクの下、彼女はどんな目で自分を見上げているのか。自分を誰だか認識しているのか。

「早く……してくれ。身が持たない」  
ディックが急かした。

嫌がる彼女の頬に手を当て、指で口をこじ開けようとする……が、歯を食いしばり、それ以上開けてくれそうにない。それどころか、親指の肉を噛まれた。喰い、千切られる、血が、彼女の口に注がれていく。

どうにかして、上手いこと口の中に投与する方法、彼女が嫌がらずに受け容れる方法は、ないのか。

ジュンヤの中に、一つの方法が浮かぶ。

彼はおもむろに、左手の錠剤とカプセルを全部、自分の口に含んだ。

「おい、何を」

焦って声を上げるディック、だが、今は四の五の言ってもらえない。そのまま、ジュンヤは両手で彼女の顔を押さえ、自分の唇を、ぐつと、彼女の唇に押し当てた。

驚いた彼女が、噛んでいた指を離す。その隙に、舌で歯をこじ開けていく。柔らかなエスターの唇と、舌の感触。舌をくねらせて、自分の口から彼女の口へ、錠剤とカプセルを送り出した。喉の、奥へ。飲み込めと願いを込めて。

天使から、力がフツと抜けた。だらんと腕を垂れ、次第に身体が後ろに傾く。背中のディックに、彼女の全体重がのしかかった。力の抜けた天使の身体は、成人男性より重く感じられた。その上、ジ



ユンヤは彼女から唇を離そうとしない。

ただでさえ崩れそうだった足元に、新たな亀裂が入り、身体が沈み始めた。

「重い……、流石に、苦し……」

グラツと、全身が後ろに持って行かれるような感覚の後、ついに床が崩れ落ちた。ガクンガクンと激しく揺さぶられながら、落ちていく最上階の床と共に、三人は階下に放り投げられた。容赦なく下の階の床に叩き付けられ、身もだえしている間に、今度はビル全体が大きく揺れ始める。

「ディック、ヤバい、変な揺れ方してる」

落ちた穴の上から、バースが覗き込んでいた。どこに隠れていたのか、ずつと姿を見せていなかったロボット犬のフレディも。

「こつちへ来るんだ。転移装置、……ジュンヤ、転移装置は」

肝心のジュンヤは、天使と一緒に気を失っている。落下の衝撃で、どこかに頭をぶつけたらしい。天使の身体の下から上半身だけ抜けだし、すぐ側で倒れているジュンヤの身体を揺らす。激しく何度か揺らすと、やっとジュンヤは薄目を開けた。

「バースとフレディがこつちに来たらすぐに、転移装置で飛ぶんだ。でなきゃ、ビルもろとも崩れ落ちて、火の海に真つ逆さまだ」

ディックの声に飛び起きて、懐から転移装置を取り出すジュンヤ、

「ぎ、座標は」

「そんなのはどうでもいい。ここじゃなかったら、どこだって構わない」

赤い端末を開いて操作していると、上からバースとフレディが、瓦礫伝いに降りてきた。

ドームの中、たった一つだけせせり立って残っていた政府ビルが、ついに大きく傾き、根元から倒れていく。

青白い光に包まれ、ディックたちが辿り着いたのは、ES飛空艇の操縦室だった。狭い室内に四人と一体が現れると、操縦士たちは慌てて窓際に避難した。

力が抜けて翼をたためずに気を失った天使の身体は重く、床が軋んで陥没、銀翼の両端が機械にあたり、あちらこちらで火花が上がる。このままでは戻るに戻れなくなると、そこいらの大人が必死で翼を持ち上げる有様だ。

「これ、一体何なの」

翼に押し潰されそうだったりザ・タナーをかばいながら、ロツクはジュンヤに尋ねた。

「エスターだよ。マザーと同化して、こんなになっちゃったけど」  
「冗談、だろ」

持ち上げた翼は、鋼鉄のように硬く、重い。こんなものをバタバタはためかせていたというのは、あまりに非現実的だ。

と、翼のあちらこちらに亀裂が入っていることに気付く。亀裂は徐々に細くなり、終いには砂糖菓子のように脆くなる。あつという間に、羽は白銀の砂鉄になって、支えていた大人たちの手の中かからこぼれ落ちていった。エスターの身体を覆っていた装甲さえ、やはり同じような銀の砂鉄になり剥がれ落ちていく。白く透き通った肌が姿を現し、手足も、胴回りも、胸も、頭に覆い被さっていた兜さえ、砕けた。男たちは思わず頬を赤らめる。銀の砂鉄の山の上で横たわった、一糸纏わぬエスターの美しい裸体。

「全て、終わったと解釈して、いいの、かな」

その傍らにかがみ込み、ジュンヤはゆっくりと彼女の髪を撫ぜた。「いや、未だわからない。死んではいないようだが……、その身体の中で何が起こっているのか判断するには、未だ時間が要る」

リザがどうぞと渡したバスタオルを、ディックは優しく身体の上

に被せてやる。

見る限り、全てが始まる前の、エスターの姿には違いない。しかし、『“E”を復元できると、未だ思っているのか。甘いな』というマザーの言葉が、どうしてもディックの頭の片隅に引っ掛かって離れなかった。

ネオ・ニューヨークシティの生存者はゼロ。

ドーム内の炎は数週間消えなかった。

他、幾つかのドームでシステム異常、回線異常を確認。復旧作業には数ヶ月必要だ。

ドーム間移動に利用していた空間転移装置も、システム異常のため使用不可となったため、各ドームの壁面一部を切り取り、外部との連絡・物資運搬が出来るように工事を進めている。

EUドームからの定期的な物資提供がほぼ不可能になったため、各ドームから軍用ヘリがひっきりなしに飛んでいる。ドームからドームへヘリレーして、物資を届ける。

また、ドーム周辺の探索が盛んになり、一部では食材確保、一部では資材や天然のガスや油を確保したという噂もある。

また一機、軍用ヘリが飛び立った。アンリはドームの影に消えていく黒い機体に目を細め、ふうつと白い息を吐いた。

北半球は冬に向かっていく。しばらくすれば、冷たい風と一緒に雪の季節がやってくる。赤や黄色に色づいた蔦が未だドームを覆っているが、全部取り払うには何年かかるかわからない。正直なところ、せつかくの綺麗な色、取り払う必要すら無いと思ったが、どうやらドームの外壁は太陽光発電用のパネルで覆われているらしく、

これを正常に稼働させることが出来れば、高濃度エネルギー溶液並みのエネルギーが確保できるのだとか。

マザーが電子の海から消えて二ヶ月、そろそろ悲しみも癒えた頃だろうと他人は言う。が、そんなことはない。いつだって、アンリは彼女の影を追っている。

ディック・エマードの力をもつてしても、エスターの中からマザーの意識だけ引きはがすことは出来なかった。悔しいかな、それが現実だ。

マザーの暴走を止めただけでも称賛に値するなんて、どうでもいいことを、意味もわからずに口走るヤツも大勢いる。マザーは暴走したかったわけじゃない。狂ったあの男のせいで、そうなってしまったただけだというのに。

着慣れないコートの襟を立て、アンリは肩をすぼめ、身を縮めた。合成繊維のマフラーでは、まともに寒さをしのげない。大昔はこれが当たり前だったらしいと、それこそ誰もこんな寒さ感じたことない癖に、他のヤツらは平気で言う。冷蔵庫の中で暮らしてるみたいになるらしい。全く、考えたくもないが。

ドームの外へ自由に出入りできるようになり、物好きな人間は、木を切り倒し草をなぎ払い、土地を開拓して家を建て始めている。何百年もの間、暑さも寒さも感じない温室でぬくぬく育ておきながら、今になって外で暮らすことなんて出来るのか。多くの人間は、苦勞を知らない。本当の自然の驚異ってヤツも、文字や映像で知るだけだ。知識としてそこにあるだけじゃ、生き抜くことなんか出来ない、馬鹿らしいと思う。

ドームの外壁を伝い、ドームの出入り口から機械室へ戻っていく。二ヶ月前に戦場になった場所も、今はすっかり復旧した。

あの日から一週間は、とにかく思い出すだけでもぐったりする、トラブルの連続だった。その頃の自分が、この結末を知っていたとしたら、恐らくディック・エマードなんて男とは接触したからなかったはずだ。

「アンリさん、マザーが例の場所で待ってますよ」  
すれ違いに仲間に言われ、右手を挙げた。

“マザーが”と言われれば、機械室なんかに戻ってる場合じゃない。中央監視ドームに作られた、彼女のための特別室へと足を向ける。

真っ直ぐ延びた通路の先、ドームとドームを繋ぐ連絡通路を抜けると、住宅街に出た。ヨーロッパの町並みそのまますっぽりと覆われたその場所は、アンリの目を癒した。やっぱり、自分にはこれくらい窮屈な風景が丁度良いと思う。何も、新しいことを始めるだけが人生とは限らない。今ある生活、暮らしを続けていくことも必要だ。人工太陽の光は柔らかかった。中だつて寒くない。首に巻き付けていたマフラーを取って腕にかけ、客待ちのエアタクシーに乗り込んだ。これで、中央監視ドームの入り口まで行く。

「お客さん、随分疲れてるみたいですね」

すっかり顔なじみになった運転手が、バックミラー越しに話しかけてきた。

「まあね。何かとさ、気苦労が多いんだ。窓の外に流れる風景はいつもと変わらないのに、自分の立ち位置や状況はどんどん変わっていく。そういうのって、自分にはどうにも出来ないだろ。で、ぐったりね……。ドームの外に出てみたけど、寒いだけで何も面白いものなんて無かった。僕にはやっぱり、このドームの中で機械いじりをしてるのが性に合ってる、今更のように噛みしめているところだよ」

街を走り抜け、指定した場所まで辿り着くと、アンリは運転手に、「釣りは要らないから」と、チップ込みの現金を渡す。「毎度」走り去るタクシーを見送って、更に歩いた。

中央監視ドームの入り口を潜って、マザー・ルームへ。以前は資材置き場だったのだが、マザーの居場所を確保しなければと、改築した場所だ。彼女が好みそうな、淡いピンク色の内装で纏められた小さな家。ゴシック調の屋敷には、小さな庭もある。枯れにくいバ イオフラワーだけれども、彼女はそれなりに喜んでしていると聞いた。

チャイムを鳴らし、古めかしいドアに手をかける。鍵などかける気配がないのか、自分が来るのを知っていて解放しているのか。アンリは家人の了解得ず、中へと入っていった。

ドアを開けてすぐ、甘い香りが。焼きたての菓子と紅茶、ここに来て彼女が気に入ったものの一つだ。

「アンリさん、いらっしやい。彼女なら、いつもの場所ですよ」入り口でメイドに言われ、アンリは奥の部屋へ進んでいった。

リビングを抜け、廊下を通って無機質なドアの前で止まる。屋敷の中でそこだけ、内装も何もかも違うのだ。ノックを一つ、「入るよ」返事はやはり無い。また、勝手にドアを開けた。

白く丸い、柔らかな椅子に腰掛けた金髪の少女が視界に入る。白く透き通るような肌、凜とした顔。この身体がああ男の娘のものでなければ、もう少し気持ちも違ったのだろうが。彼女の身体には、たくさんのコードが繋がれている。部屋の中にギツシリと置かれた機械や計器で窮屈そうにも見えたが、彼女には居心地が良いらしい。「マザー、気分はどう」

アンリの問いかけに、少女はニコツと静かに笑って答えた。

「悪くは無い。D-13は相変わらず、私とEの分離を試みているらしいのだ。お前からも無駄だと言、忠告してやって欲しい」

彼女の目線が動いた先に、ディックがいた。事件後に新調した銀縁眼鏡に白衣姿。手元の電子ペーパーとモニターに表示された分析結果を見ながら、部屋の隅でブツブツ呟いている。

「お前もD-13も、私は私、EはEとしてすっかり離れてしまえば良いと、今も思っているのだろうな。それが出来るなら、私もそうしたいと思う。しかし、どうにもならないことも世の中にはある。諦めて受け容れることも、時には必要だ。……お茶の準備が出来たようだ。D-13、お前も一緒に休んだらどうだ」

開け放したままの入り口から、メイドが顔を覗かせているのを見つ、彼女は自らコードを抜きはじめた。アンリも彼女の側まで寄って、手助けをする。

花の刺繍が美しい白のドレスは、彼女が好んで着ているものだ。レースの付いた裾は、椅子から降りると空気を含んでふんわりと揺れた。装飾品はあまり好まない、色の付いた明るい服も、彼女は着ようとしない。色のない世界にいた彼女は、出来るだけ目に刺激のない色だけを選ぶのだ。

「いくら分析を続けても、意味が無い。私は彼女に、彼女は私になつてしまった。何度も言うが、私の意識とEの肉体が残った、それだけではよしとしないのだな、お前たちは」

綺麗な彫刻を施したテーブルと椅子は、この部屋には不釣り合いだ。アンリは遠慮無く、いつも彼女の隣に座らせて貰っているが、ディックは茶を受け取ったとしても、決して座ろうとはしなかった。今日もまた、立ったまま受け取った紅茶をすすっている。

「人間つてのは、諦めることを知らない生き物だ。悪いな」

「確か、お前は生物学的にヒトではなかったと記憶しているが」

「……余計なことをエスターの声で喋るな」

ここ二ヶ月ほど、同じような会話を何度か繰り返したのを、アンリは知っている。知っていて、面白がって放置している。ディック・エマードもやはり自分と同じ、何一つ受け容れたくなくて抵抗し続けている。

「諦めが悪いと言えば、ジュンヤはどうしてる。あいつ、エスターのこと好きだったって聞いてたけど」と、アンリ。二ヶ月前会ったつきり、音沙汰がない。

「彼は、母親と共にネオ・シャンハイへ戻ったと聞いたが」

「折れた足引き摺つてまで助けに行つた女を残して？」

「さあ、私が彼女でないことに幻滅したのだろう。人間の愛ほど、不確かで危ういものはないということか」

ジュンヤの話を始めた途端、彼女の顔が曇った。まぶたを伏せ、テーブルにティーカップを置くと、ゆっくり息を吐く。

「Eは未だ、ジュンヤ・ウメモトを信じている。私を止めたのは、あの男の強い意志かも知れない。まだ私と同化していないとき、彼

女はあの地下実験室の中でこんな会話を耳にしていた。『外部から深層心理に影響を及ぼす何らかの事象が発生した場合は、ダウンロード後に人格崩壊を起こす恐れもある』発言した人物は、どうやらジュンヤ・ウメモトがそれに関わるのではないかと推測していた。九十九%私になるという予測だったにもかかわらず、Eの記憶や感情が私の中に息づいているのは、彼の存在が影響した可能性が高い。それでも彼が、彼女の身体を奪った私と決別する選択をしたのは、それなりに理由があったのだ」

恋をしている少女の目だ。切なさが滲み出て、それを見ていたアソリまで息苦しくなってしまう。

やはり、この少女の中に居るのはマザーだけではないと、そんなことはとうにわかっていたはずだ。

「それより、何だ。休憩時間くらい、そんなもの、手放しておけば良いのに」

視線をぐいと上げて、少女はディックの持っていた電子ペーパーに手を伸ばした。触れようとした手から、彼はひよいとペーパーを引き離す。

「お前が手に触れた端末の情報を読み取るのを、俺は知ってる。残念だが、許可した端末以外でアクセスしようとすると、ウイルスが移るよう仕掛けてあるんだ。触らない方が身のためだ」

「……フン、どこまでも周到な男だ。それにしても、お前の秘密主義はどこまでも徹底していたようだな、D-13。Eは嘆いていた、何も知らされなかつた。肉体を持って初めて、彼女の気持ちに身が染みてわかる。情報が手に取るようわかつたあの頃が懐かしい。人間は不便だ。相手の心が見えない、何もかも憶測で、本当のことなど何一つわからない。『電子の海の中に帰してやる』という言葉を信じて、ずっとここに居るのだが、お前はいつ、それを実現してくれるのだ」

テーブルの中央に置かれた焼き菓子、マドレーヌとクッキー。どれもメイドのお手製だ。



彼女は文句を言いながら、口にたっぷり菓子を頬張り、紅茶で流し込んだ。たまらなく幸せそうな顔で、おいしそうに食べる。

「肉体を失ったら、このお菓子、食べなくなるけど」

アンリは彼女の顔を覗き込み、いたずらっぽく言ってる。

「確かに、……それは困る」

飲み終えたティーカップをテーブルの上のトレイに置き、ディックは一人、計器の前にある椅子に腰掛けた。楽しそうな彼女を見ているのは、決して悪い気分ではない。遠目に二人を眺めるディックの口元も、少し緩んでいた。

マザーに見られそうになった電子ペーパーをもう一度広げ、彼はそこにある文字を、無言で追い直した。

それは、手紙だった。差出人は今、遠くにいる。

“ 親愛なるディック・エマード

理由も言わず、お世話になったあなたと別れてから、もうすぐひと月が経とうとしています。

ネオ・シャンハイの町並みは昔と何一つ、変わりません。破壊プログラムの影響も殆ど受けず、普段通りの生活を送っています。政府系の企業や組織が消滅し、一時期混乱があったようですが、今はそれも収まりました。

エスターとあなたのごことは、ジュンヤから聞きました。あなたの過去は、私も少しは知っていたけれど、全てを聞いてやっとじつまが合い、胸のつかえが取れた気がしています。出来るなら、あなたの口から全部聞きたかったのだけれど、それは恐らく叶わなかったでしょう。あなたが全てをさらけ出すために、どれだけ苦しんだのか、胸が痛みます。

本来ならば伝えてから去るべきだったことを、最後に書いておきます。

大切なメッセージを送るのに、こういうやり方は危険だと、ジュンヤにも言われたのですが、他に方法が浮かびません。今回は詳しい人に頼んで、あなたの端末以外で再生すると消滅するように仕込んで貰いました。

今、ネオ・シャンハイの街に、“ティン・リー”を名乗る男が現れています。ただ、その姿がどんなか、未だ確認は取れていません。私が過去に出会ったリーや、あなたを苦しめたリーと、同一人物なのかもわからないままです。ジュンヤの話によれば、彼は記憶をほとんど新しい身体に移して生きながらえているそうですね。となると、今、ネオ・シャンハイに現れたリーもやはり、彼なのでしょうが。

彼がまた、何らかの方法を使って世界を支配する可能性は、ゼロではない気がします。

そもそも、彼が本当に死んでしまったのか、あなたたちが見た恐竜型のロボットは、本当に彼だったのか、今となっては確認の取りようがありません。

リーの出現を仲間から聞きつけ、ジュンヤと私は確認のためにネオ・シャンハイに戻ってきました。

ジュンヤは今も、エスターのことを気にかけているようです。確実な情報でない以上、彼女にはまだ、このことを伝えないでやってくれませんか。ジュンヤも言っていました。未だ不安定な彼女には、余計な心配はかけたくないのです。

遠くの地から、あなた方親子の幸せを願っています。また、情報が入り次第、同じ方法でメッセージを送ります。

どうか、お元気で。

ネオ・シャンハイ　メイシイ・ウメモトより”

「また、難しい顔をしている。私と居るとき、彼はいつもああなの

だ。Eと居るときも、やはり難しい顔をしていたようだ。アンリ、お前はどう思う」

「どうって、何が」

「彼は何を考えていると」

「それは、難しい問題だな。せ、世界を憂いている、とか」

「他には」

「やっぱり、娘の身を案じている……かな」

ディックは思いきり、読み終わったばかりの電子ペーパーを握りつぶした。グシャツと音がして文字が消えた。

何とも言えない、もやもやが胸に湧く。

憤り、握りしめた拳が、フルフルと小さく震えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2201c/>

---

虚空の惑星

2011年6月6日17時25分発行